熊本県文化財調査報告　第73集

上の原遺跡 III

文化課

1985

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第73号

上の原遺跡 III

1985

熊本県教育委員会

1．上の原遺跡遠景（手前 上の原遺跡から塚原古墳群を望む・昭和54年秋）

2．上の原遺跡遠景(南より・昭和54年秋)

3.上の原遺跡　昭和53・54年度調査区全景(昭和54年秋)

4.上の原19号住居址遺物出土状態

5.上の原19号住居址出土土器

序　文

下益城郡城南町は，古くから文化財の宝庫として知られ，塚原古墳群，御領貝塚，阿高・黒橋貝塚などの国指定史跡をはじめ，各種の文化財が点在しております。

ここに報告する上の原遺跡は，塚原古墳　の東南に隣接した遺跡で，県営圃場整備事業に伴って昭和53～55年度に発掘調査を実施いたしたものです。

調査の結果，旧石器から歴史時代に及ぶ各種の遺構・遺物が検出されました。なかでも，古墳時代の住居址は，400軒以上を数え，塚原古墳群との関連において，集落と古墳群とが有機的に把握できる貴重な資料を得ることができました。

昭和57年度に『上の原遺跡Ⅰ』、昭和58年度に『上の原遺跡Ⅱ』を刊行し，旧石器～弥生時代の遺構と遺物，古墳，歴史時代の遺構について調査成果を報告いたしましたが，本年度は昭和53・54年度に調査を実施した４～５世紀の住居址について報告書を刊行する運びとなりました。

この報告書が広く県民の皆様に利用され，郷土や文化財の理解・愛護に活用されることを期待いたします。

最後に，調査を進めるにあたり，城南町，県農政部をはじめ，多くの方々から御指導・御協力を賜りましたことに対して，ここに厚く御礼を申しあげます。

昭和60年３月31日

熊本県教育長　伴　　正　善

例　言

1．本書は熊本県下益城郡城南町塚原に所在する上の原遺跡の調査報告書である。

2．調査は県営圃場整備事業に伴う事前調査として，熊本県農政部の依頼により熊本県教育庁文化課が実施したもので，発掘調査は昭和53～55年までの３ヶ年を費やした。

3．本書は昭和53・54年度の調査分について熊本県文化財調査報告第73集として刊行するものである。なお、昭和57年度に『上の原遺跡Ⅰ』（熊本県文化財調査報告第58集）を刊行し，引き続き昭和58年度に『上の原遺跡Ⅱ』（熊本県文化財調査報告第64集）を刊行した。従って本書は上の原遺跡の第３冊目の調査報告書である。

4．遺構の実測・製図者は挿図目次の各項目ごとに氏名を記した。また、遺物の実測・製図は野田拓治が行った。現地の写真撮影は野田および広瀬正照（故人）・福田伸子（旧姓高野）が行い，遺物写真の撮影は野田が行った。
また，巻頭の空中写真は熊本県警察本部警務課装備係の協力によるものである。

5．本書の執筆は野田が行った。

6．本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い，野田が担当した。

凡　例

1．現地での実測は，全体図を300分の１で，各住居址を20分の１で行った。本書に掲載した住居址の実測図はすべて60分の１に統一した。

2．住居址の平面図中には，通有住居址に認められる硬化面（踏み固めの範囲）を一点鎖線で，又焼土の範囲を網目で表現した。なお，炭化部材については残存状態をそのまま表現した。

3．遺物の出土状態は少量のものについては平面図中に示したが，出土量が多いものについては平面図とは別個に遺物出土状態の図を作成した。又各遺物の出土位置については層位が明確なものについては層位名を，その他については出土地点直下の床面とのレベル差を数値（単位cm）で示した。

4．各住居址ごとの出土遺物の個体数・器種ごとの内訳・床面に密着したものと覆土との区別は本文中に記した。

5．出土遺物のなかで土器は通し番号とし，遺物出土状態図と出土土器実測図との番号は一致する。なお，出土遺物の縮尺は土器を４分の１に統一し，鉄器および石器を２分の１とした。なお、土器のなかで彩色されたものについては網目の文様で区別した。

6．出土土器の解説は本文中に記したが，法量等については第１表・出土土器計測表に一括して掲載した。

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡の位置及び調査の概要

第１節　遺跡の位置……1
第２節　調査の経過と報告書の構成……2
第３節　調査および整理の組織……2

第Ⅱ章　昭和53・54年度調査の成果

第１節　調査成果の概要……4
第２節　遺構各説……6

１号住居址……6
２号住居址……9
３号住居址……10
４号住居址……13
５号住居址……16
６号住居址……19
７・107号住居址……20
９号住居址……22
11号住居址……23
14号住居址……25
15号住居址……28
16・17号住居址……30
18号住居址……32
19号住居址……35
20号住居址……40
21号住居址……43
22号住居址……47
23号住居址……48
25号住居址……48
26・27号住居址……51
28号住居址……53
29号住居址……55
31号住居址……58
34号住居址……60
35号住居址……62
37号住居址……63
38・39号住居址……67
40号住居址……68
41号住居址……71
42・43・44号住居址……72
45号住居址……76
46号住居址……76
48号住居址……81
49号住居址……82
51号住居址……86
58号住居址……89
59号住居址……89
62号住居址……89
65号住居址……90
67号住居址……91
69号住居址……94
70号住居址……95
71号住居址……98
72・73・74・76号住居址……101
75号住居址……106
77号住居址……108
78・79号住居址……112
80号住居址……116
81号住居址……116
82号住居址……119
83号住居址……121
84号住居址……122

85号住居址……122
86号住居址……124
87号住居址……128
88号住居址……130
90号住居址……130
92号住居址……132
94・95号住居址……137
96号住居址……139
97・98号住居址……141
99・104・105・108号住居址……143
101号住居址……148
103号住居址……153
109号住居址……153
110号住居址……156
111号住居址……156
112号住居址……160
113・114号住居址……162
115・116号住居址……165
117号住居址……167
118号住居址……168

第Ⅲ章　まとめ

第1節……171
第2節……174

巻頭図版　1．上の原遺跡遠景(手前 上の原遺跡から塚原古墳群を望む・昭和54年秋)
2．上の原遺跡遠景(南より・昭和54年秋)
3．上の原遺跡　昭和53・54年度調査区全景(昭和54年秋)
4．上の原19号住居址遺物出土状態
5．上の原19号住居址出土土器

挿　図　目　次

第1図　上の原遺跡調査区全図(野田作図)……1
第2図　上の原遺跡遺構配置図(野田作図)……5
第3図　上の原1号住居址
(清田・吉田・高野実測，野田・坂井・瀬丸製図)……7
第4図　上の原2号住居址その1
(吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……8
第5図　上の原2号住居址その2
(吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……9
第6図　上の原2号住居址出土土器(野田実測・製図)……10
第7図　上の原3号住居址
(吉田・広瀬実測，野田・坂井・瀬丸製図)……11
第8図　上の原3号住居址出土土器(野田実測・製図)……12
第9図　上の原4号住居址……14
第10図　上の原4号住居址出土土器(野田実測・製図)……15
第11図　上の原5号住居址
(吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……17
第12図　上の原5号住居址出土土器(野田実測・製図)……18
第13図　上の原6号住居址
(松本・勢田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……19
第14図　上の原6号住居址出土土器(野田実測・製図)……20
第15図　上の原7・107号住居址
(勢田・高野・古森実測，野田・坂井・瀬丸製図)……21
第16図　上の原7号住居址出土土器(野田実測・製図)……21
第17図　上の原9号住居址
(桑原・緒方実測，野田・坂井・瀬丸製図)……22
第18図　上の原11号住居址
(江本・大田・高谷実測，野田・坂井・瀬丸製図)……23
第19図　上の原11号住居址出土土器(野田実測・製図)……24
第20図　上の原14・15号住居址
(高野・豊崎実測，野田・坂井・瀬丸製図)……26
第21図　上の原14号住居址出土土器(野田実測・製図)……27
第22図　上の原15号住居址出土土器(野田実測・製図)……28
第23図　上の原16・17号住居址……29
第24図　上の原16号住居址出土土器(野田実測・製図)……31
第25図　上の原17号住居址出土土器(野田実測・製図)……31
第26図　上の原18号住居址……33
第27図　上の原18号住居址出土土器その1
(野田実測・製図)……34
第28図　上の原18号住居址出土土器その2
(野田実測・製図)……35

第29図　上の原19号住居址
（岡田・松岡・豊崎実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 36
第30図　上の原19号住居址出土土器その1
（野田実測・製図）…… 37
第31図　上の原19号住居址出土土器その2
（野田実測・製図）…… 38
第32図　上の原19号住居址出土土器その3
（野田実測・製図）…… 39
第33図　上の原19号住居址出土土器その4
（野田実測・製図）…… 40
第34図　上の原20号住居址
（高野・豊崎実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 41
第35図　上の原20号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 42
第36図　上の原21号住居址
（吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 43
第37図　上の原21号住居址出土土器その1
（野田実測・製図）…… 44
第38図　上の原21号住居址出土土器その2
（野田実測・製図）…… 45
第39図　上の原22・23号住居址
（豊崎・松尾実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 46
第40図　上の原22号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 47
第41図　上の原22号住居址出土砥石（野田実測・製図）…… 47
第42図　上の原22号住居址出土鉄器（野田実測・製図）…… 47
第43図　上の原23号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 48
第44図　上の原25号住居址
（野田・豊崎実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 49
第45図　上の原25号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 50
第46図　上の原25号住居址出土鉄器（野田実測・製図）…… 51
第47図　上の原26・27号住居址
（豊崎実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 52
第48図　上の原26号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 53
第49図　上の原27号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 54
第50図　上の原28号住居址
（豊崎・広瀬実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 54
第51図　上の原28号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 55
第52図　上の原29号住居址
（吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 56
第53図　上の原29号住居址出土土器その1
（野田実測・製図）…… 57
第54図　上の原29号住居址出土土器その2
（野田実測・製図）…… 58
第55図　上の原29号住居址出土鉄器（野田実測・製図）…… 58
第56図　上の原31号住居址
（広瀬・豊崎実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 59
第57図　上の原31号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 60
第58図　上の原31号住居址出土勾玉（野田実測・製図）…… 60
第59図　上の原34号住居址
（古森実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 61
第60図　上の原34号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 61
第61図　上の原35号住居址
（野田実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 62
第62図　上の原35号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 63
第63図　上の原37号住居址
（広瀬実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 64
第64図　上の原37号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 65
第65図　上の原38・39号住居址
（広瀬実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 66
第66図　上の原38号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 67
第67図　上の原39号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 69
第68図　上の原40・41号住居址
（古森・豊崎実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 70
第69図　上の原40号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 71
第70図　上の原41号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 71
第71図　上の原42・43・44号住居址
（広瀬実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 73
第72図　上の原42号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 75
第73図　上の原43号住居址出土土器その1
（野田実測・製図）…… 74
第74図　上の原43号住居址出土土器その2
（野田実測・製図）…… 75
第75図　上の原45号住居址
（古森実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 76
第76図　上の原45号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 77
第77図　上の原46号住居址
（高木・杉村・田添実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 78
第78図　上の原46号住居址出土土器その1
（野田実測・製図）…… 79
第79図　上の原46号住居址出土土器その2
（野田実測・製図）…… 80
第80図　上の原48号住居址
（勢田・高谷実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 81
第81図　上の原48号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 82
第82図　上の原49号住居址
（吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 83
第83図　上の原49号住居址出土土器その1
（野田実測・製図）…… 84
第84図　上の原49号住居址出土土器その2
（野田実測・製図）…… 85
第85図　上の原49号住居址出土石器・鉄器
（野田実測・製図）…… 86
第86図　上の原51号住居址
（森山実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 87
第87図　上の原51号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 87
第88図　上の原58・59号住居址
（吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 88
第89図　上の原58号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 89
第90図　上の原59号住居址出土土器（野田実測・製図）…… 89
第91図　上の原62号住居址
（吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 90
第92図　上の原65号住居址
（杉村・田添実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 91
第93図　上の原67号住居址
（広瀬実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 92
第94図　上の原67号住居址出土土器
（野田実測・製図）…… 93
第95図　上の原67号住居址出土石器・鉄器
（野田実測・製図）…… 94
第96図　上の原69号住居址
（吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 95
第97図　上の原70号住居址
（勢田実測，野田・坂井・瀬丸製図）…… 96
第98図　上の原70号住居址出土土器その1
（野田実測・製図）…… 97
第99図　上の原70号住居址出土土器その2
（野田実測・製図）…… 98

第100図　上の原71号住居址
(高野実測，野田・坂井・瀬丸製図)……99
第101図　上の原71号住居址出土土器(野田実測・製図)……100
第102図　上の原71号住居址出土鉄器(野田実測・製図)……101
第103図　上の原72・73・74・76号住居址その1
(勢田・高谷実測，野田・坂井・瀬丸製図)……102
第104図　上の原72・73・74・76号住居址その2
(勢田・高谷実測，野田・坂井・瀬丸製図)……103
第105図　上の原72・73・74号住居址その3
(勢田・高谷実測，野田・坂井・瀬丸製図)……104
第106図　上の原72号住居址出土土器(野田実測・製図)……105
第107図　上の原73号住居址出土土器(野田実測・製図)……107
第108図　上の原74号住居址出土土器(野田実測・製図)……107
第109図　上の原76号住居址
(野田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……107
第110図　上の原75号住居址
(野田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……108
第111図　上の原75号住居址出土土器(野田実測・製図)……109
第112図　上の原77号住居址
(高野実測，野田・坂井・瀬丸製図)……110
第113図　上の原77号住居址出土土器(野田実測・製図)……111
第114図　上の原77号住居址出土鉄器(野田実測・製図)……111
第115図　上の原78・79号住居址
(勢田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……113
第116図　上の原78号住居址出土土器その1
(野田実測・製図)……114
第117図　上の原78号住居址出土土器その2
(野田実測・製図)……115
第118図　上の原80号住居址
(勢田・古森・高野実測，野田・坂井・瀬丸製図)……117
第119図　上の原80号住居址出土土器(野田実測・製図)……117
第120図　上の原81号住居址
(吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……118
第121図　上の原81号住居址出土土器(野田実測・製図)……119
第122図　上の原82号住居址
(高野実測，野田・坂井・瀬丸製図)……120
第123図　上の原82号住居址出土土器(野田実測・製図)……121
第124図　上の原83号住居址
(桑原・緒方実測，野田・坂井・瀬丸製図)……121
第125図　上の原83号住居址出土土器(野田実測・製図)……122
第126図　上の原84号住居址
(吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……123
第127図　上の原84号住居址出土土器(野田実測・製図)……123
第128図　上の原85号住居址
(吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……125
第129図　上の原85・87・88・90号住居址出土土器
(野田実測・製図)……126
第130図　上の原86号住居址
(高野実測，野田・坂井・瀬丸製図)……127
第131図　上の原86号住居址出土土器(野田実測・製図)……128
第132図　上の原87号住居址……129
第133図　上の原88・90号住居址
(田添・杉村・松本・鶴島実測，野田製図)……131
第134図　上の原90号住居址出土石器(野田実測・製図)……132
第135図　上の原92号住居址……133
第136図　上の原92号住居址出土土器その1
(野田実測・製図)……134
第137図　上の原92号住居址出土土器その2
(野田実測・製図)……135
第138図　上の原92号住居址出土砥石(野田実測・製図)……136
第139図　上の原94・95号住居址
(杉村・田添実測，野田・坂井・瀬丸製図)……137
第140図　上の原94・95・96号住居址出土土器
(野田実測・製図)……138
第141図　上の原96・97・98号住居址
(勢田・杉村・田添実測，野田・坂井・瀬丸製図)……140
第142図　上の原97号住居址出土土器(野田実測・製図)……142
第143図　上の原98号住居址出土土器(野田実測・製図)……143
第144図　上の原99・100・104・105・108号住居址その1
(吉田・古庄実測，野田・坂井・瀬丸製図)……144
第145図　上の原104・105・108号住居址その2
(吉田・古庄実測，野田・坂井・瀬丸製図)……145
第146図　上の原104・105号住居址出土土器
(野田実測・製図)……147
第147図　上の原105号住居址出土鉄器(野田実測・製図)……148
第148図　上の原108号住居址出土土器(野田実測・製図)……148
第149図　上の原101号住居址
(古森実測，野田・坂井・瀬丸製図)……149
第150図　上の原101号住居址出土土器その1
(野田実測・製図)……151
第151図　上の原101号住居址出土土器その2
(野田実測・製図)……152
第152図　上の原101号住居址出土鉄器(野田実測・製図)……153
第153図　上の原103号住居址
(松本・勢田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……154
第154図　上の原103号住居址出土土器(野田実測・製図)……155
第155図　上の原109号住居址……156
第156図　上の原110号住居址
(勢田・古庄・高野実測，野田・坂井・瀬丸製図)……157
第157図　上の原111号住居址
(古庄実測，野田・坂井・瀬丸製図)……158
第158図　上の原111号住居址出土土器(野田実測・製図)……159
第159図　上の原112号住居址
(吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……160
第160図　上の原112号住居址出土土器(野田実測・製図)……161
第161図　上の原112号住居址出土鉄器(野田実測・製図)……162
第162図　上の原113・114号住居址その1
(吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……163
第163図　上の原113・114号住居址その2
(吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……164
第164図　上の原113・114号住居址出土土器
(野田実測・製図)……165
第165図　上の原115・116号住居址
(吉田実測，野田・坂井・瀬丸製図)……166
第166図　上の原115・116号住居址出土土器
(野田実測・製図)……167
第167図　上の原117・118号住居址
(吉田・広瀬・古庄実測，野田・坂井・瀬丸製図)……169
第168図　上の原117・118号住居址出土土器
(野田実測・製図)……170

表　目　次

第１表　出土土器計測表 …… 175

図　版　目　次

図版１住居址　１．１号住居址（西より）　２．２号住居址（北東より）　３．２号住居址（北東より）
図版２住居址　１．３号住居址（南西より）　２．３号住居址（南西より）　３．４号住居址（北東より）
図版３住居址　１．５号住居址（北西より）　２．５号住居址（北西より）　３．６号住居址（北より）
図版４住居址　１．６号住居址（北より）　２．７・107号住居址（北東より）　３．９号住居址（北より
図版５住居址　１．11号住居址（南東より）　２．14号住居址（北東より）　３．14号住居址（南西より）
図版６住居址　１．15号住居址（南より）　２．16号住居址（北東より）
図版７住居址　１．16・17号住居址（西より）　２．16・17号住居址（南東より）　３．18号住居址（北東より）
図版８住居址　１．19号住居址（北東より）　２．19号住居址（北東より）
図版９住居址　１．20号住居址（南西より）　２．20号住居址（南西より）
図版10住居址　１．21・29・35号住居址（南西より）　２．21号住居址（南西より）　３．22号住居址（北西より）
図版11住居址　１．23号住居址（南東より）　２．25号住居址（北東より）　３．25号住居址（北東より）
図版12住居址　１．26・27号住居址（南西より）　２．26・28号住居址（北東より）
図版13住居址　１．28号住居址（北東より）　２．29号住居址（北東より）　３．29号住居址（北東より）
図版14住居址　１．31号住居址（北東より）　２．34号住居址（北東より）　３．34号住居址（北東より）
図版15住居址　１．35号住居址（南西より）　２．37号住居址（東より）　３．37号住居址（東より）
図版16住居址　１．37・38・39号住居址（北より）　２．38号住居址（東より）　３．38号住居址（東より）
図版17住居址　１．40号住居址（北東より）　２．41号住居址（東より）　３．41号住居址（東より）
図版18住居址　１．42・43・44号住居址（東より）　２．42・43・44号住居址（東より）　３．45号住居址（北東より）
図版19住居址　１．46号住居址（北より）　２．46号住居址（北より）　３．48号住居址（北東より）
図版20住居址　１．49号住居址（北より）　２．49号住居址（西より）
図版21住居址　１．51号住居址（北より）　２．51号住居址（北より）　３．58号住居址（東より）
図版22住居址　１．59号住居址（東より）　２．62号住居址（東より）
図版23住居址　１．65号住居址（北より）　２．65号住居址（北より）
図版24住居址　１．67号住居址（南東より）　２．67号住居址（南東より）　３．69号住居址（東より）
図版25住居址　１．70号住居址（東より）　２．70号住居址（北より）　３．71号住居址（東より）
図版26住居址　１．71号住居址（東より）　２．72・73・74・76号住居址（東より）　３．72・73・74・76号住居址（東より）
図版27住居址　１．72・73・74・76号住居址（南より）　２．72・73・74・76号住居址（西より）
図版28住居址　１．73号住居址（北東より）　２．73号住居址（北東より）
図版29住居址　１．75号住居址（北東より）　２．75号住居址（北東より）
図版30住居址　１．77号住居址（北より）　２．77号住居址（北より）
図版31住居址　１．78・79号住居址（東より）　２．78・79号住居址（東より）
図版32住居址　１．80号住居址（南より）　２．80号住居址（東より）　３．81号住居址（北東より）
図版33住居址　１．82号住居址（北東より）　２．84号住居址（北西より）
図版34住居址　１．85号住居址（東より）　２．86号住居址（北東より）　３．86号住居址（北東より）
図版35住居址　１．87号住居址（北東より）　２．87号住居址（北東より）　３．87号住居址（北東より）
図版36住居址　１．88号住居址（南より）　２．90号住居址（南西より）
図版37住居址　１．92号住居址（北より）　２．92号住居址（東より）

図版38住居址　1．94・95号住居址（南東より）　2．94・95号住居址（北西より）

図版39住居址　1．96号住居址（北より）　2．96号住居址（北より）

図版40住居址　1．97・98号住居址（南東より）　2．97・98号住居址（南東より）

図版41住居址　1．99・100・104・105・108号住居址（北東より）　2．100・104・105・108号住居址（北より）　3．100・104・105・108号住居址（北より）

図版42住居址　1．99・100・104・105・108号住居址（北より）　2．99・100・104・105・108号住居址（北より）

図版43住居址　1．101号住居址（東より）　2．101号住居址（東より）

図版44住居址　1．103号住居址（東より）　2．103号住居址（東より）　3．109号住居址（北より）

図版45住居址　1．111号住居址（東より）　2．111号住居址（東より）

図版46住居址　1．112号住居址（北東より）　2．112号住居址（北東より）

図版47住居址　1．113・114号住居址（東より）　2．113・114号住居址（西より）

図版48住居址　1．115・116号住居址（北西より）　2．117号住居址（北より）　3．118号住居址（北より）

図版49土器　1．3号住居址　2．4号住居址　3．5号住居址

図版50土器　1．11号住居址　2．14号住居址　3．16号住居址

図版51土器　1．18号住居址(1)　2．18号住居址(2)　3．19号住居址(1)

図版52土器　1．19号住居址(2)　2．19号住居址(3)　4．20号住居址

図版53土器　1．21号住居址　2．25号住居址　3．27号住居址

図版54土器　1．29号住居址　2．31号住居址　3．37号住居址

図版55土器　1．39号住居址　2．43号住居址　3．46号住居址

図版56土器　1．49号住居址(1)　2．49号住居址(2)　3．67号住居址

図版57土器　1．70号住居址(1)　2．70号住居址(2)　3．72号住居址(1)

図版58土器　1．72号住居址(2)　2．73号住居址　3．77号住居址

図版59土器　1．78号住居址(1)　2．78号住居址(2)

図版60土器　1．78号住居址(3)　2．78号住居址(4)　3．78号住居址(5)

図版61土器　1．84号住居址　2．85号住居址　3．87号住居址

図版62土器　1．92号住居址(1)　2．92号住居址(2)　3．92号住居址(3)　4．92号住居址(4)

図版63土器　1．95号住居址　2．96号住居址　3．98号住居址　4．101号住居址(1)

図版64土器　1．101号住居址(2)　2．104号住居址　3．111号住居址

図版65土器　1．112号住居址　2．116号住居址　3．118号住居址

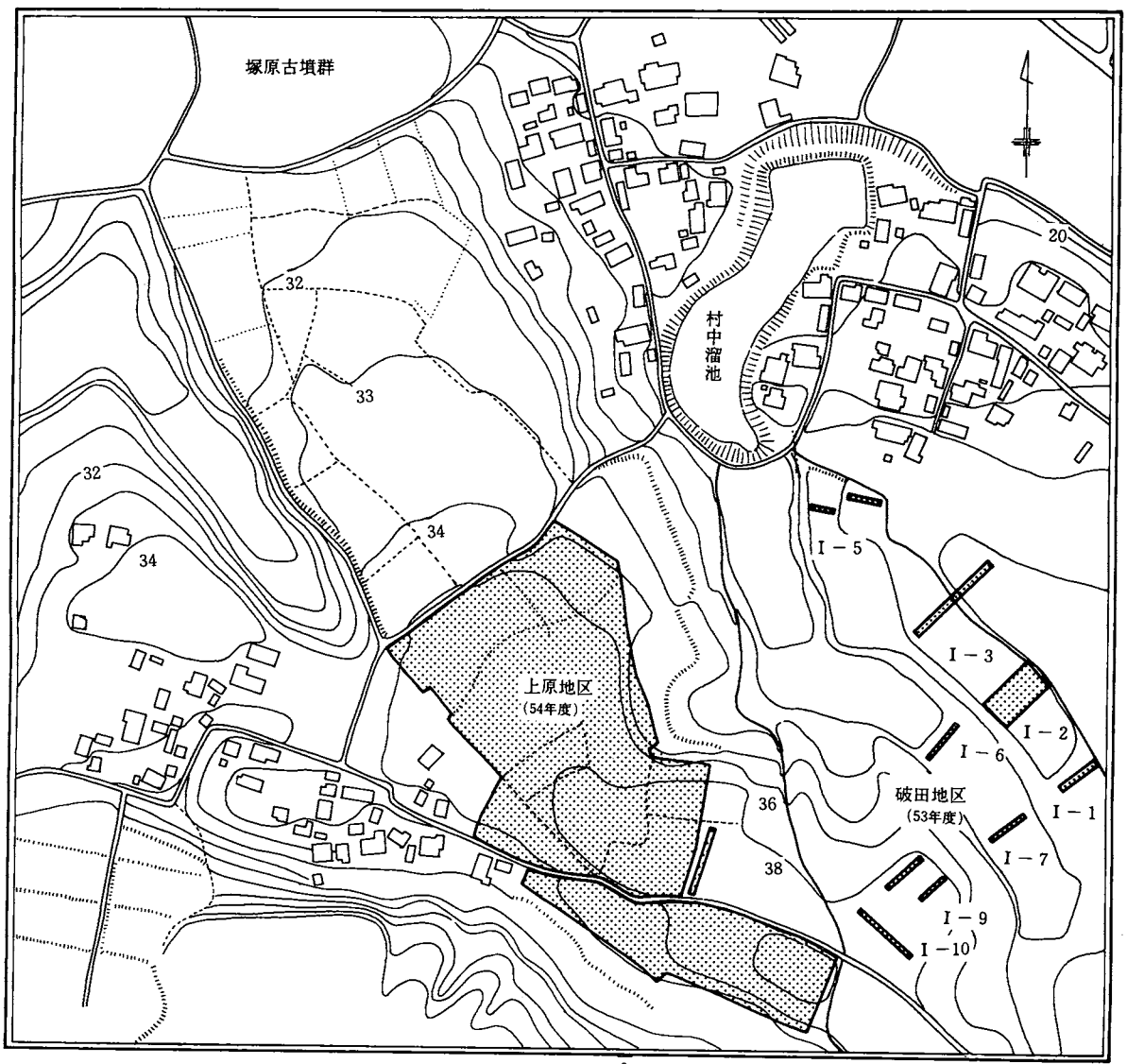
第Ⅰ章　遺跡の位置及び調査の概要

第１節　遺跡の位置

上の原遺跡は熊本県下益城郡城南町塚原字上の原を中心に，塚原字破田，藤山字東原の一部にわたって所在する古墳時代の集落址を主体とした旧石器時代～歴史時代におよぶ複合遺跡である。特に本遺跡の北東部に隣接する塚原古墳群と有機的に結びついた集落址として重要な位置を占めている。

城南町は熊本平野の東南端に位置し，熊本市の中心部から直線距離にして約10kmの所にある。熊本平野は白川・緑川の二大水系を中心として形成された県下最大の肥沃地帯になっている。そして，その水系の中で城南町の中心は，緑川水系にある。

遺跡の立地する塚原台地は，台地頂部の標高30～40ｍを測る中位段丘で，緑川の支流である浜戸川の左岸にあり、最大幅約500ｍ、長さ約2.30kmを測る台地の西端には塚原古墳群（国指定）が占地する。上の原遺跡は，その古墳群の東南に隣接し，その接触点においては古墳と住居址とが混在して検出されるという状況を示している。



第Ⅰ図　上の原遺跡調査区全図

第２節　調査の経過と報告書の構成

上の原遺跡は熊本県下益城郡城南町塚原字上の原及び破田に所在する集落遺跡である。調査は県営ほ場整備事業に伴うもので，昭和53～55年の３ヶ年間を費やした。これらの成果については昭和57年度に『上の原遺跡Ⅰ』（熊本県文化財調査報告第58集），昭和58年度に『上の原遺跡Ⅱ』（熊本県文化財調査報告第64集）として刊行した。『上の原遺跡Ⅰ』では昭和53～55年度に調査を実施したなかで，縄文時代・弥生時代の遺構・遺物及び古墳時代の墳墓について報告し，『上の原遺跡Ⅱ』では古墳時代後期以降の遺構・遺物について報告した。上の原遺跡の主体となるものは古墳時代前期～中期の竪穴住居址の総数453軒に及ぶ大規模な集落址であり，膨大な量にのぼる調査資料の整理におわれ，報告書の刊行が大幅に遅れるにいたった。

今回刊行する『上の原遺跡Ⅲ』では，昭和53・54年度に調査を実施した竪穴住居址90軒について報告する。したがって，昭和53・54年度調査分についての報告は今回で完結することになる。また，昭和55年度に調査を実施した340軒以上の竪穴住居址を中心とする遺構・遺物については昭和60年度以降に『上の原遺跡Ⅳ』として刊行予定である。

第３節　調査及び資料整理の組織

調査の組織については，すでに『上の原遺跡Ⅰ・Ⅱ』において記したので重複を避け，ここでは昭和59年度事業として実施した出土遺物の整理及び報告書の作成について示す。

調査主体　熊本県教育委員会

調査総括　森　一則（文化課長）　米村　嘉人（前文化課長）
　　佐々木正典（文化課課長補佐）　隈　昭志（文化課文化財調査係長）

調査総務　柴田　和馬（文化課経理係長）　大塚　正信（前文化課経理係長）
　　花田　隆二（文化課参事）　谷　喜美子（文化課主事）

調 査 員　野田　拓治（文化課学芸員）

調査指導助言者

乙益　重隆	国学院大学教授	都出比呂志	滋賀大学助教授
岡崎　敬	九州大学教授	三島　格	肥後考古学会会長
横山　浩一	九州大学教授	西谷　正	九州大学助教授
佐原　真	奈良国立文化財研究所	小田冨士雄	北九州歴史博物館（現北九州考古博物館館長）
原口　正三	大阪府立嶋上高校教諭		
置田　雅昭	天理大学付属天理参考館	白木原和美	熊本大学教授
田中　琢	奈良国立文化財研究所	甲元　真之	熊本大学助教授

〔発掘作業員〕

発掘調査では地元塚原区の皆様の協力をいただいた。以下その氏名を記して，謝意を表する。

（順不同，敬称略）

鋤崎ゆきえ	村崎　和子	坂本　春子	下村　冬子	田中あき子
鋤崎　末子	村崎　良子	伊藤しま子	東　　俊子	西国ふじえ
鋤崎　節子	堀田のり子	伊藤　政子	高木　政子	米原　房江
鋤崎　雪路	堀田　綾子	東　　優子	守田　夏江	西本よし子
坂口　月江	堀田よう子	林　　幸江	西田　民子	西本三智子
坂口　夏江	堀田　誠子	岡田　澄子	杉本恵美子	
坂口たかえ	堀田久美子	松岡　孝子	大川　久江	
村崎　幸子	堀田むつえ	元田　絹子	大川　悦子	
村崎　澄子	中村ひでこ	松本八重子	清田　悦子	
村崎ひろと	栗崎美津代	畑　　春代	堀川　夏江	

〔整理作業員・熊本県文化財収蔵庫〕

笠間いつ子	江島　園子	二ノ村映子	宮田　フミ	北野　弘子
滝本千鶴子	吉長都美子	木下　俊恵	木下春千代	
松山たつ子	小原　陽子	淵上　慶子	宮本扶未子	

その他，資料整理・製図作業に松原明美（文化課嘱託），和田由美子・坂井美佐・瀬丸延子・中原由子（文化課臨時職員），写真については渡辺正一（文化課嘱託）の協力を得た。

第II章　昭和53・54年度調査の成果

第１節　調査成果の概要

昭和53・54年度における発掘調査で検出した主な遺構は，縄文時代の集石遺構，弥生時代前～中期の住居址群，古墳時代前期～中期の住居址群，古墳時代後期の住居址，奈良時代～平安時代の住居址，平安時代の掘立柱建物址などであった。これらの遺構のなかで古墳時代前～中期の住居址群を除く遺構については，既に『上の原遺跡Ⅰ・Ⅱ』において報告したが，ここでは各時代の住居址群の変遷について簡単に整理しておく。

〔弥生時代〕

調査区の南側を中心として計13軒の住居址を検出した。13軒の内６軒は平面プランが円形で，他の６軒は楕円形であった。その内訳は次のようになる。

○円形プラン　　13号・24号・32号・57号・63号・102号

○楕円形プラン　　30号・36号・60号・61号・66号・68号・藤山１号

各住居址出土土器の分析から「上の原式」を設定し，これらをⅠ期およびⅡ期に分け，さらにⅡをＡ・Ｂに細分した。土器型式による年代と住居址の平面プランとの関係は，円形プランの住居址はⅠ期～ⅡＡ期を中心として一部ⅡＢ期に及んでいるのに対して，楕円形プランのものはⅡＡ期を中心としてⅡＢ期にも引き継がれていた。このように平面プランの違いは住居構造の違いでもあり，年代差をも示すという結論を得た。特に群中で最大規模の57号住居址は，年代的にも最も古く，住居構造等から集落内の核となるような機能を果たしていたと考えられる。

〔古墳時代前～中期〕

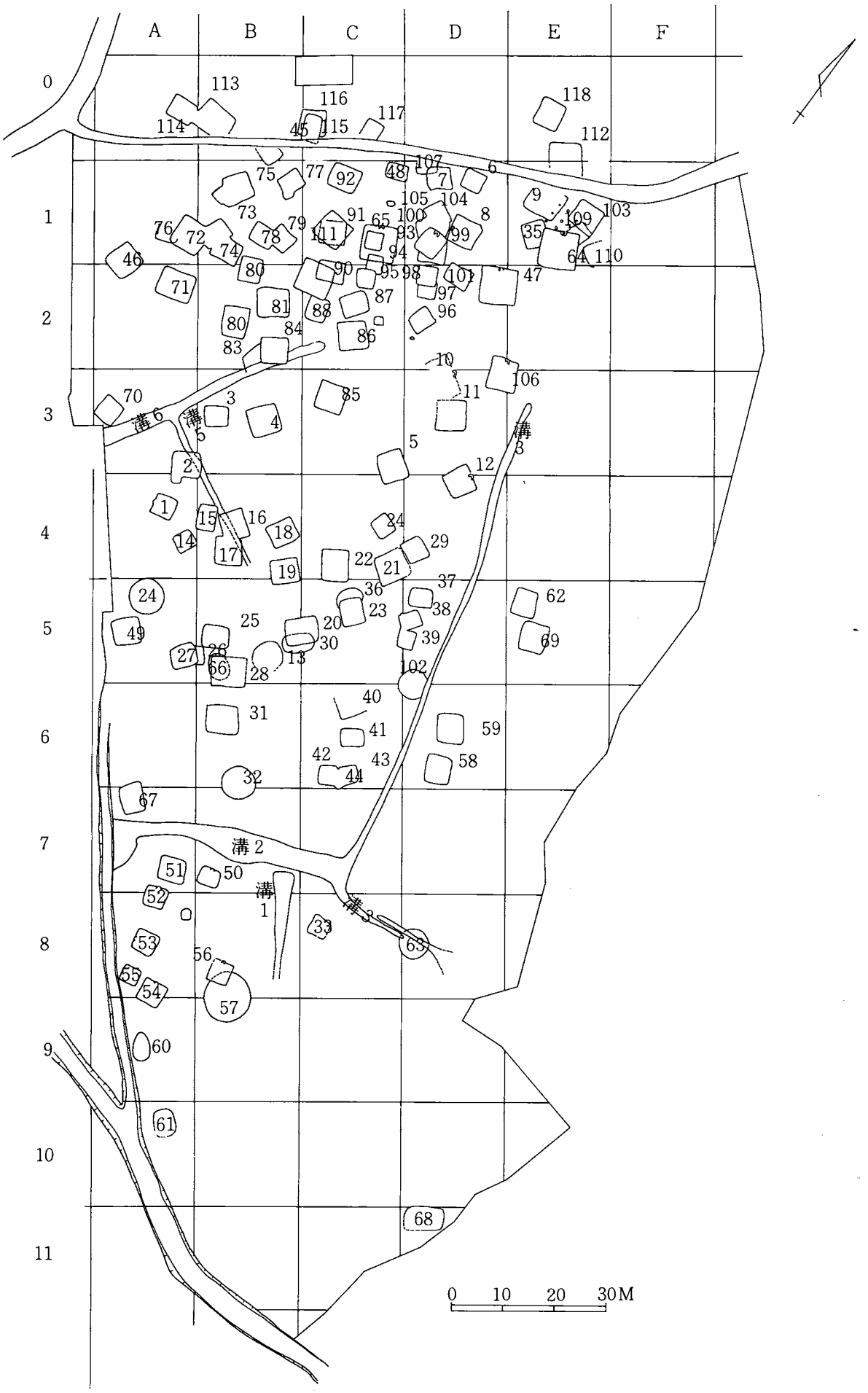
本遺跡の主体となる遺構で，住居址の総数は調査区全体で444軒，昭和53・54年度調査地区では90軒にも達している。詳細については後章に譲るが，全長約500ｍ，幅約150ｍの丘陵上のほぼ全体に分布していて；集落の北東端では塚原古墳群の南西部へ派生した墳墓群と重複している。約450軒もの住居址群はおよそ１世紀余りの間に営まれたものであり，それは単位集落が一定の変遷過程を経た結果成立した最終的な姿でもあった。

〔古墳時代後期終末〕

台地の南西部端に位置する６軒の竪穴住居（50号・52号・53号・54号・55号・56号）を一つの単位とした小規模な集落址である。住居址の一辺に竈を設けた小型の住居址からなっている。前段階の前～中期の集落との間に，およそ１世紀間の断絶ののちに突如として出現した集落であった。中央の広場を囲むように整然とした住居配置が明らかとなった。

〔奈良時代以降〕

調査区すなわち丘陵の中央部に出現する。計27軒の住居址からなり，総ての住居に竈が設けられている。これらは２～３期の集落がわずかに移動しながら営まれた結果と推定される。中央部の広場は前代の古墳



第2図　上の原遺跡・遺構配置図

時代終末期に比較すると広くなり，集落の住居配置も長楕円形を描くようになる。この竪穴住居址群の一角に掘立柱建物址（２×２間）が重複している。年代はさらに下降し，８世紀末～９世紀初頭の所産である。掘立柱建物址およびこの周辺部からは円面硯・越州窯青磁・布目瓦などとともに，「長」「安」と墨書された土師器も出土していて注目されるが，調査地区が限られたため，その内容については不明確な点が多い。以下奈良時代以降の住居址・掘立柱建物址については，『上の原遺跡II』に報告したので，ここでは住居址名のみ列記しておく。

○昭和53・54年度調査区

８号	100号
10号	106号
12号	掘立柱建物址
47号	
64号	
89号	
91号	
93号	

○昭和55年度調査区

Ｄ－１－１号	Ｆ－２－３
Ｄ－１－２号	Ｆ－２－５
Ｄ－１－７号	Ｆ－２－６
Ｄ－１－８号	Ｆ－２－７
Ｅ－１－３号	Ｆ－２－10
Ｅ－１－６号	Ｆ－２－13
Ｅ－２－６号	
Ｅ－２－７号	

第２節　遺構各説

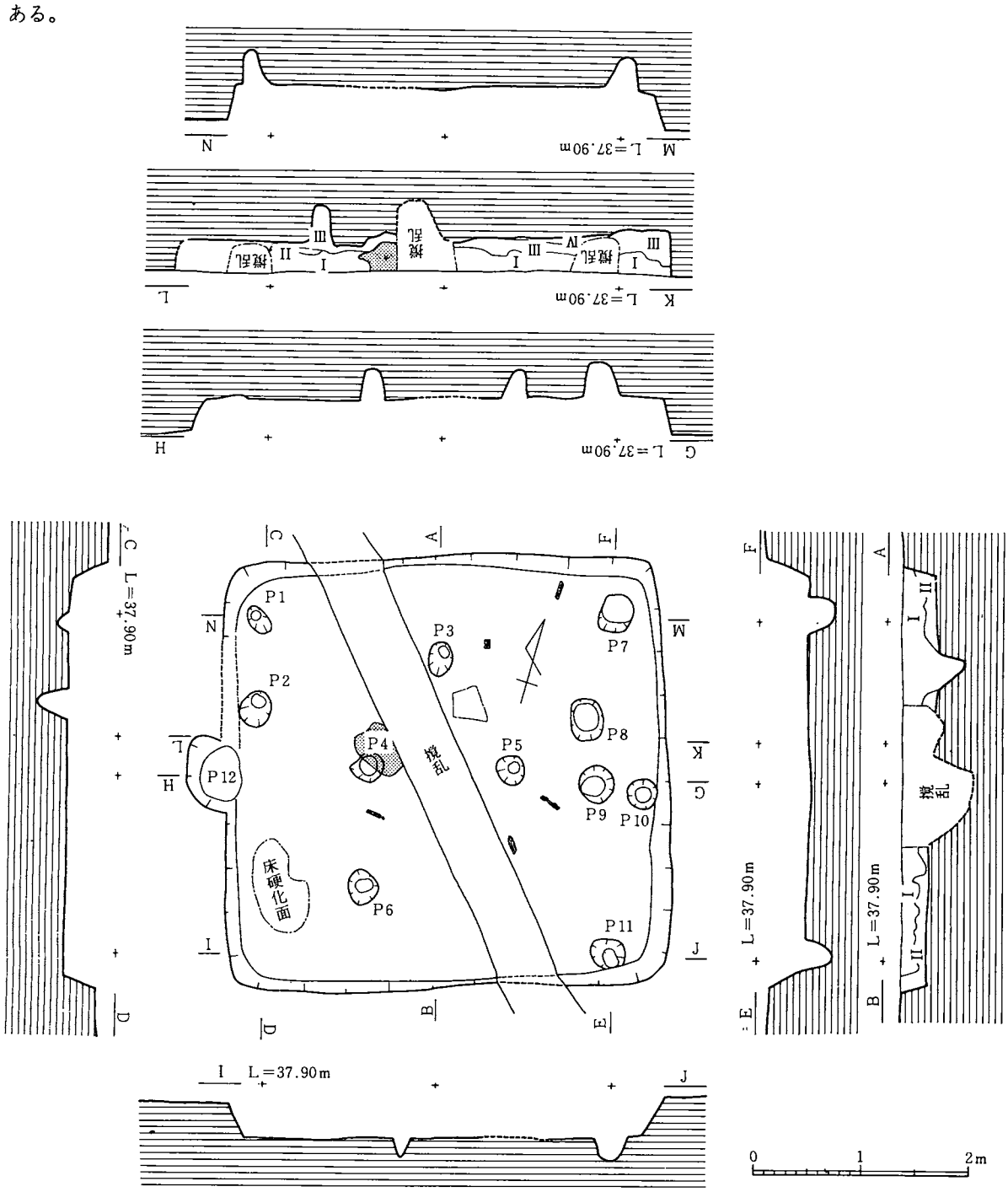
本説では第１節で述べた各時代の遺構を除く古墳時代前～中期の住居址について説明を加える。調査地区の総面積は約2400平米で，全体を20×20ｍのグリットに区切り，北から南へ０～11区とし，西から東へＡ～Ｆ区とした。この東西方向の地区名は昭和55年度調査地区と一致する。住居址の総数は90軒で，調査区北側のＡ～Ｅ－１～２区と中央部のＡ～Ｅ－３～７区との２個所に集中した分布状態がみられ，此の間にわずかな間隙が認められる。また２つの住居址群にも重複・切り合いが多く認められるので，さらに数群の変遷があったものと考えられる。なお，調査区北端の住居址は昭和55年度調査地区の住居址と交錯しているが，未整理であるために，これらの関係に就いて明確にすることはできない。なお，住居址番号は検出した順に地点や年代を無視じて，任意に命名したものである。以下順を追って説明を加える。

上の原1号住居址（第3図）

調査地区中央部西側のＡ―4区に位置している。この東側には本住居址を囲むように2・15・14号住居址が並ぶ。竪穴のプランは北辺がやや短いが，全体的にみると整った方形である。また，四隅はまるみを呈している。規模は中軸線上で南北4.00m，東西4.20m，面積16.7m²の小型の住居址である。長軸方位はＮ―75°―Ｅである。壁高は南東隅で0.45m，北壁中央部で最低0.25mを残している。また，住居址全体は北東部から南東部に走る3条の耕作溝で攪乱をうけていて，このうち中央部を走る溝以外は床面に達していない。床面の残存状態は悪く，南西部コーナー付近と中央部の2ヶ所に硬化面を確認したにすぎない。柱穴は計11個検出したが，配列は不規則で主柱穴と支柱穴とを区別することは困難である。ただし住居の規模からみて，Ｐ4・Ｐ5を主柱穴とする二本柱の上屋構造を想定すると，Ｐ1・Ｐ2・Ｐ7・Ｐ10・Ｐ11・Ｐ12の6個の柱穴については，支柱穴と見なすことができる。床面には5ヶ所に炭化した部材片が出土したが，すべて小片である。

〔住居址覆土〕（第3図）

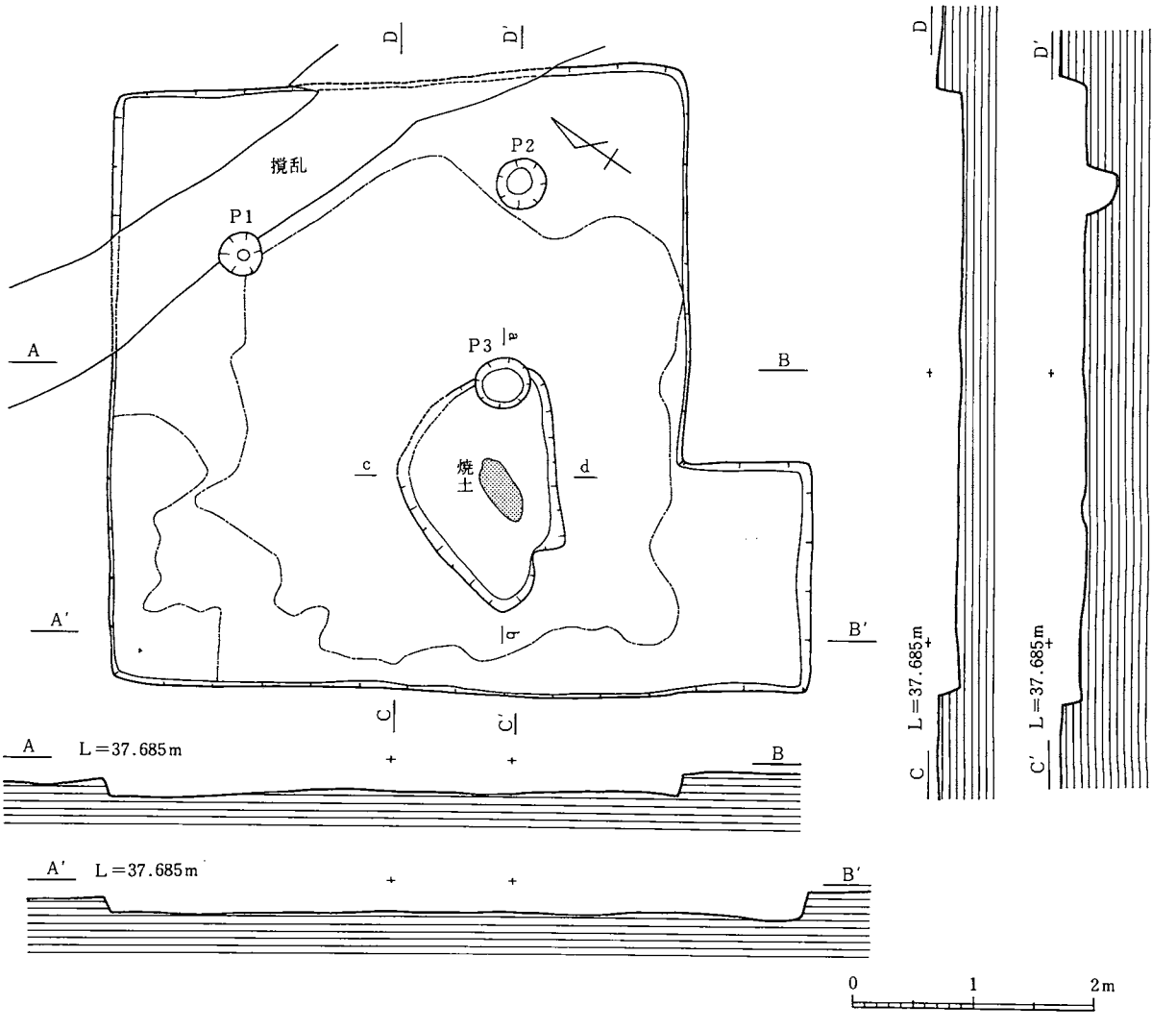
住居址のプラン確認面から構築時の床（地山面）まで計4枚の土層を確認した。Ⅰ層は黒褐色土で炭化物・焼土を含む腐植土。Ⅱ層はⅠ層直下に部分的に認められる灰褐色土層である。Ⅱ層も灰褐色を呈し炭化物・焼土粒を多く含み，全体にサラサラした土層である。本住居址の最終使用時の床面は，このⅡ層下部で確認できた。Ⅲ層はロームブロックをふくむ混合土層で床構築時に埋め戻されたものである。住居址中央部に焼土塊が認められたが，これはⅠ層からⅡ層中位まで連続していることから，住居址廃絶後に埋没したものである。

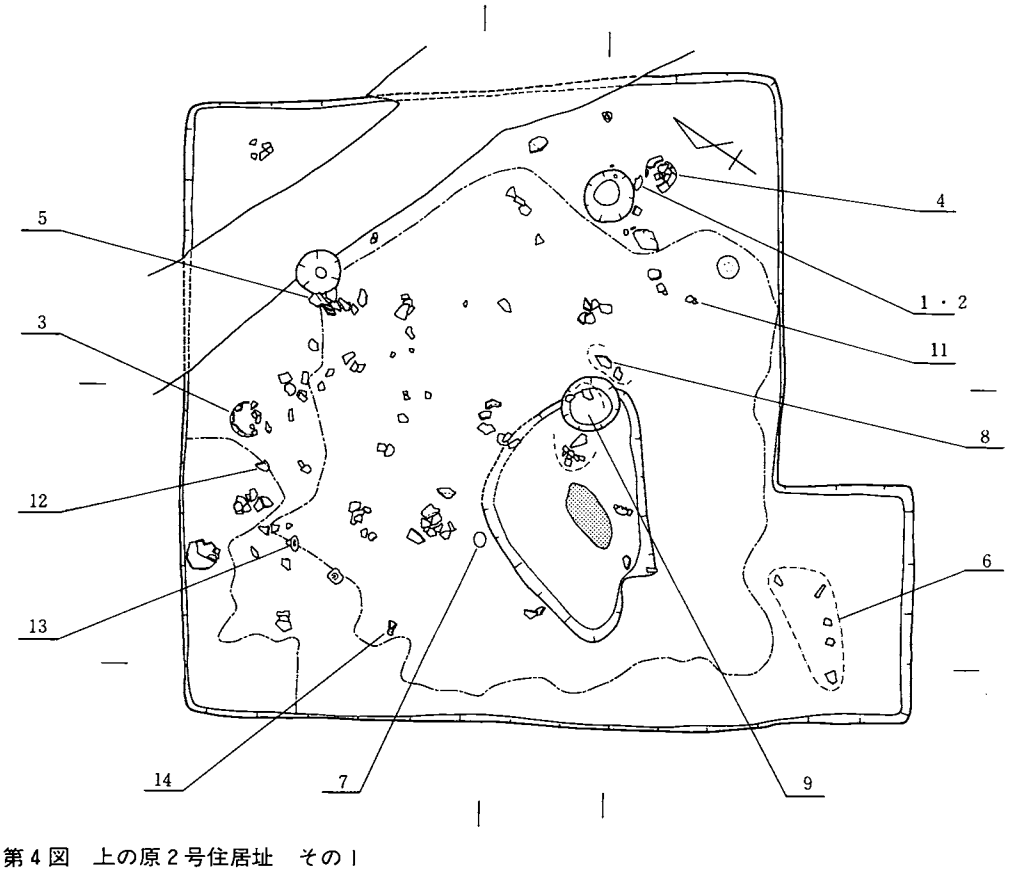


第３図　上の原１号住居址

〔遺物出土状態〕（第3図）

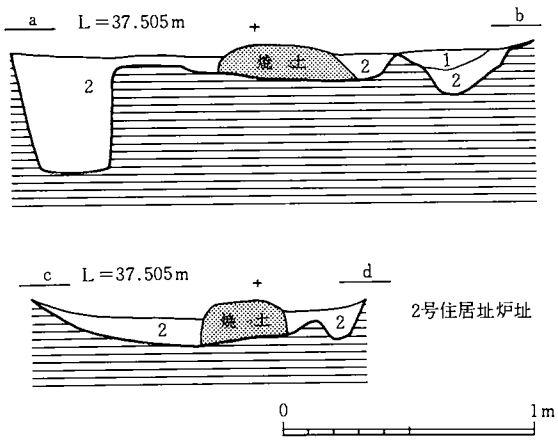
住居廃絶時に生活器具類が持ち去られたのか，まとまった遺物は認められなかった。なおⅠ層下部に土師器甕の小破片が出土したが，図示できるものはなかった。





土器番号	(単位cm)
1	(床面)
2	(4.8)
3	(5.5)
4	(4.8)
5	上層 (2.9~3.1)
6	(床面)
7	(床面)
8	(床面)
9	(床面)
11	(床面)
12	(11.7)
13	(5.6)

第4図　上の原2号住居址　その1



第５図　上の原２号住居址　その２

上の原2号住居址（第4・5図）

1号住居址の北約9m，Ａ―3区と4区～Ｂ―3区と4区にまたがった地点に位置している。住居址の平面プランはやや東西に長い方形を呈し，南壁面西側に幅1.9m・奥行き1.05mの長方形プランの張出部を設けている。住居の規模は長軸（Ａ―Ｂ）線上で4.94m，短軸（Ｃ―Ｄ）線上で4.77mで張出部をふくむ床面の総面積は約25.5m²である。また長軸方位はＮ―56°―Ｅをしめした。壁高は南壁で最大0.24m，北壁で最小0.20mを測った。住居址の北東部コーナー寄りは東西方向に走る耕作溝により，壁面・床面が失われているが，床面の残存状態は良好である。柱穴は3個検出したが，配列は不揃いである。炉址は床面の中央部から南西部よりに片寄った位置に設けられ，長径2.0m，短径1.32mの長楕円形を呈し，焼土は炉の中央部分にのみ認められた。また炉と柱穴Ｐ3とは一部で重複している。床面には明瞭な硬化面が認められ，部分的には壁面近くにまで達している。また硬化面は張出部にまでは達していない。

〔住居址覆土〕（第4・5図）

住居址全体が上部から著しく削平され，覆土そのものを分層することはできなかった。全体に灰褐色を呈し，炭化物・焼土を多く含んでいる。出土遺物の多くは覆土中位から出土している。

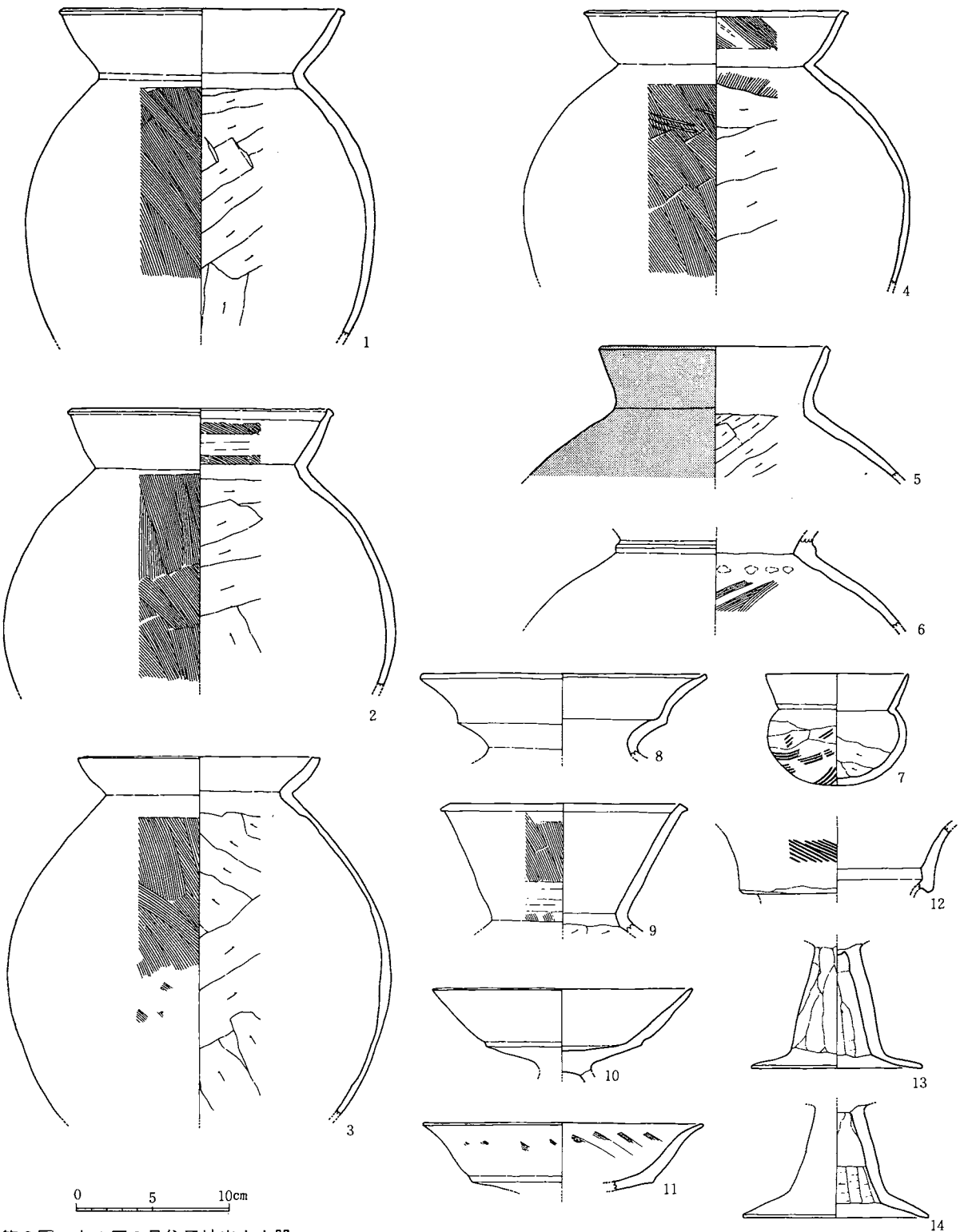
〔遺物出土状態〕（4・5図）

出土遺物は総て土師器で住居址のほぼ全面にみとめられ，これらのうち床面に密着した状態で出土した土器は土器番号1・6・7・8・9・11の6個体分で本住居址の廃絶時の年代を示すものである。また他の土器群は住居廃絶後の埋没過程で混入したか，人為的に廃棄されたものであろう。

〔出土遺物〕（第6図）

出土遺物は総て土師器で総数30個体以上出土したが，これらのうち床面出土の6個体を中心に計14個体を図示した。器種別の内訳は甕4，壺5，小型丸底土器1，高杯4である。

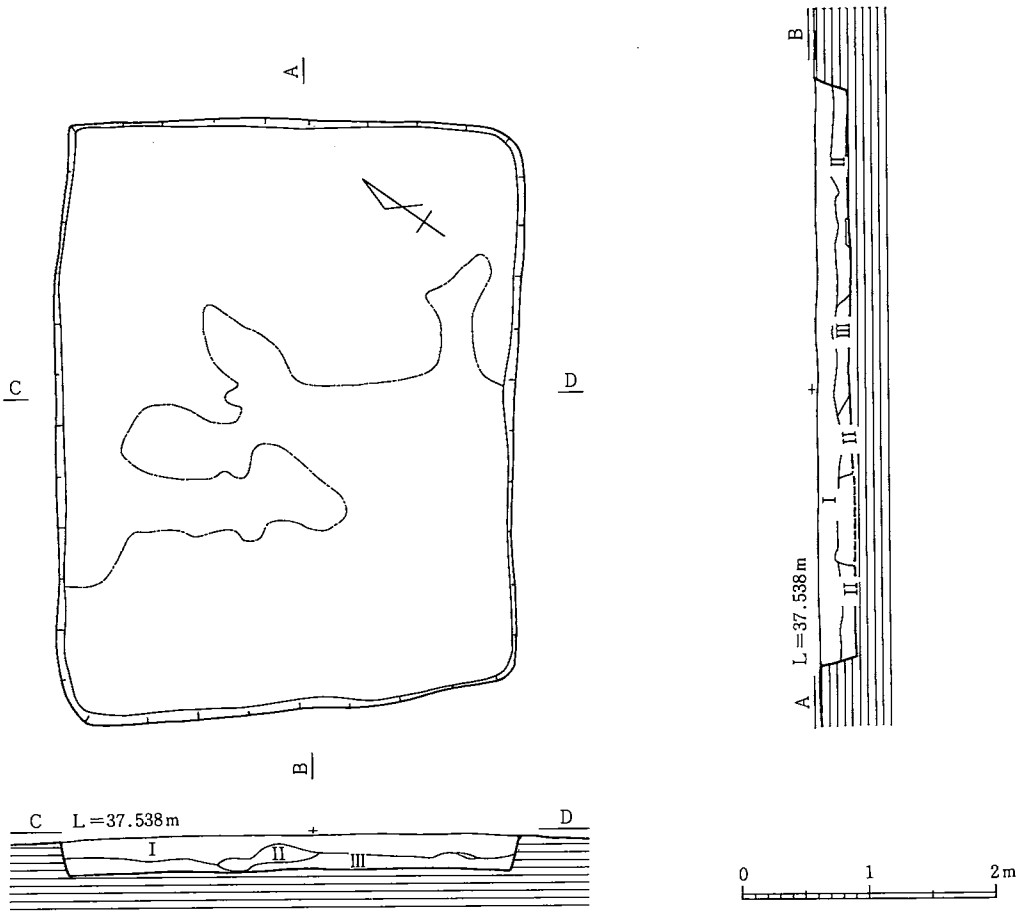
1～4は内湾気味に立ちあがる口縁部をもつ甕型土器である。口縁端部は4点いずれも微妙に変化しているが，内外面の調整手法は良く類似している。外面の刷毛目は4点とも細かで丁寧に仕上げられている。特に4の肩部外面には右下がりのタタキ目が残り，内面にも刷毛目が部分的に残っている。内面は定型化されたヘラ削りが施されている。1・2は胴部下半部左上がりののち胴部上位が右上がりヘラ削りが施されている。3は胴部下半が左上がり，中位が右上がり，上位はまた左上がりで，全体の調整順序は上位から下位へ移行していて，通常認められる手法とは異なっている。2・3・4とも内外面に煮沸による炭化物及び器面の変色が認められる。6は頸部外面に突帯を一条巡らせた壺型土器である。5は頸部が強くくびれた短頸壺で，外面には赤色顔料が塗布されている。9はラッパ状に大きく開く中型の壺である。8・10は所謂複合口縁壺で，いずれも薄い造りの土器である。7は小型丸底土器で口径が胴部径に比べて僅かに大きく，全体に扁平である。11～14は高杯で，11・12は杯部の破片でいずれも小破片である。13は脚部で内外面ともヘラ削り調整のあと裾部はヨコナデ調整で仕上げている。全体に粗雑な造りの土器である。

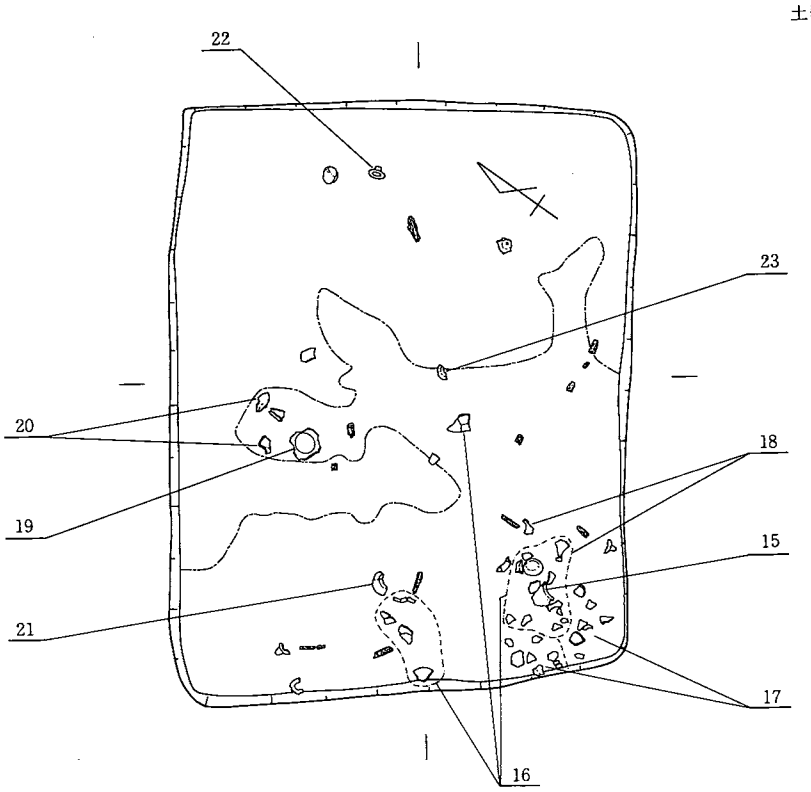


第６図　上の原２号住居址出土土器

上の原3号住居址（第7図）

4号住居址と同じくＢ—3区に位置している。住居址の平面プランは西壁・南壁側がやや長い長方形を呈している。規模は長軸（Ａ—Ｂ）線上で4.51m，短軸（Ｃ—Ｄ）線上で3.62m，床面積16.2m²の小型の住居址である。長軸方位はＮ—54°—Ｅである。壁高はほぼ0.25～0.30mほど残している。床面は中央部が僅かに高くなっているが全体として水平面を保っている。柱穴・炉址は認められなかったが，床面の中央部から南半





土器番号	(単位cm)
15	(6.7)
16	(0.8)
17	(6.7)
18	(床面)
19	(5.2)
20	(3.8)
21	(床面)
22	(12.8)
23	(11.3)

第7図　上の原3号住居址

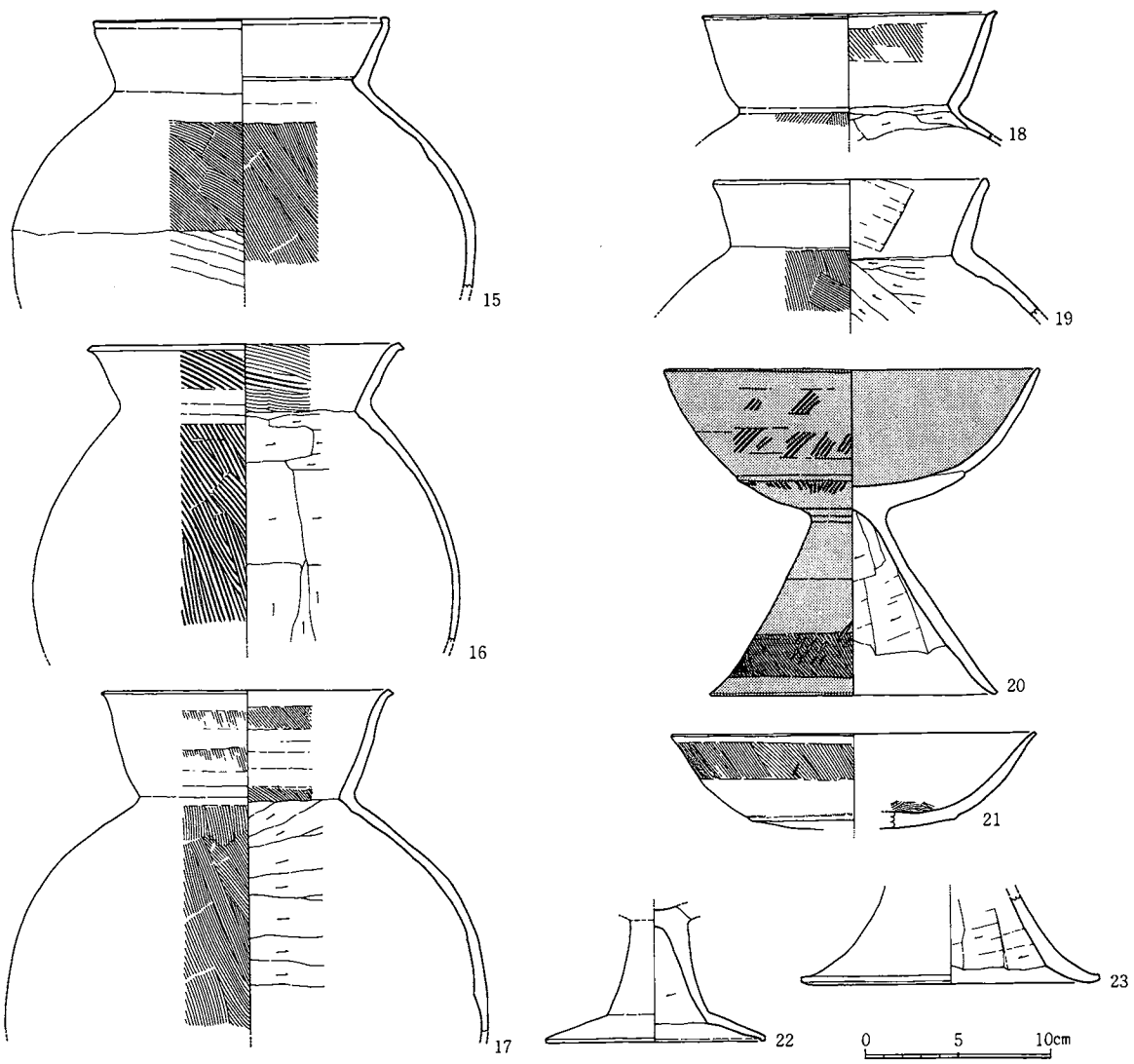
分に硬く踏みしめられた硬化面が残されていた。覆土中及び床面には炭化部材片が出土したが，これらの一部は放射状に分布しているが，少量であるため詳細を知ることはできない。また床面中央から北壁側にやはり炭化した茅が出土した。

〔住居址覆土〕（第7図）

住居址内に堆積した覆土は大きく分けて上下2層からなり，この2層間に部分的にブロック状の土層が認められた。Ⅰ層は灰褐色を呈し，少量の土器片等を含んでいる。Ⅱ層は床面中央部に認められ，Ⅰ層直下から一部は床面に接している。Ⅲ層はⅡ層によく類似した暗褐色土層で，炭化物・焼土粒を多く含む腐植土で，前述した炭化部材・茅はⅢ層中から床面に密着した状態で出土したものである。こうしたことから本住居址は火災により焼失したのち自然に埋没したものと考えられる。

〔遺物出土状態〕（第7図）

計25個体以上の土器が出土したが，図示できたのは土器番号15～23の9個体分である。このうち18･21は床面出土，15・16・17・19・20はⅢ層中，22・23はⅠ層すなわち上層出土の土器である。また16の甕のように床面の広い範囲に散乱した状態で出土したものも認められた。床面出土の2個体を除く他の土器群は住居廃絶後に自然に流入したか，人為的に廃棄されたものであろう。



第8図　上の原3号住居址出土土器

〔出土遺物〕（第8図）

出土遺物はすべて土師器である。15～19は甕型土器で，このうち17・18は壺型土器に近い口縁部を有するが，いずれも煮沸用土器として使用されているので，ここでは甕として扱った。15は外反気味に立ち上がった口縁部で端部が内方に小さくつまみ上げられている。胴部内外面は刷毛目で仕上げられ，胴部外面の中位以下はヨコ及びナナメ方向ヘラ削りが施されている。16～18はやや内湾気味に立ち上がった口縁部で，端部が小さく外反している。口縁部内外面は刷毛目調整の後ヨコナデで仕上げられ，胴部外面は刷毛目，内面はヘラ削りである。3個体とも調整･仕上げの手法に著しい差は認められない。19も短かく外反した口縁部を有する甕で，内外面の調整・仕上げの手法は16～19と同様である。20～23は高杯で，20は半球形状のやや深い杯部にラッパ状に大きく開く脚部を有している。杯部内外面は粗い刷毛目調整のあとヨコナデにより丁寧に仕上げられ，脚裾部外面には右上がり方向のタタキ目が残っている。また，杯部内外面と脚部外面には赤色顔料が塗布されている。其の他高杯脚部には20と同様のラッパ状に開く23や，脚部が柱状部と裾部が屈折しその境界が明瞭な22などが出土している。

上の原4号住居址（第9図）

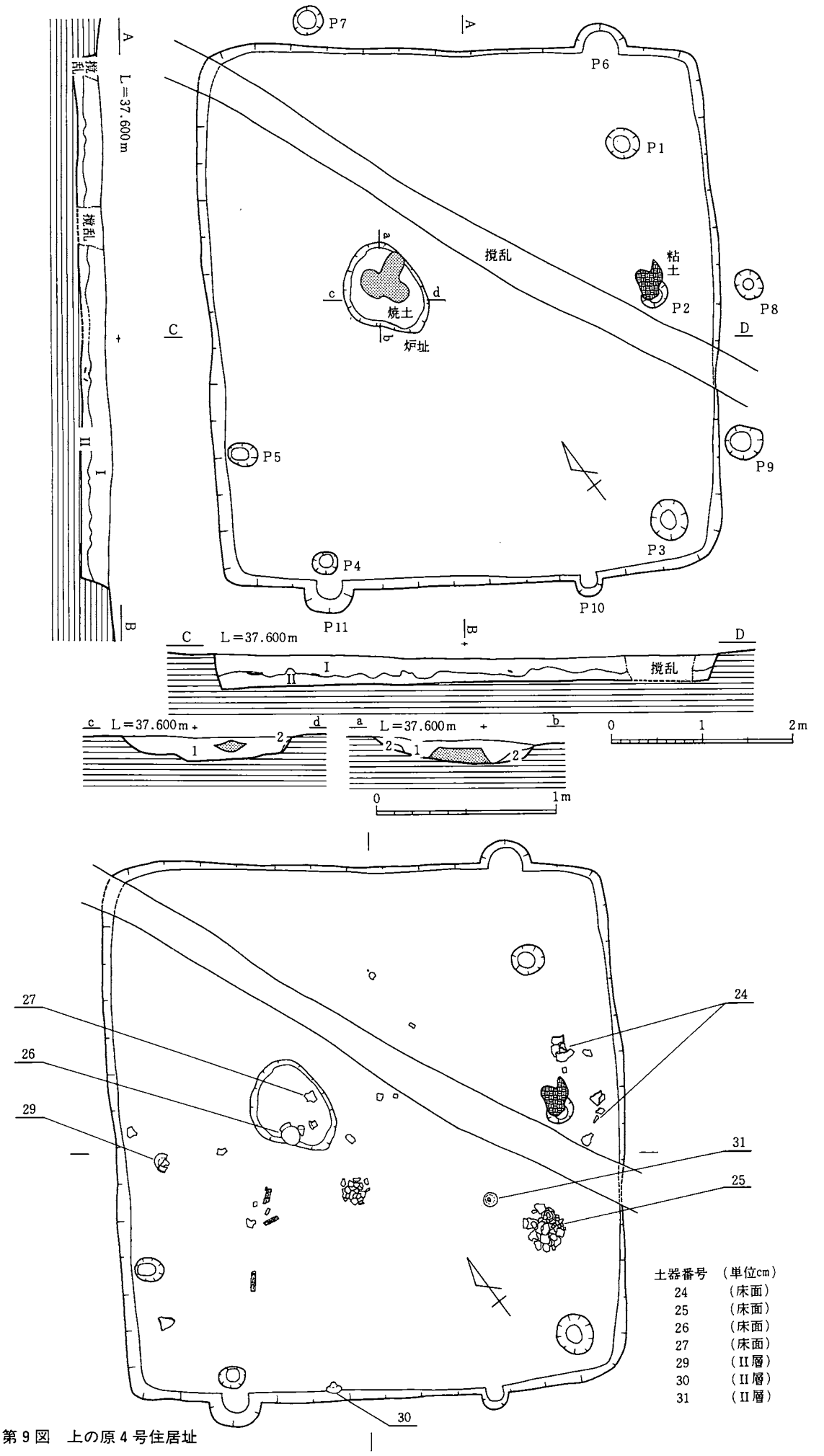
3号住居址の東約8mにあり，同じくB－3区に位置している。平面プランは整った方形を呈している。規模は長軸(A－B)線上で5.78m，短軸(C－D)線上で5.60m，床面積31.2m²の比較的大型の住居址である。長軸方位はN－38°－Eである。壁高は南壁側で最高約0.40mを測り，北壁･東壁側はかなり削平されている。床面は壁に沿った部分が僅かに低く，中央部が高くなっているが，全体的には北壁側に移行するにしたがい低く傾斜している。柱穴は住居内に4個，外側に4個，壁面一部を掘削した状態のものが3個，計11個を検出した。本来主柱穴となるべきものはなく，四壁内外の柱穴群については支柱穴とすべきであろう。炉址は床面中央からやや西寄りに1ヶ所設けられている。炉址の平面プランは不整な楕円形を呈し，断面形は浅いU字状である。炉の中央部は焼土で満たされていた。またP2に落ち込むような状態で未焼粘土の塊が出土したが，おそらく土器製作のための粘土材料を持ち込んだものであろう。住居内には少量の炭化材・茅が出土したが，これらはすべて覆土中に含まれていたものである。

〔住居址覆土〕（第9図）

住居址内に堆積した土層は上下2層からなっている。I層は黒褐色のサラサラとした土層で，下部に土師器の小破片や炭化材を含んでいる。II層は床面直上に堆積した土層で，色調はI層とよく類似しているが，I層に比較して細かな炭化物・焼土粒を多く含んだ腐植土で粘性の強い土層である。全体的にみるとI・II層いずれも住居廃絶後の自然な堆積状態を示しているものと思われる。

〔遺物出土状態〕（第9図）

出土遺物は炭化部材等を除くとすべて土師器で，主にI層下部からII層中に出土している。図示したものは計8個体分で，これらのうち土器番号24～27の4個体は床面に密着した状態で出土し，26の甕は炉付近に置かれていたものらしく，炉址内に転落した状態で埋没していた。また25の甕は住居への土砂の堆積によって，その土圧により押し潰された状態であった。28～31の4個体はすべてII層中から出土したものである。従って24～27の土器については，本住居址の最終使用時の年代を示す土器群である。

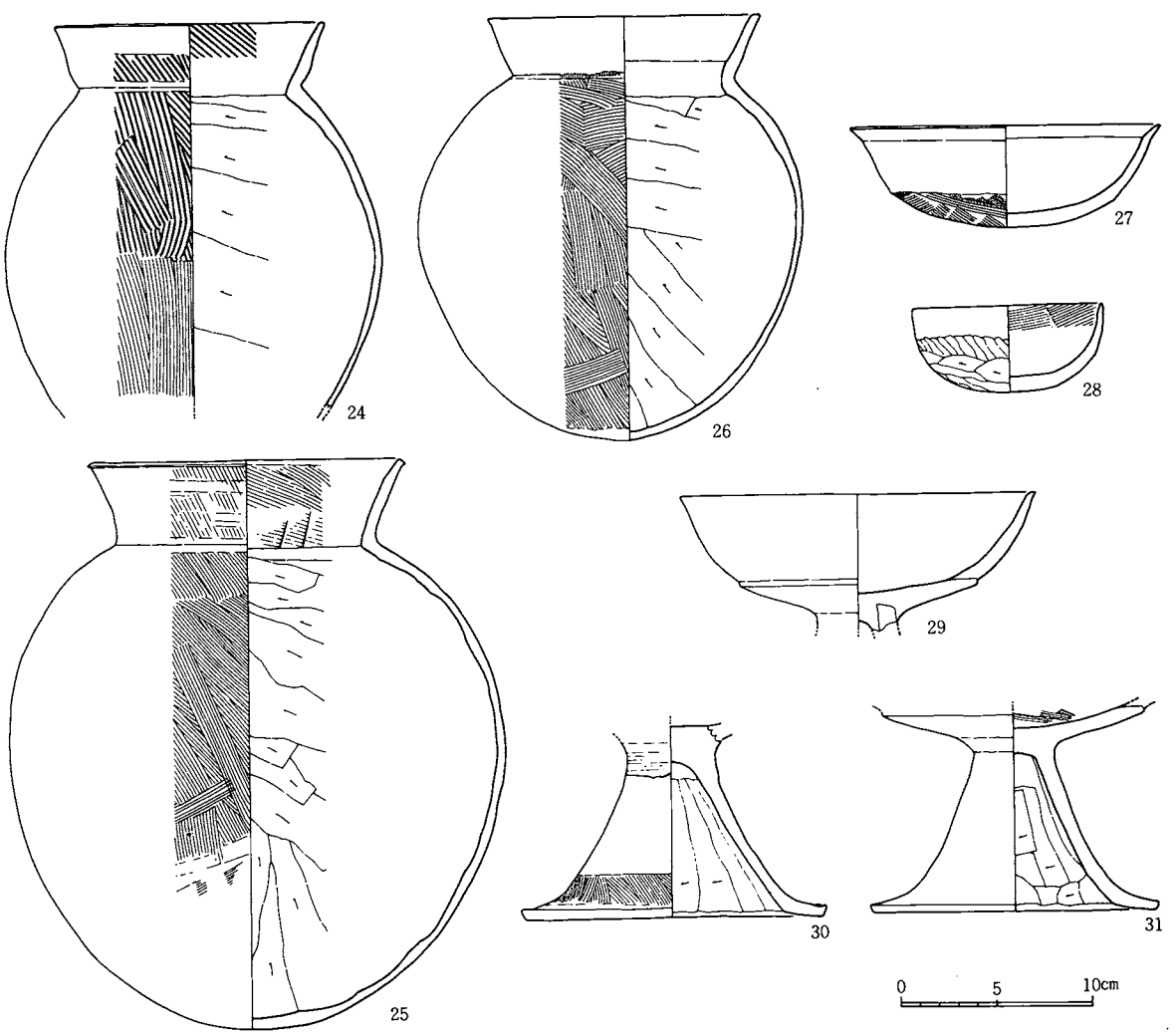


第9図　上の原4号住居址

〔出土遺物〕（第10図）

出土遺物はすべて土師器で，内訳は甕5，杯2，高杯5が出土したが，これらのうち甕3，杯2，高杯3を図示した。24・26の甕は直線的に立ち上がる口縁部を有するもので，いずれも胴部最大径はほぼ中位にある。内外面の調整・仕上げの手法は，定型化している。25の甕は球形に近い胴部に，やや外反気味に立ち上がる口縁部を有し，口縁端部は角ばっている。内面のヘラ削り調整は胴部中位以下では縦ないし左上がり方向で，中位から頸部にかけては左上がり方向で，この傾向は24・26の場合も同様である。27は全体に浅い杯で，体部中位で屈折し口縁端部で小さく外反している。またこの部分の内面には稜を残している。体部中位の屈折部以下は刷毛目調整で他の部分はヨコナデ調整である。28の杯は半球形の小型の土器で，外面はヘラ削りののち口縁部をヨコナデ調整し内面には刷毛目及びナデ調整で仕上げている。29～31はいずれも高杯である。29は杯部の破片で，杯部の上半部と下半部との接合部外面に稜を有するが，全体的には扁平な半球形を呈している。30・31は高杯脚部破片で，ラッパ状に大きく開くタイプで裾部でさらに外半し，この部分の内面は明瞭な稜を有している。また，杯部と脚部とを接合した際に内面に突出するボタン状の突起はナデ消されているが，こうした調整手法はこのタイプの高杯には通有に認められる。従って29の高杯に場合も30・31と同様の脚部であった可能性が強い。

なお，Ⅰ層上面には須恵器杯・甕の小破片と土師器高台付杯が出土したが，これらは7世紀前半頃の形式的特徴を備えていて，住居址自体の埋没過程を示すものであろう。



第10図　上の原4号住居址出土土器

上の原5号住居址（第11図）

C—3区を中心に隣接する他の3区に跨った地点に位置している。竪穴の平面プランは東壁及び南壁辺がやや長い長方形を呈している。規模は長軸（A—B）線上で5.78m，短軸（C—D）線上で4.99mで床面積約26.6m²であった。長軸方位はN—57°—Wである。壁高は0.25～0.30mで，床面の中央部はやや高く，四壁に沿った部分が低くなっている。床面には計8個の柱穴を検出したが，これらの配置状況からP2—P5—P7—P8—P6—P4の6本柱か，P2—P7—P8—P4の4本柱が想定される。炉址は床面の西壁寄りのP7—P8との中間に1ヶ所設けている。平面形は不整な長楕円形で，内部には厚い焼土で満たされていた。また床面は柱穴から内側部分が踏み固められた硬化面が認められ，特に炉址が設けられている西壁側では，壁面まで及んでいる。なお，覆土中及び床面には炭化部材等は残されていなかった。

〔住居址覆土〕（第11図）

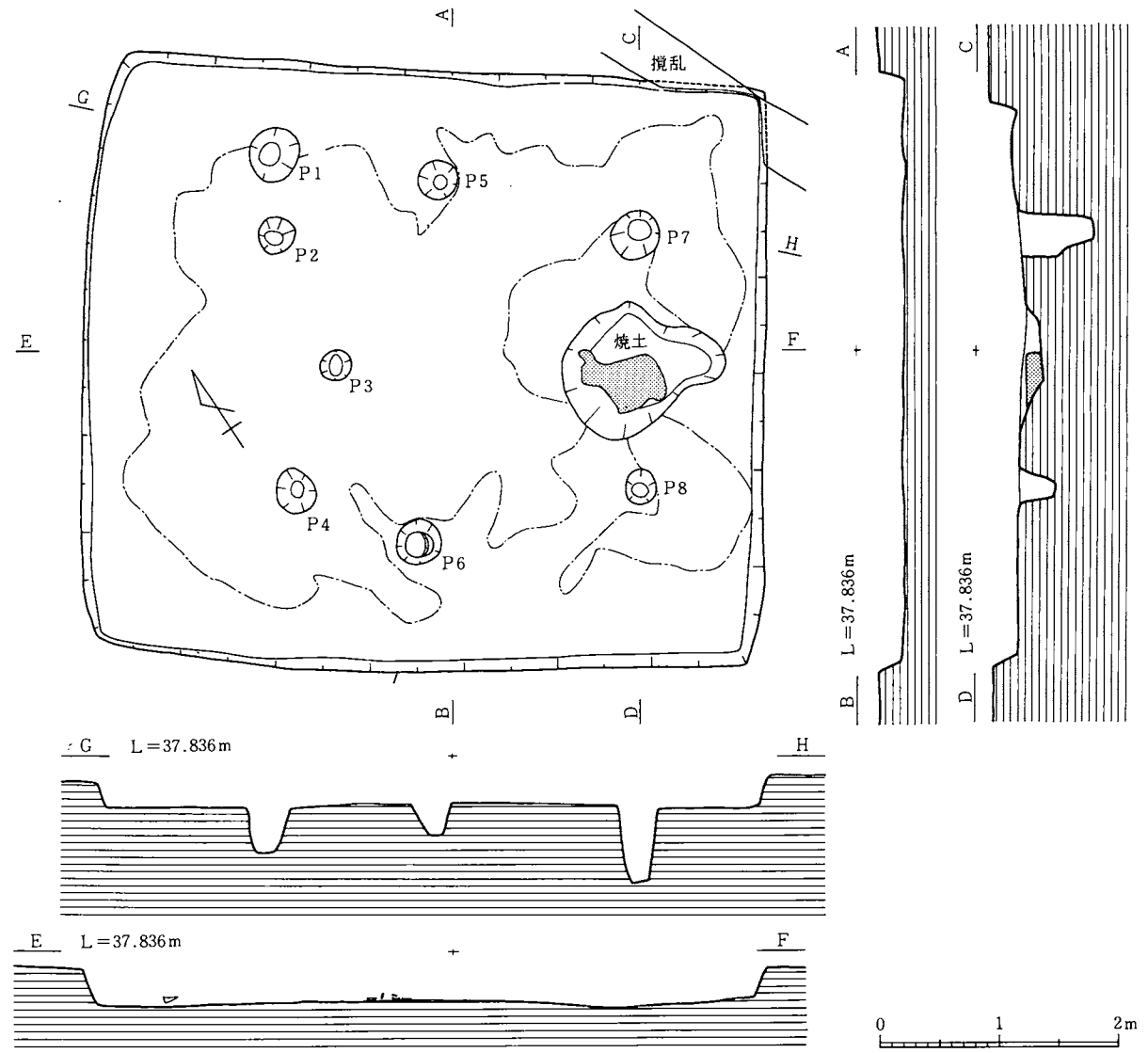
住居址覆土は確認面から床面まで灰褐色の腐植土からなり，この間を分層することはできなかった。ただし床面に近付くほど，炭化物・焼土粒の量が増加する傾向にあり，床面直上の5～10cmの間の堆積土では顕著であった。したがってこの土層をII層，上部をI層とすることができる。出土遺物のほとんどはこのII層に集中していた。出土遺物はすべて土師器で，このうち33・35・43・45・46・47の6個体は床面に密着した状態のもの，32・34・36・37・41・44の6個体は，床面から僅か上部のII層中から出土したものである。また，38～40の3個体は出土位置は不明であるが，同じくII層中から，43はI層中から出土したものである。以上4グループの土器群は住居の最終使用時・廃絶直後の時期・埋没過程を示すものであるが，それぞれの土器群の間には著しい型式的な差は認められないことから，住居の埋没には長時間を必要としなかったと考えられる。

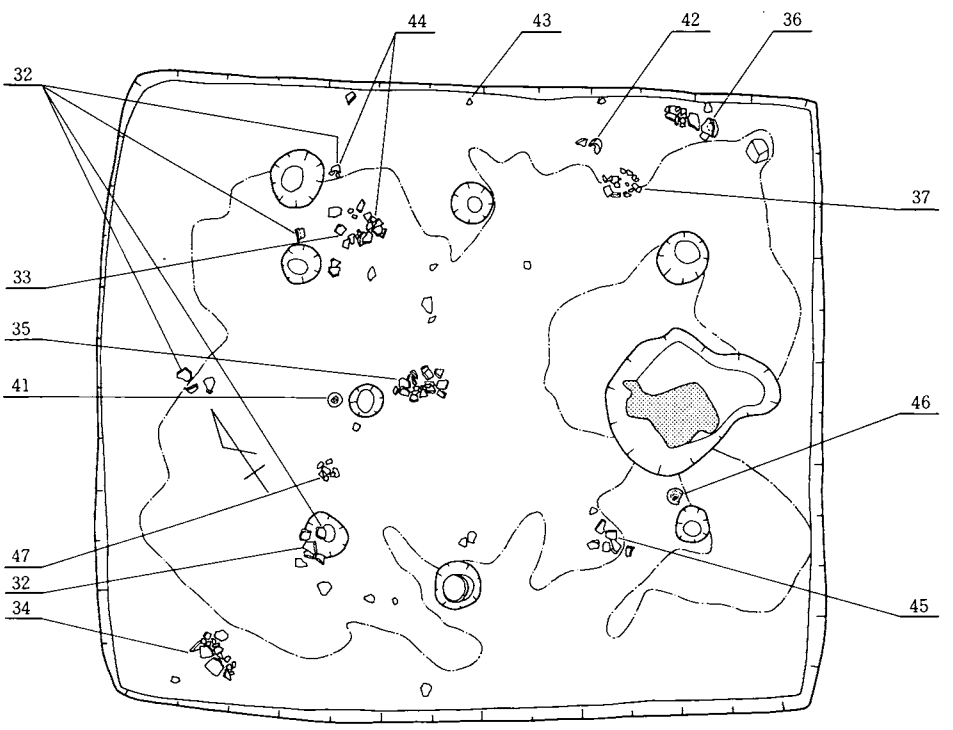
〔遺物出土状態〕（第11図）

遺物は床面のほぼ全体に広がっていて，1個体分がある程度まとまって出土しているが床面の西壁寄りでは土器は同一個体のものが一定の範囲に散乱した状態で出土していて，これらの接合関係は第11図に示した。器種ごとの出土割合は，甕6，壺2，小型丸底土器3（うち台付小型丸底土器1を含む），高杯7（うち4個体を図示した）であった。また最終使用時における出土割合は，甕2，壺0，小型丸底土器1，高杯3であった。

〔出土遺物〕（第12図）

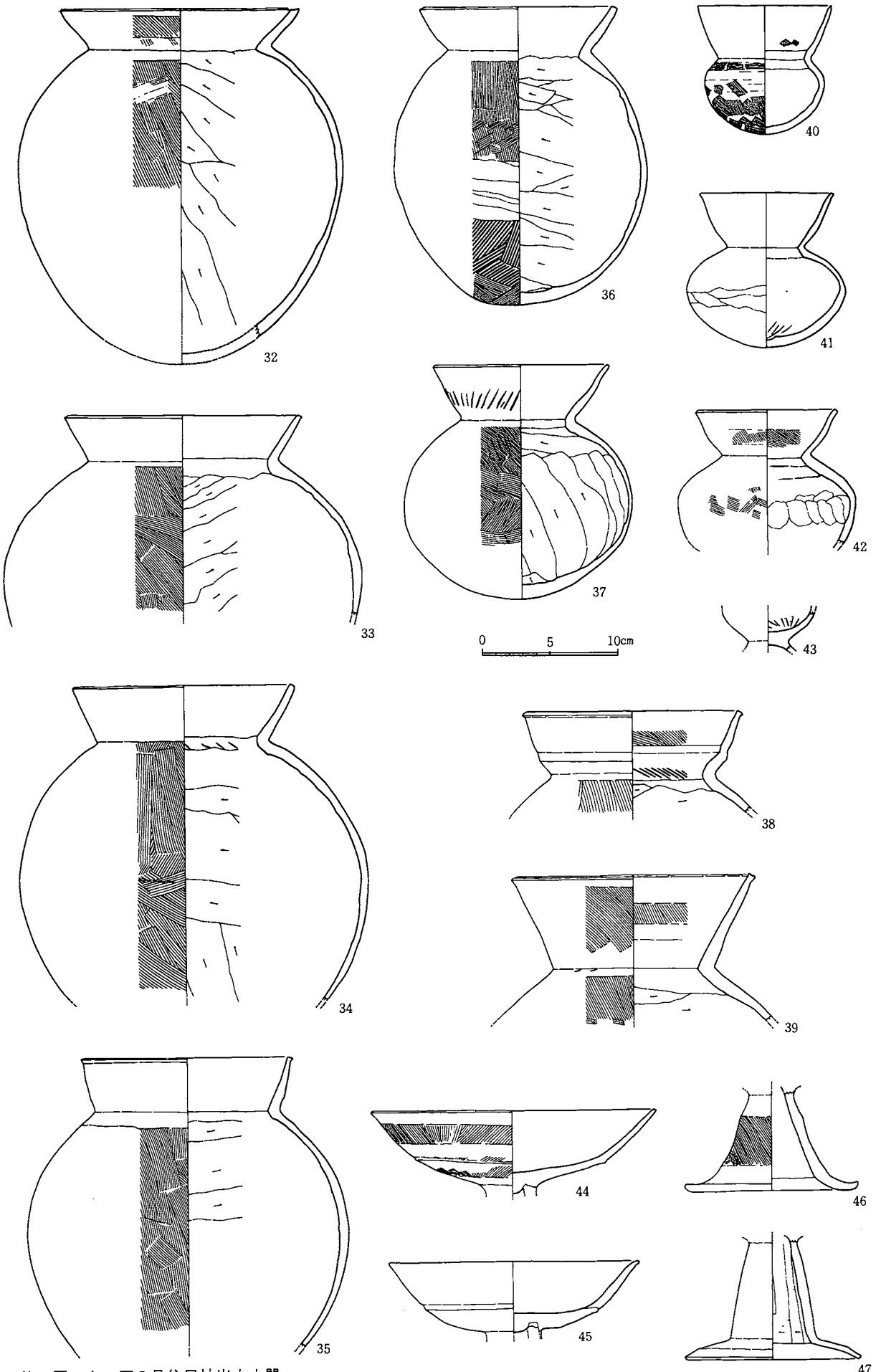
32～36・38は甕型土器で，これら口縁部の形態により32～36の単純口縁のものと，38の口縁部に段を有すものとがある。32の甕は頸部が強くくびれ，口縁部が大きく外反し，胴部最大径は中位よりやや上部にある。33～36の甕は球形に近い胴部にほぼ直線的に外反する口縁部を有するが，口縁端部はそれぞれ微妙に変化している。内外面の調整・仕上げの手法は定型的であるが，とくに内面のヘラ削りの方向には個体差がある。また34の胴部外面にはヨコ方向に近い右下がりのタタキ目が残されている。さらに36の胴部外面には，刷毛目調整ののちヨコ方向のヘラ削りにより仕上げられた部分が認められる。なお38を除く5個体の甕には明瞭な煮沸の痕跡が残されている。37はやや扁平な球形胴部を持つ壺で，内外面の調整手法・仕上げは甕の場合と同様である。39は広口壺の口頸部破片である。40の小型丸底土器は胴部径に対して口径がやや大きく，41・42の小型丸底土器は通常のものよりやや大型化したタイプで，口径に対して胴部径が大である。44・45は高杯の杯部破片で，全体に浅く脚部を接合する際に脚柱状部側に突出するボタン状の突起はそのまま残されている。両者とも内外面は刷毛目調整ののちヨコナデにより仕上げている。46・47は高杯の脚部破片で，ラッパ状に開くタイプのもの（46）と柱状部と裾部との境が明瞭なタイプのものとが出土している。両者とも最終





土器番号	(単位cm)
32	(1.1)
33	(床面)
34	(4.1)
35	(床面)
36	(0.7)
37	(1.0)
41	(0.7)
42	(7.4)
43	(床面)
44	(1.9)
45	(床面)
46	(床面)
47	(床面)

第11図　上の原5号住居址

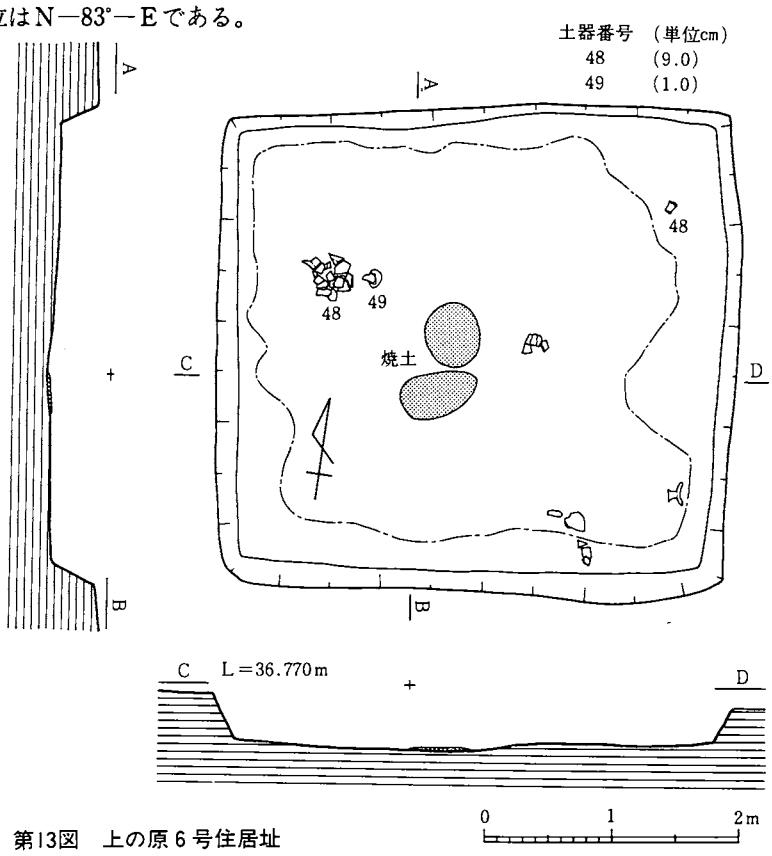


第12図　上の原５号住居址出土土器

使用時の土器であるが，型式的には46が47に対して後出するものである。

上の原6号住居址（第13図）

調査区北端のD—1区に位置し，同区には7・99・104・105・107号の各住居址が密集し，8・108号住居址の2軒が重複している。規模は長軸（C—D）線上で4.10m，短軸（A—B）線上で3.75mで，やや南北に長い方形プランを呈し，床面積は約13.8m²の小型の住居址である。壁高は西壁で最高0.36mを測った。床面には柱穴は認められなかった。床面は四壁に沿った部分を除き硬く踏み固められた硬化面がみられ，中央部が僅かに低く窪んでいて，この部分の床面に密着した状態で薄く焼土が堆積していた。おそらくこの部分が炉址であったと考えられる。なお長軸方位はN—83°—Eである。



第13図　上の原6号住居址

〔住居址覆土〕（第13図）

住居址内の覆土は灰褐色土の腐植土で，床面近くでは炭化物・焼土粒を多く含むが，分層できる程の差異は認められなかった。床面はロームブロックを含む混合土で，住居構築時に埋め戻されたものである。

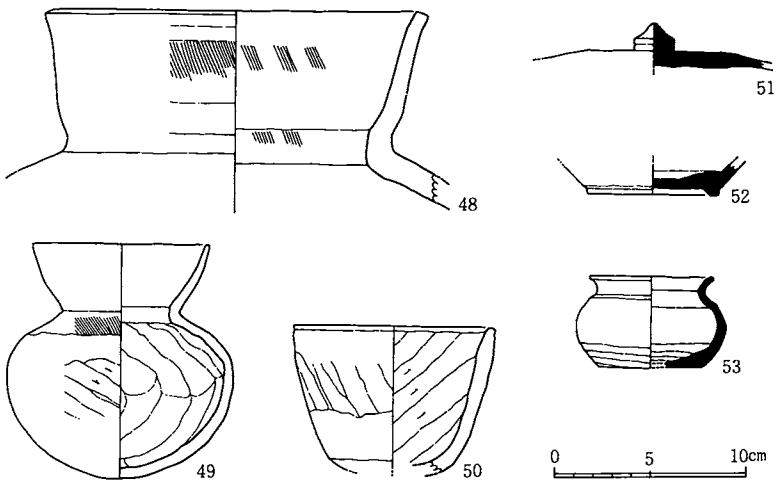
〔遺物出土状態〕（第13図）

出土遺物は土師器及び須恵器である。計9個体分が出土したが，すべて覆土中に含まれていたもので，床面に密着して出土したものは皆無であった。48・49の土師器は第13図に示したとおり，覆土中でも比較的下部に，50の土師器及び51～53の須恵器は覆土の最上層から出土したもので，住居の埋没過程で土砂とともに流入したものであろう。したがって，本住居址の年代を知る手掛りを得ることは出来ないが，前述した48・49の土師器が住居廃絶時に比較的近い年代を示す資料となるであろう。

〔出土遺物〕（第14図）

出土した計9個体分の土器のうち，実測可能な6個体分について図示した。48は単純口縁を有する大型壺の口縁部破片である。全体に厚い造りの土器である。49は小型丸底土器で口径に対して胴部径が大きく，口縁部の高さ・胴部の高さも同様である。口縁部は内湾気味に立ちあがり，頸部は強くくびれている。胴部は扁平な球形を呈している。50は小型の鉢型土器で，内外面ヘラ削りにより仕上げられている。厚い造りの土器である。51～53は須恵器の小破片により復原図示したものである。51は杯蓋でつまみは高く小径である。52は高台付杯の底部破片で，高台は低く底部の周縁部に貼り付けられている。53は所謂ミニチュアの壺型土器で，胴部下半部・底部はヘラ削り，胴部から口縁部内外面はヨコナデにより仕上げている。器壁は薄く，焼成も良好である。

上の原7・107号住居址（第15図）



第14図　上の原6号住居址出土土器

107号住居址はD—0区からD—1区に跨って，7号はD—1区の北側に位置し，重複している。また107号住居址の北半分は塚原本村と尾窪・藤山区をつなぐ農道（凹道）によって切断され失われていた。

7号住居址の平面プランは北西部隅がやや変形し，南東部隅及び南壁側が拡張しているが，基本的には南北にやや長い方形プランである。規模は長軸（A—B）線上で4.87m，短軸（C—D）線上で4.09m，床面積約19.60m²の中規模の住居址である。長軸方位はN—60°—Eである。壁高は南西部壁面で最大0.40mを測り，床面の深さは最大で約0.50mであった。また，重複する107号住居址の床面よりさらに約0.20m深くなっている。柱穴は認められなかったが，床面の中央部から北西部壁面側と南東部隅の一部に硬く踏みしめられた硬化面があり，特に硬化面の一部は北西部壁面にまで及んでいる。

107号住居址は全体の3分の1ないし2分の1が失われていたため，平面プラン・規模・長軸の方向等を知ることはできなかった。しかし残存部のE—F線上での長さ3.92mから推定すると，比較的小型の住居址であろう。

〔住居址覆土〕（第15図）

7及び107号住居址の覆土とも，プラン確認面から床面にいたるまで明瞭な土層変化がみられず，分層することはできなかった。しかし全体的には灰褐色の腐植土層であるが，下部に移行するほど炭化物・焼土粒の量が増加していた。さらに7号ではローム層を5～10cm掘り下げて床面とし，107号では黒ボク土を床面としていた。

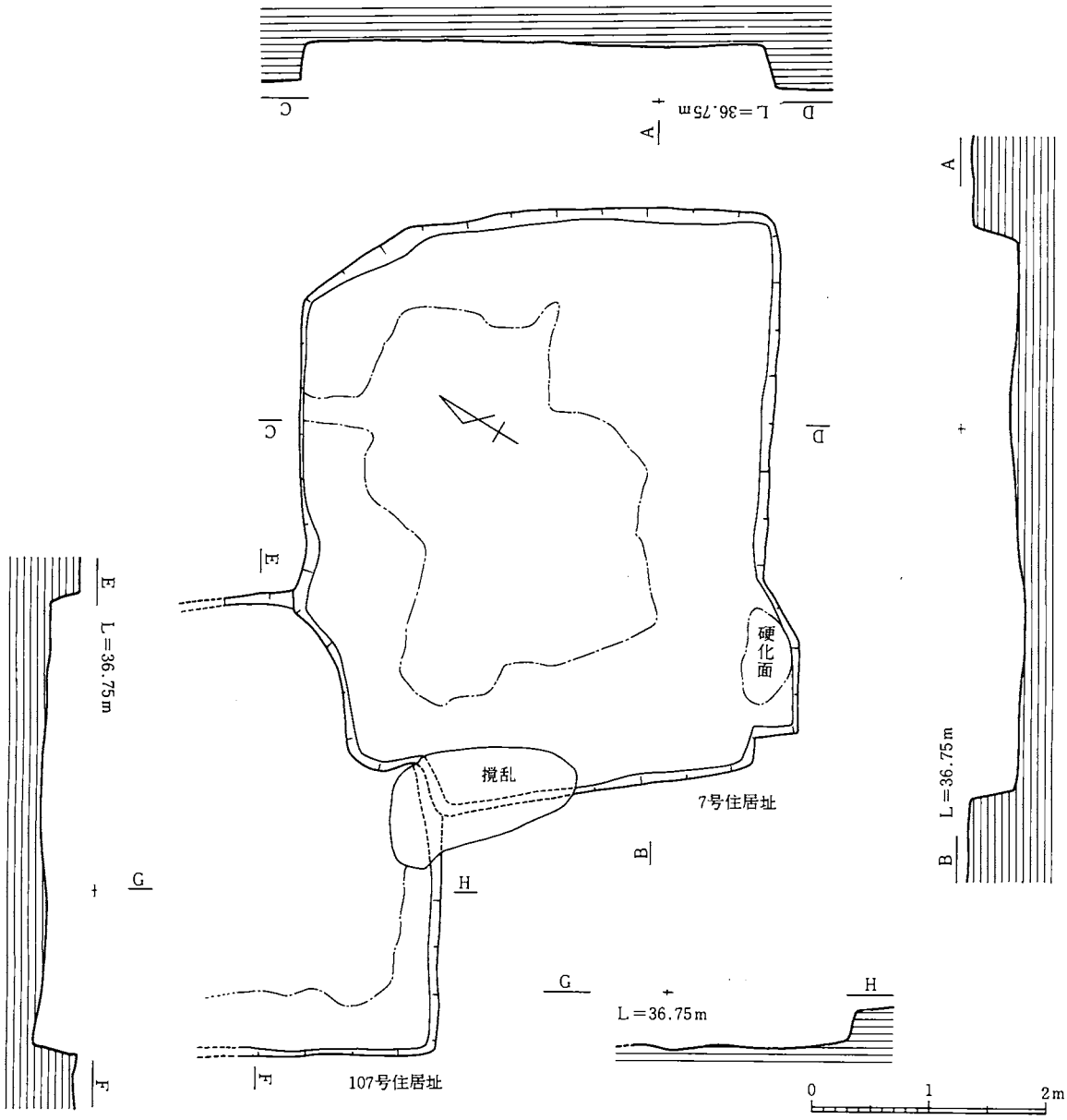
7及び107号住居址との重複部分では，107号住居址の床の硬化面が7号住居址側に及んでいたことから，7号住居址の埋没後に107号住居址が構築されたことが確認できた。

〔遺物出土状態〕（第15図）

107号住居址には出土遺物はなく，7号住居址には覆土中に少量の土師器・須恵器が出土したが，54・55の2個体の土師器はいずれも覆土下部から出土したもので，住居址廃絶後に流入したものである。また57の土師器，56・58の須恵器はいずれも覆土上層に混入したものである。したがって107号の時期を特定する資料は皆無であるが，7号住居址よりも新しい時期のものであり，7号住居址自体の時期については，54・55の土師器がより廃絶時期に近い年代をしめすものであろう。

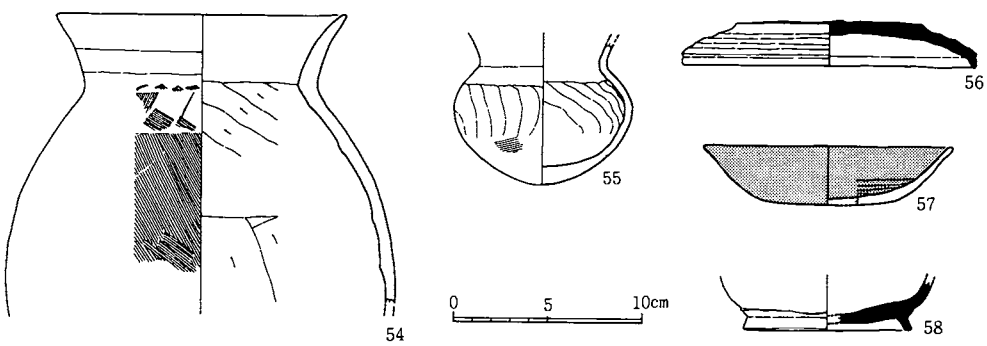
〔出土遺物〕（第16図）

54の甕は胴部下半部を欠失する破片で，口縁部は外湾気味に立ち上がり胴部に比較して肥厚している。頸部のくびれは弱く，胴部の張りも少ない。外面は細かな刷毛目ののち口縁部内外面をヨコナデで仕上げ，胴部内面はヘラ削りである。なお，胴部中位外面には厚く炭化物が帯状に不着していて，一ヶ所に黒班もみら



第15図　上の原７・107号住居址

れる。55は小型丸底土器で口縁部を欠失している。胴部は扁平な球形を呈し，底部は尖り気味の丸底である。二次的な火を受けたためか外面が黒く変色している。57は土師器杯で内外面に赤色顔料が塗布されている。全体に薄く精巧な造りの土器である。56は須恵器杯蓋で天井部は平らで，口縁端部は小さく内方に屈折し，断面は三角形状を呈する。58は須恵器高台付杯破片で，高台は底部の周縁にやや外反気味に貼り付けられている。



第16図　上の原７号住居址出土土器

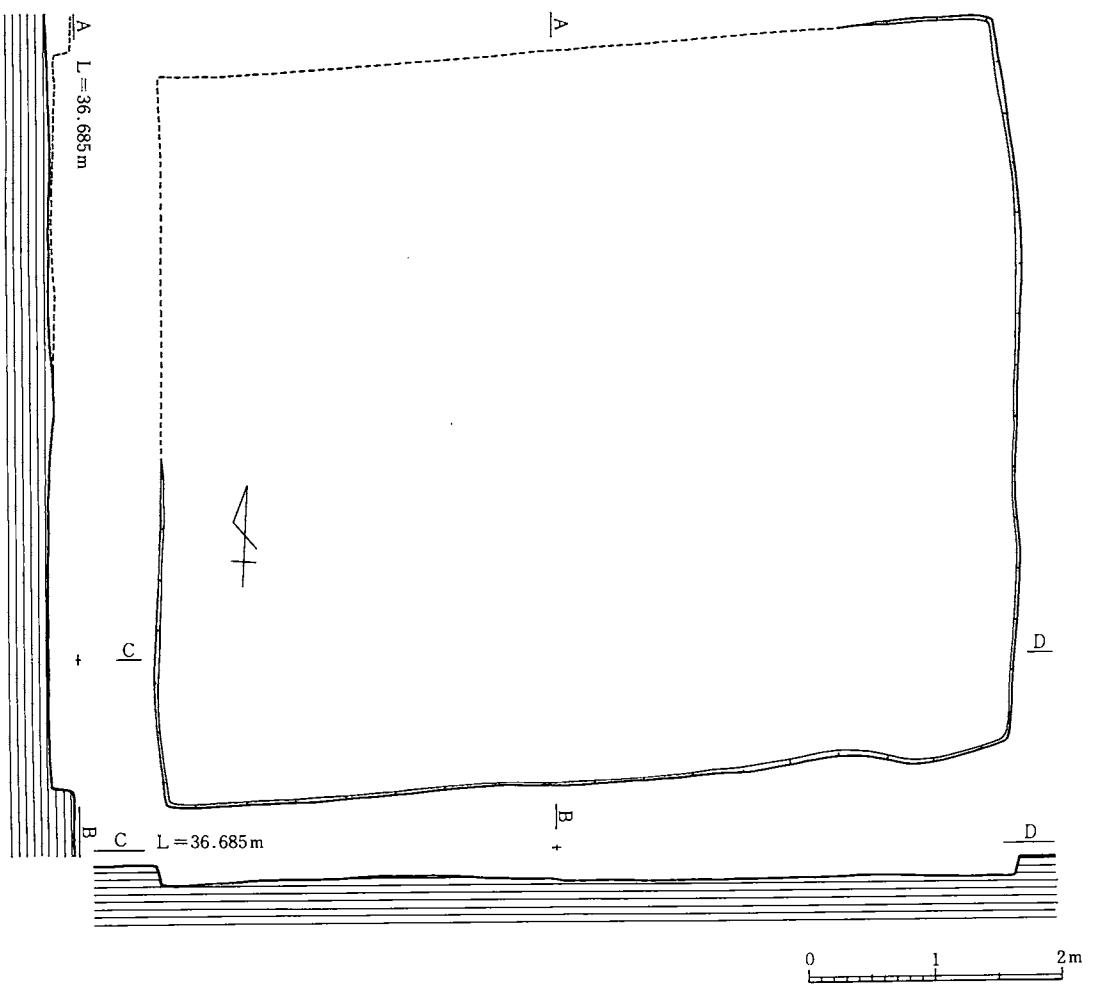
上の原9号住居址（第17図）

調査区の北西部E－1区にあり，同区には35号・64号・103号・109号・110号住居址及び掘立柱建物址等が集中している。このうち64号住居址・掘立柱建物址については，既に『上の原遺跡II』（熊本県文化財調査報告第64集．1984.）に報告したが，いずれも奈良時代以降の遺構である。

住居址は北壁・西壁側を農道（凹道）によって削平され失われていた。残存部での規模は長軸（C－D）線上で6.84m，短軸（A－B）線上で約5.75mを測った。平面プランは東西に長い方形を呈し，床面積は約40m²前後の大型の住居址である。柱穴は皆無で硬化面も部分的には認められたが，面として線引きすることはできなかった。なお長軸方位はN－87°－Eである。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第17図）

住居址覆土は暗褐色の腐植土層で，覆土自体が薄く明瞭な分層はできなかった。床面には土師器甕細片が少量出土したが，図示できるものはなかった。なお，これらの土器は時期決定をしうる特徴は認められないものの，他の住居址出土土器と比較した場合，概ね5世紀頃のものである。また覆土上層にはこれらの土器に後出する歴史時代の土器群が出土しているが，これについては『上の原遺跡II』（同上）に報告している。



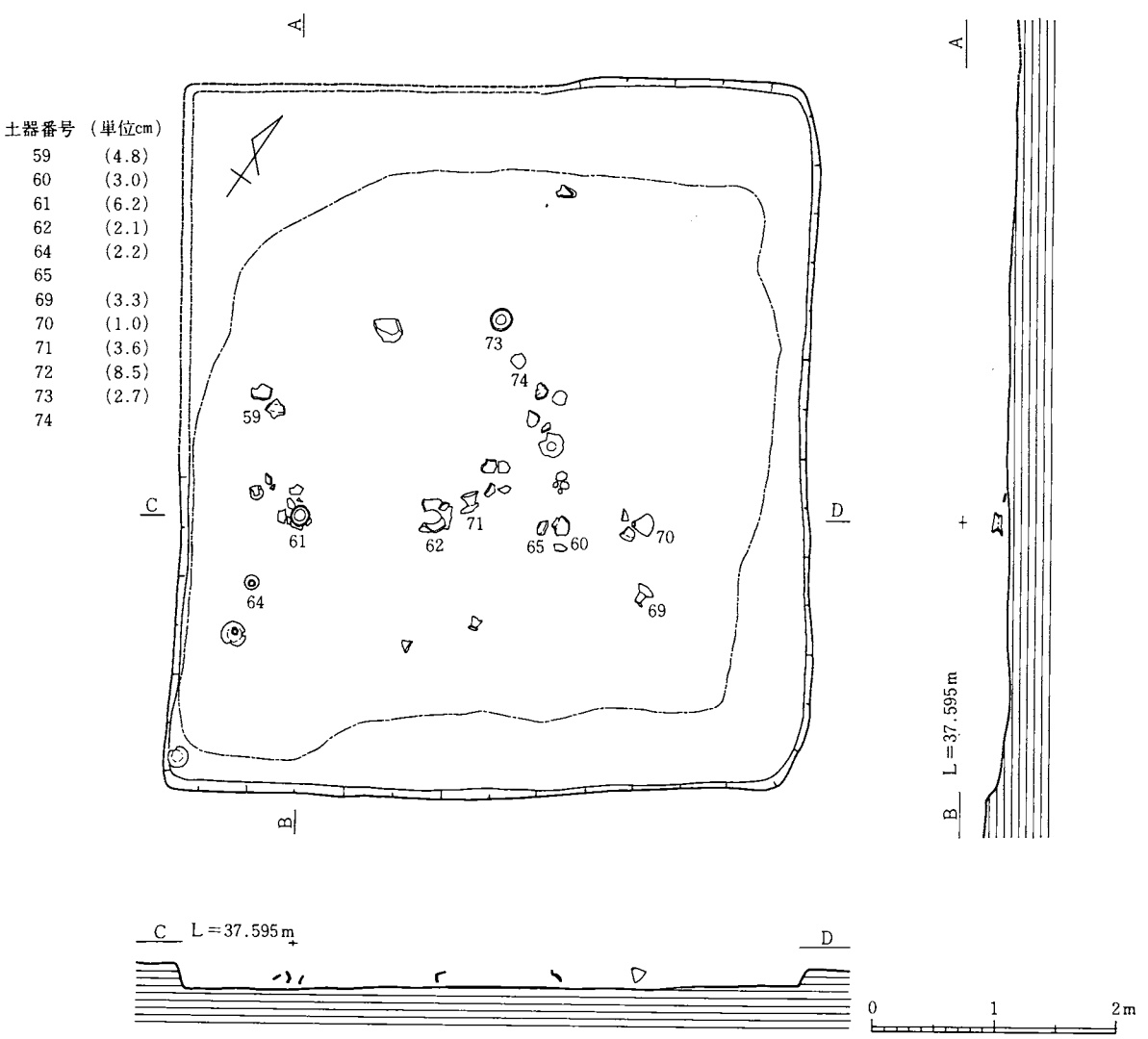
第17図　上の原9号住居址

上の原11号住居址（第18図）

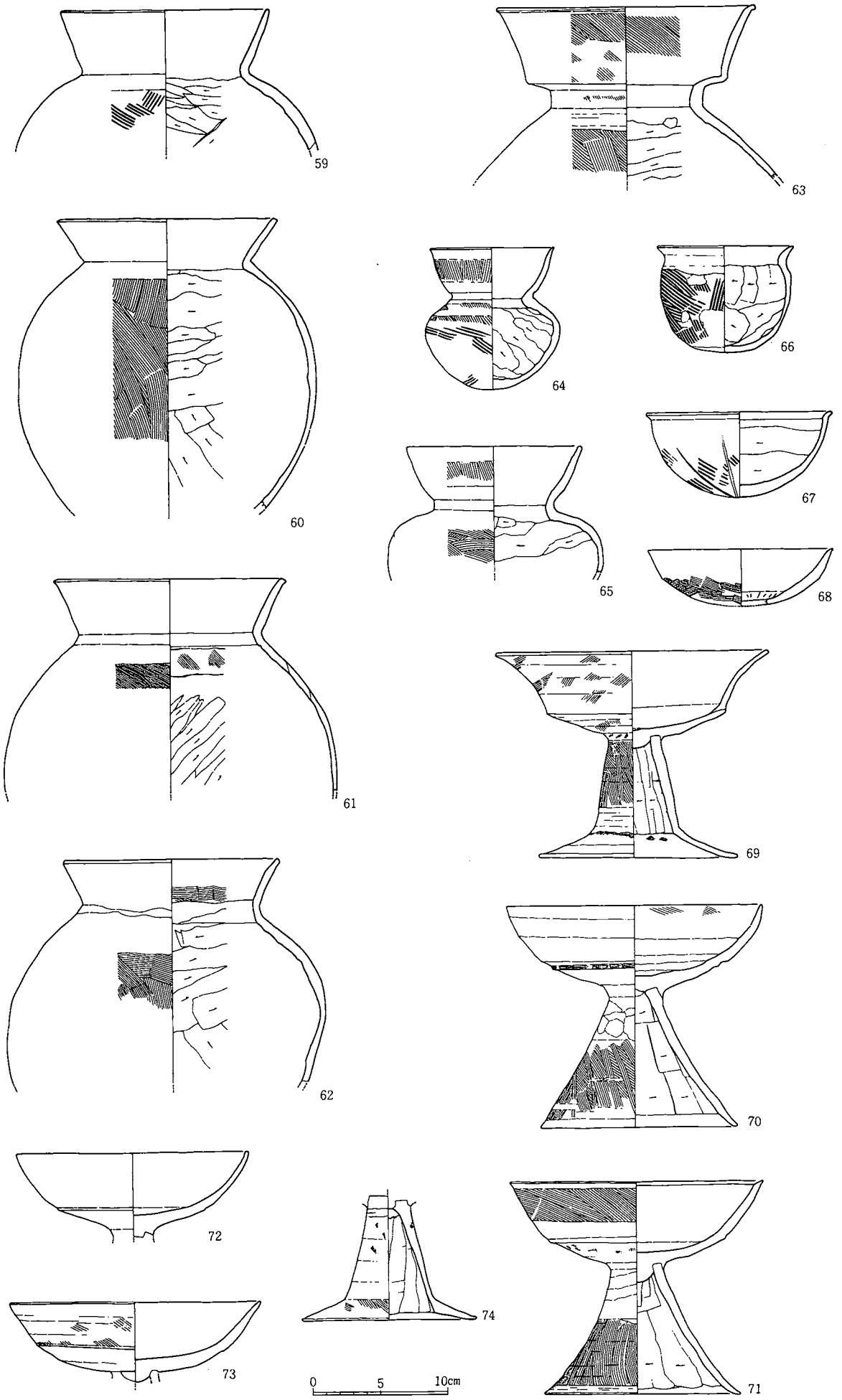
B－3区の中央部に位置している。この一帯は住居址の分布が希薄で，北西部に隣接する10号住居址及び北側の106号住居址，さらに南側約7mの12号住居址は，いずれも竈を有する奈良時代以降の所産である。住居址の北西部隅を中心として，上部から削平され，壁面・床面が失われている。規模は長軸線上で5.82m，短軸（C－D）線上で5.20mの南北に長い方形で，床面積約30m²を測った。長軸方位N－35°－Wである。床面に柱穴は認められなかったが，床中央部を中心に広い範囲に硬化面が残り，特に西壁南寄りでは壁面にまで達している。壁高は南西部隅で最大0.25mで，北西部に移行するにしたがって徐々に浅くなっているが，床面自体はほぼ水平面を保っている。

〔住居址覆土〕（第18図）

住居址プラン確認面で僅かに灰褐色の土層がみられたが，大部分は暗褐色の腐植土層で床面まで充たされていた。出土遺物の多くはこの土層中に含まれていて，床面に密着した状態で出土したものは皆無であった。しかしほとんどの土器は覆土下層にあり，住居址廃絶直後に混入したか，人為的に廃棄されたものであろう。出土土器はすべて土師器で，計22個体分を数えた。これらの内訳は甕5，壺3（うち大型壺1），小型丸底土器4，杯2，高杯7，鉢1であったが，実測可能な12個体分について図示した。



第18図　上の原11号住居址



第19図　上の原11号住居址出土土器

〔出土遺物〕（第19図）

59～62は甕型土器である。59は口縁部が直線的に外反し，端部は丸くおわる。器体外面は磨滅しているが，部分的に粗い刷毛目が残っている。胴部内面は中位で右上がり，頸部にかけては左上がりのヘラ削りで仕上げられている。60～62の口縁部は「くの字」状に外反し，端部は角ばっている。3者とも胴部・底部以下を欠失しているので，全体的な形状は不明であるが，球形に近い胴部であろう。内面の調整は60・62が胴部下半が左上がり，上半が右上がりヘラ削りである。61は胴下半部は不明であるが上半部は前2者とは逆に右上がりのヘラ削りにより仕上げられている。63は複合口縁壺で頸部は短く直立しのち屈折して口縁部は外半気味に立ちあがる。器体外面は刷毛目調整のあと口頸部はヨコナデにより仕上げ，胴部はヨコないし右上がり方向のヘラ削りで仕上げられている。64は小型丸底土器で口径に対して胴部径が僅かに大である。65は中型の壺で頸部は強くくびれ口縁部は内湾気味に立ち上がり，胴部は扁平な球形である。66は小型の鉢型土器で底部は丸底で口縁部は小さく外湾している。本遺跡では極めて出土例の少ない器種である。67・68は杯で，67は半球形の体部で口縁端部で小さく外反している。これに対して68の杯は体部は浅く口縁端部は小さく摘み上げられるだけである。高杯には脚部の形状により2つのタイプのものが出土している。69の杯部は下半部と上半部との境で屈折して上半部は外反し，脚部は柱部と裾部との境が明瞭である。器体外面は刷毛目調整ののちヨコナデを施し，内面は柱状部が右回転のヘラ削りの他は，刷毛目調整ののちヨコナデにより仕上げている。70・71は半球形の杯部に，ラッパ状に大きく開く脚部を有している。内外面の調整・仕上げの手法は69の高杯の場合と同様である。72・73はいずれも脚部を欠失しているが，法量こそ異なるものの70の杯上半部に類似している。又74の高杯脚部は69のタイプに属している。以上2タイプの高杯では杯部と脚部の接合部内面にみられるボタン状突起はそのまま残されている。

上の原14号住居址（第20図）

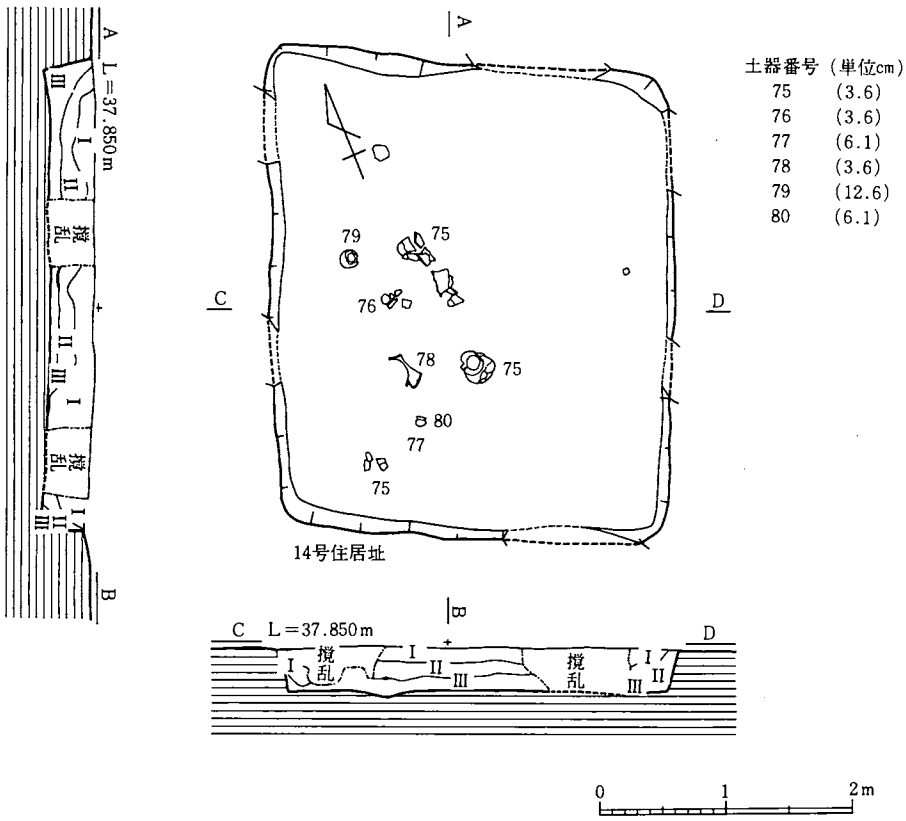
1号住居址の西約7m，A—4区に位置している。住居址の規模は長軸（A—B）線上で3.70m，短軸（C—D）線上で3.24mで，床面積約11.2m²の小型の住居址である。平面プランは南北に長い方形を呈している。壁高は0.25～0.40mを残していて，床面の中央部分が高く周辺部が低くなっている。床面には部分的に硬化したロームブロックが認められたが，散発的で面的な広がりは確認できなかった。また床面には柱穴は皆無で，炉址も設けられていなかった。なお長軸方位はN—23°—Eであった。

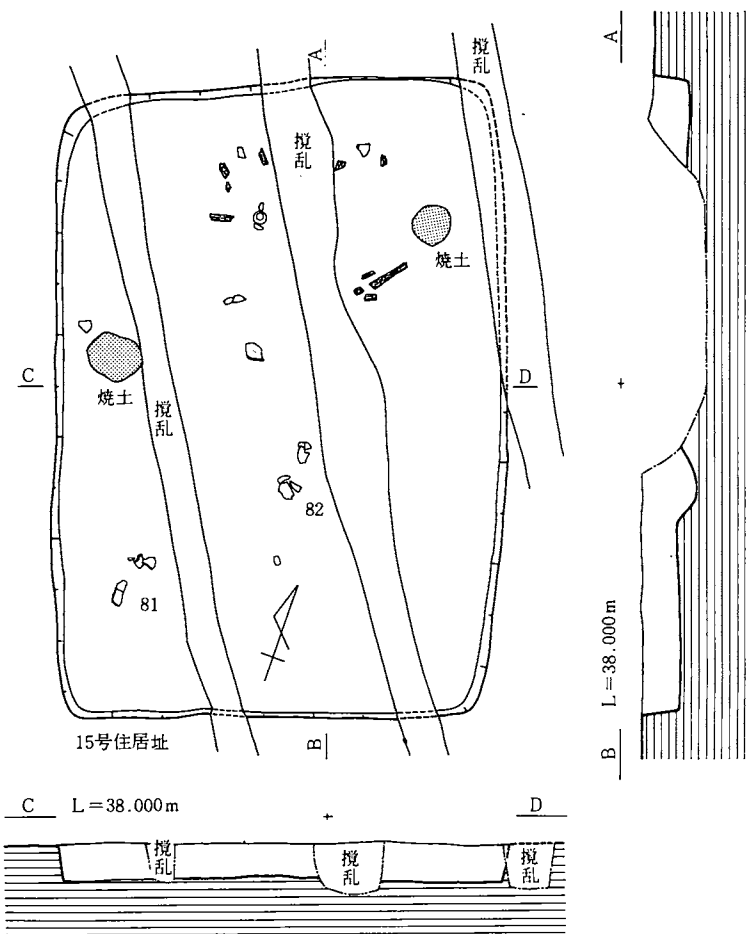
〔住居址覆土〕（第20図）

住居址は床面にまで達する3条の耕作溝により攪乱されていたが，残存していた覆土は互層に堆積した3枚の土層が認められた。上層から順次説明すると，I層は暗褐色の腐植土層で土師器の細片のほか炭化部材の小片や焼土粒などを少量ふくむ。II層は灰褐色の土層で混入物が少なく粘性が強い。III層は床面直上の土層で，色調はII層に類似した灰褐色であるが，炭化物・焼土粒等を多く含んでいる。出土遺物の多くはII層下面からIII層上面に集中して出土している。

〔遺物出土状態〕（第20図）

出土遺物はすべて土師器で，計7個体分であった。このうち床面出土のものはなく，75～78・80はIII層，79はII層中から出土したものである。したがってこれらの土器は住居址廃絶後の一定の期間を経過したのち混入堆積している。これらの土器は大型の破片でまとまった状態で出土していたため，おそらく人為的にしかも一時的に廃棄されたものと考えられる。

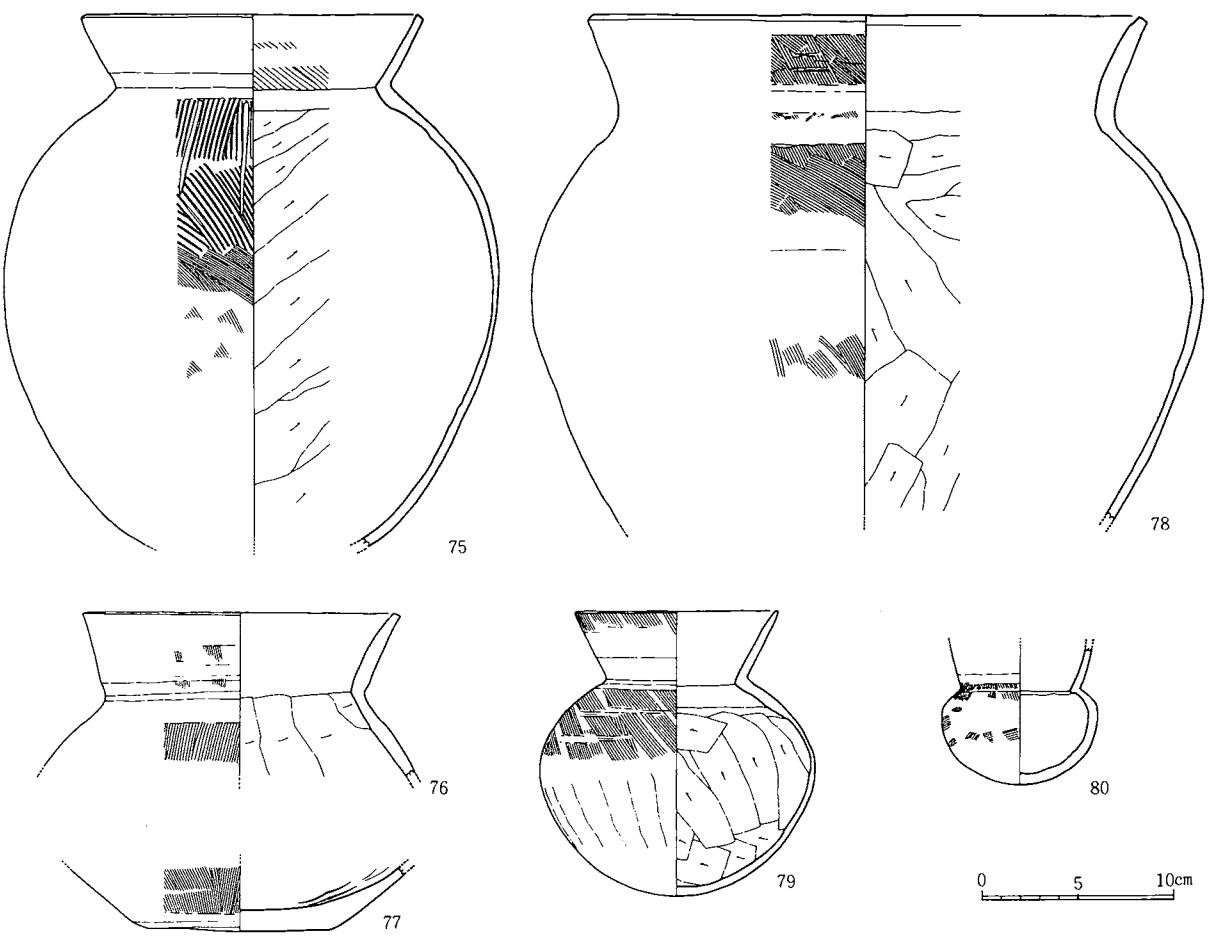




第20図　上の原14・15号住居址

〔出土遺物〕（第21図）

75は底部を欠失するものの器形のほぼ全体を知ることができる大型の破片である。口縁部は直線的に外反し，端部は角ばっている。胴部最大径は中位よりやや上部にあり，底部は扁平な丸底である。口縁部内外面は刷毛目調整ののちヨコナデが施され，胴部内面は右上がりのヘラ削りで仕上げられている。また肩部の外面には刷毛目調整のあとヘラ状工具による「2条の平行線」によるヘラ記号が刻まれていた。76の甕は口頸部の小破片から復原図化したものである。口縁部は外湾気味に立ちあがり，肥厚して端部は角ばっている。器体外面と口縁部内面は刷毛目調整のあとヨコナデを施し，又胴部内面はヨコ方向のヘラ削りで仕上げている。77は甕ないし壺の底部でやや突出気味の平底である。平底は肥厚しているが胴部に移行するにしたがって器壁を減じている。外面は刷毛目調整で内面はヘラ削りで仕上げられている。78は大型の甕で頸部のくびれは弱く口縁部は外湾気味に立ちあがる。器壁は口縁部で著しく肥厚し，端部は角ばっている。黄褐色で粗雑な造りの土器であるが，煮沸の痕跡は認められないので，おそらく貯蔵用の甕であろう。79は扁平な球形胴部の壺で，口縁部は直線的に大きく開く。非常に薄い造りの土器で口縁部外面と胴部外面の一ヶ所に黒斑が認められる。外面および口縁部内面は刷毛目調整ののちヨコナデ，胴部外面下半部と内面はヘラ削りで仕上げている。80は小型丸底土器で口縁端部を欠失しているが，口径と胴径とがほぼ同一のものであろう。



第21図　上の原14号住居址出土土器

上の原15号住居址（第20図）

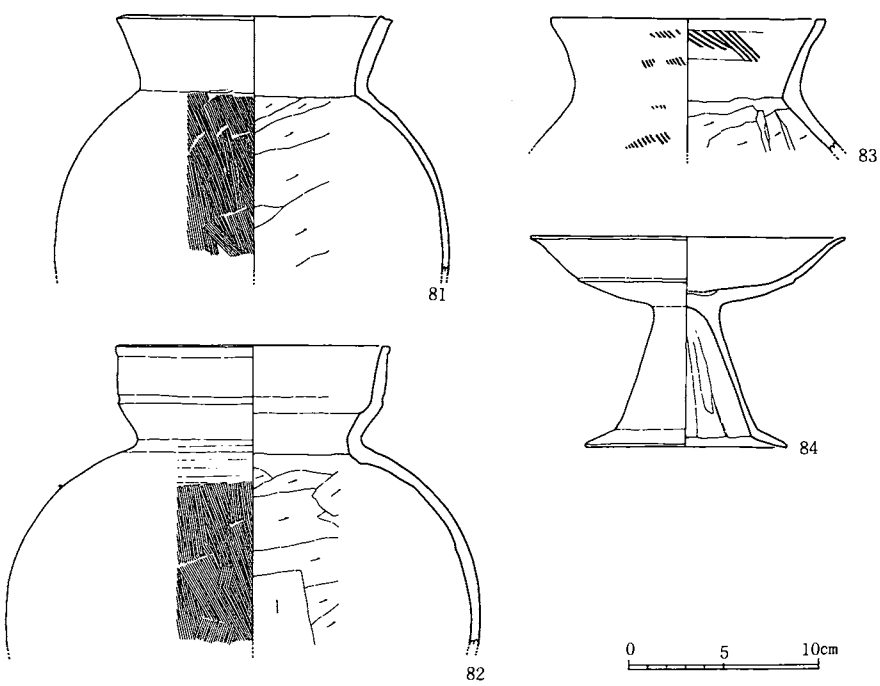
14号住居址の北側に隣接したB—4区に位置している。平面プランは南北に長い長方形で，やはり南北に走る3条の耕作溝により攪乱され，この部分の床面は失われている。規模は長軸（A—B）線上で5.00m，短軸（C—D）線上で3.60m，床面積約16.6m²のやや小型の住居址である。長軸方位はN—20°—Wであった。壁高は四壁とも0.30m前後で平均しているが，床面は北側へ移行するにしたがって低くなっている。壁はほぼ垂直に近い立ち上がりを示していた。床面には柱穴・周溝・炉址は認められず，硬化面も部分的に残る状態であった。また床面の北側を中心に焼土・炭化物を多く含む土層が厚く堆積していて，この土層中に炭化部材片が認められた。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第20図）

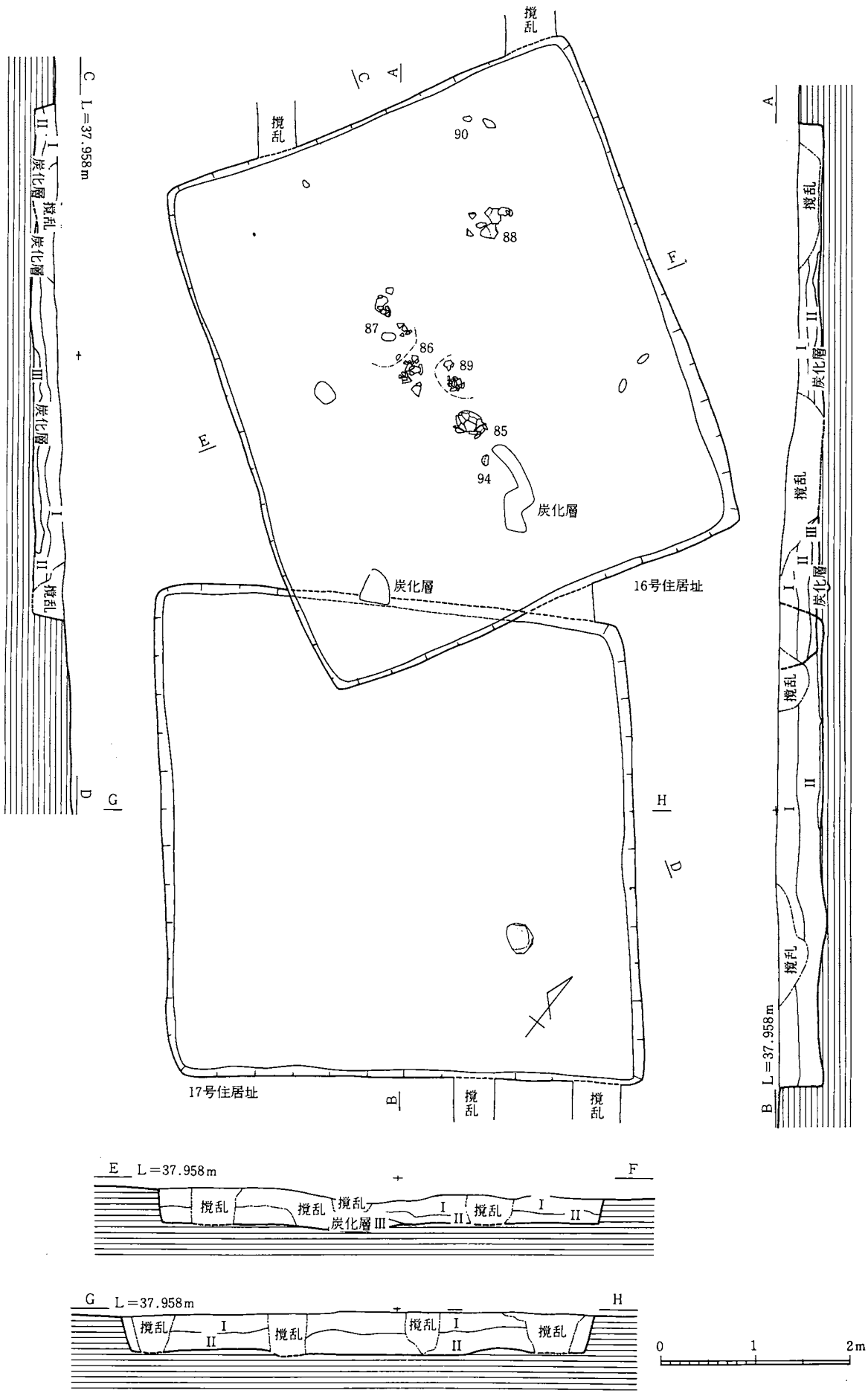
住居址覆土には基本的に上下2枚の土層が堆積していて，上部のⅠ層は暗褐色土層で0.15～0.25mの厚みで堆積していた。Ⅱ層は炭化物・焼土粒等をふくむ床面直上に堆積した灰褐色の腐植土層で，床面の北側では特に炭化物・焼土・炭化部材を多く含んでいる。出土遺物のうち土器は総て土師器で計12個体分であったが，ほとんどがⅠ層下部からⅡ層上部に集中していて，床面出土のものは皆無であった。出土土器のうち図示できたものは4個体で，すべてⅠ層出土のものである。

〔出土遺物〕（第22図）

81～83はいずれも土師器である。81は胴部中位以下を欠失しているが，球形に近い胴部に外湾する口縁部は次第に肥厚し，端部は角ばっている。口縁部を除くと器壁は非常に薄く造られている。82は胴部は球形で頸部は強くくびれ，口縁部には段を有している。83は口頸部の小破片で，肩部はややなで肩で頸部は「くの字」状に屈折している。器壁も薄く，堅い焼きあがりの土器であるが，器面の調整・仕上げの手法は粗雑である。84は小型の高杯で，杯部は浅く脚部はラッパ状に開き裾部で小さく外方へ屈曲している。胎土は極めてちみつで黄白色を呈し，全体に薄い造りで，仕上げも丁寧である。



第22図　上の原15号住居址出土土器



第23図　上の原16・17号住居址

上の原16・17号住居址（第23図）

16・17号住居址はB—4区にあり，この西側に隣接して14・15号住居址，東側に18・19号住居址が位置している。16・17号住居址は一部重複していて，17号住居址が埋没したのち16号住居址が構築されたことが，断面観察（A—Bsection）により確かめられた。

16号住居址の平面プランは，長軸方位をN—60°—Wにとる長方形である。規模は長軸（C—D）線上で5.45m，短軸（E—F）線上で4.78m，床面積約26.5m²の中規模の住居址である。壁高は北西部で著しく削平されて浅くなっているが，17号住居址との重複部分では概ね0.40mを残している。床面には柱穴・炉址・周溝などは認められなかったが，床のほぼ全面に硬く踏みしめられた硬化面が確認できた。

17号住居址の平面プランは，長軸方位をN—38°—Wにとり，北西辺がやや短いがほぼ正方形を呈している。規模は長軸（A—B）線上で約5.04m，短軸（G—H）線上で5.06m，床面積約23.3m²を測った。壁高は0.40～0.50mを残し，壁面の最下部では10数cmローム層を掘り下げている。床面には16号住居址の場合と同様に柱穴・炉址・周溝等は認められなかったが，硬く踏みしめられた硬化面が壁面にまで広がっていた。

〔住居址覆土〕（第23図）

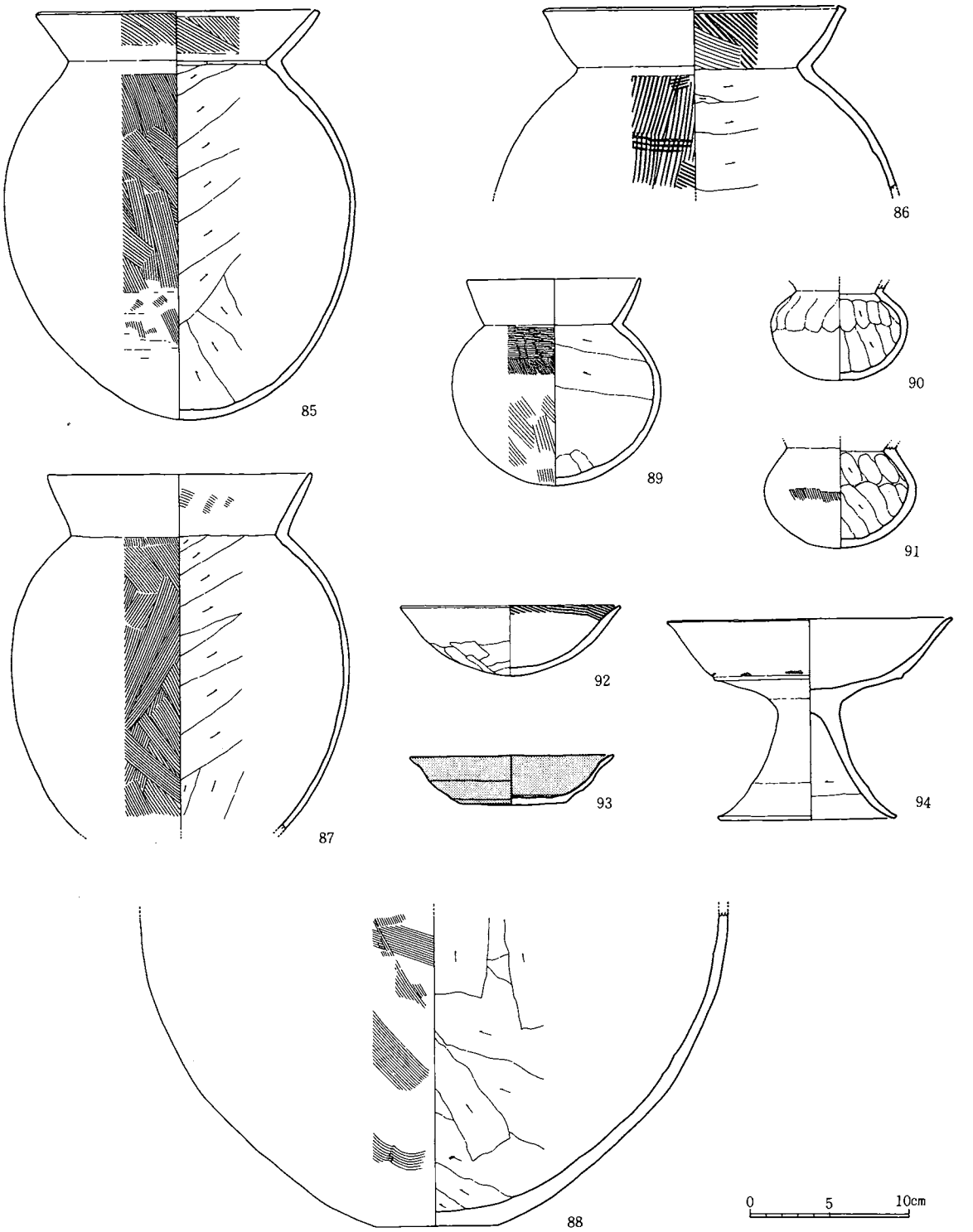
16・17号住居址の覆土はいずれも3枚の土層からなっていた。I層は暗褐色，II層は灰褐色の土層であるが，両者を明確に分離することは困難で，徐々に変化している。但し遺物はほとんどII層中にあり，I層には含まれていない。III層は炭化物を多量に含む黒褐色土層で，床面に直接堆積した土層であるが，床全体には認められない。

〔遺物出土状態〕（第23図）

16号住居址には，計13個体分の土器が出土し，このうち9個体分を図示した。85～92の土器はII層下部からIII層中に，93・94はI層から出土したものである。他の4個体もすべてII層中から出土したものである。これらの土器のうち85～88の4個体の甕は現位置で土圧で押しつぶされた状態であり，住居の廃棄時に放棄されたものと考えられる。17号住居址はI・II層に土師器杯及び高杯の小破片が出土したが，このうち2個体を図示した。なお床面の中央から西隅よりには，石皿状の砂岩角れきが置かれていた。角れきの上面は研磨され，周囲は剝離調整されていた。一種の調理台として使用されていたのではなかろうか。

〔出土遺物〕（第24図・25図）

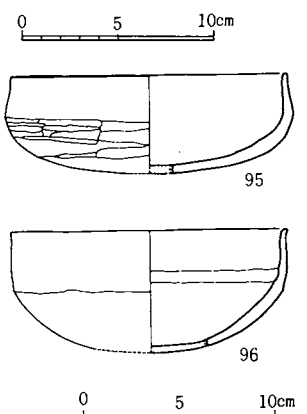
85は長胴気味の胴部で，胴部の最大径は中位より上部にあり，底部はやや尖り気味の丸底である。口縁部は「くの字」状に屈曲し，わずかに内湾気味に開いている。内外面は刷毛目調整のあと口縁部内外面をヨコナデで仕上げ，底部内面は左上がり，胴部から頸部は右上がりのヘラ削りで仕上げている。全体に薄い造りの土器である。86は胴部以下を欠失している。「くの字」状の頸部から口縁部は内湾気味に立ちあがり，端部で内方に小さくつまみ出されている。肩部外面にはタタキ目が残されている。87の甕も「くの字」状の頸部で，口縁部は直線的に立ち上がり端部は薄くなっている。内外面は刷毛目調整のあと口縁部内外面をヨコナデで仕上げ，底部内面はタテに近い右上がり方向のヘラ削り，胴部は右上がりのヘラ削りで仕上げている。85・86の甕と同様薄い造りの土器である。88は大型壺の胴部下半部の破片で，平底である。器壁は底部で厚く，上部に移行するにつれ薄くなっている。外面は刷毛目調整，内面は左上がりのヘラ削りで仕上げている。89は小型の壺で，胴部は球形で口縁部は短く内湾気味に立ちあがる。90・91は小型丸底土器で，いずれも口縁部を欠失しているために高径比率は不明である。92・93は土師器杯で，93は内外面に赤色顔料を塗布され



第24図　上の原16号住居址出土土器

た奈良時代以降の土器で住居址の埋没過程で混入したものであろう。92は扁平な半球形状で，底部はやや尖り気味である。94は土師器高杯で杯上半部と下半部の接合部で段をなし，上半部は大きく開き杯全体は浅くなっている。脚部はラッパ状に開き裾部では，内面に稜をもちこの部分からさらに外方へ開いている。

17号住居址の出土土器は，いずれも土師器杯である。95・96とも，浅い体部で中位で屈折し口縁部が内傾して立ち上がるタイプの杯である。内外面ともヘラ削り調整され，さらに口縁部内外面をヨコナデで仕上げている。両者



第25図　上の原17号住居址出土土器

とも胎土がちみつで丁寧な造りの土器である。いずれも本住居址の年代をしめすものではなく，埋没過程で混入したものである。

上の原18号住居址（第26図）

15～17･19号住居址とともにB－4区に位置している。規模は長軸（A－B）線上で5.42m，短軸（C－D）線上で4.22m，床面積約21.6m²の中規模の住居址である。長軸･短軸のSectionはプランに正確に設定されていないので，図上で引き直すと，長軸方位はN－33°－Eであった。平面プランは四隅がやや丸味を持つがほぼ整った長方形である。壁高は平均0.25mで，平坦な地山面に構築されている。床面は中心部でわずかに高くなっている部分があるが，全体的にはほぼフラットである。また床面には柱穴・炉址・周溝等の施設は認められなかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第26図）

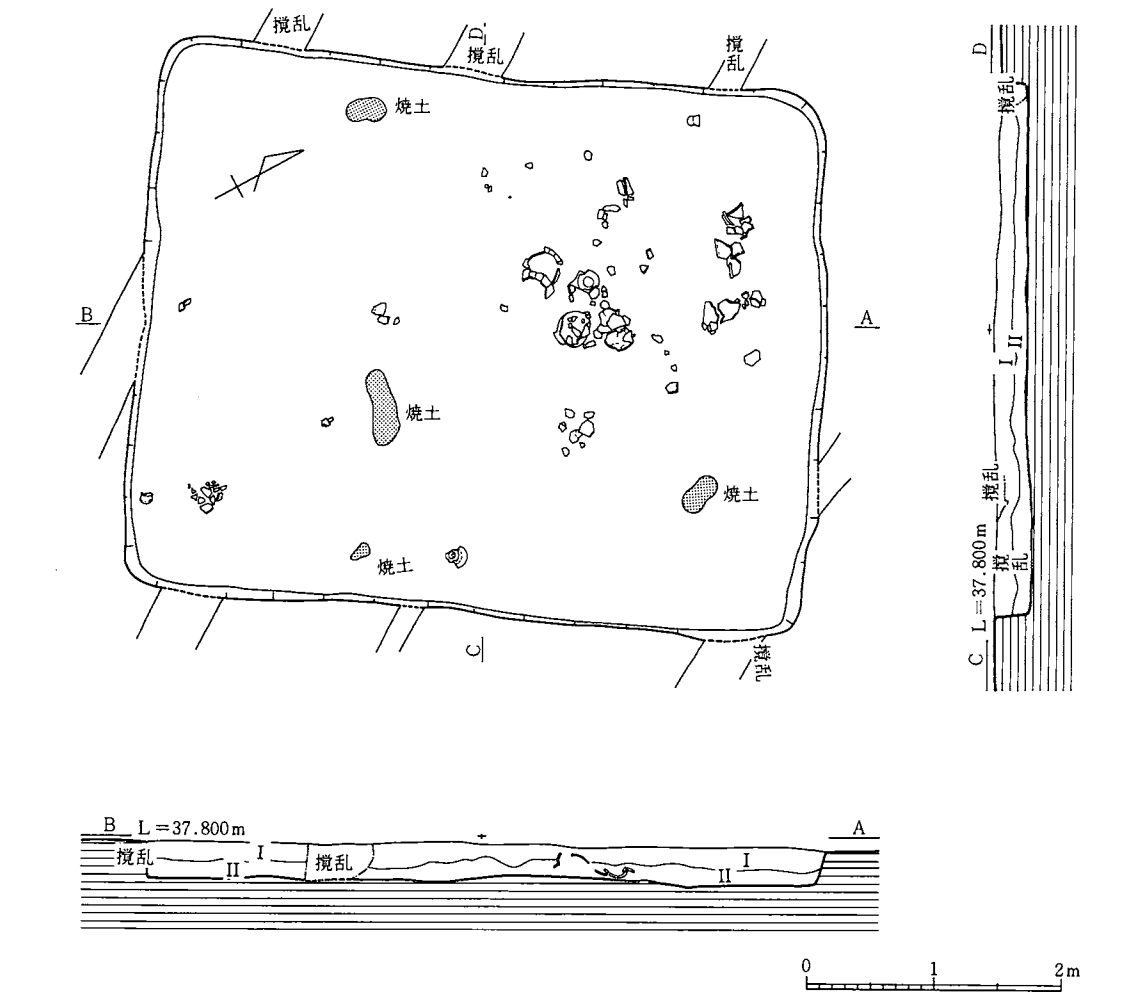
住居址覆土は上下2層からなり，自然な埋没状態を示している。Ⅰ層は暗褐色で樹根が多く混入している。遺物等は認められない。Ⅱ層は黒褐色を呈し，炭化物・焼土粒を多く含む腐植土層である。出土遺物は比較的多く，計20個体以上を数えたが，これらのほとんどはⅡ層ないし床面に密着した状態で出土したものである。またⅡ層ないし床面出土の土器でも，上面はⅠ層中にあるものも多くみられた。おそらくⅠ・Ⅱ層は著しい時間差なく堆積したものであろう。更に土器のうち下層の土器ほどまとまった状態で出土していて住居址廃棄時に置き去られたものと考えられる。

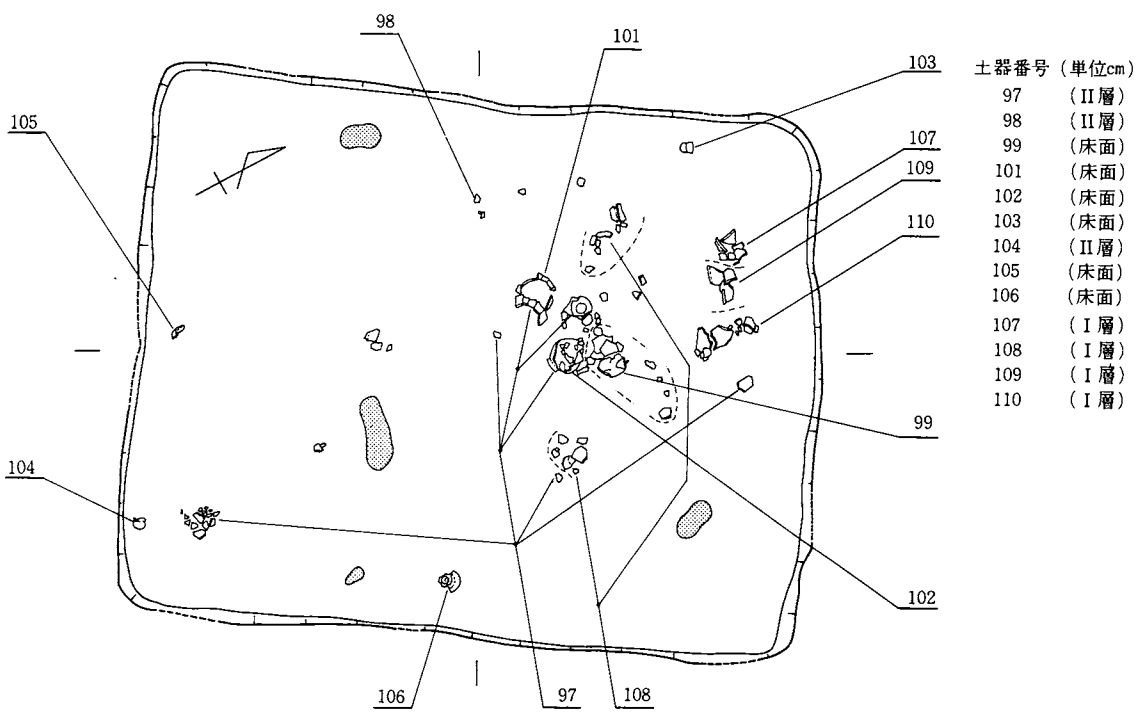
〔出土遺物〕（第27・28図）

甕は大別して2種のものがある。まず口縁部が内湾気味に立ちあがり，胴部が球形を呈するもの（97～99）と長胴気味の胴部で口縁部がラッパ状に開くもの（100・101）からなっている。また前者では78のように大型で，通常貯蔵用と考えられるものも認められる。102は所謂複合口縁を有する壺であるが，口縁部の段は不明瞭で全体的な形態も甕の場合と大きな差はない。97～101の甕および102の壺とも内外面の調整・仕上げの手法は定型化しているが，細部では外面の刷毛目の単位や内面のヘラ削りの方向が個体によって異なっている。とくにヘラ削りの方向では右上がりを基調とするもの（98・99・101・102）と左上がりを基調とするもの（97・98）とが認められる。103～105は小型丸底土器である。103は口径が胴径に対して大きく，105は口径が胴径に等しいが，104では口径が胴径に対して小さくしかも口縁部が著しく低くなっている。前2個体と後の1個体との間には形式的な差があり，このことは住居址内における出土層位とも矛盾しない。106は高杯で杯部は浅く，脚部は柱状部と裾部との境が明瞭であるが，柱状部は下部で開き気味となっている。

107～110の4個体の土器はⅠ層上面から出土したもので，住居址の埋没過程で流入したものである。107の甕は頸部のくびれは弱く口縁部は外湾して大きく開く。109の甕は胴部の脹らみはほとんどなく，口縁部は小さく外湾し，底部は丸底気味となる。108は甕か壺かの区別は困難であるが，頸部は強くくびれ口縁部は直線的に立ち上がり端部で小さく外湾する。110は高杯の杯部破片で杯部は浅く，106の高杯によく類似している。

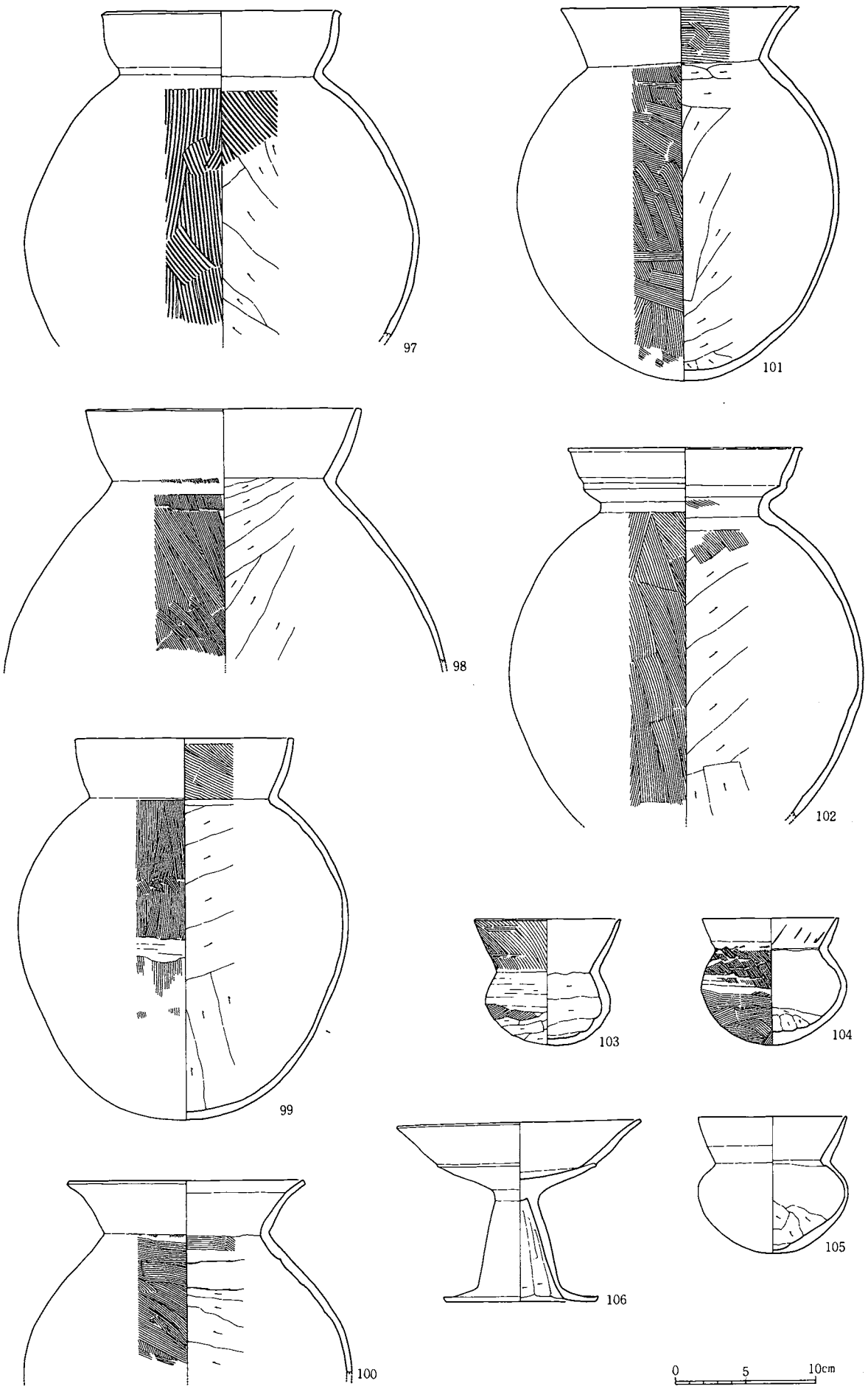
以上13個体の土器のうち床面出土の土器（99～103・105・106）の6個体は本住居址に確実に伴う土器群であり，住居の使用時期を決定する資料となりえるが，これらの土器に対して上層出土の土器のなかには形式的に差の認められないものがある。おそらく住居が埋没するのにさほどの時間を要しなかったのではなかろうかと考えられる。



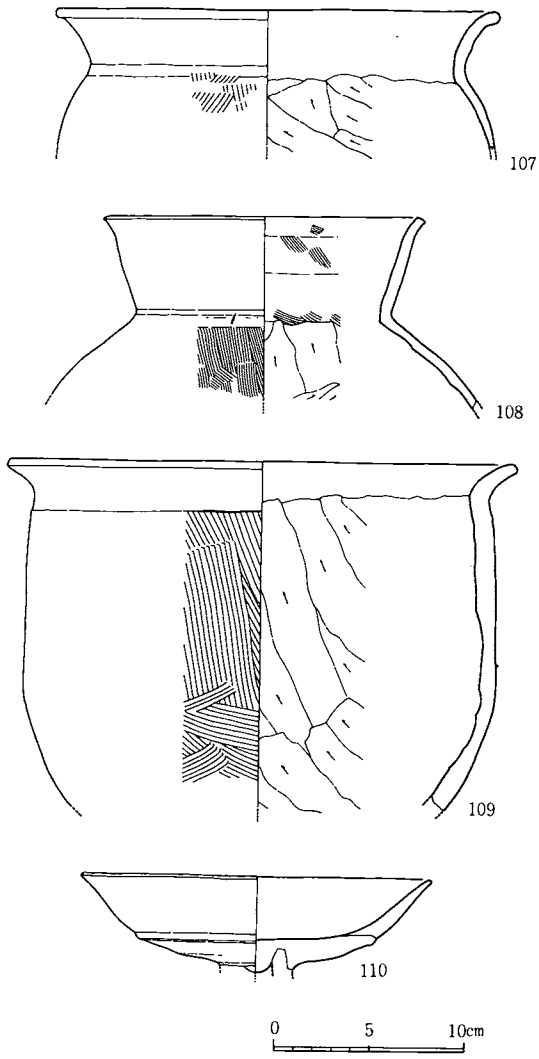


土器番号	（単位cm）
97	（II層）
98	（II層）
99	（床面）
101	（床面）
102	（床面）
103	（床面）
104	（II層）
105	（床面）
106	（床面）
107	（I層）
108	（I層）
109	（I層）
110	（I層）

第26図　上の原18号住居址



第27図　上の原18号住居址出土土器　その1



第28図　上の原18号住居址出土土器　その2

上の原19号住居址（第29図）

15～18号住居址と同じくB—4区にあり，一部B—5区に及んでいる。規模は長軸(C—D)線上で5.37m，短軸(A—B)線上で4.50m，床面積約22.5m²のやや小規模な住居址である。平面プランは南辺と西辺がやや長いが，四隅が角ばった整美な長方形である。床面はほぼ全面にわたって硬化面がみとめられ，中央部のやや北西部よりに炉址が設けられている。炉址の一部に重複するように浅い柱穴状の落ち込みが2個検出されていた。炉址および2個の落ち込み内は炭化物を含む焼土が厚く堆積していた。また床面の北東部にも径約0.5m，深さ0.53mの柱穴状の掘り込みがみられた。この内部には完形の甕（土器番号115)が横転した状態で出土した。土器は掘り込みの底から0.22m上部に出土した。床面には以上の施設以外は認められなかった。なお，長軸方位はN—48°—Eであった。

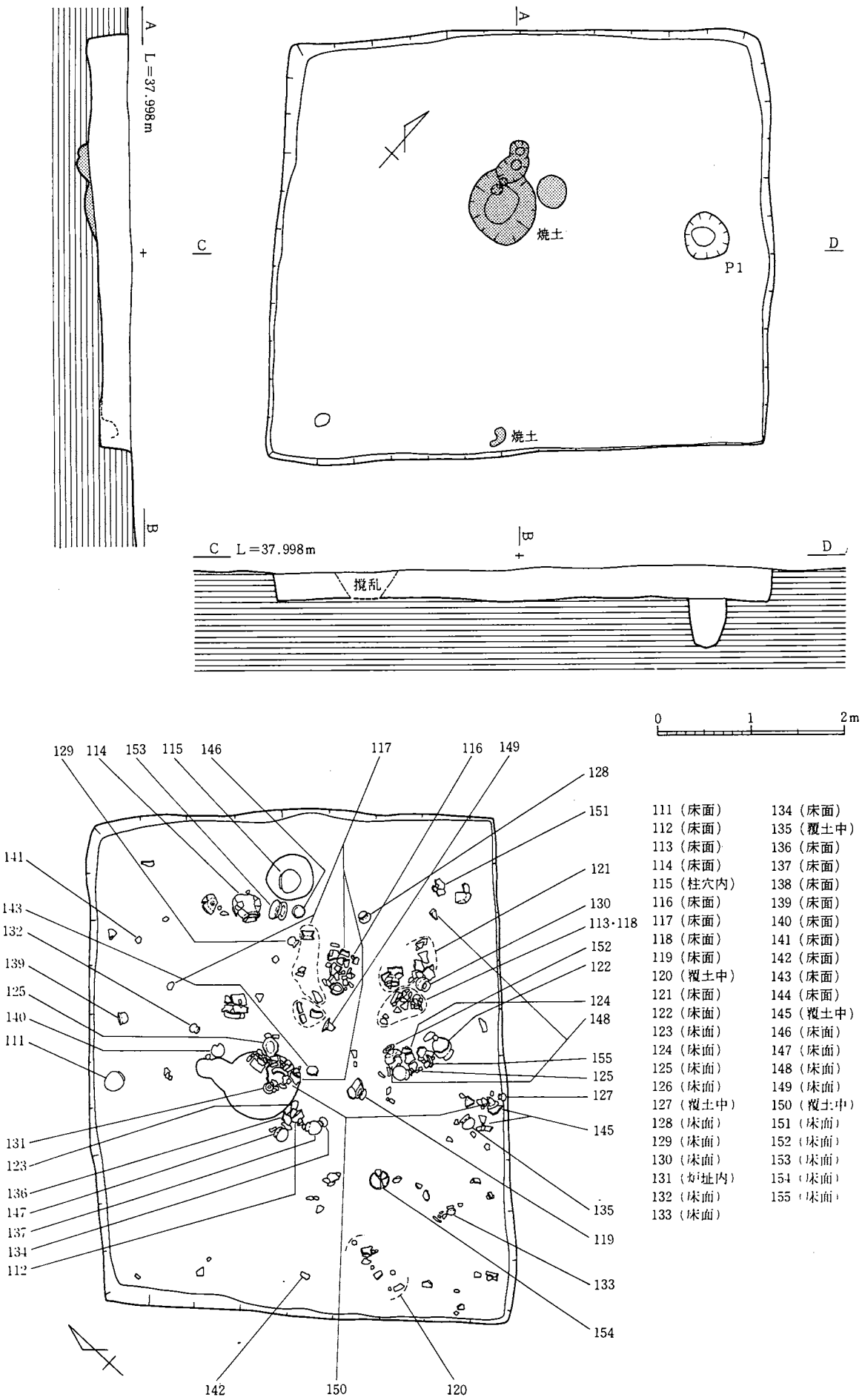
〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第29図）

住居址覆土はプラン確認面から床面まで同一層で分層することはできなかった。床面直上では焼土・炭化物混じりの灰褐色土層が薄く堆積し，上層にも量的には少ないものの同様の灰褐色土層が厚く堆積していた。

出土遺物は弥生式土器・磨石（縄文期）など夾雑物の混入もみられるが，その他はすべて土師器である。出土土器の総数は50個体以上におよぶが，これらの多くが床面出土のものである。また出土土器の大半は完形か完形に近いものであり，住居址の使用時に何等かの理由で放棄され，生活用具を持ち出さないままに埋没したものであろう。このような出土例は本遺跡の住居址の中でも，極めて希有な例で，第29図に示した床面出土の39個体の土器は，同一時期の一括資料と考えられる。

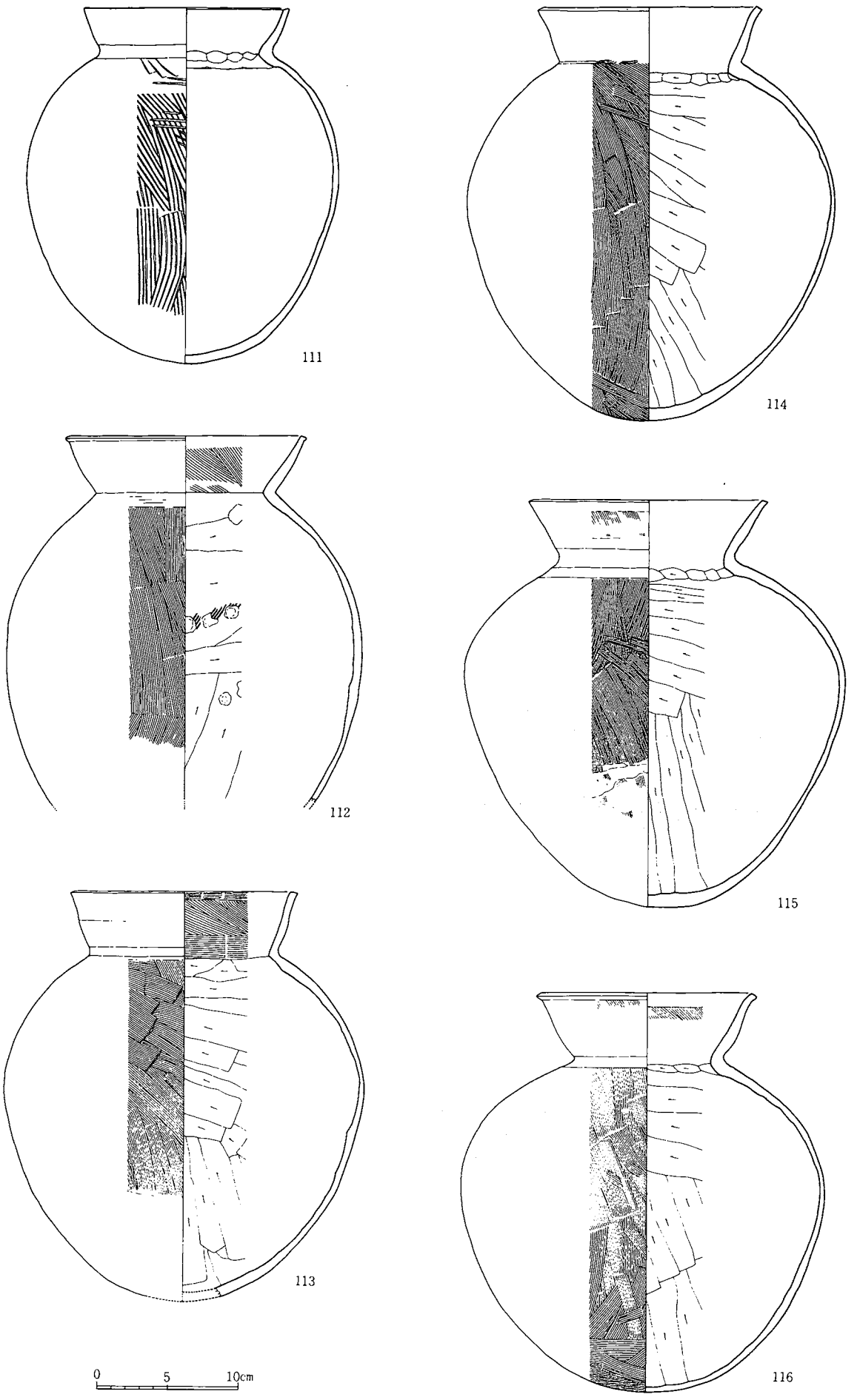
〔出土遺物〕（第30～33図）

前述したように出土土器の総数は計50個体以上に及ぶが，これらの内床面出土の総てと覆土中出土の一部をふくむ45個体を図示した。また床面出土の39個体の土器の器種ごとの内訳は，甕12，大型壺2，小型壺2，小型丸底土器7，杯6，高杯8，鉢3であった。111～123は甕で出土土器のなかで最も数が多い器種である。甕は口縁部および胴部の形態によっていくつかのグループにわけることができるが，細部の変化を個体差と見なせば，概ね4つのグループに類別することができる。a類＝口縁部は内湾気味に立ちあがり，胴部はやや長胴気味であるが，胴部最大径は中位にある。111・112がこの類に属している。b類＝口縁部は内湾気味に立ち上がるが，端部で小さく外反する。胴部はa類と同様のものと，肩部が強く張ったものとがある。前者は113・114などで，後者は115・116などである。c類＝口縁部は外湾して大きく開き，胴部は強く張り頸部は強くくびれている。120・121がこの類に属している。さらにd類＝口縁部内面の中程に段をもつ，特殊な甕（122）がある。また成形・仕上げ手法が著しく粗雑な甕（123）などもみられる。これらの甕の調整・仕上

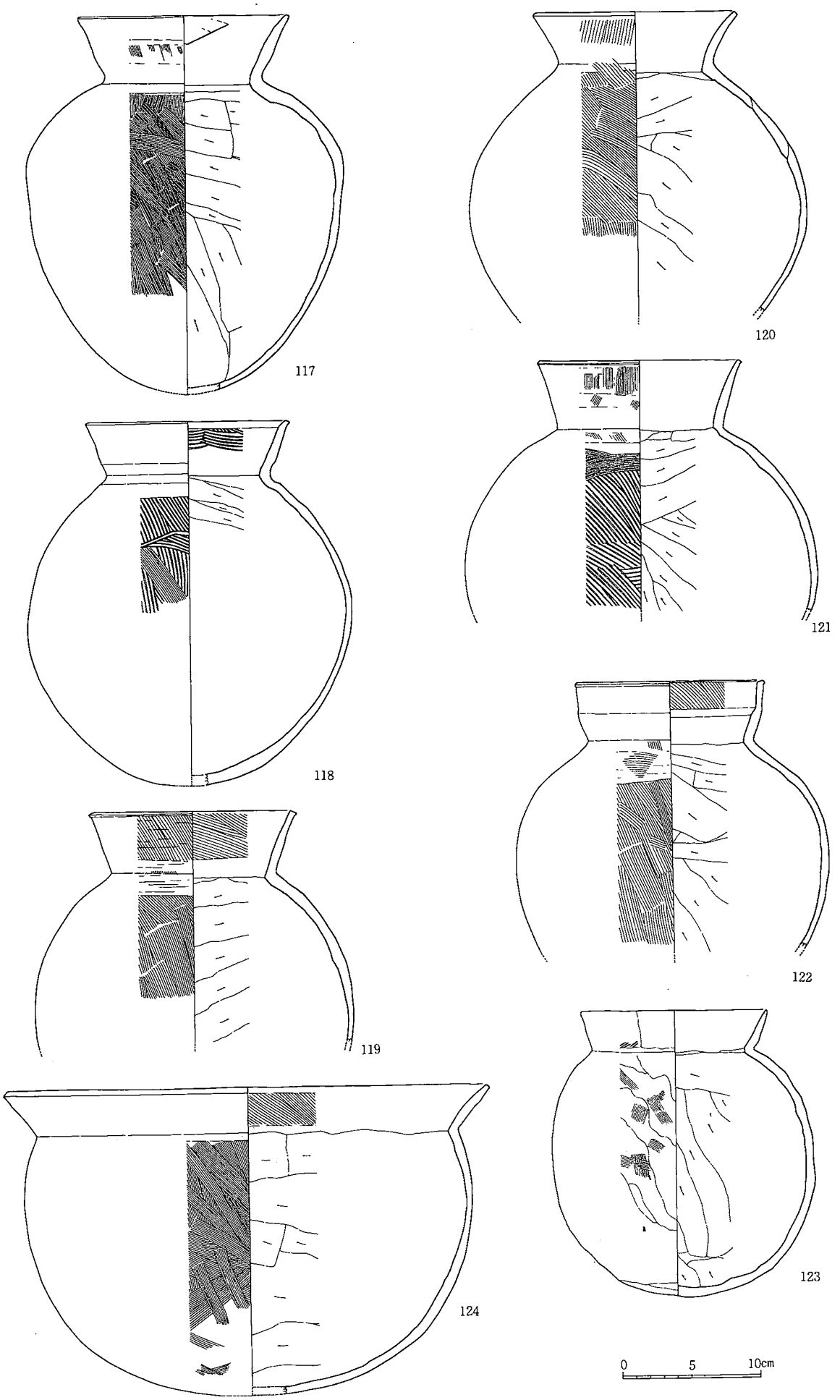


111（床面）	134（床面）
112（床面）	135（覆土中）
113（床面）	136（床面）
114（床面）	137（床面）
115（柱穴内）	138（床面）
116（床面）	139（床面）
117（床面）	140（床面）
118（床面）	141（床面）
119（床面）	142（床面）
120（覆土中）	143（床面）
121（床面）	144（床面）
122（床面）	145（覆土中）
123（床面）	146（床面）
124（床面）	147（床面）
125（床面）	148（床面）
126（床面）	149（床面）
127（覆土中）	150（覆土中）
128（床面）	151（床面）
129（床面）	152（床面）
130（床面）	153（床面）
131（炉址内）	154（床面）
132（床面）	155（床面）
133（床面）	

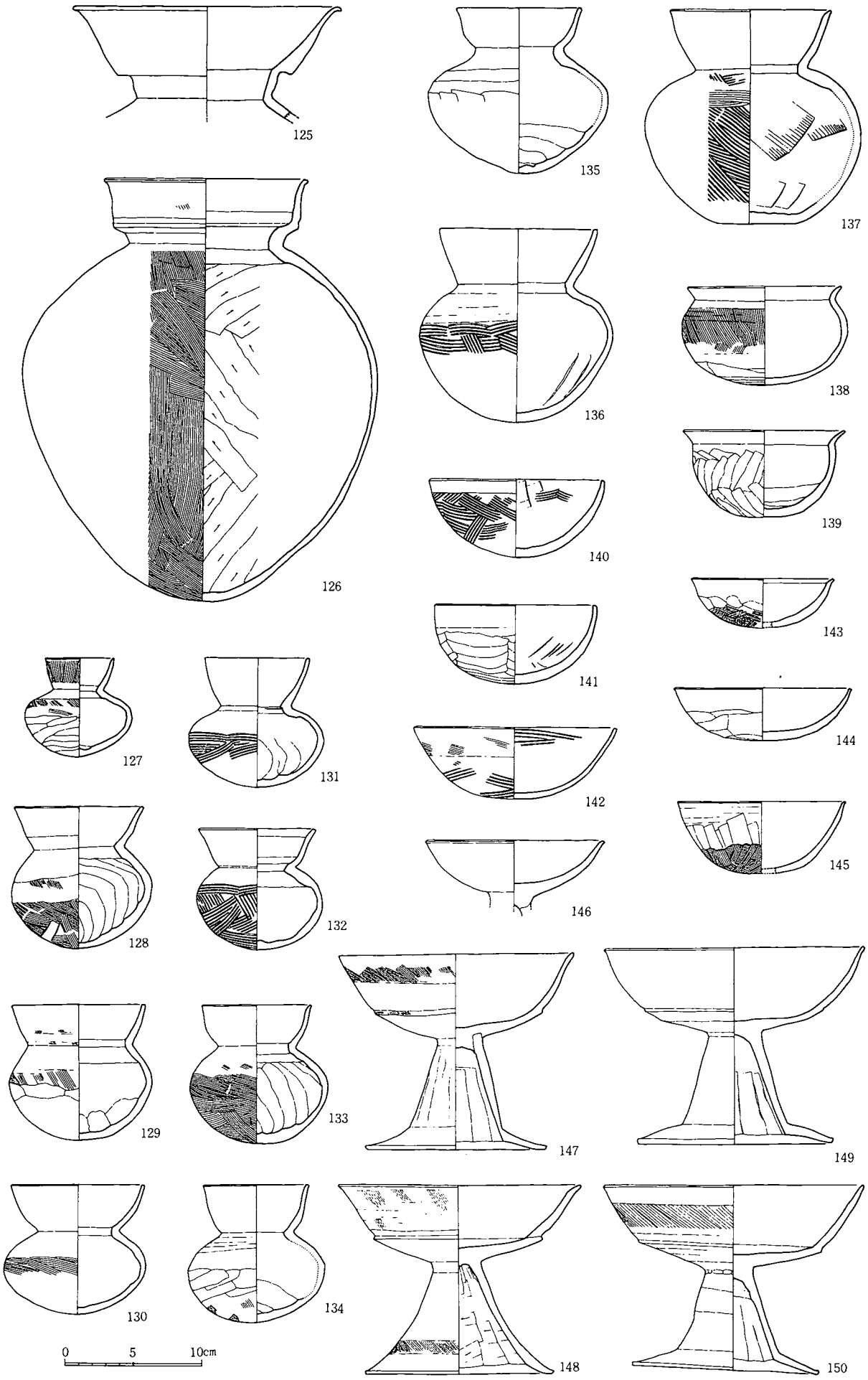
第29図　上の原19号住居址



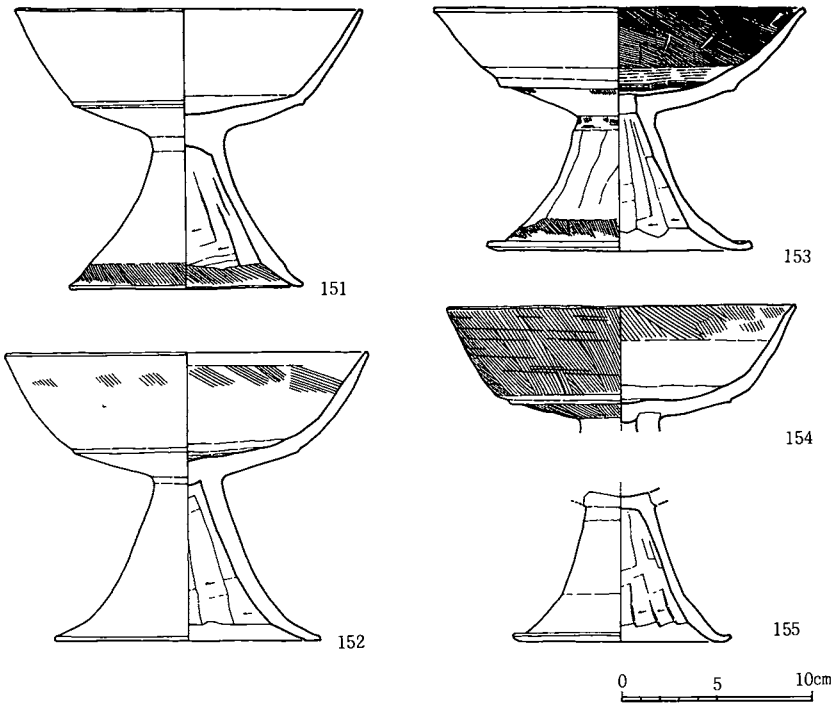
第30図　上の原19号住居址出土土器　その1



第31図　上の原19号住居址出土土器　その２



第32図　上の原19号住居址出土土器　その３

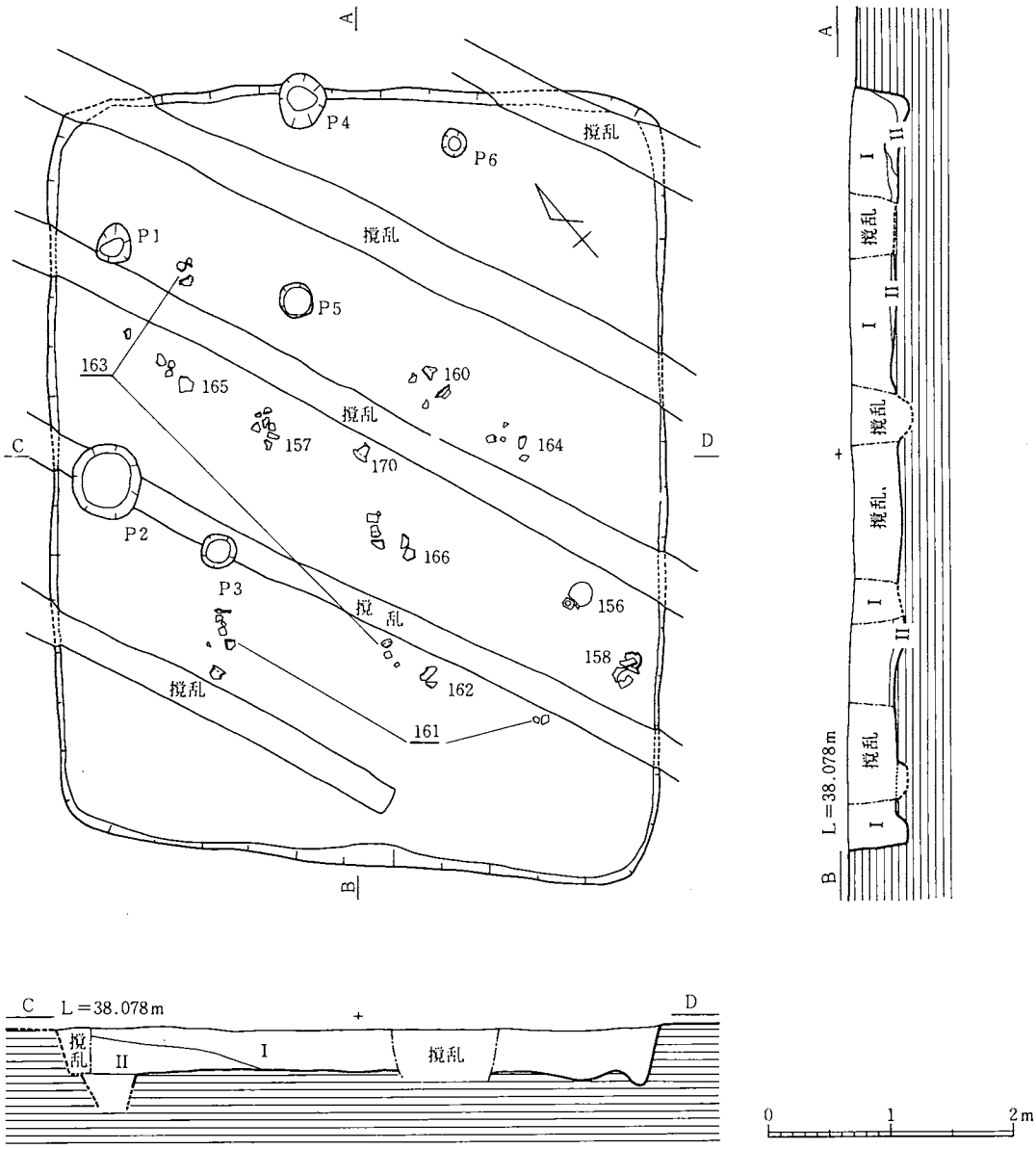


第33図　上の原19号住居址出土土器　その4

げ手法は基本的には定型化しているが，外面の刷毛目の単位や内面のヘラ削りの方向は個体差が大きい。124は大型の鉢である。体部は扁平な半球形状で，口縁部は大きく外反する。壺には大型・中型の二者と所謂小型丸底土器がある。大型の壺は2個体出土していて，いずれも複合口縁壺である。125は口頸部の小破片で頸部は外反して立ち上がり，明瞭な段を有している。さらに口縁部は大きく開いている。126は頸部以下は前述した甕c類のそれとよく類似しているが，頸部は強くくびれ明瞭な段を有している。段から上部は直立気味に立ち上がり，端部で小さく外反している。136・137は中型の壺である。口縁部は内湾気味に立ち上がり胴部は球形に近い，底部は136は丸底，137は平底である。127～135は小型丸底土器で口径が胴部径に対して小さいものに限られている。外面の調整は刷毛目ないしヘラ削りが施され，内面は指頭による削りである。138・139は小型の鉢か杯であろう。138の体部は偏平で頸部はくびれ口縁部は小さく外反する。139も半球形の体部に小さく外反する口縁部を有する。底部は安定した平底気味の丸底である。140～145は杯で，いずれも半球形の体部に丸底のものである。146～155は高杯で，大別して4種がある。まず脚部の形状により，a類＝脚は柱状部と裾部との境が明瞭なもの。しかし柱状部は末拡がり気味のものにかぎられている。b類＝脚部がラッパ状に開くものである。またc類＝小型で杯部一体成形されたものである。さらにb類の高杯で杯部から脚部を穿孔して器台状にしたd類がある。a類は147・149・150，b類は148・151・152・155，c類は146，d類は153である。

上の原20号住居址（第34図）

B－5区とC－5区との中間に位置し，30号住居址（弥生時代中期）と重複している。規模は長軸（A－B）線上で6.27m，短軸（C－D）線上で5.06m，床面積約30.3m²のやや大型の住居址である。平面プランは南辺と東辺が僅かに長いが，四隅が丸みをおびた整美な長方形である。床面には部分的に踏み固められた硬化面が認められ，計6個の柱穴を検出したが，配列は不規則である。その他炉址等の施設は認められなかった。なお長軸方位はN－41°－Eであった。



第34図　上の原20号住居址

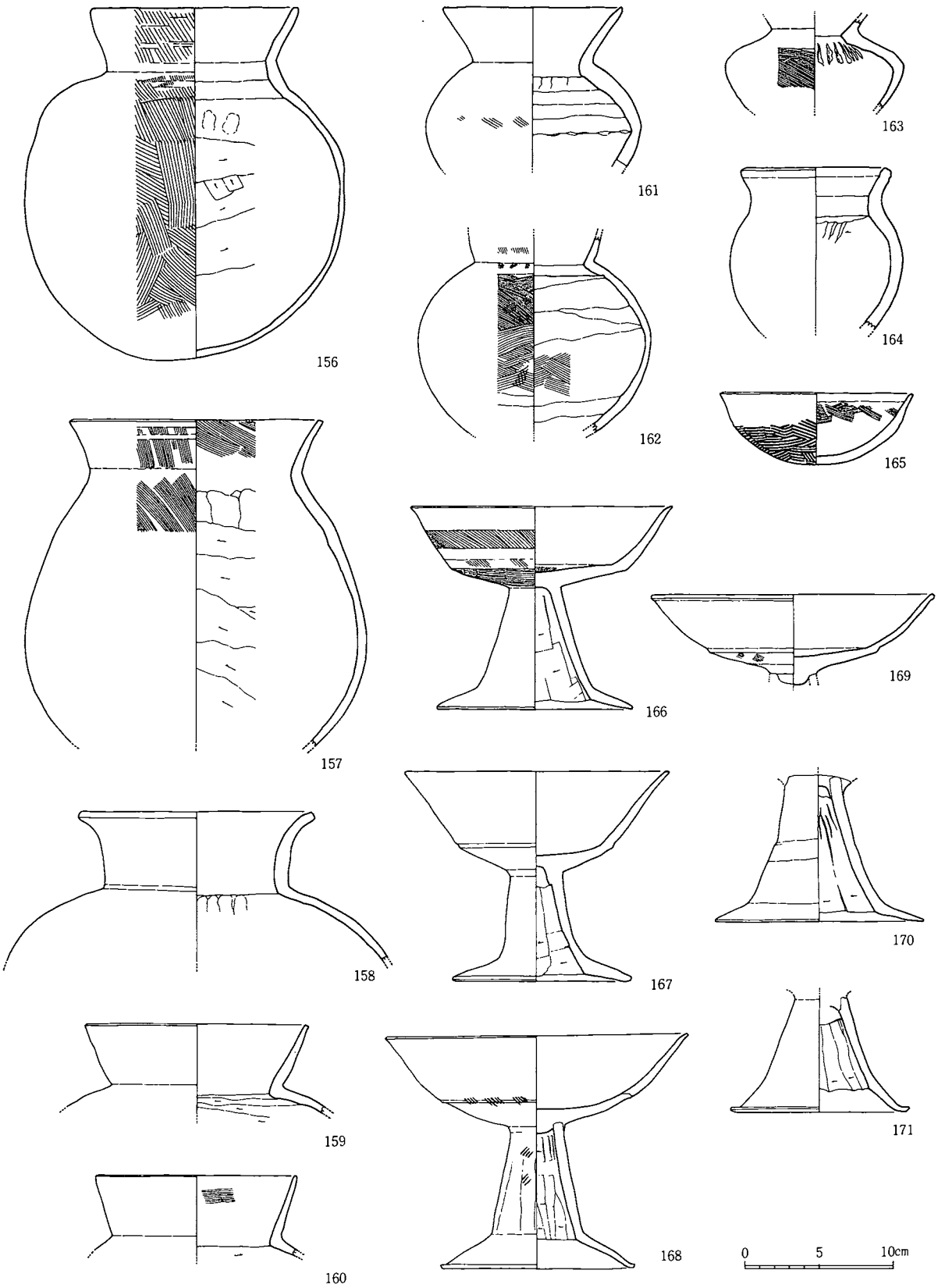
〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第34図）

住居址覆土は上下2層からなり，上部のⅠ層は暗褐色の土層で，炭化物や焼土粒を含んでいる。Ⅰ層は住居の中央部では床面に直接堆積している。Ⅱ層は床面に薄く堆積した腐植土層で炭化物・焼土粒を多くふくんでいる。出土遺物はすべて土師器で，このうち156～158は床面に密着し，他の159～171はすべてⅠ層出土のものである。

〔出土遺物〕（第35図）

出土土器の量は多く，総数80個体以上に及ぶ。このうち実測可能な16個体を選んだ。甕は156・157・159・160の4個体を図示した。156は球形の胴部に直立する口縁部を有している。157は胴部の最大径は中位以下にあり，頸部のくびれは弱く，口縁部は僅かに外反気味に立ち上がる。159・160はいずれも口頸部の破片で，口縁部は直立する。壺は計3個体図示した。158はやや大型の壺で，肩部は強く張り口縁部は外湾して立ちあがる。161・162は中型の壺である。161の胴部は扁平な球形を呈し，口縁部は「くの字」状に外反する。162の胴部は球形で口縁端部を欠失している。163は小型丸底土器で胴部は扁平で肩部が強く張っている。164は小

型の甕ないし鉢であろうか，煮沸の痕跡は認められない。全体に厚い造りの土器で底部を欠失している。165は半球形の体部で丸底の杯である。高杯は計6個体図示したが，出土した器種のなかでも最も多く占めていた。高杯にはａ・ｂ類の両者があるが，ａ類が大半を占めている。杯部は扁平な半球形状で浅いものが多いが，167のように杯上半部と下半部で屈折し，全体に深いものも認められる。



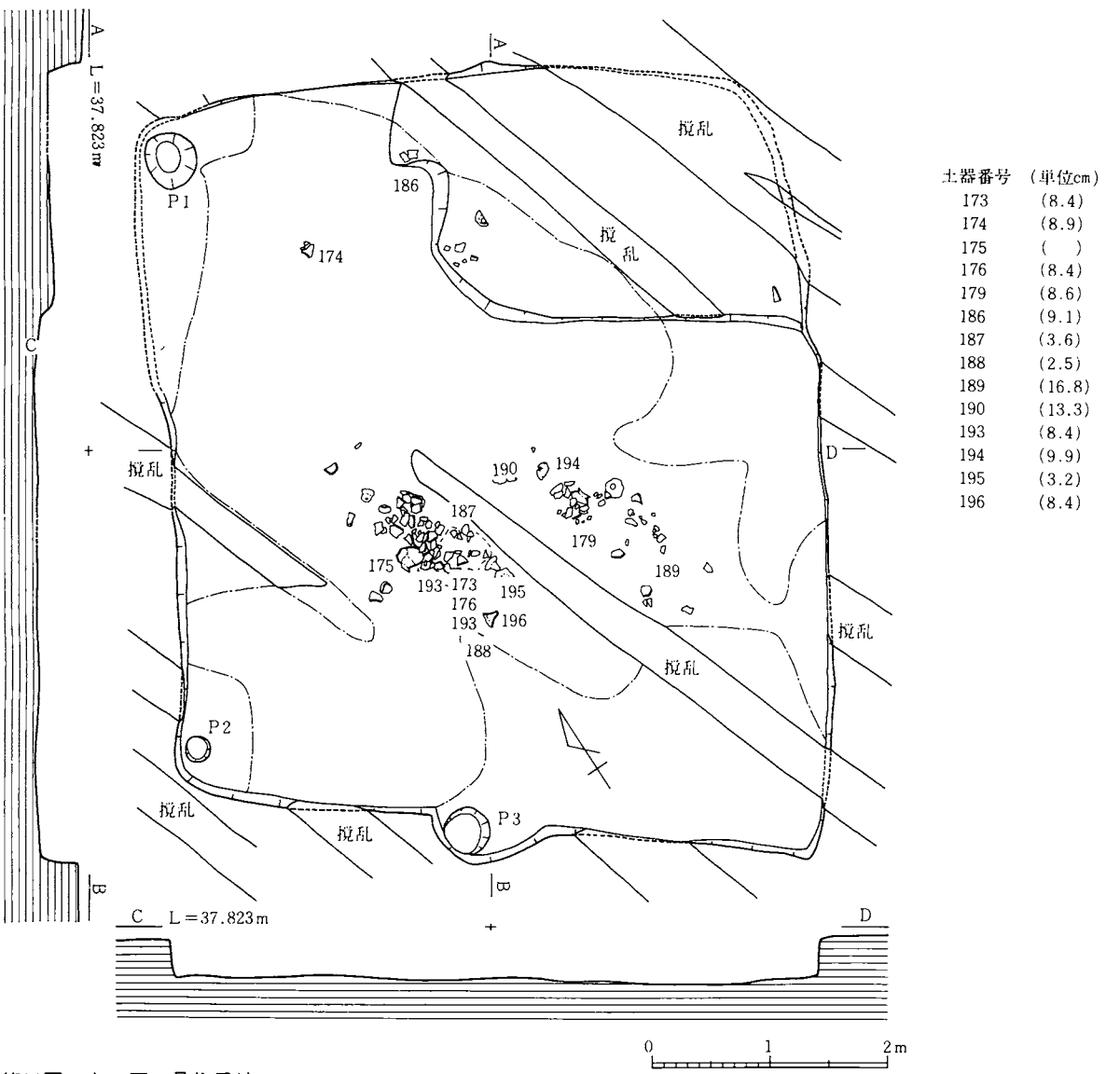
第35図　上の原20号住居址出土土器

上の原21号住居址（第36図）

C—4区に位置し，北側には29号住居址が隣接して構築されている。住居址は南北に走る何条もの耕作溝で攪乱されている。規模は長軸（A—B）線上で約6.3m，短軸（C—D）線上で5.55m，床面積約33.1m²の大型の住居址である。平面プランは不整な長方形で，床面の西隅を中心に所謂ベット状の段が設けられている。柱穴は3個検出したが，このうち2個は北側と西側の隅にあり，他の1個は南辺の中央部，壁面の外部に設けられている。また炉址等の施設は設けられていなかった。床面の中央部には炭化した部材片が僅かに残っていた。なお長軸方位はN—34°—Eである。

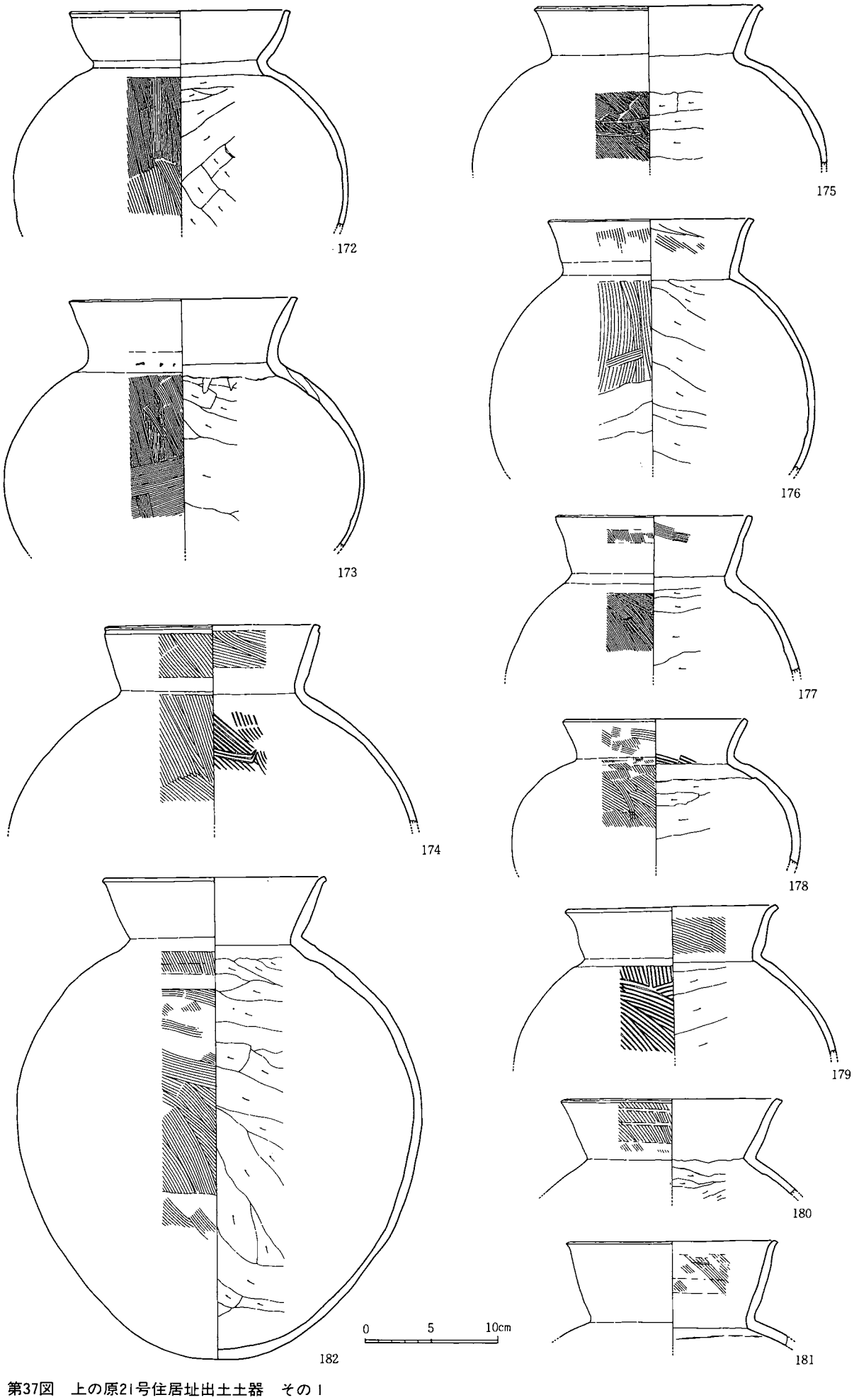
〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第36図）

住居址覆土はプラン確認面から床面まで単一の土層で，灰褐色の腐植土層で炭化物・焼土粒等を多く含んでいた。床面は部分的にローム混入土がみられ，硬く踏みしめられていた。出土遺物は総て土師器で総数40個体以上が出土したが，このうち25個体分を図示した。また25個体のうち床面に密着した状態で出土したのは195の高杯1個体で，他の24個体はすべて覆土中のもので，住居址廃絶後に混入したか人為的に廃棄されたものであろう。



土器番号	（単位cm）
173	(8.4)
174	(8.9)
175	(　)
176	(8.4)
179	(8.6)
186	(9.1)
187	(3.6)
188	(2.5)
189	(16.8)
190	(13.3)
193	(8.4)
194	(9.9)
195	(3.2)
196	(8.4)

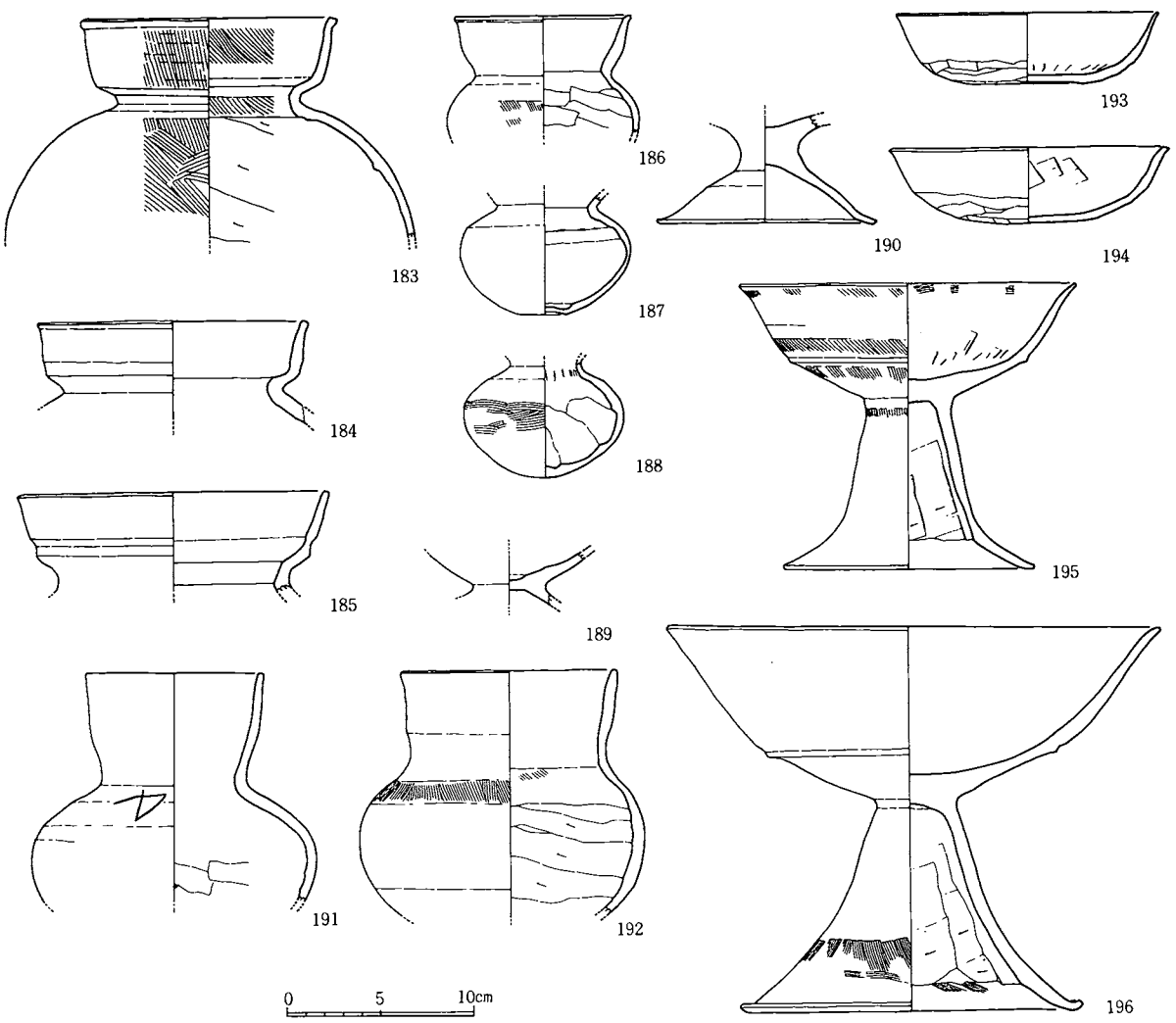
第36図　上の原21号住居址



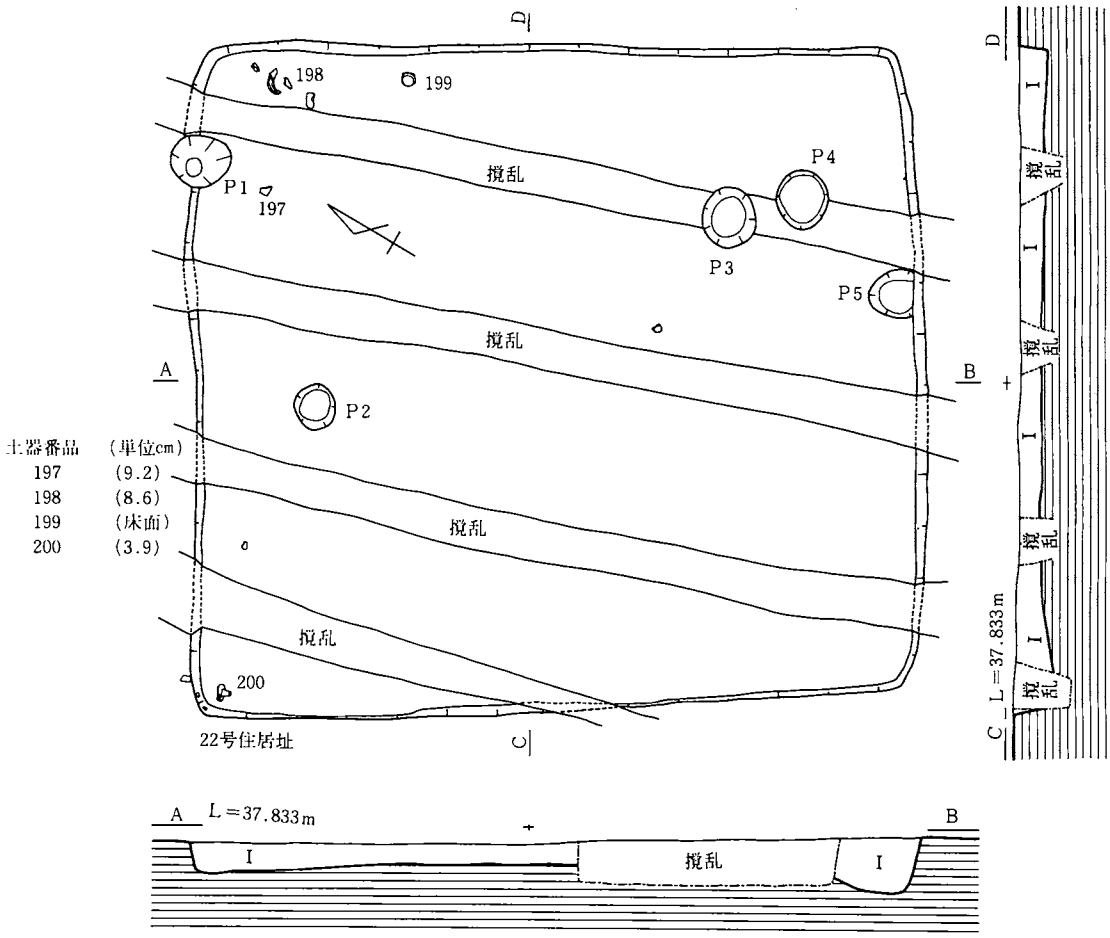
第37図　上の原21号住居址出土土器　その1

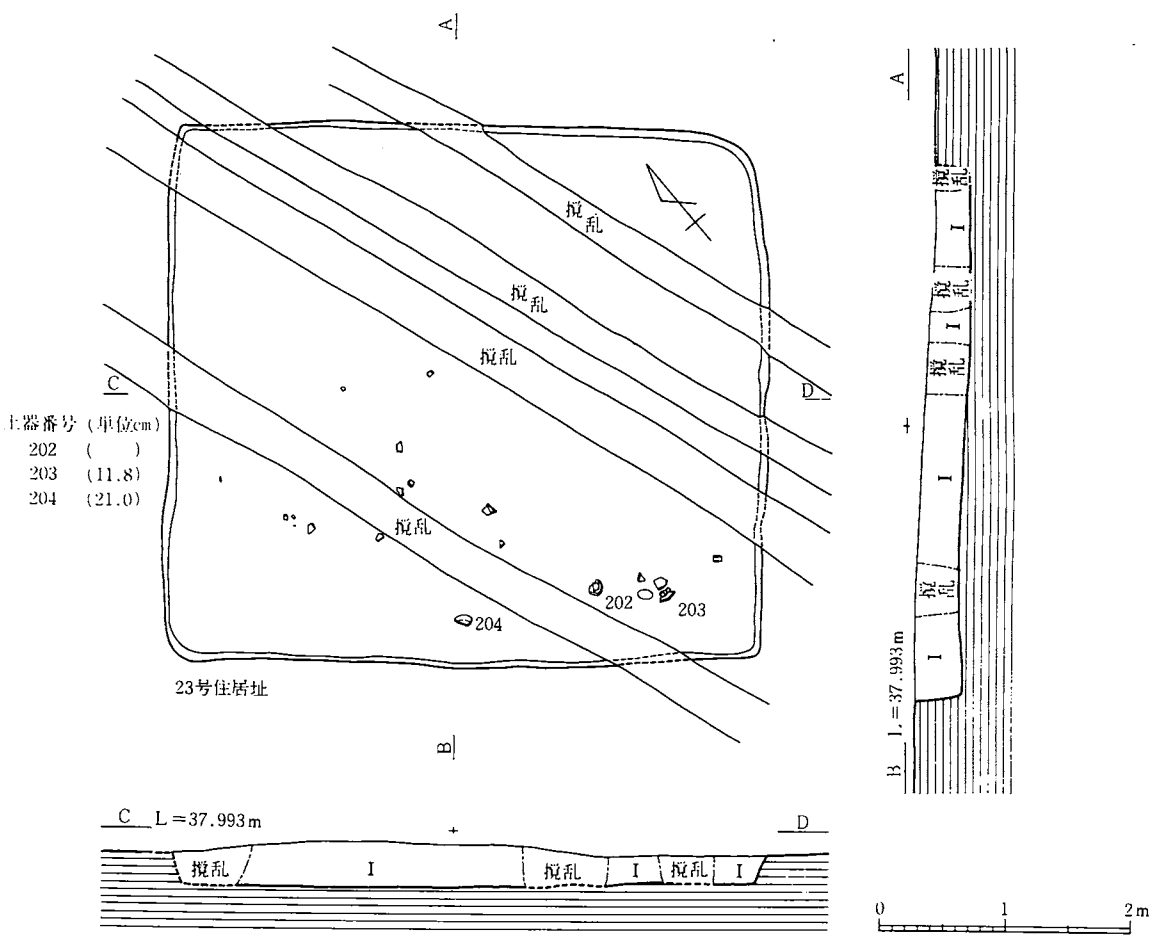
〔出土遺物〕（第37・38図）

172～180は甕で，口縁部が内湾するものは172の1個体にすぎず，他は外湾するか，直線的に立ちあがるものである。数的には前者が圧倒的に多い。これらの甕の胴部は例外なく球形である。なお174は甕としたが，胴部の形態や煮沸の痕跡が認められないことなどから，壺として分類すべきかもしれない。181・182は単純口縁の壺である。183～185は複合口縁壺で，いずれも口頸部の破片で，頸部が強くくびれて段を有し，口縁部は直立するもの（183・184）と頸部の段は不明瞭で口縁部が外反するもの（185）との二者がある。191・192は長頸壺で両者とも薄い造りで，191の肩部外面には「ヵ」のヘラ記号が認められる。186～188は小型丸底土器，189は台付小型丸底土器である。186は口径が胴部径に比べて僅かに小さいが，187・188は口縁部を欠失しているために不明である。190は高杯の脚部であろうか，本遺跡でも類例をみない。193・194は浅い皿状の杯で，内外面ともにヘラ削り調整ののちヨコナデで仕上げられている。両者とも薄い造りの土器である。高杯は2個体図示したが，甕に次いで最も多く出土している。とくに196の高杯は大型でb類に属するが，これも類例が少ないものである。



第38図　上の原21号住居址出土土器　その2





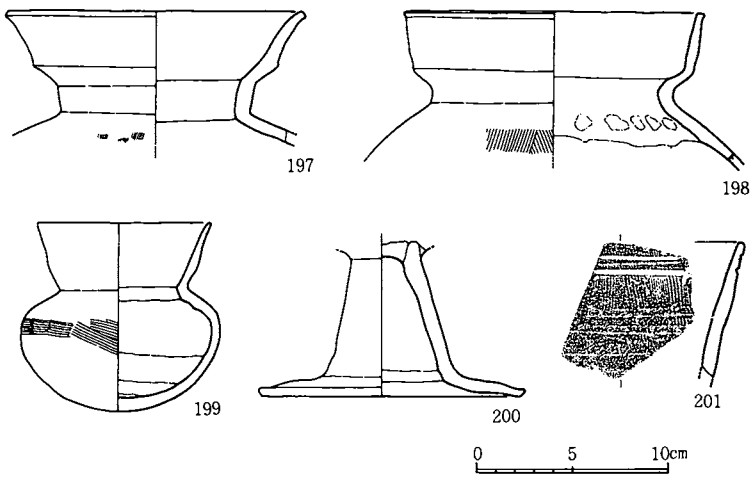
第39図　上の原22・23号住居址

上の原22号住居址（第39図）

C—4区に位置し，一部C—5区にまたがっている。規模は長軸（A—B）線上で5.82m，短軸（C—D）線上で5.22m，床面積約28.8m²を測った。平面プランは整美な長方形で，南北に走る4条の耕作溝により攪乱され，この部分の床面は失われている。床面は壁面に沿った部分を除いて硬化面が認められた。柱穴は5個検出したが，配列は不規則であった。また炉址は設けられていなかった。なお住居址の長軸方位はN—31°—Wであった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第39図）

住居址覆土は上部から削平を受け，とくに住居の中央部では0.2m前後の厚さを残しているに過ぎなかった。したがって覆土自体も分層は困難であったが，床面の中央には炭化物・焼土粒が数cmの厚さで堆積していた。出土遺物は土師器・鉄器・砥石が出土した。このうち床面出土の遺物は，199の小型丸底土器と鉄器だけで，他は覆土中出土のものである。

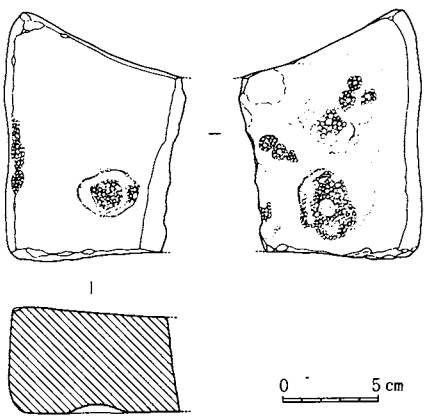


第40図　上の原22号住居址出土土器

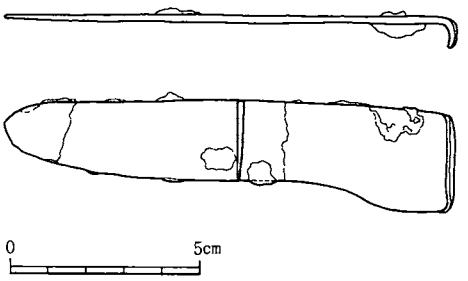
〔出土遺物〕（第40～42図）

土師器は計6個体分出土し，5個体を図示した。197・198は複合口縁壺で，いずれも小破片により復原したものである。197は頸部の段から口縁部が外反し，198は直立している。199の小型丸底土器は胴部が扁平な球形を呈し，口縁部は外面にわずかにふくらみを持ちながら外反する。口径は胴部径より小さい。200は高杯脚部で，柱状部と裾部の境は明瞭であるが脚部の径に対して高さが低い。201は鉢ないし甑の口縁部破片で，口縁端部外面に2条の平行沈線が引かれている。外面はタテ方向の刷毛目調整のヨコナデ，内面はヘラ削りで仕上げられている。

覆土中より砥石1点（第41図）が出土している。砂岩製で上面と下面さらに縁辺部に叩打痕が残され，三側面はいずれも研磨されている。また床面から鉄鎌1点（第42図）が出土している。長さ11.9cm，基部の幅2.7cm，厚さ0.2cmを測った。刃部は両刃で，二次的な研磨により内湾している。



第41図　上の原22号住居址出土砥石



第42図　上の原22号住居址出土鉄器

上の原23号住居址（第39図）

22号住居址の南東部C—5区に位置し，36号住居址(弥生中期）と重複している。規模は長軸（A—B）線上で4.27m,短軸（C—D）線上で4.25m，床面積約19.3m²のやや小型の住居址である。平面プランは整美な長方形であるが，南北に走る耕作溝4条により攪乱されていて,この部分の床面は失われている。床面には柱穴・炉址等の施設は認められなかった。なお長軸方位はN—49°—Wである。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第39図）

覆土は22号住居址と同様単一の土層からなり，プラン確認面から床面まで灰褐色の腐植土層が堆積していた。出土遺物は極めて少なく，しかも細片が多く，すべて覆土中出土のものである。出土遺物はすべて土師器で計8個体分があったが，このうち3個体を図示した。

〔出土遺物〕（第43図）

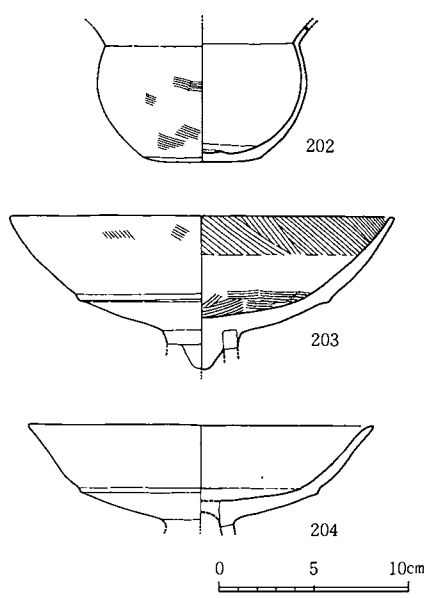
202は小型の壺で，底部は突出気味の平底である。全体に薄く丁寧な造りの土器である。203･204は高杯の杯部破片でいずれも扁平な半球形で，浅い杯部である。杯部と脚部との接合部内面のボタン状の突起は203では残されているが，204ではおそらく消されているものと思われる。

上の原25号住居址（第44図）

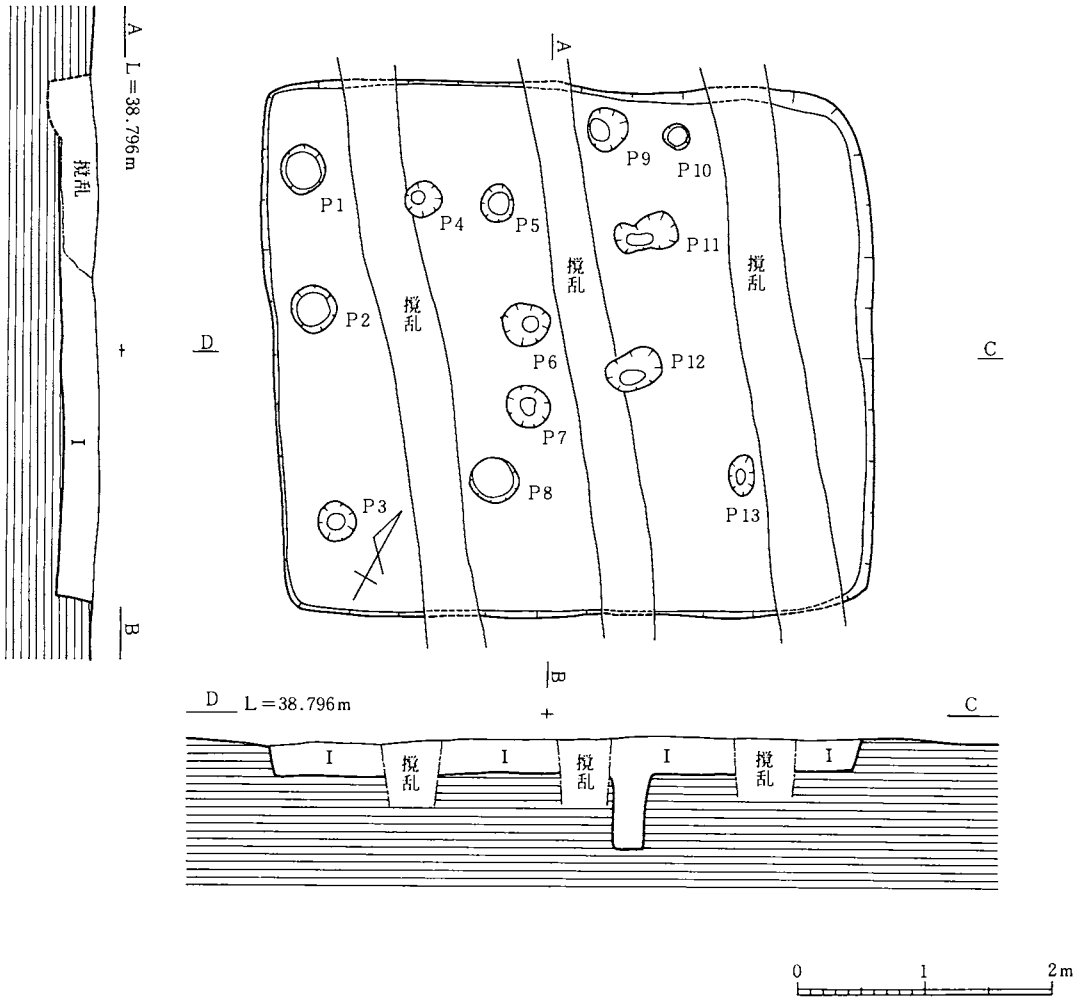
B—5区に位置し，住居址の南西部隅は26号住居址の北東部隅と接している。一帯は弥生時代前期～中期の住居址群が分布し，これらと重複する古墳時代住居址群の一つである。規模は長軸（C—D）線上で4.75m，短軸（A—B）線上で4.16m，床面積約18.8m²の小型の住居址である。住居址は3条の耕作溝で攪乱され，この部分の覆土・床面は完全に失われている。平面プランは北東部隅がやや丸味を帯びるが，全体的には整美な長方形で，長軸方位はN—62°—Eであった。壁高は南壁で最大0.30mで，平均0.25mを残している。床面には計13個の柱穴を検出したが，配列は不規則で主・支柱穴を区別することは困難である。床面は中央部を中心に硬化面が認められた。

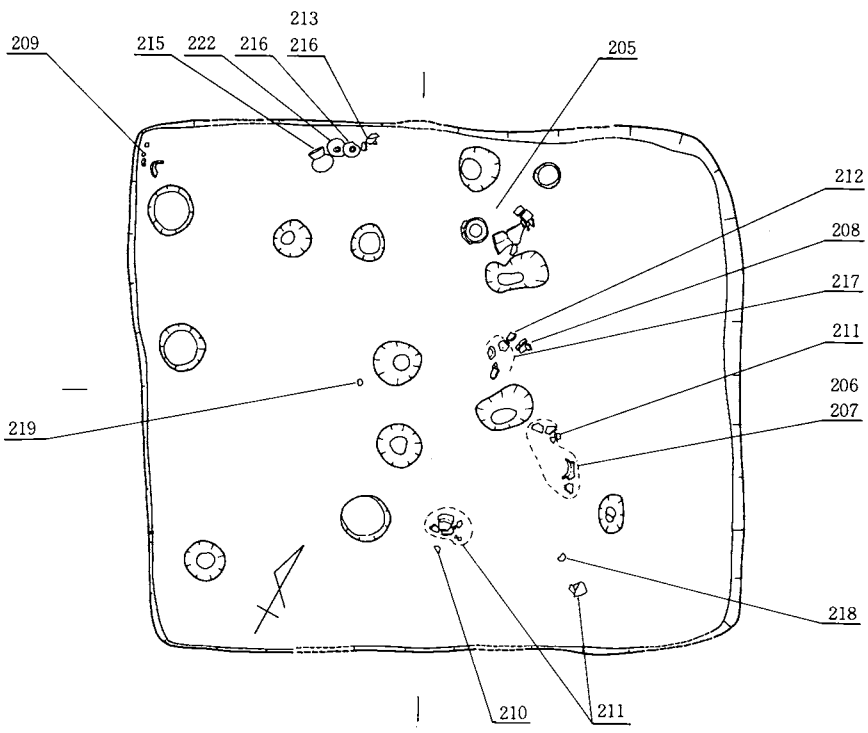
〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第44図）

住居址覆土は灰褐色の土層で床面直上では炭化物・焼土粒を多く含んでいるものの，明確に分層することは出来なかった。また覆土上層では無数の樹根が混入していた。出土遺物のうち土器は土師器のみで，他に鉄器が1点出土している。土器は15個体分が出土して，その総てを図示した。これらのうち床面出土の土器は，206・207・210・211・218の5個体で，他の10個体は覆土中及び上層出土の土器である。



第43図　上の原23号住居址出土土器



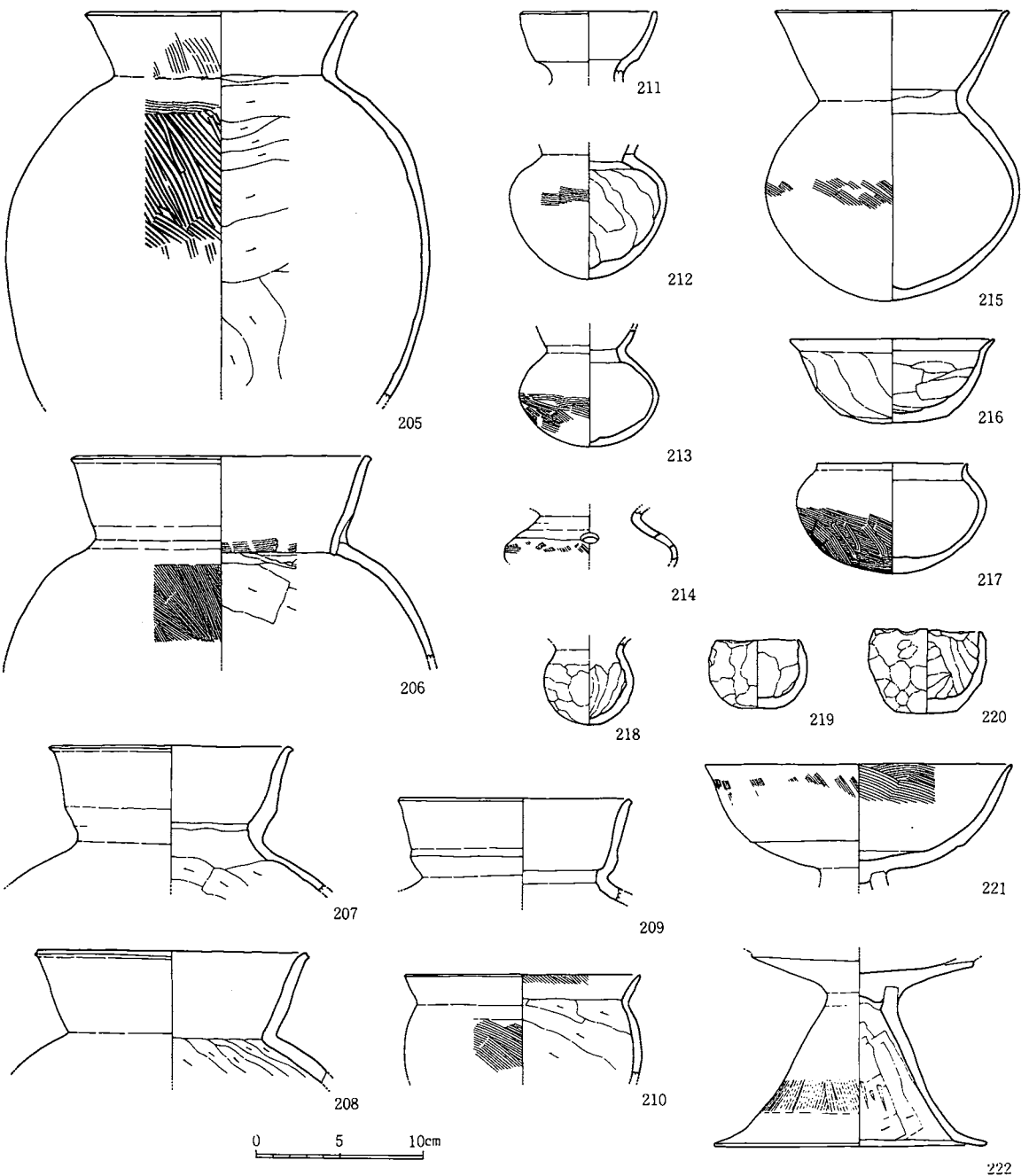


土器番号	（単位cm）
205	(9.5)
206	（床面）
207	（床面）
208	(4.0)
209	(11.0)
210	（床面）
211	（床面）
212	(4.0)
213	（上層）
215	（上層）
216	（上層）
217	(4.0)
218	（床面）
219	(9.5)
222	（上層）

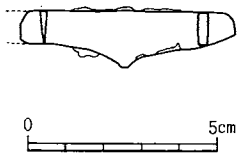
第44図　上の原25号住居址

〔出土遺物〕（第45・46図）

205の甕は胴部は長胴気味で，口縁部は外湾する。206～209は通常の甕に比較して口縁部が高く，頸部に僅かな段を有するものもあり，甕とするか壺とするかは困難である。しかし206・207の胴部内面はチョコレート色に変色し，明らかに煮沸の痕跡が認められるものもあり，将来的には甕か壺への分離ができるものと思われるが，ここでは甕としておく。210は小型の甕で内外面に炭化物が付着し，煮沸による二次焼成のため器面が剝落している。211～213は小型丸底土器で，211は複合口縁で頸部以下を欠失している。212・213は口縁部を欠失しているが，いずれも口径が胴部径に対して小さいタイプであろう。214は土師器鍋で，小型丸底土器を製作段階で転用したものであろう。215は中型の壺で，胴部は球形を呈し，口縁部は大きく外反している。216は杯，217は小型の鉢ないし無頸壺であろう。216の口縁部は小さく外湾し底部は突出気味の平底であ



第45図　上の原25号住居址出土土器



第46図　上の原25号
住居址出土鉄器

る。217は扁平な球形胴部で口縁部は小さく摘み出されている。218～220は手づくね土器で，218は小型丸底土器を，219･220は鉢型土器を模したものである。221･222は高杯である。221は杯部が上半部と下半部との段は不明瞭で，扁平な半球形状を呈している。222はラッパ状に開く高杯脚部で裾部でさらに外方に屈折して開いている。

また覆土中に鉄製刀子1点（第46図）が出土した。刃部の先端側を欠失しているが，茎部はほぼ旧状を残していて，現存長5.7cmを測った。刃部は両刃で背部の厚さ2mm弱で，茎部は2.5mmであった。

上の原26・27号住居址（第47図）

25号住居址の南西部に隣接したA―5区～B―5区に位置している。26号住居址は27号住居址によって全体の3分の2以上を失っている。規模は現存する西辺で3.40mの小型の住居址である。壁高は西壁で0.33mを測り，床面は中央部が深くなっている。柱穴は1個検出したにすぎない。

27号住居址の規模は長軸線上で4.40m，短軸線上で4.15m，床面積約17.2m²の小型の住居址である。壁高は南壁で最大0.55mをはかり，床面は北側から南側に移行するにつれ低くなっている。住居址は4条の耕作溝によって攪乱され，この部分の床面は失われている。柱穴は大小10個検出したが，配列は不規則である。また西壁の南側に周溝状の溝が長さ約1.7mにわたって認められた。なお住居址の長軸方位はN―30°―Wであった。

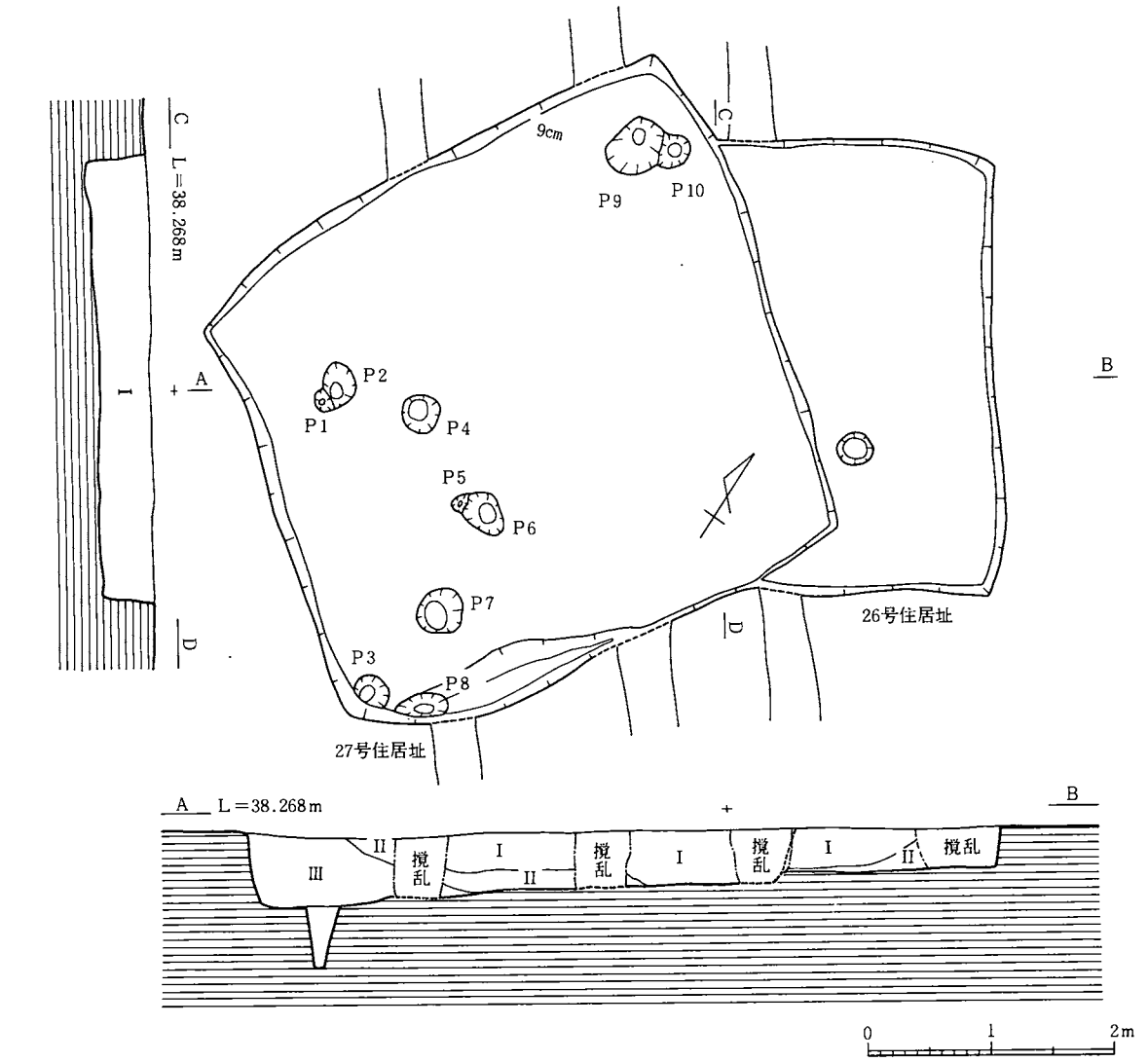
〔住居址覆土〕（第47図）

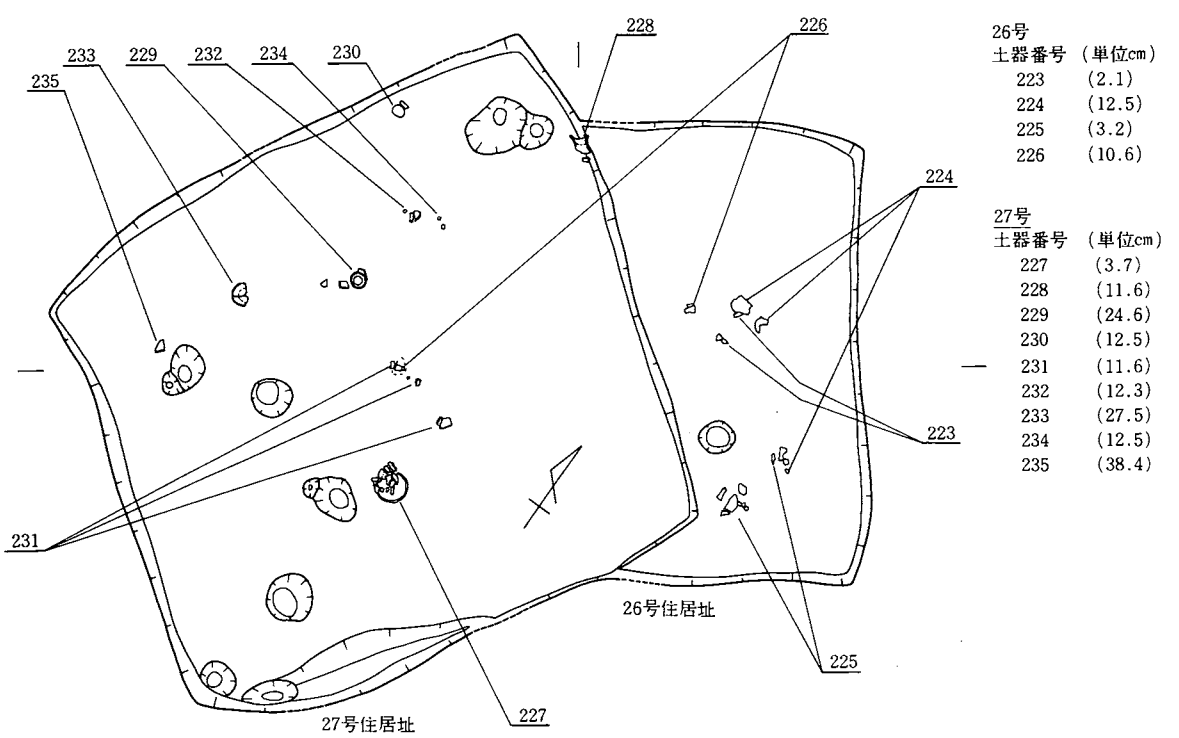
26号住居址の覆土は上下2層からなり，Ⅰ層は黒褐色の腐植土層で土師器細片を含み，樹根なども多く混入している。Ⅱ層はやや赤味をおびた灰褐色土層で焼土粒を多く含んでいる。またⅡ層中には炭化部材も含まれていた。27号住居址覆土は3層からなり，Ⅰ層は26号住居址と同様の黒褐色土層で住居址中央部にのみ残され，周辺部は削平されて失われていた。Ⅱ層は26号住居址のⅡ層に類似した赤褐色土層で焼土粒を多く含んでいた。Ⅲ層は灰褐色土層で焼土に加えて炭化物を多く含む土層で床面の中央部にまでは及んでいない。以上3枚の土層は自然の堆積状態をしめしているものの，層序を観察すると，Ⅱ･Ⅲ層の土砂が堆積を完了した段階でさえ床面の一部が旧状を保っていたことになり，住居が完全に埋没するには，かなりの時間を要したものと考えられる。

〔遺物出土状態〕（第47図）

26号住居址の出土遺物はすべて土師器であった。出土量も僅かでこのうち床面出土の土器は皆無で，Ⅰ層出土のもの2個体(224・226)とⅡ層出土の2個体(223・225)の計4個体を図示した。

27号住居址には計14個体分の土器が出土したが，すべて土師器であった。このうち床面出土のものはなく，Ⅰ層出土のもの2個体(228・231)，Ⅱ層出土の2個体(229・233)，Ⅲ層出土の5個体(227・230・232・234・235)を図示した。とくに227の甕はⅢ層下部の床面近くに出土し，一個体分まとまって出土しているので，本住居址の年代を決定するうえで重要な土器となろう。





26号

土器番号	(単位cm)
223	(2.1)
224	(12.5)
225	(3.2)
226	(10.6)

27号

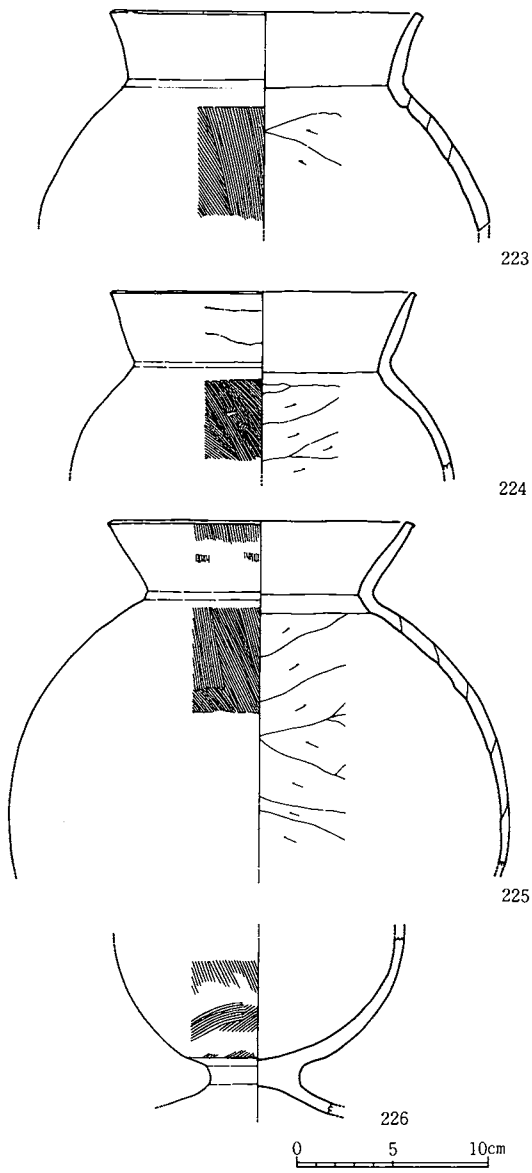
土器番号	(単位cm)
227	(3.7)
228	(11.6)
229	(24.6)
230	(12.5)
231	(11.6)
232	(12.3)
233	(27.5)
234	(12.5)
235	(38.4)

第47図　上の原26・27号住居址

〔出土遺物〕（第48・49図）

26号住居址出土土器（第48図）は甕3個体，台付壺1個体を図示した。甕は口縁部が外湾して立ち上がり端部が角ばるもの（223），口縁部が外反するもの（224），頸部が強くくびれて口縁部が大きくひらき端部が角ばるもの（225）があるが，胴部は中位以下を欠失するものの，球形に近いものであろう。

27号住居址出土土器（第49図）は甕3個体，小型丸底土器1個体，杯3個体，高杯2個体である。甕227は球形胴部で頸部は強くくびれ，口縁部は大きく外湾している。胴部最大径は中位以下にあり，底部は丸底である。228の甕は口縁部が外反し端部は角ばっている。229は小型の甕で胴部の張りは弱く，口縁部は大きく外湾する。230の小型丸底土器は口縁の径・高さとも胴部のそれよりも小さい。231の杯は半球形の体部で口縁部は小さく外反し端部は角ばる。232の杯は体部の中位に稜をもち，稜を境に以下底部は刷毛目調整し，上部はヨコナデで仕上げる。233の杯は扁平な半球形の体部で大型品である。外面はヨコ方向の刷毛目調整で，口縁端部をヨコナデで小さく外方へつまみだしている。234・235は高杯で，235の脚部はラッパ状に開き，裾部でさらに外方へ開いている。



第48図　上の原26号住居址出土土器

上の原28号住居址（第50図）

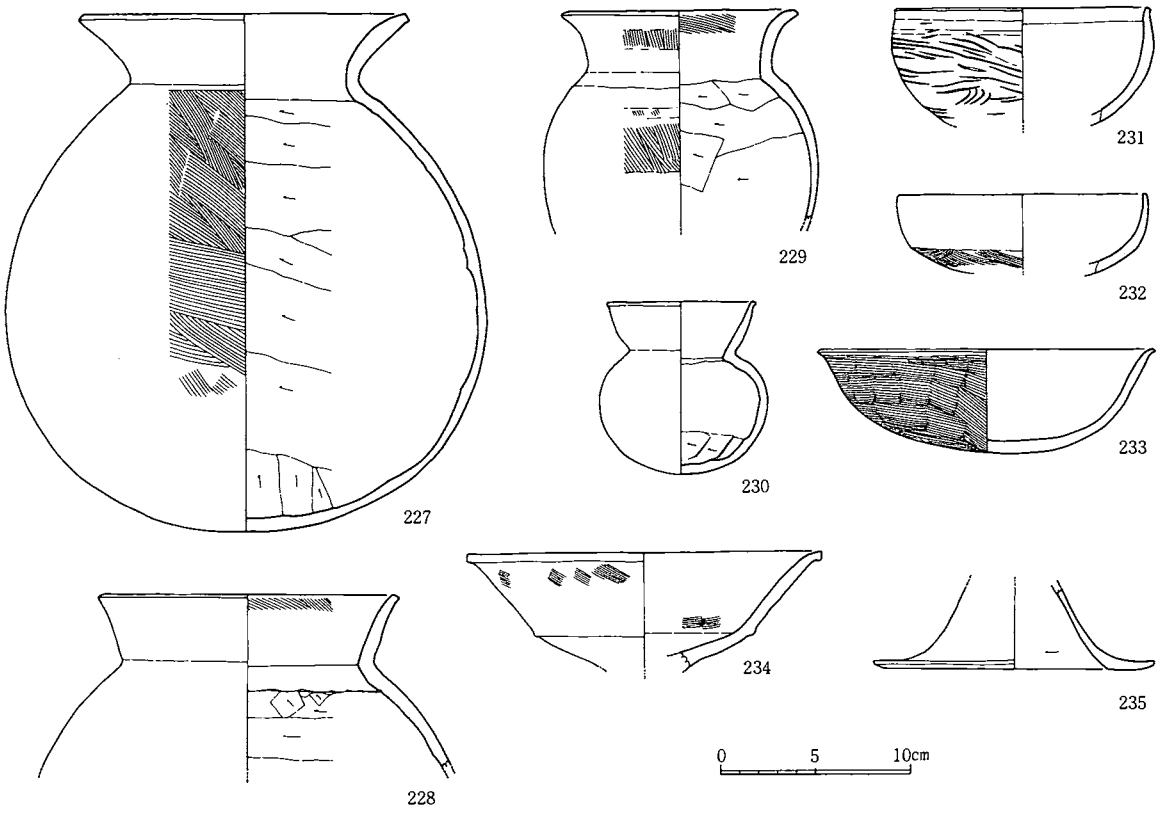
B—5区に位置し，66号住居址（弥生中期）と重複している。規模は長軸（A—B）線上で6.16m，短軸（C—D）線上で5.59m，床面積約32.8m²の大型の住居址である。平面プランは西辺が長く，東辺が短い台形状を呈した長方形である。住居址は3条の耕作溝により攪乱をうけていて，この部分の壁・床面は失われている。床面は中央部を中心に硬化面が残され，南辺側では壁近くまで及んでいる。床面にはその他炉址・柱穴・周溝等は検出されなかった。なお住居址の長軸方位はN—57°—Eであった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第50図）

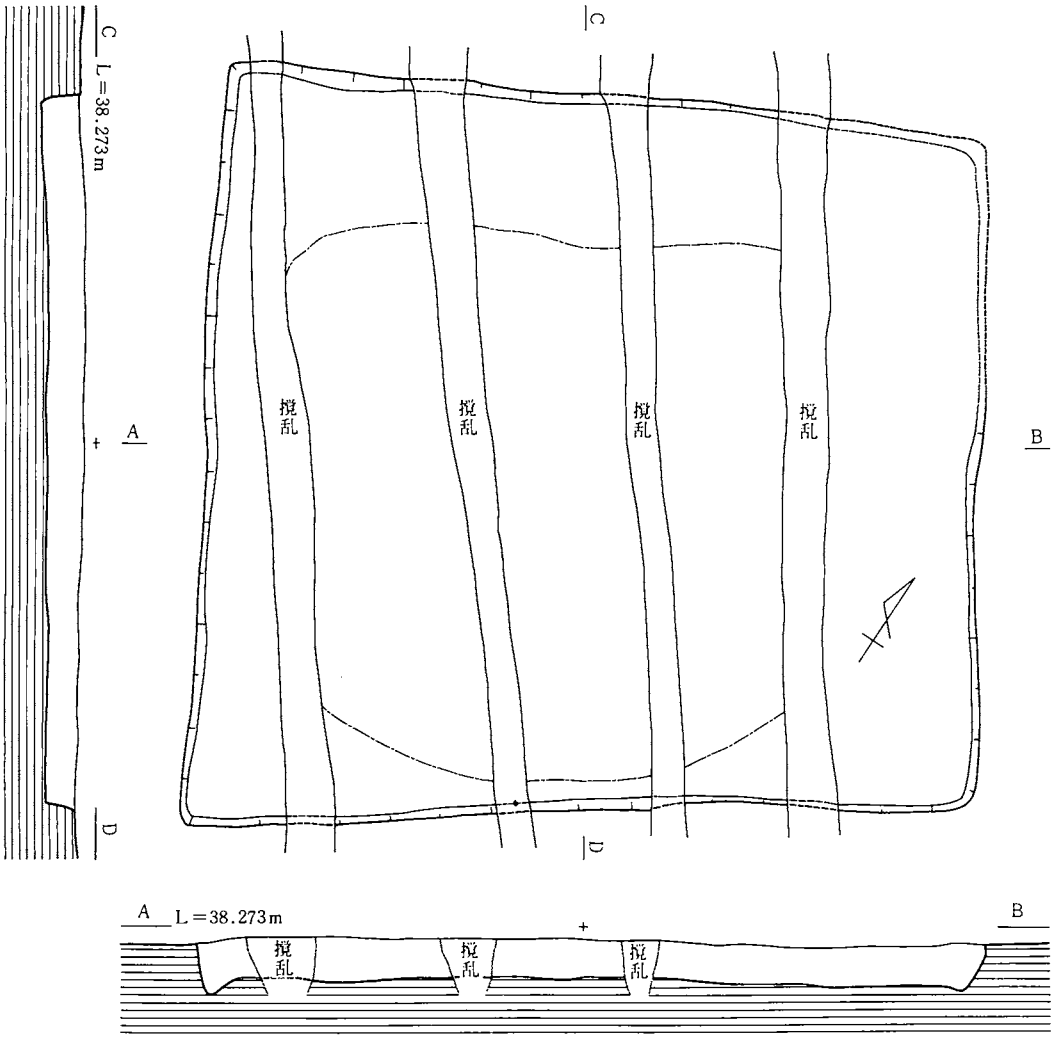
住居址覆土は灰褐色で炭化物・焼土は少量含み，床面直上では炭化部材が残されていた。特に床面のなかで66号住居址との重複部分ではローム混じりの硬化面となっていた。出土遺物は極めて少量で，図示できたものは2個体分にすぎず，いずれも床面に密着したものはなく，覆土中出土のものである。

〔出土遺物〕（第51図）

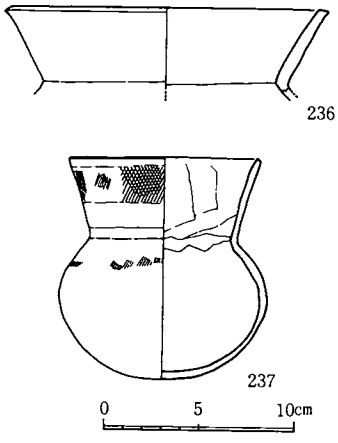
236は甕口縁部破片で，口縁部は直線的に外反し端部は角ばる。237は小型丸底土器で胴部は球形で頸部のくびれは弱く口縁部は外反して立ちあがる。口径は胴部径に対して僅かに小さい。



第49図　上の原27号住居址出土土器



第50図　上の原28号住居址



第51図　上の原28号住居址
出土土器

上の原29号住居址（第52図）

D－4区の南東部隅に位置し，南側には21号住居址が隣接している。規模は長軸（A－B）線上で4.20m，短軸（C－D）線上で4.20mのほぼ正方形で，床面積約17.2m²のやや小型の住居址である。壁高は南壁で最高0.50m，北壁で最小0.25mを残していた。床面は南壁側で低くなっている他は，全体的に水平面を保ち，南北に走る5条の耕作溝も覆土中で止まり，床面にまで達していない。また床面は四隅及び北辺側を除く不整形な範囲に硬化面が認められる。柱穴は南壁に沿って1個を検出したにすぎず，その他炉址等の施設は設けられていなかった。なお長軸方位はN－28°－Eであった。

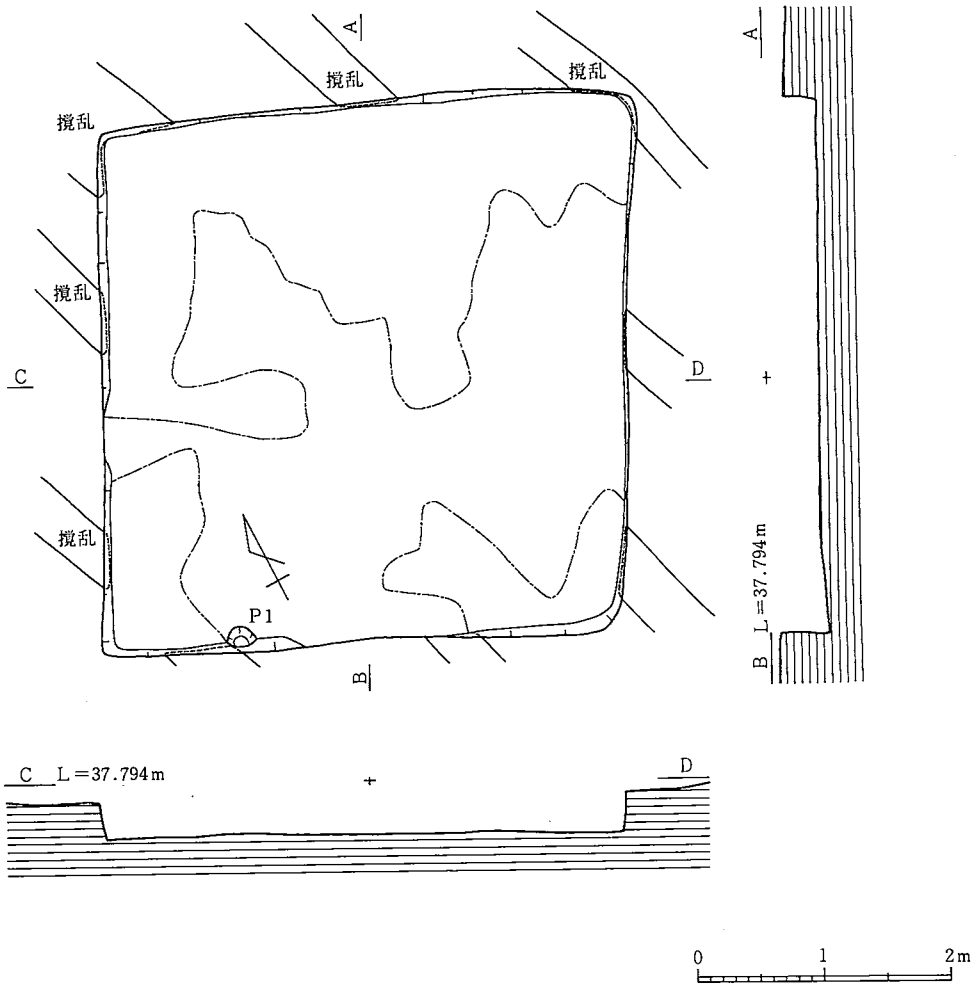
〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第52図）

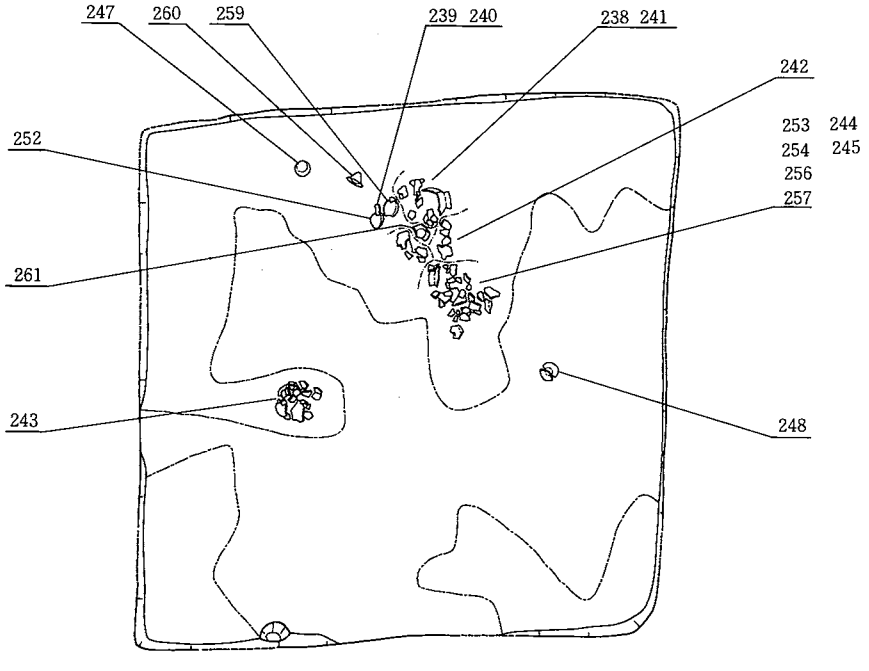
住居址覆土はプラン確認面から床面まで灰褐色土層が堆積していて，分層することは出来なかった。しかし覆土下部では炭化物の細片を多く含んだ暗褐色土層が部分的にみとめられた。出土遺物は床面の北側部分に集中し，しかもほとんどが床面に密着した状態で出土している。しかしこれらの遺物も完形土器はわずかで，使用に耐えるものは少ない。こうした出土状態から，おそらく住居廃絶時ないし廃絶直後に一括して廃棄されたものと考えられる。出土遺物は土師器24個体分と鉄製ヤリガンナ1点が出土し総てを図示した。これらのうち床面出土の土器は238～245・247・252～254・256・257・259・261の計16個体で，その他の8個体は覆土中出土の土器である。またヤリガンナも覆土中出土のものである。

〔出土遺物〕（第53～55図）

甕は9個体出土した。これらは口縁部の変化によって4つに大別することができる。a類＝口縁部が直線的に外反し，胴部は球形に近いものと胴部最大径が上位にある長胴気味のものとがある。前者は238・239・242～244で，後者は241である。なお241は内外面に炭化物が付着し，器面がチョコレート色に変色・剥落しているので，明らかに煮沸された土器であるが，本来は壺型土器の系統を引くものと考えられる。b類＝口縁部が大きく外湾し，胴部が球形を呈するもので，240がこれに相当する。c類＝頸部のくびれが弱く，口縁部が直立する鉢型のもので，245がこれに相当する。d類＝頸部はくびれず胴部の張りが弱く口縁部が大きく外湾する甕で，形式的にも下降する形態であり，246がこれである。なお243の甕口縁端部の1ヶ所には焼成後に1孔が穿たれている。杯は6個体出土した。いずれも半球形の体部で，口縁部は小さく外湾するものと直行するものとがある。高杯は9個体出土し，完形品は1個体，杯部破片5個体，脚部破片3個体であった。高杯は杯部の形態が半球形を呈するもの（253・257），扁平な半球形を呈し口径が大で浅いもの（253・255），半球形で口縁端部が外反するもの（257・258）などがある。脚部は253がやや柱状部と裾部との境が比較的明瞭であるが，他の3個体はラッパ状に大きく開き，裾部でさらに外方に屈折気味に開くものである。

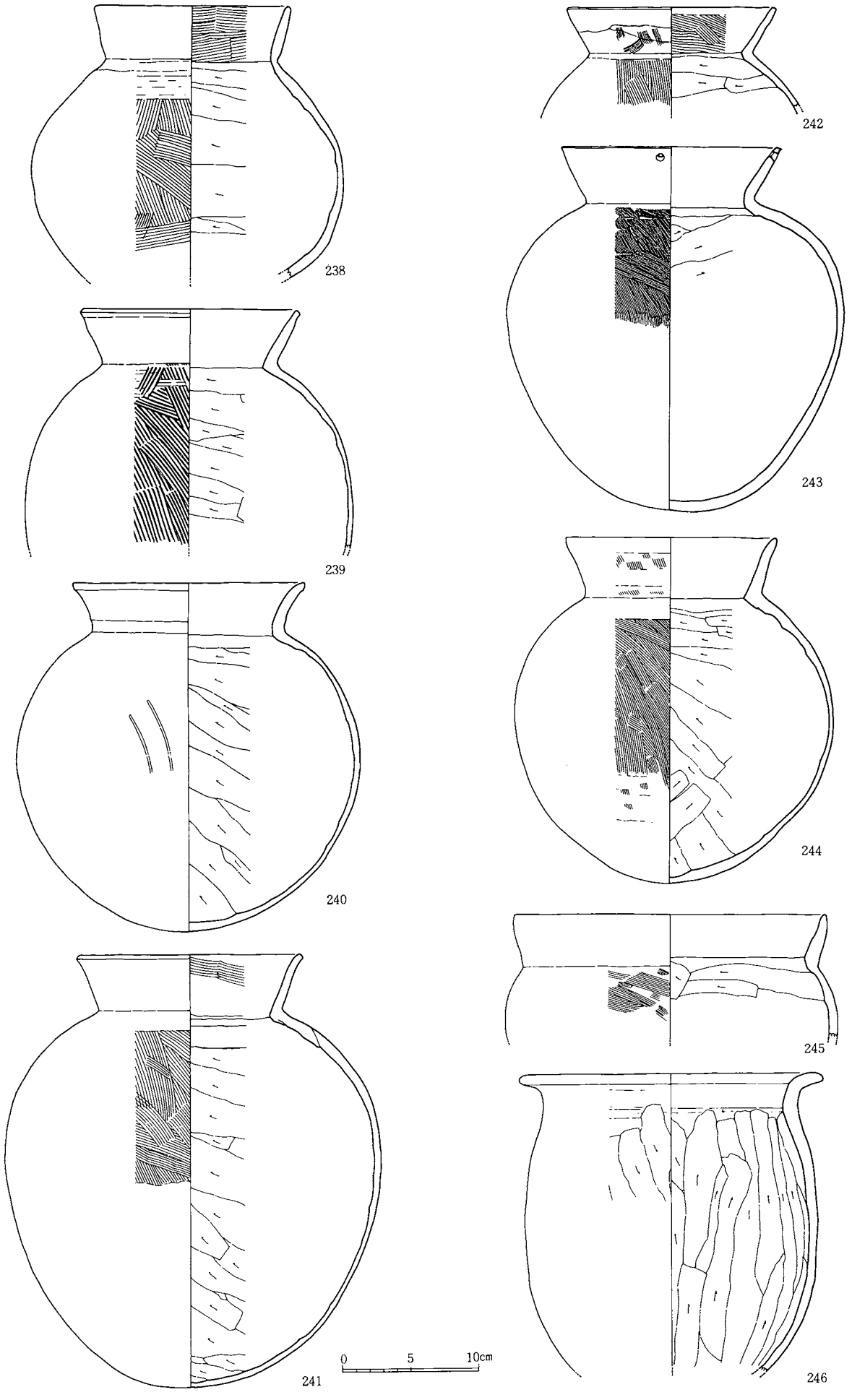
鉄製ヤリガンナ（第55図）は先端部と中茎を欠失している。刃部は柳葉状で茎との境は段をなしている。刃部の現存長6.5cm，最大幅1.5cmで刃部は表向きに反っていて，表の稿は殆どみられず断面は扁平な半月形を呈している。茎の断面は0.4cm×0.28cmの長方形である。



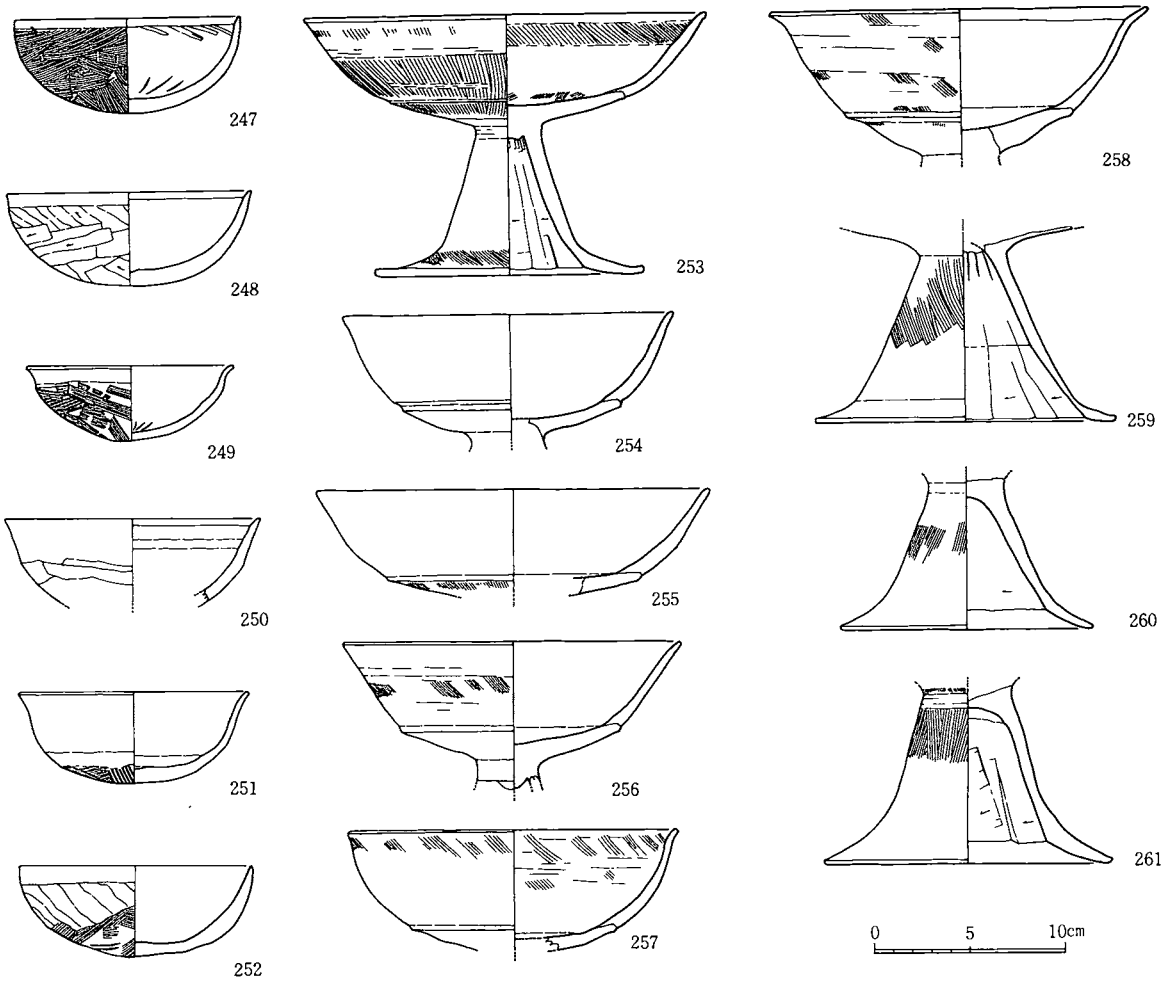


土器番号	(単位cm)
238	(床面)
239	(床面)
240	(床面)
241	(床面)
242	(床面)
243	(床面)
244	(床面)
245	(床面)
246	(上層)
247	(床面)
248	(9.7)
252	(床面)
253	(床面)
254	(床面)
256	(床面)
257	(床面)
259	(床面)
260	(16.3)
261	(床面)

第52図　上の原29号住居址

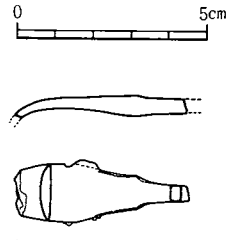


第53図　上の原29号住居址出土土器　その１



第54図　上の原29号住居址出土土器　その２

上の原31号住居址（第56図）

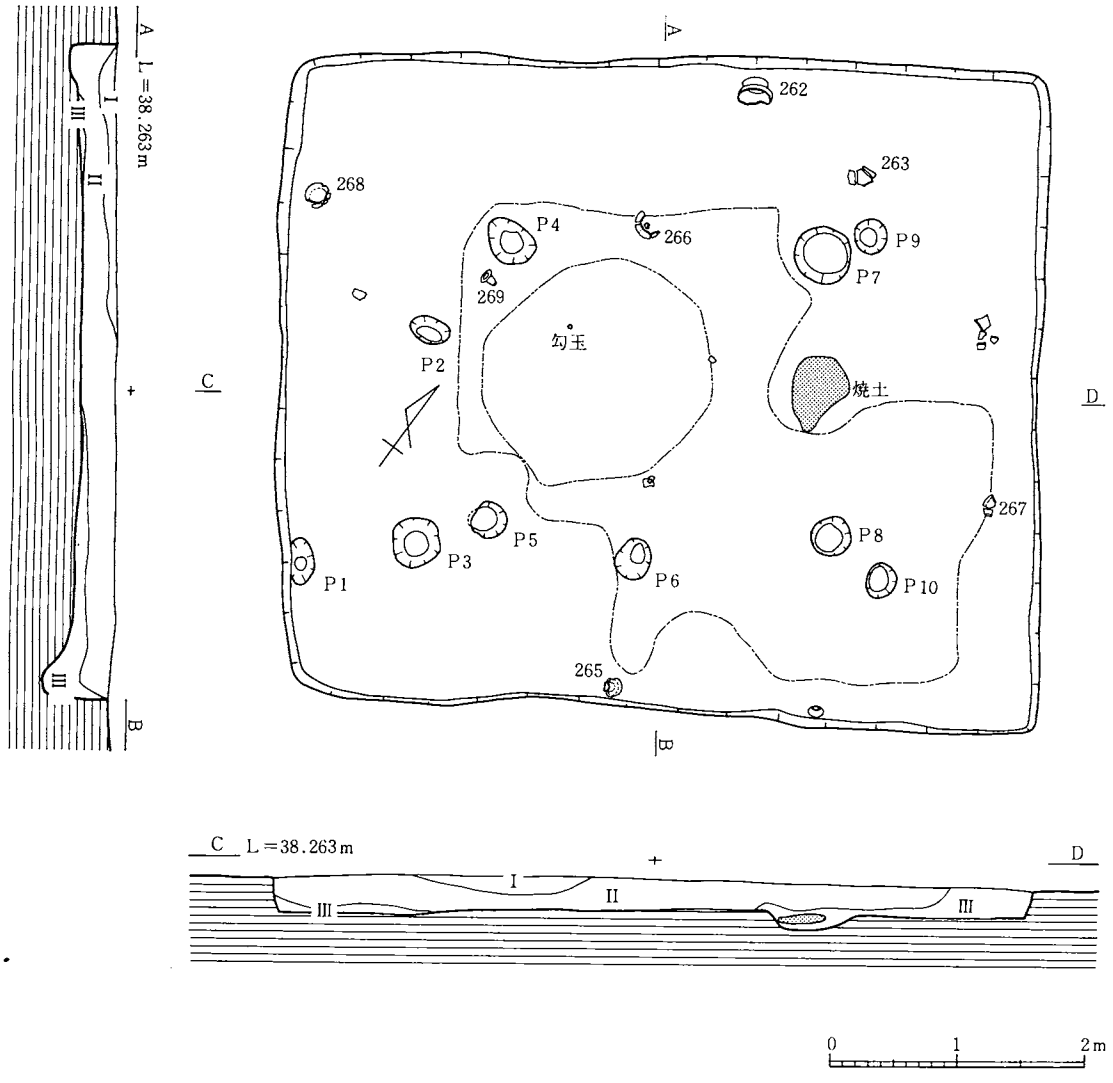


第55図　上の原29号住居址出土鉄鋤

Ｂ－6区の北西部に位置している。この一帯は弥生前期～中期の集落で，古墳時代の集落址としては南端部にあたる。規模は長軸（Ｃ－Ｄ）線上で6.02m，短軸（Ａ－Ｂ）線上で5.08m，床面積約29.5m²であった。プランは西辺と南辺がやや長いが整美な長方形を呈している。壁高は0.25～0.30mを残し，長軸に沿う二辺には周溝状の落ち込みが部分的にみとめられるが，他の二辺は床面中央部に比べて僅かに低くなっているにすぎない。床面には計10個の柱穴を検出した。これらの配置からＰ4－Ｐ5－Ｐ8－Ｐ7の4本を主柱穴とする住居と考えられる。またＰ3・Ｐ10・Ｐ9の3個は主柱穴を支える補助的な柱であったようである。床面の中央部から東隅部にかけて硬化面があり，さらにこの内側すなわち4主柱穴の間の楕円形の範囲はとくに硬く踏みしめられていた。炉址はＰ7－Ｐ8の2個の主柱穴の中間に1ヶ所設けられていた。平面のプランは不整な楕円形で断面形は浅いＵ字状を呈していた。炉址内部は焼土で充たされ，底部は火を受けて硬化していた。なお，長軸方位はＮ－54°－Ｅである。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕〔第56図〕

住居址覆土は3層からなり，いずれも自然堆積の状態を示している。I層は暗褐色土層で，住居の中央部分にのみレンズ状に残されていて，下部のII・III層と同様上部から削平されている。II層は黒褐色の土層で，Ｉ層に対して粘性がつよく土師器の砕片や炭化物・焼土等を多く含む腐植土層である。このII層の住居中央部



第56図　上の原31号住居址

では床面に直接堆積している。III層は住居周縁部から中央部に向かって堆積しているが，中央部には達していない。この層は住居址廃絶直後に流入したもので，上部のII層の堆積開始時期とはそれほど大きな時間差はなかったものと考えられる。

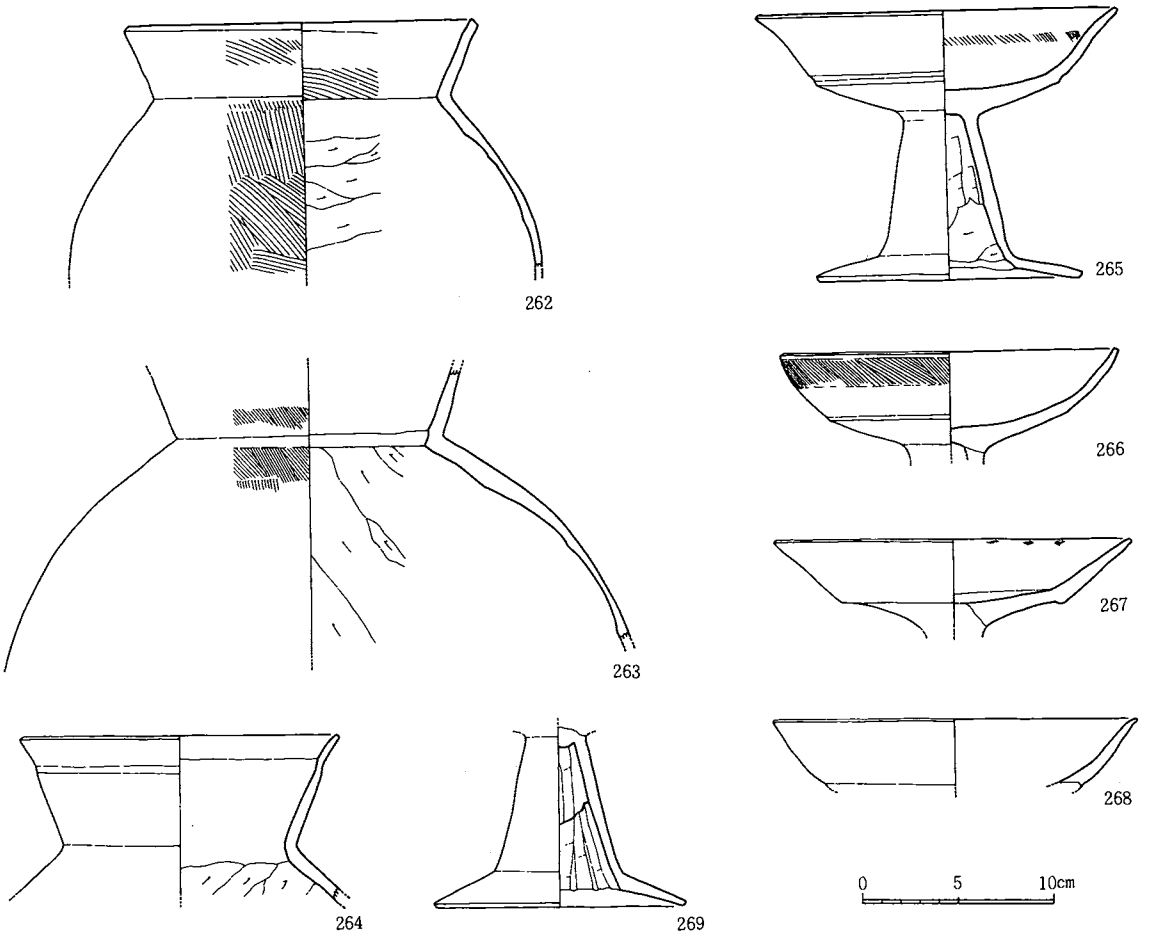
出土遺物は土師器及び滑石製勾玉である。土師器は計10個体分が出土し，これらの内訳は甕1，壺2，高杯7で，高杯2個体を除く8個体分を図示した。これらの出土遺物のうち，262・265・266・269の4個体は床面出土の土器で，263・267・268はIII層，264はII層中であるが床面に近い状態で出土したものである。又勾玉も床面に密着した状態で出土したものである。

〔出土遺物〕〔第57・58図〕

262は「く」の字状の口縁部を有する甕で，口縁端部は角ばっている。口縁部内外面及び外面は刷毛目調整ののち口縁部内外面をヨコナデ調整で仕上げ，胴部内面は右上がり方向のヘラ削りが施されている。263は単純口縁の大型壺で口縁端部および胴部以下を欠失している。264も同種の壺でやや小型である。口縁端部で小さく屈折している。265～269は高杯で全体の形態が知れるものは265にすぎない。杯部の形態は上半部が内湾気味に開くものと，直線的に開くものとがあるが，いずれも杯部全体は浅いものである。脚部は柱状部と裾部との境が明瞭なタイプに限られている。

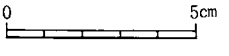
勾玉（第58図）は滑石製で、全長2.45cm，厚さ0.65cm，孔径0.15cmの小型品である。形態は背部付近まで

がやや太く，尾部に移行するに従って徐々に細くなっている。体部は扁平で背・腹部との間には研磨による稜が明瞭に残されている。また腹部は2方向からの研磨により，中央部を縦方向に稜が通っている。



第57図　上の原31号住居址出土土器

上の原34号住居址（第59図）

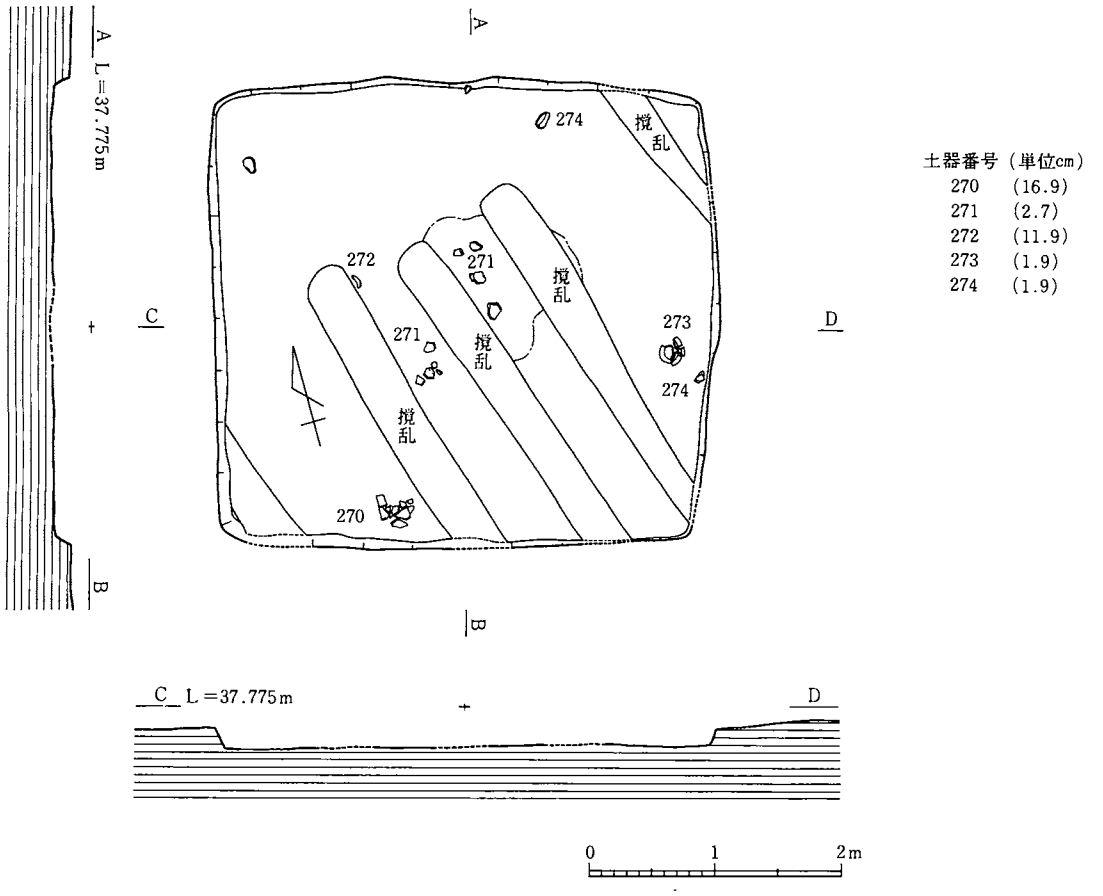


第58図　上の原31号住居址出土勾玉

5号住居址と21号住居址との間，C－4区に位置している。規模は長軸（A－B）線上で4.01m，短軸（C－D）線上で3.64m，床面積約13.7m²の小型の住居址である。長軸方位はN－72°－Wを指していた。平面プランは東西に長い整美な長方形である。壁高は0.15～0.25mで，上部からかなり削平を受けたものと思われる。床面は5条の耕作溝で攪乱を受けているが，中央部の狭い範囲に硬化面が認められた。その他炉址・周溝等は設けられていなかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第59図）

住居址覆土は住居址全体が削平を受けて基底部を残すのみであった。したがって分層はできなかった。覆土は灰褐色で炭化物・焼土粒を含み，とくに床面直上では焼土の量が増加していた。出土遺物は土師器のみで計11個体分が出土したが，床面出土のものは皆無であった。11個体のうち5個体を図示した。

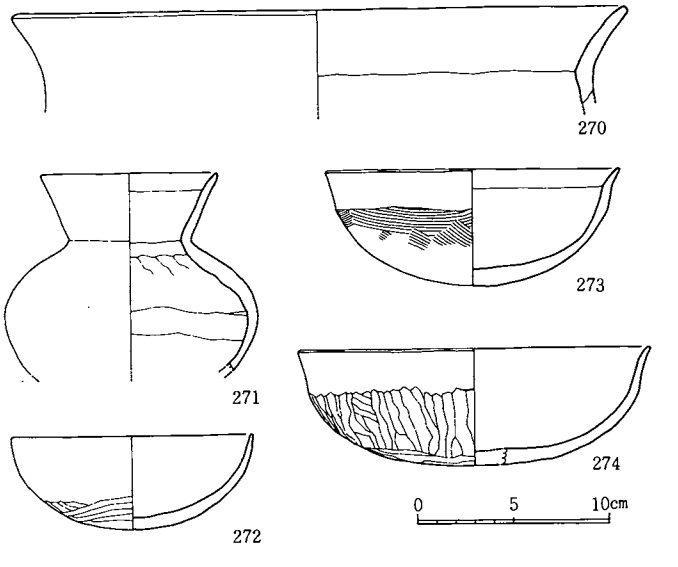


土器番号（単位cm）
270 (16.9)
271 (2.7)
272 (11.9)
273 (1.9)
274 (1.9)

第59図　上の原34号住居址

〔出土遺物〕（第60図）

270は甕ないし鉢の口縁部破片で，頸部のくびれは弱く，口縁部は外湾している。271は小型の壺で，胴部は扁平な球形で頸部は強くくびれ，口縁部は外反している。272～274は杯で，法量・細部の形態・成形手法も異なっている。これらの出土土器は形式的にも異なったものが混在していて，住居址自体の年代を反映するものの抽出は困難である。



第60図　上の原34号住居址出土土器

上の原35号住居址（第61図）

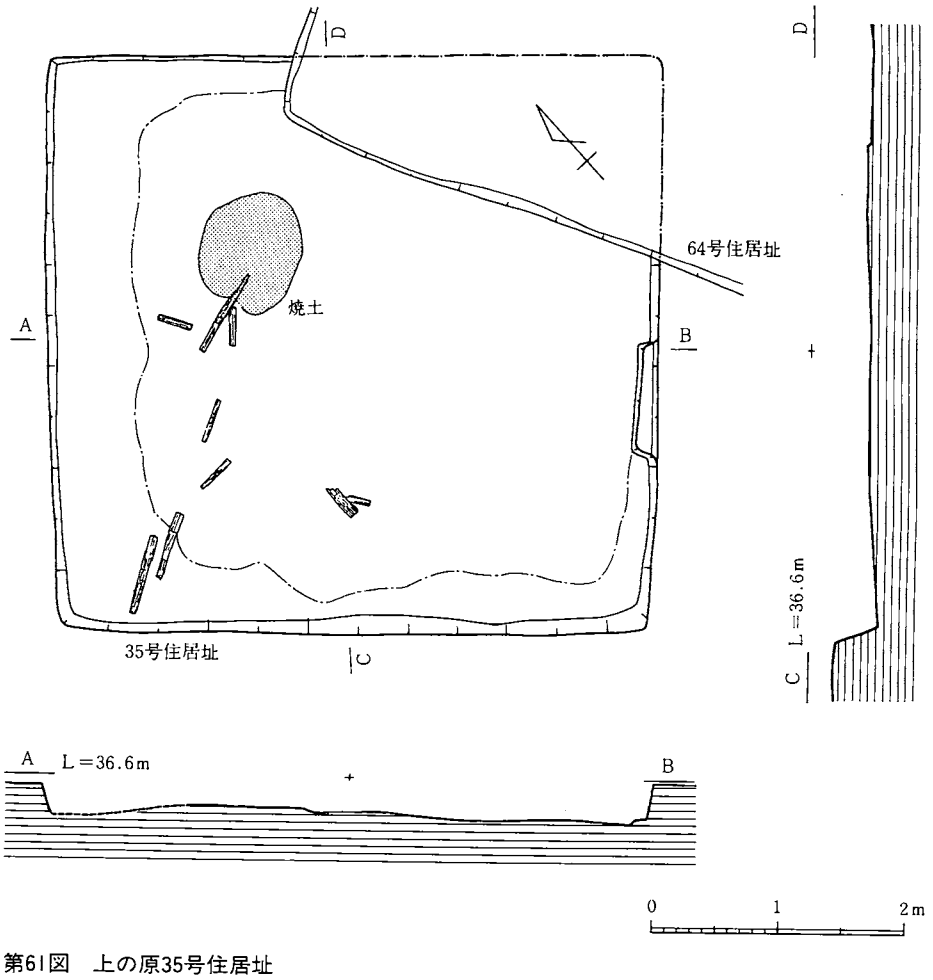
調査区北側のＥ－1区にあたり，64号住居址（7世紀前半～中葉）と重複している。規模は長軸（Ａ－Ｂ）線上で4.87m，短軸（Ｃ－Ｄ）線上で約4.04m，床面積約20.6m²のやや小型の住居址である。平面プランは整美な長方形を呈している。壁高は西壁で最大0.35mを残し，床面は中央部で高く周辺部では低く，全体に凹凸が著しい。また南壁の中央部から西寄りの壁面にステップ状の段が設けられていて，おそらく出入口部に関係する施設と考えられる。炉址は床面の中央部から北側に1ヶ所設けられ，この部分から北西部隅にかけて炭化部材が残存していた。なお住居址の長軸方位はＮ－47°－Ｗであった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第61図）

住居址覆土は耕作溝および多数の樹根により攪乱され，残存状態は不良である。上層では黒褐色で下部では焼土を多量にふくむ赤褐色を呈していた。炭化部材は総て下部の土層中に含まれていたものである。こうした状況から本住居址は火災のため放棄されものと推定される。出土遺物は極めて少なく，覆土下層から出土したのは275の土師器壺1点にすぎない。また276～278の土器は覆土上面でプラン検出時に出土したものである。

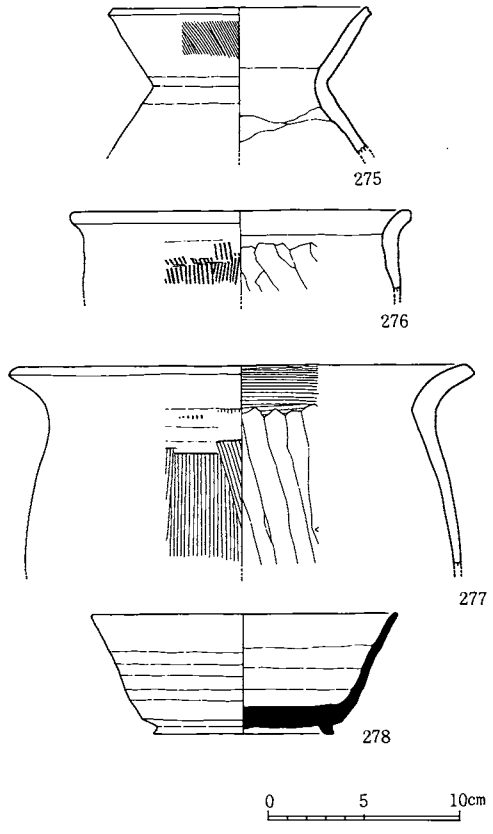
〔出土遺物〕（第62図）

275は土師器壺の小破片で，頸部は強くくびれ口縁部は大きく開いている。二次的な火を受けて器面は剝落している。276・277は土師器甕破片で，頸部のくびれは弱く口縁部は外湾している。器壁は胴部に対して口



第61図　上の原35号住居址

頸部が著しく肥厚している。278は須恵器高台付椀である。高台は低くやや外方へ開いている。また高台は底部の周縁よりわずかに内側に張り付けられている。底部は厚く体部は直線的に立ち上がり，口縁端部は丸味を帯びている。灰白色を呈した焼成不良の土器である。これら276～278の土器は275の土師器壺とは形式的にも下降するものであり，重複する64号住居址および掘立柱建物址等との関連が強い遺物であろう。



第62図　上の原35号住居址出土土器

上の原37号住居址（第63図）

D－5区に位置し，この南側に隣接して38・39号の2軒の住居址が並んでいる。規模は長軸（A－B）線上で4.32m，短軸（C－D）線上で3.17mの東西に長い長方形プランを呈し、床面積約13.2m²の小型の住居址である。長軸方位はN－65°－Eであった。住居址は南北に走る5条の耕作溝により攪乱され，この部分の床面・壁を失なっている。さらに覆土およびかなりの量の遺物も失われたものと考えられる。壁高は北壁で最高0.30m，東壁で最低0.15mを残していて，特に東壁・南壁側の削平が進行していた。床面には柱穴・炉址・周溝等の施設は皆無であった。

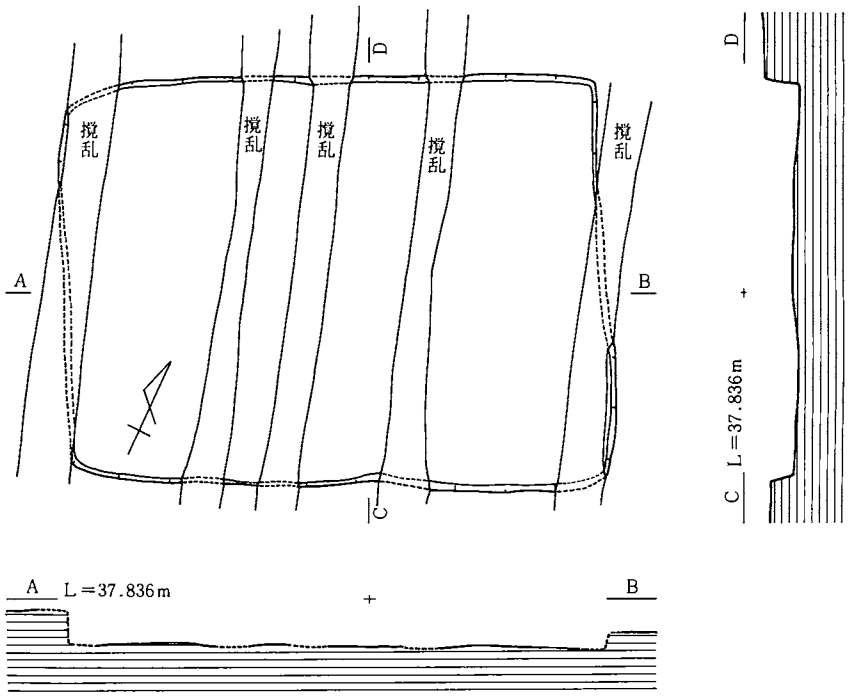
〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第63図）

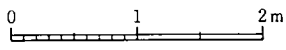
住居址覆土は上層が黒褐色土層で床面直上に炭化物・焼土粒が混じった灰褐色土層が薄く堆積していた。いずれも自然なレンズ状の堆積状態を示していた。出土遺物はすべて土師器で，しかも細片が多く正確な個体数を出すことは困難であるが，少なくとも50個体以上に上るであろう。これらの土器の内床面出土の土器は281の小型の壺1点のみで，他は上層から出土したものである。

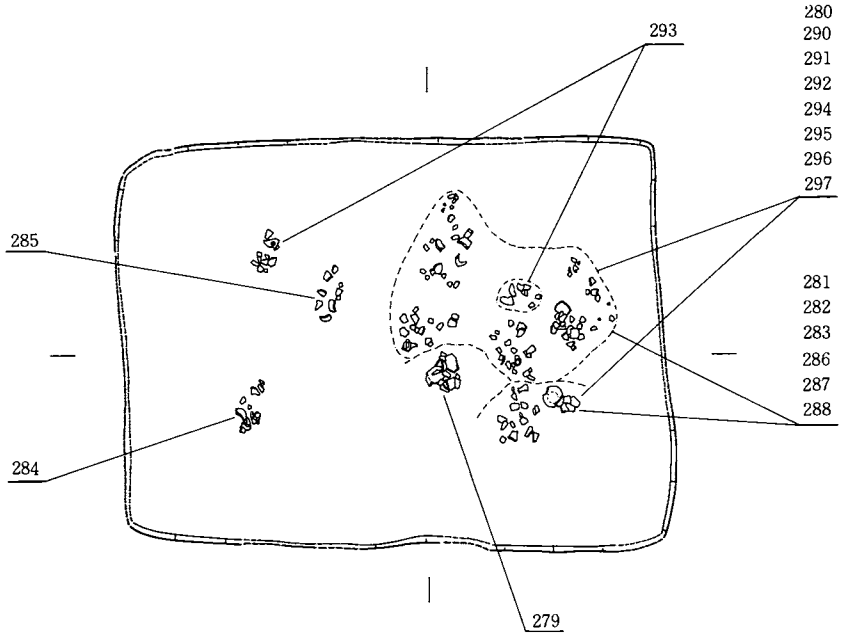
前述したように，住居址覆土は耕作溝により攪乱され，その際覆土中の土器のかなりの数が失われたと考えられる。従って旧状は住居址の中央部を中心にまとまった状態であったと推定される。又出土土器の中で壺・小型丸底土器・高杯及び台付壺のしめる割合が多く，特に高杯では赤色顔料を塗布されたものが多い点などを考慮すると，何らかの祭祀的行為に使用されたものと考えられる。さらに廃絶され埋没過程にある住居―単なる窪地としてかあるいは住居址を意識してかは不明―に一括して廃棄されたものではなかろうか。

〔出土遺物〕（第64図）

279はほぼ完形に復原できた甕である。胴部はやや長く口縁部は内湾気味に立ちあがり端部は角ばっている。外面は肩部に煮沸による炭化物が付着し、内面は胴部中位以下底部まで暗褐色に変色し器面が剝落している。280も甕で胴部外面にタタキ目が残っている。全体に薄い造りの土器である。281は小型の壺あるいは甕であろうか。内外面刷毛目調整のあとヨコナデ，胴部内面はヘラ削りである。282・283は複合口縁壺の口頸部破片で，いずれも頸部の段は不明瞭である。284は杯部か一体成形されたものである。285は小型器台の脚部でラッパ状に大きく開き端部に稜を有している。286～288は小型丸底土器で口縁部を欠失する288を除いては，口径が胴部径より大きいタイプである。289は台付小型壺で胴部は球形で，脚部は低く大きく開いてい



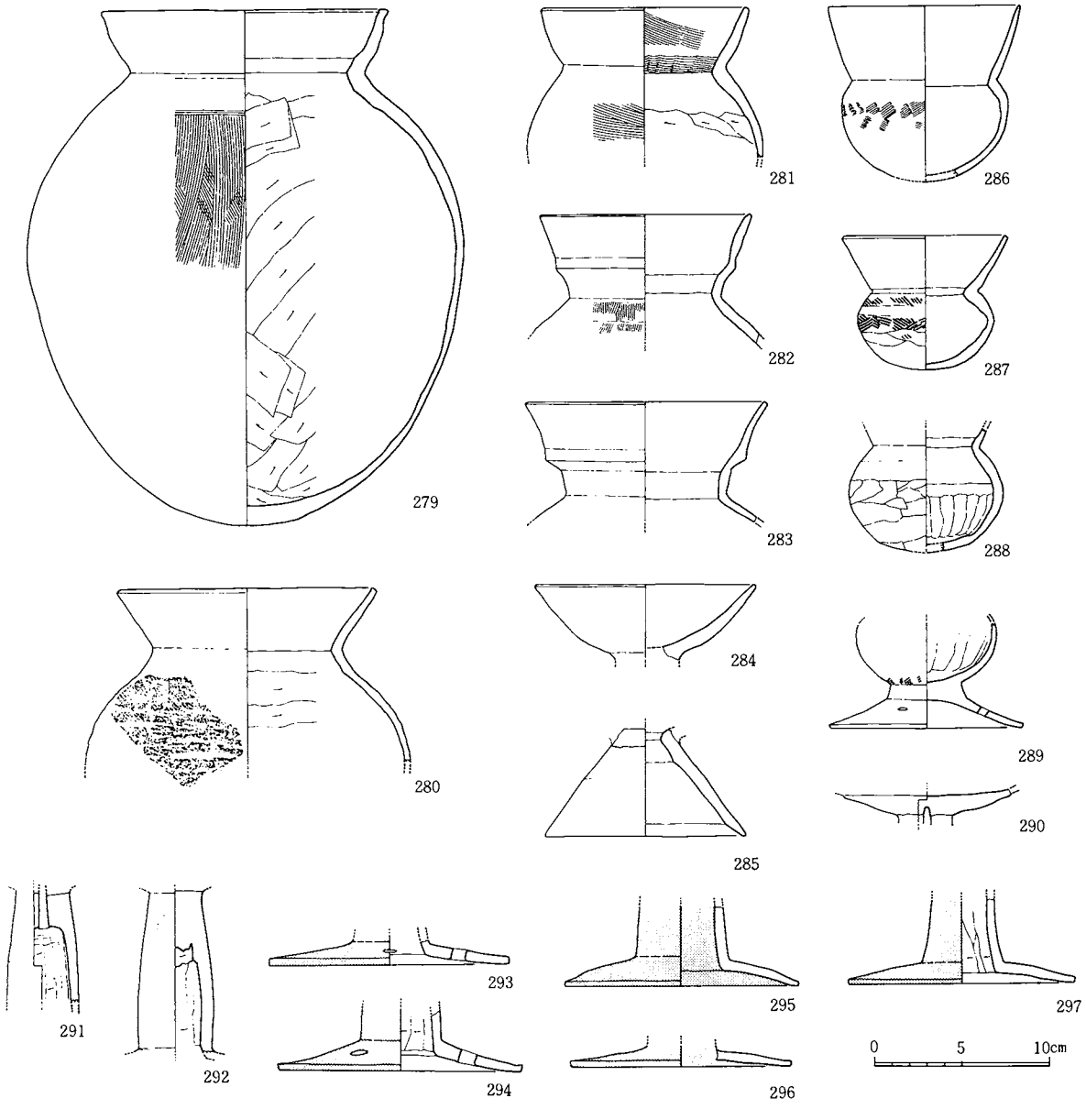




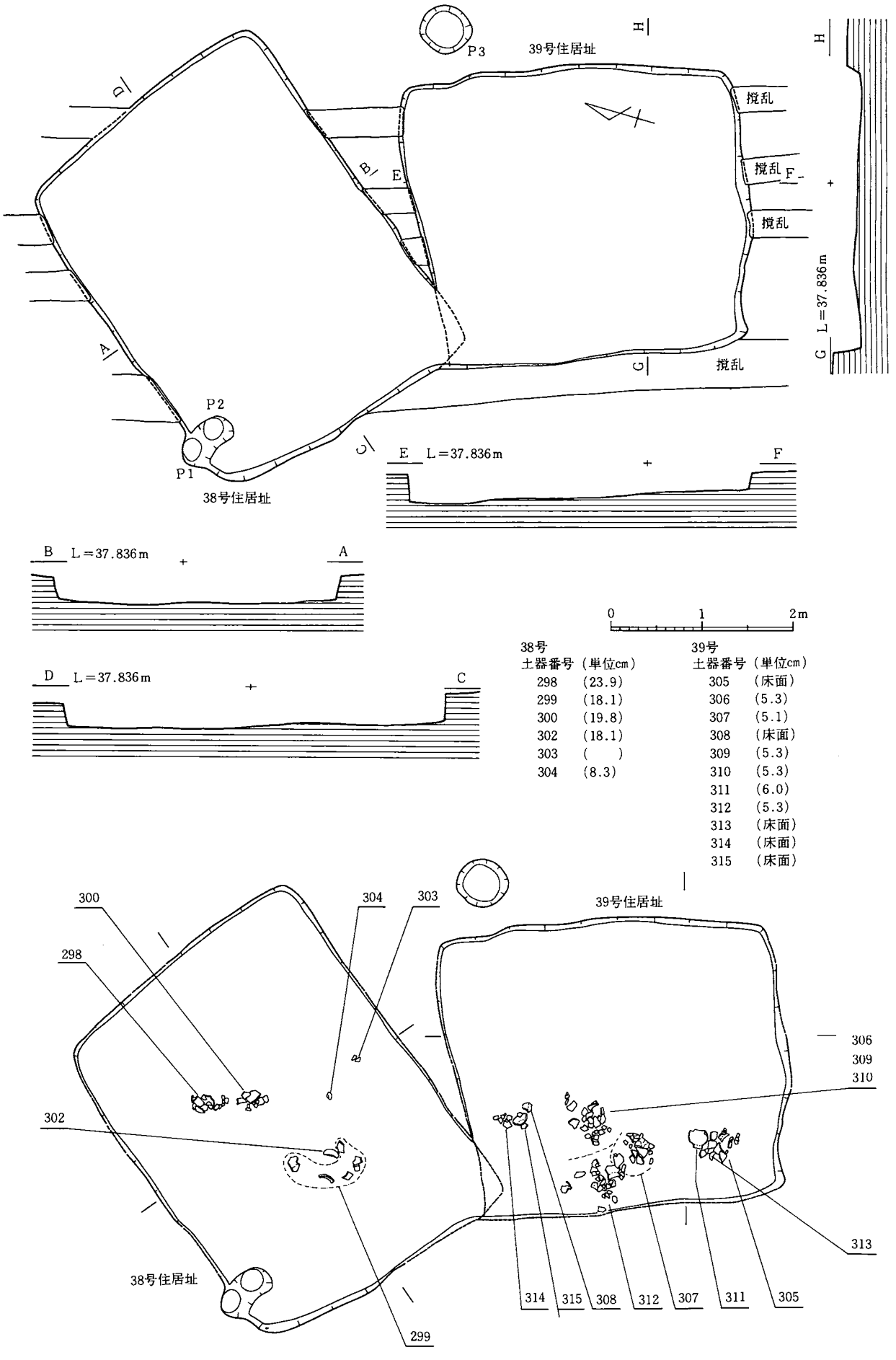
	土器番号	（単位cm）
280	279	(8.2)
290	280	(6.9)
291	281	(床面)
292	282	(6.9)
294	283	(8.4)
295	284	(7.5)
296	285	(　)
297	286	(7.5)
	287	(6.9)
	288	(9.4)
	290	(9.0)
281	291	(　)
282	292	(9.4)
283	293	(5.4)
286	294	(6.9)
287	295	(6.9)
288	296	(6.9)
	297	(6.9)

第63図　上の原37号住居址

る。290～297の8個体は高杯である。小破片が多く全体の形態を知ることができるものはないが，基本的には柱状部が細くしかも高いもので，裾部は強く屈折して開く。柱状部は内部をヘラ状の工具で削り取るが，中途で止まったままのもの（291・292）や柱状部内面から杯部に達する孔が穿たれたもの（290・291）等がある。なお290のような杯部に伴う柱状部は291のようなものであろう。また裾部は直線的に開くもの(293･294･296）や内湾気味に開き脹らむもの（295･297）等の変化があり，焼成前に円孔を穿ったものがある。これには3孔（293）と4孔（294）とがある。さらに293～297は赤色顔料が塗布され，これらも内外面に塗布したもの（295・296）と外面のみ塗布したもの（293・294・297）とが認められる。



第64図　上の原37号住居址出土土器



38号 土器番号	(単位cm)	39号 土器番号	(単位cm)
298	(23.9)	305	(床面)
299	(18.1)	306	(5.3)
300	(19.8)	307	(5.1)
302	(18.1)	308	(床面)
303	(　)	309	(5.3)
304	(8.3)	310	(5.3)
		311	(6.0)
		312	(5.3)
		313	(床面)
		314	(床面)
		315	(床面)

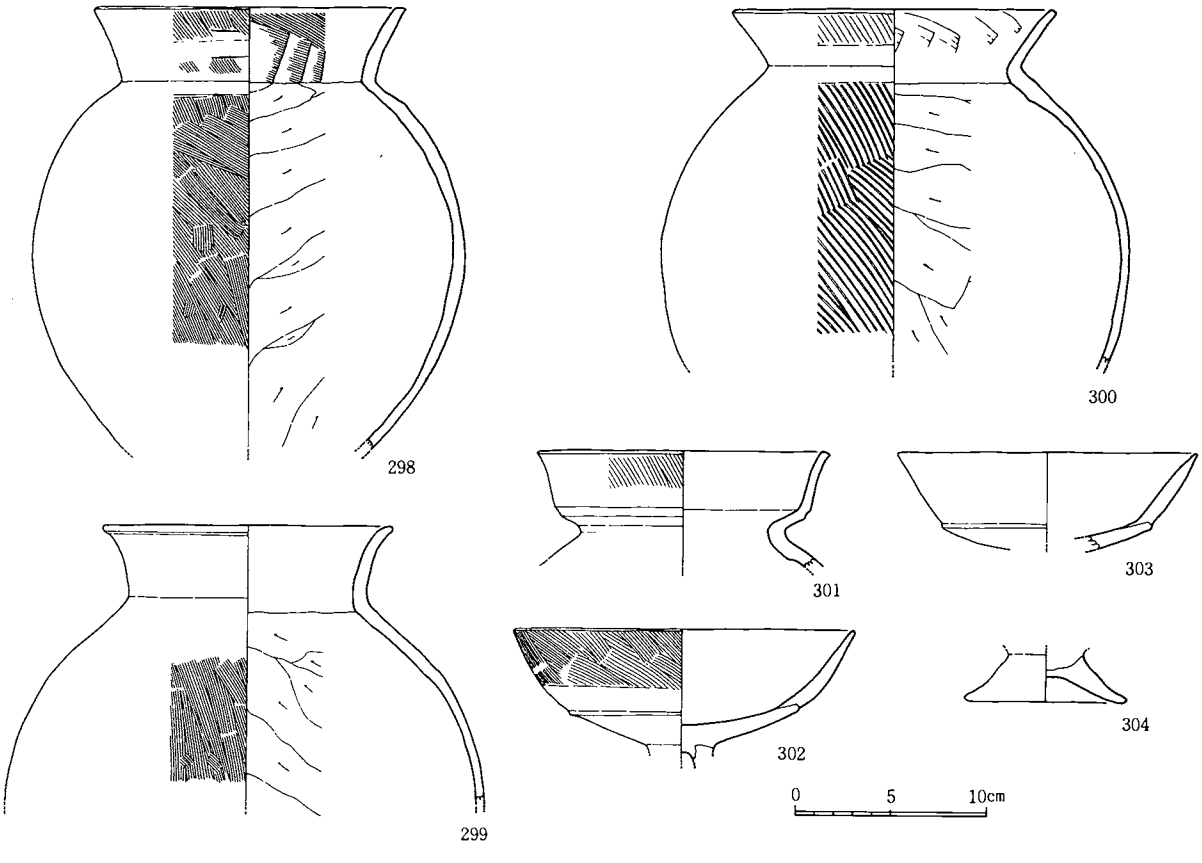
第65図　上の原38・39号住居址

上の原38・39号住居址（第65図）

大半はD－4区にあり，一部C－4区にも及んでいる。両住居址は一部分重複しているが，重複個所が撹乱されているため，前後関係を明らかにすることは出来なかった。

38号住居址の規模は長軸（C－D）線上で4.20m，短軸（A－B）線上で3.16m，床面積約12.8m²の小型の住居址である。長軸方位はN－39°－Eを指している。住居址は4条の耕作溝で撹乱されているが，いずれも床面までには達していない。壁高は概ね0.25～0.30m程残している。床面は中央部にわずかに高い部分があるが全体的には水平面を保っている。また硬化面の範囲は床面のほぼ全体に及んでいた。柱穴は西隅の住居内外に1個づつ2個を検出したが，本住居址自体に伴うものではない。その他炉址・周溝等は認められなかった。

39号住居址の規模は長軸（E－F）線上で3.79m，短軸（G－H）線上で3.12m，床面積約11.1m²で不整な長方形プランを呈する小型の住居址である。長軸方位はN－16°－Wであった。38号住居址から連続する4条の耕作溝により撹乱されている。床面は北壁側に移行するにしたがって深くなっていて，壁高は北壁で最高0.35mを測った。床面には柱穴・炉址・周溝等の施設は認められなかった。また床面には部分的に硬化面が確かめられたが，範囲を示すほどの面的な拡がりは認められなかった。



第66図　上の原38号住居址出土土器

〔住居址覆土・遺物出状態〕（第65図）

38・39号住居址とも覆土は灰褐色の単一土層からなっていたが，床面直上では焼土を多く含む部分と含まない部分があったが，全体として分層することはできなかった。38号住居址の出土遺物は土師器のみで，すべて覆土中に含まれたものである。撹乱によって失なわれたものもあると思われるが，ほぼ住居址の中央部分に集中して出土している。39号住居址の出土遺物も土師器のみであった。このうち床面出土の土器は305・308・313・314・315の5個体で，他の土器はすべて覆土中のものであるが，比較的覆土の下層から出土したものである。

〔38号住居址出土遺物〕（第66図）

298～300は甕でいずれも明瞭な煮沸の痕跡が残されている。口縁部の形態は「くの字」状に外反し，端部が角ばるもの（298・300）と頸部が強くくびれ口縁部が大きく外湾するもの（299）とがある。内外面の調整・仕上げの手法は定型化したものであるが，粗い刷毛目のもの（300）や内面のヘラ削りの方向に個体差が認められる。301は頸部に段を持つ壺である。頸部は強くくびれ段から上位は外湾気味に立ち上がる。高杯はいずれも杯部の破片で扁平な半球形を呈するもの（302）と杯上半部と下半部の接合部で屈折するもの（303）とがある。304は小型の脚部で，接合部から剝離している。恐らく小型の壺か鉢に伴うものであろう。

〔39号住居址出土遺物〕（第67図）

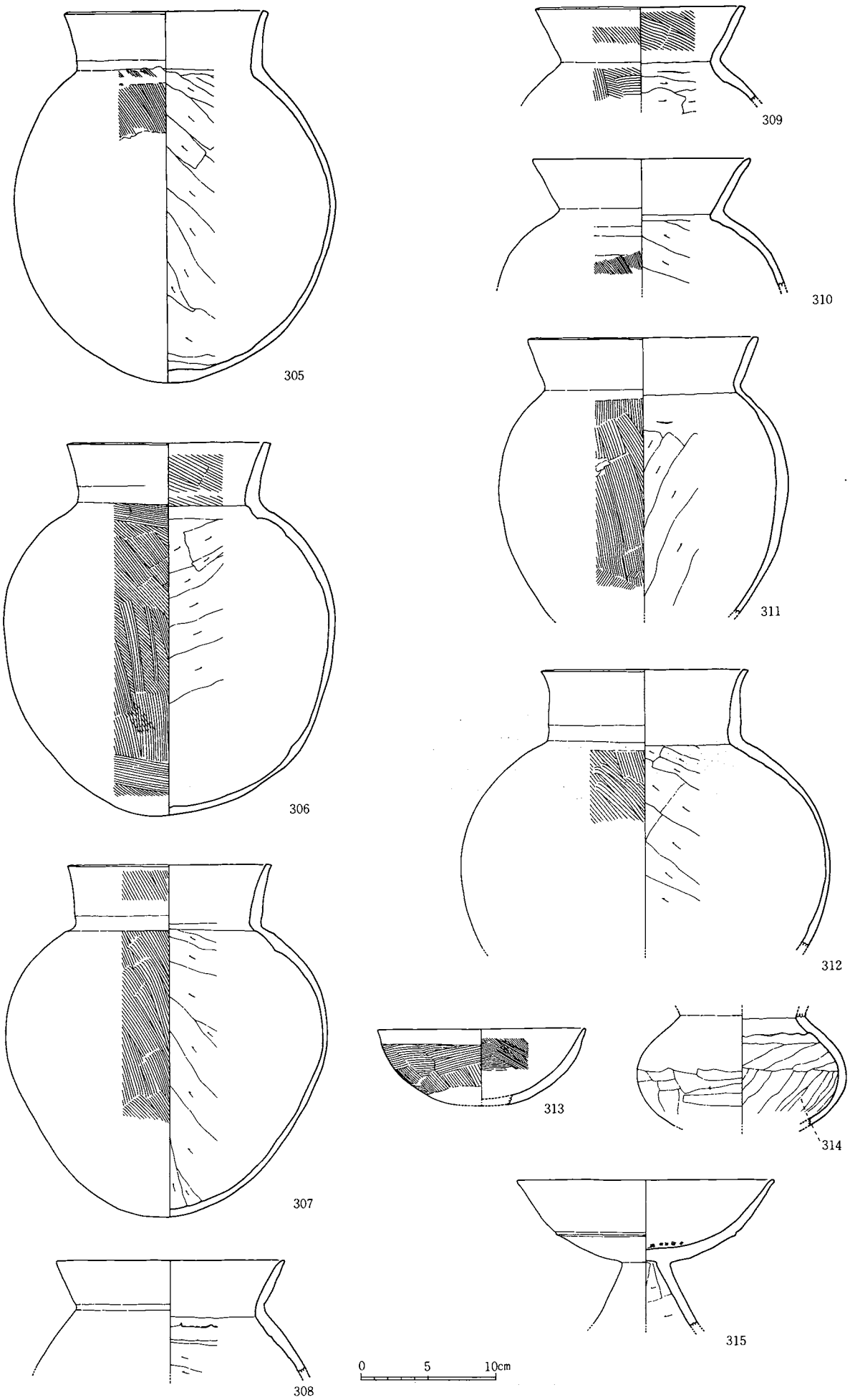
305～312は甕で口縁部に形態によって2つに大別することができる。a類＝口縁部は外湾気味に直立し，胴部は球形に近いもので，特徴的な形態の一群の土器である。305～307がこの類に属する。b類＝口縁部はa類と同様直行するが端部で小さく外反し，胴部は強く張っている。312がこの類である。c類＝頸部が強くくびれ，口縁部は大きく外反するもので，308～311がこの類である。以上の3類とも内外面の調整・仕上げ手法は基本的には同一である。314は扁平な球形胴部の中型の壺である。313は半球形の体部の杯で，内外面刷毛目調整され口縁端部はヨコナデで仕上げている。全体に厚い造りの土器である。315は扁平な半球形の杯部にラッパ状に開く脚部を有する高杯である。

上の原40号住居址（第68図）

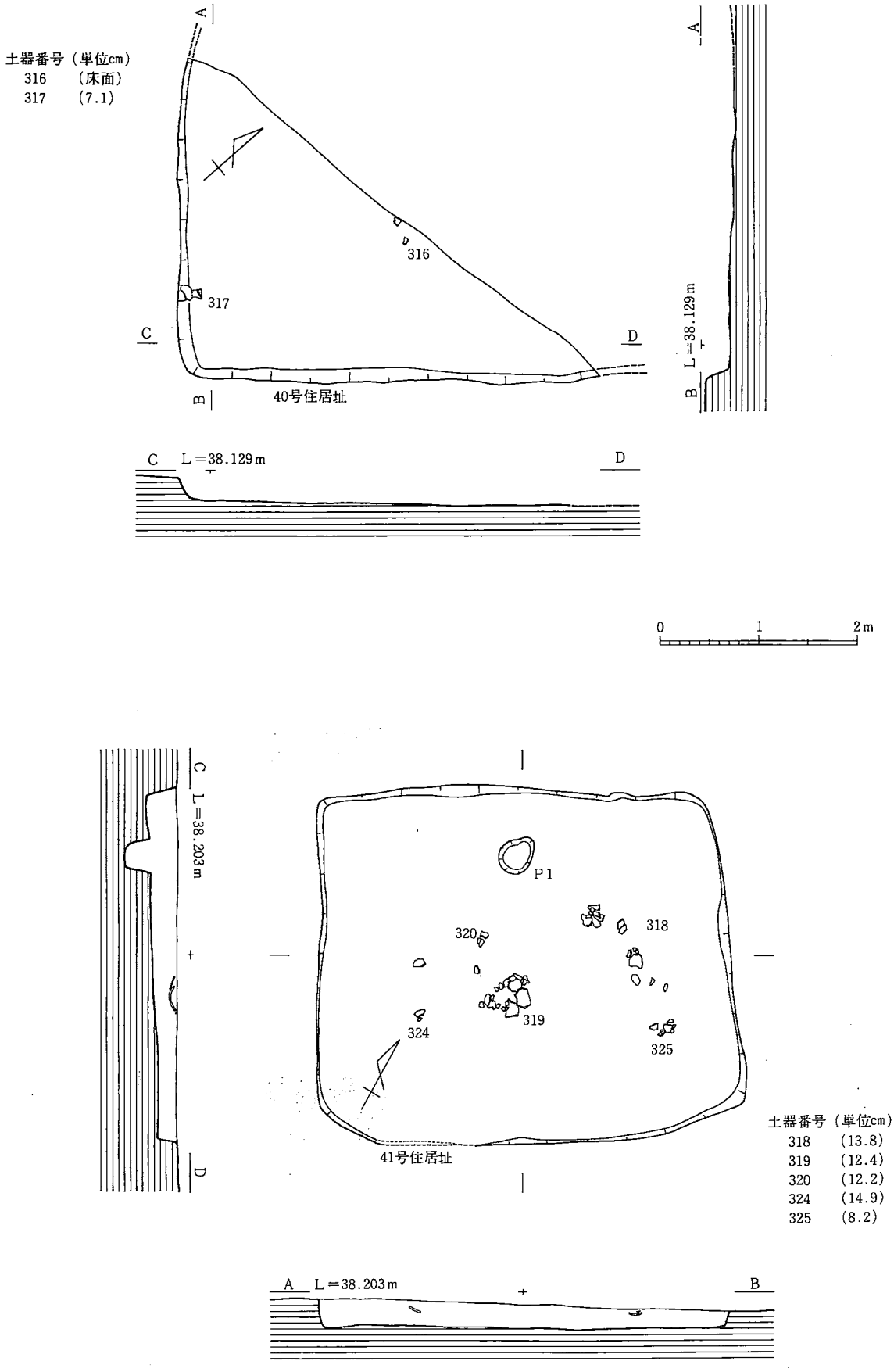
C－6区にあり，この南側には41～44号の4軒の住居址が集中している。住居址は北側の二辺が削平され失なわれている。残された二辺の規模は西辺で4.2m，南辺で3.15mまで確認できた。他の住居址の例からして，長軸方向はC－D線上になるものと思われる。もしこのように仮定すると，長軸方位はN－41°－Eとなる。壁高は西壁で最大0.35mを残している。床面はほぼ全体に硬化面が残されていたが，残存部分には柱穴・炉址等は認められなかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第68図）

住居址覆土は灰褐色の単一土層で，全体的に炭化物・焼土粒を均等に含んでいた。出土遺物は4個体の土師器で，このうち床面出土のものは316の杯1個体分にすぎない。住居址自体の残存状態が悪く，大半のものは失われたものと考えられる。また317の高杯も壁に沿った覆土下層に出土していて，住居址廃絶直後に流れ込んだものであろう。



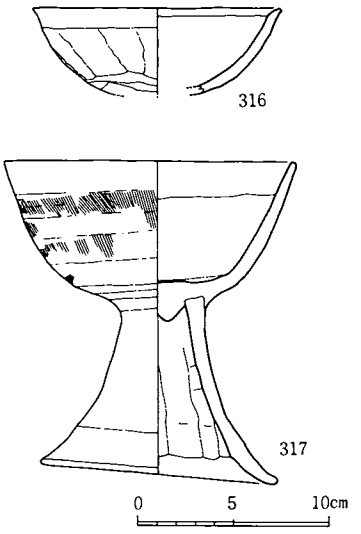
第67図　上の原39号住居址出土土器



第68図　上の原40・41号住居址

〔出土遺物〕（第69図）

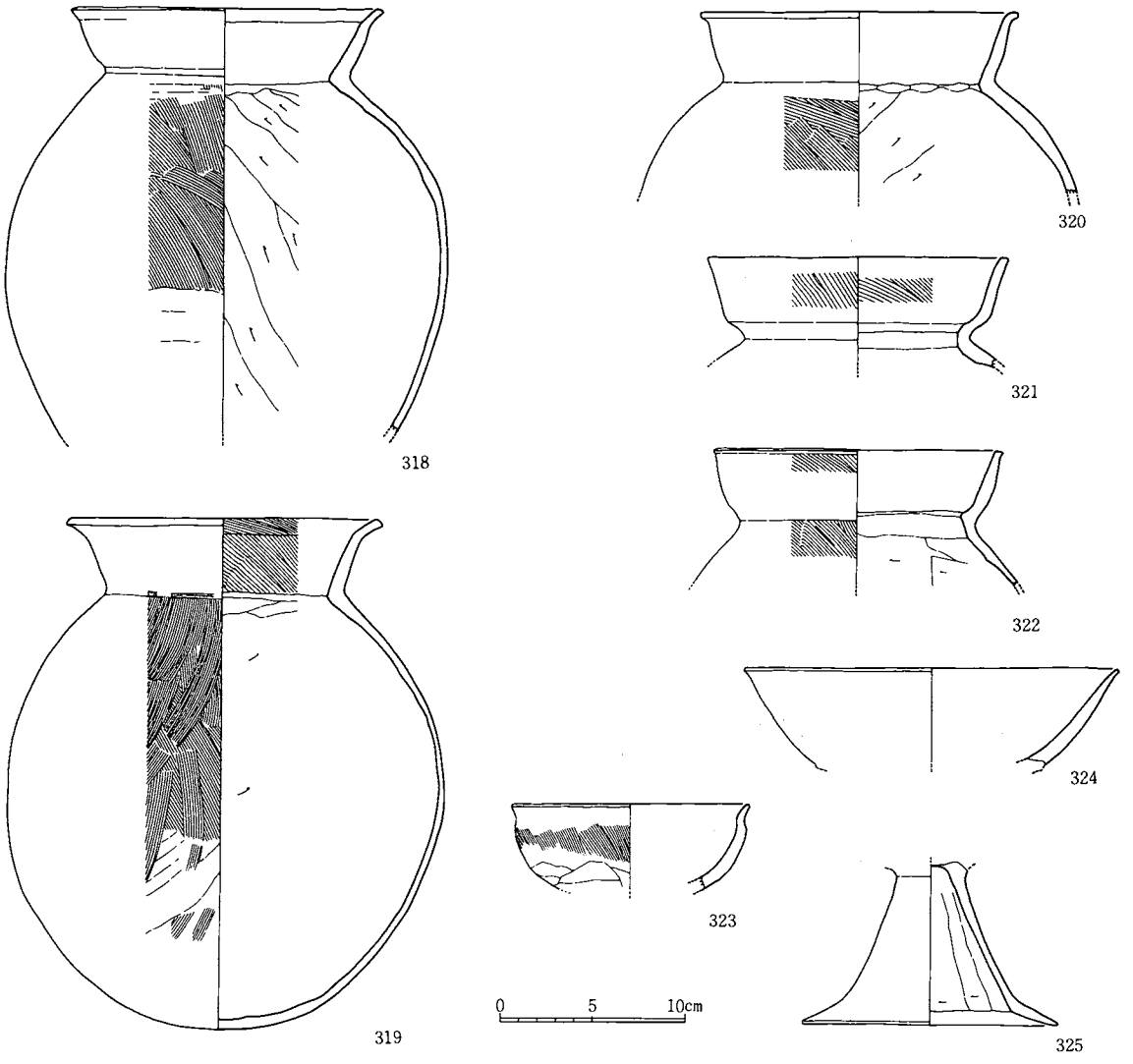
316は扁平な半球形状の体部の杯で，口縁端部は内面が強くヨコナデされこの部分に稜が巡る。317の高杯は杯部が椀のように深く一体成形されたものである。脚部は高く裾部ではラッパ状に開いている。全体的に粗い造りの土器である。



第69図　上の原40号住居址出土土器

上の原41号住居址（第68図）

C－6区に位置し，40号住居址の南東部に隣接している。規模は長軸（A－B）線上で4.21m，短軸（C－D）線上で3.58m，床面積約14.2m²の小型で長方形プランの住居址である。長軸方位はN－61°－Wであった。壁高は北壁で最高0.30mで，床面は北・西壁側が低く傾斜している。床面全体に硬化面が認められ，床面中央の北壁側に柱穴1個を検出した。



第70図　上の原41号住居址出土土器

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第68図）

住居址覆土は暗褐色で下部に移るに従って徐々に灰褐色に変化している。また覆土全体に炭化物を多く含み，床面直上では焼土を含む割合が多くなっている。出土遺物は土師器のみで総て上層の暗褐色土層から出土したものである。これらは住居址廃絶後の埋没過程で混入したか，人為的に廃棄されたもので，本住居址自体の年代を示すものではない。

〔出土遺物〕（第70図）

318～320は頸部が直線的に外反し，口縁端部で屈折して外方へひらいている。3個体とも器体内外面に煮沸の痕跡が明瞭であるので，甕として取り扱った。この一群の土器は甕の中でも特徴的なもので，他の住居址からも出土しているが，隣接する塚原古墳群中の琵琶塚古墳（前方後円墳）の後円部周溝出土の甕に類似する点注目される。321･322は小破片のため甕か壺かの区別が困難であるが，頸部の段の状態から321は壺，322は甕であろう。323の杯は底部を欠失し，口縁部でいったんくびれて小さく外反する。324は高杯の杯上半部破片で，やや大型品である。325は高杯脚部で裾部で屈折して外方へ開いている。

上の原42・43・44号住居址（第71図）

C－6区の南端に位置し，42～44号住居址の3軒は重複している。

42号住居址の規模は長軸（C－D）線上で3.7mで，短軸線上では43･44号住居址と重複しているために計測することはできない。おそらくC－D線上が長軸方向を指すものと思われる。長軸方位はN－27°－Wであった。床面は中央部の狭い範囲に硬化面が残され，その他柱穴・炉址等は認められなかった。

43号住居址の規模は長軸（A－B）線上では南西側が42・44号住居址と重複しているため不明であるが，短軸（E－F）線上で約3.43mを測った。壁高は0.20～0.30mを残している。床面は中央部に硬化面が残り，北辺に沿う西側に周溝状の溝が認められた。また床面には柱穴が5個検出されたが，P1･P2については本柱居址のものか44号住居址にともなうかを確認することはできなかった。他の3個の柱穴の配列も不規則であった。床面の南西部，硬化面の中に炉址が設けられていたが，焼土混じりの暗褐色土層で充たされていた。

44号住居址は住居址の南隅を残すのみで，大部分が42･43号住居址と重複していて規模・プラン等を，明らかにできなかった。

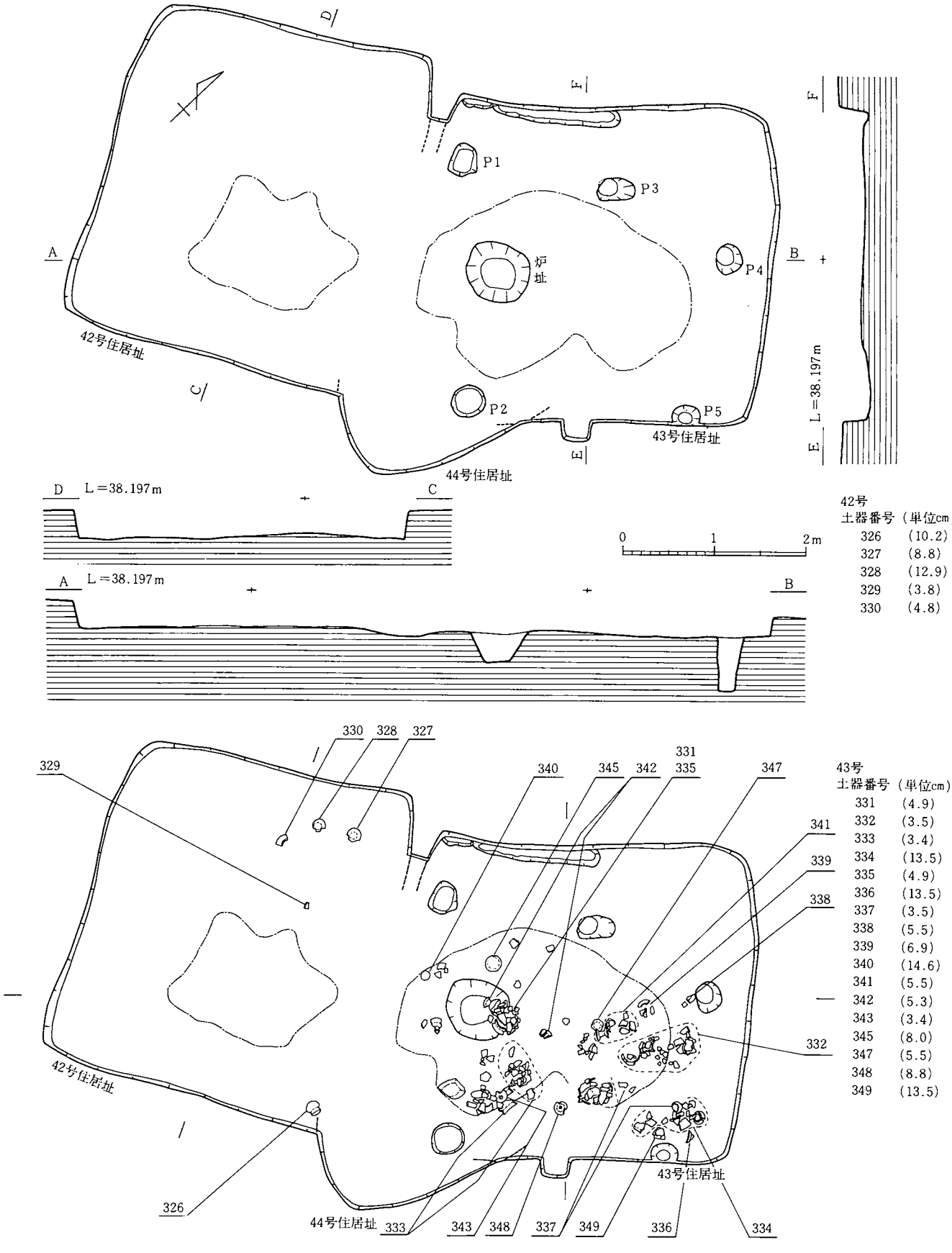
以上の3軒の住居址は重複部分が南北に走る耕作溝によって撹乱され，前後関係を明確にすることは出来なかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第71図）

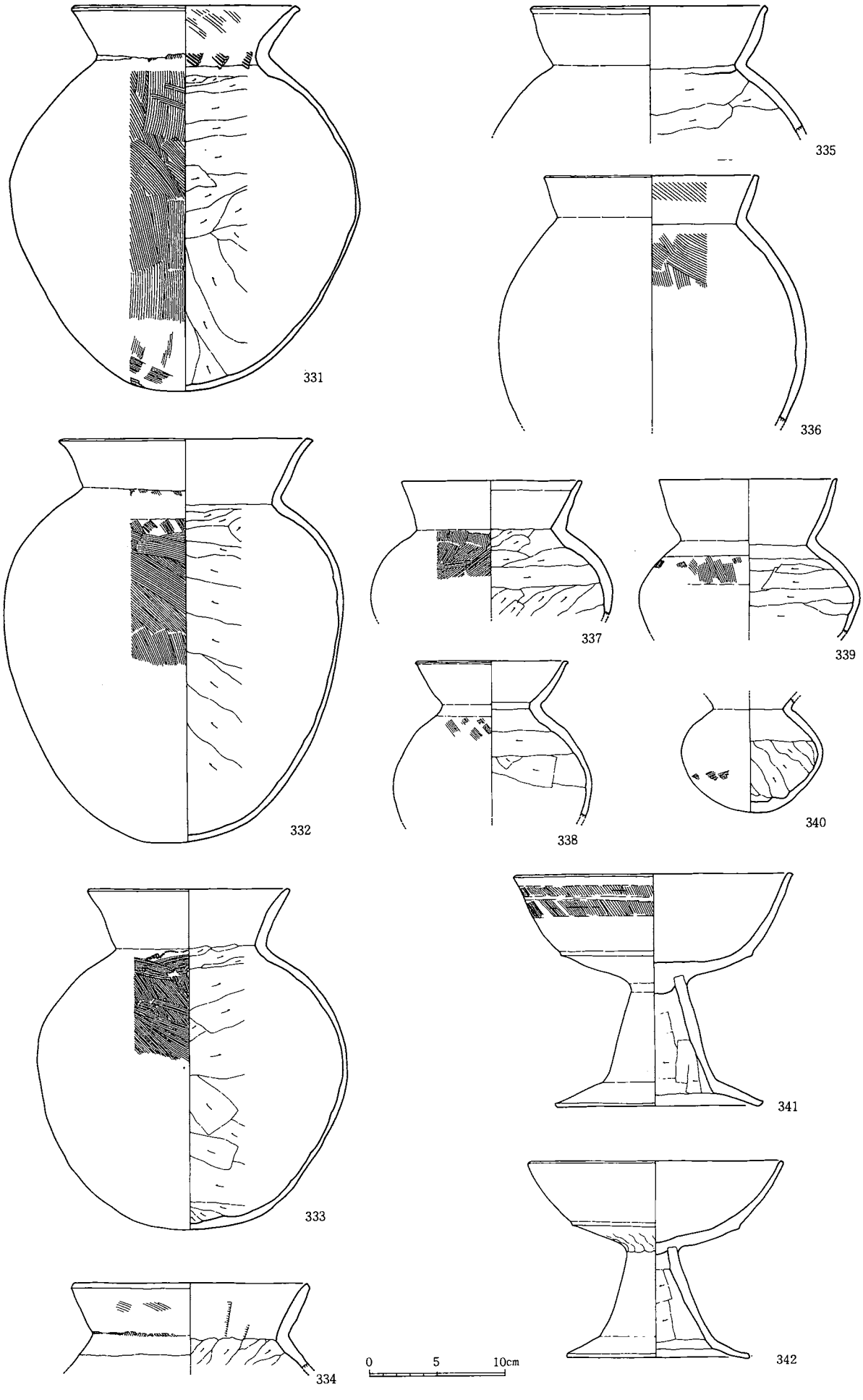
3軒の住居址の出土遺物は326～330の5個体が42号住居址覆土出土のもので，他はすべて43号住居址覆土に出土したものである。42・43号住居址とも床面に密着したものはなかった。おそらく住居址廃絶後に廃棄されたものであろう。

〔42号住居址出土遺物〕（第72図）

326は扁平な球形胴部を持つ壺で，頸部は強くくびれ口縁部は内湾気味に開く。胴部下半から底部はヘラ削りが施され，他の部分はヨコナデで仕上げられている。330は高杯杯部破片で，接合部外面の段から上部は内湾気味に立ち上がり端部で外湾している。327～329の杯はいずれも半球形の体部で，口縁端部が直行するもの（327･329）と口縁端部が小さく外反するもの（328）とがあるが，内外面の調整は体部中位以下をヘラ削



第71図　上の原42・43・44号住居址

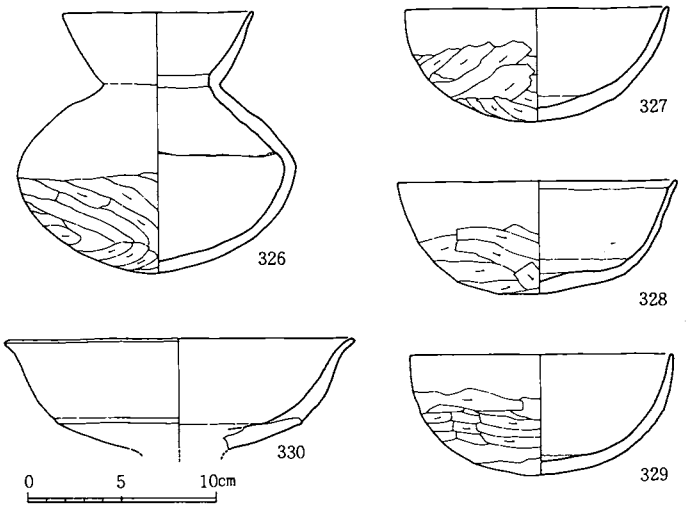


第73図　上の原43号住居址出土土器　その1

り，他の部分はヨコナデで仕上げるなど，共通点が多い。

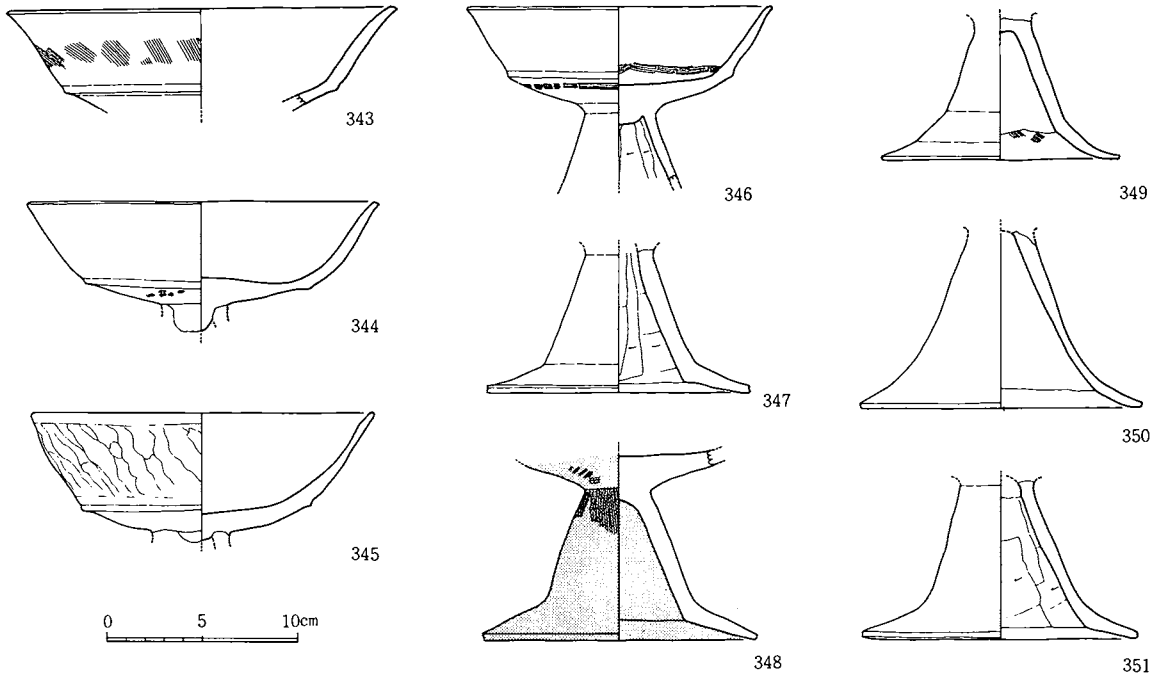
〔43号住居址出土遺物〕（第73・74図）

住居址覆土中からは計30個体以上の土器が出土したが，すべて土師器であった。このうち21個体を図示した。331の甕は頸部が強くくびれ口縁部は大きく外反する。胴部最大径は中位よりやや上部にある。332・333の甕も口縁部は外反するが開き具合は331より弱い。334～336も甕で口縁部は直線的に外反するもの（334・336）とやや内湾気味のもの（335）とがある。



第72図　上の原42号住居址出土土器

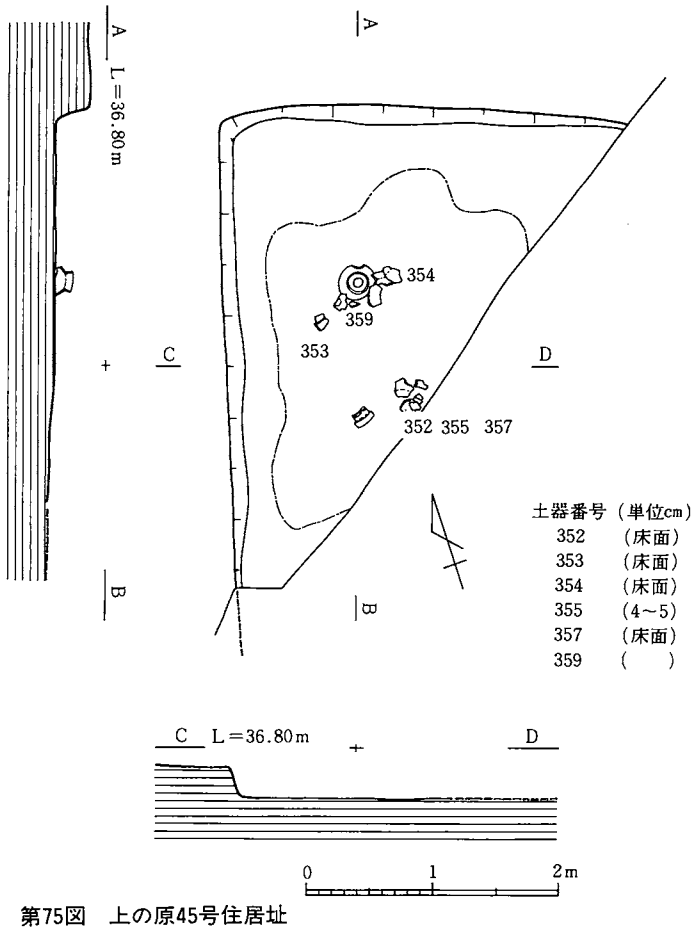
337～339は中型の壺でいずれも胴部中位以下を欠失する。胴部は球形に近く，頸部のくびれには個体差がある。340は小型丸底土器で口縁部を欠失する。341～351は高杯で，完形に復原できたものは2個体にすぎない。341・342の杯部は深く，脚柱状部は裾部に移行するにしたがって開いているが，裾部との境は比較的明瞭である。これらの高杯に類似するものとして345の杯がある。また杯部には口径に比べて浅い一群（343・345）がある。その他の脚部には341・342の脚部と同様に柱状部と裾部との境が比較的明瞭なもの（347・348）とラッパ状に開くタイプに近いもの（349～351）とが認められる。



第74図　上の原43号住居址出土土器　その2

上の原45号住居址（第75図）

Ｂ－0区に位置し一部Ｂ－1区に及んでいる。住居の北東側には農道（凹道）があり，これによって全体の3分の2近くが失われている。また住居のコーナーは一ヶ所確認したにすぎず，したがって規模・長軸方位については不明である。残存部における硬化面の範囲等からみれば小規模の住居址であった可能性が強い。床面には明瞭な硬化面が認められたが，柱穴・炉址等については確認出来なかった。



第75図　上の原45号住居址

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第75図）

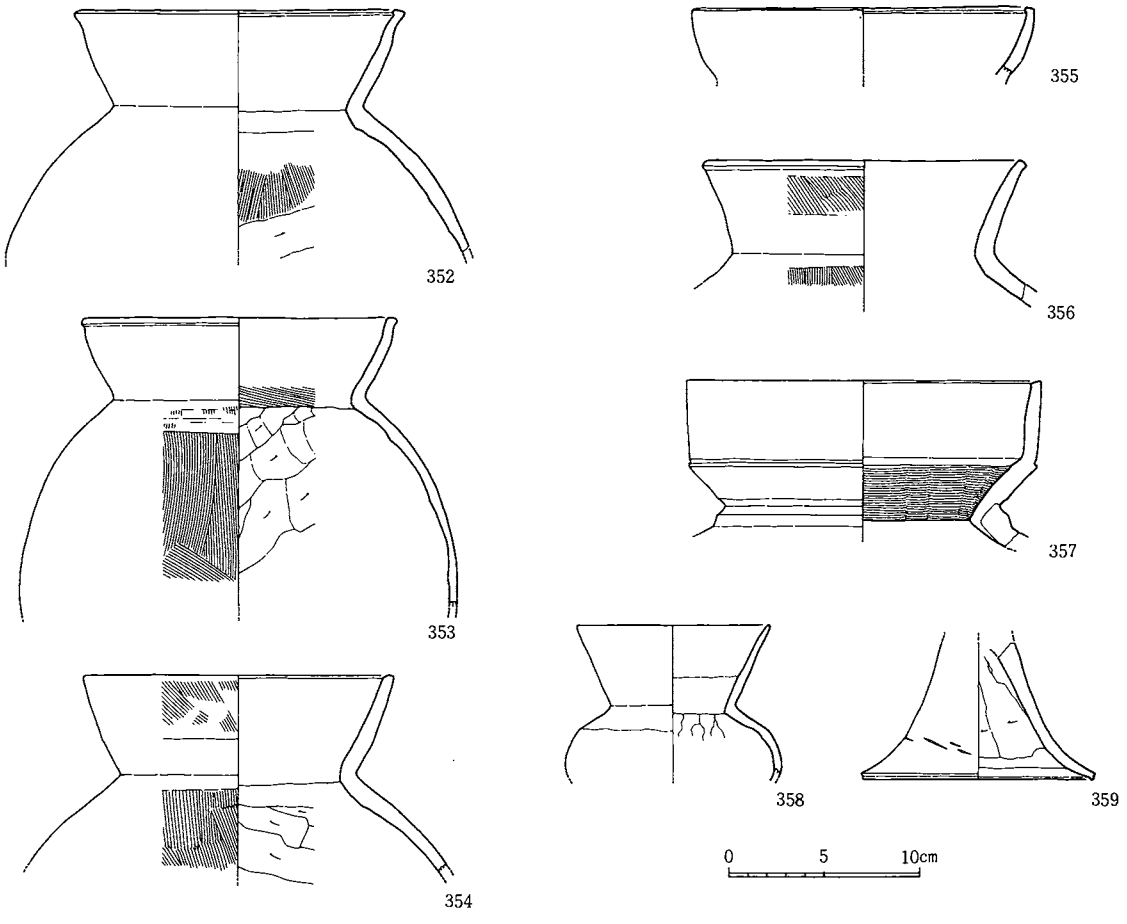
住居址覆土は灰褐色の腐植土で炭化物・焼土粒を多く含み，分層することは出来なかった。出土遺物は土師器のみで計8個体が出土し，8個体すべてを図示した。これらのうち353・354・355・359の4個体が床面出土のもので，他は覆土中に含まれていたものである。床面出土のものも完形品はなく，住居廃絶時に放棄されたものと推定される。

〔出土遺物〕（第76図）

甕は5個体出土した。352は口縁部は高く外反して端部で内側につまみ出されている。353・354は口縁部が内湾気味に立ち上がり，355では内湾して立ち上がり口縁端部内面が小さくつまみ出されている。356は頸部のくびれが弱く，口縁部も直立気味に外反する。残存部には煮沸の痕跡は無いので，甕か壺かの区別は困難である。357は複合口縁壺で，頸部は強くくびれ屈折したのち口縁部は直行する。調整・仕上げとも丁寧で，厚い造りの土器である。358は小型丸底土器で，胴部は扁平で頸部は強くくびれ，口縁部は高く大きく開いている。口径は胴部径より小さいタイプのものである。

上の原46号住居址（第77図）

Ａ－１区とＡ－２区との間にあり、調査区内では最も西端に位置している。住居址の規模は長軸（Ａ－Ｂ）線上で5.75m，短軸（Ｃ－Ｄ）線上で4.84m，床面積約26.1m²の中規模の住居である。平面プランは四隅がやや丸味をおびた長方形を呈している。壁高は南壁で最高0.30mで，北壁と西壁側は削平されたのか低くなっている。床面は中央部が高く周縁部が低くなっているが，全体的には水平面を保っている。床面の北西部隅には貯蔵穴状の落ち込みがみられ，また床面の西半分に柱穴５個を検出したが，いずれも0.20m以下の浅いものであった。床面には中央部を中心に硬化面が明瞭に残されていた。なお住居址の長軸方位はＮ－14°－Ｅであった。



第76図　上の原45号住居址出土土器

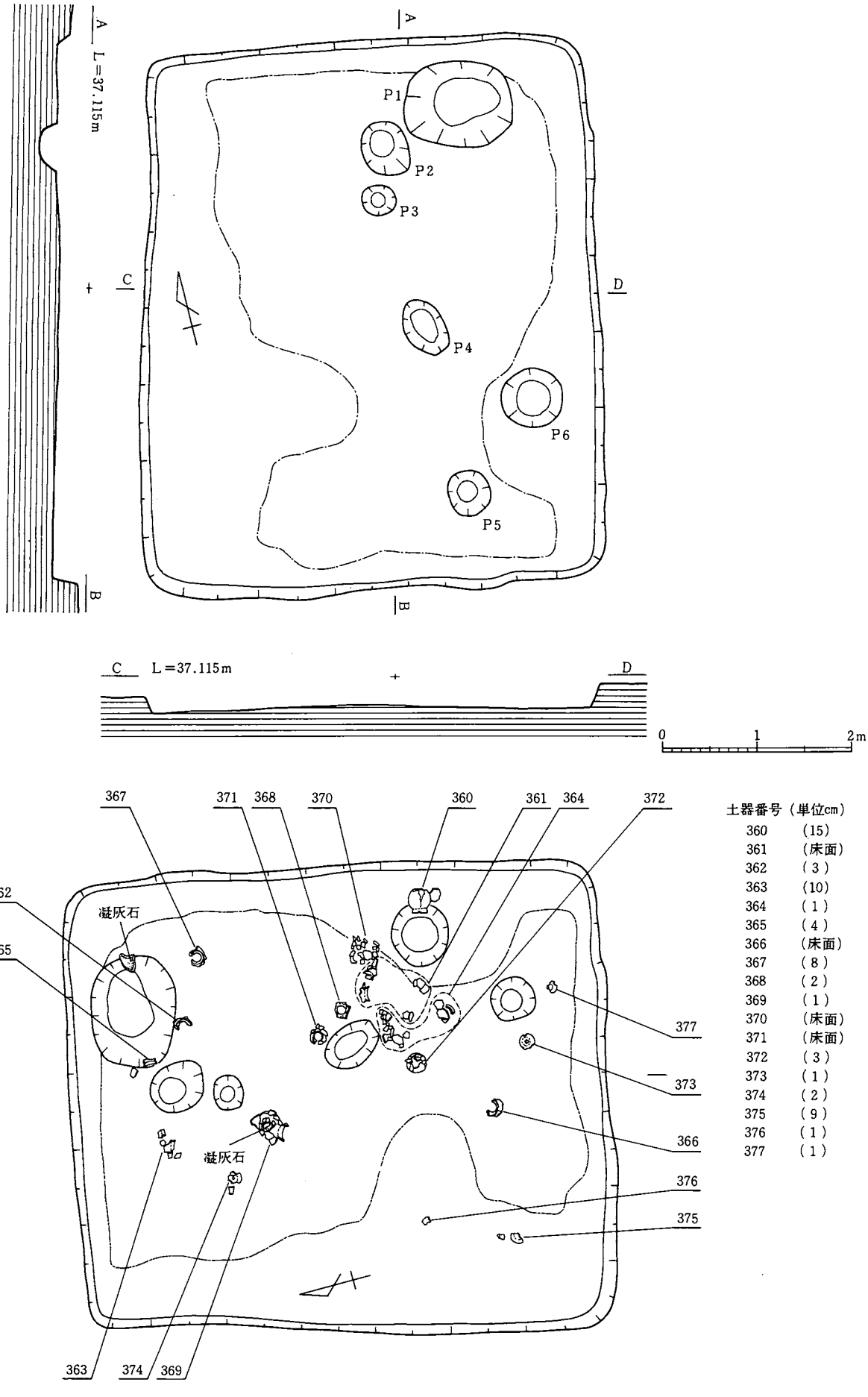
〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第77図）

住居址覆土は灰褐色土層の単一土層で，炭化物や焼土粒を多く含んでいた。おそらく上部から削平されたために，覆土上層は消滅したものと考えられる。出土遺物のうち土器は土師器のみであった。計21個体が出土しこのうち18個体を図示した。18個体のうち361・366・370・371の４個体は床面に密着した状態で出土し，残る14個体のなかで360・363・367・375以外は床面には密着はしていないが，床面から１～４cmの覆土下部に出土したものである。

また貯蔵穴状の落ち込み内と369の壷の中に拳大の凝灰岩が出土した。凝灰岩は軟質で周囲が風化磨滅していて，加工痕の有無は判明しない。この種のものは他の住居址からも出土していて，何らかの用途のために住居址内に持ち込まれたものであろう。不幸にして今回の調査では用具として形態を備えたものは出土していない。他の遺跡の竈を有する住居址では，竈の袖部や支脚としてこの種の石材が使用されることが多々あり，こうした観点から注目していく必要があろう。

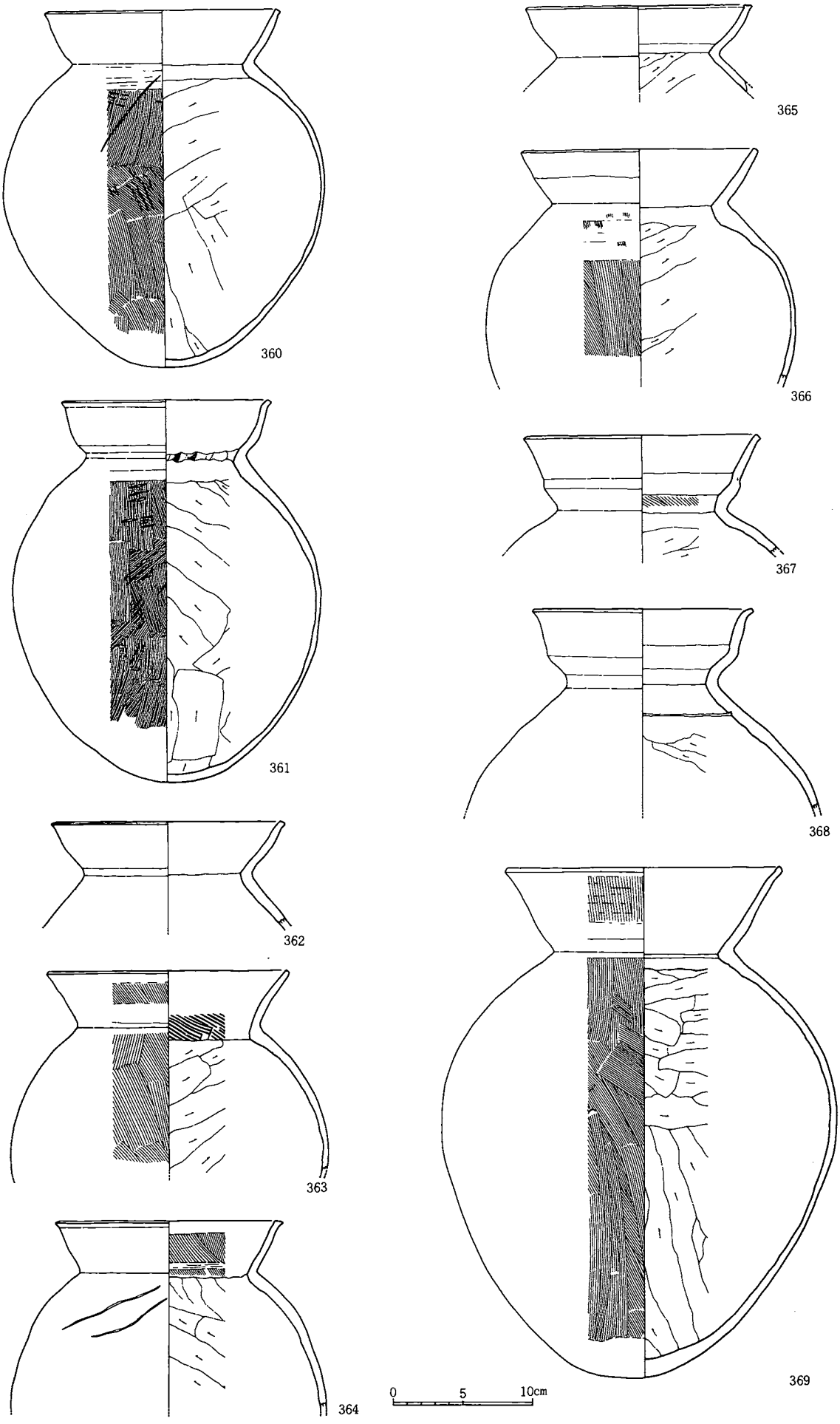
〔出土遺物〕（第78図・79図）

甕は９個体分が出土し７個体を図示した。360は口縁部が内湾気味に立ち上がり胴部がやや長く最大径が中位以上にある。外面は刷毛目調整されているが，肩部にヨコないし右下がり，胴部に右下がりのタタキ目がのこっている。胴部内面はヘラ削りが施されている。361も360の形態と類似するが，外面のタタキ目の方向が異なっている。その他の甕は破片で全体の形態を知ることが出来るものはない。362・364・365・366の口縁部は内湾気味，363は外湾気味の口縁部を有している。内外面の調整は360・361の甕と基本的に同様である。壷は６個体あり，４種に大別できる。367・368の壷は複合口縁の壷であるが，頸部の段は不明瞭である。369は単純口縁の大型壷でほぼ完形に復原できた。胴部下半部には炭化物が付着しているが，煮沸によるもの



土器番号	(単位cm)
360	(15)
361	(床面)
362	(3)
363	(10)
364	(1)
365	(4)
366	(床面)
367	(8)
368	(2)
369	(1)
370	(床面)
371	(床面)
372	(3)
373	(1)
374	(2)
375	(9)
376	(1)
377	(1)

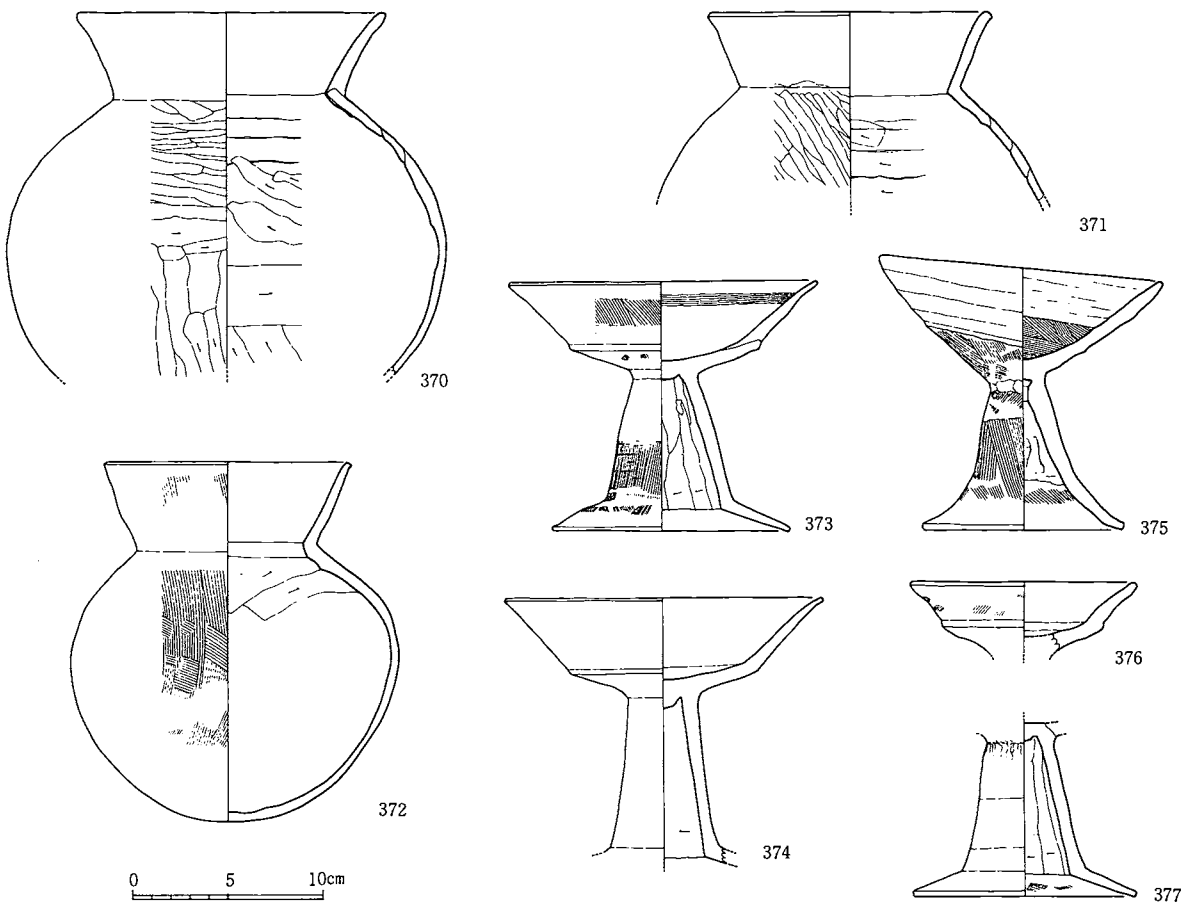
第77図　上の原46号住居址



第78図　上の原46号住居址出土土器　その1

ではない。370・371の壷は球形胴部で口縁部は外湾気味に開く。外面はヘラ削りないしヘラ磨き，内面はヘラ削り調整が施されている。いずれも薄い造りの土器で遺跡全体でも類例は少ない。高杯は6個体あり5個体を図示した。373・374は杯上半部と下半部の境で屈折し，口縁部は大きく開いている。脚部は柱状部と裾部の境界が明瞭で，373の柱状部が脹らみ裾部も内湾しているのに対し，384の柱状部は直線的で高くなっている。375の杯部は鉢状で上半部と下半部の段は残っているが，形骸化している。脚部は高いが柱状部と裾部との境は不明瞭で，造りも粗雑である。377は小型の高杯で杯上半部が著しく低い特異な形態である。377の脚柱状部は部分的に脹らみを持つところとそうではないところがあり，373と374の脚部との中間的な形態である。

なお360の甕には肩部外面に一条の沈線，364には二条の沈線のヘラ記号が刻まれていた。



第79図　上の原46号住居址出土土器　その2

上の原48号住居址（第80図）

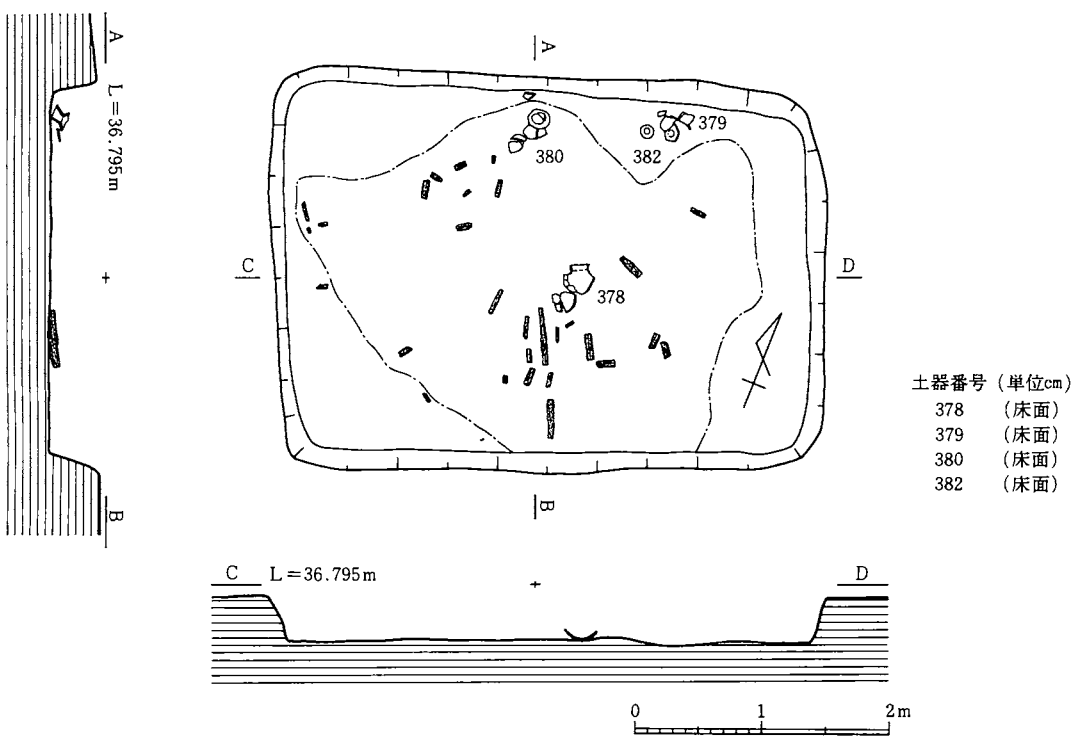
C－1区に位置し，一部D－1区に及んでいる。住居址の規模は長軸（A－B）線上で4.37m，短軸（C－D）線上で3.10m，床面積約9.60m²の小型の住居址である。平面プランは東西方向に著しく長い長方形を呈している。また長軸方位はN－68°－Eであった。壁高は南壁で最高0.42m，北壁で最低0.35mで，全体的に残存状態は良好であった。床面は四隅を除いて硬化面が残っていて，炭化した建築部材が床面に密着した状態で出土した。こうした状況から本住居は火災によって放棄されたものと考えられる。また柱穴・炉址等の施設は認められなかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第80図）

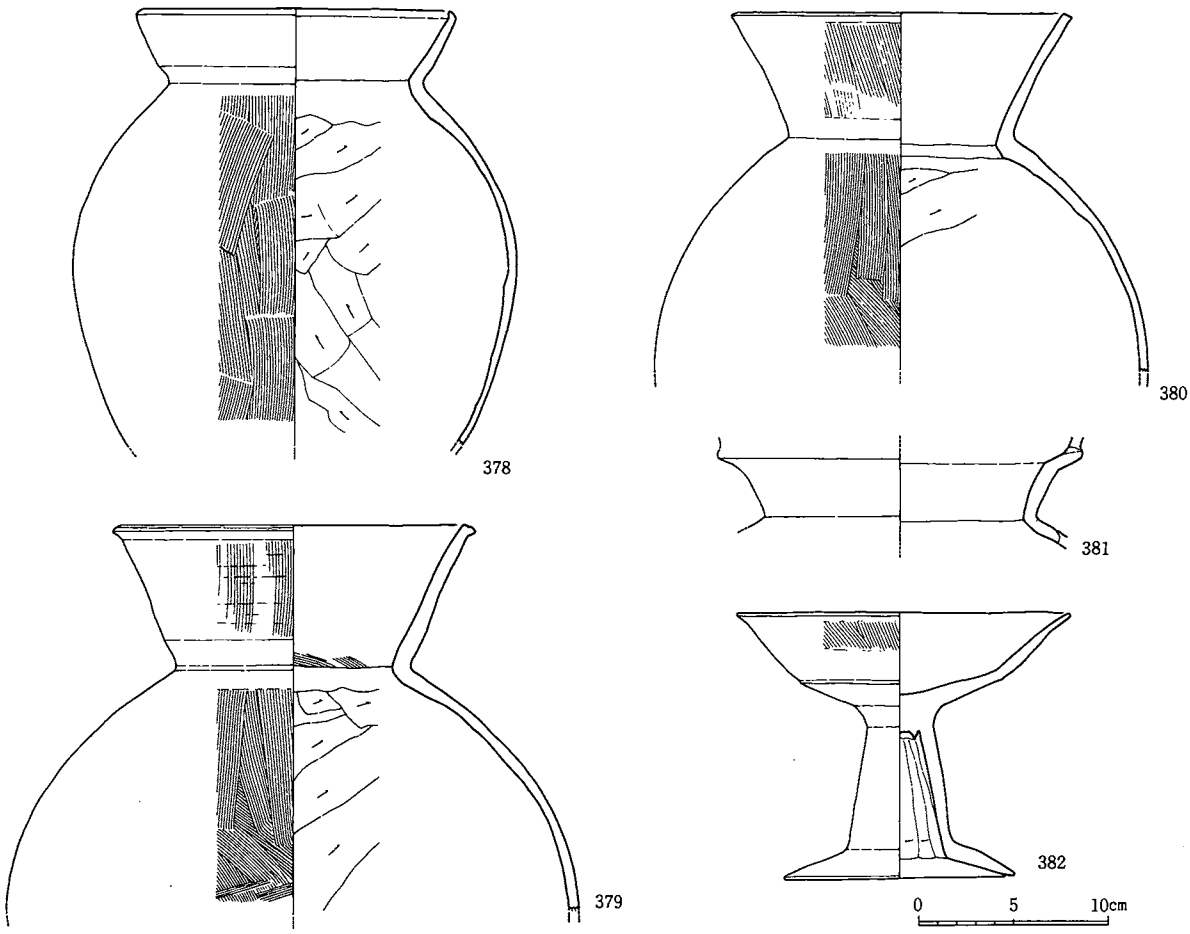
住居址覆土は上層では暗褐色を呈するが，下層に移行するにしたがって炭化物・焼土の量が増加し，床面直上では焼土の単純層をなし，この間に炭化部材が集中して出土した。炭化部材は住居の周囲から中心部に向かって傾斜していて，これらの部材の根元が住居の外側にあったことを想像させる。出土遺物は前述した炭化部材と土師器5個体分である。これらのうち381の壷破片を除き床面から出土したものである。

〔出土遺物〕（第81図）

378は底部を欠失する甕で，口縁部は内湾し端部内面が小さくつまみ出されている。胴部は長胴気味で最大径は中位以上にある。379･380は単純口縁の大型壷で，いずれも胴部以下を欠失している。381は複合口縁壷の頸部小破片である。頸部の段から下部は外反している。382は杯部の屈折は弱く浅いが，脚部は高く柱状部と裾部の境は明瞭で柱状部は僅かに膨らみをもっている。



第80図　上の原48号住居址



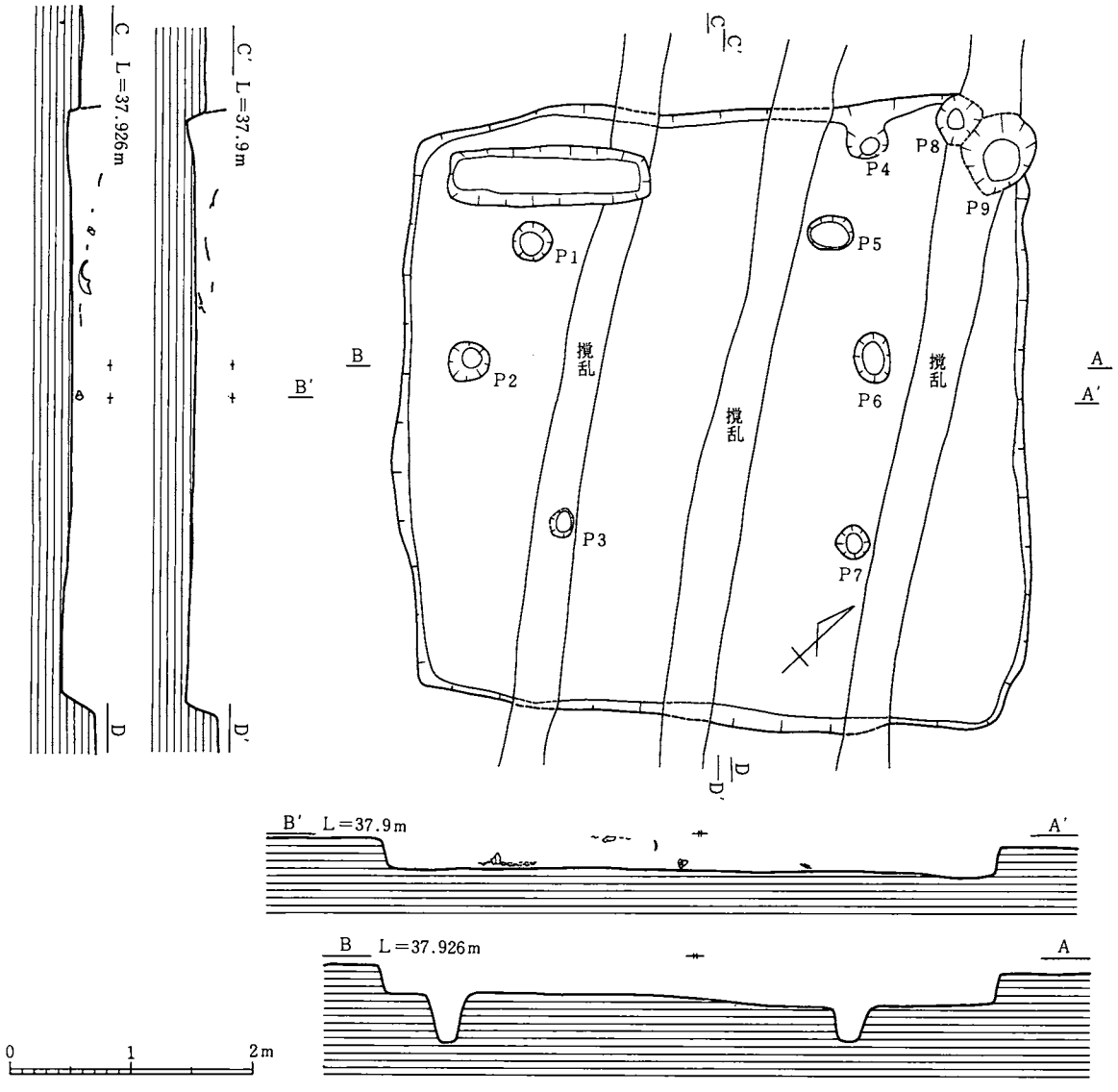
第81図　上の原48号住居址出土土器

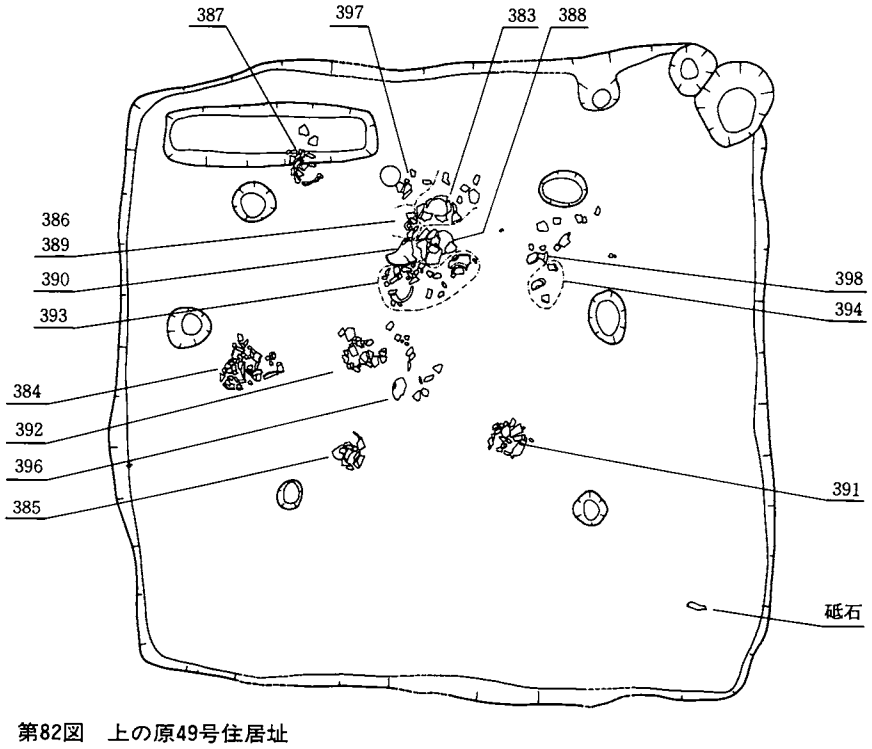
上の原49号住居址（第82図）

Ａ－５区に位置し，24号住居址（弥生前期）の南側に隣接している。住居址の規模は長軸（Ａ－Ｂ）線上で5.13m，短軸（Ｃ－Ｄ）線上で5.00m，床面積約23.1m²のほぼ正方形プランの住居址である。住居址は３条の耕作溝で撹乱を受けているが、この殆どは床面まで達していて，この部分の覆土（遺物も含む）は完全に失われている。床面には６個，北東部隅の壁に沿って３個の柱穴を検出した。これらはＰ２－Ｐ６－Ｐ８－Ｐ４の４本柱か，Ｐ２－Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８－Ｐ４－Ｐ３の６本柱，あるいはＰ３－Ｐ７の２本は主柱穴とし他の４本を支柱穴とする上屋構造のいずれかが想定される。また床面の北壁に沿って幅0.50m，長さ1.77m，深さ0.25mの長方形の土壙が検出された。土壙内壁には甕が張り付いた状態で出土していた。土壙自体が浅いので貯蔵穴ではなく，生活用具等の収納施設ではなかろうか。又床面には硬化面が点々と認められたが，前述した耕作溝に加え上部からの樹根・竹根によって面的な範囲を確認することはできなかった。なお住居址の長軸方位はＮ－42°－Ｅであった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第82図）

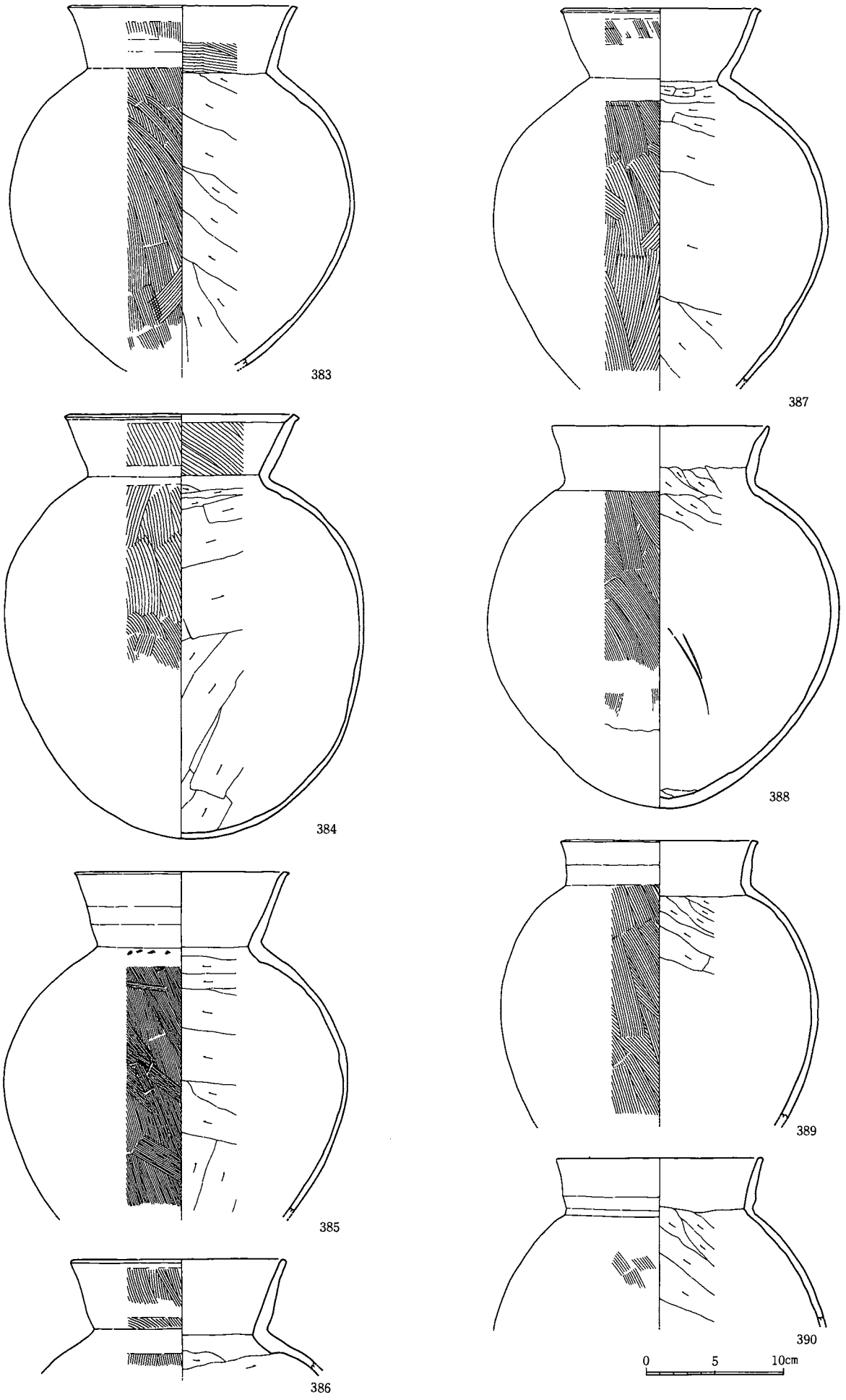
住居址覆土は無数の撹乱のため，分層することができなかったが，残存部では灰褐色土層で炭化物・焼土粒が混っていた。出土遺物は多量の土師器の他鉄器・石器が出土している。土器は断面観察によって床面に密着したものと，住居址廃絶後の埋没過程で住居址外部から内部に流入したものとの２群に分けることができる。





土器番号	(単位cm)
383	(1.8)
384	(床面)
385	(2.2)
386	(床面)
387	(床面)
388	(0.1)
389	(床面)
390	(1.9)
391	(床面)
392	(30)
393	(床面)
394	(3.3)
396	(床面)
397	(床面)
398	(1.0)
砥石	(0.7)

第82図　上の原49号住居址

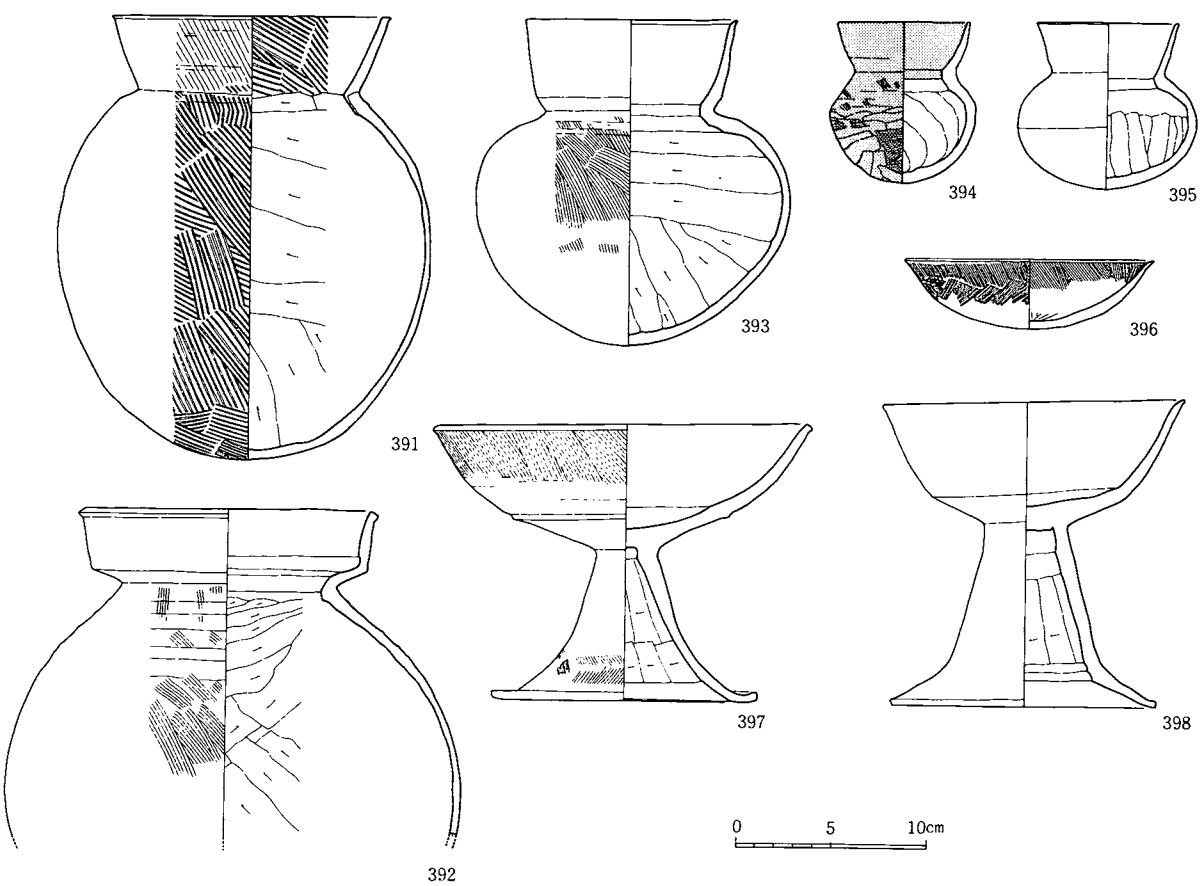


第83図　上の原49号住居址出土土器　その1

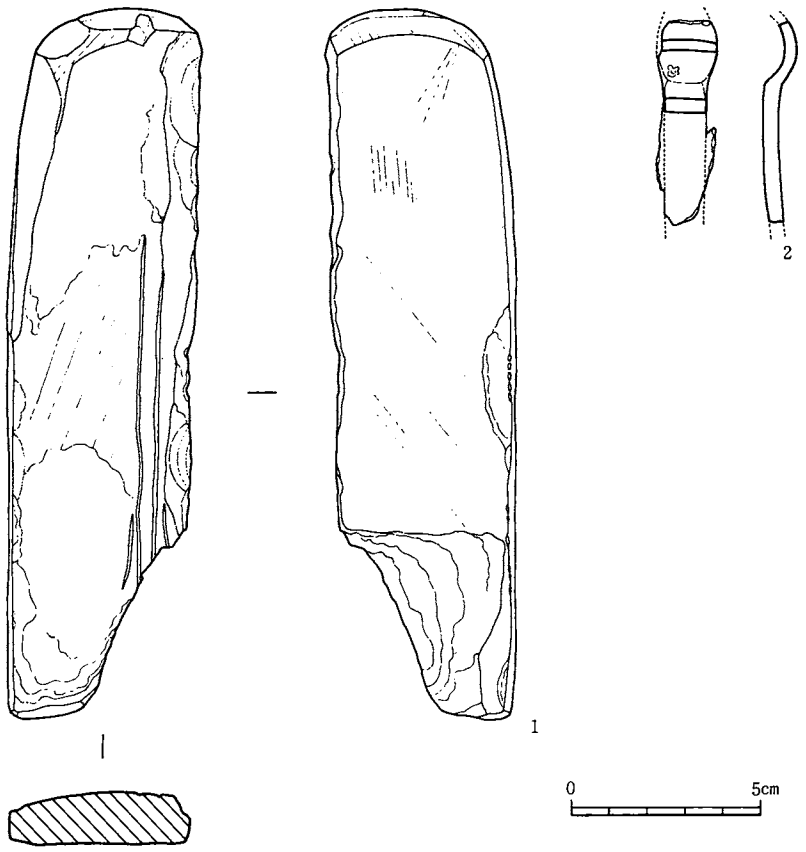
〔出土遺物〕（第83・84・85図）

甕には大別して３者がある。ａ類＝口縁部が内湾して立ちあがり，胴部は球形に近い。391がこの類で，この個体の場合刷毛目の単位が大きくヨコナデ調整は口縁部外面にわずかに施されるにすぎない。ｂ類＝口縁部が短く直立し，胴部は球形に近く底部は尖り気味の丸底になるものもみられる。388～390がこの類である。ｃ類＝口縁部は高く外反して立ち上がる。端部では小さく外方へ屈折するものと，直行するものとがある。胴部はやや長胴気味である。383～387がこの類に属している。なお387は形態的には単純口縁の壷に近いが，器体外面に煮沸による炭化物の付着が認められるので，ここでは甕として取り扱った。392は複合口縁壷で，頸部は強くくびれ頸部の屈折部から口縁部は直立気味に立ち上がり，端部で小さく外反する。胴部以下を欠失するが，肩部はなで肩である。393は広口の中型壷で，口縁部は内湾気味に立ち上がり，胴部は扁平な球形を呈する。小型丸底土器は２個体出土している。両者とも口径が胴部径に比較して小さくなるタイプである。とくに小振りの394では，胴部内面を除き赤色顔料が塗布されている。396は小型で浅い杯で，薄い造りの土器である。高杯も２個体出土している。397は杯部の口径に対して器高全体が低く，脚部はラッパ状に大きく開き裾部でさらに外方へ開き端部は上方へ跳ね上がっている。398は397とは反対に杯部の口径に対して器高が高い。杯部も深く，脚柱状部は下部に移行するにしたがい徐々に開き気味となり，裾部は屈折して外方へ開いている。

住居址の西隅の床面に粘版岩製の砥石（第85図の１）１点が出土した。長さ18.4cm，幅5.0cm，厚さ1.35cmで，表裏および縁辺部を砥石として使用している他，長辺に沿って４条の鋭く刻まれた沈線がみられる。又覆土中から鉄製ヤリガンナ（第85図の２）１点が出土している。先端部および中茎を欠失している。刃部は表向きに弧状に反っていて，稿はみられない。刃部・茎部とも断面は長方形を呈している。



第84図　上の原49号住居址出土土器　その２



第85図　上の原49号住居址砥石・鉄鏃

上の原51号住居址（第86図）

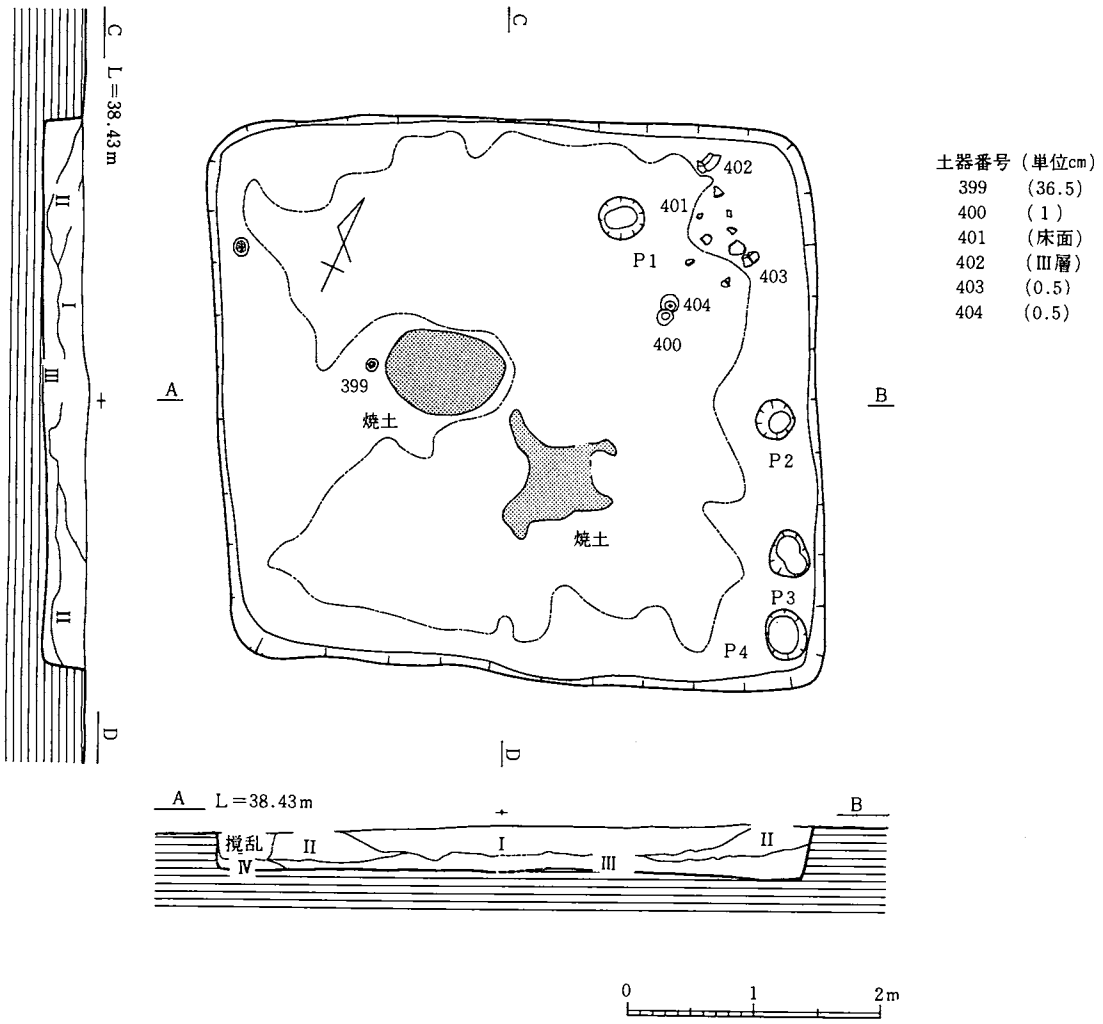
A－7区にあり，この時期の住居としては最も南端に位置している。一見6世紀末における単位集落(50・52～56号住居址）を構成するかのような地点に位置しているが，住居の構造・出土遺物からみて，この集落に先行するものである。規模は長軸（A－B）線上で4.77m，短軸（C－D）線上で4.34m，床面積約19.8㎡でやや東西に長い長方形プランの小型の住居址である。長軸方位はN－66°－Eであった。壁高は東壁で最高0.45m，西壁で最低0.25mを残していた。床面の東壁に沿って4個の柱穴を検出したが，配列は不規則で詳細を知ることは出来なかった。又床面中央部の西寄りに炉址が設けられ，炉址の東側に隣接して焼土が分布していた。硬化面は壁沿いを除く床面の広い範囲に認められた。

〔住居址覆土〕（第86図）

住居址覆土は4層からなっている。I層は暗褐色で粒子が細かく，炭化物・焼土粒を少量含んでいる。II層はI層に類似した暗褐色土層であるが，全体に軟質で炭化物・焼土粒を少量含んでいる。III層は灰褐色土層で，黄褐色のローム粒を含んでいる。IV層は黄褐色で粘性が強く，住居址の縁辺部にのみ堆積している。さらに床面はローム混合土である。

〔遺物出土状態〕（第86図）

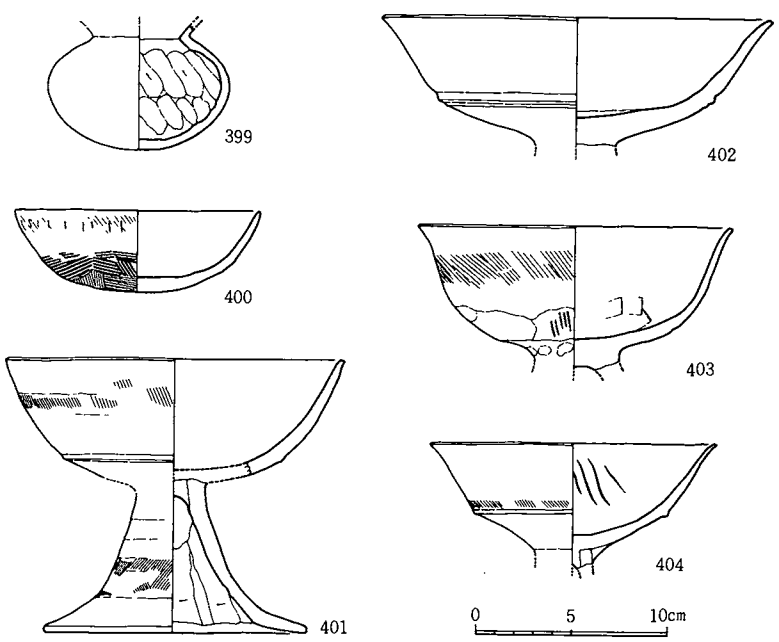
出土遺物は土師器の他弥生土器の破片や石包丁が出土した。土師器は20個体以上が出土したが，細片が多く図示できたのは6個体にすぎない。6個体のうち床面に出土したものは401の高杯のみで，400・402・403・404はIII層，399はI層から出土したものである。従って401～404の土器が本住居址の年代を考える上で重要な遺物である。



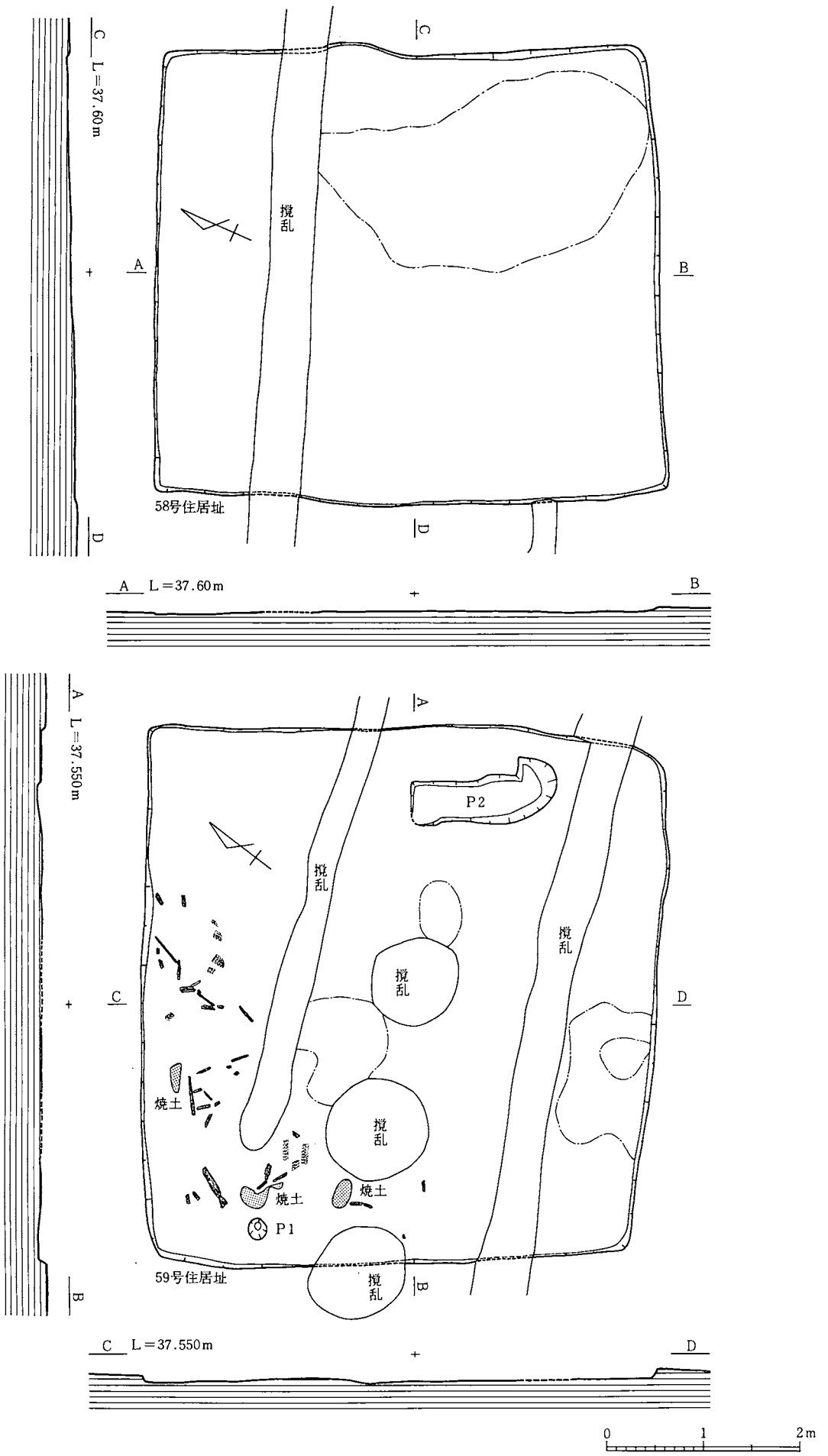
第86図　上の原51号住居址

〔出土遺物〕（第87図）

399は小型丸底土器で口縁部を欠失している。胴部は扁平な球形を呈し，頸部は強くくびれている。400は浅い半球形状の杯で完形品である。401～404はいずれも高杯である。401は杯部と脚部の接合部は認められなかったが，色調・胎土・調整手法等から同一個体と考え，図上で復原したものである。杯部は扁平な半球形状をなし，脚柱状部は徐々に開き裾部でさらに外方に開いている。402は杯部破片であるが，杯上半部と下半部の境は明瞭な段が有り，口縁部はやや外湾気味に開いている。403の杯部は深く一体成形された粗雑な造りの土器である。404は小振り高杯である。杯部の段は明瞭で薄い造りの土器である。



第87図　上の原51号住居址出土土器



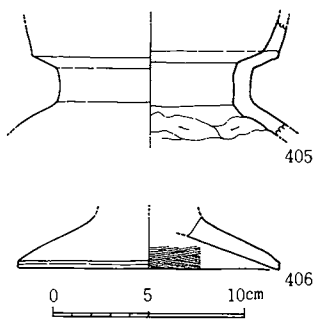
第88図　上の原58号・59号住居址

上の原58号住居址（第88図）

D－6区にあり，調査区を南北に走る丘陵尾根部から，傾斜面に移行する部分に位置している。規模は長軸（A－B）線上で5.26m，短軸（C－D）線上で4.59m，床面積約23.2m²で，やや南北に長い長方形プランの住居址である。長軸方位はN－23°－Wであった。壁高は上部から削平され，ほとんど残されていない。床面は南東部隅を中心に硬化面がみられたが，その他柱穴・炉址等は認められなかった。また出土遺物は覆土自体が失われていたために，ほとんど残されていなかった。

〔出土遺物〕（第89図）

出土遺物は2個体分でいずれも土師器で覆土中から出土したものである。405は複合口縁壷の頸部の小破片である。頸部は強くくびれ明瞭な段を有している。406は脚部の破片で小型の壷ないし鉢に伴うものであろう。脚部は低く厚い造りの土器である。この2個体は覆土中でも床面にほぼ接するように出土したものである。したがってこれらの土器は本住居址の廃絶時期を示す資料となり得る。



第89図　上の原58号住居址出土土器

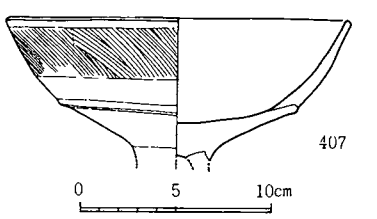
上の原59号住居址（第88図）

58号住居址の北側に隣接し，同じくD－6区に位置している。規模は長軸（A－B）線上で5,50m，短軸（C－D）線上で5,38m，床面積約29.4m²の中規模の住居址である。平面プランは西辺がやや短いもののほぼ正方形に近い。住居址は2条の耕作溝および東西に連なる円形の土壙（芋の貯蔵穴）により撹乱されていて，この部分の覆土・床面は失われていた。住居址は58号住居址と同様，上部から削平され覆土基底部をわずかに残していたが，床面の北西部を中心に炭化部材が出土した。炭化部材の周辺には焼土を多く含む土層が堆積し，火災により消失したことを物語っていた。床面には東辺に沿って浅い土壙状の落ち込みがみられ，また南壁の西寄りに硬化面が認められた。

住居址覆土自体が失われたために，出土遺物の残存状態は悪く，土師器8個体分を検出したものの殆どが細片で図示できたものは1個体にすぎない。8個体の内訳は甕5片，高杯3片であった。なお長軸方位はN－53°－Wであった。

〔出土遺物〕（第90図）

407は土師器高杯で，脚部を欠失している。杯上半部と下半部との段は比較的明瞭で，上半部は内湾気味に開いている。脚部との接合部内面にボタン状の突起は消されている。これに伴う脚部はラッパ状に開くタイプであろう。

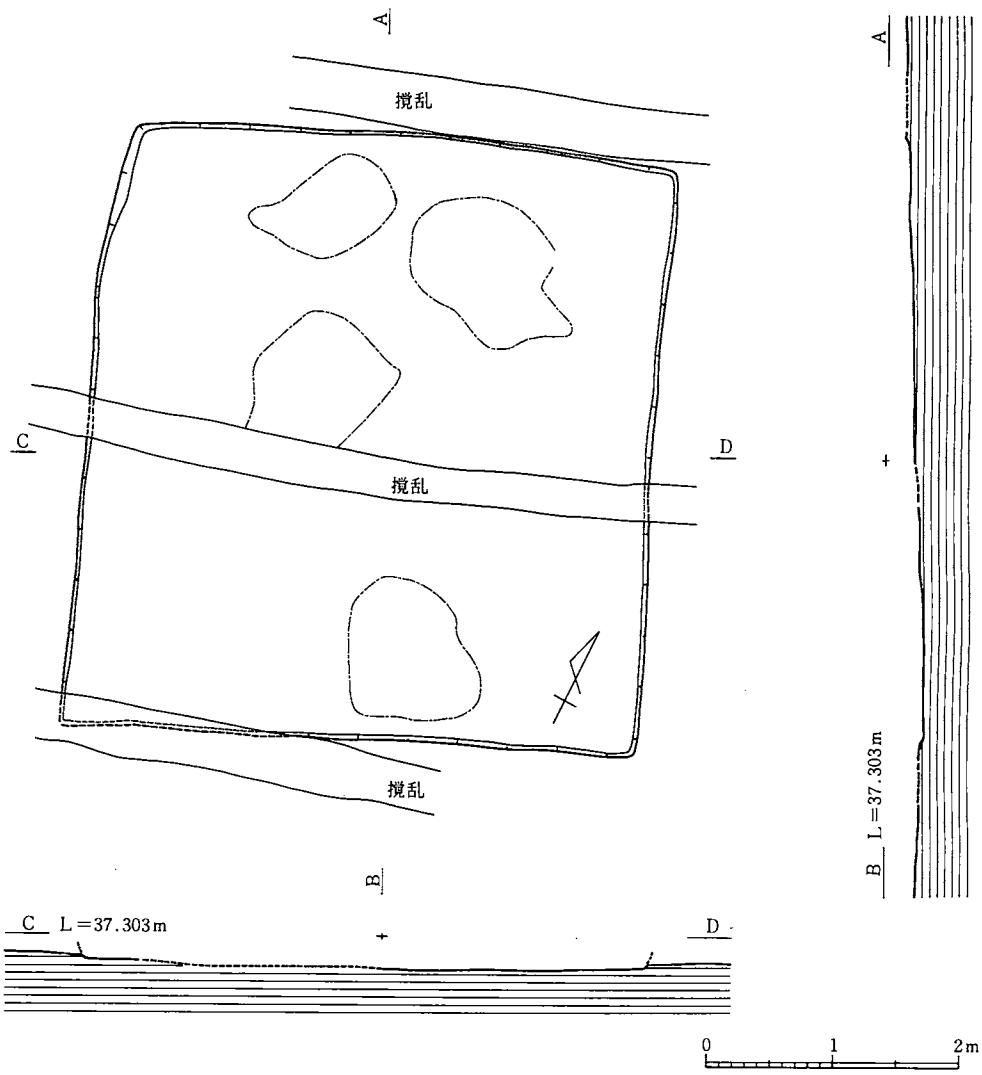


第90図　上の原59号住居址出土土器

上の原62号住居址（第91図）

E－5区にあり，58・59号住居址と同じく丘陵の東側傾斜面に位置している。住居址の規模は長軸（A－B）線上で4.75m，短軸（C－D）線上で4,50m，床面積約20.9m²の中規模の住居址である。長軸方位は調査時に正確に設定されていないので，図上で引き直すとN－22°－Wを測った。住居址自体が上部から削平さ

れて，基底部を残すのみで出土遺物も皆無であった。床面には点々と硬化面が残されていたが，これらは上部からの削平で偶然的に残された結果であろう。

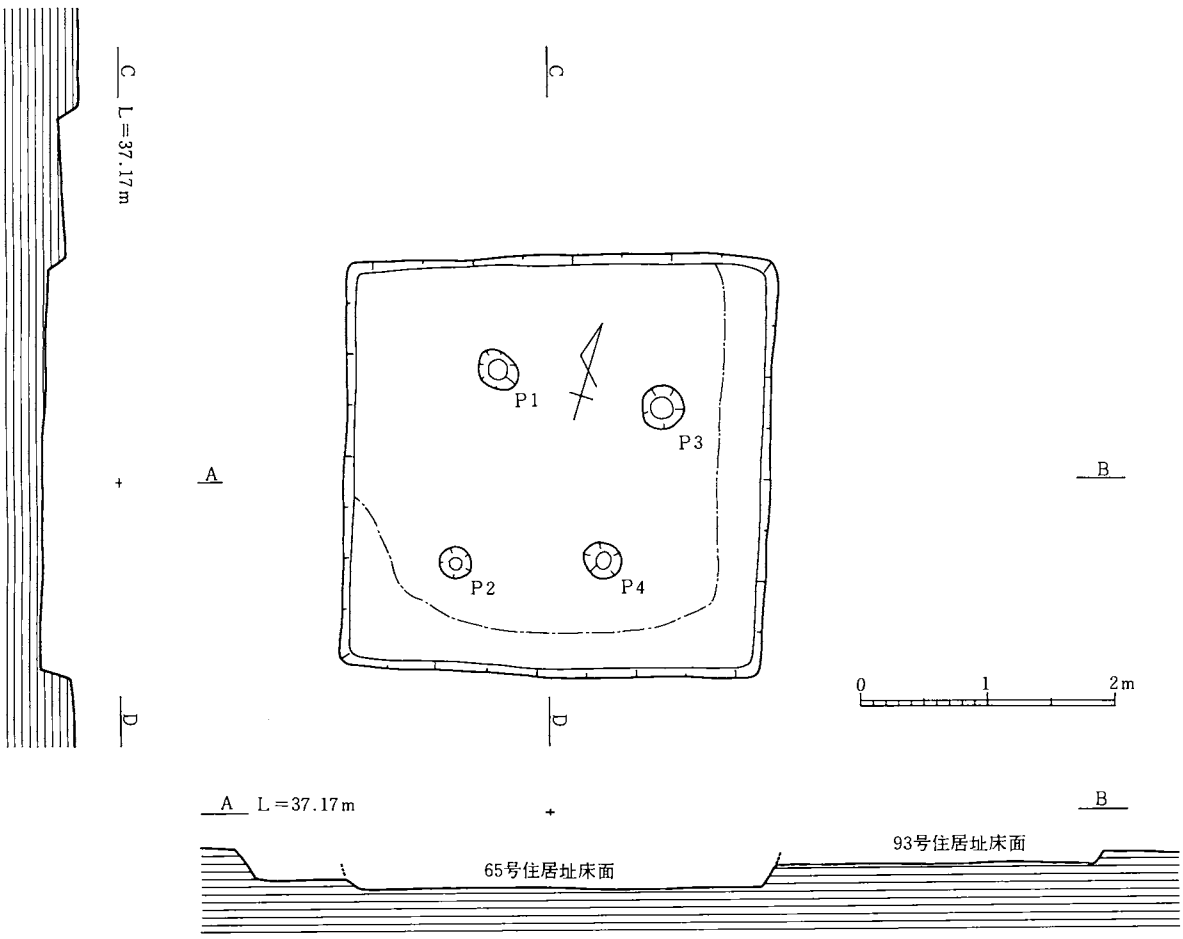


第91図　上の原62号住居址

上の原65号住居址（第92図）

C－1区にあり、93号住居址と重複していて、同住居址床面調査時に検出したものである。規模は長軸（A－B）線上で3.41m，短軸（C－D）線上で3.33m，床面積約10.2m²の極めて小規模で，正方形に近い平面プランを呈している。壁高は南壁で最大0.25m，西壁で最小0.08mを残すにすぎない。床面には4個の柱穴が検出された。これらの配列から小規模ながら4本柱の竪穴住居址が想定できる。また床面は東辺・南辺沿いを除いて硬化面がみとめられた。その他周溝・炉址等の施設は設けられていなかった。なお長軸方位は，N－73°－Eである。

出土遺物は皆無であり，年代的な手掛かりを欠いている。しかし93号住居址（7世紀中葉）以前であることを確認するに留まった。



第92図　上の原65号住居址

上の原67号住居址（第93図）

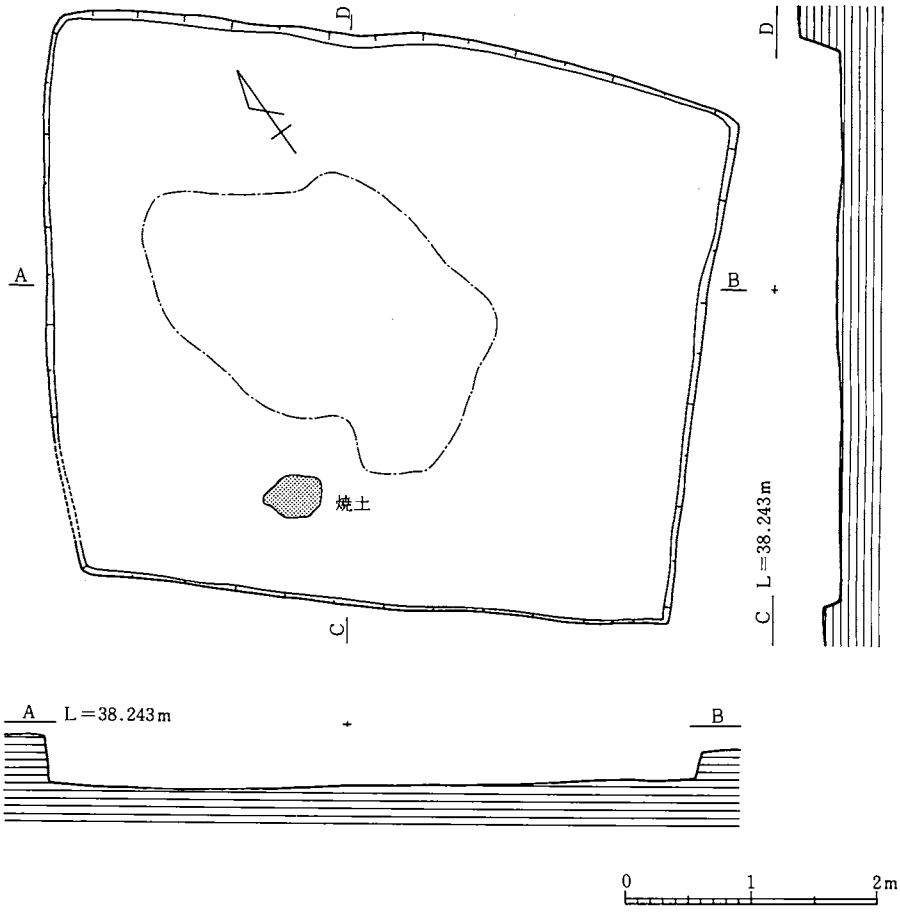
A－7区にあり、51号住居址の西北部に位置している。規模は長軸（A－B）線上で5.25m，短軸（C－D）線上で4.45m，床面積約21.9m²で，不整な長方形プランの住居址である。長軸方位はN－47°－Wを測った。壁高は北壁で最高0.50mであったが他の部分では著しく削平されていた。床面は中央部がやや高くこの部分にのみ硬化面が認められた。また床面中央部西側に焼土の集中個所が1ヶ所検出されたが，炉址・周溝等の施設は認められなかった。

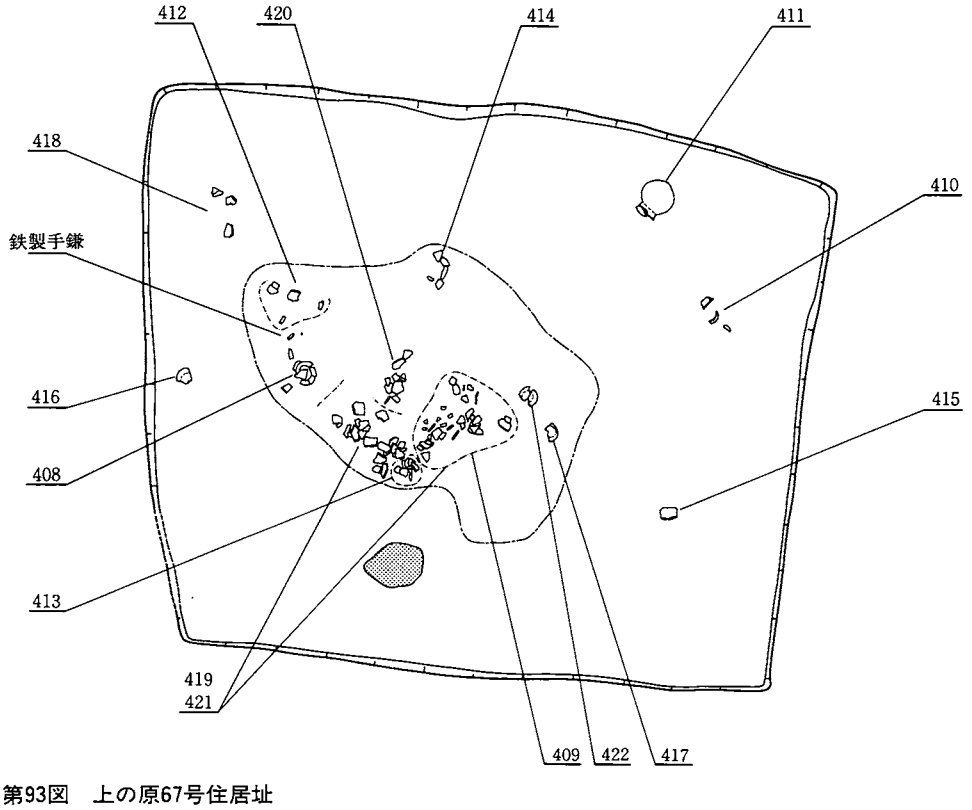
〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第93図）

住居址覆土は焼土・炭化物を多く含む暗褐色土層で，分層することは出来なかった。出土遺物は住居址中央部を中心として認められたが，まとまった状態で出土したものは少ない。出土遺物は土師器および須恵器からなり、計19個体分を数え内16個体について図示した。16個体のうち床面出土のものは409・413・419・421の4個体にすぎず，他は覆土中および覆土上層から出土したものである。なお須恵器2個体はいずれも覆土上層に混入したものである。又覆土中より砥石片・鉄製手鎌がそれぞれ1点出土した。

〔出土遺物〕（第94・95図）

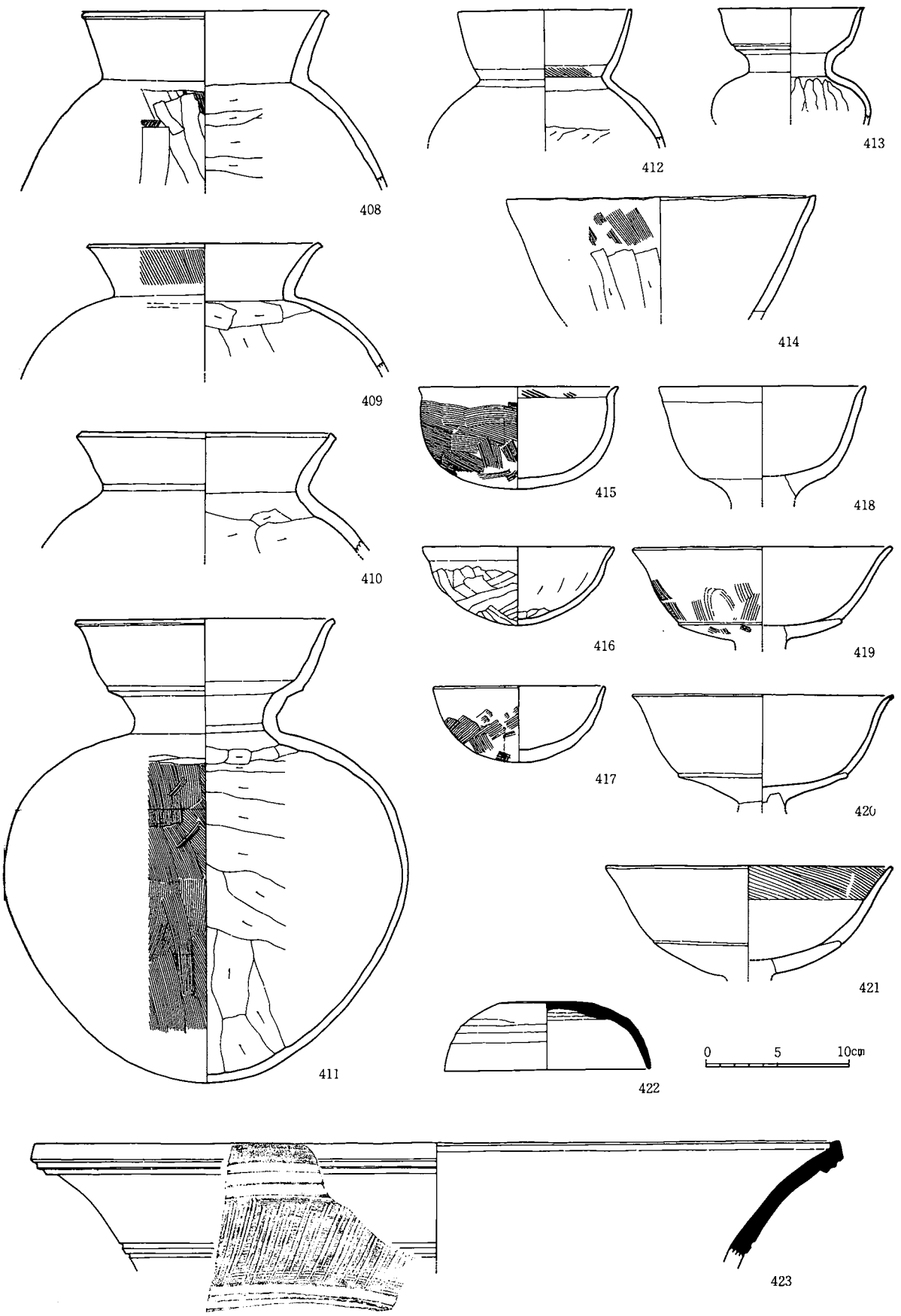
甕は5個体分出土し3個体を図示したが，他の2個体は胴部破片である。408・410の口縁部は外湾気味に立ち上がり端部は角ばっている。両者とも内外面をヘラ削り，口縁部内外面をヨコナデで仕上げている。胴





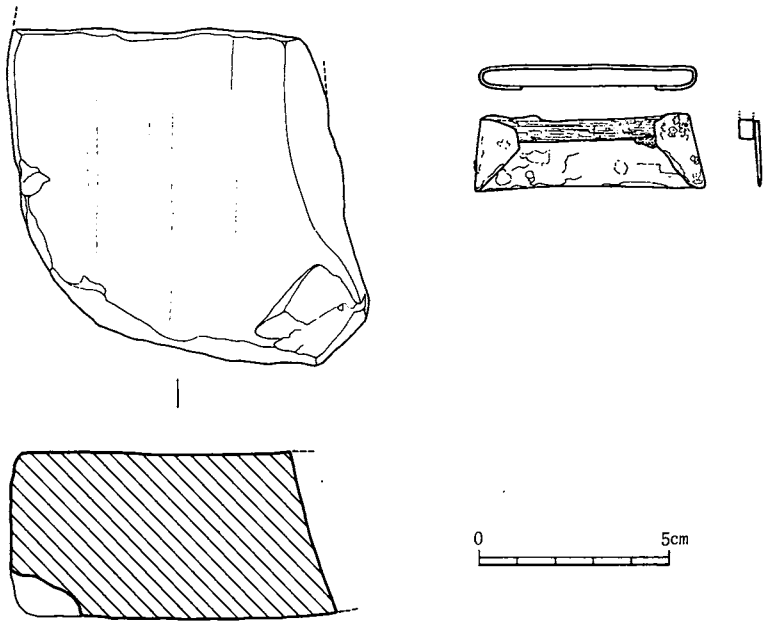
土器番号	（単位cm）
408	(4.9)
409	(床面)
410	(8.3)
411	(11.2)
412	(5.6)
413	(床面)
414	(25.0)
415	(20.0)
416	(22.3)
417	(15.8)
418	(13.9)
419	(床面)
420	(4.2)
421	(床面)
422	(21.3)
423	(上層)
鉄製手鎌	(床面)

第93図　上の原67号住居址



第94図　上の原67号住居址出土土器

部以下を欠失するものの，肩部の張りは強く球形に近いものであろう。409は頸部が強くくびれ，口縁部は外湾して大きく開いている。以上3個体の甕は外面は炭化物が付着し内面は暗褐色に変色するなど，煮沸用として使用された痕跡が明瞭である。411は複合口縁壷でほぼ完形に復原できた。頸部は強くくびれて段を有し，口縁部は内湾して立ち上がる。胴部は強く張り，最大径は中位以上にあり，底部はやや尖り気味の丸底である。412は中型の単純口縁壷で胴部以下を欠失している。口縁部は内湾気味で胴部は扁平な球形を呈するものと思われる。413は小型丸底土器で頸部にわずかな段を有し，所謂複合口縁壷を模倣したものである。414は鉢型土器としたが，残存する口縁部内面に幅約2cmの剥離痕が巡っていて，さらに別個の口縁部が接合されていたか，あるいは甕胴下半部を再生利用したものであろう。杯は4個体出土し，うち3個体を図示した。415の杯は口縁部が小さく外反し，底部は安定した丸底である。全体に深めの杯である。416・417は半球形の体部で底部は丸底である。高杯は5個体出土し4個体を図示した。いずれも杯部破片で口径に対して深い杯部を有するものである。422は須恵器杯蓋である。口縁部はやや開き気味に垂下し，端部は丸く仕上げられている。稜は失われ，天井部は回転ヘラ削りが施され平坦である。口径14.5cmでやや大型の身部が想定される。423は須恵器大甕の口縁部破片である。口縁部は緩やかに外湾し，端部で屈折して内傾している。口縁部外面には断面三角形の突帯が2条貼り付けられ，頸部には2条の沈線を施している。また突帯と沈線の間は櫛描文が描かれている。口縁部の仕上げはシャープで焼成も良好である。

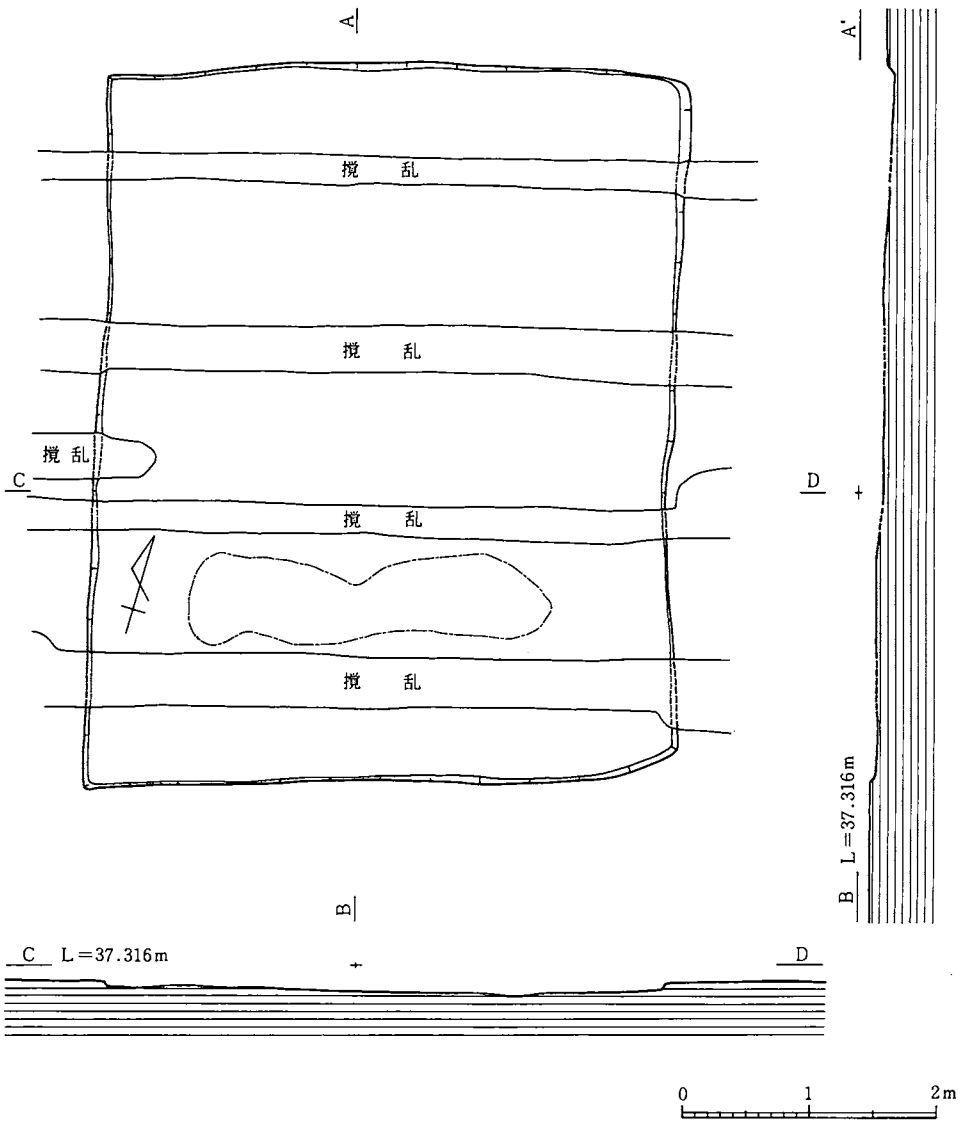


第95図　上の原67号住居址出土石器・鉄器

住居址の南隅部の覆土中に砂岩製砥石（第95図の1）が出土した。表裏および縁辺部を使用している。特に表裏二面は研磨による条痕が明瞭に残っている。また床硬化面に密着して鉄製手鎌（第95図の2）1点が出土した。刃部がバチ状に開き，刃部の長さ6.02cm，基部の長さ5.50mで，幅1.8cm，厚さ0.12cmを測る。両側面を1.0～1.1cm程折返して袋部を造りだしている。木質の残りは良好で，刃部面では旧状を保っている。

上の原69号住居址（第96図）

E—6区にあり，62号住居址の南東部に隣接している。規模は長軸（A—B）線上で5.61m，短軸（C—D）線上で4.56m，床面積24.9m²の南北に長い長方形プランを呈している。長軸方位はN—16°—Wであった。58・59・62号住居址と同様傾斜面に位置しているため，住居址全体は上部から著しく削平され，基底部をわずかに残すにすぎない。床面には部分的に硬化面が残されているが，基の他柱穴・炉址等は検出されなかった。また出土遺物は皆無であった。



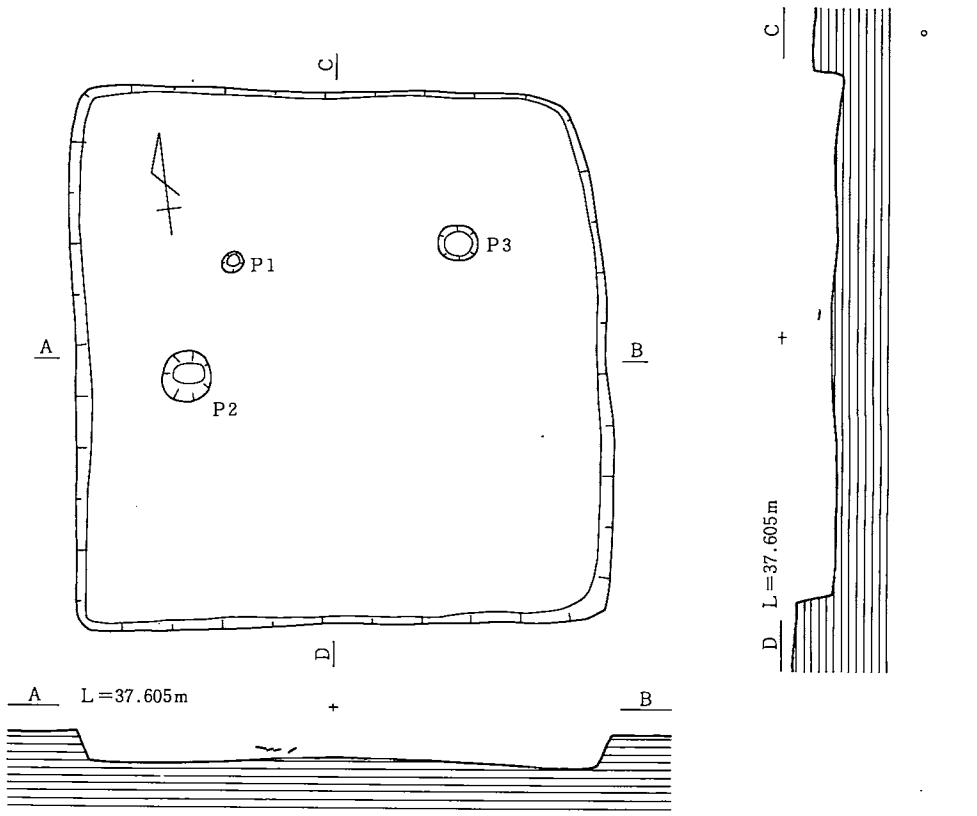
第96図　上の原69号住居址

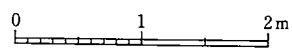
上の原70号住居址（第97図）

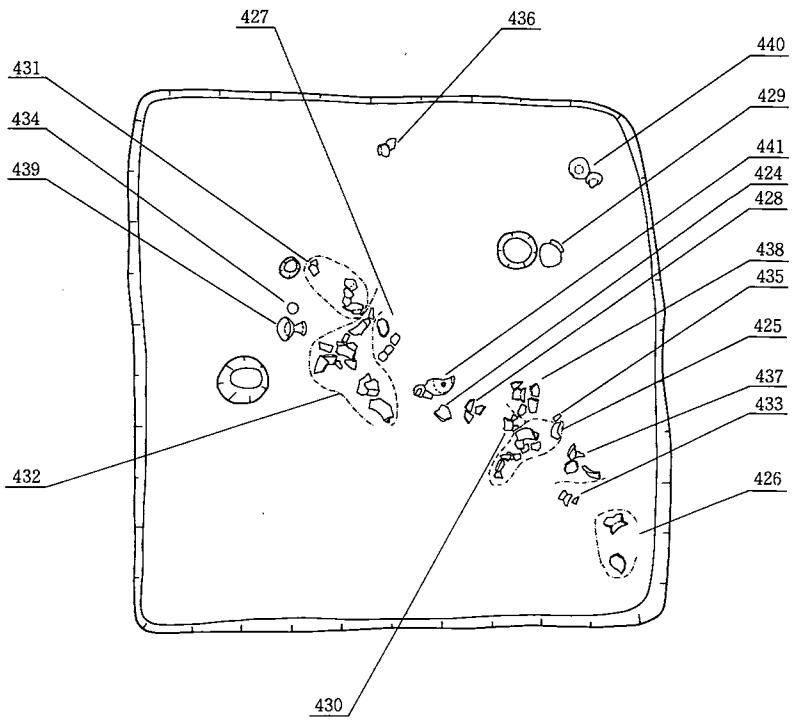
A—3区にあり，集落址群の西端を構成する住居址の一つである。規模は長軸（A—B）線上で4.23m，短軸（C—D）線上で4.15m，床面積約18.2m²の小型の住居址である。平面プランは東西に僅かに長いがほぼ正方形を呈している。長軸方位はN—83°—Wであった。壁高は南壁で最高0.30mで他の部分は概ね0.20～0.25mを残している。床面には大小3個の柱穴を検出したが，配列は不規則である。また床面にはほぼ全面硬化面が認められた

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第97図）

住居址覆土は暗褐色土層で炭化物・焼土粒を多く含み，プラン確認面から床面まで単一土層で分層することは出来なかった。出土遺物は土師器のみ計30個体以上が出土したが，これらの内18個体を図示した。この30個体以上の土器はいずれも床面出土のものは皆無であった。おそらく住居址の廃絶後に人為的に廃棄されたか，自然に流入埋没したものであろう。

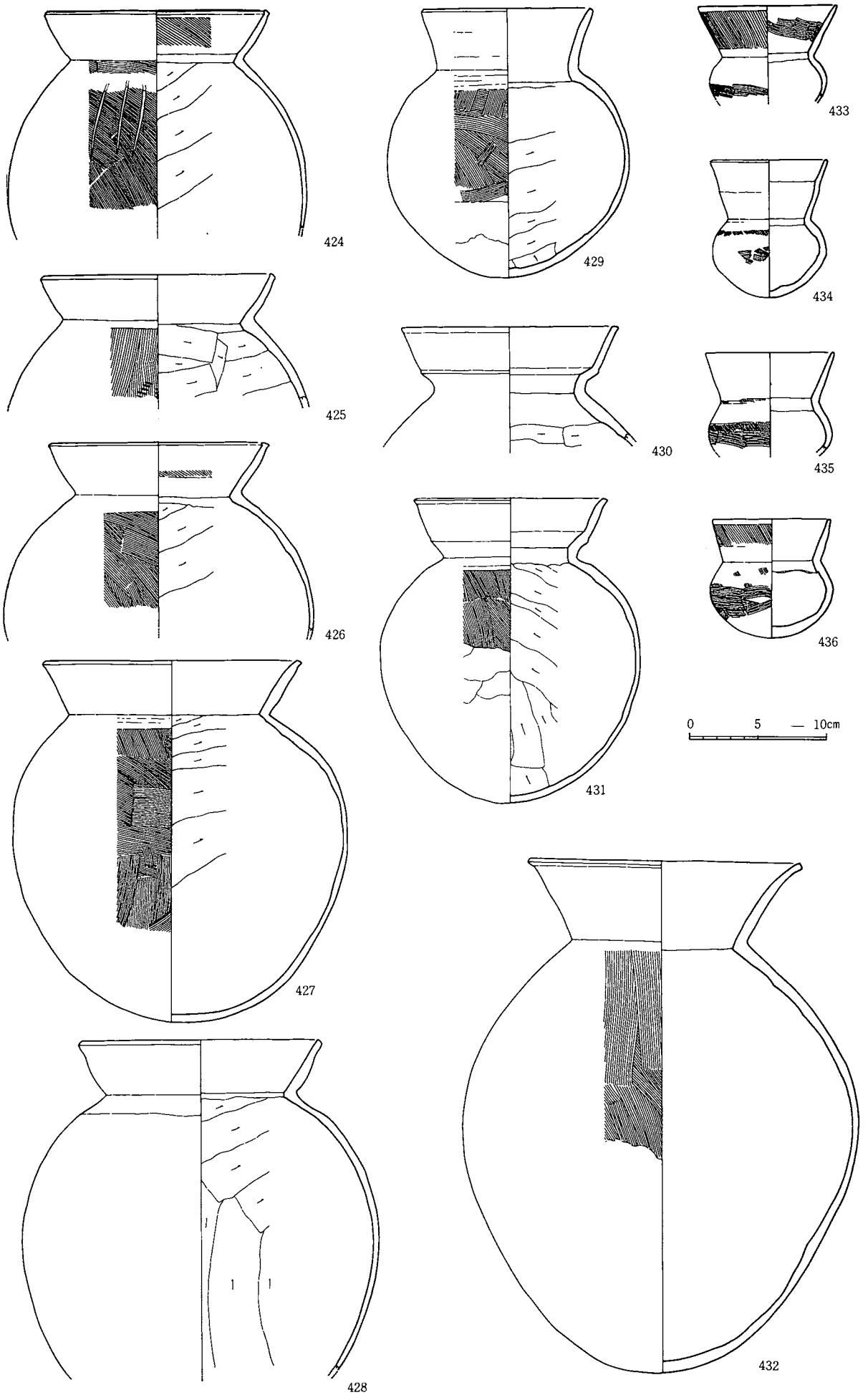




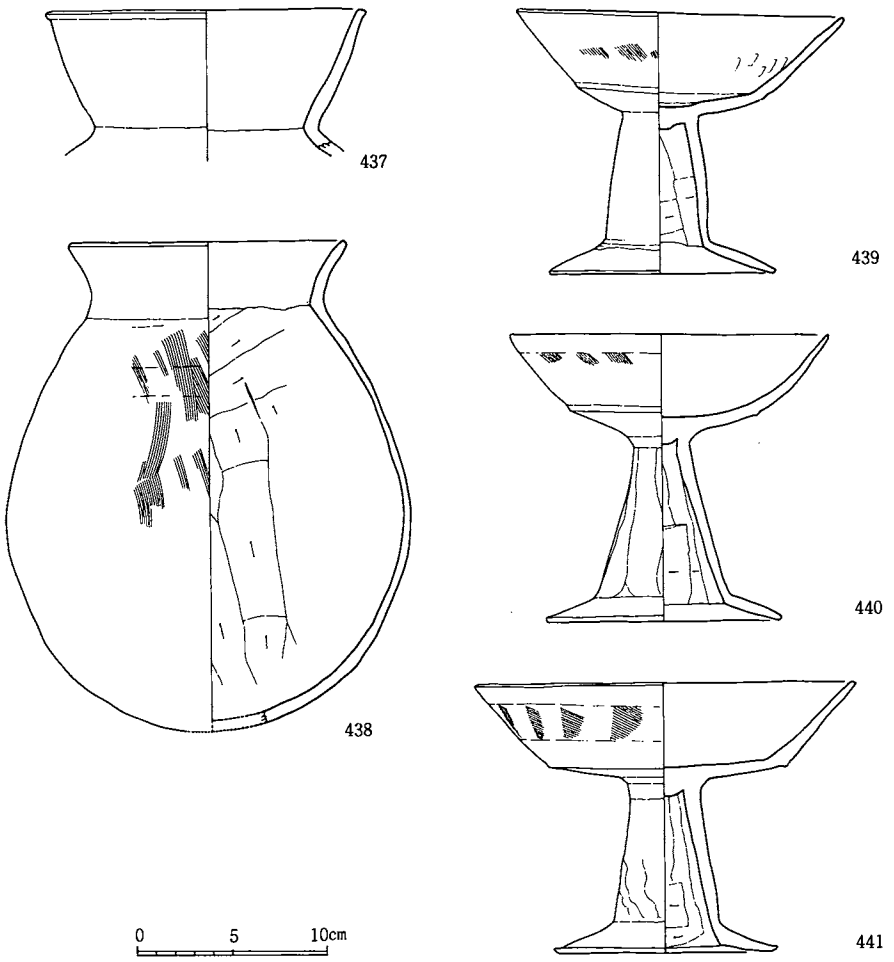


土器番号	(単位cm)
424	(4.4)
425	(19.8)
426	(3.6)
427	(9.5)
428	(19.8)
429	(0.9)
430	(19.8)
431	(5.5)
432	(5.5)
433	(19.5)
434	(9.8)
435	(19.8)
436	(19.4)
437	(13.5)
438	(19.8)
439	(0.9)
440	(1.8)
441	(4.4)

第97図　上の原70号住居址



第98図　上の原70号住居址出土土器　その1



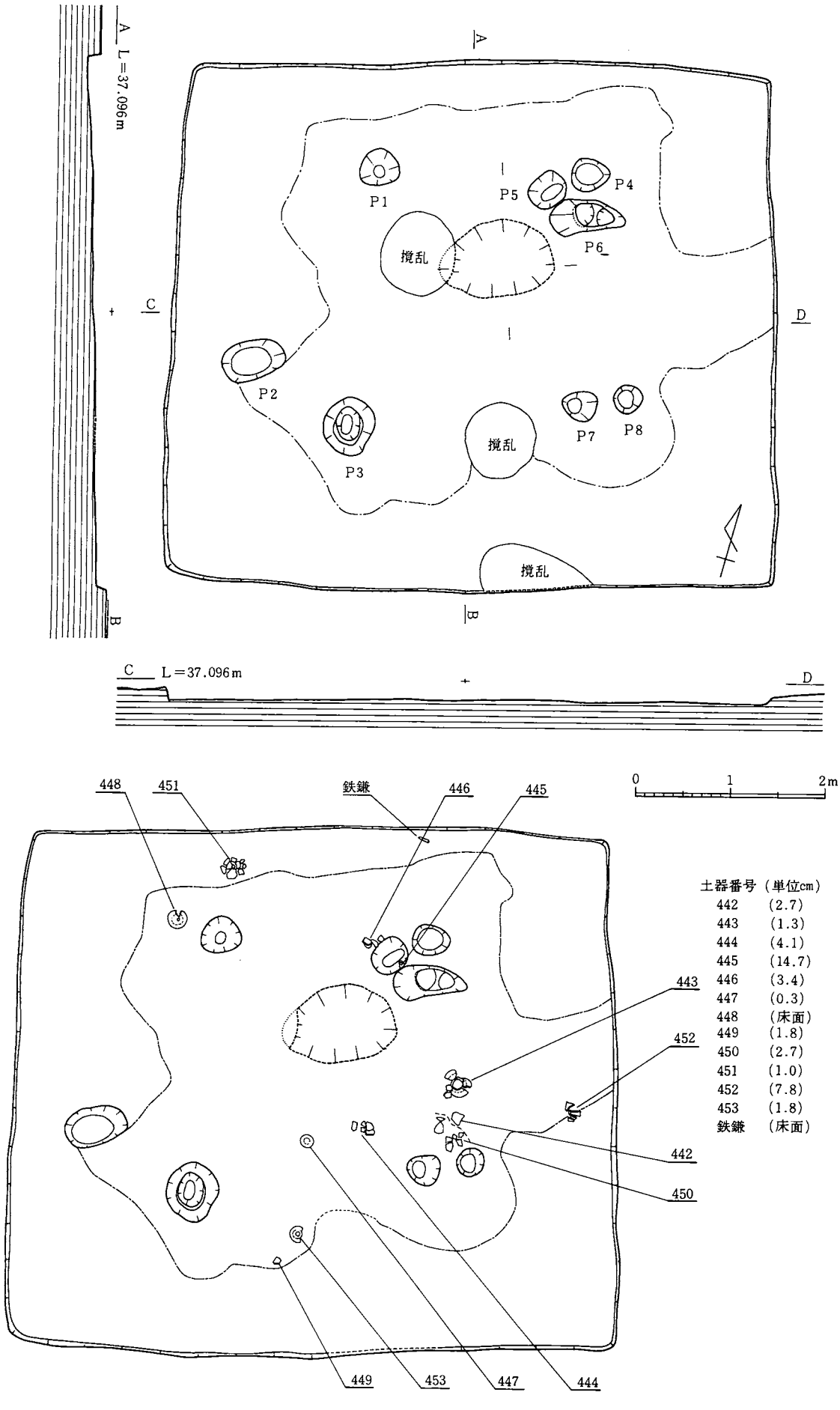
第99図　上の原70号住居址出土土器　その２

〔出土遺物〕（第98・99図）

424～426は口縁部が内湾気味に立ち上がる甕で，424の胴部外面には３本の平行沈線で刻まれたヘラ記号がみられ，425の胴部外面には右下がりのタタキ目が認められる。いずれも薄い精巧な造りの土器である。427・428は口縁部が直線的に外反する甕で胴部は球形に近いものである。丸底となる。432は広口大型壷で，口縁部は大きく外湾して開き、胴部は長胴気味で最大径は中位にある。429は形態的に壷とすべきであるが，内外面には明瞭な煮沸痕が残されている。口縁部は直立気味に立ち上がり，胴部はほぼ球形である。430・431は複合口縁壷であるが，頸部の段は不明瞭である。431の胴部は球形に近いが，底部はやや尖り気味の丸底となる。438は口縁部が外湾し，胴部の最大径は中位以下にある。口径が胴部径に対して著しく小さいタイプの甕で，形式的には前述した甕より後出する形式である。小型丸底土器は４個体出土したが，口径が胴部径より大きいタイプのもの（433）と口径が胴部径と同じかやや小さいタイプのもの（434～436）とが混在している。高杯は７個体以上が出土しているが，図示したものは３個体にすぎない。いずれも口径に対して器高が高く，脚部は柱状部と裾部との境が明瞭なタイプである。439・441の脚柱状部はやや脹らみをもっている。杯部は浅い半球形状を呈するもの（439・440）と，杯上半部と下半部との境が「くの字」状に屈折するものとがある。

上の原71号住居址（第100図）

A―２区に位置している。平面プランは東西に長い整美な長方形を呈している。規模は長軸（A―B）線

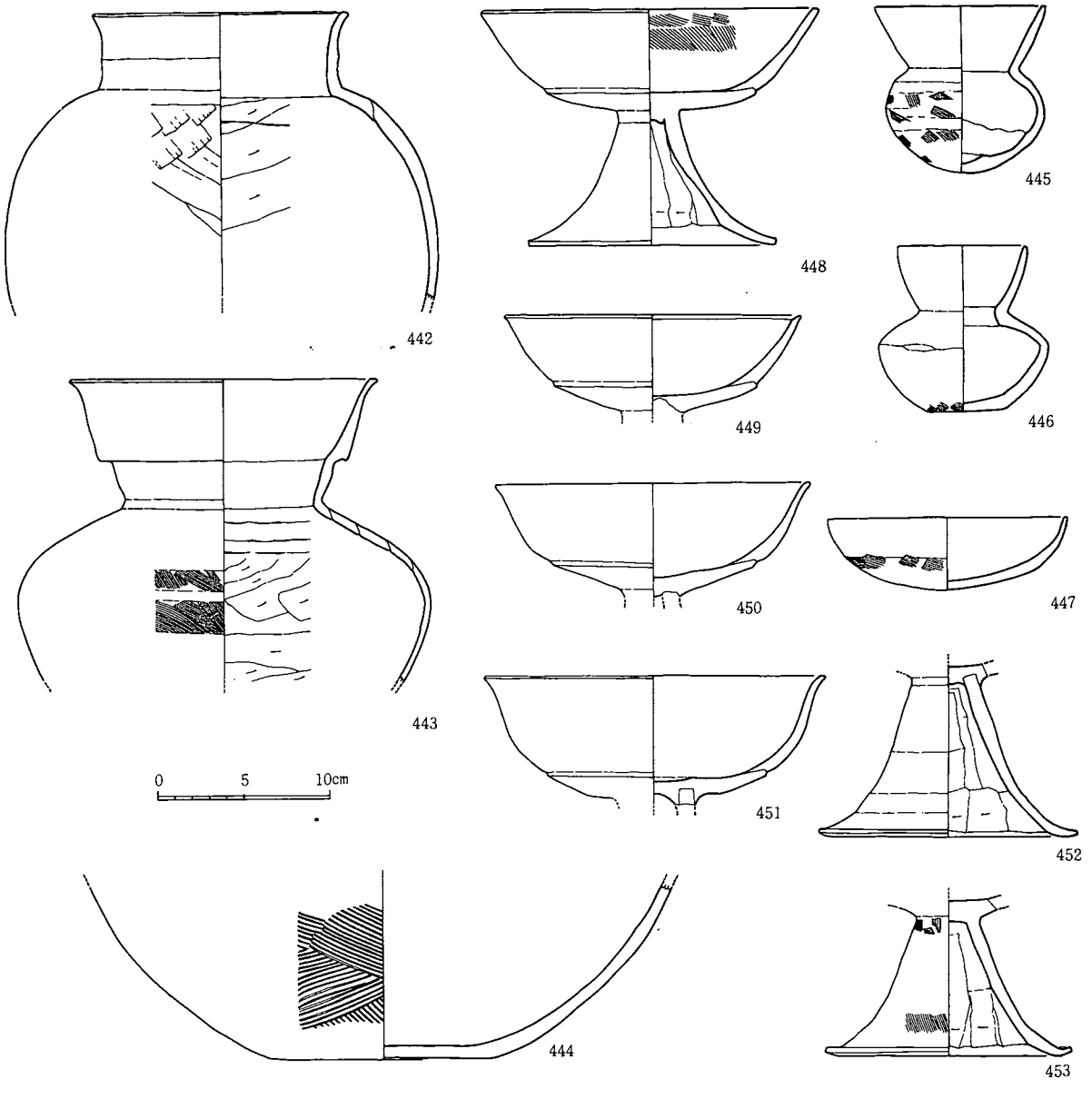


第100図　上の原71号住居址

上で6.40m，短軸（C—D）線上で5.57m，床面積約33.8m²の比較的大型の住居址である。住居址の長軸方位はN—75°—Eであった。壁高は南壁で最大0.15m，東壁で最低0.08mを残していた。床面には8個の柱穴が検出され，これらの配置状態からP1—P4（P5・P6）—P7（P8）—P3の4本柱の上屋構造が想定される。床面中央部の北寄りに炉址が設けられていた。炉址は長径約1.20m，短径0.80mで平面形は東西に長い楕円形である。炉址内には焼土が厚く堆積していた。住居址は計3個の貯蔵穴（芋穴）で撹乱され，この部分の床面は失われていた。床面は中央部を中心に硬化面が認められ，東側では壁面直下にまで及んでいる。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第100図）

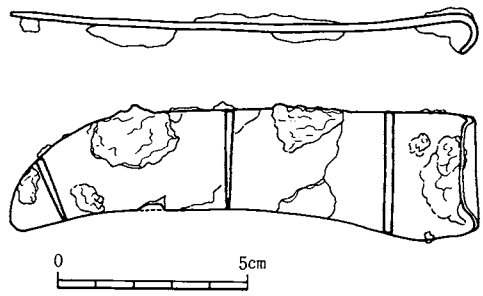
住居址覆土は上部から削平されたために，プラン確認時にすでに床面の一部が露出した状態であった。したがって覆土の残存状態が悪く，分層することが出来なかった。覆土は全体的に灰褐色を呈し，炭化物・焼土粒を多く含んでいた。出土遺物は土師器12個体分と鉄鎌1点が出土し，そのすべてを図示した。これらのなかで床面出土のものは448の高杯と鉄鎌にすぎない。しかしその他の土器も覆土下部から出土したものである。



第101図　上の原71号住居址出土土器

〔出土遺物〕（第101図）

442は口縁部が直立する甕で，胴部は球形に近い。胴部は内外面ともヘラ削りで仕上げられている。443は複合口縁壷で，頸部の段で肥厚し折り返し状の口縁をなしている。444は大型壷の底部破片である。底部はやや上げ底気味の平底である。445・446は小型丸底土器であるが，446では胴部が角ばり平底である。445の口径は胴部径に対してやや大きいが，446では逆に口径が小さい。447は皿状の浅い杯で完形品である。高杯は6個体分あり，完形品は448の1個体のみである。448の杯下半部はほぼ水平に開き，屈折して上半部は内湾気味に立ち上がる。こうした特徴は449・450・451の杯部にも共通している。また脚部はラッパ状に大きく開き，裾部でさらに外方へ開いている。これらの特徴もまた452・453の脚部に類似している。なお裾部の微妙な変化は個体差であろう。



第102図　上の原71号住居址出土鉄鎌

鉄鎌（第102図）は完形品である。全長12.3cm，刃部の幅は中程で2.6cm，柄部の幅は3.3cmを測った。刃部は緩やかに内湾し，背部も外湾している。刃部と柄部との境は明瞭である。また柄部は刃身に対して直角に装着するように折返されている。さらに刃身は全体に折返しとは逆方向へ反っている。

上の原72・73・74・76号住居址（第103・104図）

A—1区からB—1区に位置し、これら4軒の住居址はそれぞれ重複している。以下順を追って説明を加える。

72号住居址は東側で73号住居址，西側で76号住居址と重複している。規模は長軸（A—B）線上で6.10m，短軸（G—H）線上で6.00m，床面積約33.4m²で，やや大型で正方形に近いプランの住居址である。長軸方位はN—82°—Eであった。壁高は南壁で最高0.40m，北壁で最低0.25mを残していた。床面には中央部分を中心に硬化面が認められたが，柱穴・炉址等は設けられていなかった。

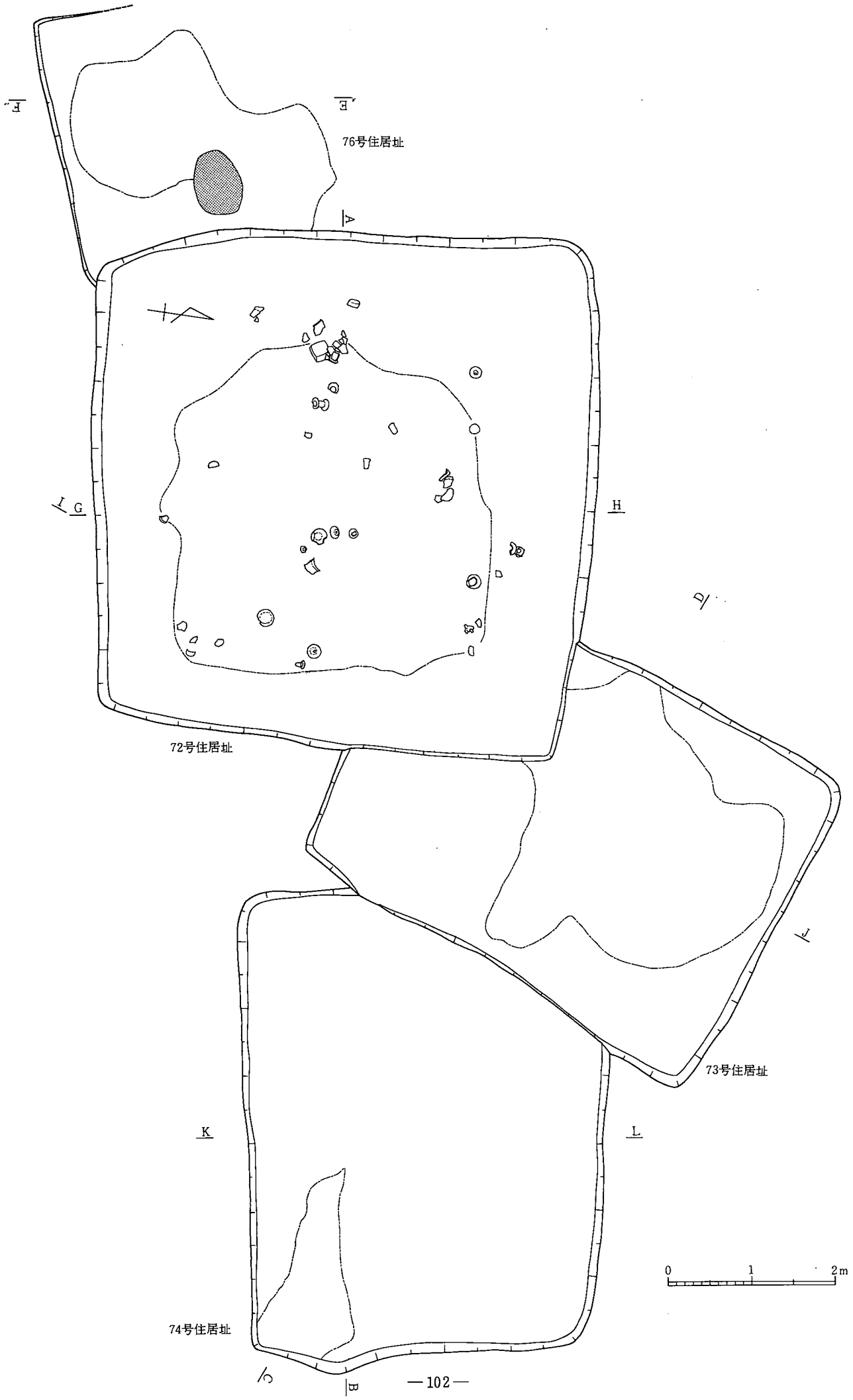
73号住居址は東側で74号住居址に、西側で72号住居址と重複している。規模は二辺を重複によって失われているために、正確な規模をしることが出来ないが概ね長袖（I－J）線上で約5.5m　短軸（C－D）線上で約4.0mを測った。平面プランは東西に長い長方形で、比較的小規模の住居址である。　長軸方位はN－21°－Eであった。床面は南東部で72号住居址によって切断され、この部分の床面および硬化面は失われていた。

74号住居址は北西側で73号住居址と重複している。規模は長軸（A－B）線上で5.75m，短軸（K－L）線上で4,27m，床面積は73号住居址によつて切断されているために正確には計測できないが、残存部の状態から推定して概ね22m²前後になるものと思われる。平面プランは東西に長い長方形で長軸方位はN－81°－Eを測った。

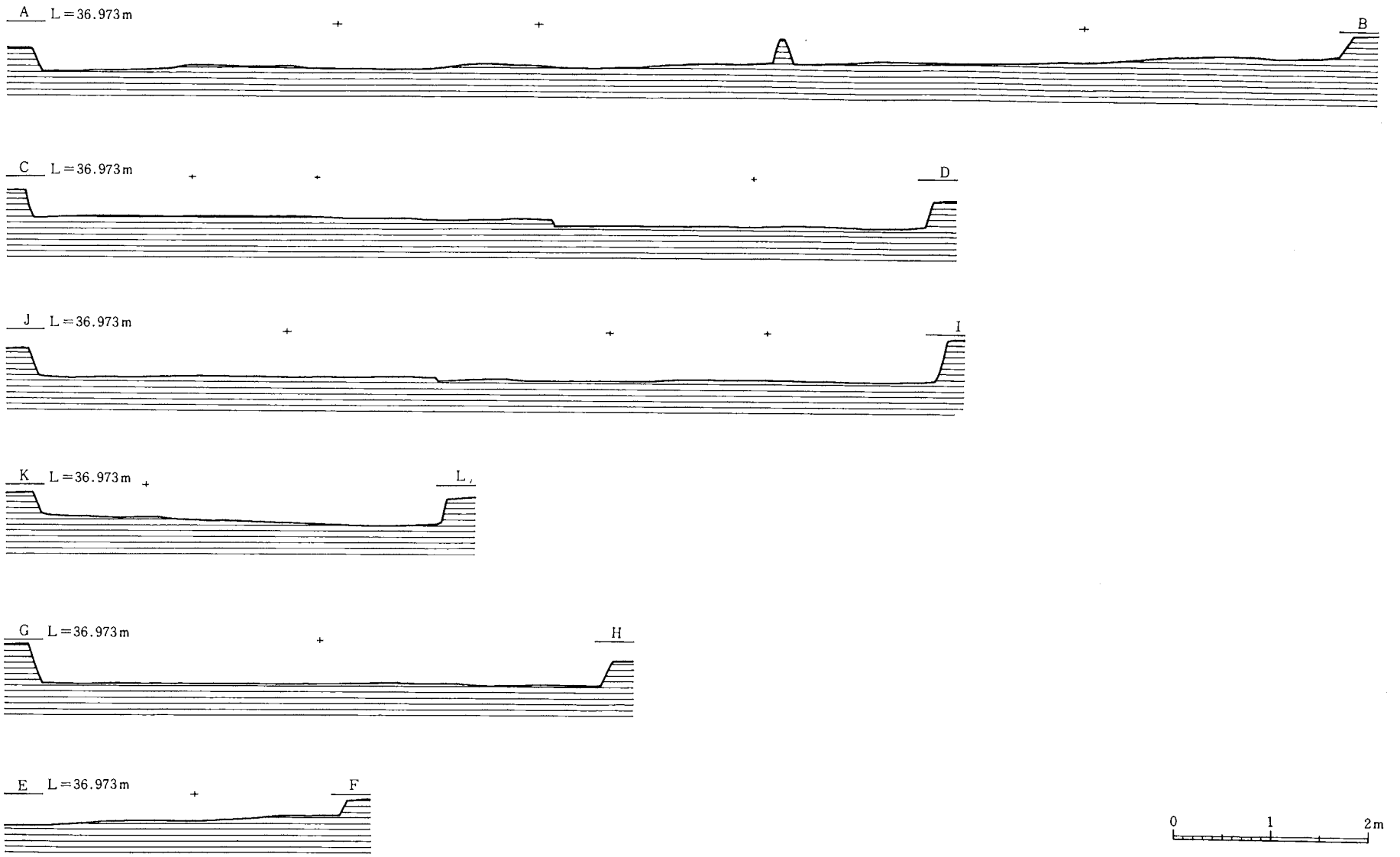
76号住居址は東壁を72号住居址で北および西壁側を上部からの削平により失っていて、南壁および硬化面の範囲を確認できたにすぎない。規模は南辺で3.2～3.3mの極めて小型の住居址であったと考えられる。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第105図）

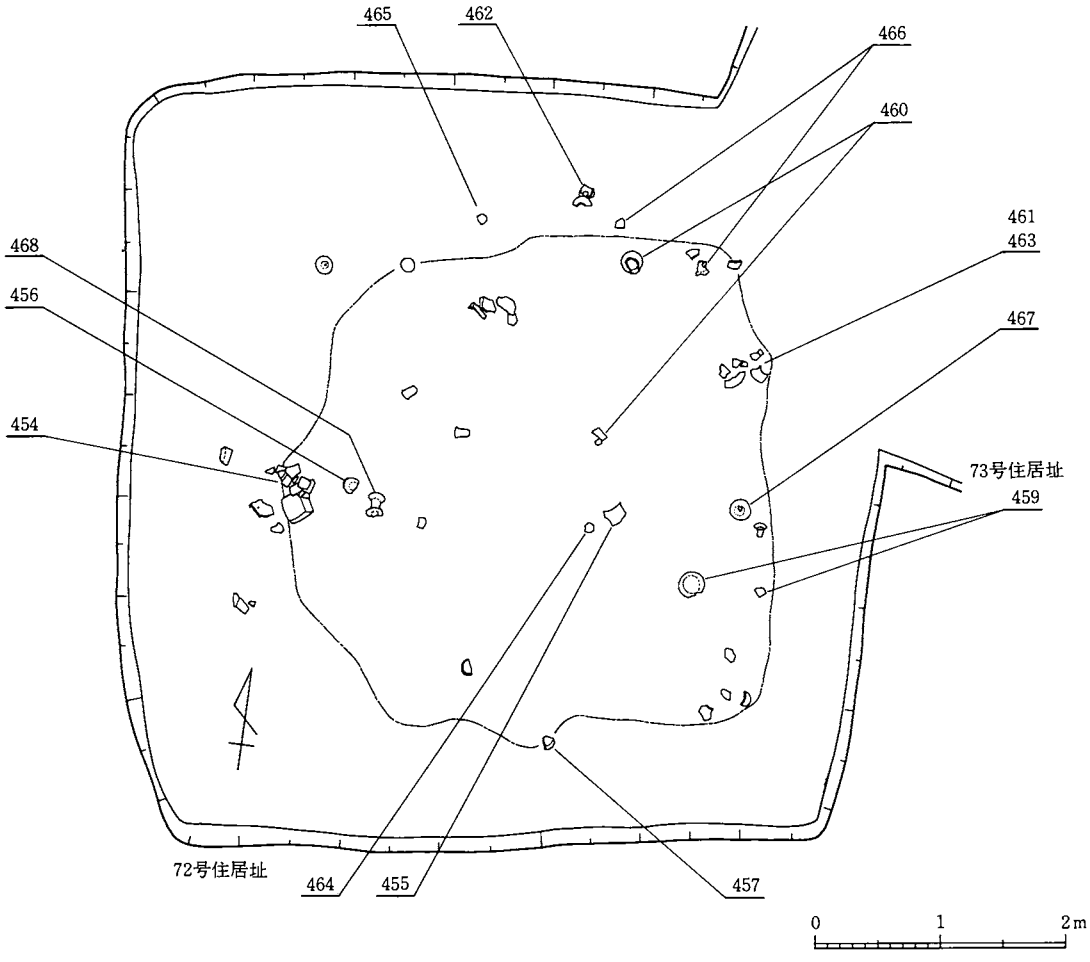
住居址覆土は4軒いずれも炭化物・焼土粒を多く含む暗褐色土層で、分層することは出来なかった。出土遺物は4軒総てに出土しているが、72・73号住居址を除くとその量はすくない。出土遺物は土師器のみで、床面に密着して出土したものはなく、すべて覆土中に出土したものである。しかもこれらの土器には完形品は殆どなく、まとまった状態で出土したものはみられない。おそらく住居址廃絶後の埋没過程で自然的に流入したものと考えられる。

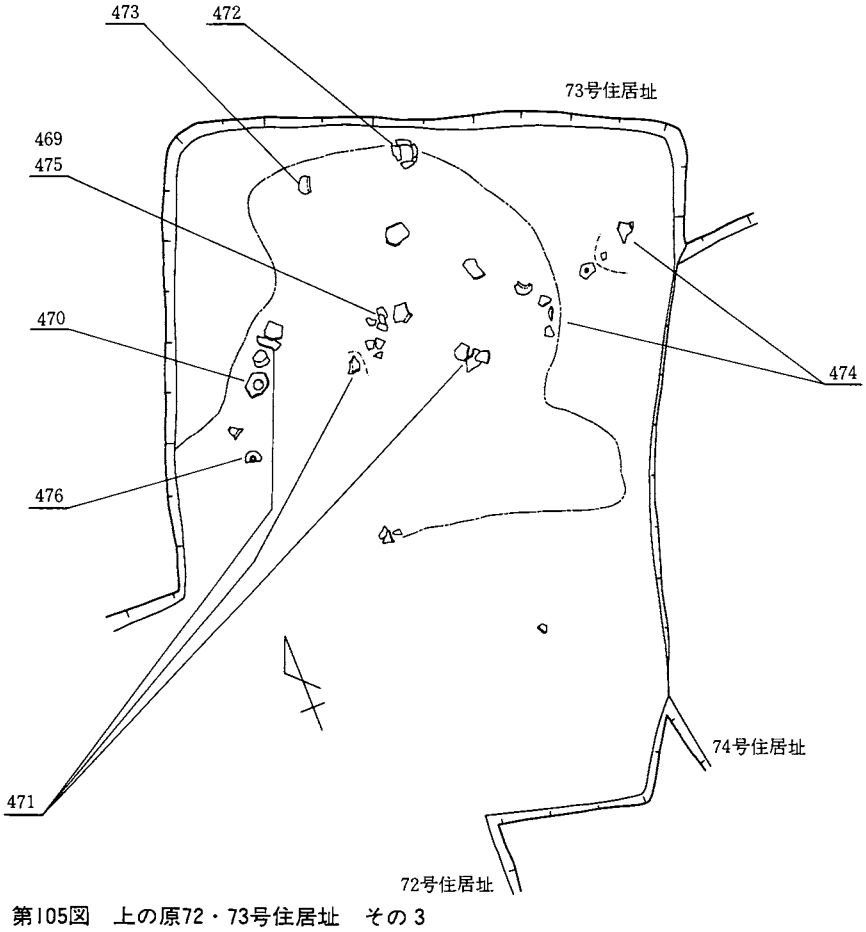


第103図　上の原72・73・74・76号住居址　その1



第104図　上の原72・73・74・76号住居址　その2

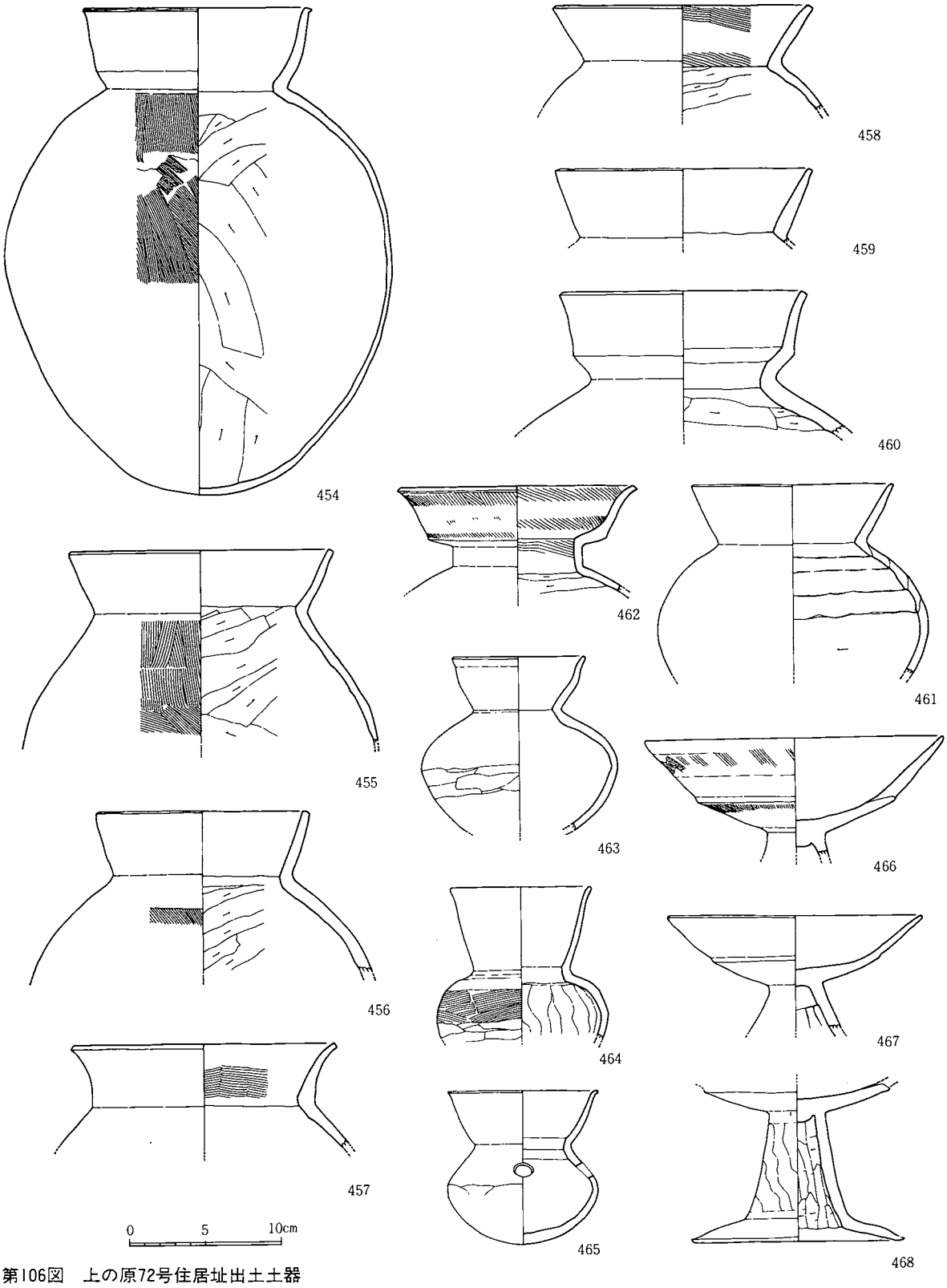




72号 土器番号	(単位cm)
454	(4.3)
455	(3.8)
456	(4.3)
457	(1.5)
459	(3.1)
460	(1.5)
461	(5.5)
462	(13.7)
463	(5.5)
464	(2.5)
465	(10.4)
466	(5.0)
467	(1.5)
468	(9.8)

73号 土器番号	(単位cm)
469	(3.2)
470	(2.3)
472	(2.0)
473	(15.3)
474	(9.0)
475	(3.2)
476	(0.3)

第105図　上の原72・73号住居址　その3



第106図　上の原72号住居址出土土器

〔72号住居址出土遺物〕（第106図）

甕は10個体以上が出土しているが、このうち6個体を図示した。454は口縁部が内湾気味に直立し、胴部は長胴で底部は丸底である。特に口縁部の高さは他の5個体に比較して著しく高くなっている。455以下の甕はいずれも口頸部の破片により復原図化したものである。これらは口縁部が内湾気味に立ち上がるもの（455・456）と外湾するもの（457・458），さらに直線的に短く外反するもの（459）との3つに大別することができる。壷は3個体出土している。460・462は複合口縁壷で、462では頸部のくびれは強く段も明瞭であるが，460

では頸部の段が稜として残る退化した形態である。461は単純口縁の壷であるが、胴部外面には炭化物が付着し、明らかに煮沸に使用した痕跡が残されている。この種の土器の中には形態のみでは壷・甕の区別が困難な一群があり、必ずしも形態のみでは判断出来ない。小型丸底土器は2個体出土しているが、463では通常の小型丸底土器に比べて大振りで、口径は胴部径に対して著しく小さいものである。464は長頸の小型丸底土器で胴部は扁平である。465は小型丸底土器を焼成前に加工をくわえ、所謂須恵器鼎を模倣したものである。高杯は3個体出土したが完形品はなかった。466・467の杯部は浅く、上半部と下半部の境でわずかに屈折している。467の脚部との接合部内面のボタン状突起は消されているので、脚柱状部はラッパ状に開くものであろう。468は杯上半部を欠失しているが、脚部は柱状部と裾部との境が明瞭なタイプである。

〔73号住居址出土遺物〕（第107図）

甕は4個体出土した。469～471は口縁部が小さく外反し、胴部が球形に近いものである。器壁は全体に厚く、内外面の調整・仕上げ手法は粗雑である。472は口頸部の形態は壷型土器に近いものであるが、内外面に煮沸による炭化物の付着や器面の剥落・変色等が顕著であるので、甕とみるべきであろう。473は小型の鉢である。胴部は扁平な球形で口縁部は小さく外反する。474は小型丸底土器で、口径は胴部径に対して小さく、器壁は薄く整美な造りの土器である。高杯は出土器種のなかでは最も多いが復原できたものは2個体である。475・476とも脚部の形態は類似するが、杯部は475が上半部と下半部との境が明瞭に屈折しているのに対して、475は屈折が不明瞭で上半部から口縁部が大きく開いている。又杯部の口径も475に比較して大である。

〔74号住居址出土遺物〕（第108図）

477は肩部外面に2個一対の円形竹管文を刻印した壷の破片である。小破片であるため詳細を知ることは出来ないが、外面は刷毛目調整し内面はヨコ方向のヘラ削りを施している。478は甕胴部破片で外面に右下がりのタタキ目が残されている。477・478とも薄い造りの土器である。479・480は小形丸底土器でいずれも口径が胴部径に対して大きいタイプである。481は高杯杯部破片で上半部と下半部との境は明瞭である。

〔76号住居址出土遺物〕（第109図）

出土遺物は土師器甕口縁部破片2個体分である。487は頸部のくびれは弱く，口縁部は大きく外反している。488の口縁部は「くの字」状に小さく外反している。いずれも小破片であるため詳細を知ることができない。

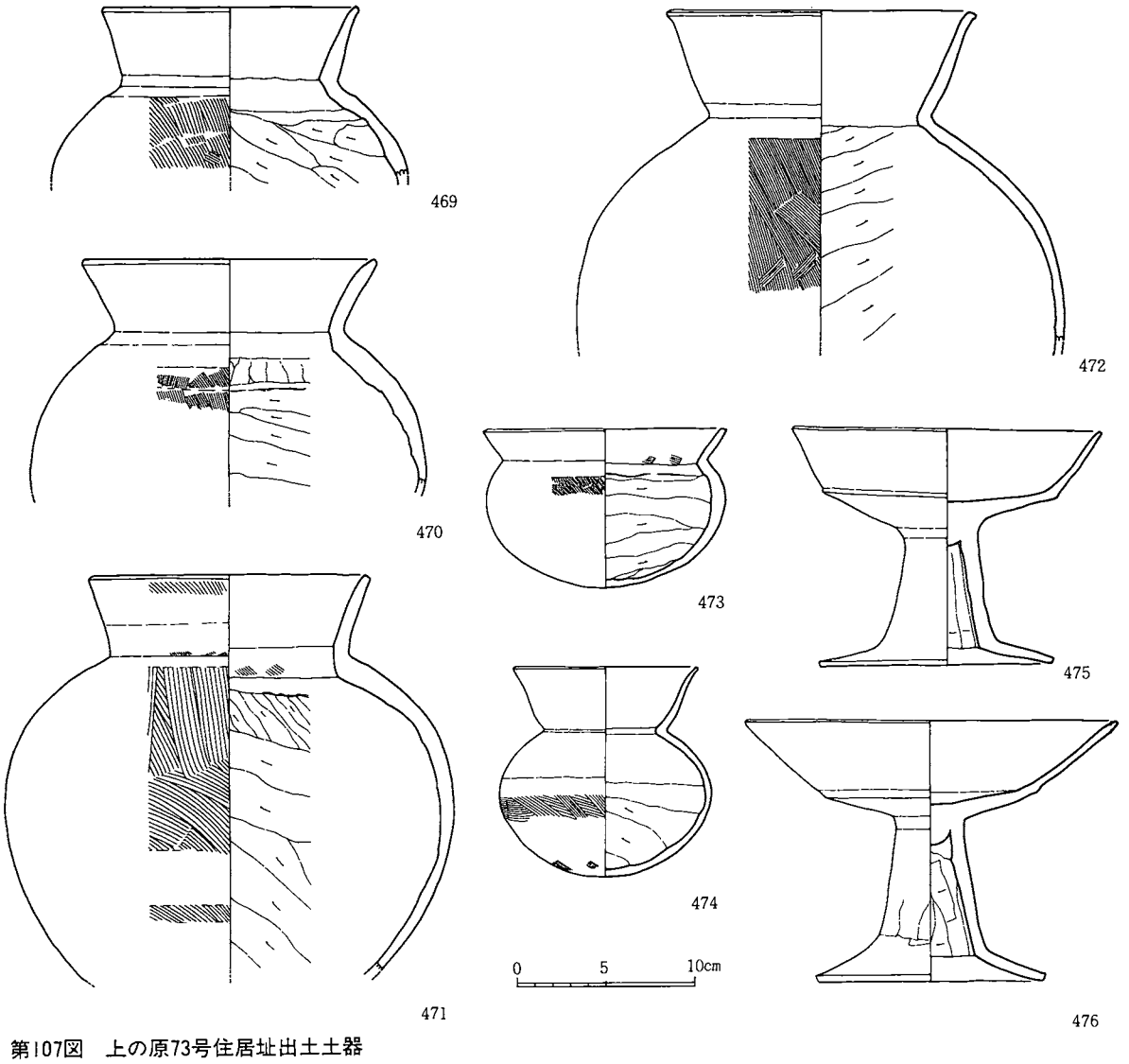
上の原75号住居址（第110図）

B－1区に位置している。住居址の規模は長軸（A－B）線上で5.40m，短軸（C－D）線上で5.15m，床面積は住居の南東部を土壙と重複しているため、正確には計測できないが概ね27.1m²であった。平面プランは南辺と東辺がやや長い方形を呈している。長軸方位はN－55°－Wであった。壁高は南壁で最高0.44mを測るが他の三壁も大きな差はない。床面には硬化面が広い範囲に認められ，この内側には4個の柱穴がほぼ良好な状態で配置されていた。また柱穴P1－P2の間の床面には焼土が堆積していたが、炉址状の落ち込みは認められなかった。

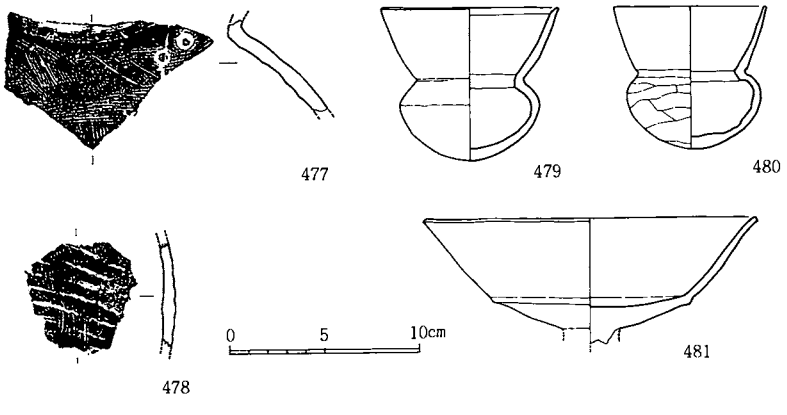
〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第110図）

住居址覆土は上層で暗褐色、下層から床面直上では灰褐色土層に徐々に変化していて、この間に明確な一

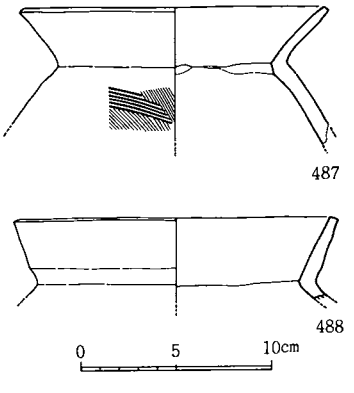
線を引くことは出来なかった。なお下層の灰褐色土層には炭化物・焼土粒が多く含まれていて、出土遺物の大半はこの下層から出土し、484・486の2個体については床面に密着した状態で出土したものである。



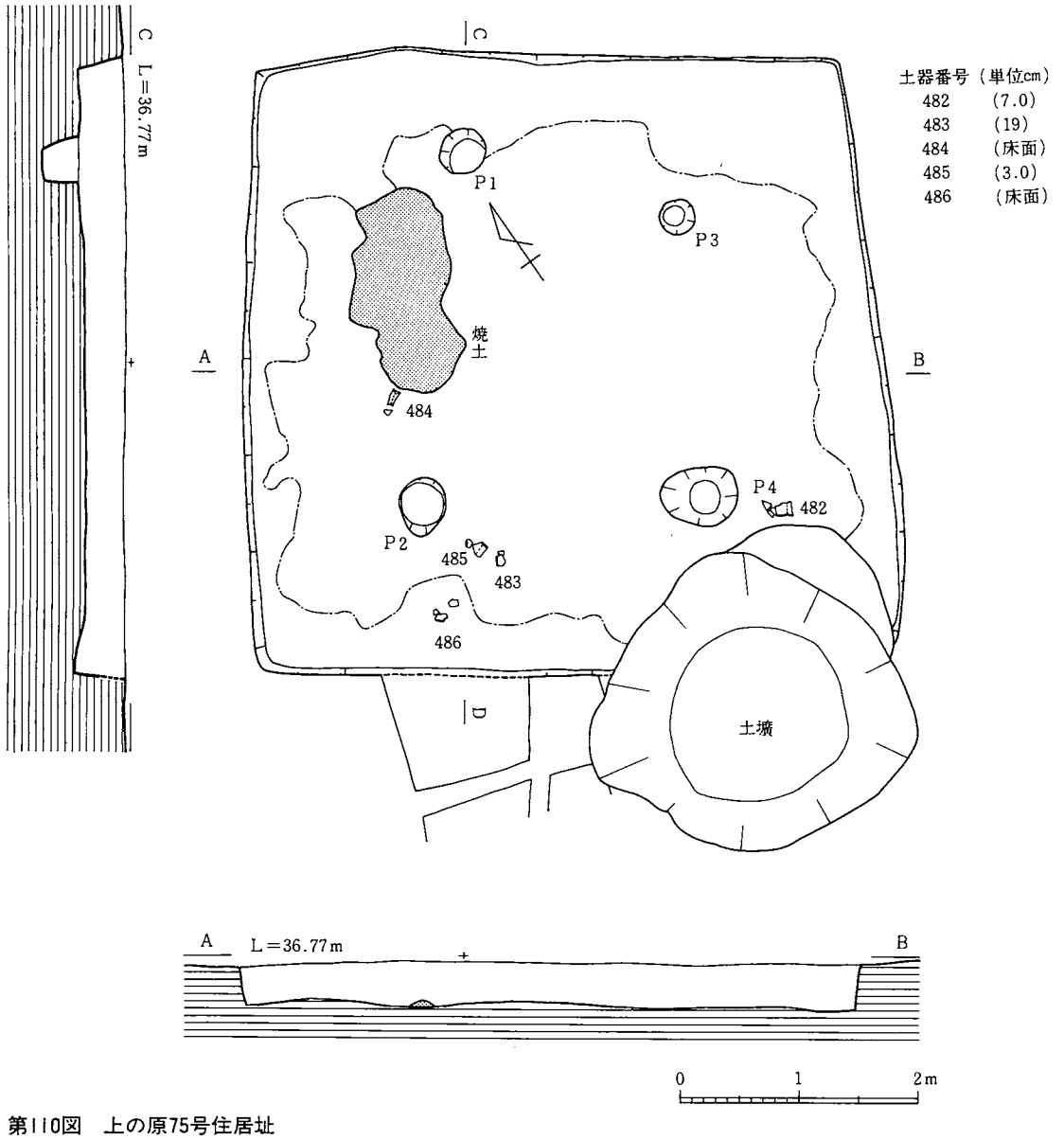
第107図　上の原73号住居址出土土器



第108図　上の原74号住居址出土土器



第109図　上の原76号住居址出土土器



第110図　上の原75号住居址

〔出土遺物〕（第111図）

出土遺物はすべて土師器で、図示できたのは甕のみである。482は口縁部が内湾気味に小さく立ちあがり、胴部は強く張っている。胴部中位以下を欠失するものの、全体的には球形に近い胴部であろう。483は口縁部は内湾気味に立ち上がるが、他の甕に比較して口縁部が高い。484～486はそれぞれ法量は異なるが、口縁部は直線的に外反するものである。これらの土器の内外面の調整・仕上げの手法は、外面は細かい刷毛目調整のあと口頸部内外面をヨコナデで仕上げ、胴部内面はヘラ削りを施す等定型化している。

上の原77号住居址（第112図）

75号住居址の西北部約10mのB－1区に位置している。規模は長軸（A－B）線上で4.84m，短軸（C－D）線上で3.60mの南北に長い長方形プランで小型の住居址である。住居址は南東部に長さ2.15m，幅約0.70mの張り出し部を設けていて、この部分を加えた床の総面積約17.5m²であった。壁高は北壁で最高0.38mを残していたが、他の部分では概ね0.25m前後であった。床面は四壁に沿った部分を除く広い範囲に硬化面

が認められたが、張り出し部には及んでいない。その他床面には炉址・柱穴等は検出することが出来なかった。なお長軸方位はN－20°－Eであった。

〔住居址覆土〕（第112図）

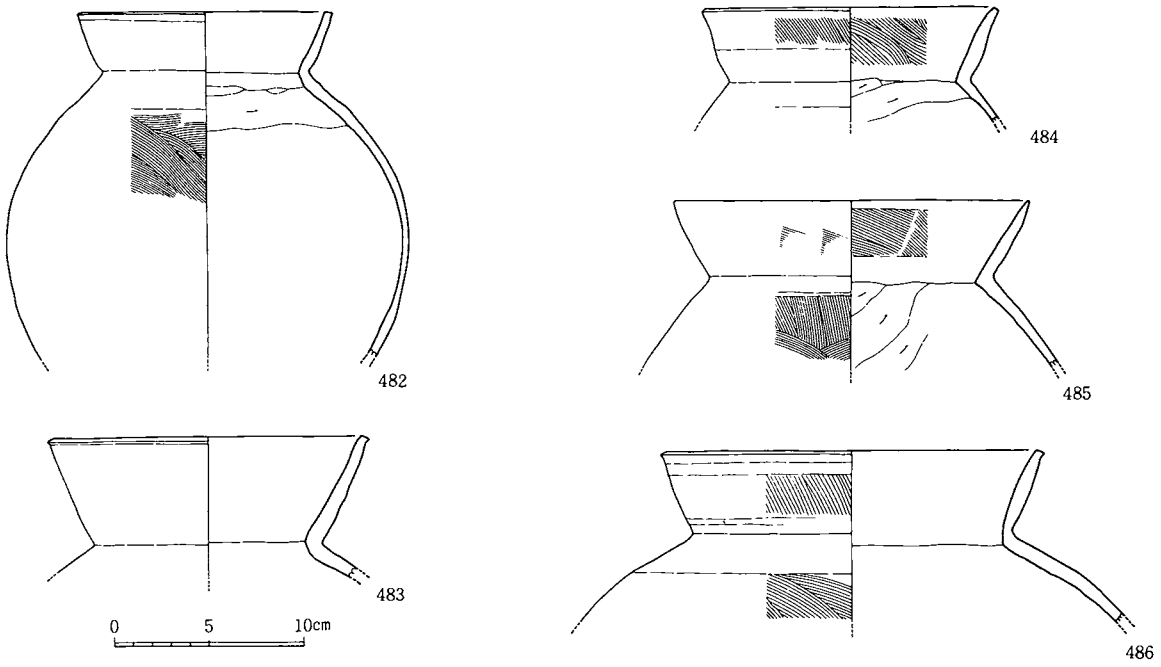
住居址覆土は上下2枚とブロック状に部分的に分布する2つの土層の計4層が確認できた。Ⅰ層は暗褐色を呈し、炭化物を少量含んでいる。Ⅱ層はⅠ層直下に厚さ7～8cm前後に薄く堆積した黄褐色の土層で、部分的に認められる程度である。三層は黒褐色を呈し、炭化物・焼土粒を多量に含んでいる。この層は床面に直接堆積したものであるが、均一には堆積しておらず、部分的にはⅠ層が直接床面に接している。したがってⅢ～Ⅰ層が堆積を完了した期間は極めて短期間であったと推定される。

〔遺物出土状態〕（第112図）

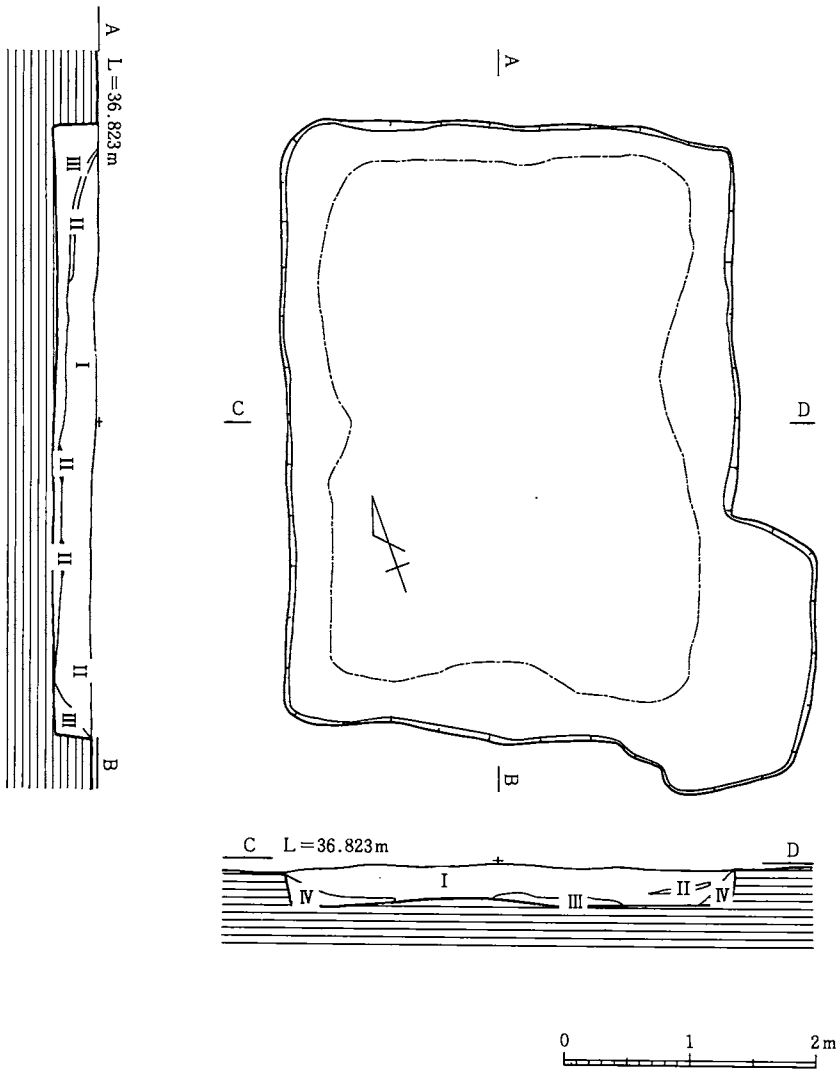
出土遺物のうち土器は土師器のみで、他に鉄鏃1点が出土した。土器は計15個体分が出土したが、床面に密着したものは甕の小破片1点と鉄鏃であり、甕については図示できなかった。その他の土器のうち489・497はⅠ層、他はⅢ層から出土したものである。特に張り出し部に集中して出土している。

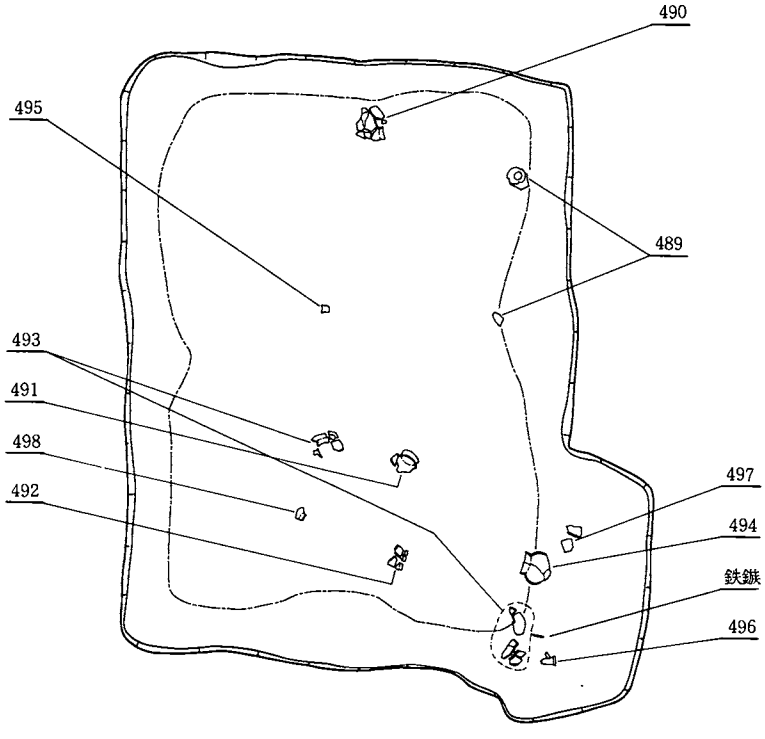
〔出土遺物〕（第113・114図）

土器は15個体のうち10個体について図示した。甕は5個体のうち3個体を図示したが、他の2個体については胴部破片であり、復原図化することが出来なかった。489・490の口縁部は内湾して立ち上がり、頸部は強くくびれ、胴部は強くはり球形に近いものであろう。491の口縁部は直立し、端部は器壁が薄くなっている。胴部は中位以下を欠失するが、球形に近いものであろう。493は複合口縁壷ともとれるが、胴部内面に煮沸による変色がみられる。一方492では煮沸の痕跡は皆無であった。従って493と492との形態上の違いに、甕と壷と一線が引けるかも知れない。494は単純口縁の大型壷である。口縁部は大きくラッパ状に開き、端部は角ばっている。胴部は中位以下を欠失するものの、長胴気味で丸底になるものであろう。495は小型丸底土器



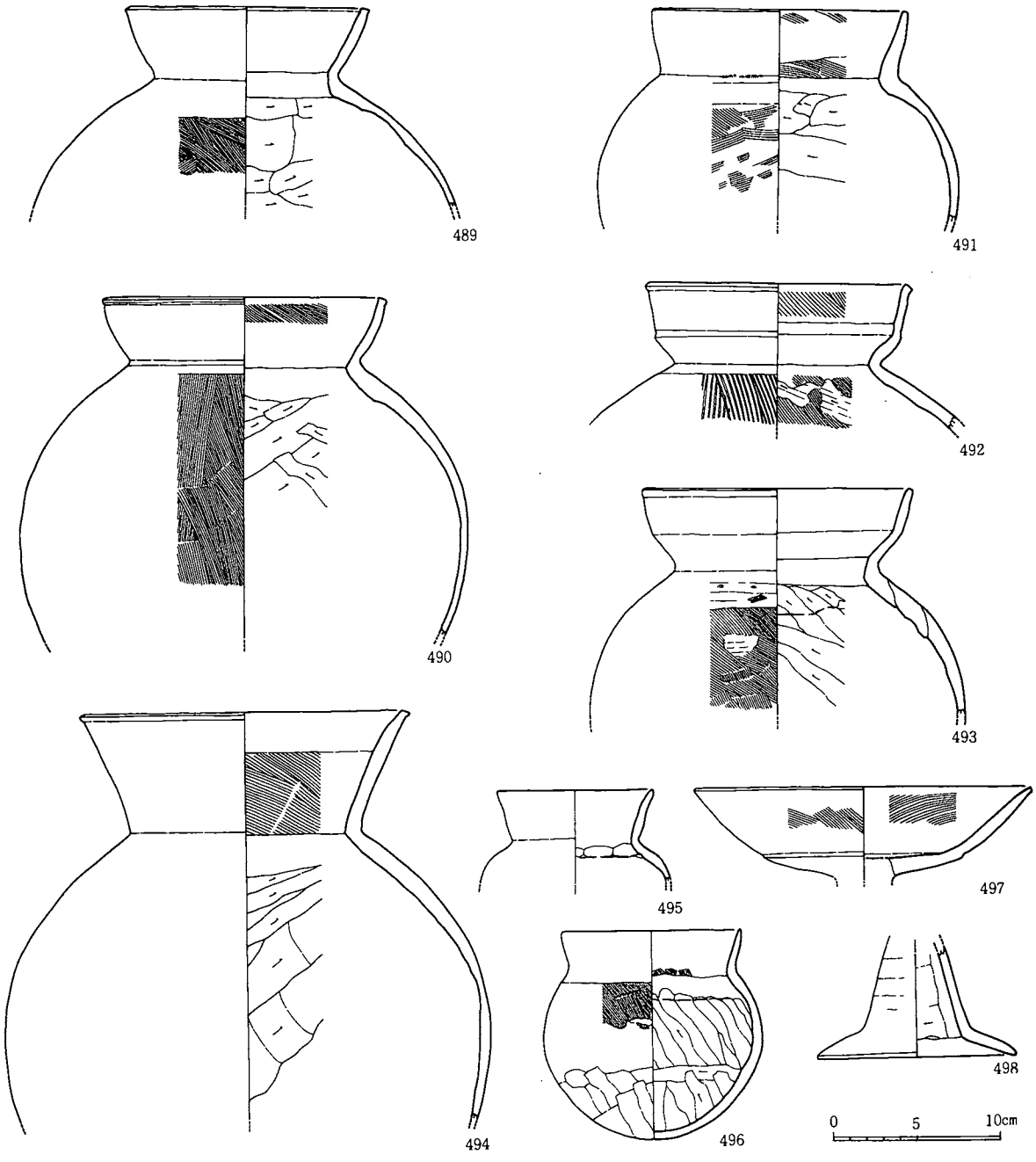
第111図　上の原75号住居址出土土器



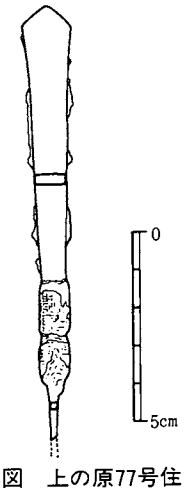


土器番号	(単位cm)
489	(19.8)
490	(1.4)
491	(13.5)
492	(1.2)
493	(1.0)
494	(3.7)
495	
496	(1.0)
497	(11.9)
498	(4.8)
鉄鏃	(床面)

第112図　上の原77号住居址



第113図　上の原77号住居址出土土器



第114図　上の原77号住居址出土鉄鏃

で胴部以下を欠失している。口径が胴部径に対して小さいタイプである。496は短頸の中型の壺で，口縁部は短く直立し，胴部はやや扁平な球形を呈している。高杯は計5個体分が出土しているが細片が多く図示できたものは2個体である。497は杯部破片で，全体に浅く下半部は平坦で上半部は大きく開いている。上半部と下半部との境には明瞭な段を残している。498は脚部破片で柱状部は下位に移るにしたがって開き気味となり，裾部で屈折してさらに大きく開いている。比較的小型品である。

鉄鏃（第114図）は床面に密着して出土したものである。所謂「有段篦被圭頭細根斧箭式」に属している。中茎の一部を欠失しているが，現存長11.4cmを測る。段の部分は桜皮の矢柄で覆われていて，細部の形状は半明しない。先端部の角度は約98°で，幅は最大で1.3cm，厚さ0.3cmを測った。

上の原78・79号住居址(第115図)

78および79号住居址は部分的に重複し，いずれもＢ－1区に位置している。78号住居址の規模は長軸線上では東壁が79号住居址との重複部分での立ち上がりを確認できなかったが，概ね4.50m前後であったと推定される。短軸(Ｃ－Ｄ)線上では3.90mを測り，床面積は15.8m²程度が予想される。 壁高は北壁で最高0.30m，西壁で最低0.20mを残していた。床面は中央部を中心に硬化面が認められ，また床面の中央の南壁寄りに炉址が設けられていた。炉址は長径0.63m×短径0.58mの楕円形をなし，床面からの深さ0.25m，断面形は「U」字状を呈していた。79号住居址の規模は長軸線上で4.15m，短軸(Ｅ－Ｆ)線上で4.12mのほぼ正方形に近い平面プランで，床面積は約15.5m²の小型の住居址である。壁高は78号住居址と同様0.25～0.30mを残していて，床面のレベルもほぼ差が認められなかった。床面中央部の狭い範囲に硬化面が認められたが，炉址・柱穴等は検出出来なかった。

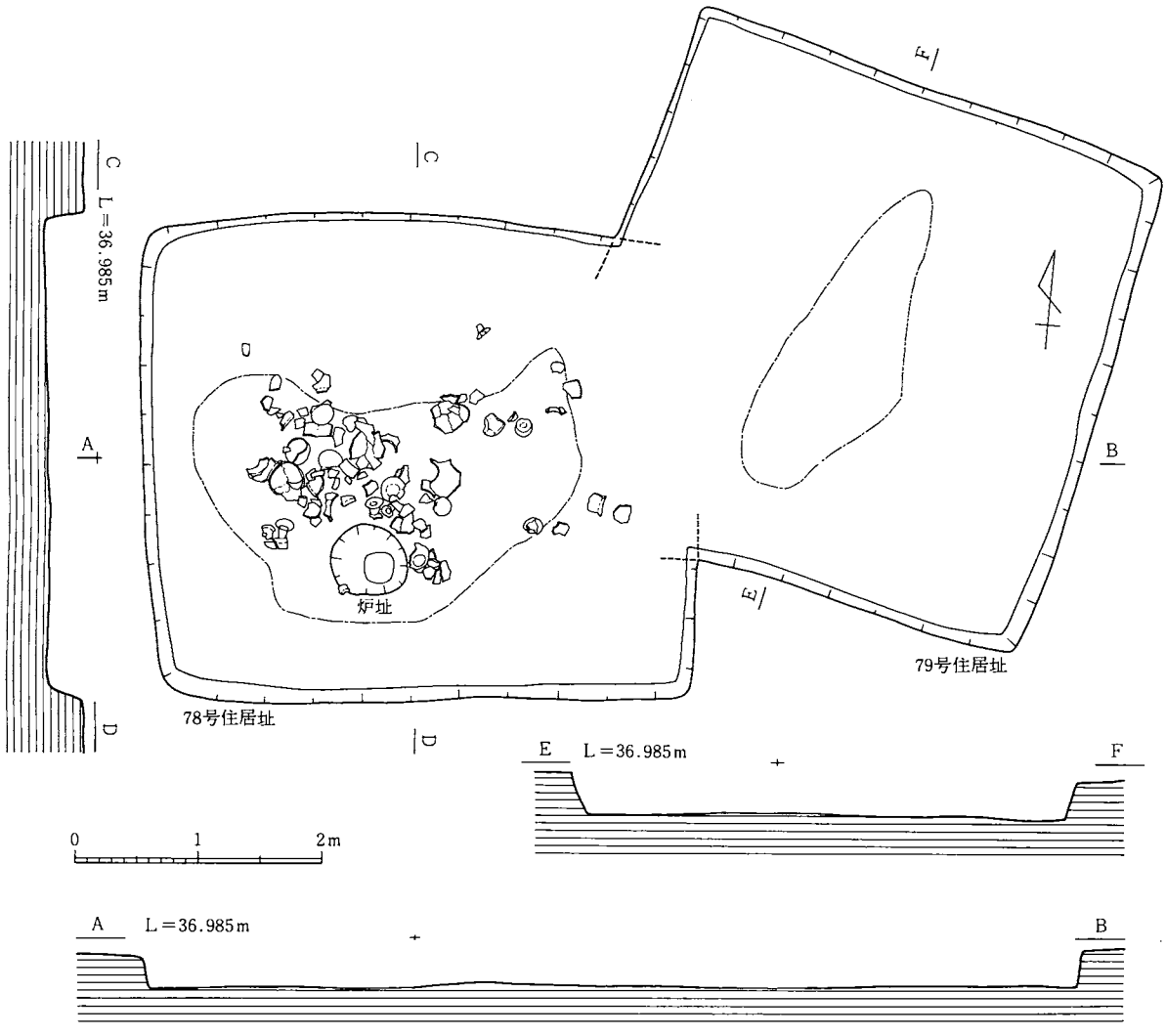
〔住居址覆土・遺物出土状態〕(第115図)

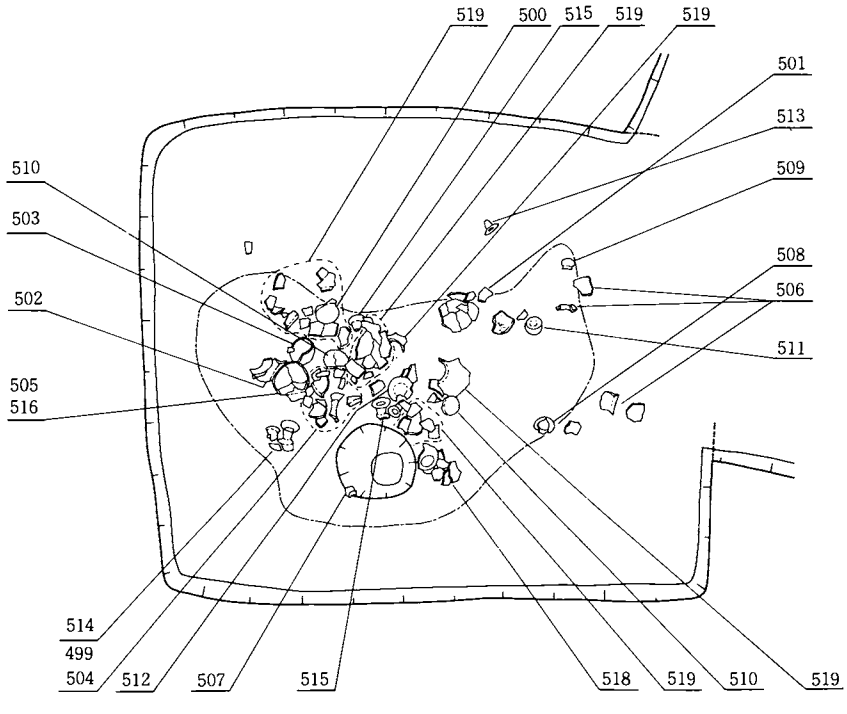
住居址覆土は78・79号住居址とも灰褐色土層で覆われていて，床面に移行するにしたがって徐々に暗褐色に変化していて，此の間に一線を引くことはできない。しかし床面直上では炭化物・焼土の量が増加していた。遺物は79号住居址では土師器甕および高杯杯部の小破片が２点出土したが図示することは出来なかった。これらはいずれも覆土中に含まれていたものである。78号住居址には大量の土師器が出土した。しかしこれらの土器は住居址廃絶後に，壁側では厚く中央では薄く堆積した土砂の上に一括して廃棄されたらしく，完形品やこれに近いものが多いにもかかわらず，床面に密着した状態で出土したものは皆無であった。出土した土器群自体は一時期のまとまりと見ることができるが，住居址そのものの年代を示すものではない。

〔出土遺物〕(第116・117図)

出土遺物は土師器のみで計21個体が出土し，そのすべてを図示した。器種ごとの内訳は甕８，大型壷４，壷２，小型丸底土器２，杯１，高杯４であった。いずれも彩色されたものや特殊な器種は含まず，日常雑器としての土器で構成されている。

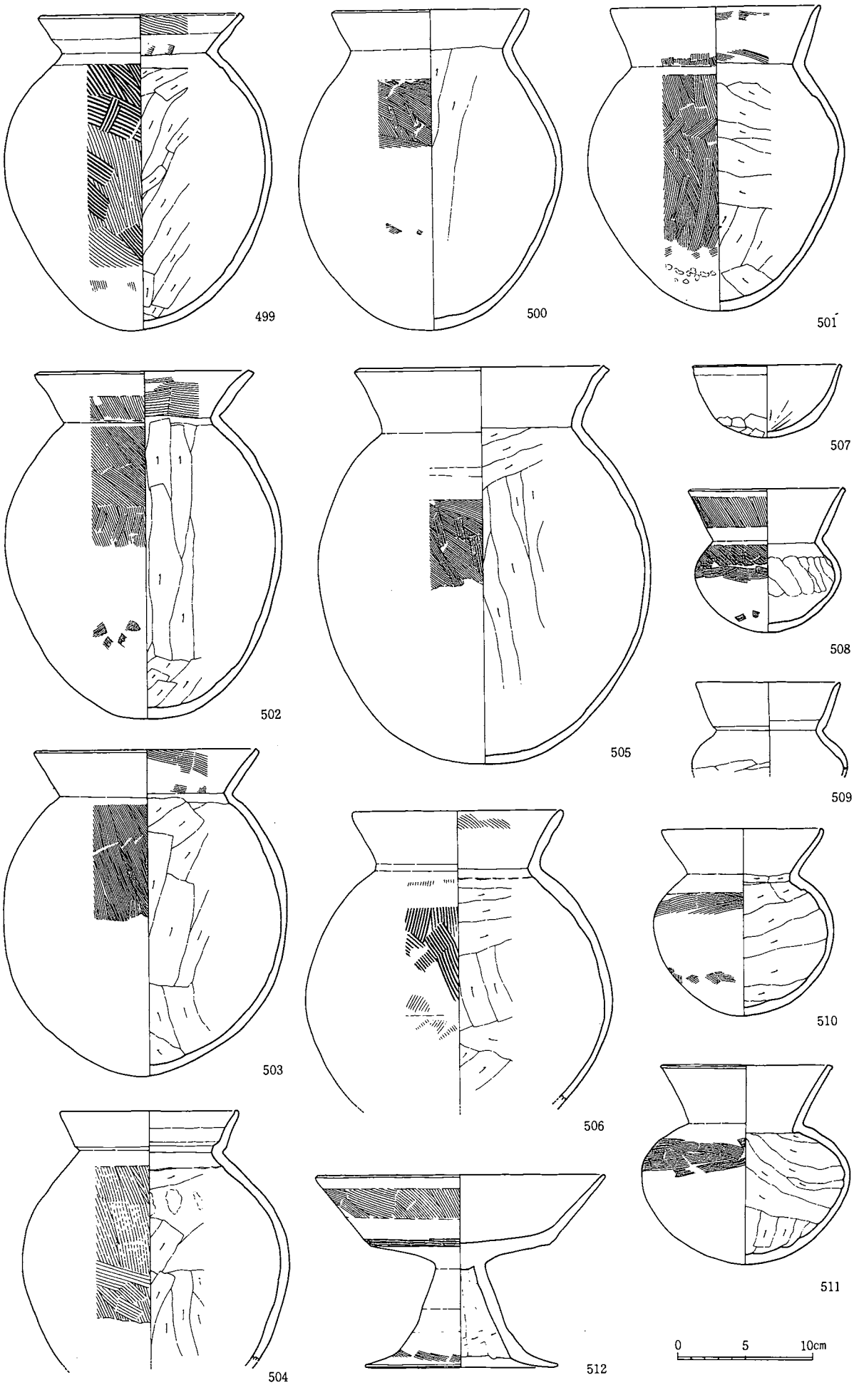
499・502・503の甕は口縁部が「く」の字状に大きく外反し，胴部は長胴気味で最大径は中位以上にあり，底部はやや尖り気味の丸底となる。外面の刷毛目の単位には個体ごとの粗密の差が認められるものの，定型化している。通常この種の甕にはタタキ目が残される場合があるが，この３個体については全く認められない。500・501・504の甕も口縁部が「く」の字状をなすが，その屈折はあまり強くない。胴部は中位で強く張り，最大径も中位及び中位以下にある。また506の甕も類似するが口縁部は外湾気味に開いている。505の甕は大型で口縁部は外湾し端部は角ばっている。胴部は球形で底部は丸底である。以上８個体の甕はいずれも煮沸に使用された明瞭な痕跡を残している。510は中型の壷で口縁部は直線的に外反し，端部で内側へ小さくつまみ出されている。底部はやや尖り気味の丸底である。511も中型の壷で口縁部は直線的に大きく外反し，胴部は球形を呈しているが，胴部最大径は中位以上にある。507は半球形の体部を有する小型の杯である。内外面はヘラ削りのあとヨコナデで仕上げられている。512・513の高杯は杯下半部は平坦で上半部との境で屈折して，口縁部は直線的に開いている。脚部は柱状部と裾部との境が明瞭なタイプである。柱状部は直線的で脹らみはもたない。514は杯部が全体的に丸味をもっていて，脚部が他の高杯に比較しても著しく高い。脚は柱状部と裾部との境が屈折し，境界が明瞭である。515は全体に器高が低いが，各部の形態は514に類似している。516・517は単純口縁の大型壷である。口縁部は直線的に外反し，胴部は「倒卵形」をなしている。内外面の調整・仕上げの手法は甕等と同様である。518も単純口縁壷であるが，口縁部の開きは小さい。胴部はわずかに



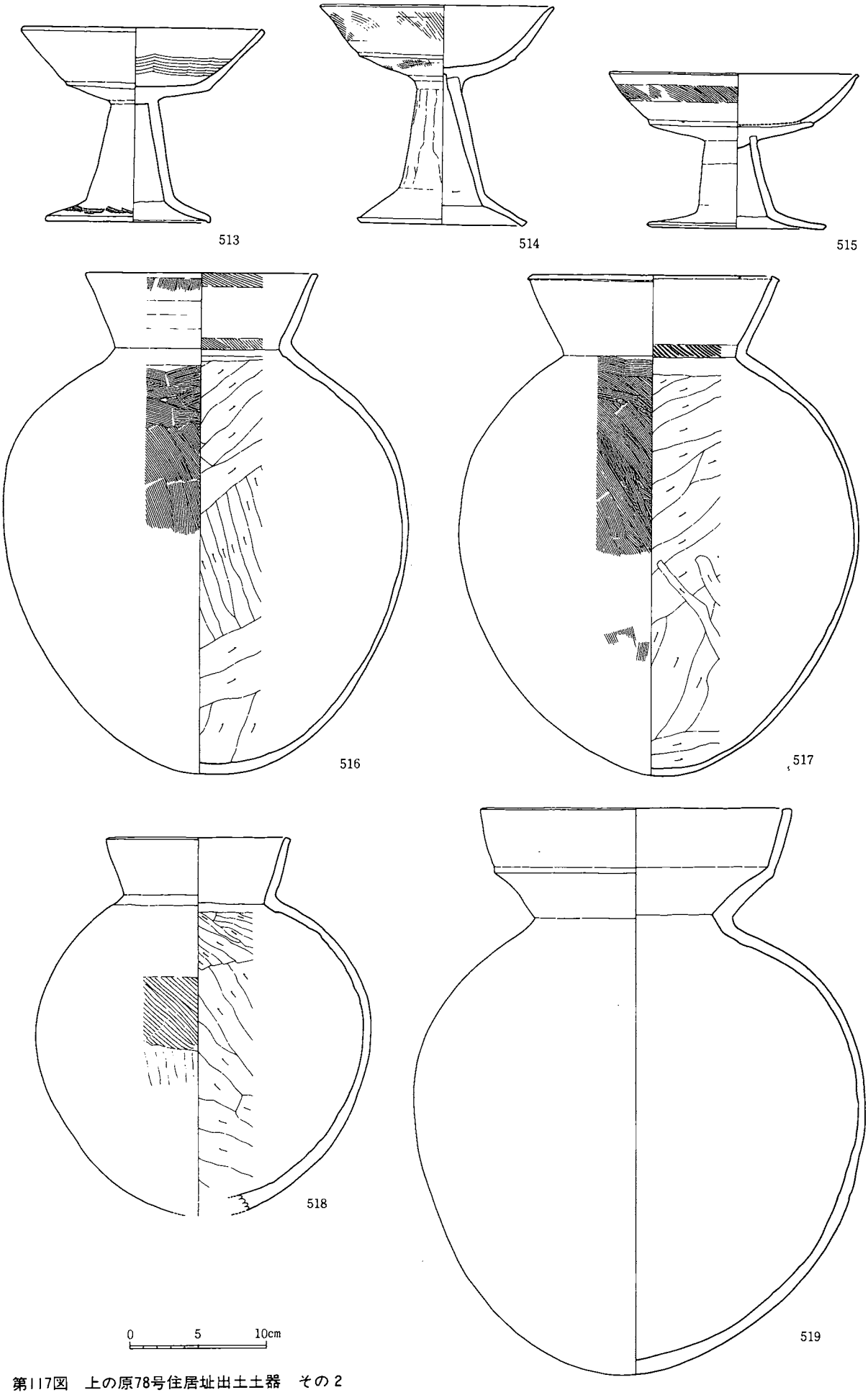


土器番号	（単位cm）
499	(2.7)
500	(15.2)
501	(4.6)
502	(9.0)
503	(6.6)
504	(2.7)
505	(2.7)
506	(3.0)
507	(11.7)
508	(
509	(12.9)
510	(3.7)
511	(6.3)
512	(6.3)
513	(4.6)
514	(8.1)
515	(4.1)
516	(1.0)
518	(11.7)
519	

第115図　上の原78・79号住居址



第116図　上の原78号住居址出土土器　その1



第117図　上の原78号住居址出土土器　その２

長胴気味で，底部は欠失しているが尖り気味の丸底であろう。519は複合口縁の大型壷で頸部は強くくびれて外反して立ち上がり，中位で「く」の字状に屈折して，口縁部は直線的に立ち上がる。胴部は球形に近く，底部はやや尖り気味の丸底である。

上の原80号住居址（第118図）

B－2区にあり，74号住居址の東側に隣接している。同区内には80～84号までの5軒の住居址が分布している。住居址の規模は長軸（A－B）線上で4.52m，短軸（E－F）線上で4.29m，床面積約17.8m²で南北にわずかに長い長方形プランを呈している。長軸方位はN—21°—Eであった。壁高は四壁とも0.20m前後を残していた。床面には柱穴及び柱穴状の落ち込みを計10個検出した。10個のなかでP2は床面を浅く掘り込んだもので，明らかに柱穴以外の施設であろう。他のものについても配列が不規則で柱の構造については不明である。また床面の中央短軸線上に沿って段差が認められ，此の部分から南側は約5～8cm床が高くなっている。本遺跡ではこのような例は珍しいが，おそらく住居址内の間仕切に関係するものであろう。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第118図）

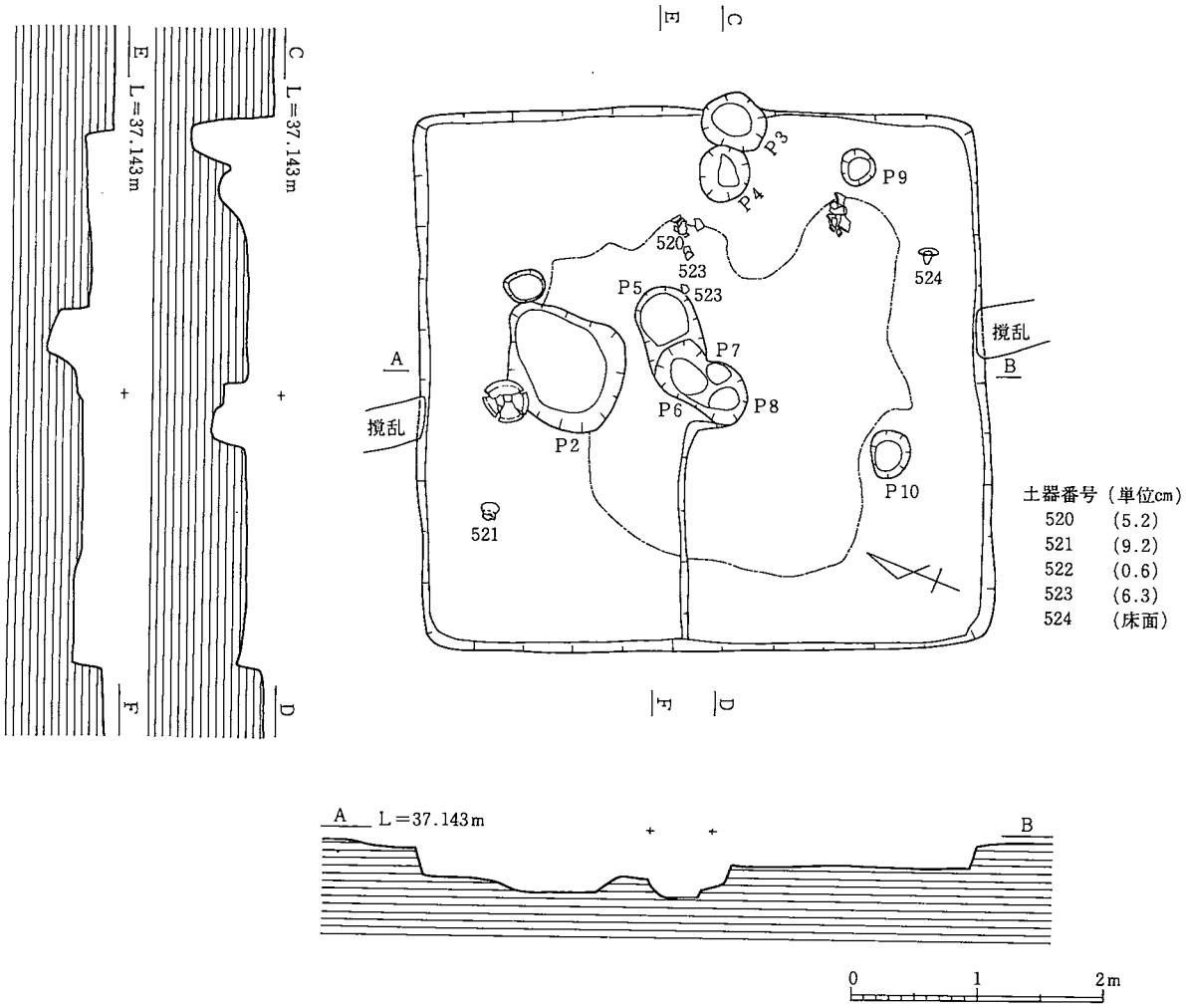
住居址覆土はすべて灰褐色の単一土層で，分層することは出来なかった。出土遺物は土師器のみで計5個体が出土したが，このうち床面に密着して出土したものは524の高杯1個体だけである。また522の鍋ないし浅鉢は現位置で土圧により押しつぶされた状態で出土したものの，土器片の最も下位のものでも床面との間に覆土が堆積していた。したがって単に数値によって振り分けると以上のような結果となる。

〔出土遺物〕（第119図）

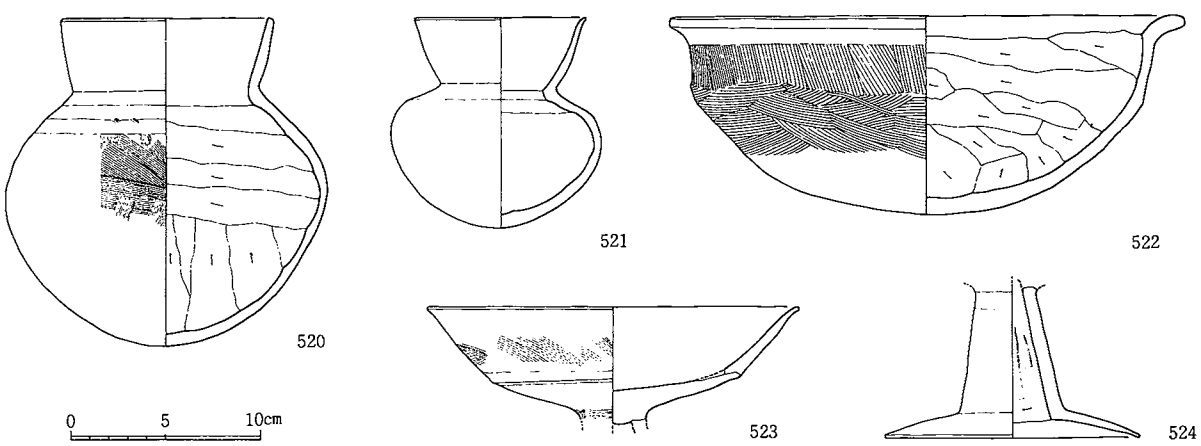
出土土器6個体のうち甕の胴部の大型破片をのぞき5個体を図示した。520は中型の壷で口縁部はやや外反気味に直立し，胴部は球形を呈している。外面は刷毛目調整のあと口縁部から肩部までの広い範囲をヨコナデで仕上げている。521の小型丸底土器は口縁部が内湾気味に立ち上がり，肩部が強く張り最大径は此の部位にある。522は鍋あるいは浅鉢で頸部のくびれはなく，口縁部は大きく外湾する。体部は扁平な半球形状で底部は丸底である。523は高杯杯部で下半部は平坦で上半部との境の段は不明瞭である。524は高杯脚部で裾部は内湾して開くが，柱状部の脹らみは見られない。全体的に薄い造りの土器である。

上の原81号住居址（第120図）

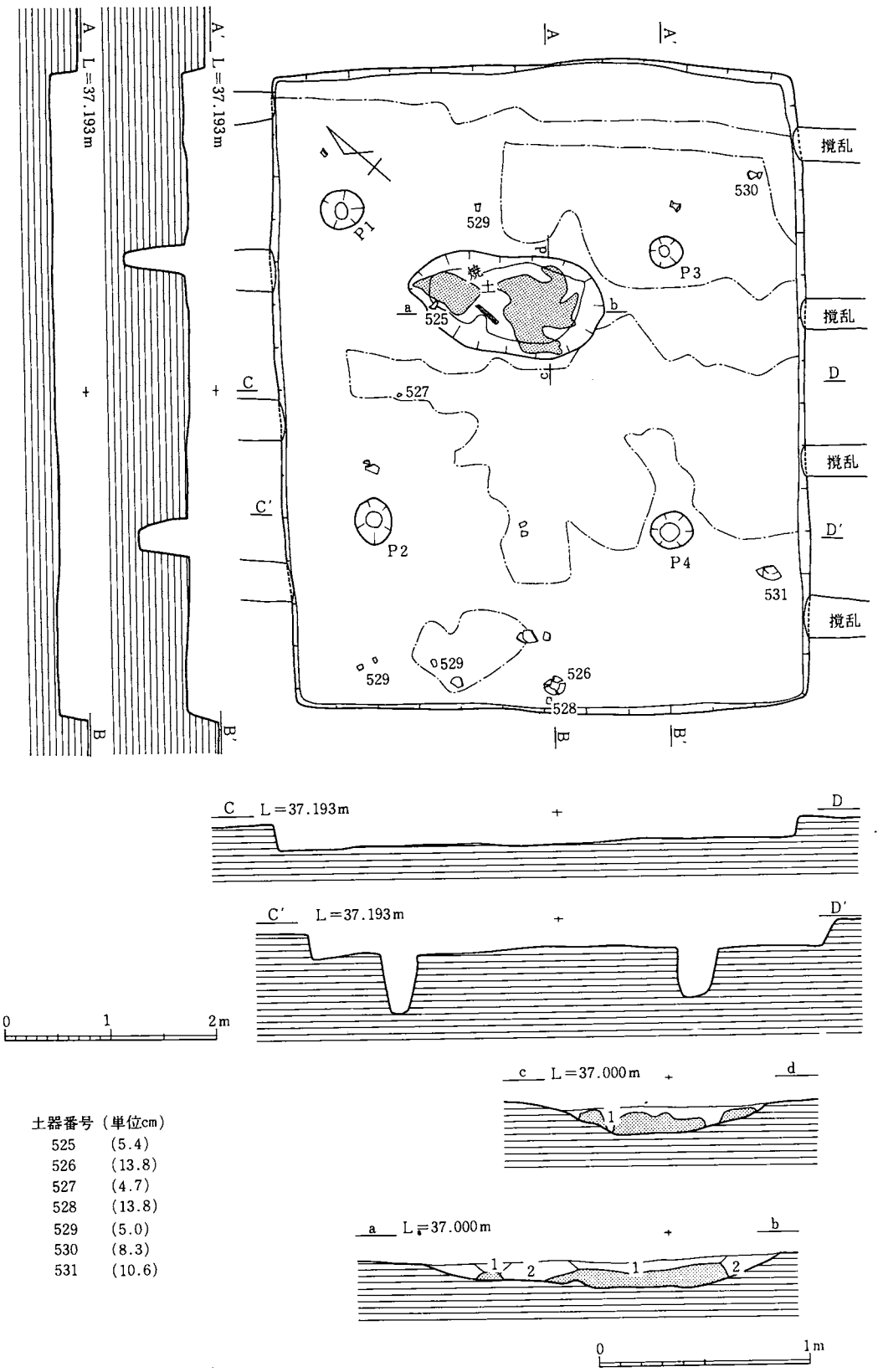
B－2区にあり，同区内の5軒の住居址では最も大型の住居址である。住居址の規模は長軸（A－B）線上で6.07m，短軸（C－D）線上で5.00m，床面積約29.3m² で，平面プランは整美な長方形を呈している。長軸方位はN—50°—Eであった。壁高は南壁で最高0.35mを測ったが，他の壁は0.25m前後であった。住居址は4条の耕作溝によって攪乱され，このうち北側の2条は床面にまで達していた。従って旧条の硬化面の範囲は床面のかなり広い範囲に及んでいたものと考えられる。床面には4個の柱穴が整然と配置され，これらを主柱穴とする上屋構造が想定される。また床面中央部の北西寄りに炉址が設けられていた。炉址は長径1.9m，短径0.95mの長楕円形を呈し，内部には焼土が厚く堆積し，炭化部材片も検出された。以上のように本住居址は4本柱に炉址を備えた典型的な竪穴住居の一つの形式である。



第118図　上の原80号住居址



第119図　上の原80号住居址出土土器



土器番号（単位cm）

525	(5.4)
526	(13.8)
527	(4.7)
528	(13.8)
529	(5.0)
530	(8.3)
531	(10.6)

第120図　上の原81号住居址

〔住居址覆土・遺物出土状態〕(第120図)

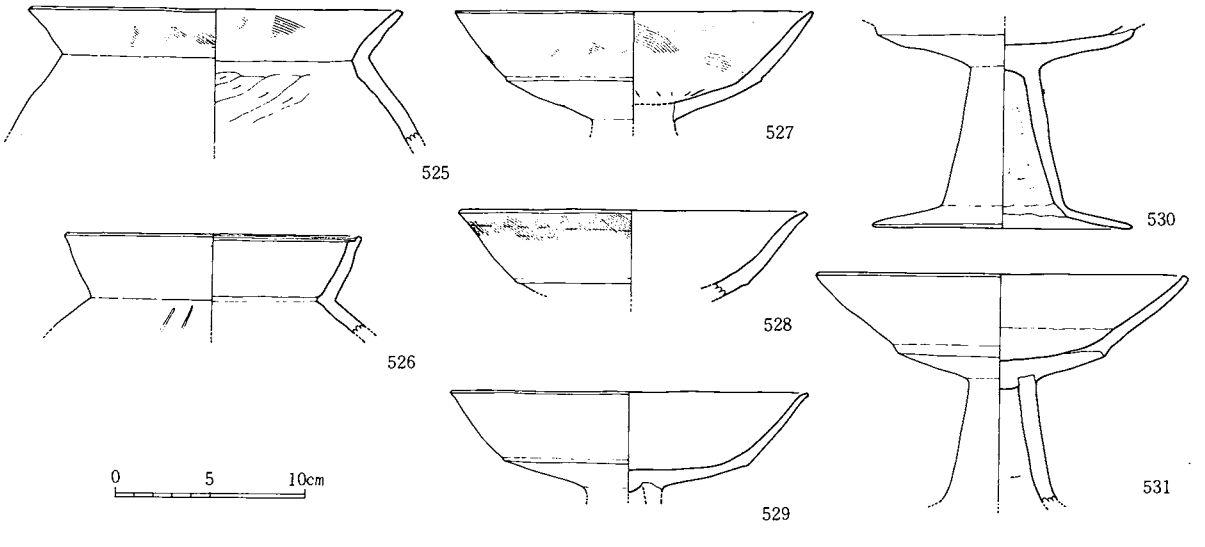
住居址覆土は大半は灰褐色土層であるが，床面直上では焼土・炭化物が多く混入した暗褐色の土層が厚さ5cm前後で薄く堆積していた。出土遺物は総て土師器であるが，量も少なく小破片が多い。これらの土器は覆土中に含まれていたもので，床面に密着して出土したものは皆無であった。

〔出土遺物〕(第121図)

525は甕の口頸部破片で，口縁部は「く」の字状をなしていて，薄い造りの土器である。526も甕の口頸部小破片で，口縁端部の内面に沈線が一条巡っている。また肩部外面には2条のヘラ記号が刻まれている。527以下の5個体は高杯であるが，いずれも破片で全体の形状を知ることはできない。杯部は527～529のように全体に浅いものと，531のように杯上半部が下半部に対して非常に高いものとがある。また脚部は高く柱状部と裾部との境が明瞭なものに限られる。なお甕に2条の平行沈線によるヘラ記号の例としては14号住居址出土の甕(土器番号75)がある。

上の原82号住居址(第122図)

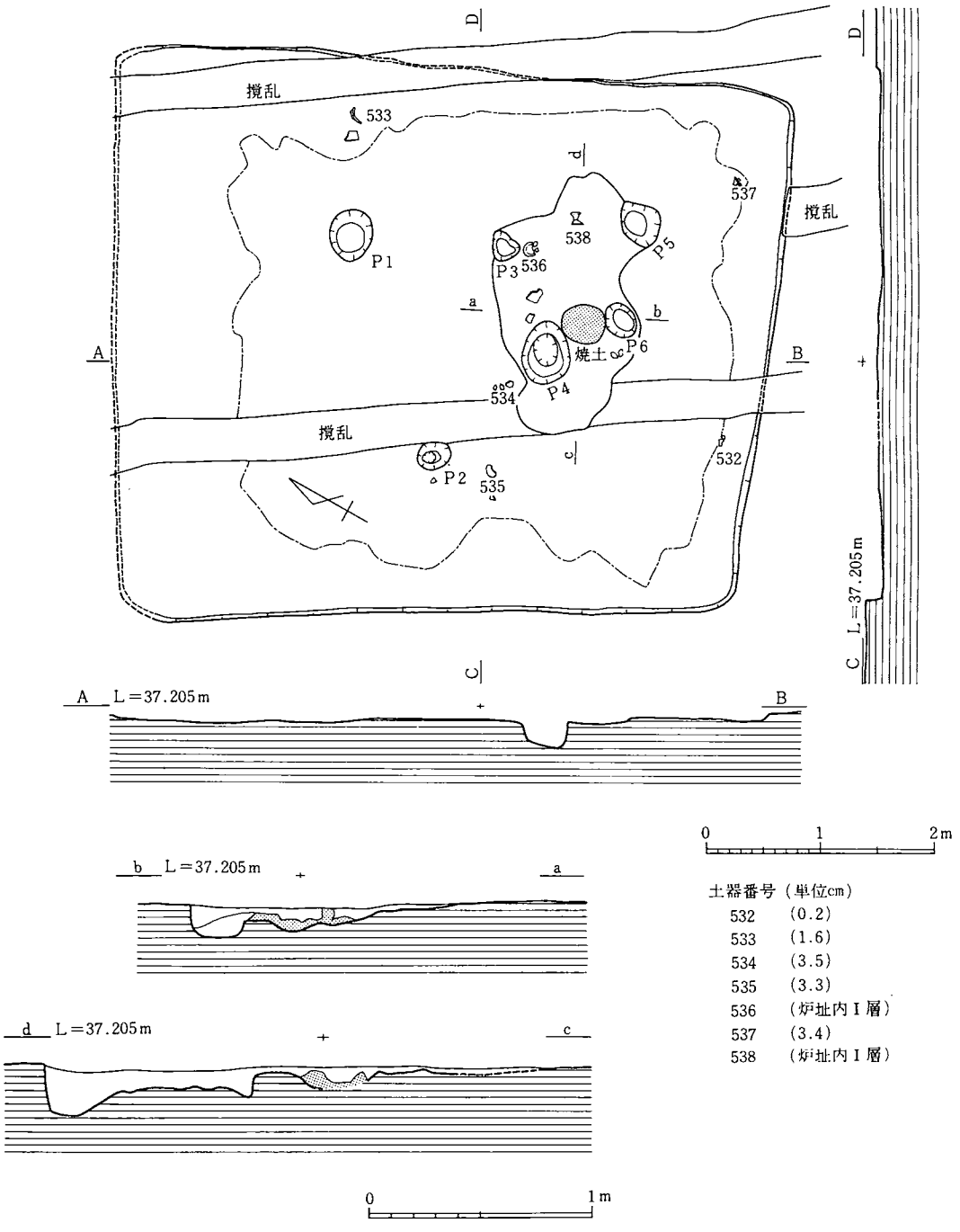
B－2区の中央部のやや西寄りに位置している。住居址は北辺が上部からの削平によって失われているために正確な規模を計測することができないが，住居址覆土の残存状態から推定すると，長軸(A－B)線上で約5.8m前後であろう。また東辺も耕作溝で失われているが，概ね短軸(C－D)線上では約4.75mであった。従ってこうした点を考慮すると床面積はほぼ25.8m²となる。平面プランは北辺が長く，南北に長いやや変形した長方形を呈している。長軸方位はN—29°—Wであった。壁高は西壁で0.15mを最高に他の2壁は0.10m以下を残すにすぎない。床面には四壁に沿った部分を除く広い範囲に硬化面が認められた。柱穴およびこれに類する落ち込みを6個検出したが，このうちP3～P6は炉址内にあり，柱穴としては要をなさないものである。したがって残るP1・P2および炉址と重複するものの炉址の中心部から離れているP5を加えたとしてもどのような柱構造かは判明しない。



第121図　上の原81号住居址出土土器

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第122図）

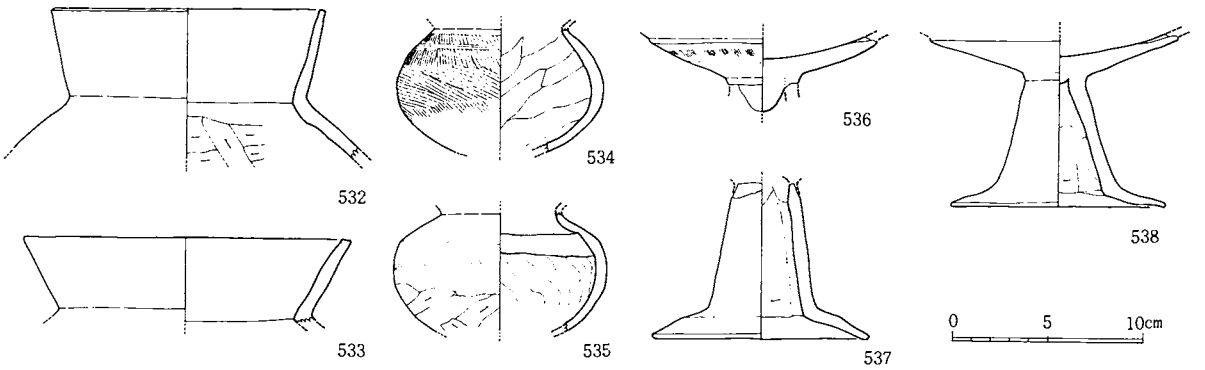
住居址覆土は住居址そのものと同様残存部分が少なく，分層することはできず覆土中の遺物も多くが失われたものと思われる。残存していた覆土は炭化物・焼土を多く含んだ灰褐色土層であった。出土遺物は土師器のみで計10個体分以上が出土したが，細片が多く復原図化出来たものは７個体にすぎない。７個体のうち５個体は覆土中に，残る２個体は炉址内の焼土中から出土したものである。床面出土のものは皆無であったが，いずれも覆土の最下部に含まれていたものであり，住居址廃絶直後の年代を示すものであろう。



土器番号（単位cm）

532	(0.2)
533	(1.6)
534	(3.5)
535	(3.3)
536	（炉址内Ⅰ層）
537	(3.4)
538	（炉址内Ⅰ層）

第122図　上の原82号住居址



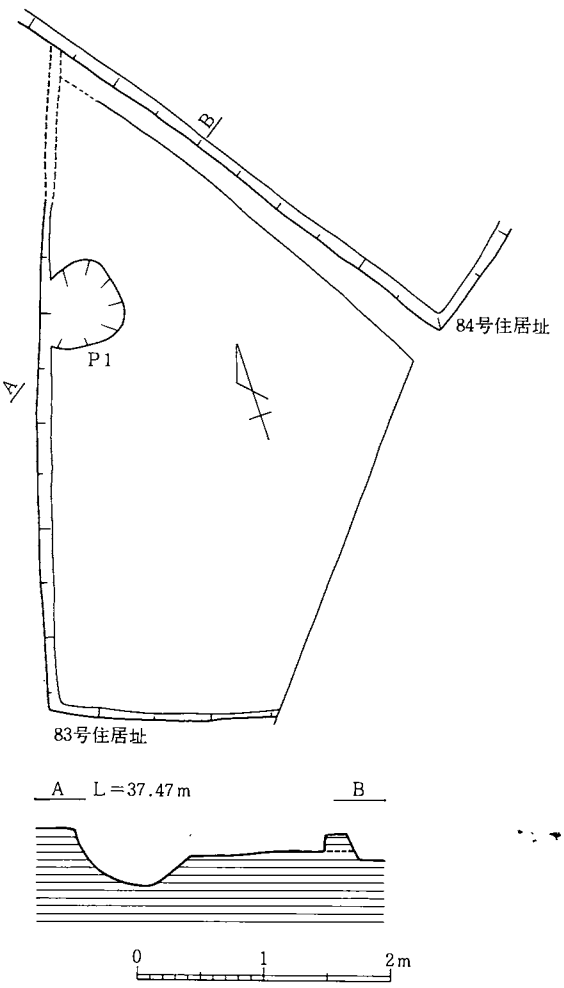
第123図　上の原82号住居址出土土器

〔出土遺物〕(第123図)

532は甕口頸部破片で口縁部は直立気味に立ち上がる。内外面とも二次的な火を受けていて器面が剝落している。533も甕口縁部破片で口縁部は外反し端部は角ばっている。532・533とも薄い造りの土器である。534・535は小型丸底土器の胴部破片である。頸部のくびれが強く胴部は扁平な球形を呈している。おそらく口径が胴部径に対して小さいタイプであろう。537・538の高杯は脚柱状部と裾部との境が明瞭なようで538では杯部と脚部との接合部内面のボタン状突起が残されている。その他甕の胴部破片と高杯脚部破片がそれぞれ1個体分出土した。

上の原83号住居址(第124図)

B－2区にあり，84号住居址と重複し溝6(近世)によって住居址の大部分が失われている。したがって住居址は南辺と西辺の一部を残すのみであり，平面プラン・規模・長軸方位等を知ることは出来ない。壁高は西壁で最高0.30mを測った。床面には西壁に沿って柱穴1個を検出した。また床面には部分的に硬化面が認められたが，面的に広がるまでには至らなかった。住居址覆土は上層では暗褐色，下層では炭化物・焼土を多く含む灰褐色土層が堆積していたが，暫時変化していて分層することは出来なかった。出土遺物は土師器3個体分が出土した。いずれも覆土中に含まれていたものである。



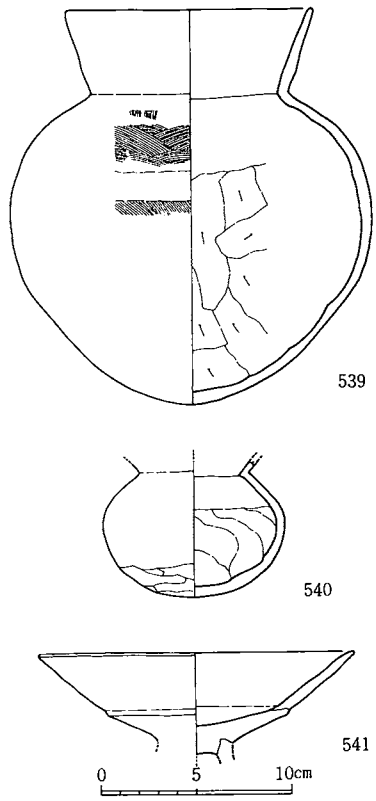
第124図　上の原83号住居址

〔出土遺物〕(第125図)

539は単純口縁の中型壷で，口縁部は直線的に外反し胴部は肩部が強く張った球形を呈し，最大径は中位以上にある。底部はやや尖り気味の丸底となる。540は小型丸底土器の胴部破片で，胴部は扁平な球形を呈している。541は高杯杯部で杯下半部は平坦に近く接合部でわずかに屈折して上半部から口縁部は大きく朝顔形に開いている。

上の原84号住居址(第126図)

B－2区にあり，83号住居址と重複し，溝6によって住居址の南西部隅を中心に，北辺の半分と東辺の大部分を失っている。住居址は中軸線上の二壁を失っているが，残存部から復原した規模は長軸(A－B)線上で4.95m，短軸(C－D)線上で4.90m，床面積約23.4m²で，平面プランはほぼ正方形に近い。長軸方位はN—57°—Eであった。住居址は全体的に上部から削平されているが，特に北壁側でこの傾向が強い。また住居址は前述のとおり南辺の溝6に加え，南北に走る4条の耕作溝で攪乱されていて，この部分の床面は失われている。したがって壁高は南壁側が最も良く残っているが，他の3壁では0.1m以下である。床面の北西部と南西部コーナーには貯蔵穴状の土壙が設けられていた。土壙1はコーナーの壁面直下に掘り込まれ，平面形は住居のコーナーを要とした扇形を呈している。土壙の底面は円形をなしこの部分の床面から深さ0.265mであった。土壙2は長径1.23m，短径0.93mの長楕円形で床面から底面までの深さは0.30mであった。床面の硬化面は複雑な範囲を示しているが，これは耕作溝による攪乱の結果である。



第125図　上の原83号住居址出土土器

〔住居址覆土・遺物出土状態〕(第126図)

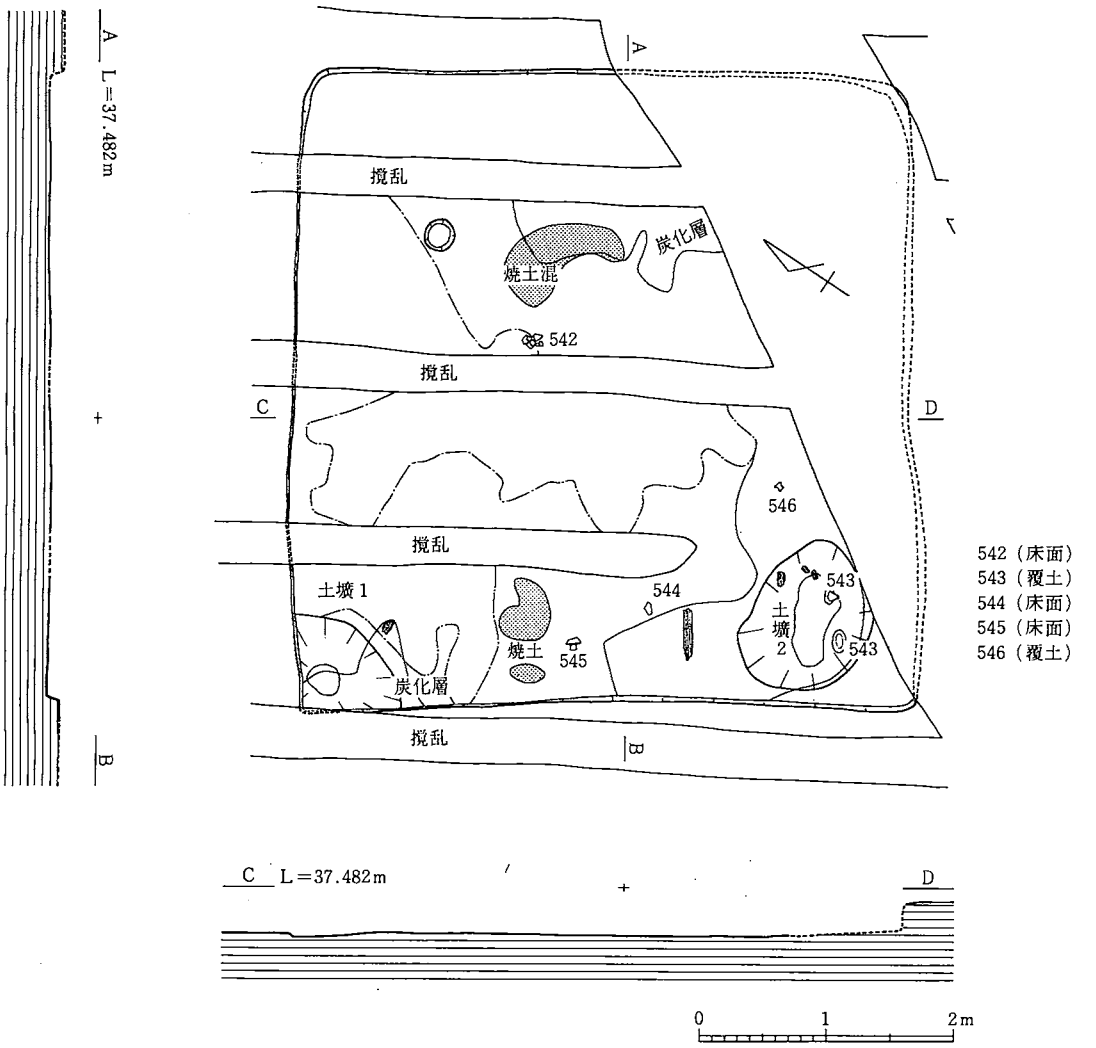
住居址覆土の残存部は少ないが，床面のほぼ全面に焼土・炭化物を多量に含む暗褐色土層が堆積し，また土壙2の内部とこの北側床面には炭化部材が検出された。こうした状況から本住居址は火災によって消失したものと推定される。出土遺物は少なく細片が多いため出土個体数は正確に把握できないが，少なくとも土師器8個体分以上が出土し，5個体を図示した。これらのうち542・544・545は床面に，543・546は覆土中から出土したものである。

〔出土遺物〕(第127図)

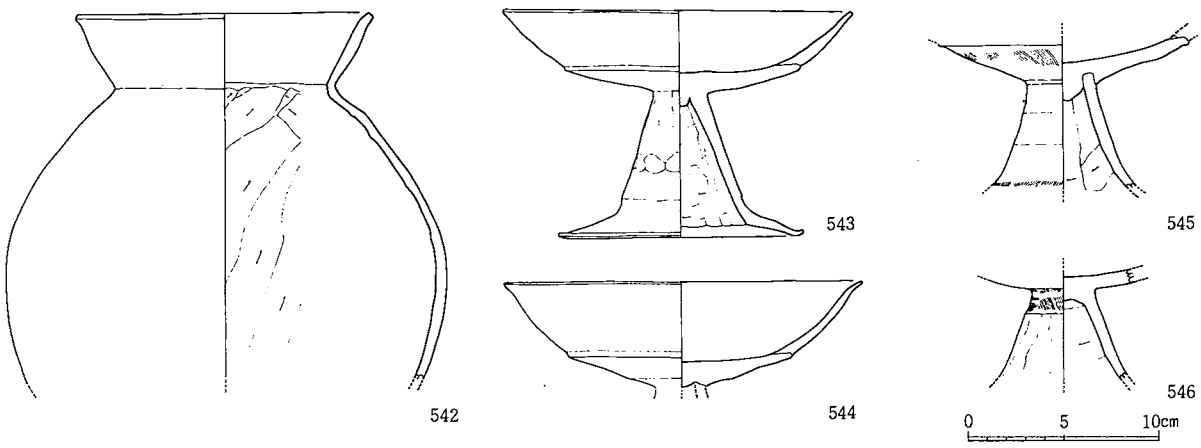
542の甕は口縁部が外反し端部でさらに小さく外方へ屈曲している。内外面は強い火を受けたためか，焼けただれて器面がボロボロに剝落している。全体的に器壁が非常に薄い。542の甕以外に甕胴部破片が2個体分出土しているが図示出来なかった。甕以外はすべて高杯で5個体分出土し内4個体を図示した。543は唯一完形に復原できたもので，杯下半部は平坦で上半部は低く内湾気味に大きく開いている。脚柱状部は下位に移行するにしたがって開き，裾部で屈折してさらに大きく開いている。544は杯上半部破片であるが543に比較して上半部が高い。545・546は杯下半部から脚柱状部の破片で柱状部の形態は543に類似しているが，546では杯部と脚部の接合部内面のボタン状突起が消されている。

上の原85号住居址(第128図)

C－3区に位置し，半径10m以内には住居址は分布していない。住居址の規模は長軸(C－D)線上で5.65m，短軸(A－B)線上で5.52m，床面積約29.7m²で，南北にやや長い方形プランの住居址である。住居址は南北に走る5条の耕作溝で攪乱され，このうちの1条は床面に達しているが，他の4条は覆土中に留まっていた。壁高は南辺で最高0.45m，西壁で最低0.35mを残していたが，全体的に保存状態は良好であった。床



第126図　上の原84号住居址



第127図　上の原84号住居址出土土器

面には計７個の柱穴を検出した。これらの配列からＰ１－Ｐ３－Ｐ７－Ｐ６の４本柱か，Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ５－Ｐ７－Ｐ６の６本柱，あるいは小型のＰ４を加えた７本柱の上屋構造が想定される。おそらく前二者の内のいずれかであろう。床面の中央部の北寄り，Ｐ３とＰ７との間に炉址が設けられていた。炉址は長径1.45m，短径0.95mの変形した長楕円形を呈し，断面形は浅い擂鉢状をなすが，底面には凹凸がみられる。床の硬化面は柱穴の外側におよび，西辺では壁面直下にまで達している。なお住居址の長軸方位はN—15°—Wであった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第128図）

住居址覆土は上下２層からなり，Ｉ層は暗褐色土層で少量の炭化物・土師器細片を含んでいる。II層は灰褐色で炭化物・焼土粒を多く含み，住居址廃絶直後に堆積した腐植土層である。出土遺物は極めて少なかったが，584の大型壷はII層中に，583の脚付の小型丸底土器は西壁直下の床面に密着した状態で出土したものである。おそらく住居址廃絶直後に住居外から転落したものであろう。

〔出土遺物〕（第129図）

547は脚付小型丸底土器で完形品である。口縁部は大きく開くが中位で段を有している。胴部は球形に近く胴部径は口径に比べてわずかに小さい。脚部は低くラッパ状に大きく開いている。548は単純口縁の大型壷で胴部中位以下を欠失している。この種の壷としては口縁部が低く，やや小振りである。

上の原86号住居址（第130図）

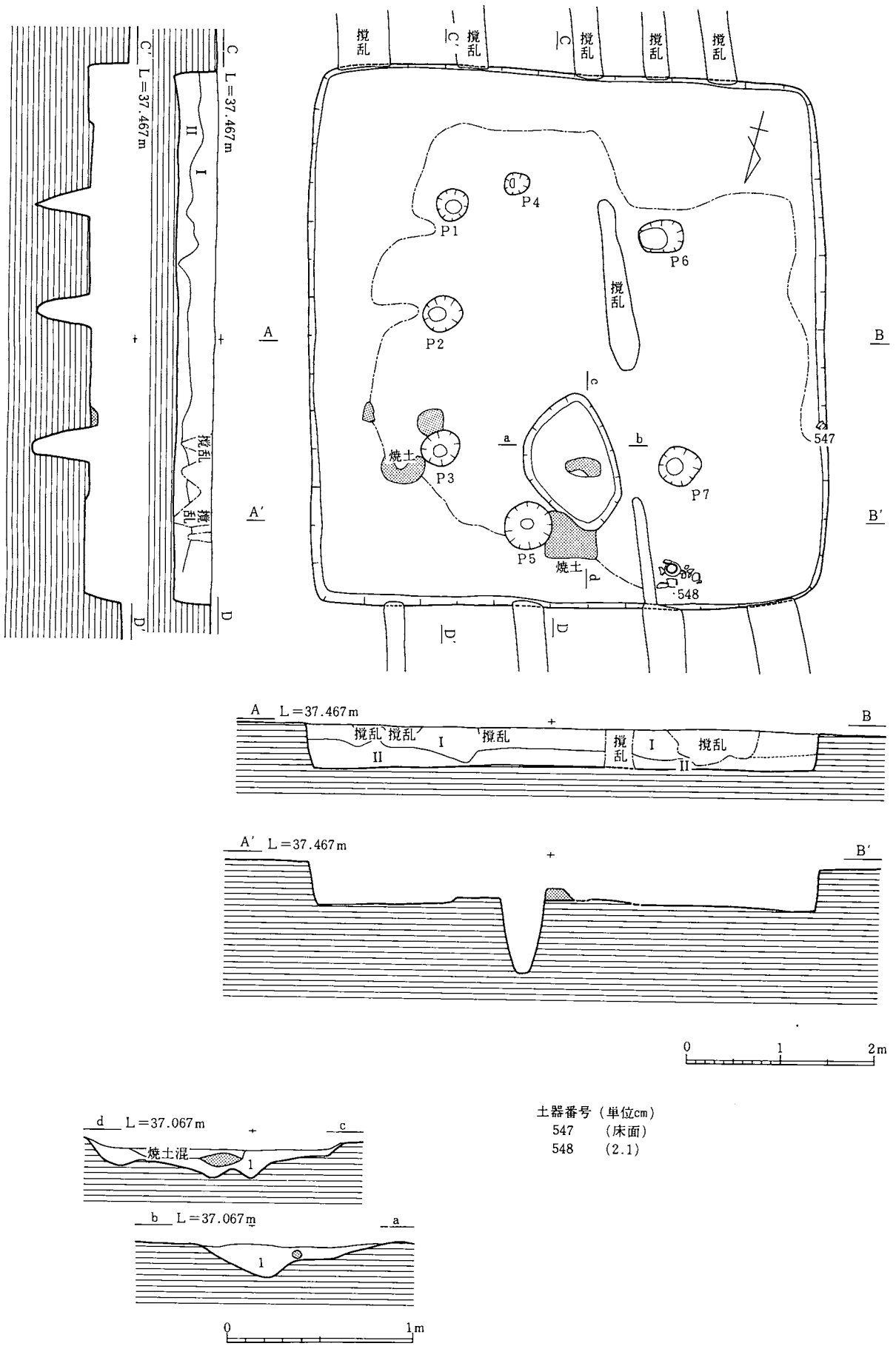
Ｃ－２区にあり，同区には87～90･94･95号の６軒の住居址が集中している。住居址の規模は長軸（Ａ－Ｂ）線上で5.63m，短軸（Ｃ－Ｄ）線上で5.49m，床面積約28.2m²の中規模の住居址である。南北・東西に走る計７条の耕作溝で攪乱されていて，このうち南北２条は床面にまで及んでいる。壁高はほぼ0.30m前後を残していて，床面は部分的に凹凸がみられる。床面には計６個の柱穴が検出されたが，いずれも小型で浅いものであった。これらの配置状態からＰ１－Ｐ２－Ｐ６－Ｐ５を結ぶ４本柱の上屋構造が想定される。床の硬化面は４本の主柱穴の内側を中心に，北東側では壁面近くにまで及んでいる。炉址は床の中央部の北東部寄りのＰ１－Ｐ６の間に設けられていた。炉址の平面形は不整形で中心部の２ヶ所に厚く焼土が堆積していた。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第130図）

住居址覆土は灰褐色を呈し，プラン確認面から床面まで殆ど変化が認められなかつた。しかし床面直上では炉址の周辺部を中心に焼土を多く含む土層が薄く堆積していた。出土遺物は少なく，計８個体分が出土し，その総てを図示した。これらのうち551の小型丸底土器１個体のみ床面に密着して出土し，他の７個体は覆土中に出土したものである。土器は土師器６個体・須恵器２個体分で，とくに須恵器２個体は覆土上層から出土したものである。

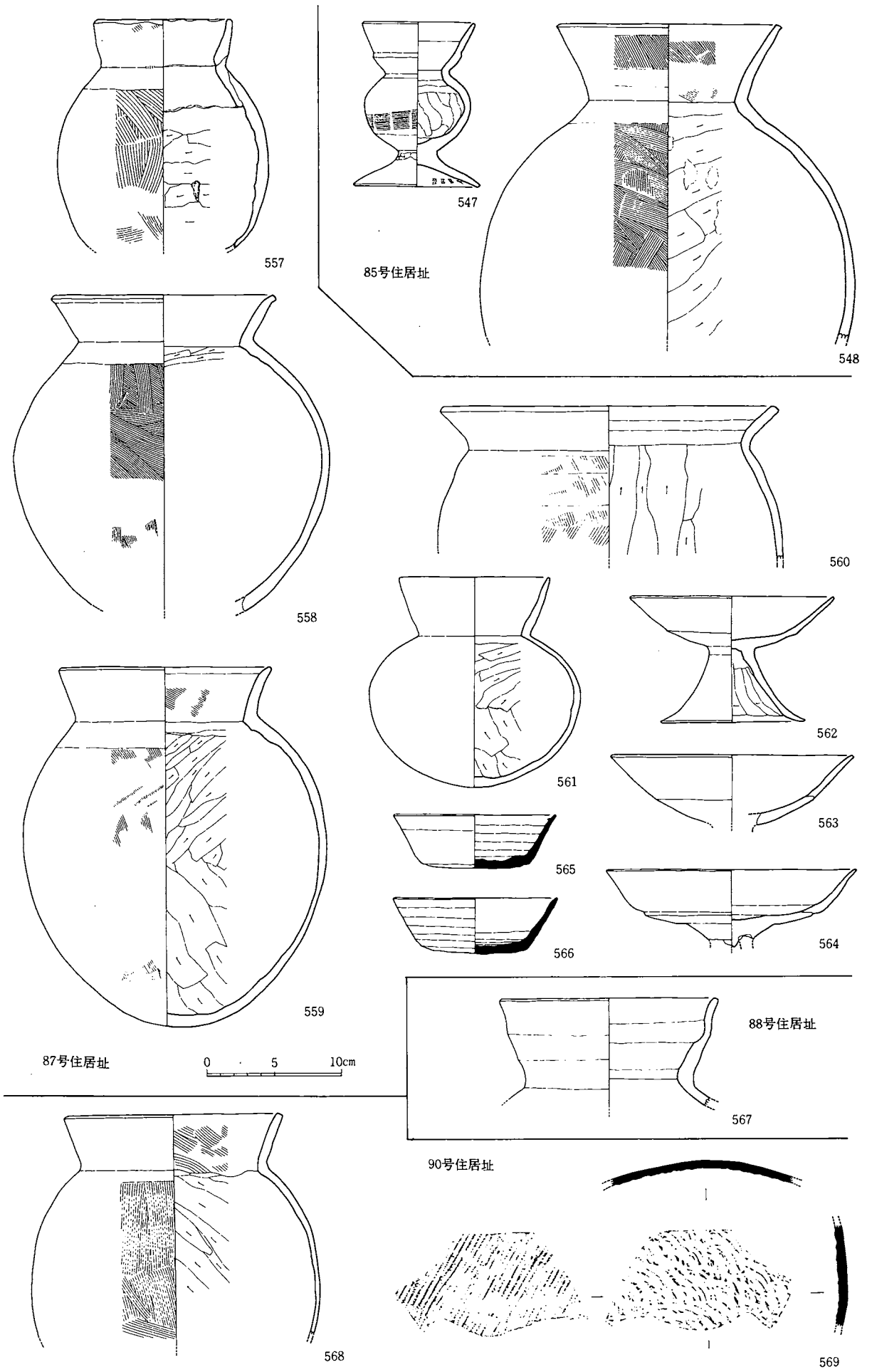
〔出土遺物〕（第131図）

549は土師器甕の胴部破片で，内面には外面と同様の細かい刷毛目が認められる。器面は風化磨滅している。550は中型の単純口縁壷で，胴部は扁平な球形で口縁部は内湾気味に立ち上がり端部でさらに外湾している。551は小型丸底土器で胴部は扁平な球形で，頸部は強くくびれ口縁部はやや内湾気味に大きく開いている。口径と胴部径はほぼ同じである。552は550と同様の壷の口縁部破片であるが，550に比較して口縁が低



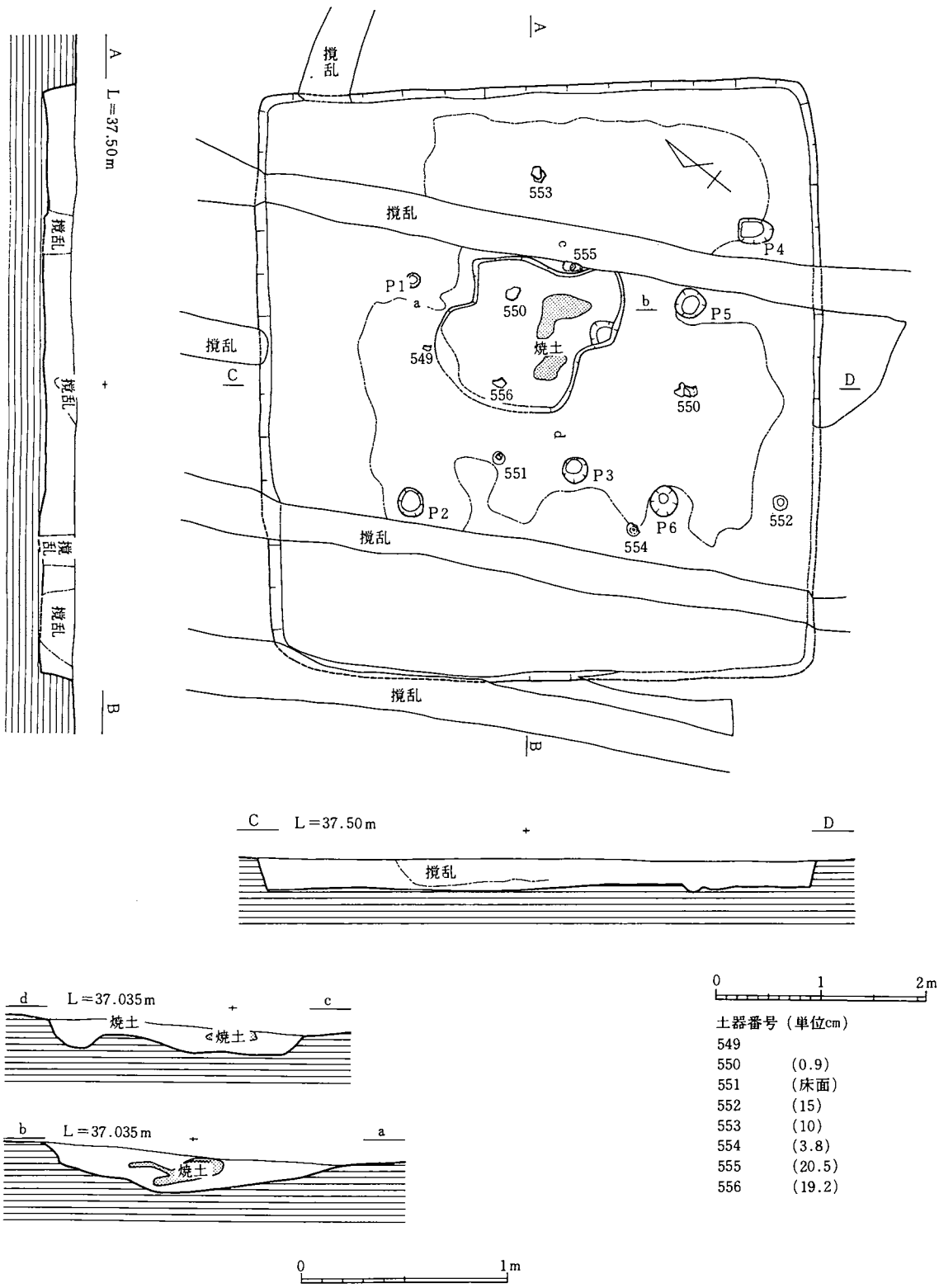
土器番号（単位cm）
547　（床面）
548　（2.1）

第128図　上の原85号住居址

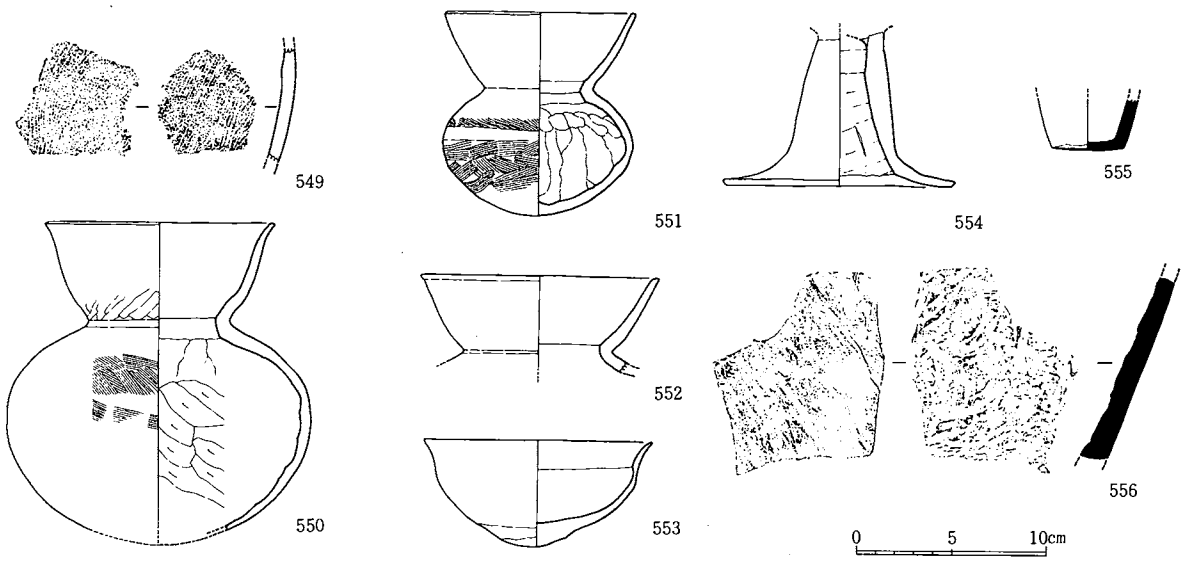


第129図　上の原85・87・88・90号住居址出土土器

く，端部の変化は見られない。553の杯は口縁部が小さく外湾し，底部は突出気味の丸底となる。底部を除くと非常に薄い造りとなっている。554の高杯脚部は柱状部がわずかに脹らみをもち，裾部は大きく開いている。柱状部と裾部との境は内面では比較的明瞭であるが，外面では不明瞭である。555の須恵器は超小型の壷の底部破片であろう。外面は回転を利用したヘラ削りで内面はヨコナデ調整である。焼成も良好で丁寧な造りの土器である。556は須恵器甕の胴部付近の破片である。外面の平行タタキは殆ど消され，内面には同心円タタキ目が施されている。



第130図　上の原86号住居址



第131図　上の原86号住居址出土土器

上の原87号住居址(第132図)

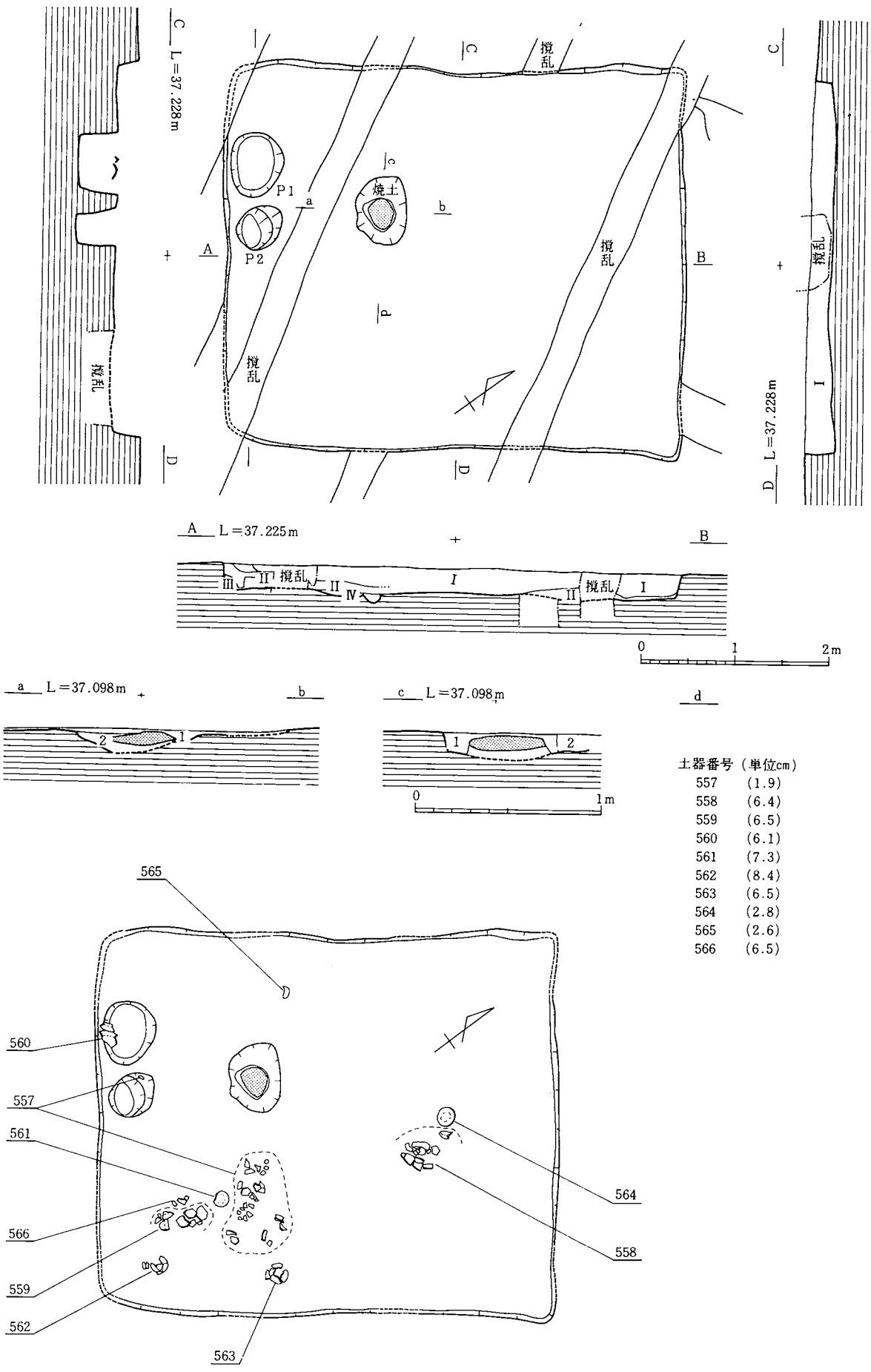
86号住居址の北側に隣接し，同住居址と同じC－2区に位置している。住居址の規模は長軸(A－B)線上で4.91m，短軸(C－D)線上で3.92m，床面積約19.2m²で，東西に長い長方形プランを呈している。長軸方位はN—52°—Eであった。壁高は0.25～0.30m残しているが，北辺と西辺では低くなっている。床面はほぼ全面硬化面が残されていて，中央部の西寄りに炉址と南壁に沿って2つの柱穴ないし貯蔵穴とみられる土壙状の落ち込みが認められた。炉址は長径0.72m，短径0.55mの長楕円形を呈していた。炉址の中央部には焼土が厚く堆積していた。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕(第132図)

住居址覆土はブロツク状に混入する土層まで含めると計5枚の土層が認められたが，基本的には上下2層からなっている。I層は暗褐色土で全体にレンズ状の自然な堆積状態を示している。II層は炭化物・焼土粒を多く含む灰褐色土層で床面直上に堆積したものである。III～IV層はII層と床面との間に部分的に認められるブロツク状の土層である。出土遺物は床面の南隅部に集中して出土し，土師器8個体・須恵器2個体の計12個体分以上が出土したが，これらのうち10個体分を図示した。この10個体はいずれも覆土中のもので，床面出土のものは皆無であった。

〔出土遺物〕(第129図)

甕は6個体分が出土しているが，この中で復原可能な4個体について図示した。557の甕は口縁部は内湾気味に立ち上がり，胴部の張りは弱い。内外面の調整・仕上げの手法は粗雑で器壁の厚さも一定していない。558・559の甕は口縁部が外湾気味に立ち上がり端部でさらに小さく外反している。胴部は球形に近く，底部は丸底である。560の甕は頸部のくびれが弱く，口縁部は外湾し肥厚している。内面のヘラ削りはほぼ垂直に近い縦方向である。561の壷は口縁部が内湾気味に直立し，胴部は扁平な球形である。562はやや小型の土師器高杯である。杯部は皿状で浅く中位にわずかな段を残している。脚部はラッパ状に大きく開いている。563・564は高杯杯部破片で，口径に対して浅く，中位の段は563で僅かに稜として残っているにすぎない。565・566は須恵器杯である。体部はほぼ直線的に立ち上がり，底部は回転ヘラ切り離しのままである。いずれも淡灰



土器番号（単位cm）

557	(1.9)
558	(6.4)
559	(6.5)
560	(6.1)
561	(7.3)
562	(8.4)
563	(6.5)
564	(2.8)
565	(2.6)
566	(6.5)

第132図　上の原87号住居址

色を呈し，焼成は良好である。以上本住居址出土の土器は形式的にかなり時間幅をもった土器が混在している。

上の原88号住居址(第133図・上)

C－2区西端に位置し，89号住居址(7世紀中葉)によって北壁の一部を失っている。住居址の規模は長軸(A－B)線上で4.38m，短軸(C－D)線上で4.00m，床面積約15.8m²で南北にやや長い方形プランの住居址である。長軸方位はN—18°—Wであった。壁高は南壁で0.25mを測り，床面は西壁側へ移行するにしたがって低くなっている。床面には2個の柱穴を検出したが，配列は不規則であった。硬化面は床面のほぼ全体に及んでいた。

〔住居址覆土・遺物出土状態・出土遺物〕(第133・129図)

住居址覆土は炭化物・焼土粒を少量含む暗褐色土層であるが，分層することは出来なかった。出土遺物は567の土師器壷1個体分のみで，床面に密着した状態で出土したものである。

567は壷口頸部で口縁部は高く外反して立ち上がるが，内外面のヨコナデ調整が粗雑なため器面に凹凸が認められる。胎土はちみつで焼成も良好であるが，全体に粗雑な造りの土器である。

上の原90号住居址(第133図・下)

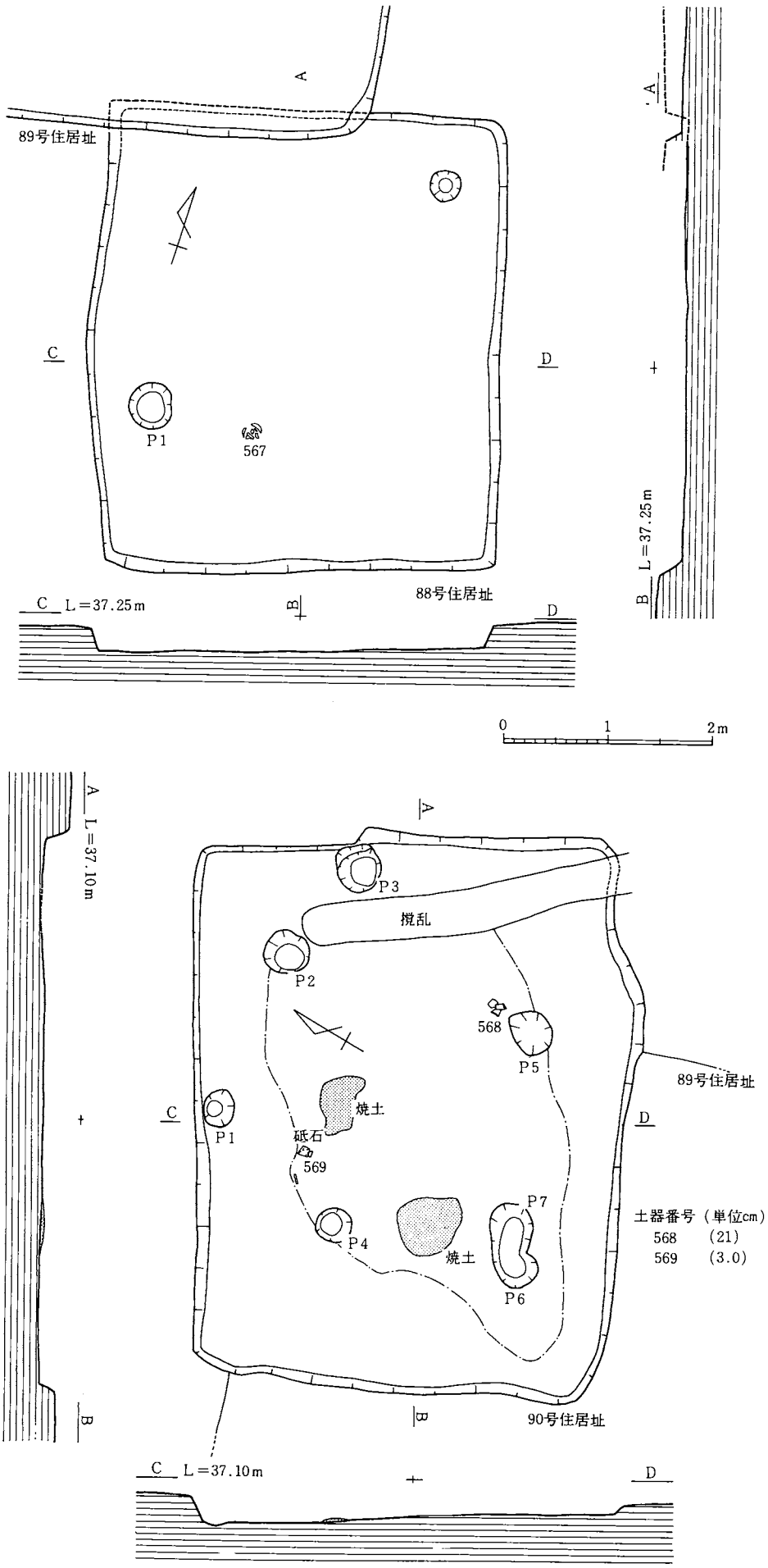
C－2区の北西部にあり，88号住居址と同様89号住居址と住居面積の約2分の1が重複している。住居址の規模は長軸(A－B)線上で5.33m，短軸(C－D)線上で4.16m，床面積約20.9m²であった。平面プランは東西方向に著しく長い長方形プランを呈している。長軸方位はN—60°—Eであった。床面は長軸方向ではほぼ水平面を保っているが，短軸方向で北壁側が非常に低く傾斜している。従って壁高も北壁側で最高0.25mを残すが，南壁では僅かに0.10m前後を残しているにすぎない。床面には計7個の柱穴を検出したが，4本主柱穴を想定するとP4－P7－P5の3本の配列は良好であるが，残る1本のP2がかなり外側に離れているために，4本柱の住居としては疑問点が残る。硬化面は床面の柱穴の内側を中心に長軸方向に長楕円形に広がっている。又床面の硬化面上の2ヶ所に焼土塊が認められたが，炉址は設けられていなかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕(第133図)

住居址覆土は特に焼土を多量に含む暗褐色土層で火災によって消失したものと考えられる。また覆土は焼土塊を除くと分層することは出来なかった。出土遺物は土師器・須恵器各1個体分と砥石1点と極めて少なく，いずれも覆土中に出土したもので床面出土のものは皆無であった。2個体の土器のうち568の土師器甕は覆土上層に，569の須恵器甕は覆土下部に出土した。したがって本住居址の廃絶年代に近い年代を示すものは569の須恵器である。

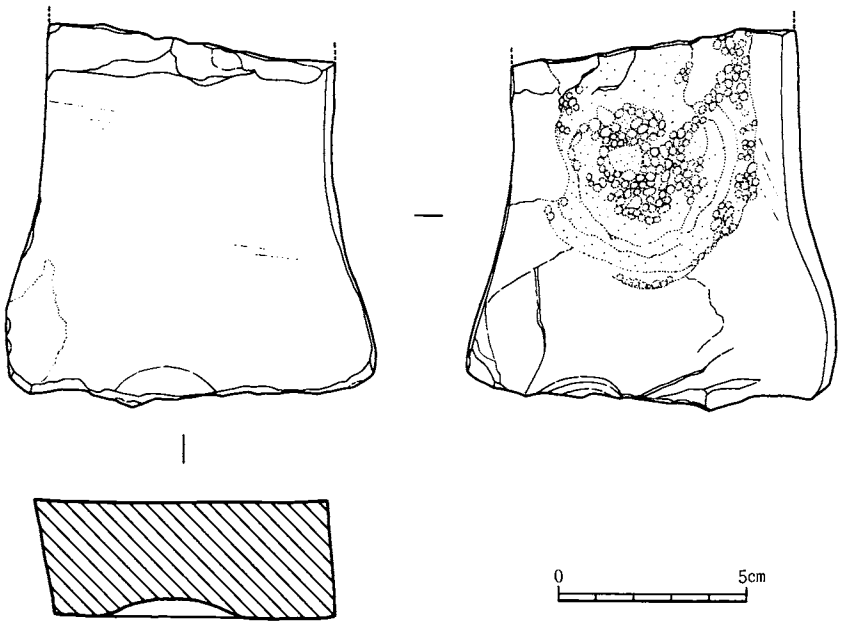
〔出土遺物〕(第129・134図)

568の甕は口縁部が外反し端部は角ばっている。頸部のくびれは弱い。胴部は中位以下を欠失しているが，球形に近いものであろう。569は須恵器の大甕の胴部破片で，外面は平行タタキ，内面は同心円文タタキが施されている。外面の平行タタキはタタキ板の柾目に直交するように刻まれたものである。青灰色を呈し焼成は極めて良好である。器壁は薄く仕上げられている。



第133図　上の原88・90号住居址

砥石(134図)は砂岩製で一側面を欠失している。表面と二側面は研磨に使用され，裏面は中央部に無数の敲打痕が認められ，叩き石状の凹部を形成している。



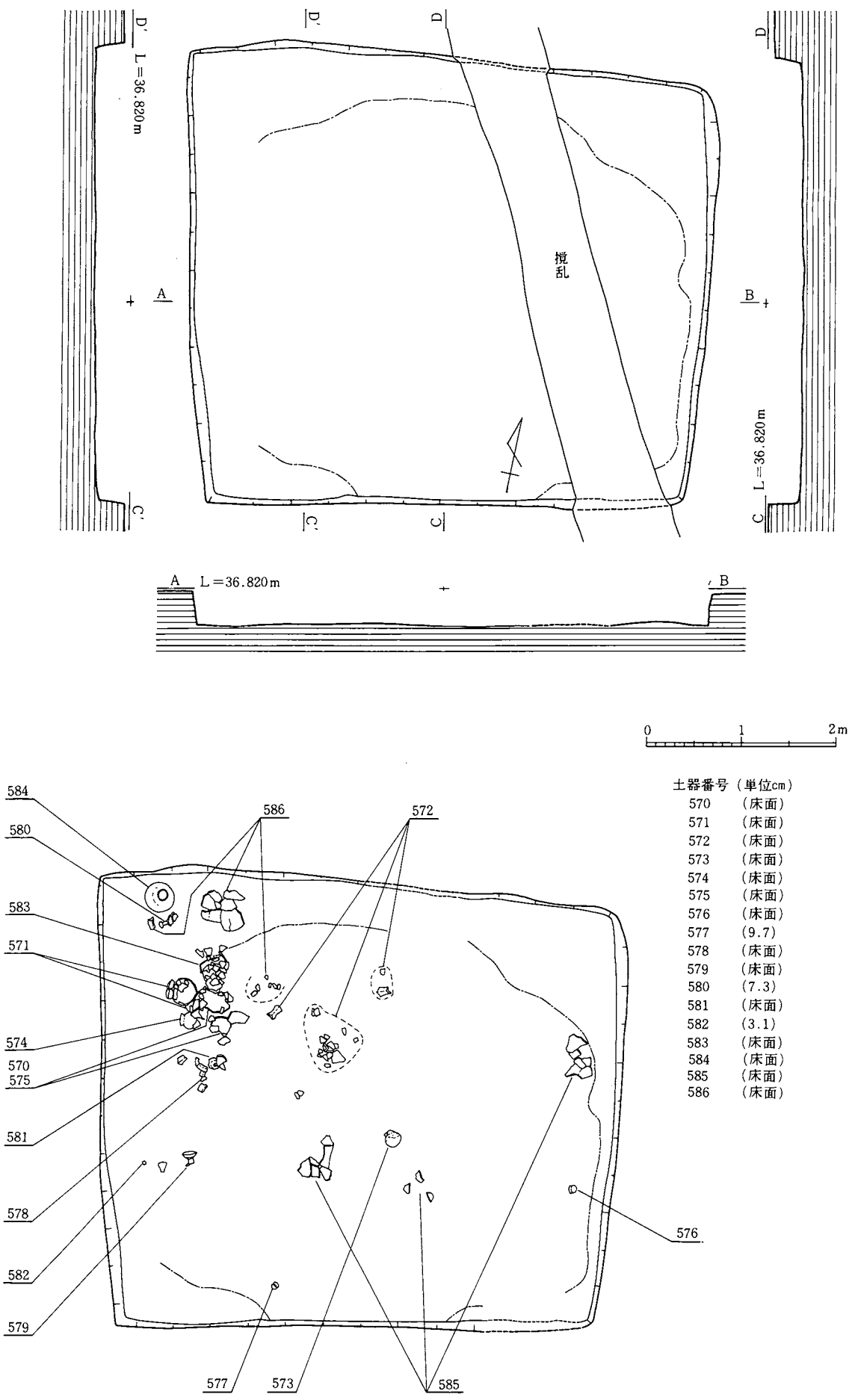
第134図　上の原90号住居址出土砥石

上の原92号住居址(第135図)

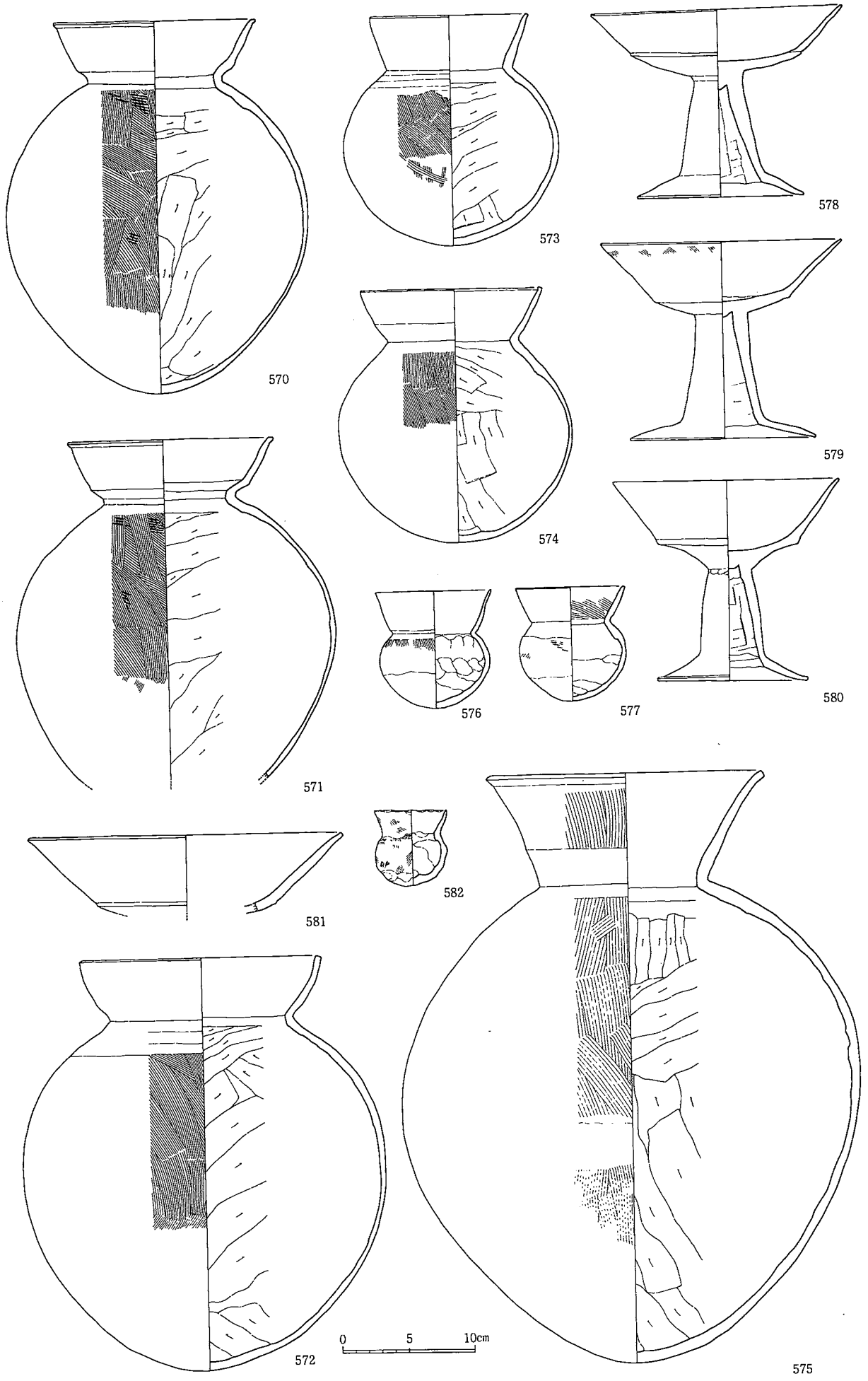
C－1区中央部北端に位置している。住居址の規模は長軸(A－B)線上で5.52m，短軸(C－D)線上で4.69m，床面積約24.5m²の中規模の住居址である。平面プランは北辺と西辺がやや長い長方形を呈している。住居址は南北に走る耕作溝によって攪乱されていて，この部分の床面は失われている。壁高は西壁で最高0.35m，北壁で最低0.28mを測った。床の硬化面は壁面に沿った部分を除く広い範囲に認められ，特に南側では壁面直下にまで及んでいた。おそらく出入り口部分に関係するものと考えられる。その他柱穴・炉址等は設けられていなかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕(第135図)

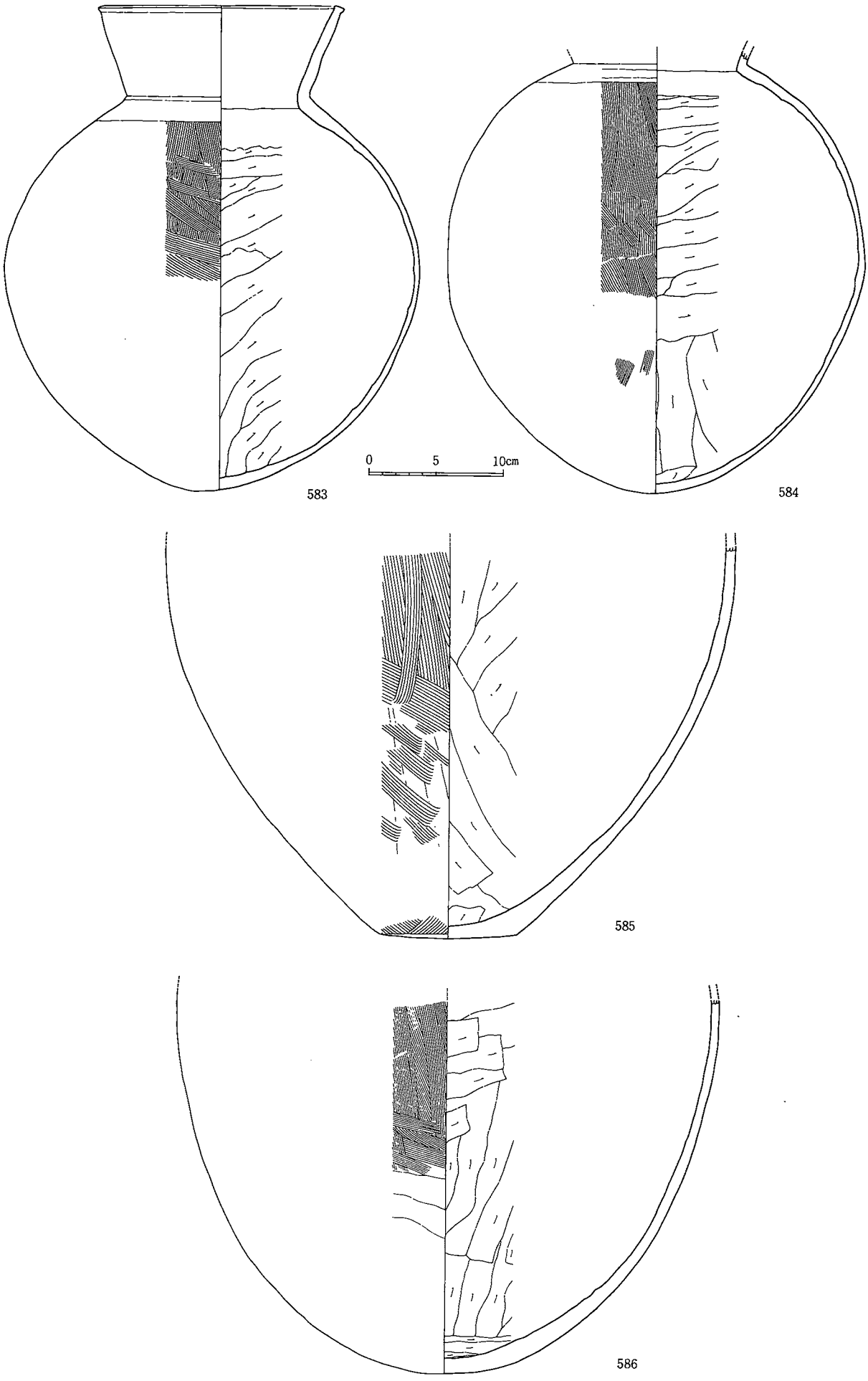
住居址覆土は炭化物・焼土粒を多く含む灰褐色土層で，プラン確認面では暗褐色土層が部分的に残されていたが，以下床面まで単一土層であった。床面はローム混入土で硬く踏みしめられていた。出土遺物は土師器計20個体以上と砥石2点が出土した。そのほとんどが床面中央部から北西部に集中し，且つ床面に密着して出土したもので，本住居址に伴う一括資料と考えられる。



第135図　上の原92号住居址



第136図　上の原92号住居址出土土器　その1

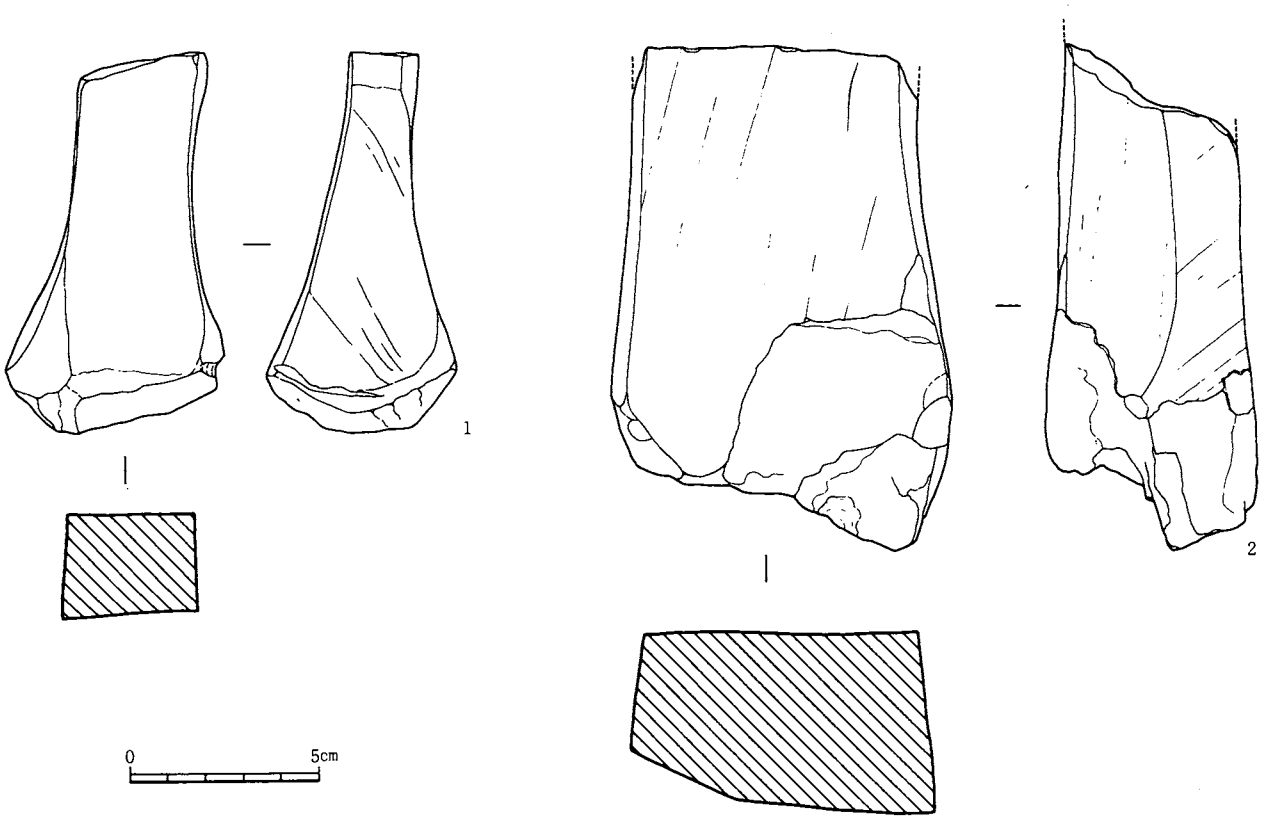


第137図　上の原92号住居址出土土器　その２

〔出土遺物〕（第136・137・138図）

出土遺物のうち，床面出土の一括土器の機種ごとの内訳は，甕３・大型壷５・中型壷２・高杯３・小型丸底土器１個体であった。特に大型壷で占め，また572の甕は煮沸の痕跡はなく貯蔵用と考えられるので，これを加えると実に全体の４割強が貯蔵用で占められていることになる。

570・571の甕は頸部が強くくびれていて段を有し，口縁部は大きく外反し端部は小さくつまみ出される。胴部最大径は中位以上にあり，全体に長胴気味で底部は丸底である。胴部下位面には右下がりの細かなタタキ目が残り，内面にはヘラ削りが施されている。572は大型の甕で，口縁部は内湾して立ち上がり，胴部は球形に近く底部はやや尖り気味の丸底である。573･574は中型の壷で，胴部は球形で口縁部は外反し，574の口縁端部は内側へ小さくつまみ出される。576・577は小型丸底土器で，いずれも胴部径に対して口径が大きいタイプで，薄く丁寧な造りの土器である。582は小型丸底土器を模倣した手づくね土器である。高杯は４個体出土し，内３個体は完形品ないし完形品に近く復原できた。杯部は上半部が内湾気味に開くもの(578)と外湾して大きく開くもの(579～581)とがあり，また脚部では柱状部にやや脹らみをもつもの(578・580)とが認められる。さらに脚裾部も内湾気味に開くもの(579・580)と直線的に開くもの(578)がある。全般に口径・脚径に対して器高が高いタイプで占められている。大型壷の法量にはかなりの差があり，大別して３つに分けることが出来る。口縁部や底部を欠失するものが多いため，共通して比較できる胴部最大径でみると，径30cm前後，径40cm前後，さらにこの中間の35cm前後のものにわかれる。口縁部の形態では575・583のような単純口縁の広口壷が認められるが，584も同様の口縁部を有するものであろう。また最も大型の壷では，平底(585)と丸底(586)とが見られる。また床面に密着して砥石２点(第138図)が出土している。いずれも砂岩製で両端部を除く４面を使用している。



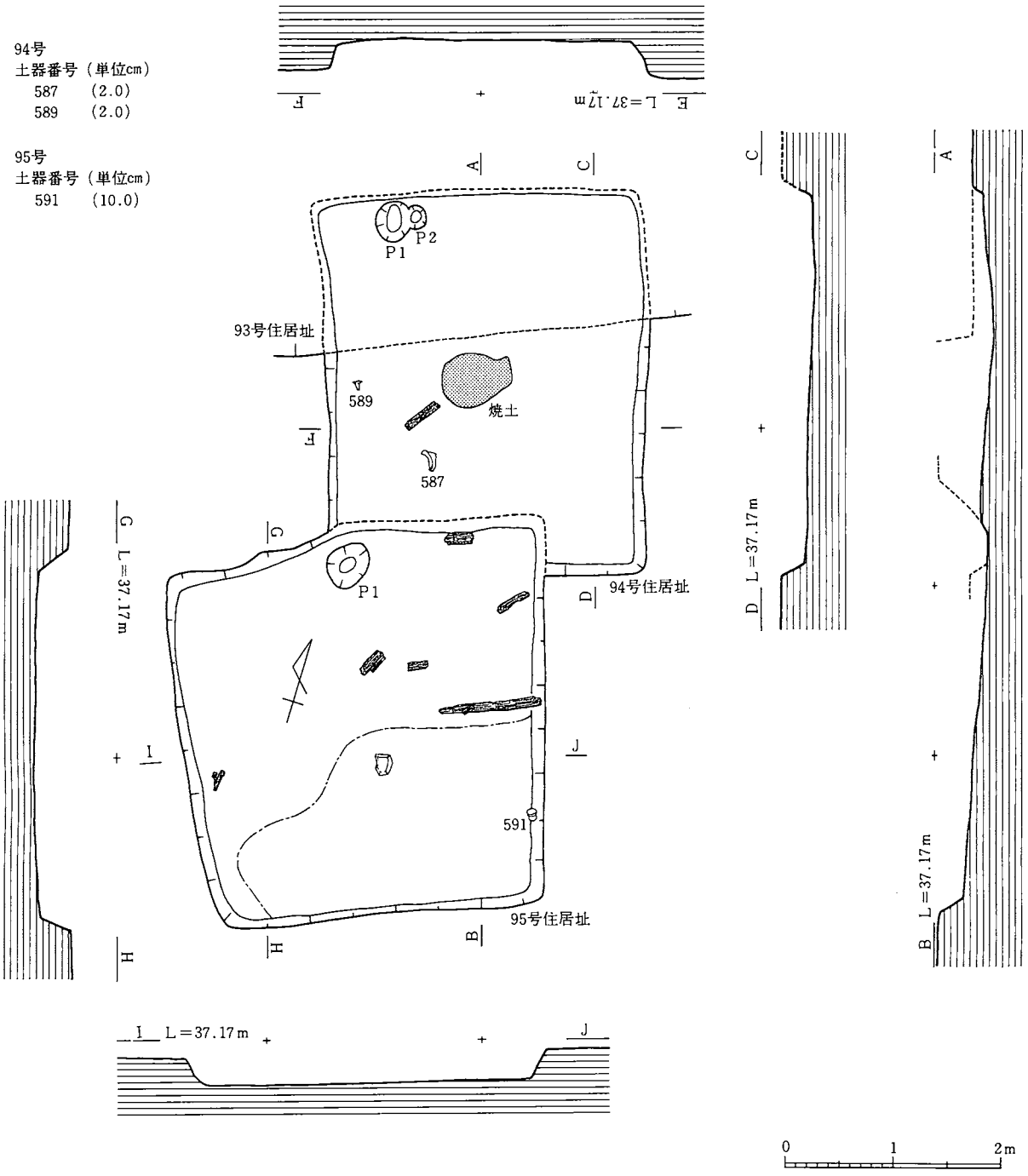
第138図　上の原92号住居址出土砥石

上の原94・95号住居址(第139図)

95号住居址はC－2区にあり，94号住居址はC－2区から北半部がC－1区に及んでいる。94・95号住居址は一部重複し，さらに94号住居址は93号住居址によって切断されている。

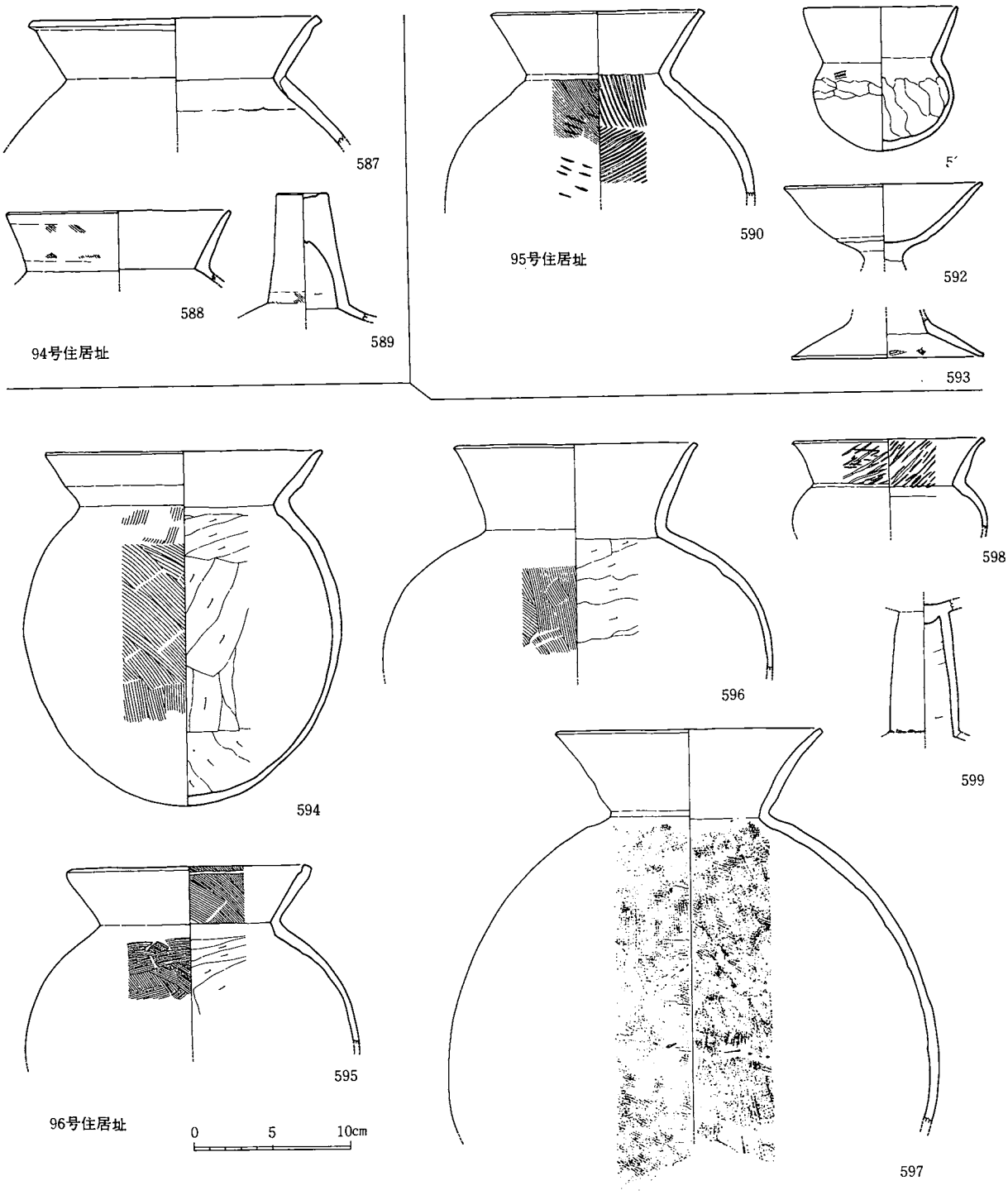
94号住居址の規模は長軸(A－B)線上で約3.55m，短軸(E－F)線上で約2.95m，床面積約9.5m²の小型の住居址である。長軸方位はN—17°—Wであった。壁高は最も残存状態の良い東壁で0.30mを測った。床面はほぼ平坦で全体に硬化面が認められた。また床面の北西部隅寄りに柱穴2個と中央部に焼土塊が堆積していた。

95号住居址の規模は長軸(A－B)線上で約3.58m，短軸(I－J)線上で3.35m，床面積約10.9m²で94号住



第139図　上の原94・95号住居址

居址と同様小型の住居址である。平面プランは北辺が長い方形を呈している。硬化面は床面の南半分にのみ認められ，北壁側の中央部に柱穴１個を検出した。床面のレベルは94号住居址に比較して約５～10cm低くなっている。なお，長軸方位はN—73°—Eであった。以上２軒の住居址はA－B線上および両住居址の硬化面の断面観察によって，95号住居址の埋没後に94号住居址が構築されたことが確認できた。



第140図　上の原94・95・96号住居址出土土器

〔住居址覆土・遺物出土状態〕

2軒の住居址とも覆土は焼土・炭化物を多量に含んだ暗褐色の単一土層で分層できなかった。95号住居址については火災により消失したものであろう。また覆土下部から一部床面に炭化部材が認められた。特に95号住居址では東西方向に出土した長さ約1mの部材は，住居の東壁側では壁面中程に接し，中央部では床面に密着した状態で出土した。おそらく部材の基部は住居外にあったことを裏付けるものであろう。出土遺物は両住居址とも少なく細片が多い。すべて覆土中から出土したものである。

〔94号住居址出土遺物〕（第140図587～589）

587・588は土師器甕口縁部破片である。587の口縁部は外湾気味に開き端部近くでさらに外方へ屈折し端部は角ばりおわる。器面は内外面とも磨滅している。588の口縁部は直線的に外反し端部で器壁が薄くなっている。589は高杯の脚部であるが，柱状部上端は焼成前のナデ調整が施されていて，脚部のみの製品として作られたものである。柱状部内面の回転ヘラ削りは中途で止まっている。この種の土器の類例を知らないので，用途等は判明しない。

〔95号住居址出土遺物〕（第140図590～593）

590の壷は胴部中位以下を欠失している。口縁部は大きく開き端部で小さく内方へつまみ出されている。胴部外面には右下がりの細かなタタキ目が残り，内面はやや荒い刷毛目が施されている。胎土はちみつで赤褐色を呈し，一見して他の土師器群と区別できる特徴的な土器である。591は小型丸底土器で頸部のくびれはよわく，口縁部は直立気味となる。胴部径に対して口径がわずかに大きい。592は小型の高杯杯部で中位に段をもたず一体成形のものである。593は高杯脚裾部破片で柱状部との境は明瞭である。色調は590の壷に良く類似している。

上の原96号住居址（第141図・上）

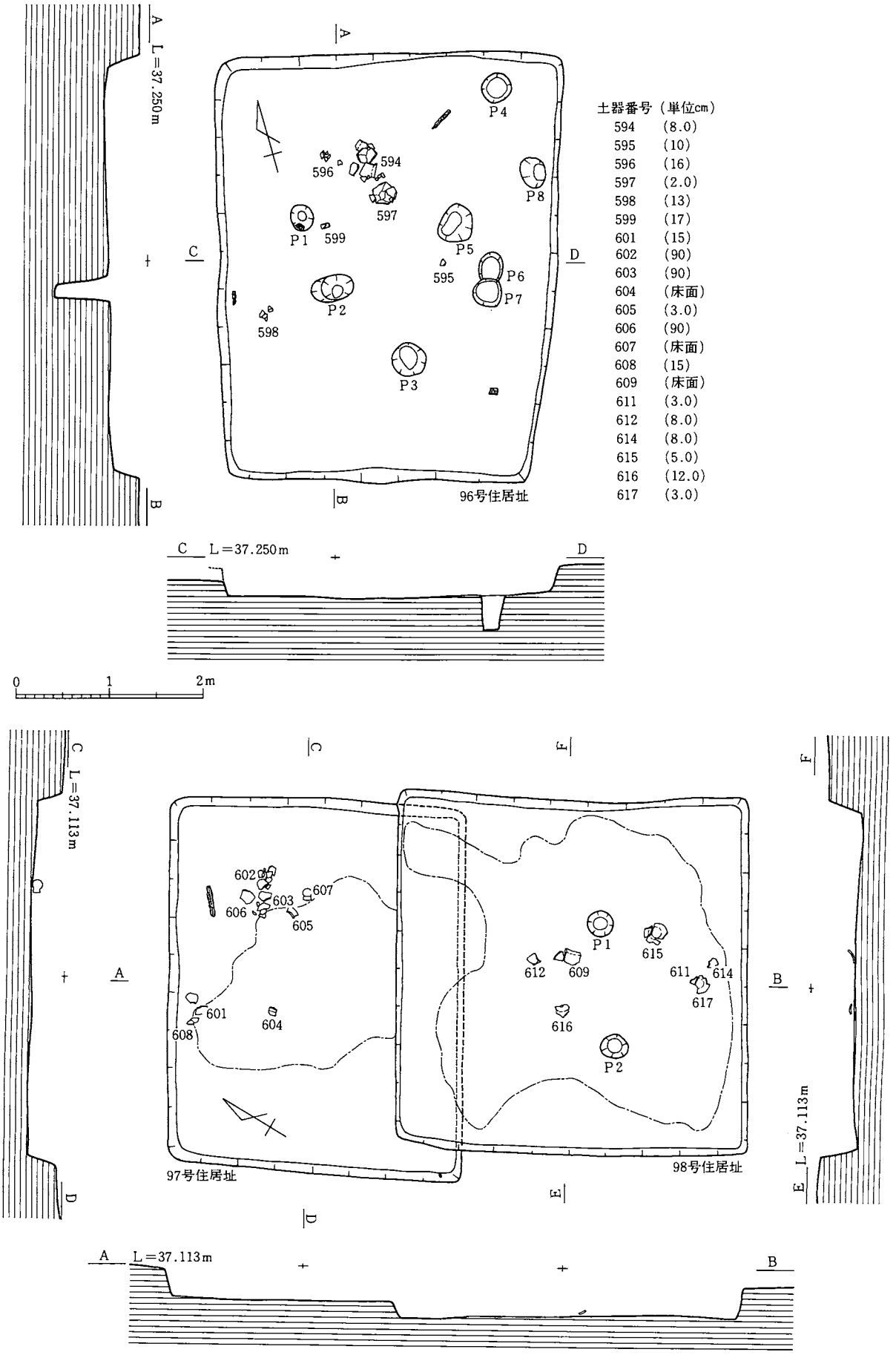
D－2区に位置している。住居址の規模は長軸（A－B）線上で4.47m，短軸（C－D）線上で3.68m，床面積約14.4m²で比較的小型の住居址である。平面プランは南北に長く，南辺がやや短い長方形を呈している。長軸方位はN—17°—Eであった。壁高は北壁で最高0.35m，西壁で最低0.15mであった。床面にはほぼ全面に硬化面がみとめられ，計8個の柱穴を検出した。柱穴の配列は不規則でどのような柱構造かは不明である。また床面には炭化部材が出土したが，散発的で方向性等も明らかに出来なかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第141図）

住居址覆土は炭化物・焼土粒を少量含む暗褐色土層が大半をしめ，床面直上では炭化物・焼土の量が増加しているが，この間に明瞭な線引きは出来なかった。出土遺物は5個体分ですべて土師器で覆土中から出土したが，595・597の2個体は覆土の最下層に，他の3個体は上層から中層に出土したものである。

〔出土遺物〕（第140図）

594・595は甕で，595では残存部に煮沸の痕跡は認められない。594の口縁部は大きく外反し，中位の外面にやや脹らみをもっている。頸部のくびれは強くなく，胴部は球形に近くなっている。内外面の調整・仕上げの手法は定型化したものである。595の口縁部は外反し端部で肥厚し，且つ端部内面に1条の細い沈線を施している。596・597は単純口縁の壷で頸部は強くくびれ，口縁部はラッパ状に大きく開いている。なお597の



土器番号	(単位cm)
594	(8.0)
595	(10)
596	(16)
597	(2.0)
598	(13)
599	(17)
601	(15)
602	(90)
603	(90)
604	(床面)
605	(3.0)
606	(90)
607	(床面)
608	(15)
609	(床面)
611	(3.0)
612	(8.0)
614	(8.0)
615	(5.0)
616	(12.0)
617	(3.0)

第141図　上の原96・97・98号住居址

胴部内面は左上がりの刷毛目調整ののち縦方向のヘラ削りが施されている。598は小型の壷で口縁部は外湾し，内外面棒状の工具で研かれている。599は高杯脚部で裾部を欠失している。柱状部は高くやや脹らみをもっている。柱状部内面のボタン状の突起が残されている。

なお，出土土器のなかで597の甕は95号住居址覆土出土破片(胴部破片１点)との接合資料である。しかし口縁部～胴部破片の大半は96号出土のものである。

上の原97・98号住居址(第141図・下)

97・98号住居址はD－２区にあり，南側には96号住居址が隣接している。２軒の住居址は南北に並び一部分が重複している。

97号住居址の規模は長軸(C－D)線上で3.95m，短軸(A－B)線上で約3.18m，床面積約11.3m²の小型の住居址である。平面プランは東西に長い長方形を呈している。長軸方位はN－60°－Eで，98号住居址の長軸方位に対してほぼ直交している。壁高は北壁で最高0.30mで，床面レベルは98号住居址に比較して約0.15～0.20m高くなっている。床面には中央部を中心に硬化面が認められ，南側では98号住居址に切断され失われている。また住居址の北辺に沿う覆土中に炭化部材１点が出土した。

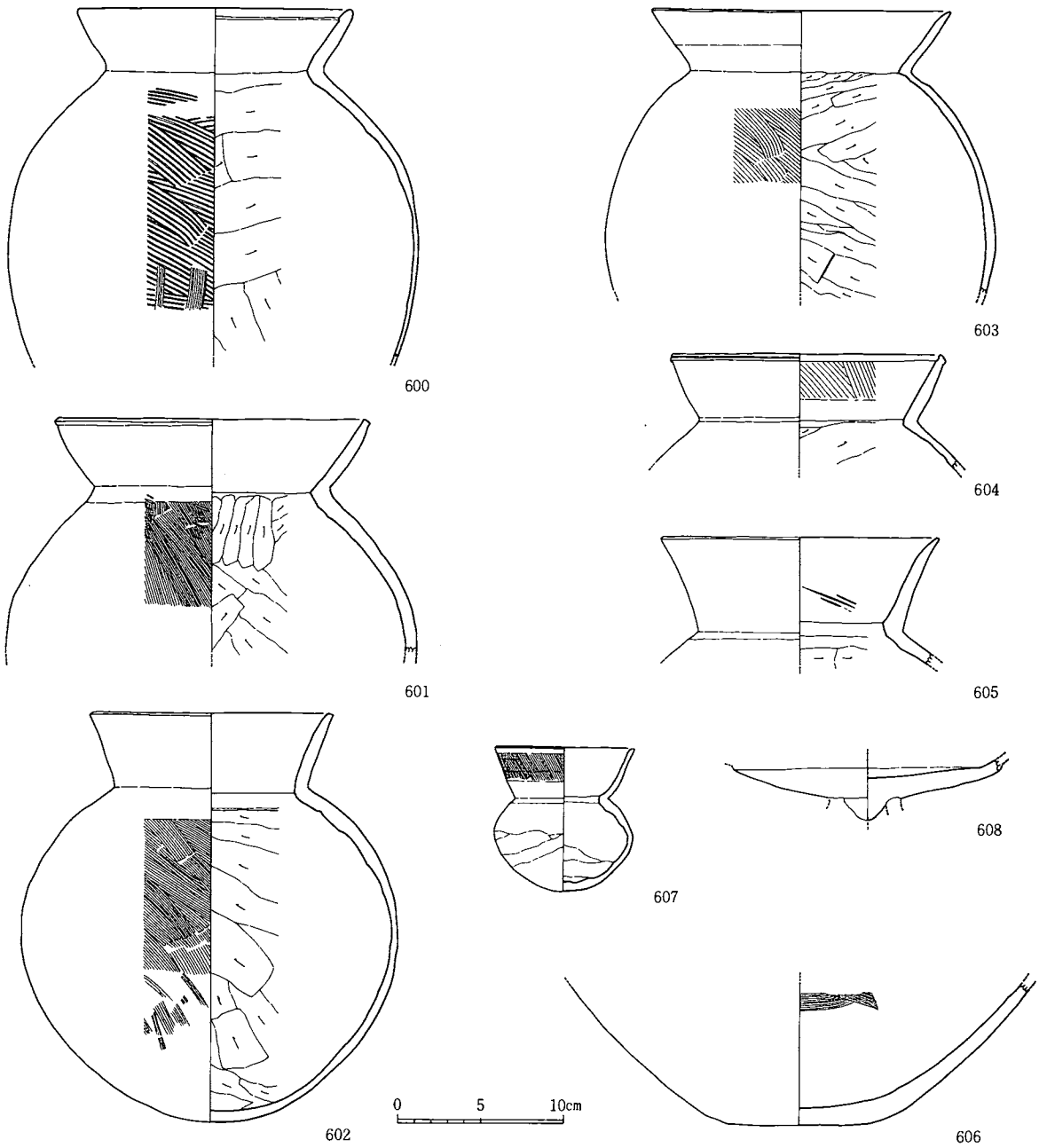
98号住居址の規模は長軸(A－B)線上で3.77m，短軸(C－D)線上で3.73m，床面積約12.9m²でほぼ正方形に近い平面プランを呈している。97号住居址と同様小型の住居址である。床面の広い範囲に硬化面が認められ，部分的には壁直下にまで及んでいる。また床面には２個の柱穴が検出された。これらの配置状態から２本の主柱穴をもつ住居と考えられる。壁高は西壁で最高0.40mを測った。床面は中央部が高く，周辺部で深くなっている。なお，長軸方位は，N－30°－Wであった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕(第141図)

住居址覆土は炭化物の細粒を含む暗褐色土層で，97号住居址ではこの土層のみで，98号住居址では覆土下部で灰褐色の土層が薄く堆積していた。この土層は炭化物に加えて焼土を多量に含んでいた。97号住居址の出土遺物は土師器８個体でこの内604・607の２個体は床面に密着した状態で，他の６個体は覆土中に含まれていたものである。98号住居址の出土遺物は土師器９個体分であった。９個体の中で609は床面に，611・617は床面直上に堆積した覆土下層に，他の６個体は覆土上層から出土したものである。

〔97号住居址出土遺物〕(第142図)

出土土器の器種ごとの内訳は甕５・壷２(内大型壷１)・高杯１・小型丸底土器１であった。600の甕は口縁部が内湾気味に立ち上がり，端部内面で小さな段を有している。全体的に薄い造りの土器であるが，口径部は著しく肥厚している。胴部は中位以下を欠失するが，おそらく球形に近いものであろう。601の口縁部は内湾して立ち上がり，肩部の張りはよわい。頸部から肩部の外面に右下がりの細かなタタキ目がのこっている。602・603は口縁部が直線的に外反し，とくに603では頸部の屈折が強く口縁部が大きく開いている。604の甕も口縁部が直線的に外反するが，端部が内方へ小さくつまみ出されている。605は広口の単純口縁壷で頸部以下を欠失している。口縁部は外反し端部でさらに外方へ外湾している。607は小型丸底土器で頸部は強くくびれ口縁部は内湾気味に立ち上がる。胴部は中位で強く張り，底部は安定した平坦な丸底となる。608は高杯の杯下半部の破片で，かなり大型品である。杯下半部は平坦でボタン状の突起は残されている。606は大型壷の底部であろう。底部は平底であるが体部との境は不明瞭である。器体内外面は磨滅しているが，内面には部分的に細かな刷毛目が認められる。

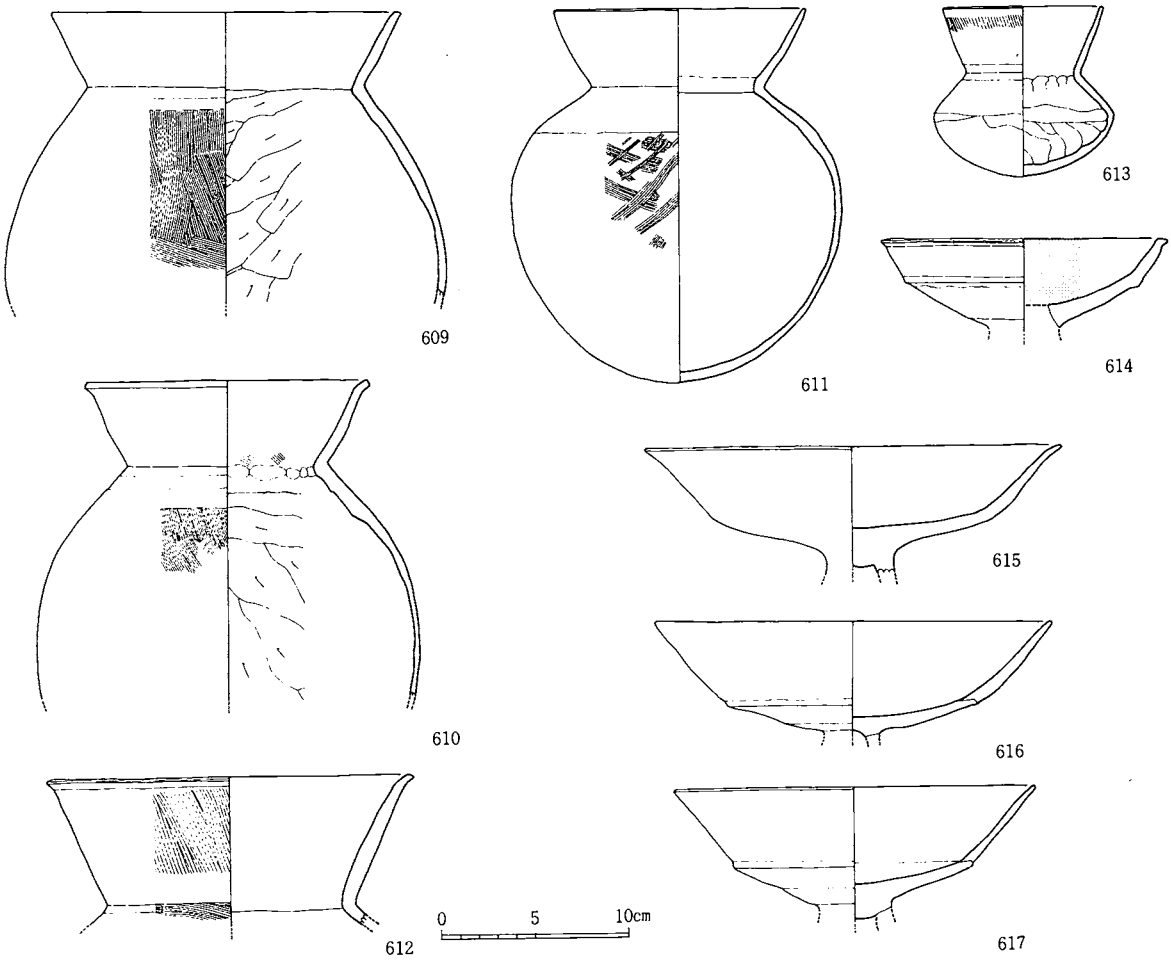


第142図　上の原97号住居址出土土器

〔98号住居址出土遺物〕（第143図）

出土土器の器種ごとの内訳は甕２・大型壷１・中型壷１・小型丸底土器１・高杯４であった。609の甕の口縁部は直線的に外反し，胴部中位以下を欠失するが球形に近いものであろう。外面の刷毛目の単位も細かく器壁も薄く丁寧な造りの土器である。610の口縁部は内湾気味に立ち上がり，端部で小さく外湾している。胴部中位以下を欠失するが，胴部の張りは弱く長胴気味のものであろう。612は広口壷の口頸部破片で口縁部は大きく外反し端部でさらに小さく外反する。613は頸部が強くくびれ口縁部は内湾して立ちあがる。胴部は球形で胴部外面中位以下全面に炭化物が付着し，明瞭な煮沸の痕跡を残している。形態的には中型の壷であるが，煮沸用に転用したものであろうか。613の小型丸底土器は胴部が扁平で中位で角ばっている。口縁部は直線的に外反している。614は高杯の杯部破片で杯上半部が著しく低い特異な形態である。全体に厚い造りで内面に赤色顔料が塗布されている。615～617はいずれも高杯杯部破片で大振りで浅いものである。杯上半部の形態は個体ごとに微妙な変化が認められる。とくに615では上半部と下半部との接合部外面にみられる段はわ

ずかな稜として留めるにすぎない。



第143図　上の原98号住居址出土土器

上の原99・104・105・108号住居址（第144・145図）

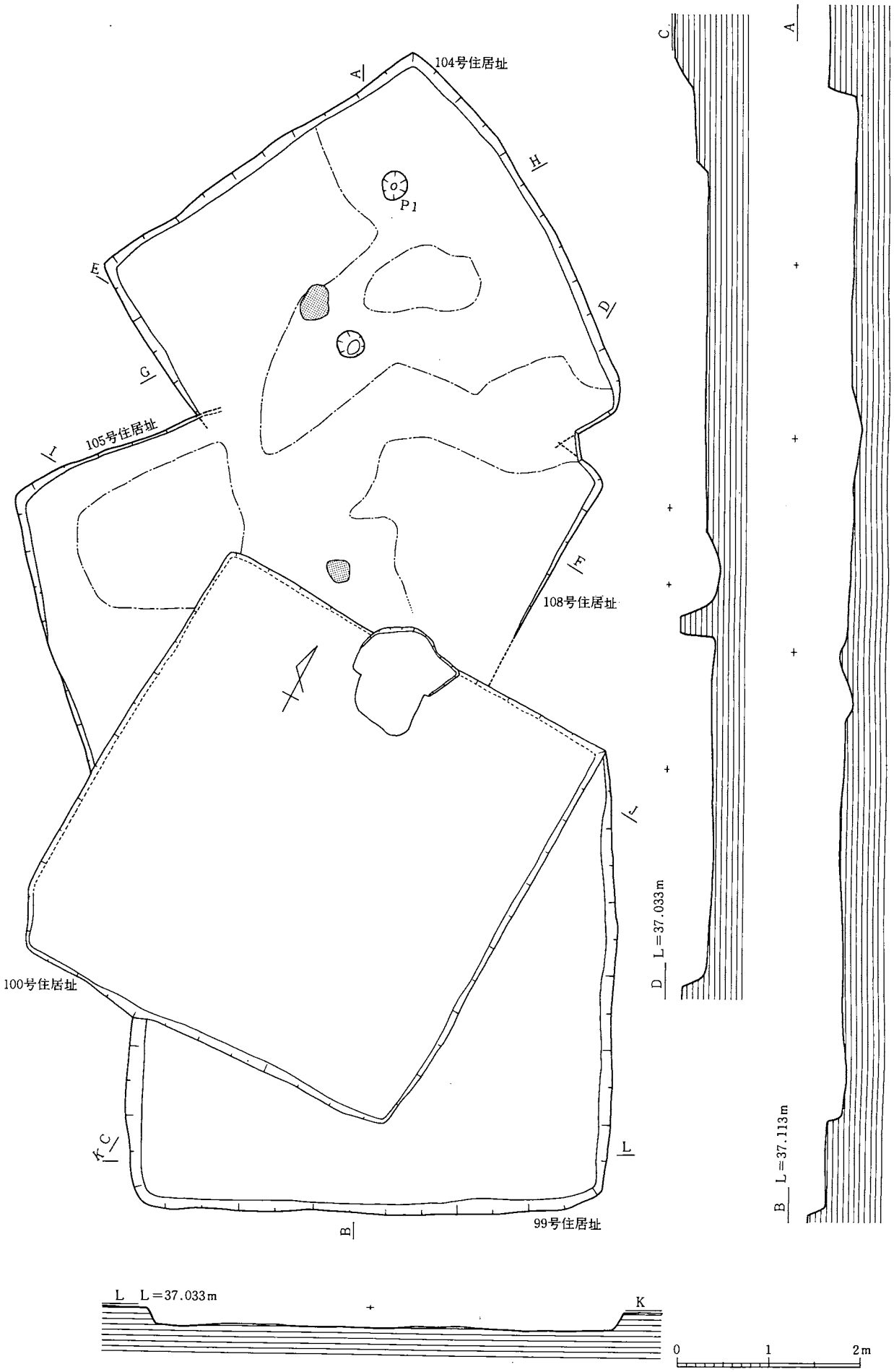
99・104・105・108号住居址および100号住居址の5軒の住居址は複雑に重複している。これらはすべてD－1区内に位置している。なお100号住居址は竈を有する歴史時代の住居址で，すでに『上の原遺跡II』（熊本県教育委員会　1984）で報告を行っているので省略し，他の4軒について順を追って説明を加える。

99号住居址は全体の3分の2以上を100号住居址との重複によって失われている。住居址の平面プランは正方形に近く，南辺では約5.1mで東辺ではコーナー部分が不明瞭であるが、おそらく4.75m前後になるものと思われる。したがってK－L線上を長軸方向にとると，長軸方位はN－60°－Eとなる。壁高は各壁とも約0.20mを残していた。床面には部分的に硬化面が認められる程度であった。また柱穴・炉址等も確認出来なかった。

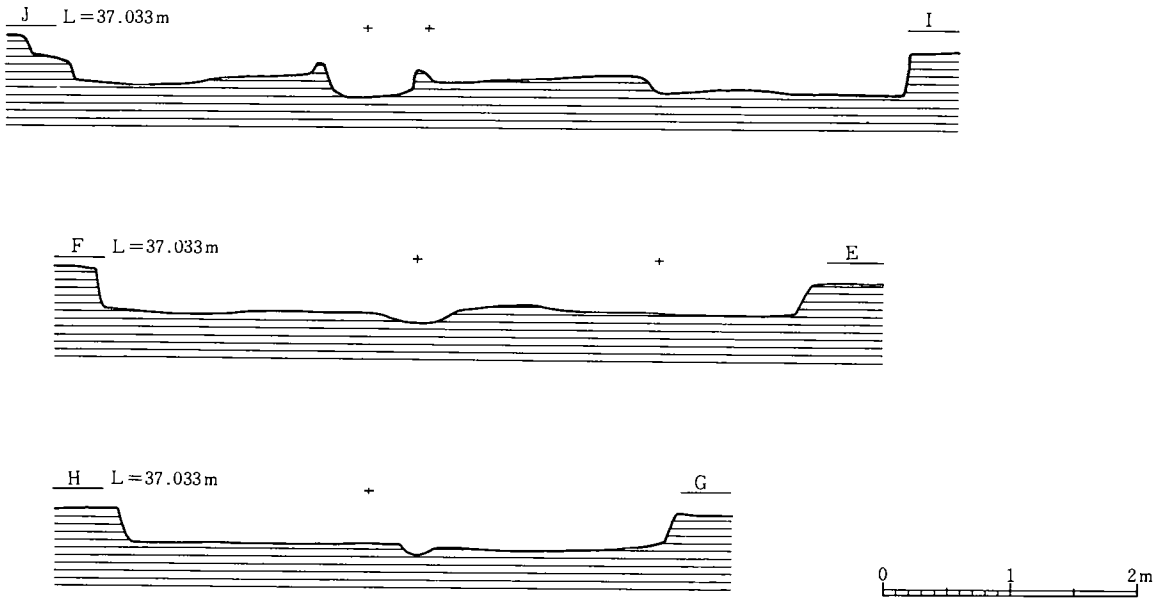
104号住居址は105・108号の2軒の住居址と重複していた。住居址の規模は北辺で4.10m，東辺で4.48mを測った。長軸方位はN－60°－Wであった。壁高は北壁で最大0.34mを残し，108号住居址床面とのレベル差は最大で0.15mであった。床面には2個の柱穴を検出したが，配列は不規則である。

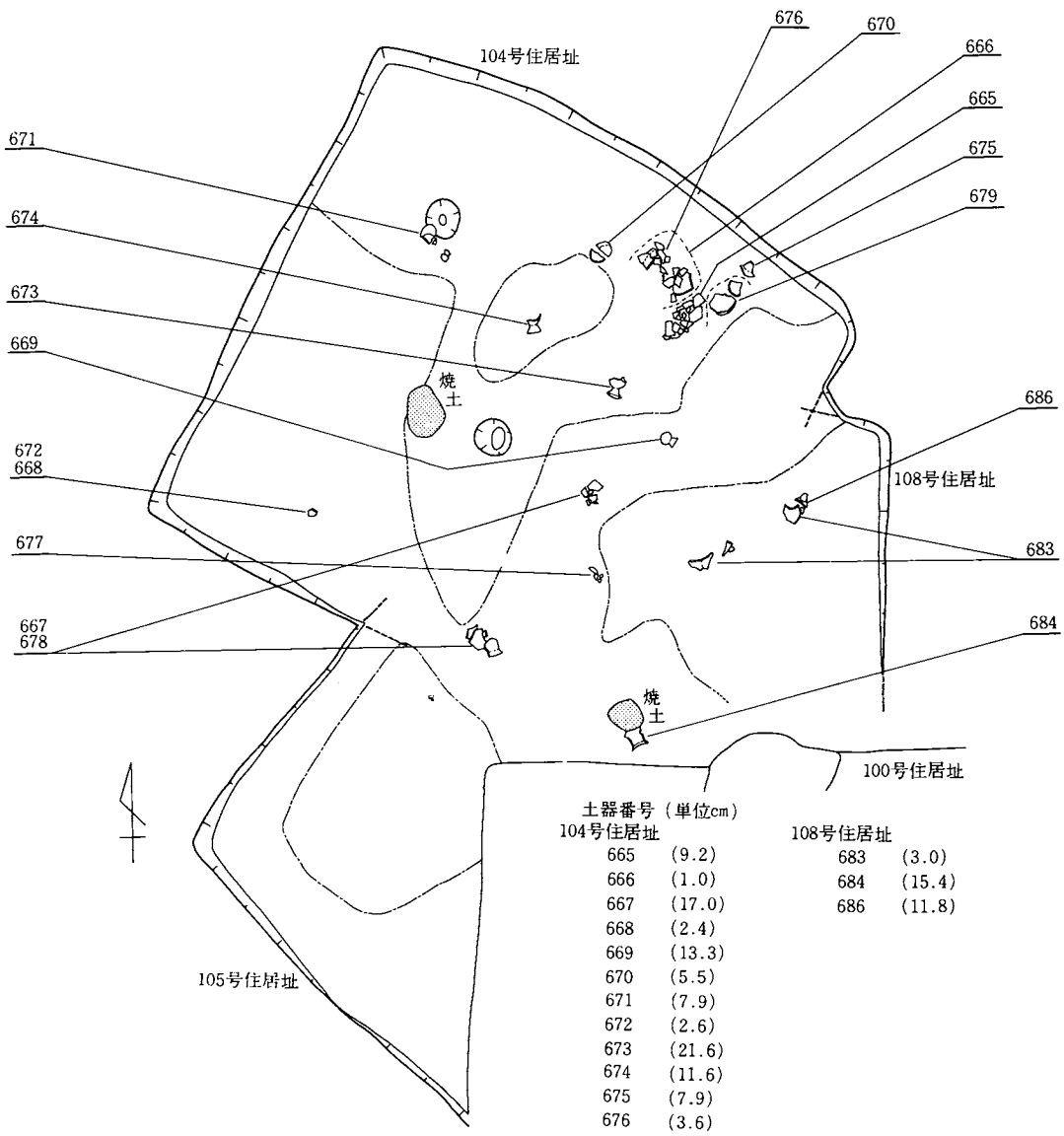
105・108号住居址は104・100号住居址との間にあって住居址の2辺と床面の一部を確認できたにすぎず，住居址の規模・長軸方位等は不明である。

なお4軒の住居址の前後関係は各住居址覆土の断面観察と硬化面の残存状態によって，108号－105号－104号の順で最後に100号住居址が構築され，前3軒と99号住居址との関連は不明である。



第144図　上の原99・100・104・105・108号住居址　その1





土器番号（単位cm）

104号住居址		108号住居址	
665	(9.2)	683	(3.0)
666	(1.0)	684	(15.4)
667	(17.0)	686	(11.8)
668	(2.4)		
669	(13.3)		
670	(5.5)		
671	(7.9)		
672	(2.6)		
673	(21.6)		
674	(11.6)		
675	(7.9)		
676	(3.6)		
677	(2.6)		
678	(17.0)		
679	(6.9)		

第145図　上の原104・105・108号住居址　その2

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第145図）

住居址覆土は4軒とも炭化物の細粒を含む暗褐色土層であり，住居址間の覆土は色調・混合物等では識別することは出来なかった。前述した前後関係も主として硬化面の残存状態によるものである。出土遺物は104・105・108号住居址に出土し，99号住居址では皆無であった。3軒の住居址の出土土器はすべて土師器で105号住居址に鉄鎌1点出土したが，床面に出土したものはなかった。とくに104号住居址出土土器は完形品やこれに近いものも多いが，床面に密着したものはなく，おそらく住居址廃絶後に人為的に廃棄されたものであろう。

〔104号住居址出土遺物〕（第146図）

出土土器の器種ごとの内訳は甕3・小型丸底土器2・杯3・高杯8個体であった。665・666は大振りの甕で，胴部は球形に近くなっている。665の口縁部は直線的に外反するのに対し，666では短く直立し端部で小さく外方へつまみ出されている。665の底部は丸底で，666は平底気味の丸底となる。667はやや小振りの甕で，口縁部は短く外湾して立ち上がり，胴部の張りは弱い。668・669の小型丸底土器はいずれも胴部径に対して口径が小さいタイプで，頸部は強くくびれ口縁部は内湾して立ち上がる。撫肩気味で胴部が強く張っている。670～672は半球形の体部を有する杯である。とくに670の口縁端部は内面が強くナデつけられて稜が巡り，断面が三角形になり口縁部に移行するにしたがって肥厚している。671・672は体部から口縁部にかけて薄く仕上げられている。高杯は全体の形態が判明したものは2類があり，脚部は破片を含むと3類がある。673・674の杯部は扁平な半球形状を呈し，脚部はラッパ状に開き裾部で外湾している。脚部の調整は内面は回転ヘラ削り，外面はタテ方向のヘラ削りを基調としている。675の杯部は下半部と上半部との境で屈折し，上半部は内湾気味に立ち上がる。杯部全体は673・674に比較して深くなっている。脚部は柱状部がラッパ状に開くがやや脹らみをもち，裾部で屈折している。676～679の杯部破片は675の杯部に類似し，同様の脚部をもつものと思われる。680の脚部全体がラッパ状に大きく開き，中程で脹らみをもつ。

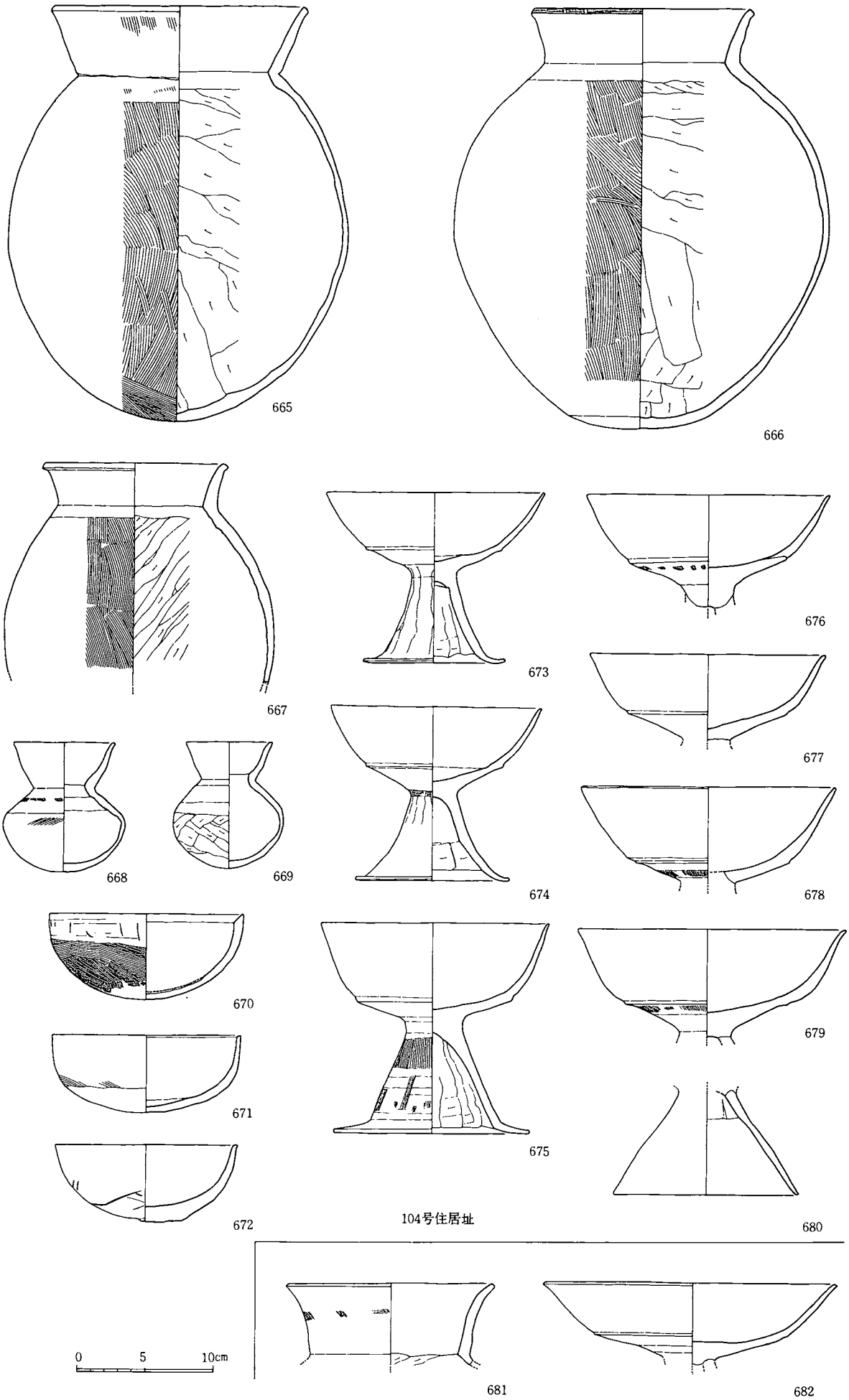
〔105号住居址出土遺物〕（第146・147図）

681は広口壷の口縁部破片で口縁部は直立気味で端部で外湾している。682は高杯杯部で下半部は平坦で上半部は大きく開き，口径に対して浅い杯部である。

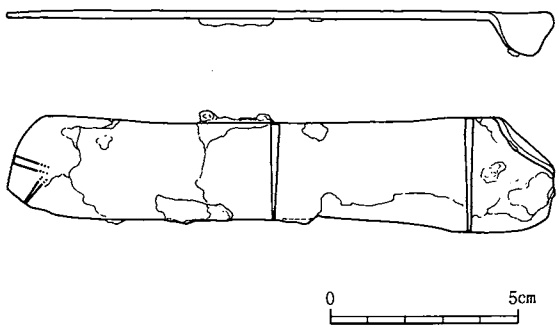
鉄鎌（第147図）は完形品である。全長14.1cmで刃部と背部はいずれも内湾し，最も狭い中央部分での幅は2.5cmであった。刃部先端の幅は最大2.6cmで柄部の幅は3.0cmである。背部の厚みは0.25cmで断面形はくさび形をなしている。柄部は刃身に対してほぼ130度の角度で装着されるように折り返されている。

〔108号住居址出土遺物〕（第148図）

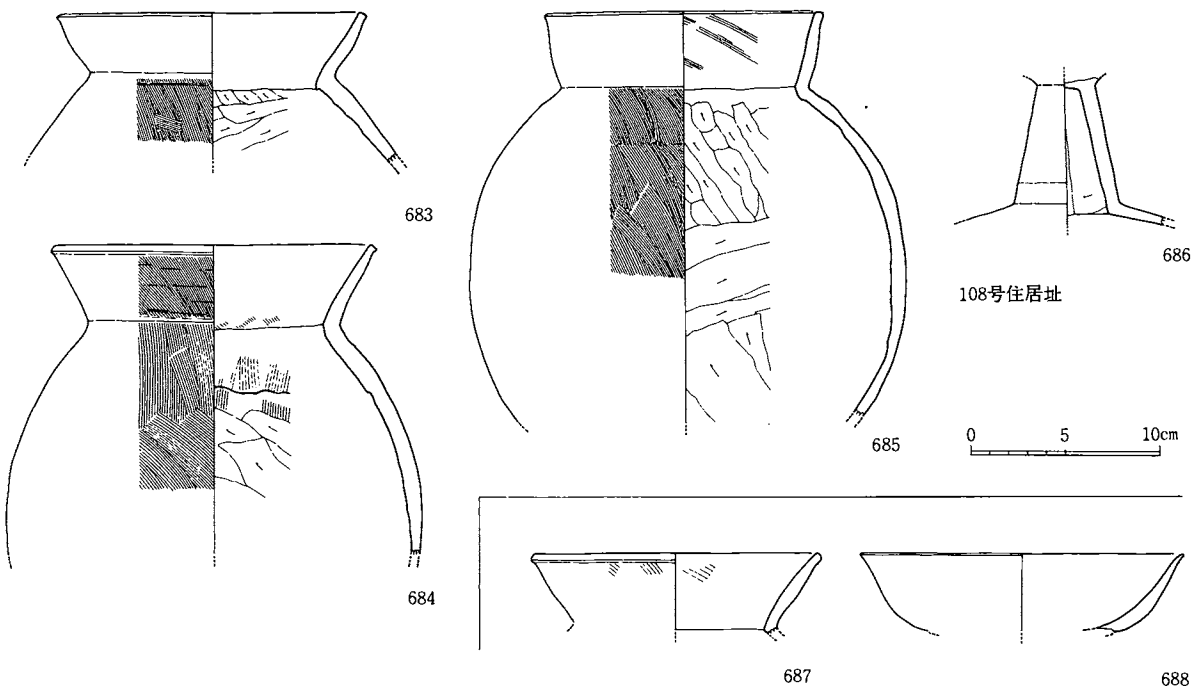
683の甕口縁部はほぼ直角に屈折し，外面に脹らみをもち，端部は角ばっている。684の甕は頸部のくびれは弱く，口縁部は直線的に外反し，胴部の張りも弱い。685の甕口縁部は直立気味に外反し，胴部は球形に近いものである。684と同様胴部の張りは弱い。686は高杯脚部は柱状部と裾部の境が明瞭に屈折するタイプで，器壁は丁寧な造りの土器である。



第146図　上の原104・105号住居址出土土器



第147図　上の原105号住居址出土土器



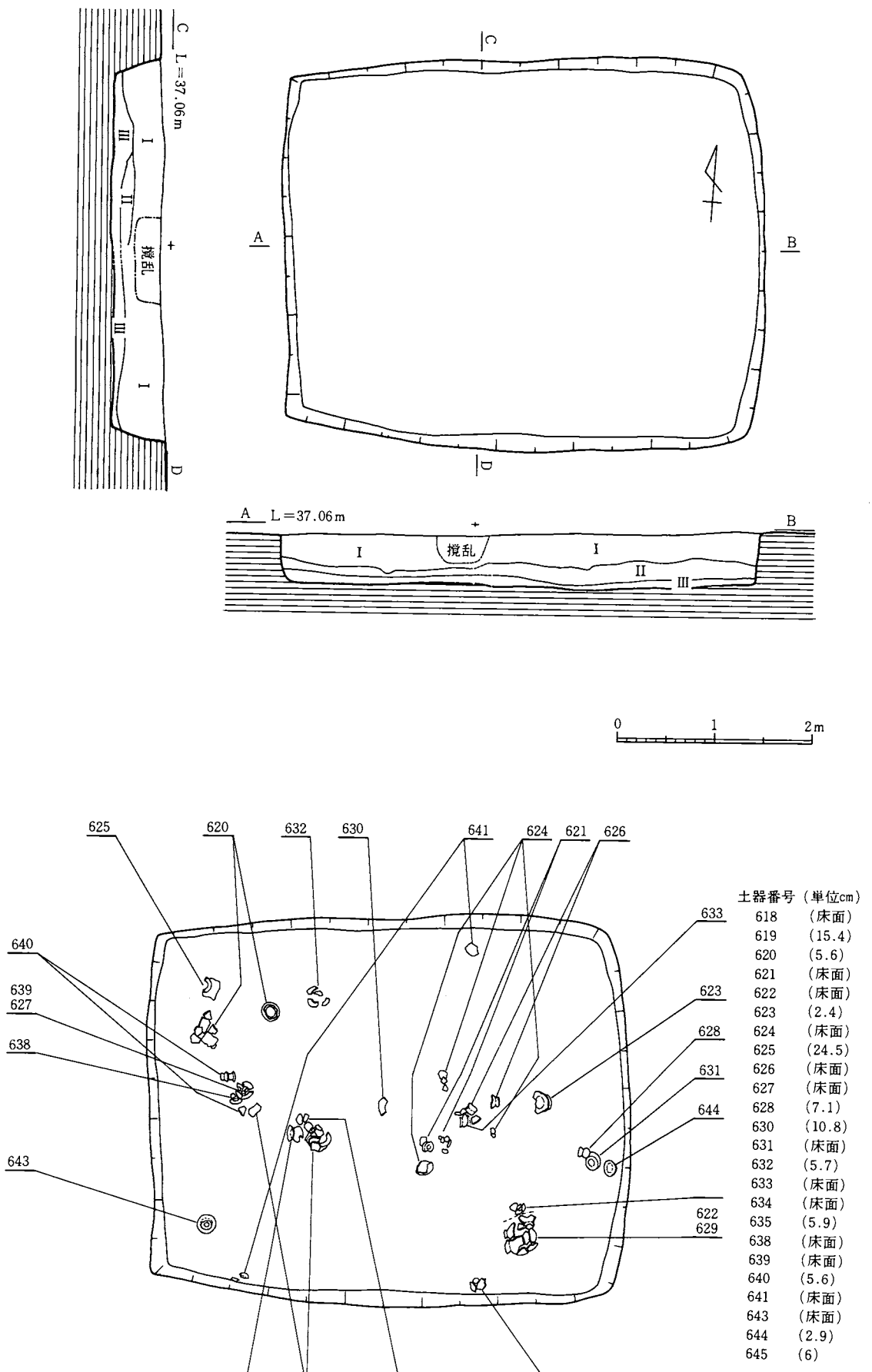
第148図　上の原108・109号住居址出土土器

上の原101号住居址(第149図)

D－2区にあり，97・98号住居址と47号住居址(7世紀中葉)との間に位置している。住居址の規模は長軸(A－B)線上で4.96m，短軸(C－D)線上で3.94m，床面積約17.2m²で，平面プランは四辺が張り出した長方形を呈している。長軸方位はN－86°－Eであった。壁高は南壁で最大0.55mで他の三壁も0.50m前後を残していた。本遺跡では最も壁高が良く残存した例である。床面は部分的にわずかな凹凸がみられるが，全体的には水平面を保ち，床全体に硬化面が認められた。また柱穴・炉址等は設けられていなかった。

〔住居址覆土〕(第149図)

住居址覆土は3枚からなり，これらはそれぞれ互層をなし，自然的な堆積状態を示していた。I層は粘性の強い赤褐色土層で，自然・人工的遺物は全く含まない。他の住居址覆土ではほとんど認められなかった土層で，0.25～0.50mの厚みで堆積していた。II層は炭化物の細かい粒子・焼土粒を多く含む暗褐色土層で，部分的に炭化部材片を含んでいる。この土層は東西方向にブロック状に堆積していて，南北両壁側では認め



土器番号	(単位cm)
618	(床面)
619	(15.4)
620	(5.6)
621	(床面)
622	(床面)
623	(2.4)
624	(床面)
625	(24.5)
626	(床面)
627	(床面)
628	(7.1)
630	(10.8)
631	(床面)
632	(5.7)
633	(床面)
634	(床面)
635	(5.9)
638	(床面)
639	(床面)
640	(5.6)
641	(床面)
643	(床面)
644	(2.9)
645	(6)

第149図　上の原101号住居址

られなかった。III層はロームブロック・炭化物・焼土粒を多量に含む土層で，住居址廃絶直後に堆積した土層である。

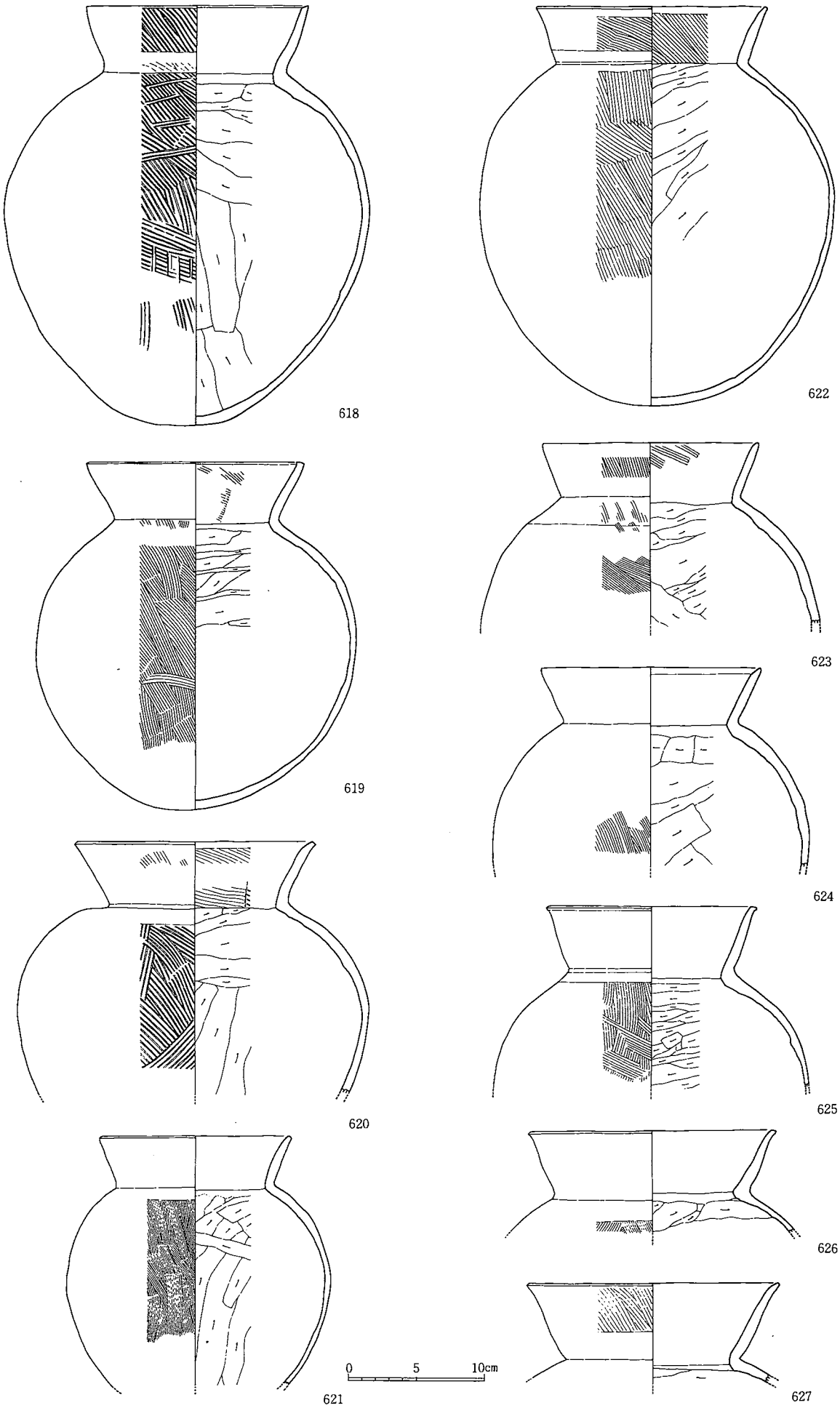
〔遺物出土状態〕（第149図）

出土遺物のうち土器は土師器のみで，他に鉄器２点が出土している。土器の出土量は極めて多く，計45個体以上が出土しているが，図示できたものは29個体である。これらのうち618・621・622・624・626・627・631・633・634・638・639・641・643の13個体は床面に密着した状態で出土し，620・623・628・629・632・635・646・637・640・642・644・645・646の13個体はIII層，619・625・630の３個体はII層から出土したものである。特に床面に密着した13個体分については，住居址廃絶時の状況を示す一括資料と考えられる。

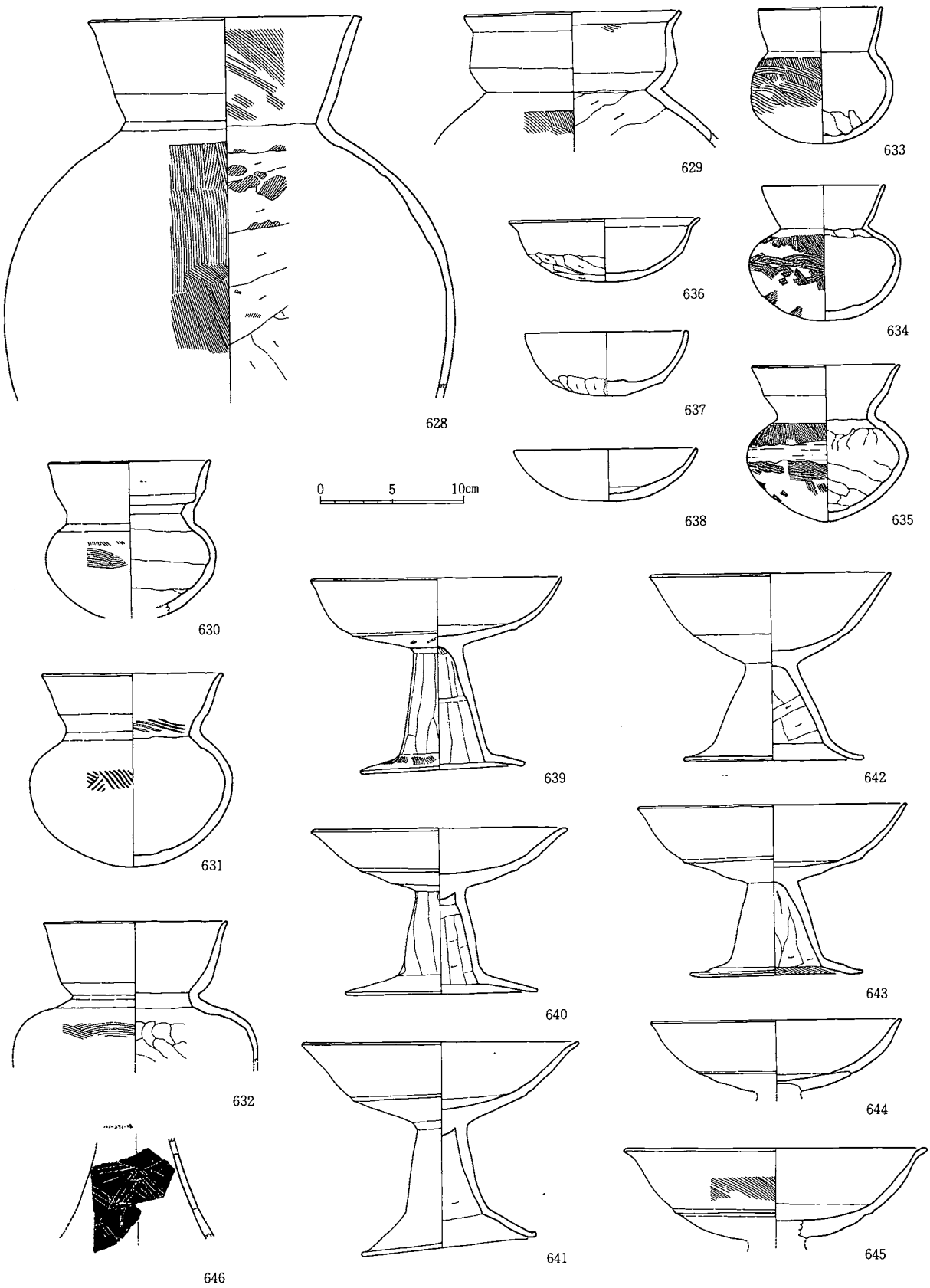
〔出土遺物〕（第150・151・152図）

出土土器の中で最も多くを占めたのは甕で計16～18個体分以上にのぼり，このうち図示出来たのは10個体である。床面出土の土器13個体の器種ごとの内訳は，甕６・中型壷１・小型丸底土器２・杯１・高杯３である。

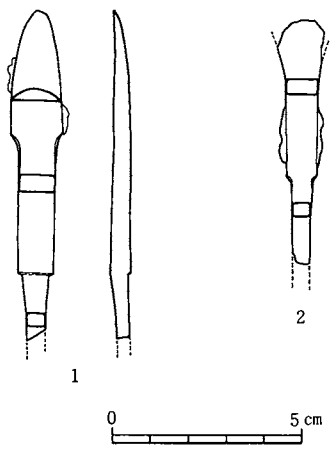
甕の胴部の形態は球形ないし球形に近いもので占められている。口縁部の形態にはやや内湾気味に立ち上がるもの(618・619)，直線的に外反ないし外湾気味となるもの(620～624)，さらに全体的には内湾気味に立ち上がるものの端部で外方に小さく湾曲するもの(625～627)などの変化がみられる。内外面各部の調整・仕上げの手法は刷毛目の単位や内面ヘラ削りの方向などの個体差はあるが，基本的には定型化したものである。大型壷には２者が認められる。628は所謂単純口縁の広口壷である。629の壷は頸部が一度外反したのち屈折して内傾して立ちあがり，口縁端部でさらに屈折して小さく外反する特異な形態を有している。同類の壷は118号住居址にも１点(741)出土例がある。このほか628と同類の胴部破片が，少なくとも２～３個体分出土している。中型の壷は３個体出土している。630は口縁部内面に段を有している。全体に小振りで小型丸底土器として扱うべきかも知れない。631･632は口縁部が内湾気味に立ち上がり，頸部は強くくびれる。胴部は631がやや扁平な球形を呈している。小型丸底土器は５個体が出土し，３個体を図示した。３個体とも胴部径に対して口径が小さいタイプである。633・634の胴部は扁平な球形で，口縁部は633が直立気味に立ち上がり，634は直線的に外反する。635の胴部も扁平な球形で底部は尖り気味の丸底である。杯は3個体出土した。体部は偏平な半球形状を呈するが，636は口縁端部で屈折し，小さく外反している。高杯は甕に次いで多く出土した器種である。全体の形態を知ることが出来るものが５個体あり，主として脚部の形態から大別して２者が認められる。639～641のように杯部は浅く皿状を呈し，脚部は柱状部と裾部との境が明瞭である。柱状部から屈折して裾部が大きく開くが，裾部の外面に僅かに脹らみをもつている。なお639･640と641との裾部では裾部の屈折角度が異なっている。また642・643は杯部が前者に比較して深く，脚柱状部はラッパ状に開いて脹らみをもち，裾部でさらに屈曲して外方へ開くか外湾している。644・645の杯部も642・643と同様のものであろう。646は高杯脚部ないし器台の破片で，外面に鋭利なヘラ状の工具で直弧文が描かれている。小破片であるためどのような文様構成を成すものか不明な点が多い。　鉄製品は２点(第152図)出土している。１はヤリガンナで刃部は柳葉状をなす。刃部の全長は6.9cmのところで両側に鎬を有し，中茎との間に段を施されている。刃部の横断面形は扁平な半月形をなし，又刃部は表向きに弧状に反っている。２は鉄鏃で先端部と中茎部を欠失しているが圭頭斧箭式に属する可能性が大である。中茎部との間に明瞭な鎬を有している。



第150図　上の原101号住居址出土土器　その1



第151図　上の原101号住居址出土土器　その2



第152図　上の原101号住居址
出土槍鉋・鉄鏃

上の原103号住居址(第153図)

E－1区にあり，掘立柱建物址及び109号住居址と重複している。住居址の規模は長軸(A－B)線上で5.80m，短軸(C－D)線上で5.70m，床面積約27.5m²で，平面プランは東辺がやや長い方形を呈している。長軸方位はN－87°－Eであった。壁高は南壁で最大0.35m，北壁で最低0.15mを残していた。床面には中央部と南東部隅を中心とした2箇所に硬化面があり，この間に焼土塊の堆積が認められた。其の他柱穴・炉址等は設けられていなかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕(第153図)

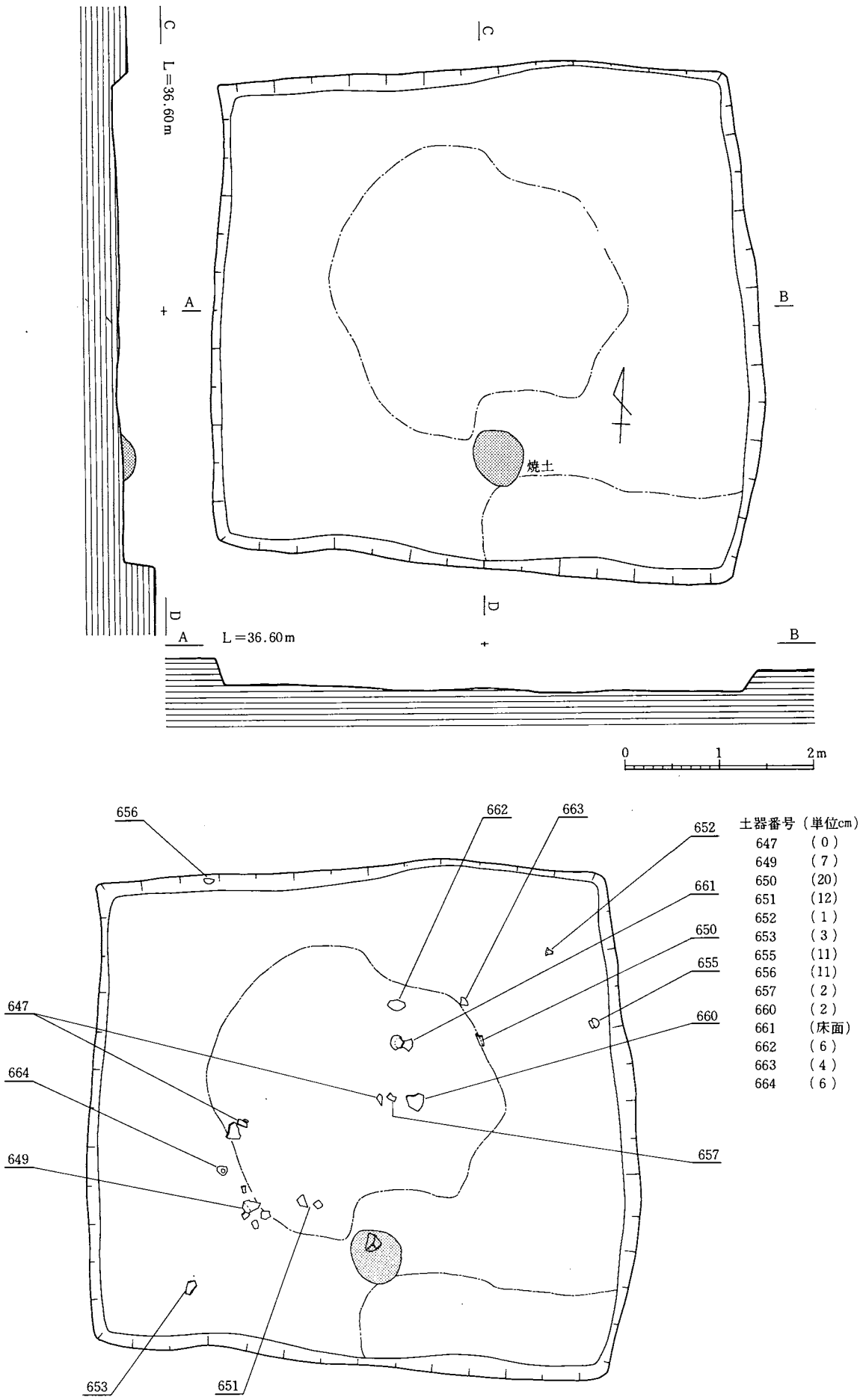
住居址覆土は炭化物・焼土粒を多くふくむ灰褐色土層で，床面近くでは焼土の含む割合が多くなるものの，全体的には単一の土層であった。出土遺物は住居の中央部を中心とした覆土中に出土し，すべて土師器であった。これらの内床面に出土したものは高杯(661)1個体にすぎない。

〔出土遺物〕(第154図)

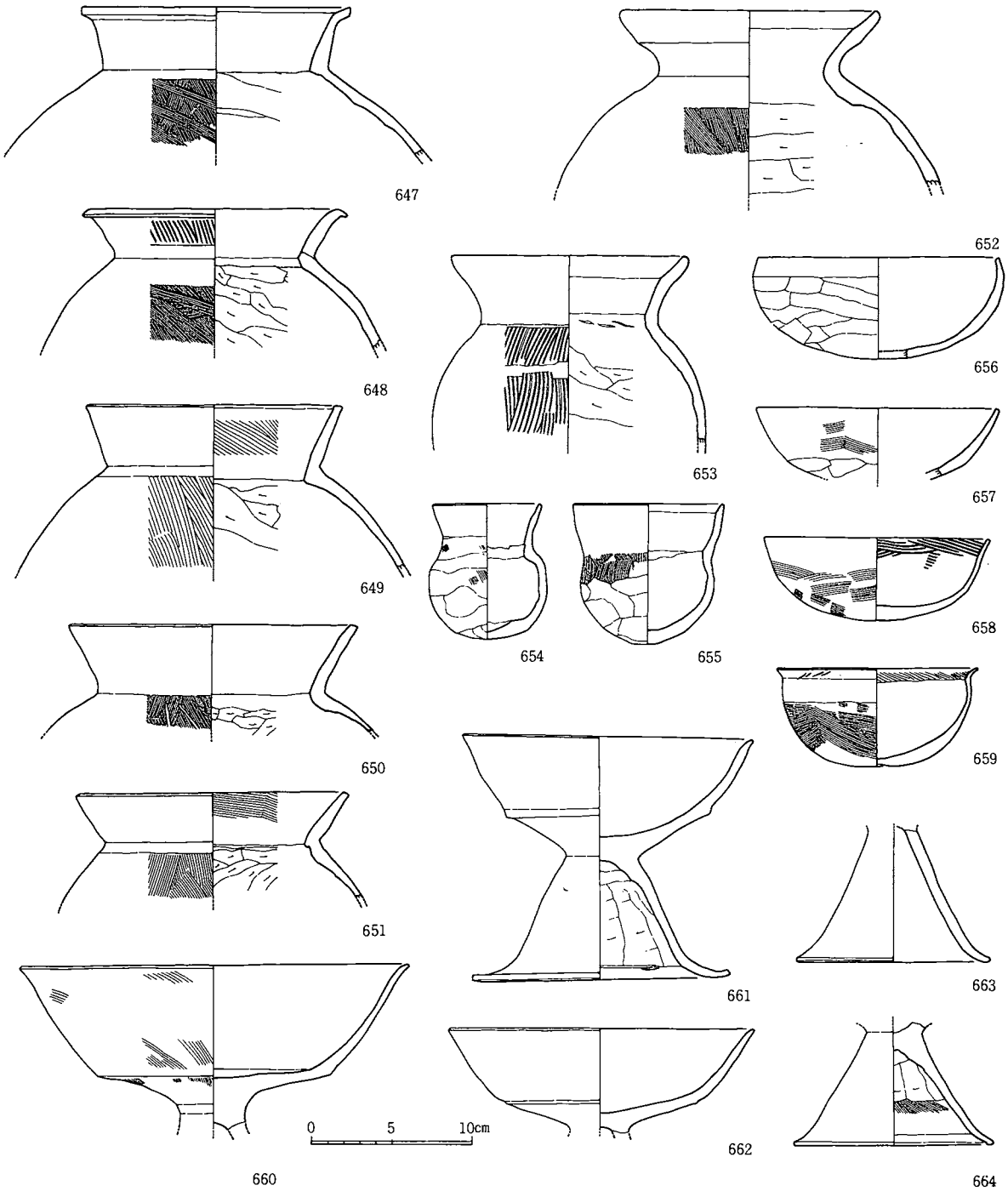
出土土器は18個体あり，すべてを図示した。甕は7個体あり，主な口縁部の形態により3類に大別出来る。647・648は肩部は強く張り口縁部は短く直立ないし外湾し，端部で外方へ屈折している。649～651は口縁部が直線的に外反する甕である。いずれも口頸部の破片で胴部の形態は不明である。652・653は頸部は外湾して立ちあがり中位でさらに屈折して開いている。口縁部内面に稜が1条巡り，端部は丸く仕上げられている。654・655は小型丸底土器で，特に654は手づくね土器のような粗製のものである。655は頸部のくびれは極めて弱く，口縁部は内湾気味に直立する。杯は4個体出土した。いずれも半球形の体部を有するが，口縁端部の形態に変化が見られる。656の口縁端部はやや内傾して立ち　がり，659では屈折して外方へ大きく開いている。高杯は5個体出土している。前述したように661は唯一床面出土の土器であり，ほぼ完形品である。杯部は扁平な半球形状で比較的深い。杯部中位の段は明瞭である。脚柱状部は下位に移行するに従って脹らみをもちながら開き，裾部でさらに大きく外湾し端部は跳ね上がっている。633・664はラッパ状に開く高杯脚部である。

上の原109号住居址(第155図)

103号住居址と同じくE－1区に位置し，103号および64号住居址の2軒，さらに掘立柱建物址と複雑に修復している。住居址は壁はすでに削平されていて，硬化面および柱穴と床面に密着した数点の土器によって，その存在を確認したに留まった。硬化面は東西約3.3m，南北約3.2mの方形の範囲が確認できた。柱穴1個は硬化面のほぼ中央部に検出したが，本住居址に伴うものか否かは不明である。住居址覆土は硬化面の上部に部分的に残されていた。炭化物粒を少量含む灰褐色土層であった。



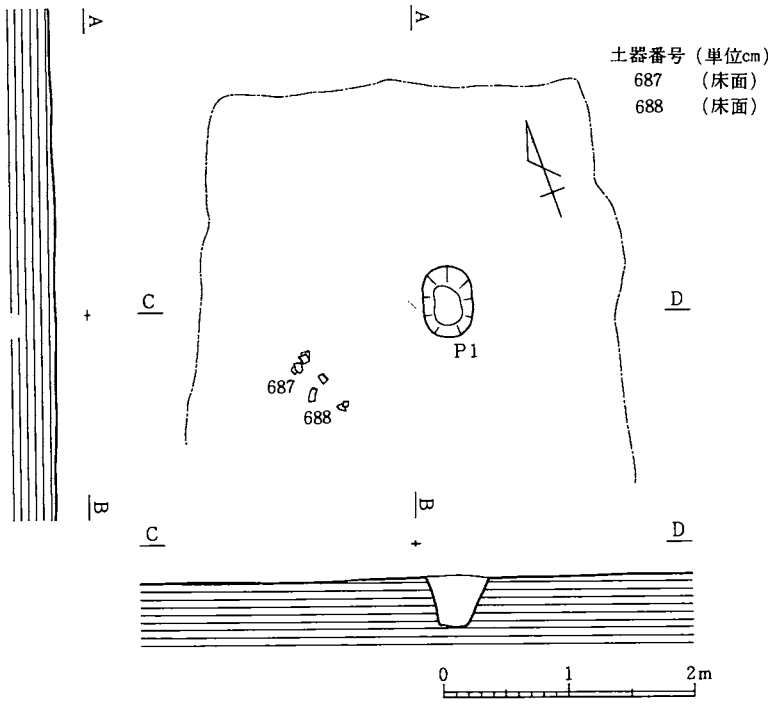
第153図　上の原103号住居址



第154図　上の原103号住居址出土土器

〔出土遺物〕（第148図）

出土遺物は土師器の小片２個体であつた。687はやや小振りの甕口縁部破片で，口縁部は直線的に外反している。688は高杯の杯上半部破片である。上半部は接合面から剥離している。



第155図　上の原109号住居址

上の原110号住居址（第156図）

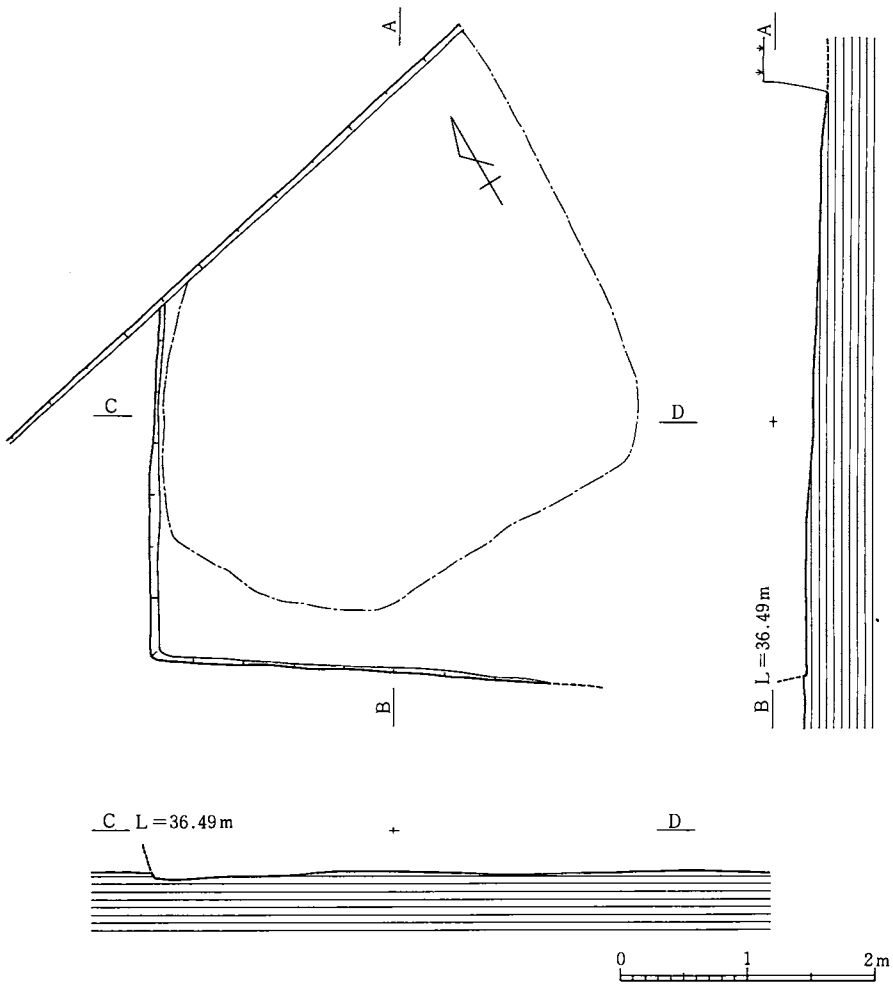
109号住居址と同様E－1区に位置している。住居址の北側は調査区を南北に走る3条の溝（近世）によって失われ，又西側は自然な傾斜面に加え，上部から削平されて失われている。したがって本住居址も南西部コーナーを中心として，西壁2.7m，南壁3.2mまでと，床の硬化面の範囲を確認したにすぎない。従って住居址の規模および長軸方向は不明である。又出土遺物も皆無であった。

上の原111号住居址（第157図）

C－1区に位置し，91号住居址（7世紀中葉）の直下に重複している。住居址の規模は長軸（A－B）線上で5.20m，短軸（C－D）線上で4.75m，床面積19.20m²であった。平面プランは北辺がやや脹らみ，南辺の中央部が突出する変形した長方形である。長軸方位はN－58°－Eであった。壁高は東西の壁で最高0.25mで，南北で0.20m前後を残していた。床面のほぼ全体に硬化面が認められたが，柱穴・炉址等は設けられていなかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第157図）

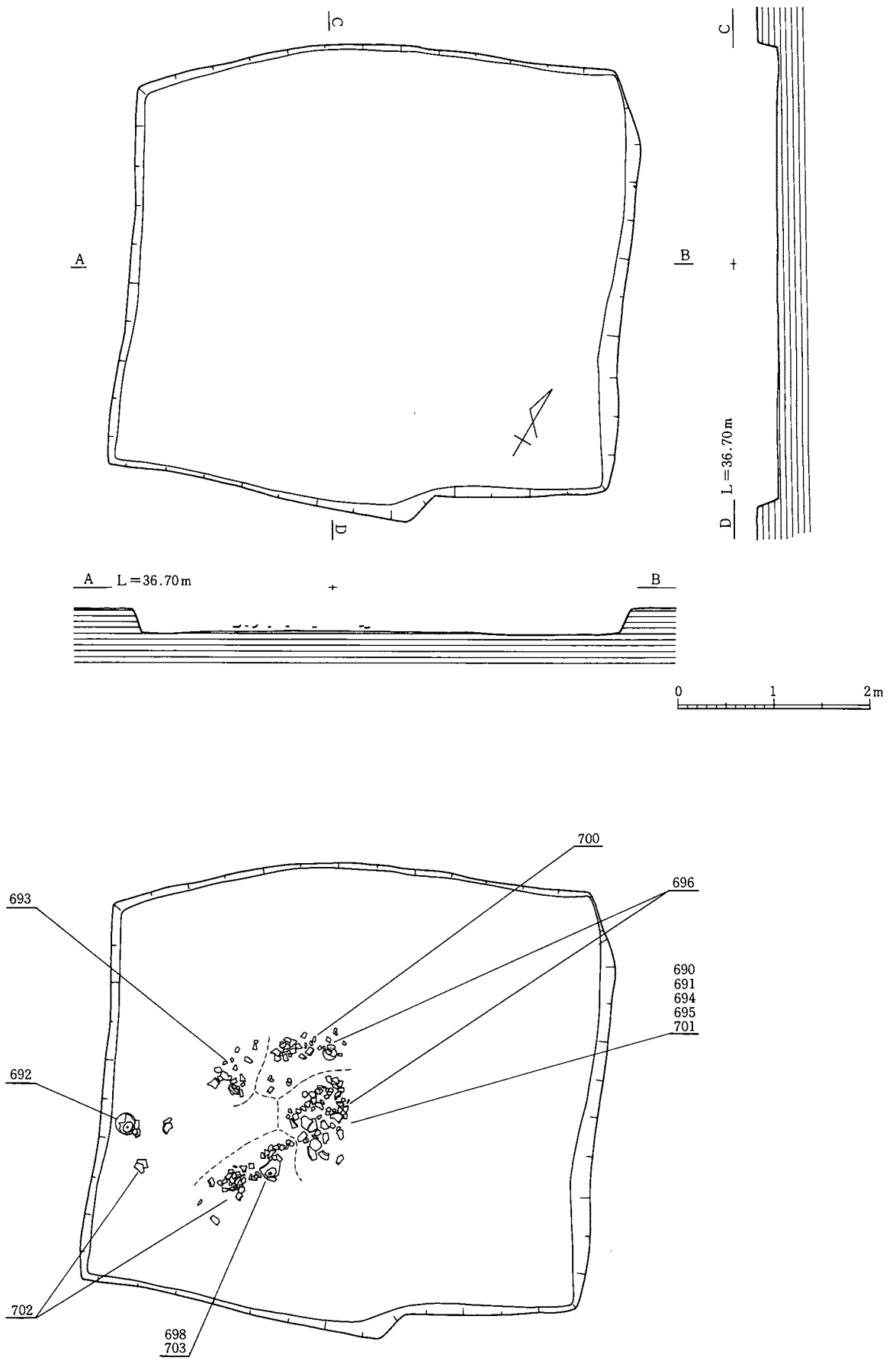
住居址覆土は炭化物の細粒・焼土を多くふくむ灰褐色土層で，床面直上では特に焼土の含む割合が多くなっていた。出土遺物はすべてこの薄い土層の上面に接する位置に出土している。また遺物は住居址の中央部から南西部寄りの狭い範囲に集中し，しかも692の甕1点の他は小破片で占められていることなどから，住居址廃絶後に一括して廃棄されたか，住居址の埋没過程で流入したものと考えられる。



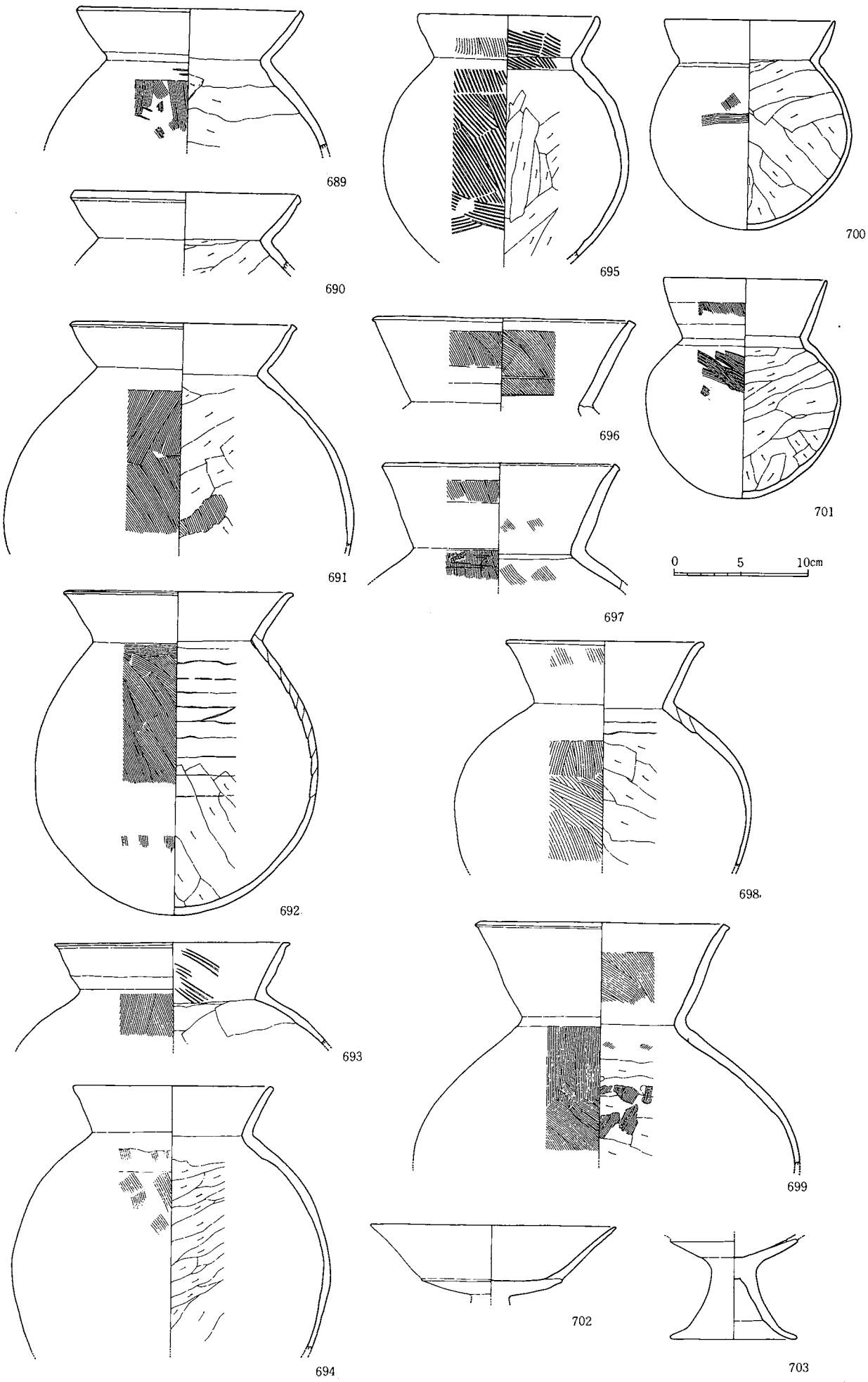
第156図　上の原110号住居址

〔出土遺物〕（第158図）

出土遺物は土師器のみで，計20個体以上が出土しているが，図示出来たのは15個体分で大半は甕である。甕は口縁部が内湾し，端部で内側へわずかにつまみだされるもの(689～691・695)，これとは逆に端部が外側につまみ出され，胴部の重心が中位以下にある球形をなすもの(692)，さらに口縁部が直線的に外反するもの(693・694)がある。なお692の甕は内面の胴部中位以上に粘土紐の巻き上げ痕がのこされている。696～699は単純口縁の広口壷である。698を除く３個体は大型の壷である。口縁部が直線的に大きく開き端部が角ばる点など，３個体とも形態的によく類似している。700・701は中型の壷である。胴部は整美な球形で口縁部は直線的に外反する。また700の口縁部外面は脹らみをもっている。702は高杯杯部で下半部は平坦で上半部は外湾気味に大きく開いている。703は小型の高杯で杯上半部を欠失している。脚部はラッパ状に開くタイプの高杯である。



第157図　上の原111号住居址



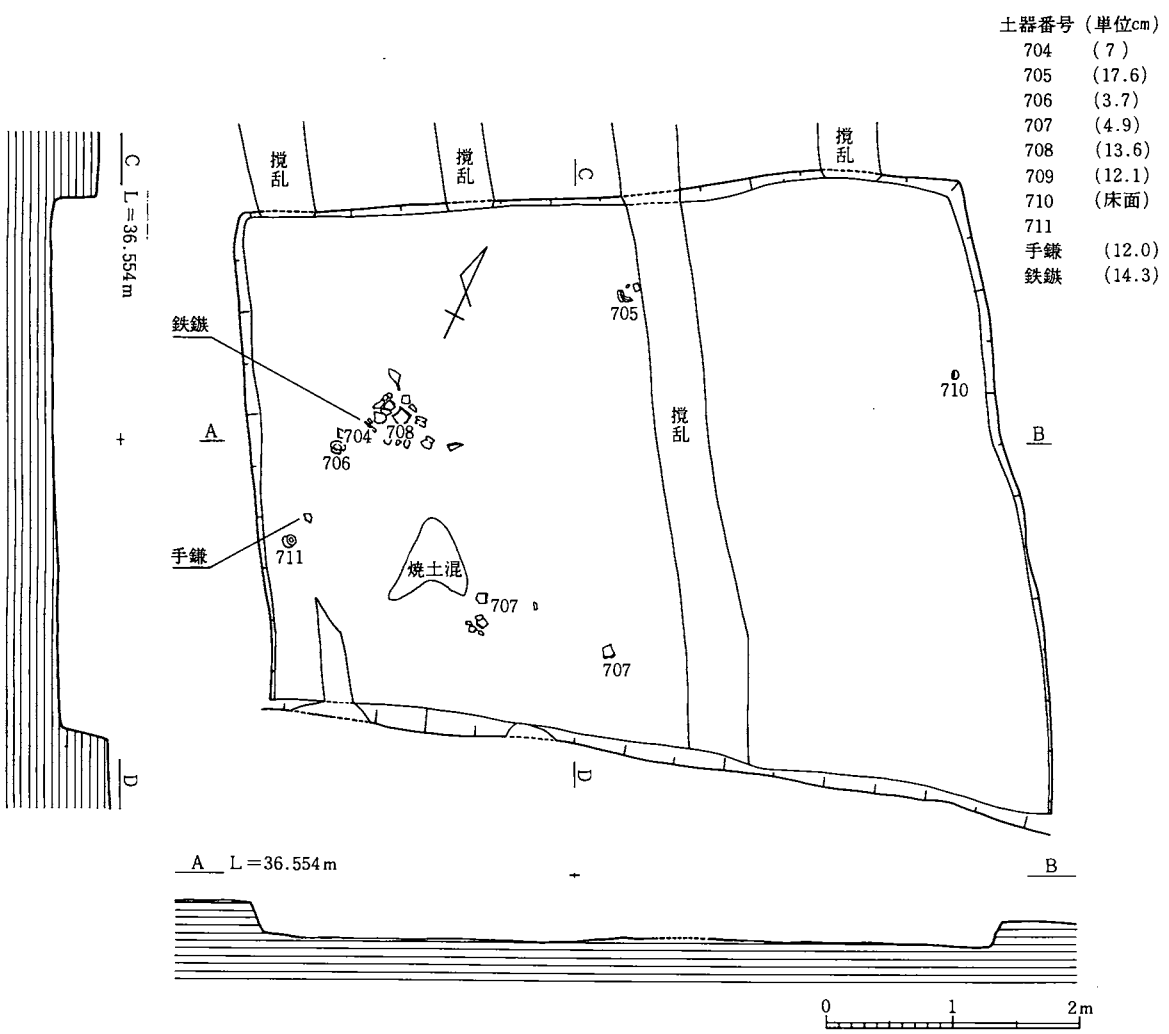
第158図　上の原111号住居址出土土器

上の原112号住居址(第159図)

E－0区とE－1区の跨った地点に位置し，住居址の南半は凹道(近世～現代)によって切断され，また南北にはしる4条の耕作溝で撹乱されている。住居址の規模は北辺で5.75m，西辺で3.8mまで，東辺で5.0mまで確認した。しかし長軸方向は不明であるが，仮にA－B線上を長軸とするとN－64°－Eとなる。壁高は北壁で最高0.35mを測った。床面はほぼ水平面を保っていたが，硬化面は部分的に認められる程度で範囲を線引きすることは出来なかった。床面中央部西寄りに焼土が薄く堆積した部分が認められたが，炉址・柱穴等は検出出来なかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕(第159図)

住居址覆土は焼土粒・炭化物を多く含む灰褐色土層である。プラン確認面では部分的に暗褐色土層が認められたが，大半は住居址全体が上部から削平され失われたのであろう。出土遺物は土師器計8個体と鉄器2点が出土し，そのすべてを図示した。8個体の土器の中で床面に出土したのは小型丸底土器1個体(土器番号710)で，他の土器と鉄器は覆土中から出土したものである。おそらく住居址廃絶時にほとんどの土器類は持ちだされたのであろう。覆土中出土の土器類は住居址の埋没過程で廃棄されたものと考えられる。

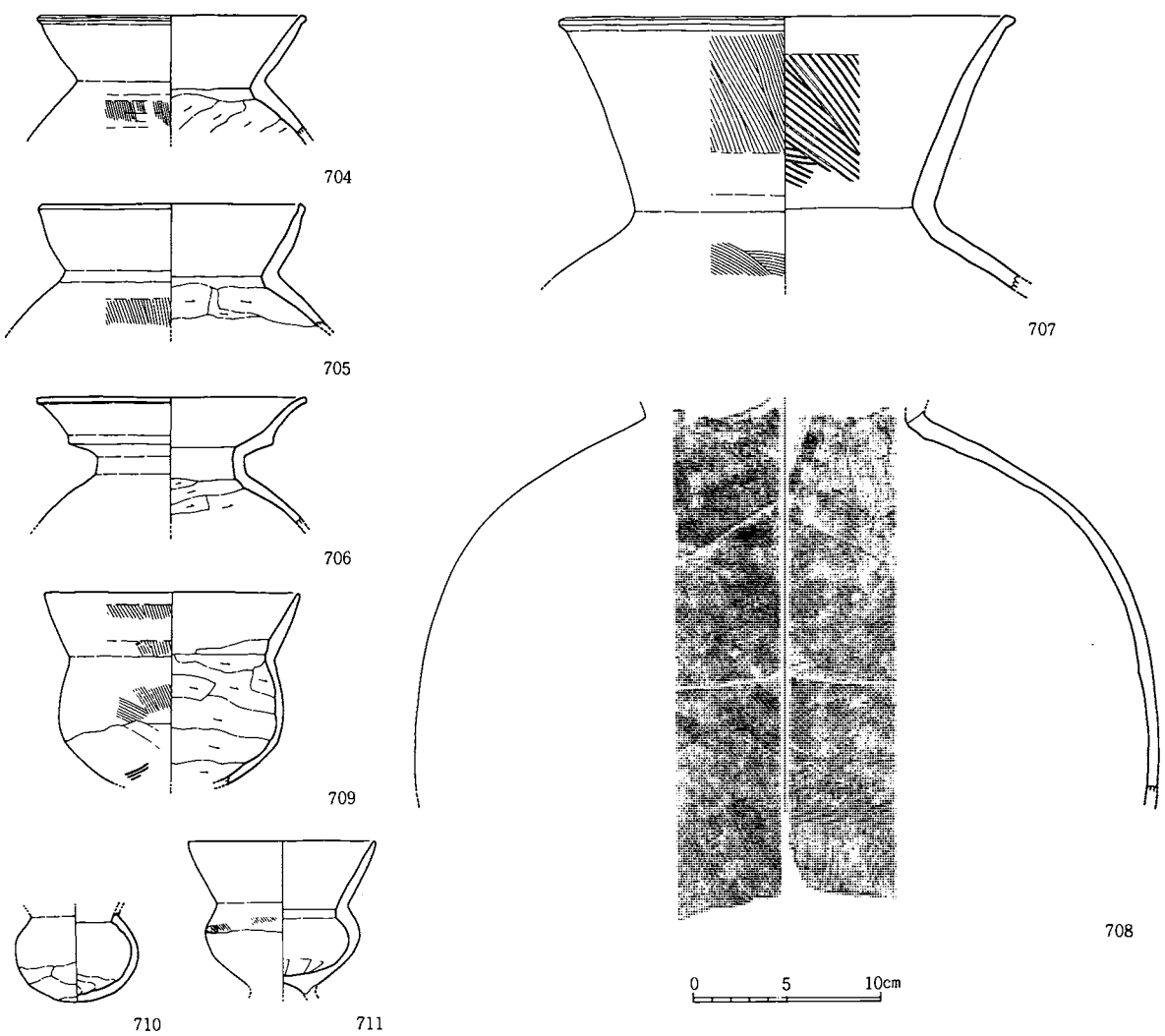


第159図　上の原112号住居址

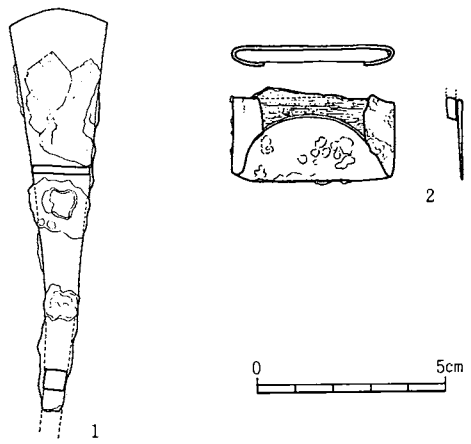
〔出土遺物〕(第160図)

704・705は甕口頸部破片である。704の口縁部は直線的に外反し，705は内湾気味に立ち上がり，端部で内方へ小さくつまみ出されている。706は小振りの複合口縁壷である。頸部は強くくびれ大きく外反し，中位で屈折して口縁部はラッパ状に大きく開いている。全体的に器壁が薄く丁寧な造りの土器である。709は中型の壷で，底部を欠失している。頸部のくびれは弱く，口縁部は直立気味となる。胴部は下半部に屈折部があり，この部分に不明瞭な稜が巡っていて，この壷の最大の特徴となっている。710は小型丸底土器で口縁部を欠失している。胴部は扁平な球形を呈している。711は脚台付の小型丸底土器で，胴部径に対して口径は著しく大きなタイプである。脚台は欠失している。707と708は単純口縁の大型壷である。特に708の胴部内面には外面と同一の刷毛目調整が施されている。

鉄器は鉄鏃と手鎌が各1点出土している。鉄鏃(第161図の1)は所謂圭頭斧箭式に属すが，頭部の形態は円頭に近い三角形を呈している。頭部の幅は2.6cmで，厚みは0.2cm強，茎部の断面は0.6×0.6cmの正方形である。身部と茎部の境は厚く錆が付着していて不明である。また身部の一面に木質部が認められる。手鎌(第161図の2)は刃部の幅4.2cmで，幅2.2cmを測った。両端の折り返しの幅は約0.8cmで，この部分に木質部が残っている。木質部は刃部と繊維が平行するように装着されている。また木質部の刃部側は折り返し部に延長するように半円形にえぐり取られ，端部は丁寧に面取りされている。



第160図　上の原112号住居址出土土器



第161図　上の原112号住居址出土鉄器

上の原113・114号住居址(第162・163図)

113号住居址はB－0区に，114号住居址はA－0区に位置し，一部でわずかに接している。

113号住居址は南側を凹道により切断されて，全体の4分の1ほどが失われている。住居址の規模は長軸(C－D)線上で7.08m，短軸(E－F)線上で6.04m，床面積約42.1m²前後の大型の住居址になるものと思われる。長軸方位はN－88°－Wであった。壁高は南壁で最大0.25m，東壁で最低0.15m以下で，全体的に残存状態は良くない。床面には大小6個の柱穴を検出したが，配列が不規則なうえに未確認の部分があるため，どのような構造かは判明しない。また床面の東壁寄りの狭い範囲に硬化面が認められた。

114号住居址は東辺が113号住居址の一部と重複している他は，ほぼ全体のプランを検出出来た。又住居址は5条の耕作溝で撹乱され，この部分での覆土・床面はすべて失われていた。住居址の規模は中軸線上で長軸5.23m，短軸4.05mで，東辺がやや短い長方形プランを呈している。床面積は20.4m²であった。又長軸方位はN－80°－Eであった。壁高は最大で0.20m前後で113号住居址と同様残存状態は悪い。床面には東壁寄りを中心として，硬化面が認められたが，炉址・柱穴等は検出出来なかった。

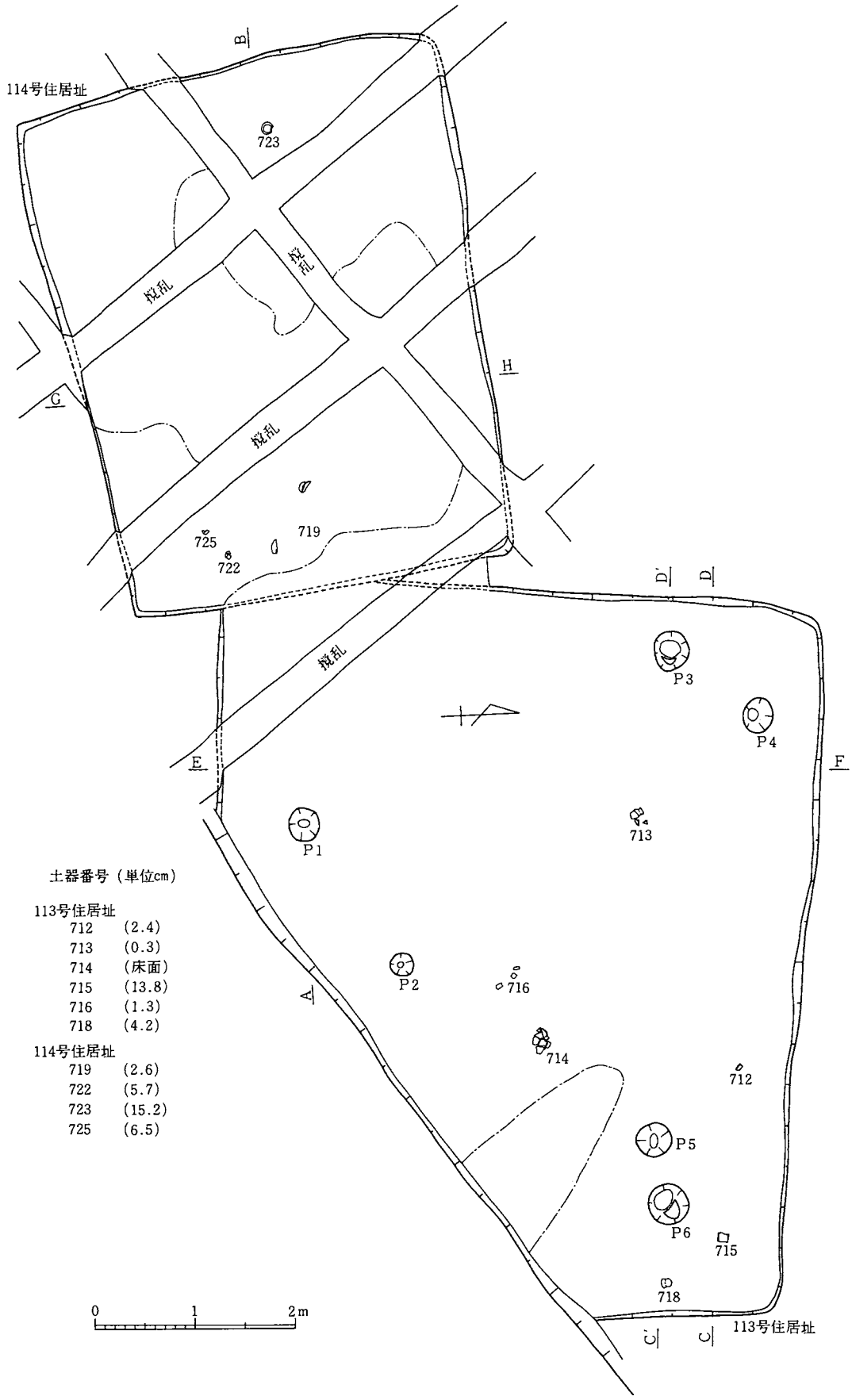
なお113号及び114号住居址は重複部分がわずかなうえに，覆土自体に変化がなく，床面の深さに差が認められない点から前後関係を確認するまでには至らなかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕(第162図)

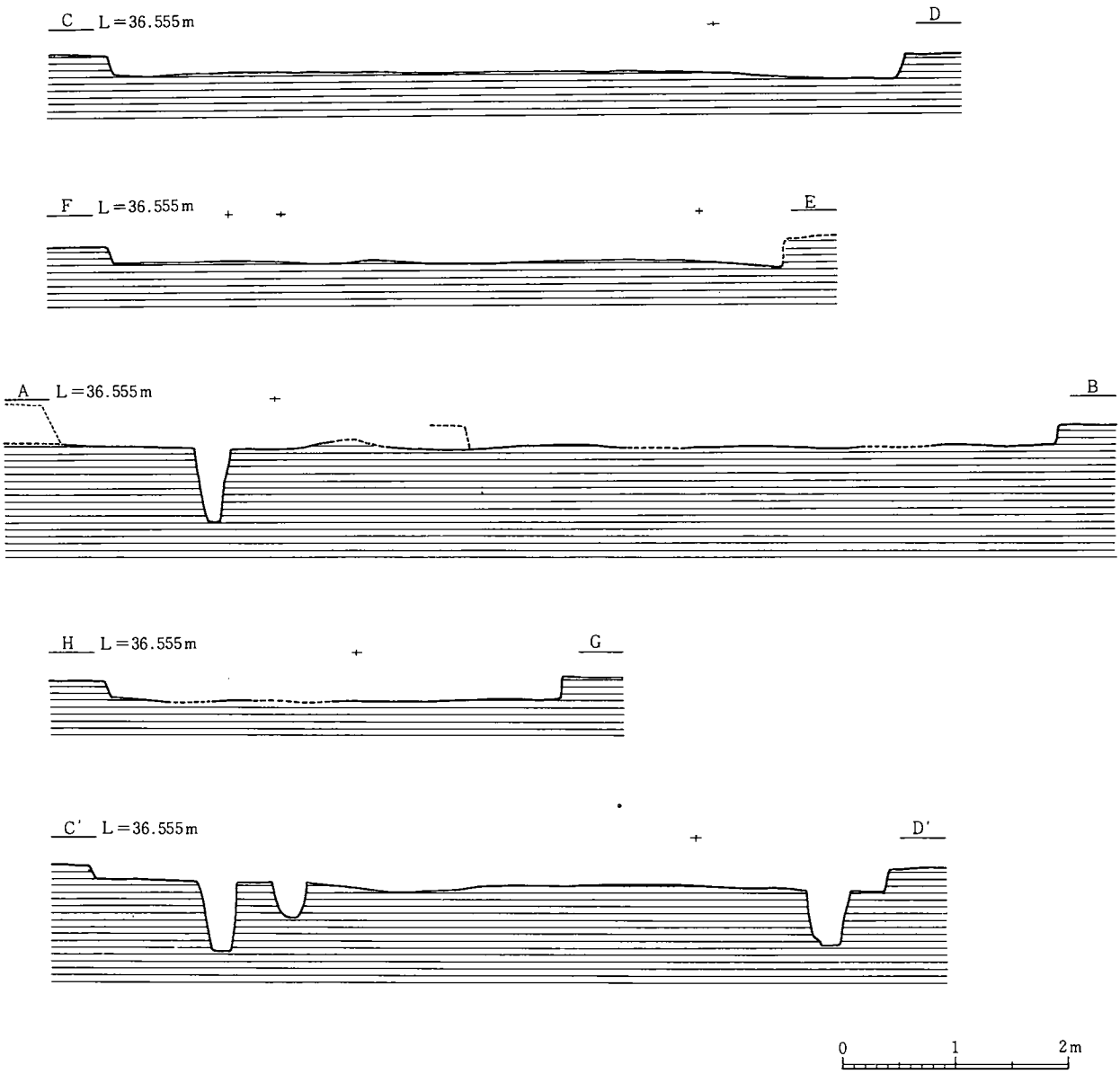
住居址覆土は113・114号住居址とも炭化物・焼土粒を多く含む灰褐色土層で，プラン確認面から床面に至るまで変化が認められなかった。出土遺物は両住居址とも土師器のみであったが，出土量は極めて少なく細片が多い。これらの中で床面出土の土器は113号住居址の壷(土器番号714)1個体分で，他はすべて覆土中に含まれていたものである。

〔113号住居址覆土遺物〕(第164図)

土師器7個体分が出土し，そのすべてを図示した。712は甕口頸部破片で，口縁部は内湾して立ち上がり端部内面が内方へ小さくつまみ出されている。713は形態的には中型の壷であるが，内外面に煮沸の痕跡が明瞭に残っているので，小型の甕とすべきであろうか。714～717は壷で単純口縁のものと複合口縁のものとがある。715・716は単純口縁壷の口頸部破片で，715は口縁部が直線的に外反し，端部は上部から強くナデ調整され内外面が小さく突出する。716は外湾気味に立ち上がる。714・717は複合口縁壷で，714は頸部が強くくびれて段をもち，口縁部は外反している。段の直上には1条の幅広い沈線が巡る。717は頸部の段から口縁部が直立気味に立ちあがり，端部は肥厚して丸味をもつ。頸部の段の直上外面には714に比較してさらに幅の広い凹線が1条めぐっている。特に717は丁寧な造りの土器である。718は小型丸底土器で口縁部は直線的に外反するが，端部が内方へ小さくつまみ出されている。胴部は球形で底部は尖り気味の丸底である。口径が胴部径に対して明瞭に大きいタイプのものである。



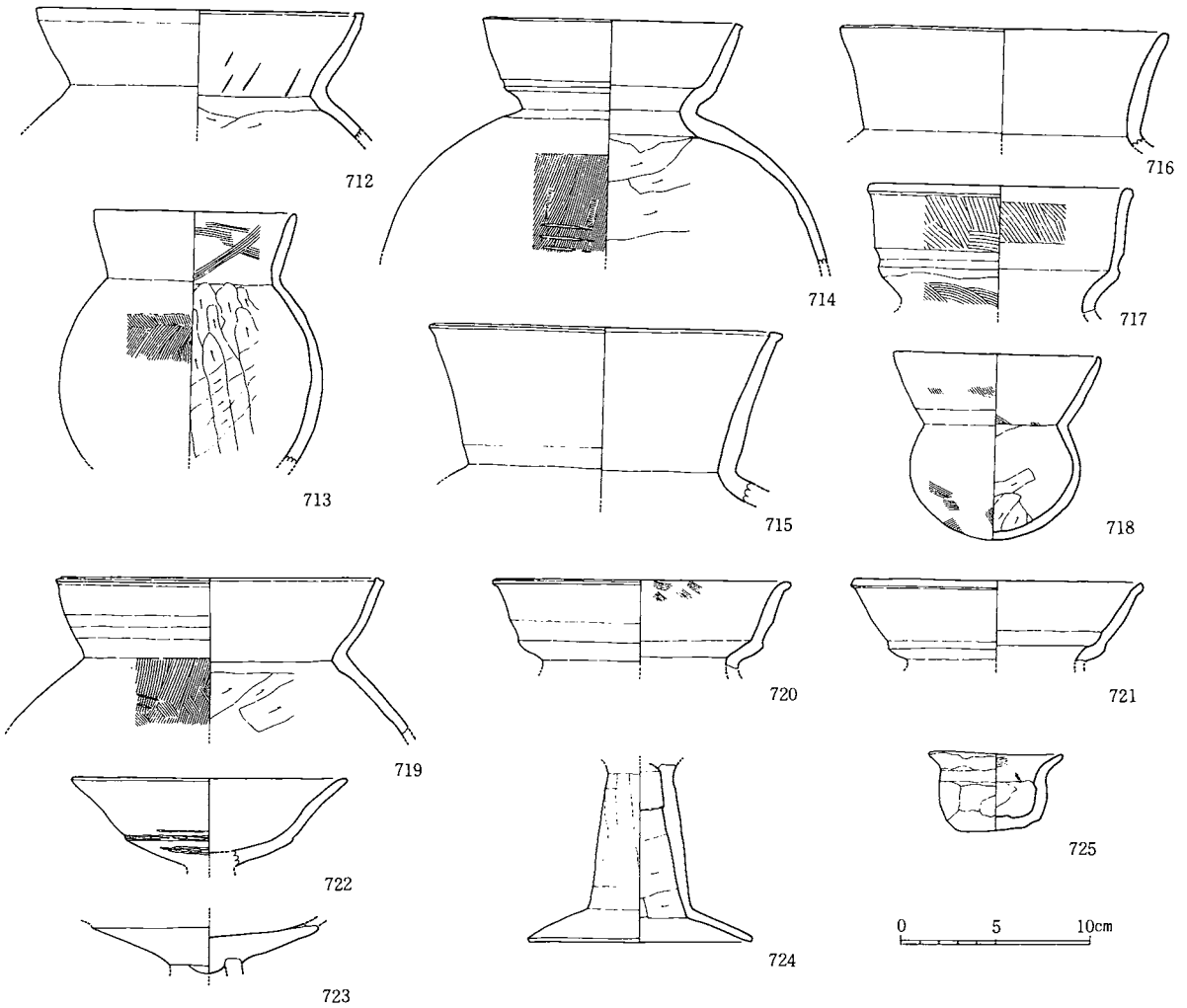
第162図　上の原113・114号住居址　その1



第163図　上の原113・114号住居址　その2

〔114号住居址出土土器〕（第164図）

土師器6個体と手づくね土器1個体が出土し，そのすべてを図示した。719は甕口頸部破片で口縁部は内湾気味に立ち上がり，端部で内方へ小さくつまみ出される。720・721は頸部の段が不明瞭な複合口縁壷であるが，全体的な形態は113号住居址出土の714の壷に類似しているが，端部が外方へ小さく外湾する点に差異が認められる。724は高杯脚部で柱状部はやや脹らみをもち，裾部との境は明瞭に屈折し，内湾気味に開いている。725は小型丸底土器を模倣した手づくね土器であるが，底部は平底で体部の丸味はほとんど認められない。



第164図　上の原113・114号住居址出土土器

上の原115・116号住居址(第165図)

115号および116号住居址は完全に重複し，いずれもC－0区に位置し115号住居址の西辺はB－0区に及んでいる。また115号・116号住居址の南壁側は凹道によって切断され失われていて，わずかに116号住居址の南壁下端を確認するに留まった。

115号住居址の規模は短軸(A－B)線上で5.08mを測り，長軸(C－D)線上では約5.0mまで確認できた。おそらく平面プランは南北に長い長方形を呈するものであろう。長軸方位はN－29°－Eであった。壁高は上部からの削平が進行していて，各壁とも0.05～0.15mを残しているにすぎない。床面は3条の耕作溝により撹乱されていたが，部分的に硬化面が残り，西側では壁面直下にまで及んでいた。また柱穴・炉址等は検出されなかった。

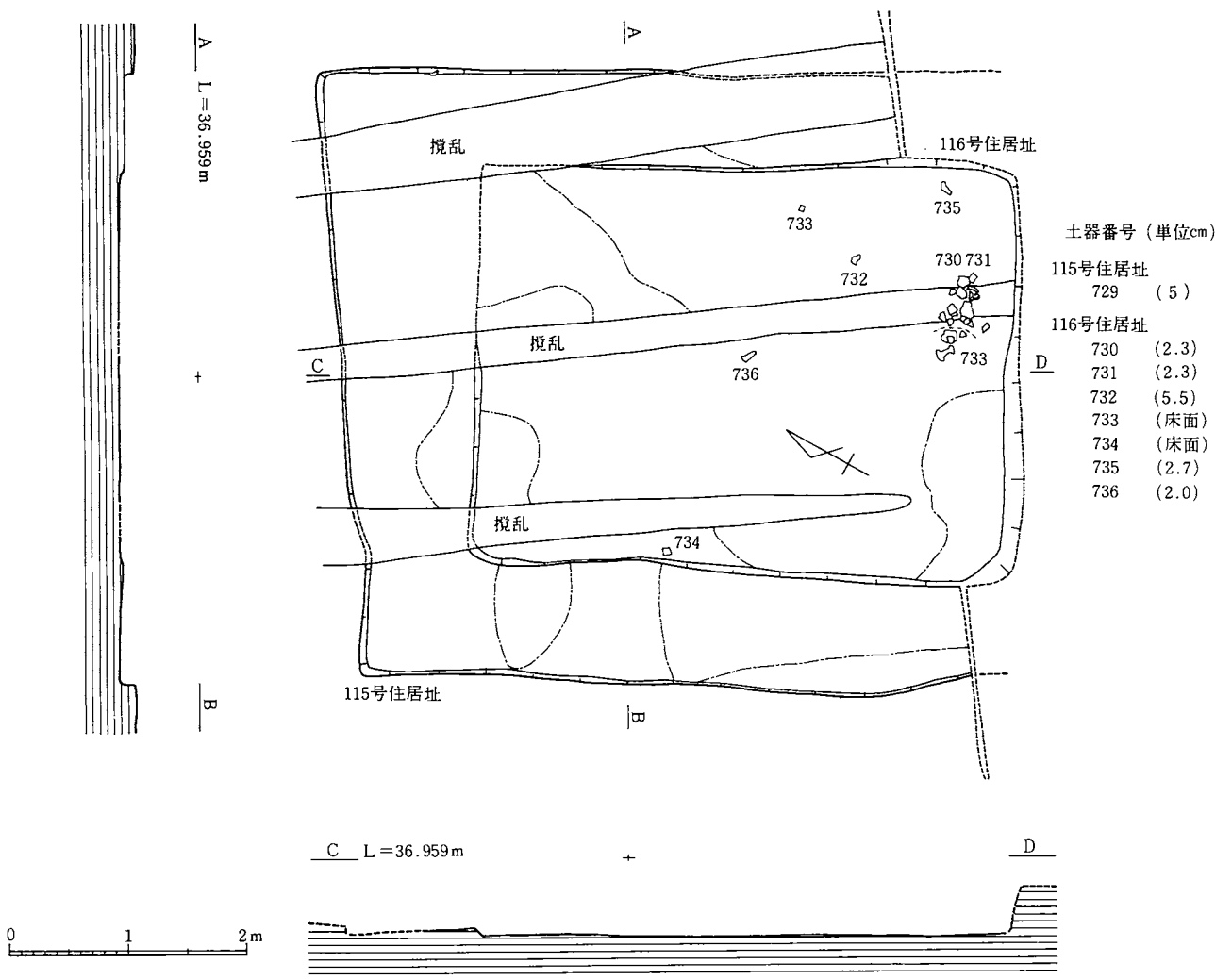
116号住居址は115号住居址調査時に116号床面に平面プランを検出したもので，北壁で最高0.08m，東西の壁ではわずかに数cmの立ち上がりを確認したにすぎない。規模は短軸線上で3.35m，長軸線上ではほぼ4.6m前後になるものと思われる。したがって平面プランは南北に長い長方形を呈し，床面積約14.9m²の小型の住居址である。長軸方位はN－27°－Wであった。床面は硬化面が認められない部分があるが，旧状は床面全体に及んでいたものと考えられる。その他柱穴・炉址等は設けられていなかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕（第165図）

前述のとおり住居址自体の削平が進んでいて，住居址覆土も基底部を残しているにすぎない。残存する覆土は115・116号住居址とも炭化物や焼土粒を含む灰褐色土層であった。両住居址の前後関係は115号住居址の硬化面が116号住居址によって切断されていることから，115号住居址の廃絶埋没後，116号住居址が構築されたことが確認できた。出土遺物は115号住居址では4個体，116号住居址では7個体分と少ない。おそらく両住居址とも上部からの削平と撹乱によって，大半が失われたものと思われる。これらのなかで床面に出土したものは116号住居址の土師器高杯2個体（土器番号733・734）で，他の土器は覆土中に出土したものである。

〔115号住居址出土遺物〕（第166図）

出土土器4個体はすべて土師器である。726は甕口頸部破片で，頸部は外湾し胴部は球形に近いものであろう。727はおそらく壷の口頸部で口縁部は直線的に外反している。薄い造りの土器である。728は複合口縁壺の口縁部破片である。頸部の段は明瞭に屈折して口縁部は大きく外湾している。729は小型丸土器の口縁部破片である。口縁部は直線的で，薄く仕上げられている。



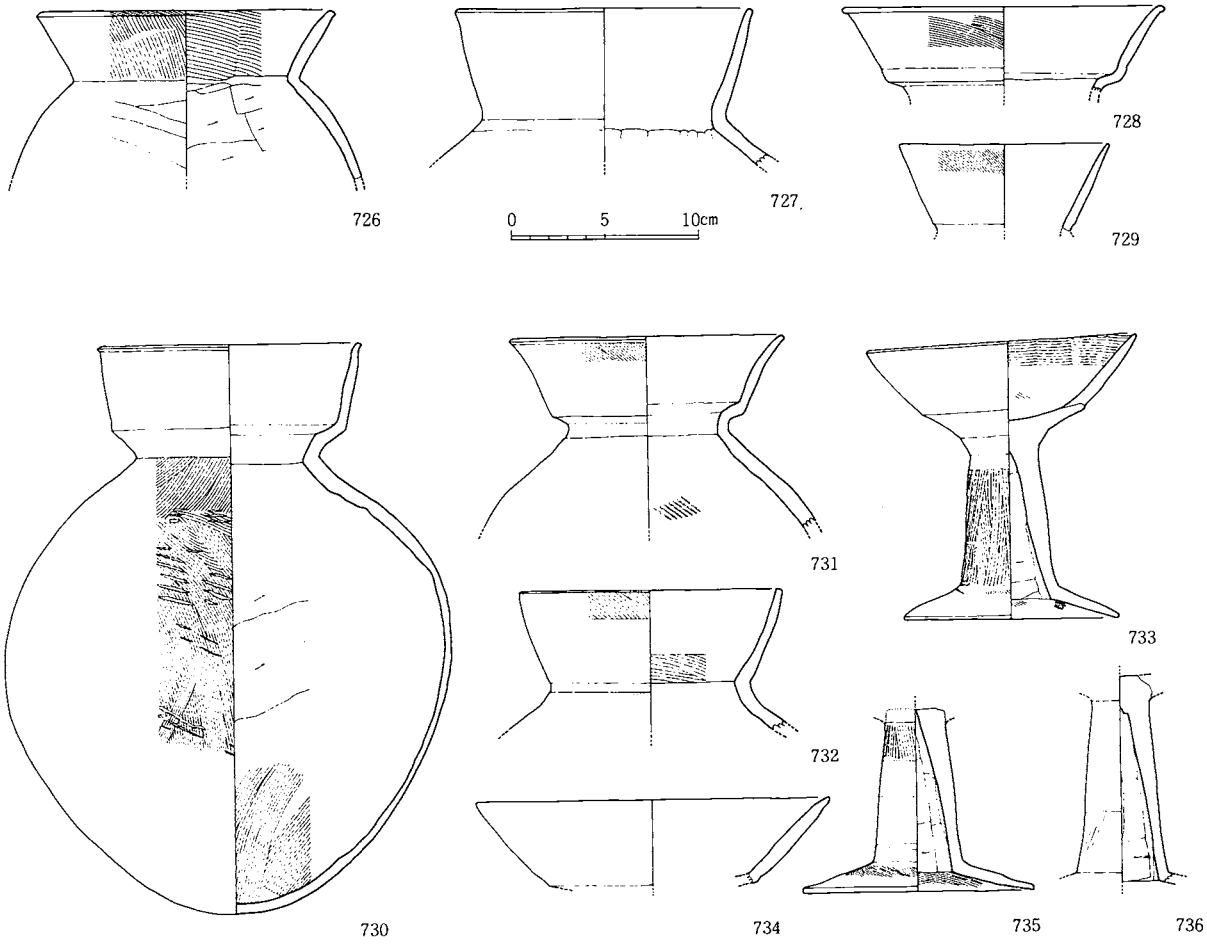
第165図　上の原115・116号住居址

〔116号住居址出土遺物〕（第166図）

730は複合口縁壷でほぼ完形に復原できた。頸部は強くくびれて明瞭な段を有し，口縁部は直立気味に立ち上がる。胴部の最大径は中位にあるが，やや長胴気味で底部は丸底となる。胴部外面は細かな右下がりのタタキ目のあと，刷毛目が施されている。また内面では底部に刷毛目，胴部中位から頸部にかけてはヘラ削りが施されている。731も複合口縁壷で，口縁部は730のそれに比較して大きく外湾気味に開いている。器面は内外面とも磨滅しているが，内面にわずかに粗い刷毛目が認められる。732は甕口頸部破片で口縁部は内湾して立ちあがる。733～736は高杯で，734は完形品に近く復原出来たものである。733の高杯は口径に対して器高が高く，柱状部と裾部との境は明瞭で，柱状部はわずかに脹らみをもっている。735の高杯脚部も733によく類似したものである。736の柱状部はさらに細く高くなっている。

上の原117号住居址（第167図・上）

115・116号住居址と同様C－0区に位置している。住居址は南側を凹道によって，また住居址全体を4条の耕作溝によって撹乱されている。したがって住居址の規模は中軸線（C－D）線上の長さ3.63mのみ測ることが出来た。壁高は北壁では最大0.25mであったが，他の2壁ではかなり削平を受けていて，とくに西壁では数cmを残しているにすぎなかった。長軸方向は床面の残存状態からA－B線上になるだろう。このように仮定すると住居址の長軸方位はN－8°－Wとなる。床面には壁沿いを除く広い範囲に硬化面が認められたが，柱穴・炉址等は検出出来なかった。



第166図　上の原115・116号住居址出土土器

住居址覆土は炭化物の細粒を含む灰褐色土層で，床面直上では焼土を含む炭化物を主体とした暗褐色土層が厚く堆積した部分が認められた。おそらく火災により焼失したものであろう。出土遺物は土師器壷１個体(土器番号737)で，覆土中に含まれていたものである。

〔出土遺物〕(第168図)

737は中型壷で胴部以下を欠失している。口縁部は内湾して立ちあがり，胴部は球形に近いものであろう。全体的に薄い造りの土器である。

上の原118号住居址(第167図・下)

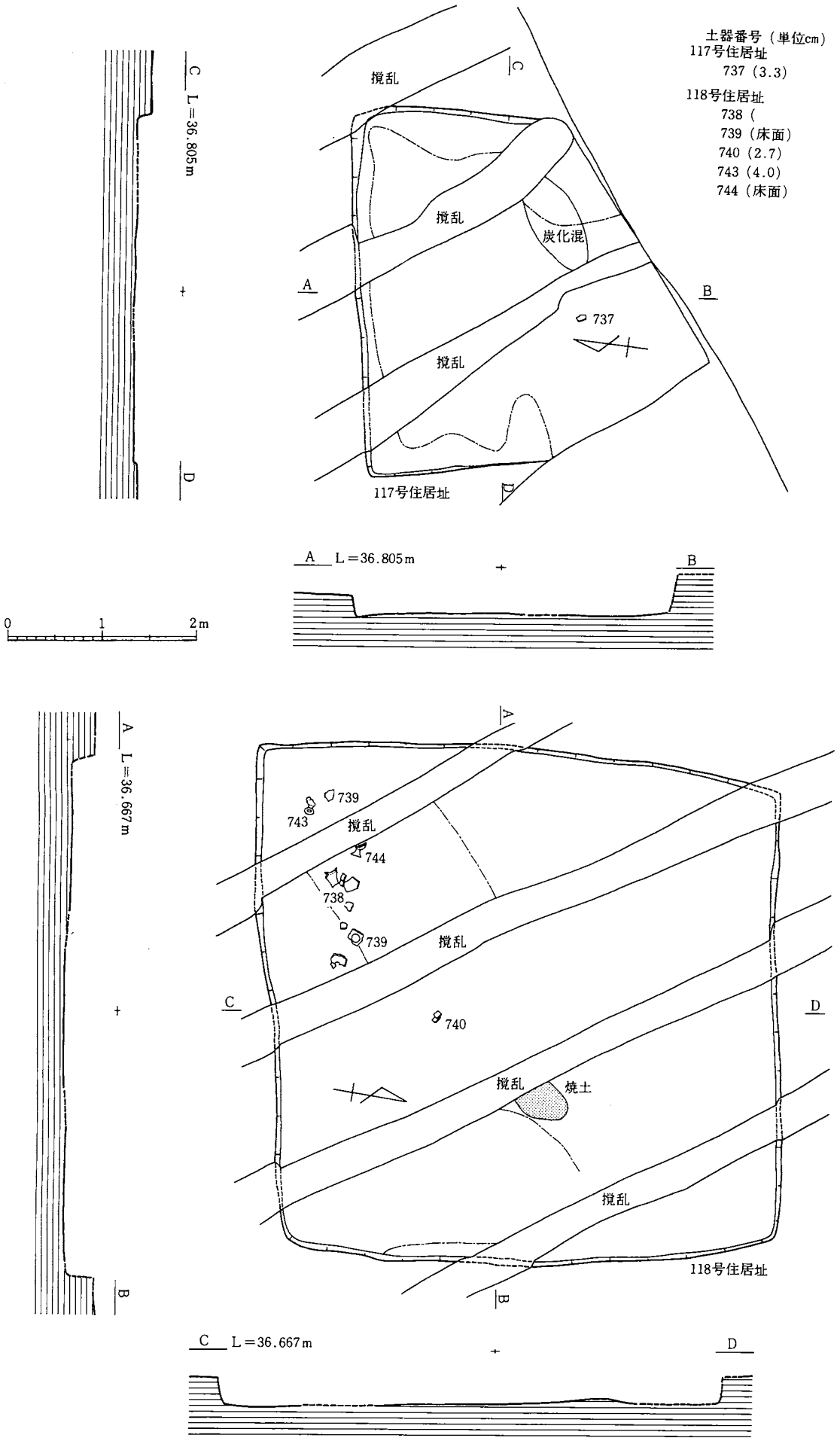
Ｅ－０区にあり，調査区の最も北側に位置する住居址である。住居址の規模は長軸(Ａ－Ｂ)線上で約5.40m，短軸(Ｃ－Ｄ)線上で約5.35m，床面積約26.5m²であった。平面プランは東西にやや長いがほぼ正方形に近い。長軸方位はＮ－81°－Ｅであった。 住居址は４条の耕作溝によって撹乱され，この部分の覆土・床面は失われている。壁高は南壁で最大0.30m残し，床面の東壁寄りと南西部隅の２ケ所に硬化面が認められた。また床面には柱穴・炉址等の施設は設けられていなかった。

〔住居址覆土・遺物出土状態〕(第167図)

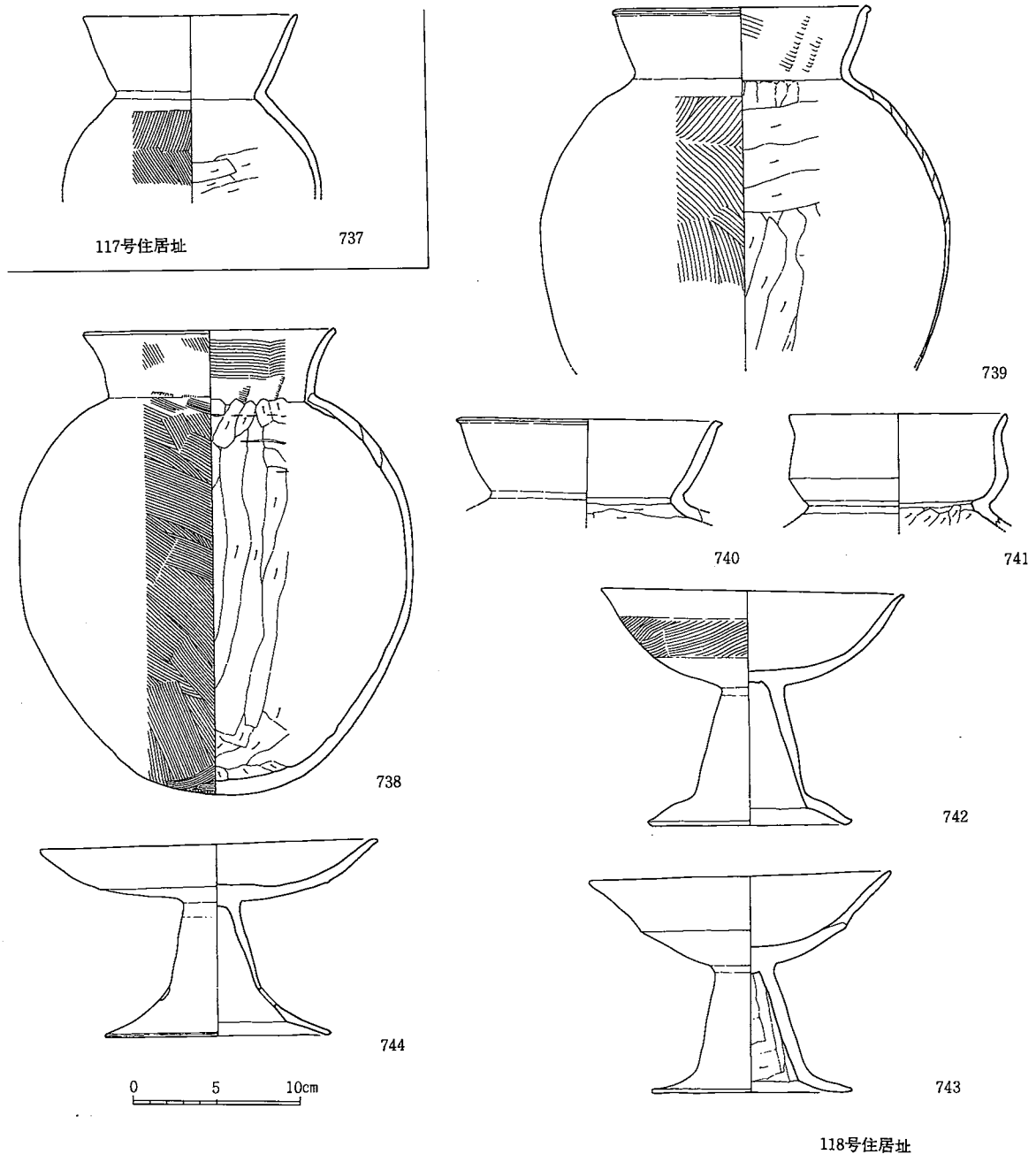
住居址覆土は炭化物・焼土粒を多く含む灰褐色土層で，覆土下部に移行するにしたがって，炭化物・焼土の量が増加していた。とくに床面中央部の西側には焼土塊が厚く堆積していた。出土遺物は土師器のみで計13個体分が出土したが，細片も多く図示出来たのは７個体である。13個体の中で床面に出土したものは739の甕と744の高杯の個体で他の11個体は覆土各層から出土したものである。

〔出土遺物〕(第168図)

738の甕は強くくびれた頸部から口縁部は外湾して立ちあがる。胴部の張りは強く，底部は平底気味の丸底である。739の甕の胴部は738によく類似しているが，口縁部がやや内湾気味に立ち上がり，端部で外方へ小さくつまみ出されている。この２つの甕は調整・仕上げの手法が粗雑で器面の凹凸が著しい。したがって内面のヘラ削りも全体にはいきとどかず，粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残されている。740も甕の口縁部破片である。口縁部の形態は739によく類似している。741は壷の口頸部破片である。頸部は強くくびれて外反して屈折している。この屈折部外面には不明瞭ではあるが１条の稜が巡っている。さらに屈折部から口縁部は内傾して立ちあがり端部で再び外側へ屈折し外反している。この類の壷は101号住居址にも１個体(土器番号629)出土している。742～744はいずれも高杯でほぼ完形に復原できた。742は杯部が扁平な半球形状を呈し，通常中位の接合部外面にみられる段は認められない。脚柱状部はやや脹らみを持ち，裾部は内湾気味に開いている。柱状部と裾部との屈折部内面には明瞭な稜がめぐる。734の杯部は中位の段がわずかに残っていて，段から口縁部はやや外湾気味に大きく開いている。脚柱状部は742と同様脹らみをもつが，裾部は反対に外湾気味に開いている。744は杯部が浅い皿状を呈し，脚柱状部は下位へ移行するにしたがってラッパ条に開き，裾部でさらに大きく開いている。柱状部下位の２ケ所に円形の透かしが穿たれている。



第167図　上の原117・118号住居址



第168図　上の原117・118号住居址出土土器

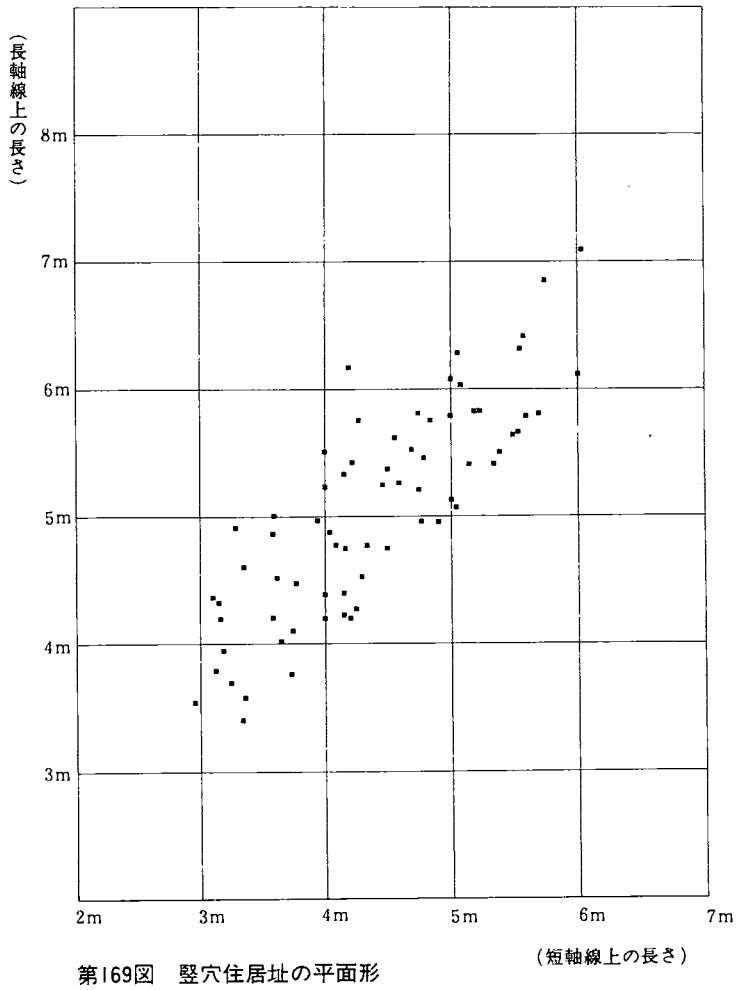
第Ⅲ章　まとめ

前章では昭和53・54年度の調査に於いて検出した遺構について述べてきた。出土遺構及び遺物は膨大な数にのぼった。これらの調査成果からは，集落研究の上で数多くの重要な視点を与えるものがあった。基本的な問題としては竪穴住居の平面形・規模・長軸方向・柱穴配置・炉址・周溝の有無などの構造的特色を明らかにし，さらに出土遺物とくに土器の編年を基礎とした，集落の変遷の姿を検証してゆかなくてはならない。しかし，報告書作成期間の大半を出土遺物の整理に追われたために，調査成果の詳細な分析を行うにまで至らなかった。積み残した多くの問題は，改めて公表してゆかなければならない。ここでは検出した遺構・遺物について，項目ごとに整理しまとめにかえたい。

1．遺構

(1)　竪穴住居の平面形

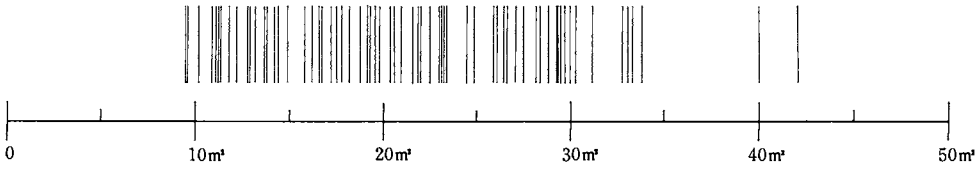
今回報告した古墳時代の竪穴住居の平面形は，基本的には方形プランを基調としていて，いわゆる円形や明瞭な隅丸方形といった形態のものは認められない。この方形プランを比較するとさらに細かな変化が認められる。第169図は住居平面形の中軸線上の長さについて，長軸方向を縦，短軸方向を横として表にまとめたものである。表の45度中分線上に近づけば正方形に近く，遠ざかれば長い長方形になる。正方形および極めてこれにちかい住居址は計20軒前後を数えるが，とくに住居の規模による集中などはみられず，ほぼまんべんなくみられる。したがって住居規模と平面形との間には法則的なものはみとめられないようである。またもっとも長い長方形プランは，短軸線上の長さを１とすると，最大のものは28号住居址の約1.47倍であった。



第169図　竪穴住居址の平面形

(2) 竪穴住居の規模

住居の規模を比較するための一つの方法として床面積を算出した。これらをまとめたものが第170図である。最大で113号住居址の42.1m²で，最小のものは94号住居址の9.5m²であった。特に40m²以上の大型の住居である９号・113号の２軒を例外とすると，34m²以下から9.5m²までのものが，切れ間なくつづいていて，明瞭な規格を示すようなまとまりは認められない。あえて取り出せば11m²，23m²，29m²前後に他に比較して集合が認められる。さらに数多くの住居を計測することにより，明瞭な傾向が確かめられるはずであり，このことと出土遺物による年代観を加味することにより，住居の規模による変遷過程が明らかになるものと考えられる。



第170図　竪穴住居址の床面積

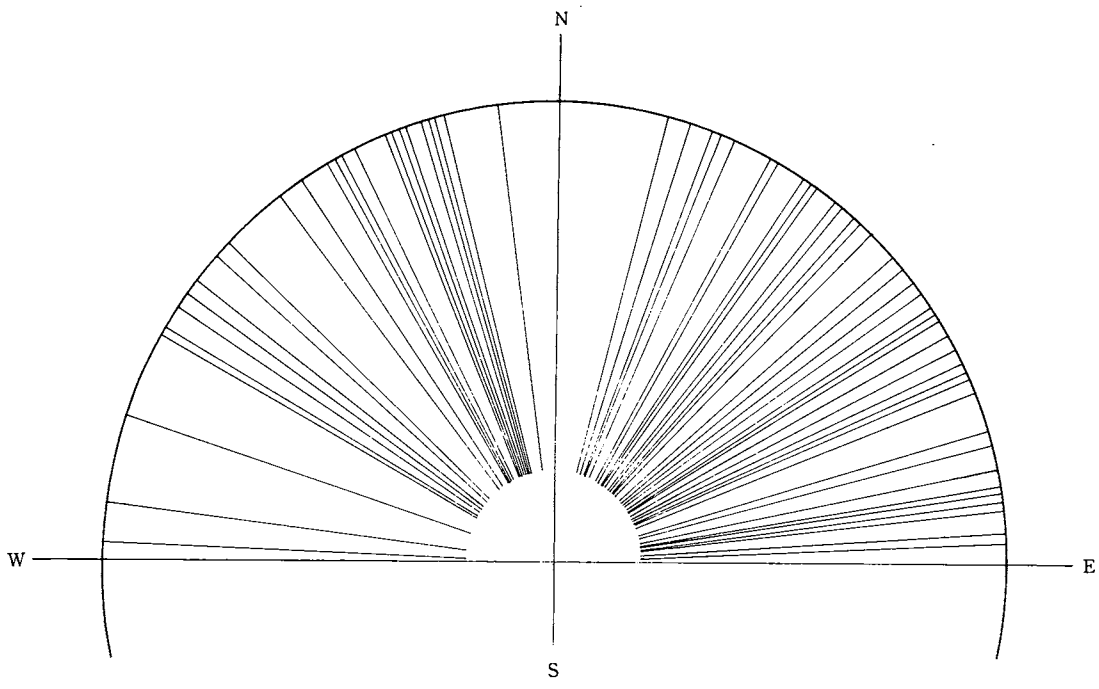
(3) 竪穴住居の長軸方位

住居平面形は一部のものを除くと，いずれかの方向に長い長方形を呈している。この長辺に沿う中軸線上の方位をまとめたものが第171図である。先に『上の原遺跡II』では住居壁に竈を設けた住居址では，竈の中心部を通る中軸線上を主軸として比較した。しかし，竈出現以前の竪穴住居における方向性については，遺跡の地形的環境による風向き等には直接的には影響を持たないと思われるが，集落の単位を把握する場合の一つの指標となる可能性があることが予測される。長軸方位を計測出来た85軒の住居址を大まかに観察すると，長軸が南北を指すものは皆無で，これを中心とした部分は他と比較して大きな空白が認められる。したがって，全体としては長軸方向が東側に振れるグループと西側に振れるグループとに二分することができる。数の上では東側に振れるものが多くを占めている。また東側に振れるグループが真東（東西）に至るまでほぼ切れ間なく認めるのに対して，西側ではN－45°－WおよびN－65°－W付近の空白部分を境として，二つないし三つの小グループに分けることができる。

(4) 竪穴住居の柱穴配置

本遺跡の住居址の大多数は柱穴を持たないか，柱穴あるいは柱穴様のものが検出出来ても，配列が不規則なもので占められていた。これらのなかで，整然とした柱穴配列がみとめられたものは，わずかに８軒にすぎない。このうち４本柱のものは５号・31号・71号・75号・81号・85号・86号住居址の７軒で，２本柱は98号住居址の１軒であった。さらに不規則ではあるが４本柱をもつものとして４号・65号・90号の３軒，同様に２本柱のものは１号・49号・82号の３軒であった。総数90軒のなかで「疑４・２本柱」を加えても14軒であり，全体の実に15%強にすぎないという結果を得た。明らかに踏み固められた床面ないし炉址等を有すに

もかかわらず，柱穴を持たない大半の竪穴のすべてについて住居址とするには，なおいくつかの論証過程を踏まなくてはならない。現状では従来多くの遺跡で認められる４本柱や２本柱を持つ上屋構造の他に，竪穴の外側に柱穴を設けるような構造を想定すべきであろう。しかしながらこうしたことを証明する遺構を検出することは出来なかった。



第171図　竪穴住居址の長軸方向

(5)　炉址

住居址全体の中で炉址が設けられていたのは，16軒に過ぎない。いまこれらを列記すると，２号・４号・５号・６号・19号・31号・43号・71号・75号・78号・80号・81号・82号・85号・86号・87号である。16軒のうち，実に９軒までが(4)で述べた４本ないし２本柱となるような柱穴配置をもったものである。したがって整然とした柱穴配列を持った住居には，かなりの確率で炉址が設けられたことを物語っている。炉址を有するものでは例外なく床面の一ケ所に見られる。しかも床面の中央部からやや一方に偏った位置に設けられ，４本柱のものではいずれか２本の柱のほぼ中央部に位置する例が認められる。

炉址の平面形は円形ないし楕円形のものから不整形なものまであり，断面形は浅い「U」字形をなす例が多い。すべて地床炉であり，石組や粘土塊，土器等を転用したものは認められなかった。

(6)　貯蔵穴・周溝等

貯蔵穴であるか否かを判定することは，炭化した植物遺体等の有無が重要な決め手となるが，ここでは通常の柱穴の規模や形態と異なり，床面での位置関係などから，柱穴以外の機能を持つ施設を指している。類例は19号・46号・84号の３軒に過ぎない。３例とも壁面に沿った床に設けられている。

また周溝を巡らせた住居址は皆無で，床面中央部分に比較して，四壁に沿った部分が僅かに深くなる例が

みとめられるに過ぎない。遺跡全体として明瞭な周溝を持つような構造の住居址は成立することは無かったものと考えられる。

2．遺物

出土遺物の大部分は日常雑器としての土器である。膨大な量の土器は，一部住居址廃絶後の埋没過程での堆積土中にはわずかに須恵器片が含まれる例が多々みられたものの，これらの土師器が概ね須恵器出現以前ないし須恵器導入前後の所産であったことを，物語っている。これら多量の土師器の多くは，住居の廃絶過程で自然的に流入したか，なんらかの要因によって人為的に廃棄されたものである。したがって住居使用時や住居廃絶時の姿をそのまま遺したものは，極めて希有な例と言わなければならない。こうした点を充分考慮したうえで，前章では各住居址の〔遺物出土状態〕中では，これらの関係について極力明示することに努めた。

土器以外の遺物では，鉄器及び石器がある。鉄器には鉄鏃・刀子・ヤリガンナ・手鎌が出土した。しかし住居址総数に対する鉄器保有数は極めて微々たるものであり，大部分の住居址には鉄器の出土を見なかった。同時代の墳墓である塚原古墳群―とくに方形周溝墓を中心として―における豊富な鉄器の副葬という現象との比較において，隔絶した感がある。おそらく鉄器の所有形態に起因するものと考えられる。石器は総て砥石であった。石材としては砂岩・粘板岩に加えて天草地方に産する縞状模様を持つ砂岩を使用したもの等が認められた。とくに産出地が明らかなこれ等の石材については当時の交易の一端を物語るものとして，注目すべき問題であろう。その他の出土遺物としては滑石製勾玉1点が出土したが，これら装身具類も鉄器にもまして出土数は限られている。

以上遺構・遺物についてその概略を整理した。今回の報告のなかで最も重要であり，且つ本地域における考古学上の重要な課題は，上の原集落と塚原古墳群とのかかわりについて肉薄することである。しかしながら本報告のなかでは，時間的な制約によって，土器編年に基づく住居址相互の関係を分析し，さらに単位集落の抽出および変遷などもっとも重要と思われる問題については何等触れることが出来なかった。これらの課題については，今後機会あるごとにその責を果たさなければならない。

上の原遺跡出土土器計測表

単位：cm

住居址名	土器番号	種別	器種	口径	器高	胴部径	底径	備考（煮沸・彩色）
2号住居址	1	土師器	甕	18.8		22.9		
	2	〃	〃	17.5		25.8		煮沸痕
	3	〃	〃	15.9		25.2		煮沸痕
	4	〃	〃	17.4		25.4		煮沸痕
	5	〃	壺	15.2				赤色顔料塗布
	6	〃	〃					
	7	〃	小型丸底土器	9.4	7.3	9.1		煮沸痕
	8	〃	壺	19.0				
	9	〃	〃	16.4				
	10	〃	〃					
	11	〃	高杯	17.2				
	12	〃	〃	18.6				
	13	〃	〃				11.2	
	14	〃	〃				12.3	
3号住居址	15	土師器	甕	15.9		24.8		煮沸痕
	16	〃	〃	17.0		23.0		煮沸痕
	17	〃	〃	15.7		26.0		煮沸痕
	18	〃	〃	15.8				
	19	〃	〃	14.9				煮沸痕
	20	〃	高杯	20.3	17.4		15.5	赤色顔料塗布
	21	〃	〃	19.7				
	22	〃	〃				12.0	
	23	〃	〃				16.2	
4号住居址	24	土師器	甕	14.2		19.8		煮沸痕
	25	〃	〃	16.8	29.8	26.1		煮沸痕
	26	〃	〃	14.4	22.1	20.4		
	27	〃	杯	16.3	5.4			
	28	〃	〃	10.0	4.5			赤色顔料塗布
	29	〃	高杯	18.6				
	30	〃	〃				16.2	
	31	〃	〃				15.1	
5号住居址	32	土師器	甕	17.5		23.9		煮沸痕
	33	〃	〃	17.4		26.2		
	34	〃	〃	16.3		25.5		煮沸痕
	35	〃	〃	15.4		23.6		煮沸痕
	36	〃	〃	14.6	21.6	18.7		煮沸痕
	37	〃	壺	13.0	17.0	16.8		
	38	〃	甕	16.1				
	39	〃	壺	17.9				
	40	〃	小型丸底土器	9.8	8.8	9.4		
	41	〃	〃	9.8	11.2	11.6		
	42	〃	〃	10.4		13.0		
	43	〃	台付小型丸底土器					
	44	〃	高杯	21.1				
	45	〃	〃	18.5				
	46	〃	〃				12.7	
	47	〃	〃				12.9	
6号住居址	48	土師器	壺	20.3				
	49	〃	小型丸底土器	9.4	12.2	12.0		
	50	〃	鉢	10.6				
	51	須恵器	杯蓋					
	52	〃	高台付杯				6.9	
	53	〃	壺	6.5	4.8	7.9	5.4	
7号住居址	54	土師器	甕	15.2		20.4		煮沸痕
	55	〃	小型丸底土器			9.5		
	56	須恵器	杯蓋	15.3		2.3		
	57	土師器	杯	13.0	3.1			赤色顔料塗布
	58	須恵器	高台付杯				8.8	
11号住居址	59	土師器	甕	15.3				煮沸痕
	60	〃	〃	16.2		21.8		
	61	〃	〃	17.0		24.4		
	62	〃	〃	15.7		23.3		煮沸痕
11号住居址	63	土師器	壺	19.0				
	64	〃	小型丸底土器	9.2	10.3	10.0		
	65	〃	壺	12.9		15.9		
	66	〃	鉢	9.9	7.7	9.4		
	67	〃	杯	13.5	6.2			
	68	〃	〃	13.5	4.2			
	69	〃	高杯	20.1	14.9		14.6	
	70	〃	〃	18.8	16.1		14.4	
	71	〃	〃	18.6	15.7		14.4	
	72	〃	〃	16.9				
	73	〃	〃	18.4				
	74	〃	〃				12.9	
14号住居址	75	土師器	甕	17.9		26.0		煮沸痕
	76	〃	〃	16.7				
	77	〃	壺				9.5	
	78	〃	甕	29.3		35.3		
	79	〃	壺	10.8	14.9	14.6		
	80	〃	小型丸底土器			8.1		
15号住居址	81	土師器	甕	14.5		20.7		煮沸痕
	82	〃	〃	14.4		25.0		煮沸痕
	83	〃	〃	14.4				
	84	〃	高杯	16.5	11.0		10.6	
16号住居址	85	土師器	甕	18.0	25.6	22.2		煮沸痕
	86	〃	〃	19.2				
	87	〃	〃	16.7		21.4		煮沸痕
	88	〃	壺				7.8	
	89	〃	〃	11.1	13.0	13.3		
	90	〃	小型丸底土器			8.6		
	91	〃	〃			9.5		
	92	〃	杯	14.1	4.4			
	93	〃	〃	13.1	3.2		6.9	赤色顔料塗布
	94	〃	高杯	17.9	12.6		11.3	
17号住居址	95	土師器	杯	14.4	5.1			
	96	〃	〃	14.4	6.5			
18号住居址	97	土師器	甕	17.0		28.1		
	98	〃	〃	19.7				
	99	〃	〃	15.6	26.9	23.5		煮沸痕
	100	〃	〃	17.0		23.4		
	101	〃	〃	16.9	26.2	22.9		煮沸痕
	102	〃	壺	16.7		25.3		
	103	〃	小型丸底土器	10.5	8.8	9.0		
	104	〃	〃	9.7	9.0	10.4		
	105	〃	〃	10.6	9.7	10.7		
	106	〃	高杯	17.5	12.7		11.2	
	107	〃	甕	23.2				
	108	〃	〃	16.8				
	109	〃	〃	26.8				
	110	〃	高杯	18.4				
19号住居址	111	土師器	甕	14.5	24.9	22.2		煮沸痕
	112	〃	〃	17.1		25.7		煮沸痕
	113	〃	〃	16.1	28.8	25.6		煮沸痕
	114	〃	〃	15.8	28.9	26.0		
	115	〃	〃	16.8	28.5	26.8		
	116	〃	〃	15.6	28.1	25.7		
	117	〃	〃	15.3	27.0	23.0		煮沸痕
	118	〃	〃	14.8	26.0	23.4		煮沸痕
	119	〃	〃	15.0		23.1		煮沸痕
	120	〃	〃	14.9		24.5		煮沸痕
	121	〃	〃	14.8		25.6		煮沸痕
	122	〃	〃	13.8		22.8		煮沸痕
	123	〃	〃	13.5	20.6	19.0		煮沸痕
	124	〃	鉢	35.5	22.3	32.6		

上の原遺跡出土土器計測表

単位：cm

住居址名	土器番号	種別	器種	口径	器高	胴部径	底径	備考（煮沸・彩色）
19号住居址	125	土師器	壺	19.6				
	126	〃	〃	14.9	30.5	26.0		
	127	〃	小型丸底土器	5.0	7.1	7.9		
	128	〃	〃	9.5	10.2	10.2		
	129	〃	〃	9.8	9.8	10.5		
	130	〃	〃	9.8	9.5	10.4		
	131	〃	〃	7.7	9.3	9.9		
	132	〃	〃	8.6	8.7	9.2		
	133	〃	〃	8.0	10.0	10.1		
	134	〃	〃	7.7	10.0	10.0		
	135	〃	〃	9.2	11.9	13.2		煮沸痕
	136	〃	壺	11.6	14.0	14.2		
	137	〃	〃	11.7	15.4	15.7	5.7	
	138	〃	鉢	11.2	7.2	12.1		
	139	〃	〃	11.8	6.3	10.4		
	140	〃	杯	12.9	5.7			
	141	〃	〃	12.0	5.8			
	142	〃	〃	15.0	5.2			
	143	〃	〃	10.4	3.6			
	144	〃	〃	12.9	3.8			
	145	〃	〃	12.2	5.2			
	146	〃	高杯	13.2				
	147	〃	〃	17.3	14.1		13.4	
	148	〃	〃	17.9	13.9		14.0	
	149	〃	〃	18.9	14.2		14.0	
	150	〃	〃	18.9	13.5		13.5	
	151	〃	〃	18.2	14.5		12.3	
	152	〃	〃	19.1	15.0		14.0	
	153	〃	〃	19.5	12.6		13.9	
	154	〃	〃	18.4				
	155	〃	〃				11.5	
20号住居址	156	土師器	甕	13.9	23.3	21.5		煮沸痕
	157	〃	〃	17.0		23.0		
	158	〃	壺	15.9				
	159	〃	甕	15.0				
	160	〃	〃	13.6				
	161	〃	壺	12.2				
	162	〃	〃			15.7		
	163	〃	小型丸底土器			12.0		
	164	〃	鉢	10.1		11.6		
	165	〃	杯	12.9	4.8			
	166	〃	高杯	17.7	13.5		13.3	
	167	〃	〃	17.9	14.0		12.2	
	168	〃	〃	20.5	15.7		13.2	
	169	〃	〃	19.0				
	170	〃	〃				14.0	
	171	〃	〃				12.1	
21号住居址	172	土師器	甕	16.3		24.8		煮沸痕
	173	〃	〃	16.9		26.8		煮沸痕
	174	〃	〃	16.0				
	175	〃	〃	17.0				煮沸痕
	176	〃	〃	15.4		24.1		煮沸痕
	177	〃	〃	14.6				
	178	〃	〃	13.8		21.4		
	179	〃	〃	15.9				煮沸痕
	180	〃	〃	16.5				煮沸痕
	181	〃	壺	15.8				
	182	〃	〃	16.7	35.5	30.1		
	183	〃	〃	13.8				
	184	〃	〃	14.6				
	185	〃	〃	16.7				
	186	〃	小型丸底土器	9.6		10.4		
21号住居址	187	土師器	小型丸底土器			9.2	2.5	
	188	〃	〃			8.7		
	189	〃	台付小型丸底土器					
	190	〃	高杯				11.9	
	191	〃	壺	9.5		15.3		
	192	〃	〃	11.8		16.4		
	193	〃	杯	14.0	3.8			
	194	〃	〃	14.9	4.1			
	195	〃	高杯	18.0	15.2		13.4	
	196	〃	〃	26.4	20.5		18.3	
22号住居址	197	土師器	壺	16.0				
	198	〃	〃	15.6				
	199	〃	小型丸底土器	9.2	9.8	10.6		
	200	〃	高杯				14.0	
	201	〃	甑					
23住居号址	202	土師器	壺			11.0	5.1	
	203	〃	高杯	20.2				
	204	〃	〃	18.2				
25号住居址	205	土師器	甕	16.2		25.2		煮沸痕
	206	〃	〃	17.8				
	207	〃	〃	14.5				
	208	〃	〃	16.4				
	209	〃	〃	14.0				
	210	〃	鉢	14.2		14.2		煮沸痕
	211	〃	小型丸底土器	8.3				
	212	〃	〃			9.4		
	213	〃	〃			8.4		
	214	〃	瓦泉			10.4		
	215	〃	壺	13.9	17.0	15.0		
	216	〃	杯	12.2	4.9			
	217	〃	鉢	8.9	16.4	11.2		
	218	〃	手づくね土器			5.4		
	219	〃	〃	5.0	4.0	5.8		
	220	〃	〃	6.4	5.0	7.1		
	221	〃	高杯	18.1				
	222	〃	〃			16.2		
26号住居址	223	土師器	甕	16.3				煮沸痕
	224	〃	〃	15.9				煮沸痕
	225	〃	〃	16.0		26.2		煮沸痕
	226	〃	台付壺					
27号住居址	227	土師器	甕	17.4	27.0	25.2		煮沸痕
	228	〃	〃	15.8				煮沸痕
	229	〃	〃	12.6		14.5		煮沸痕
	230	〃	小型丸底土器	7.9	9.0	9.0		
	231	〃	杯	13.4		13.8		
	232	〃	〃	13.2				
	233	〃	〃	17.8	5.4			
	234	〃	高杯	18.9				
	235	〃	〃				14.7	
28住居号址	236	土師器	甕	17.1				
	237	〃	小型丸底土器	10.1	11.6	10.9		
29号住居址	238	土師器	甕	14.3		22.7		煮沸痕
	239	〃	〃	16.0		23.9		煮沸痕
	240	〃	〃	16.9	24.8	25.0		煮沸痕
	241	〃	〃	16.5	31.2	27.4		煮沸痕
	242	〃	〃	15.2				
	243	〃	〃	16.0	26.1	24.4		煮沸痕
	244	〃	〃	15.3	24.8	23.1		煮沸痕
	245	〃	〃	22.6		24.6		
	246	〃	〃	22.0		21.2		
	247	〃	杯	11.9	5.0			
	248	〃	〃	12.8	4.8			

上の原遺跡出土土器計測表

単位：cm

住居址名	土器番号	種別	器種	口径	器高	胴部径	底径	備考（煮沸・彩色）
29号住居址	249	土師器	杯	10.9	4.0			
	250	〃	〃	13.4				
	251	〃	〃	12.1	4.8			
	252	〃	〃	12.2	4.8			
	253	〃	高杯	21.3	13.5		14.3	
	254	〃	〃	17.6				
	255	〃	〃	20.9				
	256	〃	〃	17.9				
	257	〃	〃	17.6				
	258	〃	〃	19.9				
	259	〃	〃				15.8	
	260	〃	〃				13.3	
	261	〃	〃				15.2	
31号住居址	262	土師器	甕	18.6		24.9		
	263	〃	壺					
	264	〃	〃	16.8				
	265	〃	高杯	19.0	13.9		13.9	
	266	〃	〃	17.7				
	267	〃	〃	18.8				
	268	〃	〃	19.2				
	269	〃	〃				13.4	
34号住居址	270	土師器	鉢	32.4				
	271	〃	壺	9.4		13.4		煮沸痕
	272	〃	杯	12.8	4.9			
	273	〃	〃	15.4		6.0		
	274	〃	〃	18.4		6.1		
35号住居址	275	土師器	壺	13.8				煮沸痕
	276	〃	甕	17.8				
	277	〃	〃	24.4		22.8		
	278	須恵器	台付椀	16.0	6.2		9.4	
37号住居址	279	土師器	甕	16.5	29.3	25.1		煮沸痕
	280	〃	〃	14.9				
	281	〃	〃	12.0				
	282	〃	壺	12.2				
	283	〃	〃	13.9				
	284	〃	高杯	12.7				
	285	〃	器台				11.6	
	286	〃	小型丸底土器	10.9	10.0	9.4		
	287	〃	〃	9.4	7.6	7.8		
	288	〃	〃			8.8		
	289	〃	台付小型丸底土器			8.0	11.1	
	290	〃	高杯					
	291	〃	〃					
	292	〃	〃					
	293	〃	〃				13.8	赤色顔料塗布
	294	〃	〃				14.1	
	295	〃	〃				13.4	
	296	〃	〃				12.7	
	297	〃	〃				13.0	
38号住居址	298	土師器	甕	16.3		22.7		煮沸痕
	299	〃	〃	15.2				煮沸痕
	300	〃	〃	16.9		24.5		煮沸痕
	301	〃	壺	15.4				
	302	〃	高杯	18.1				
	303	〃	〃	15.7				
	304	〃	脚台				8.5	
39号住居址	305	土師器	甕	15.0	27.0	23.6		煮沸痕
	306	〃	〃	15.0	27.1	24.3		煮沸痕
	307	〃	〃	14.9	25.5	23.6		煮沸痕
	308	〃	〃	16.7				
	309	〃	〃	15.4				煮沸痕 赤色顔料塗布
	310	〃	〃	15.9				
39号住居址	311	土師器	甕	16.8		21.1		煮沸痕
	312	〃	〃	15.1		27.0		煮沸痕
	313	〃	杯	15.4	5.6			
	314	〃	壺			15.3		
	315	〃	高杯	18.8				
40住居号址	316	土師器	杯	13.0				
	317	〃	高杯	15.3	16.2		12.4	
41号住居址	318	土師器	甕	16.6		23.6		煮沸痕
	319	〃	〃	16.9	27.1	23.3		煮沸痕
	320	〃	〃	16.9				煮沸痕
	321	〃	壺	16.0				
	322	〃	甕	15.4				
	323	〃	杯	12.8				
	324	〃	高杯	19.9				
	325	〃	〃				13.6	
42号住居址	326	土師器	壺	10.1	13.6	14.7		
	327	〃	杯	13.8	5.9			
	328	〃	〃	14.6	5.9			
	329	〃	〃	13.8	6.8			
	330	〃	高杯	18.5				
43号住居址	331	土師器	甕	16.6	27.6	25.2		煮沸痕
	332	〃	〃	18.4	28.9	24.6		
	333	〃	〃	14.7	24.6	22.5		煮沸痕
	334	〃	〃	17.3				
	335	〃	〃	17.2				
	336	〃	〃	15.6		22.4		
	337	〃	壺	13.2		17.7		煮沸痕
	338	〃	〃	11.2		14.5		
	339	〃	〃	12.9		15.9		
	340	〃	小型丸底土器			10.2		
	341	〃	高杯	20.3	16.2		15.1	
	342	〃	〃	11.6	14.3		13.3	
	343	〃	〃	20.5				
	344	〃	〃	18.4				
	345	〃	〃	18.0				
	346	〃	〃	16.2				
	347	〃	〃				14.0	
	348	〃	〃				14.6	赤色顔料塗布
	349	〃	〃				12.4	
	350	〃	〃				14.8	
	351	〃	〃				15.4	
45号住居址	352	土師器	甕	17.3				
	353	〃	〃	16.7		23.0		
	354	〃	〃	16.3				
	355	〃	〃	17.9				
	356	〃	〃	16.9				
	357	〃	壺	18.5				
	358	〃	小型丸底土器	10.2				
	359	〃	高杯				12.2	
46号住居址	360	土師器	甕	16.7	25.0	22.8		煮沸痕
	361	〃	〃	14.9	26.8	21.9		
	362	〃	〃	16.5				
	363	〃	〃	17.2		22.6		煮沸痕
	364	〃	〃	16.2		22.4		煮沸痕
	365	〃	〃	16.0				煮沸痕
	366	〃	〃	16.2		21.9		煮沸痕
	367	〃	壺	16.7				
	368	〃	〃	15.6				
	369	〃	甕	19.6	35.9	28.0		煮沸痕
	370	〃	〃	16.3		23.1		煮沸痕
	371	〃	〃	14.9				
	372	〃	〃	12.9	18.6	17.2		煮沸痕

上の原遺跡出土土器計測表

単位：cm

住居址名	土器番号	種別	器種	口径	器高	胴部径	底径	備考（煮沸・彩色）
46号住居址	373	土師器	高杯	16.4	13.0		12.6	
	374	〃	〃	17.0				
	375	〃	〃	15.0	13.6		10.6	
	376	〃	〃	11.9				
	377	〃	〃				11.7	
48号住居址	378	土師器	甕	16.8		23.3		
	379	〃	壺	19.1				
	380	〃	〃	17.8				
	381	〃	〃					
	382	〃	高杯	17.5	13.8		12.1	
49号住居址	383	土師器	甕	16.7		25.1		煮沸痕
	384	〃	〃	17.0	30.5	26.1		煮沸痕
	385	〃	〃	15.6		25.0		煮沸痕
	386	〃	〃	15.6				
	387	〃	〃	14.5		24.3		煮沸痕
	388	〃	〃	15.8	27.5	25.6		
	389	〃	〃	14.3		23.7		煮沸痕
	390	〃	〃	15.1				煮沸痕
	391	〃	〃	14.5	23.0	19.6		煮沸痕
	392	〃	壺	15.8		23.9		
	393	〃	〃	11.2	17.0	16.7		
	394	〃	小型丸底土器	6.9	8.3	7.6		赤色顔料塗布
	395	〃	〃	7.4	8.5	9.4		
	396	〃	杯	12.9	3.6			
	397	〃	高杯	20.0	14.3		14.1	
	398	〃	〃	15.8	15.8		13.9	
51号住居址	399	土師器	小型丸底土器			9.6		
	400	〃	杯	13.0	4.3			
	401	〃	高杯	17.9	14.3		14.0	
	402	〃	〃	20.3				
	403	〃	〃	16.3				赤色顔料塗布
	404	〃	〃	14.9				
58住居号址	405	土師器	壺					
	406	〃	台付壺				13.6	
59号住居址	407	土師器	高杯	17.9				
67号住居址	408	土師器	甕	17.3				
	409	〃	〃	16.4				
	410	〃	〃	18.1				煮沸痕
	411	〃	壺	18.1	31.9	28.3		
	412	〃	〃	12.2				
	413	〃	小型丸底土器	10.1				
	414	〃	鉢	21.6				
	415	〃	杯	14.1	7.1	13.7		
	416	〃	〃	13.5	5.4			
	417	〃	〃	12.7	5.3			
	418	〃	高杯	14.4				
	419	〃	〃	18.2				
	420	〃	〃	18.1				
	421	〃	〃	19.9				
	422	須恵器	杯蓋	14.5	4.2			
	423	〃	甕					
70号住居址	424	土師器	甕	16.5		21.9		
	425	〃	〃	17.2				
	426	〃	〃	16.2		22.3		煮沸痕
	427	〃	〃	19.0	26.2	24.6		煮沸痕
	428	〃	〃	17.9		26.2		煮沸痕
	429	〃	壺	12.7	19.5	17.9		煮沸痕
	430	〃	〃	16.0				
	431	〃	〃	14.3	22.0	19.3		
	432	〃	〃	20.0	37.3	29.0		
	433	〃	小型丸底土器	10.1		8.1		
	434	〃	〃	8.5	10.0	8.3		
70号住居址	435	土師器	小型丸底土器	9.4		9.0		
	436	〃	〃	8.1	8.6	9.0		
	437	〃	壺	16.9				
	438	〃	甕	14.6	25.4	21.3		
	439	〃	高杯	17.3	13.6		11.9	
	440	〃	〃	16.8	14.9		12.4	
	441	〃	〃	20.1	14.0		11.8	
71号住居址	442	土師器	甕	14.8		25.1		
	443	〃	壺	17.8		23.9		
	444	〃	〃				12.3	
	445	〃	小型丸底土器	9.9	9.4	9.1		
	446	〃	〃	7.3	9.6	9.8		
	447	〃	杯	13.9	4.2			
	448	〃	高杯	19.7	13.5		14.4	
	449	〃	〃	17.3				
	450	〃	〃	18.4				
	451	〃	〃	19.9				
	452	〃	〃				15.0	
	453	〃	〃				14.4	
72号住居址	454	土師器	甕	14.9	31.3	25.4		
	455	〃	〃	17.4				煮沸痕
	456	〃	〃	13.9				
	457	〃	〃	17.4				
	458	〃	〃	17.0				
	459	〃	〃	16.8				
	460	〃	壺	16.1				
	461	〃	〃	13.2		17.6		煮沸痕
	462	〃	〃	15.9				
	463	〃	小型丸底土器	8.8		13.0		
	464	〃	〃	9.4		11.4		
	465	〃	鍋	10.0	9.9	9.9		
	466	〃	高杯	19.5				
	467	〃	〃	16.6				
	468	〃	〃				13.8	
73号住居址	469	土師器	甕	14.3				
	470	〃	〃	16.4		22.0		煮沸痕
	471	〃	〃	15.7		24.9		煮沸痕
	472	〃	〃	17.1		27.1		煮沸痕
	473	〃	鉢	13.7	8.7	13.4		
	474	〃	小型丸底土器	10.4	11.6	11.8		
	475	〃	高杯	17.0	13.0		13.0	
	476	〃	〃	20.6	14.4		12.5	
74号住居址	477	土師器	壺					
	478	〃	甕					
	479	〃	小型丸底土器	9.4	8.0	7.4		
	480	〃	〃	8.1	7.4	7.1		
	481	〃	高杯	17.7				
75号住居址	482	土師器	甕	13.4		21.2		煮沸痕
	483	〃	〃	16.9				
	484	〃	〃	15.5				
	485	〃	〃	18.7				
	486	〃	〃	20.1				
76住居号址	487	土師器	甕	16.1				煮沸痕
	488	〃	〃	16.8				
77号住居址	489	土師器	甕	14.6				
	490	〃	〃	16.9		26.9		煮沸痕
	491	〃	〃	15.3		21.5		
	492	〃	壺	15.9				
	493	〃	〃	16.1		22.4		
	494	〃	〃	19.7		29.2		
	495	〃	小型丸底土器	9.5				
	496	〃	壺	10.8	12.4	13.2		

上の原遺跡出土土器計測表

単位：cm

住居址名	土器番号	種別	器種	口径	器高	胴部径	底径	備考（煮沸・彩色）
77住居址	497	土師器	高杯	20.2				
	498	〃	〃			12.0		
78号住居址	499	土師器	甕	15.2	23.1	19.8		煮沸痕
	500	〃	〃	14.8	23.4	19.7		煮沸痕
	501	〃	〃	15.5	22.2	19.0		煮沸痕
	502	〃	〃	16.2	25.4	20.4		煮沸痕
	503	〃	〃	16.6	23.9	20.9		煮沸痕
	504	〃	〃	13.2		19.8		煮沸痕
	505	〃	〃	19.0	28.9	24.7		煮沸痕
	506	〃	〃	15.8		22.9		煮沸痕
	507	〃	杯	11.0	15.3			
	508	〃	小型丸底土器	11.6	10.5	10.8		
	509	〃	〃	10.7		11.4		
	510	〃	壺	12.0	13.6	13.3		煮沸痕
	511	〃	〃	12.6	14.7	15.4		煮沸痕
	512	〃	高杯	21.6	14.3	14.5		
	513	〃	〃	17.7	14.0	12.0		
	514	〃	〃	17.3	15.9	12.5		
	515	〃	〃	18.1	11.3	13.0		
	516	〃	壺	17.0	35.9	29.7		煮沸痕
	517	〃	〃	18.3	36.2	29.2		
	518	〃	〃	13.4		24.5		
	519	〃	〃	22.6	41.1	32.9		
80号住居址	520	土師器	壺	11.1	17.1	17.0		煮沸痕
	521	〃	小型丸底土器	9.1	11.0	11.2		
	522	〃	鉢	27.0	10.3	23.8		
	523	〃	高杯	19.8				
	524	〃	〃			13.3		
81号住居址	525	土師器	甕	19.6				
	526	〃	〃	15.6				
	527	〃	高杯	18.9				
	528	〃	〃	18.5				
	529	〃	〃	19.0				
	530	〃	〃				13.6	
	531	〃	〃	19.5				
82号住居址	532	土師器	甕	14.4				
	533	〃	〃	17.2				煮沸痕
	534	〃	小型丸底土器			11.0		
	535	〃	〃			11.3		
	536	〃	高杯					
	537	〃	〃				11.4	
	538	〃	〃				11.2	
83住居址	539	土師器	壺	13.0	20.4	19.0		
	540	〃	小型丸底土器			9.5		
	541	〃	高杯	16.6				
84号住居址	542	土師器	甕	15.6		23.1		
	543	〃	高杯	18.5	11.8		13.0	
	544	〃	〃	19.0				
	545	〃	〃					
	546	〃	〃					
85住居址	547	土師器	脚付小型丸底土器	8.5	12.0	8.0	9.6	
	548	〃	壺	16.7		27.8		
86号住居址	549	土師器	甕					
	550	〃	壺	12.1	16.7	15.9		
	551	〃	小型丸底土器	10.2	10.6	10.1		
	552	〃	壺	12.2				
	553	〃	杯	12.2	5.5			
	554	〃	高杯				12.2	
	555	須恵器	壺				3.8	
	556	〃	甕					
87住居址	557	土師器	甕	10.3		15.6		
	558	〃	〃	16.6		23.4		
87号住居址	559	土師器	甕	15.7	26.2	22.4		
	560	〃	〃	25.0		25.6		煮沸痕
	561	〃	壺	11.3	15.3	15.3		煮沸痕
	562	〃	高杯	15.0	9.2		10.4	
	563	〃	〃	17.8				
	564	〃	〃	18.5				
	565	須恵器	杯	12.3	4.1			
	566	〃	〃	12.2	3.9			
住居址	567	土師器	壺	16.2				
90住居址	568	土師器	甕	16.1		21.4		
	569	須恵器	〃					
92号住居址	570	土師器	甕	15.0	27.2	22.4		
	571	〃	〃	15.3		23.8		
	572	〃	〃	19.0	30.5	27.0		
	573	〃	壺	12.0	16.9	16.2		
	574	〃	〃	13.2	18.6	17.6		
	575	〃	〃	20.2	43.5	34.5		
	576	〃	小型丸底土器	8.7	8.6	8.3		
	577	〃	〃	8.2	8.4	8.0		
	578	〃	高杯	18.1	13.8		12.4	
	579	〃	〃	17.9	14.5		13.8	
	580	〃	〃	16.8	14.7		11.3	
	581	〃	〃	23.4				
	582	〃	手づくね土器	5.4	5.5	5.4		
	583	〃	壺	18.0	35.0	30.6		
	584	〃	〃	30.5				
	585	〃	〃				10.2	
	586	〃	〃					
94住居址	587	土師器	甕	18.6				
	588	〃	〃	14.3				
	589	〃	高杯					
95号住居址	590	土師器	壺	13.6				
	591	〃	小型丸底土器	9.9	9.0	8.9		
	592	〃	高杯	12.6				
	593	〃	〃				12.2	
96号住居址	594	土師器	甕	17.6				煮沸痕
	595	〃	〃	15.6				
	596	〃	壺	15.7				
	597	〃	〃	17.0		31.4		
	598	〃	〃	12.4				
	599	〃	高杯					
97号住居址	600	土師器	甕	16.4		24.3		
	601	〃	〃	18.1		24.4		
	602	〃	〃	14.4	23.9	22.3		
	603	〃	〃	17.7		23.1		
	604	〃	〃	16.3				
	605	〃	壺	16.5				
	606	〃	〃				8.6	
	607	〃	小型丸底土器	8.4	8.4	8.3		
	608	〃	高杯					
98号住居址	609	土師器	甕	18.4		23.2		煮沸痕
	610	〃	〃	15.0		21.0		煮沸痕
	611	〃	壺	13.4	19.3	17.5		
	612	〃	〃	19.3				
	613	〃	小型丸底土器	8.4	8.8	9.4		
	614	〃	高杯	15.0				赤色顔料塗布
	615	〃	〃	21.9				
	616	〃	〃	20.8				
	617	〃	〃	18.9				
101住居址	618	土師器	甕	16.1	29.8	26.5		煮沸痕
	619	〃	〃	15.7	24.7	23.1		
	620	〃	〃	17.4		25.4		

上の原遺跡出土土器計測表

単位：cm

住居址名	土器番号	種別	器種	口径	器高	胴部径	底径	備考（煮沸・彩色）
101号住居址	621	土師器	甕	13.9		19.1		
	622	〃	〃	16.7	28.5	25.5		煮沸痕
	623	〃	〃	15.6				
	624	〃	〃	15.8				煮沸痕
	625	〃	〃	15.1				
	626	〃	〃	17.8				
	627	〃	〃	18.1				
	628	〃	壺	18.8		31.1		
	629	〃	〃	15.0				
	630	〃	小型丸底土器	11.2		11.2		
	631	〃	〃	12.4		13.8		
	632	〃	〃	12.6				
	633	〃	〃	8.6	9.1	9.2		
	634	〃	〃	8.5	9.1	10.4		
	635	〃	〃	10.2	10.5	11.1		
	636	〃	杯	13.1	4.2			
	637	〃	〃	11.3	4.4			
	638	〃	〃	12.7				
	639	〃	高杯	17.4		13.0	11.5	
	640	〃	〃	17.8	11.2		13.4	
	641	〃	〃	19.2	14.0		12.2	
	642	〃	〃	16.5	12.6		12.3	
	643	〃	〃	19.5	11.5		11.9	
	644	〃	〃	17.1				
	645	〃	〃	20.9				
	646	〃	〃					
103号住居址	647	土師器	甕	16.6				
	648	〃	〃	16.4				
	649	〃	〃	15.8				
	650	〃	〃	17.9				
	651	〃	〃	16.9				
	652	〃	〃	16.0				
	653	〃	〃	14.8				煮沸痕
	654	〃	小型丸底土器	6.8	8.2	7.4		
	655	〃	〃	9.4	8.6	8.3		
	656	〃	杯	14.8				
	657	〃	〃	14.9				
	658	〃	〃	13.9	5.1			
	659	〃	〃	12.4	6.0			
	660	〃	高杯	24.0				
	661	〃	〃	18.0	14.8		16.0	
	662	〃	〃	19.0				
	663	〃	〃				11.9	
	664	〃	〃				12.2	
104号住居址	665	土師器	甕	18.8	30.0	24.9		煮沸痕
	666	〃	〃	16.3	30.4	27.4		
	667	〃	〃	13.6		19.7		煮沸痕
	668	〃	小型丸底土器	7.4	9.3	9.0		
	669	〃	〃	6.3	9.1	8.1		
	670	〃	杯	14.2	6.2			
	671	〃	〃	13.8	5.7			
	672	〃	〃	13.3	5.6			
	673	〃	高杯	16.1	12.3		10.5	
	674	〃	〃	15.5	12.5		11.4	
	675	〃	〃	16.8	15.2		14.4	
	676	〃	〃	17.6				
	677	〃	〃	17.1				
	678	〃	〃	18.5				
	679	〃	〃	19.5				
	680	〃	〃				13.5	
105住居号址	681	土師器	壺	15.4				
	682	〃	高杯	21.4				

住居址名	土器番号	種別	器種	口径	器高	胴部径	底径	備考（煮沸・彩色）
108号住居址	683	土師器	甕	16.3				
	684	〃	〃	17.2		21.8		
	685	〃	〃	14.8		23.1		煮沸痕
	686	〃	高杯					
109住居号址	687	土師器	甕	15.4				
	688	〃	高杯	17.0				
111号住居址	689	土師器	甕	17.0				
	690	〃	〃	17.2				
	691	〃	〃	17.0		26.2		煮沸痕
	692	〃	〃	17.2	23.8	21.1		煮沸痕
	693	〃	〃	17.5				
	694	〃	〃	15.0		23.8		煮沸痕
	695	〃	〃	13.7		18.4		
	696	〃	壺	19.7				
	697	〃	〃	17.9				
	698	〃	〃	14.8		22.1		
	699	〃	〃	19.0				
	700	〃	〃	12.7	15.5	14.9		煮沸痕
	701	〃	〃	12.1	16.3	14.5		
	702	〃	高杯	18.5				
	703	〃	〃				9.5	
112号住居址	704	土師器	甕	14.4				
	705	〃	〃	14.3				
	706	〃	壺	14.4				
	707	〃	〃	24.4				
	708	〃	〃			39.9		
	709	〃	〃	13.7		12.0		
	710	〃	小型丸底土器			6.6		
	711	〃	台付小型丸底土器	10.0		8.3		
113号住居址	712	土師器	甕	17.4				
	713	〃	〃	10.9		14.0		煮沸痕
	714	〃	壺	13.9				
	715	〃	〃	18.9				
	716	〃	〃	17.3				
	717	〃	〃	14.1				
	718	〃	小型丸底土器	11.0	9.8	9.0		
114号住居址	719	土師器	甕	17.4				
	720	〃	壺	15.9				
	721	〃	〃	15.4				
	722	〃	高杯	14.7				
	723	〃	〃					
	724	〃	〃				12.0	
	725	〃	手づくね土器	7.1	4.0	5.7		
115号住居址	726	土師器	甕	15.7				
	727	〃	壺	15.8				
	728	〃	〃	16.8				
	729	〃	小型丸底土器	11.0				
116号住居址	730	土師器	壺	13.8	29.7	23.5		
	731	〃	〃	14.6				
	732	〃	甕	13.9				
	733	〃	高杯	14.1	14.4		11.2	
	734	〃	〃	18.8				
	735	〃	〃				12.0	
	736	〃	〃					
117号住居址	737	土師器	壺	12.8				
118号住居址	738	土師器	甕	15.0	27.3	23.4		煮沸痕
	739	〃	〃	15.4		24.3		煮沸痕
	740	〃	〃	15.9				
	741	〃	壺	13.0				
	742	〃	高杯	18.1	13.8		12.2	
	743	〃	〃	18.0	12.7		11.9	
	744	〃	〃	20.1	11.2		13.5	

図　　版

図版１　住居址

1.

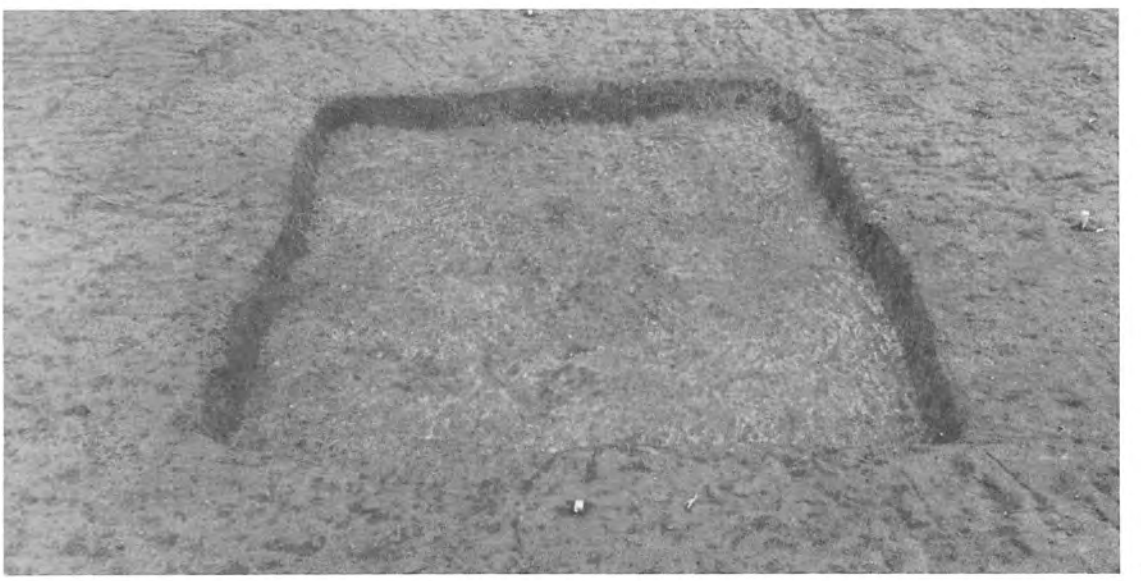
2.

3.

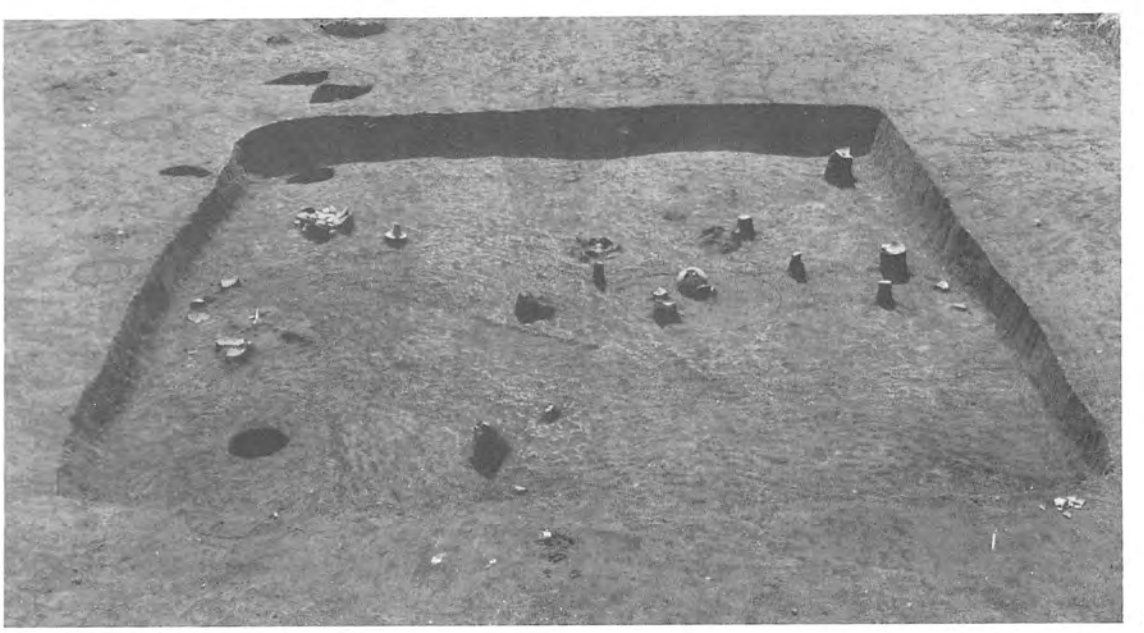
1．１号住居址(西より)　2．２号住居址(北東より)　3．２号住居址(北東より)

図版２　住居址

1.



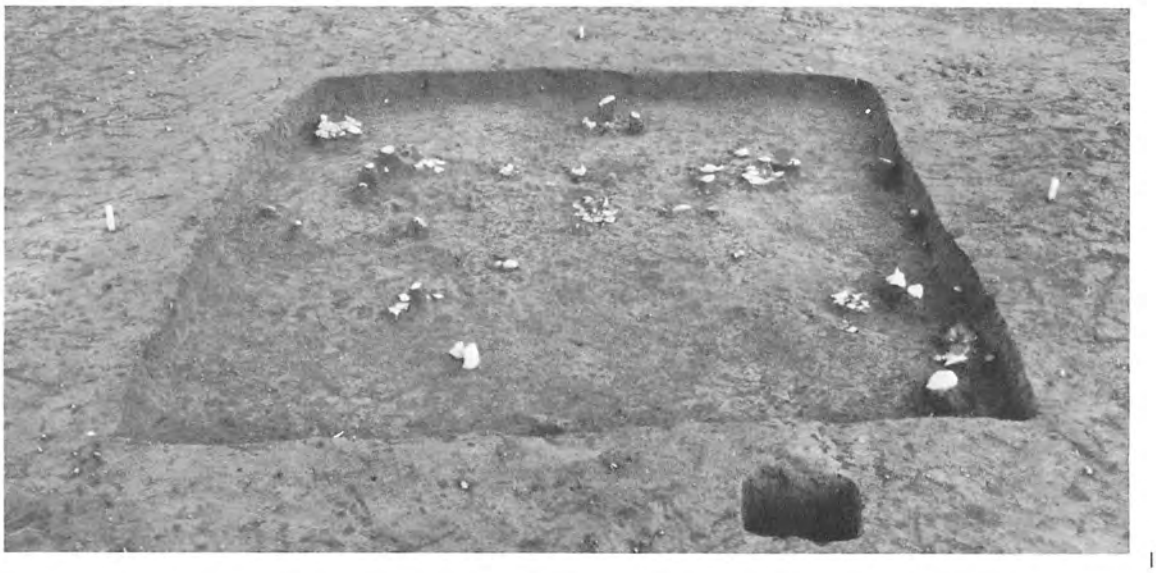
2.



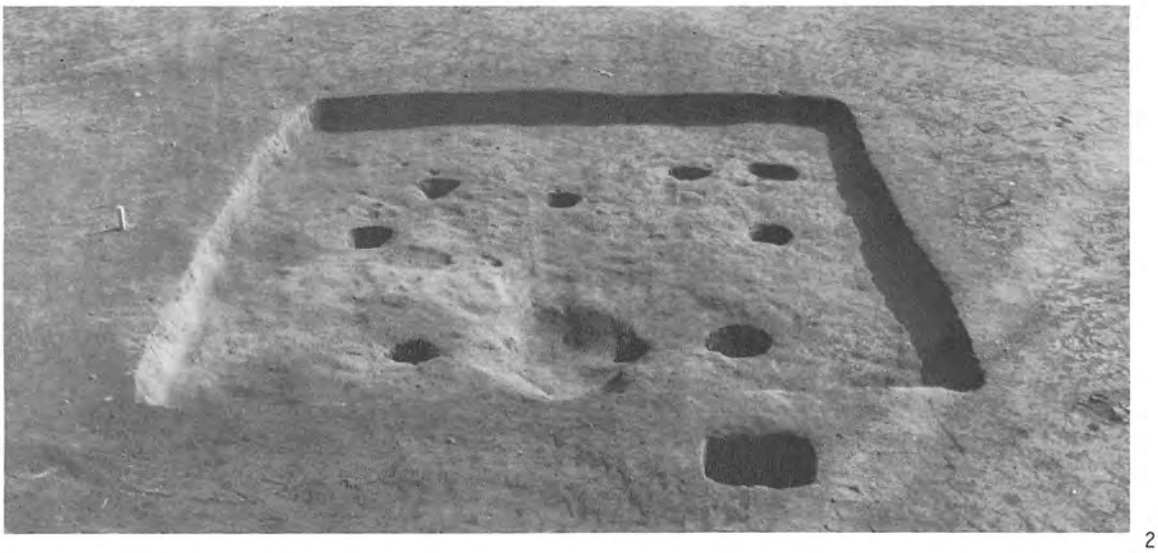
3.

1．３号住居址（南西より）　2．３号住居址（南西より）　3．４号住居址（北東より）

図版 3　住居址



1.

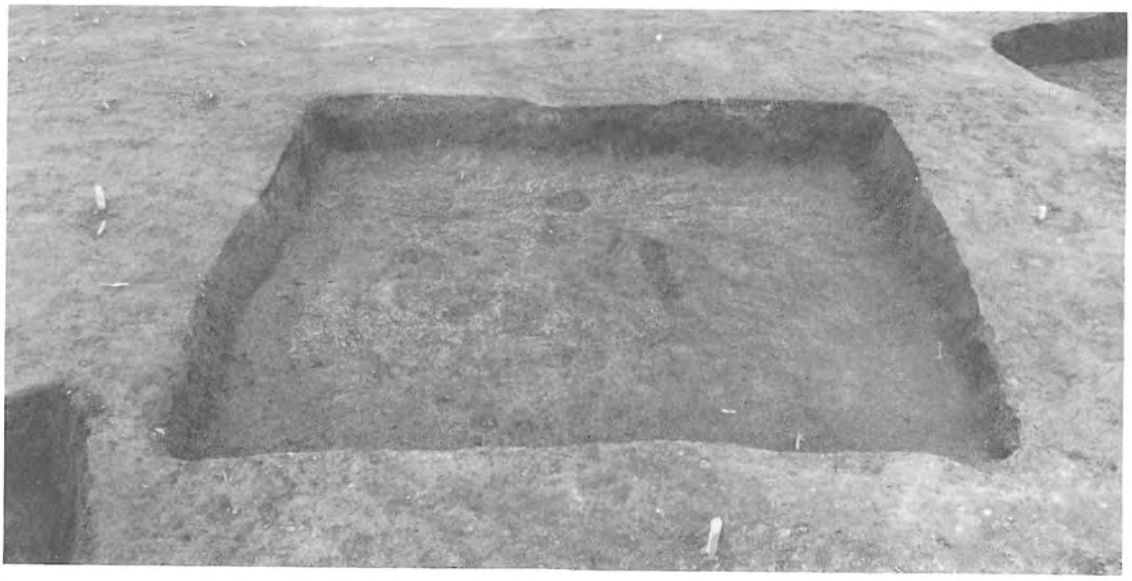


2.

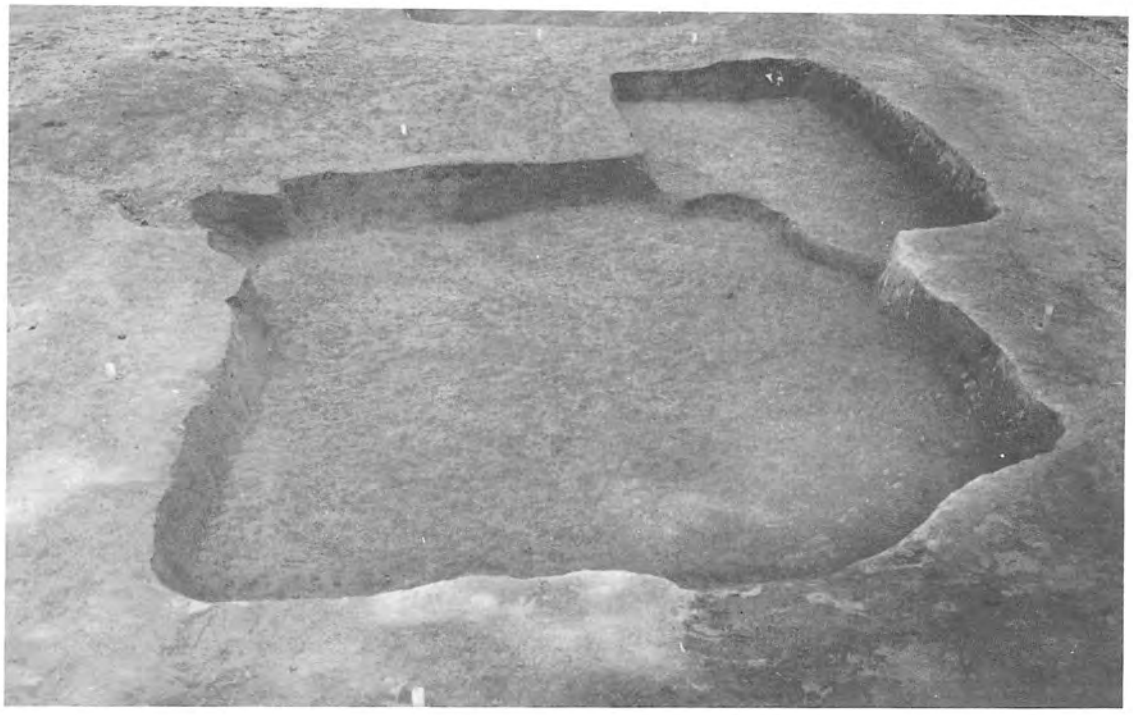
3.

1. 5号住居址(北西より)　2. 5号住居址(北西より)　3. 6号住居址(北より)

図版4　住居址



1.



2.

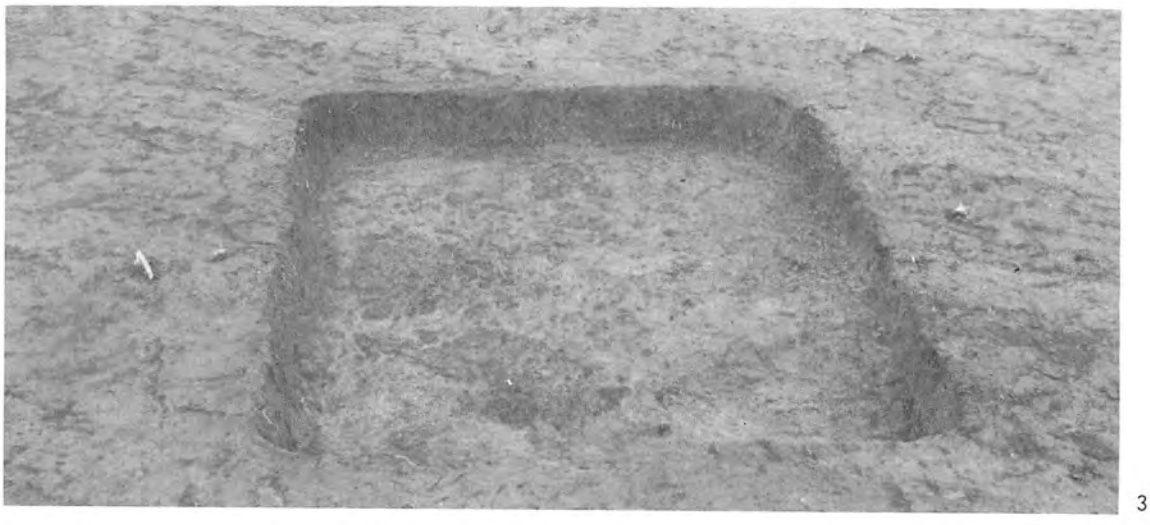
3.

1．6号住居址(北より)　2．7・107号住居址(北東より)　3．9号住居址(北より)

図版5　住居址

1.

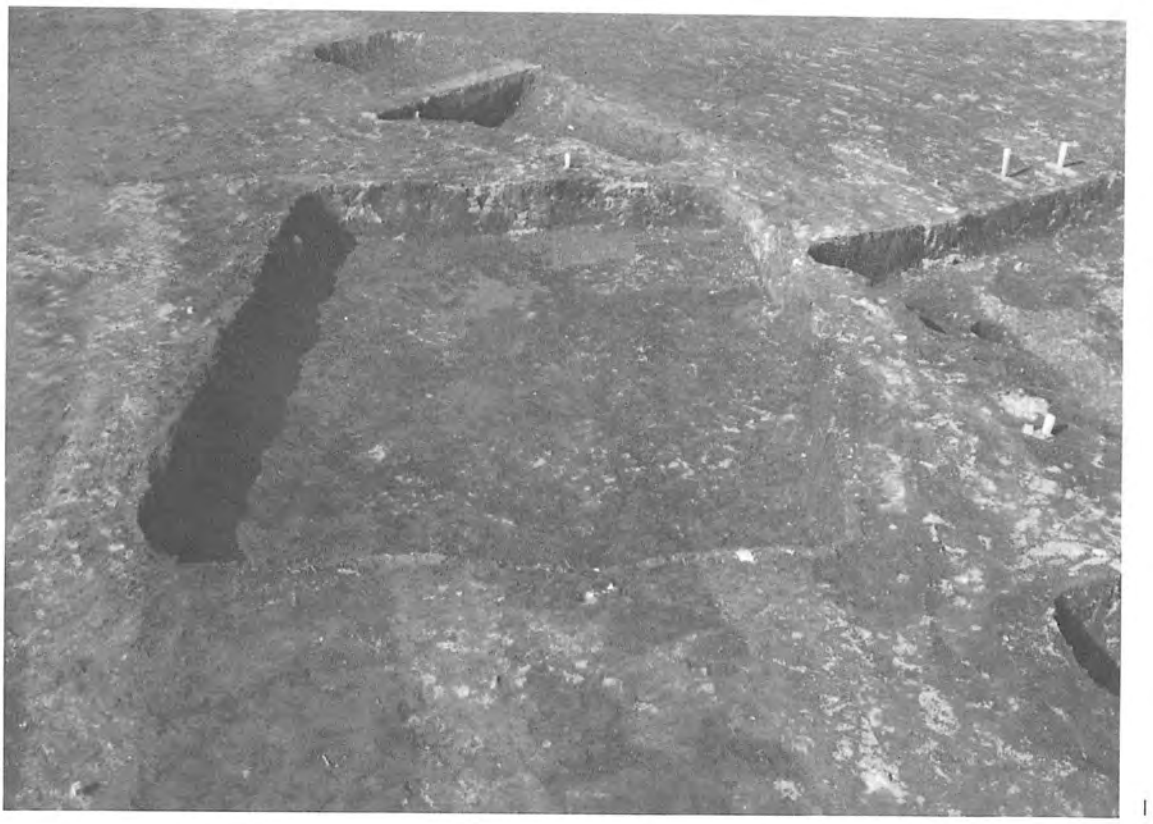
2.



3.

1. 11号住居址(南東より)　2. 14号住居址(北東より)　3. 14号住居址(南西より)

図版6 住居址



1.

2.

1. 15号住居址(南より)　2. 16号住居址(北東より)

図版７　住居址

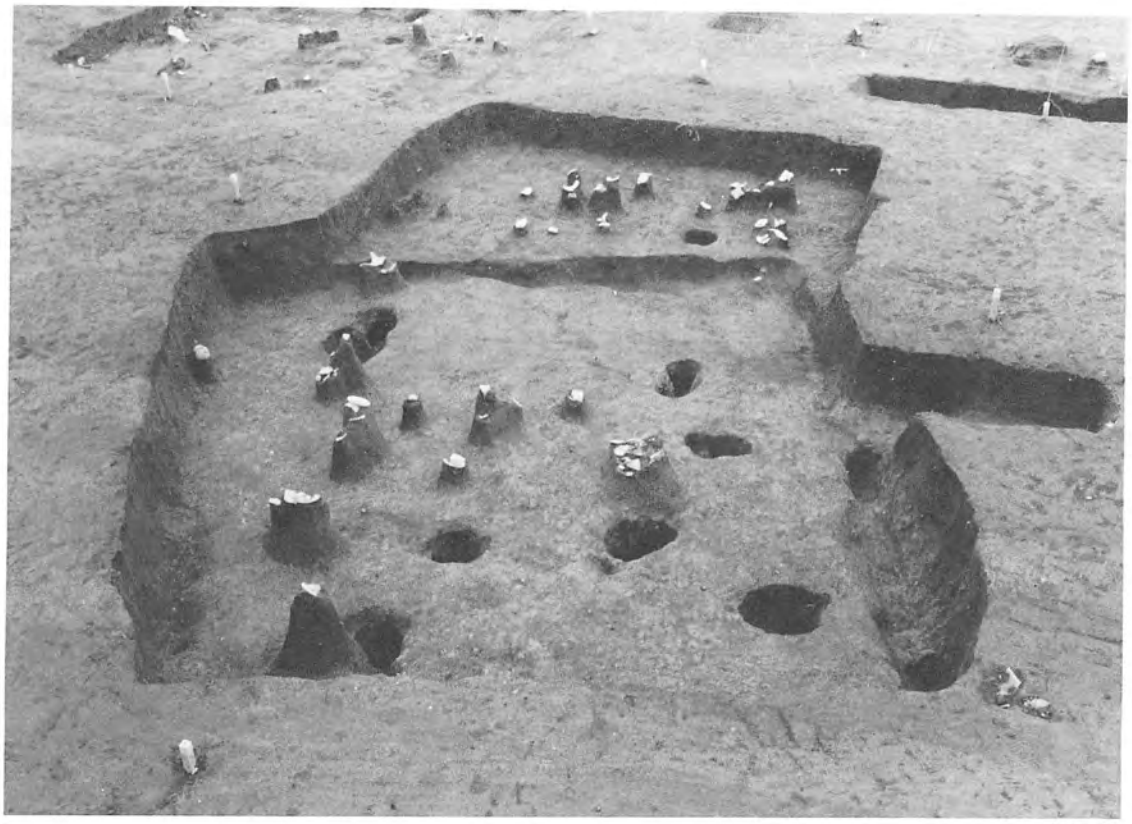
1.

2.

3.

1．16・17号住居址(西より)　2．16・17号住居址(南東より)　3．18号住居址(北東より)

図版12 住居址

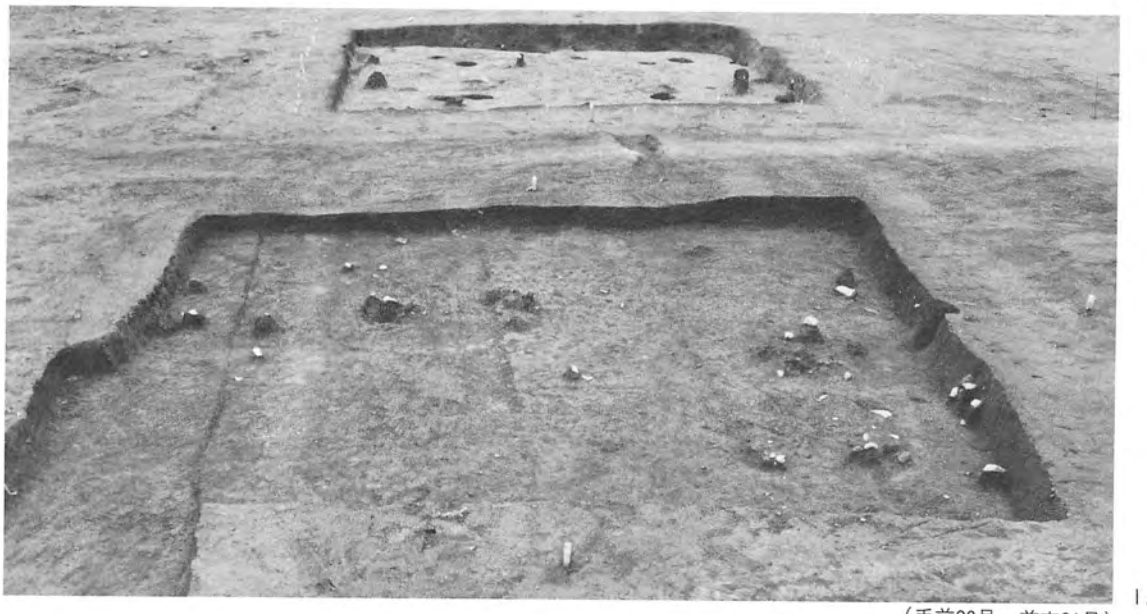


1.
(手前27号)

2.
(手前26号)

1. 26・27号住居址(南西より)　2. 26・27号住居址(北東より)

図版13 住居址



1.

（手前28号，前方31号）

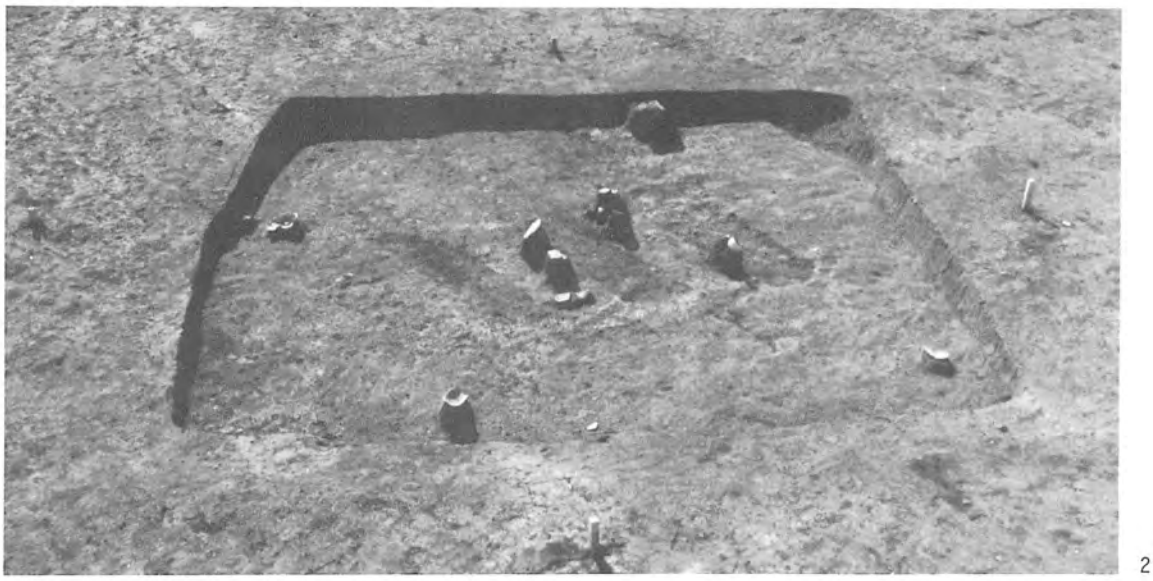
2.

3.

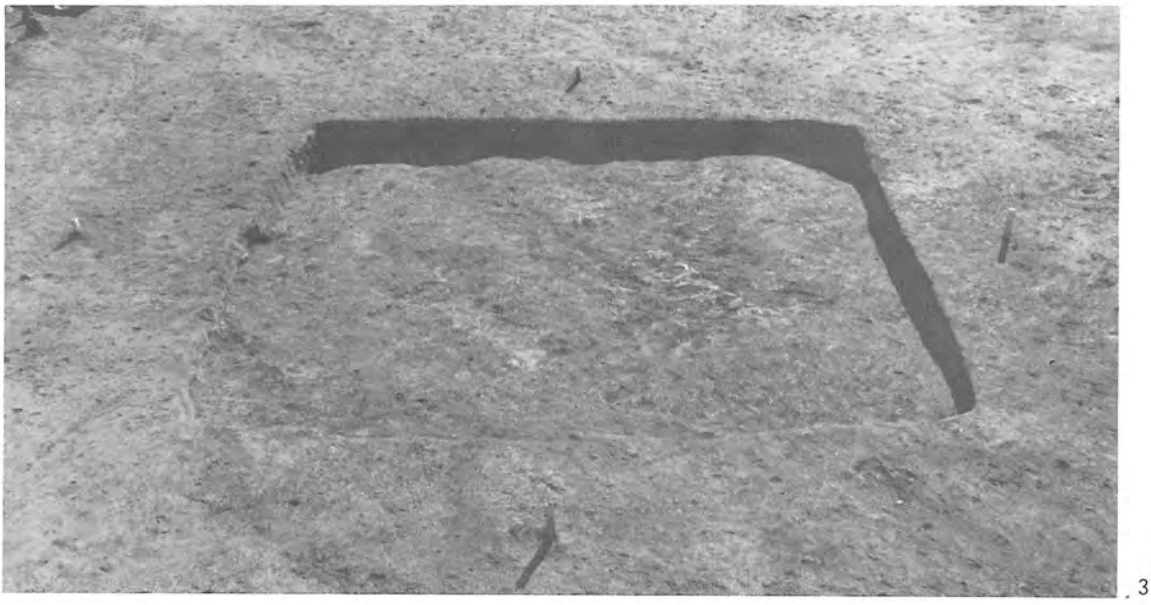
1．28号住居址（北東より）　2．29号住居址（北東より）　3．29号住居址（北東より）

図版14 住居址

1.



2.



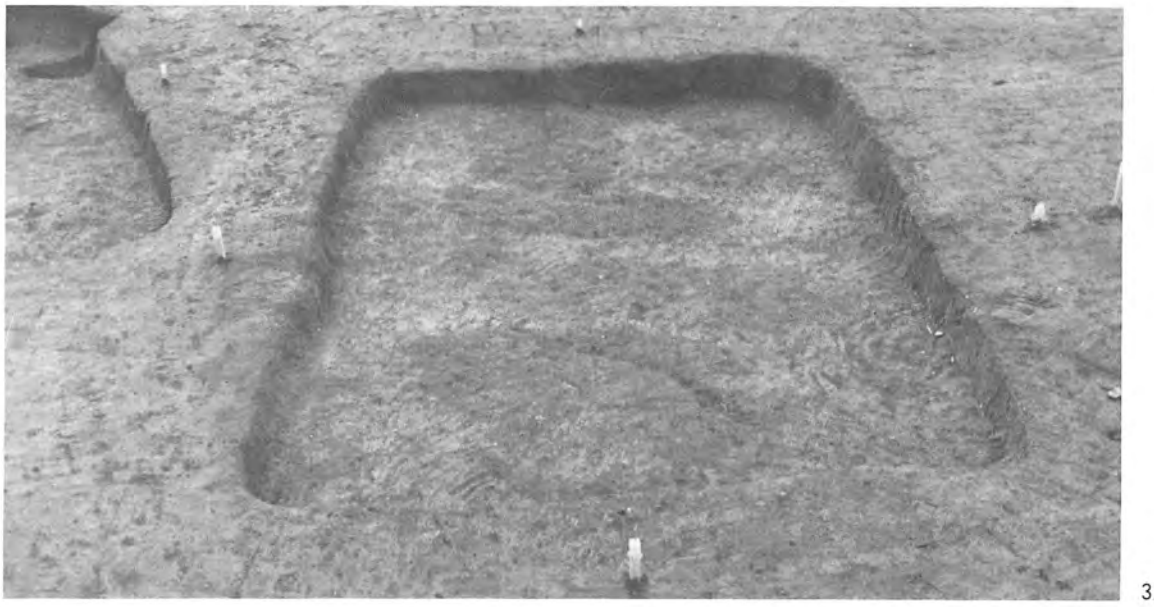
3.

1. 31号住居址(北東より)　2. 34号住居址(北東より)　3. 34号住居址(北東より)

図版15 住居址

1.

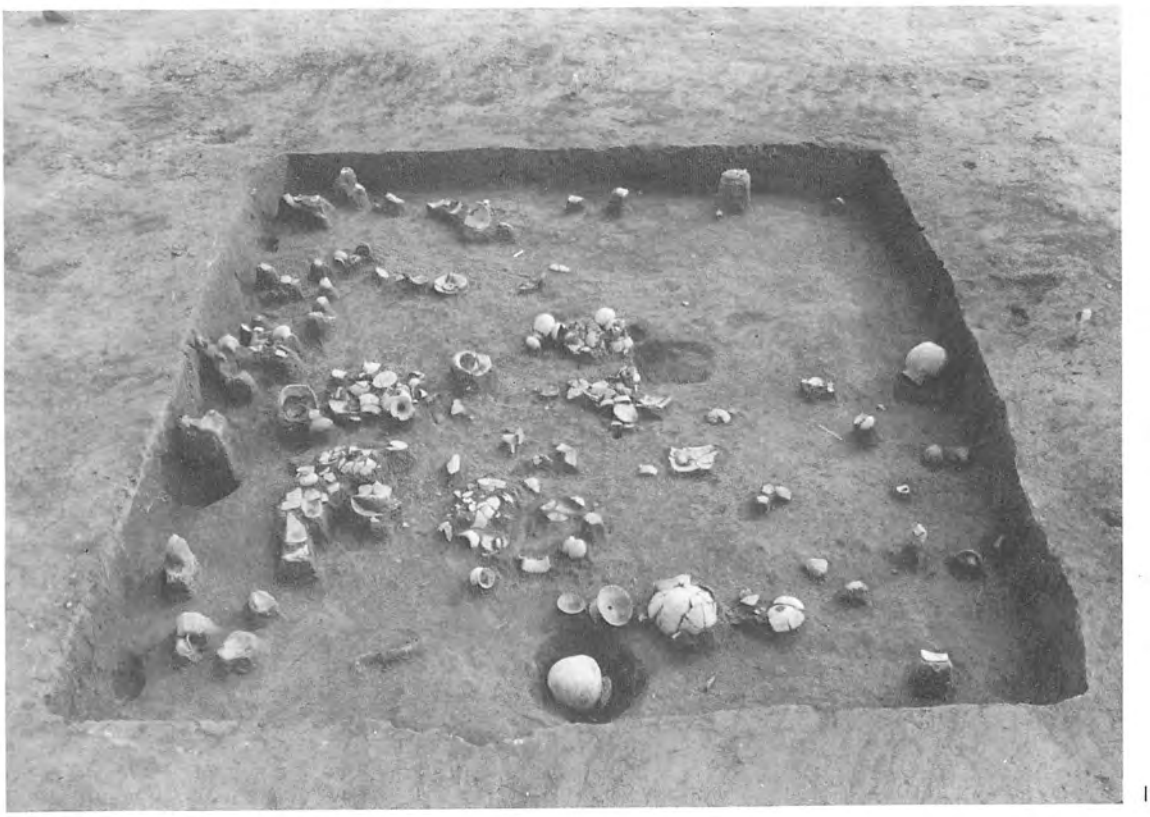
2.



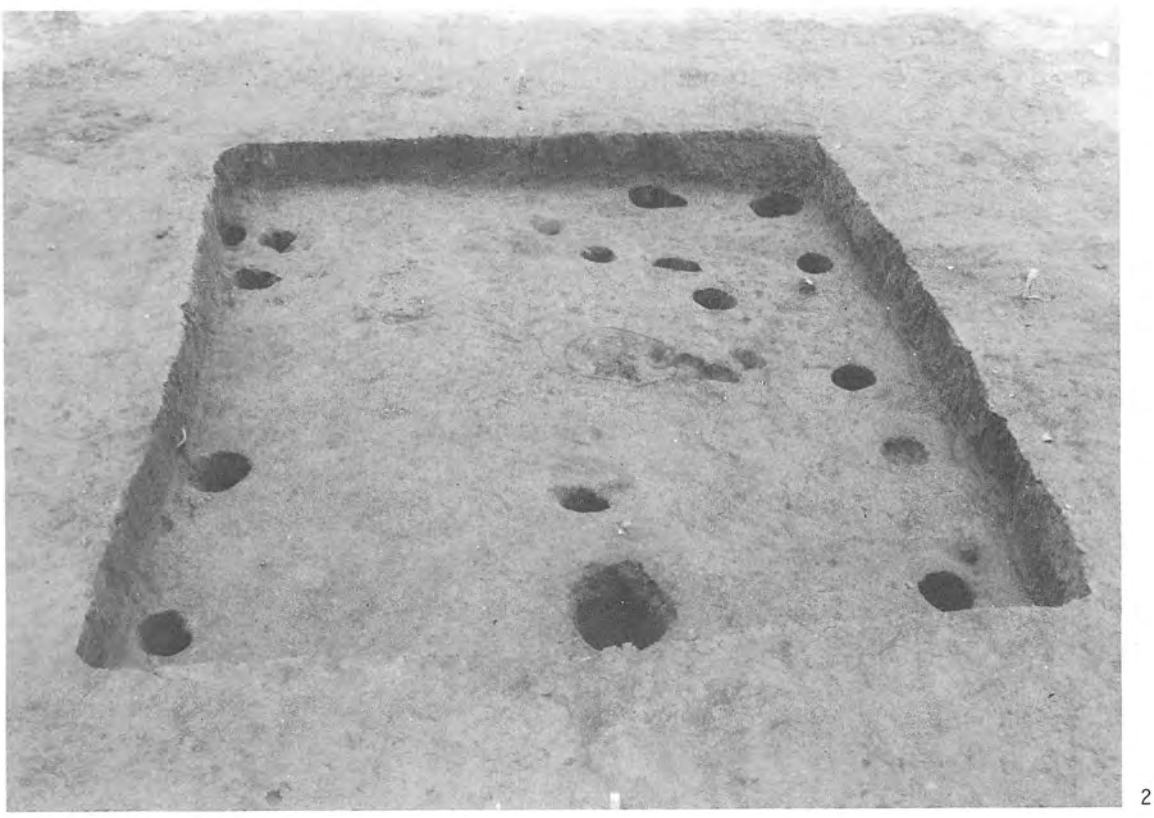
3.

1．35号住居址(南西より)　2．37号住居址(東より)　3．37号住居址(東より)

図版8　住居址



1.



2.

1．19号住居址(北東より)　　2．19号住居址(北東より)

図版 9　住居址

1.

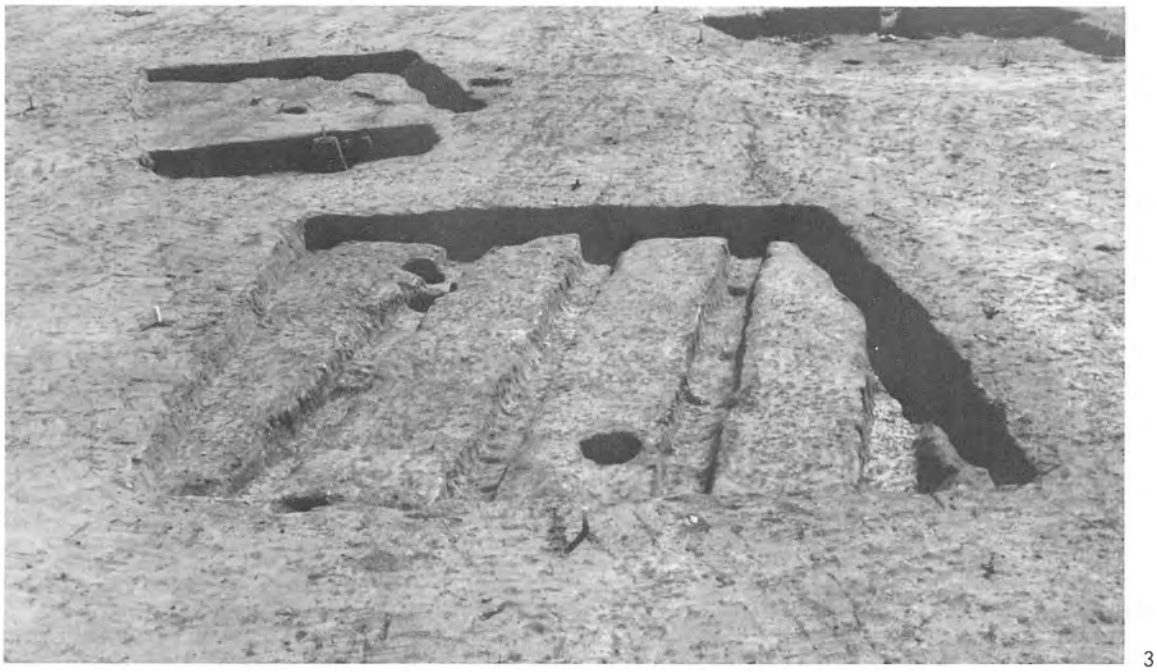
2.

1．20号住居址（南西より）　　2．20号住居址（南西より）

図版10 住居址

1.

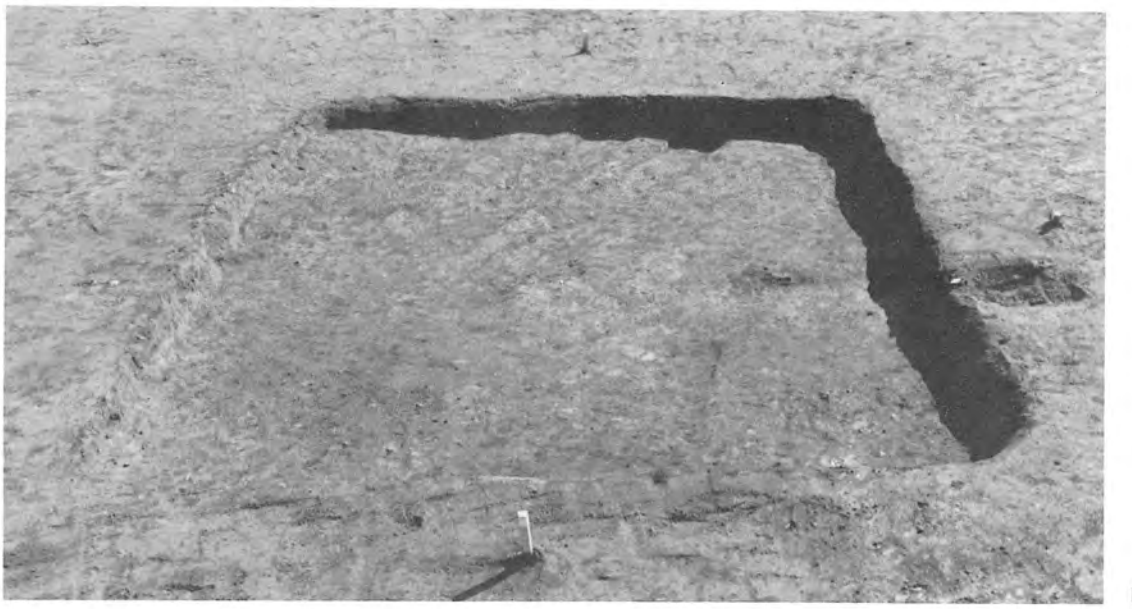
2.



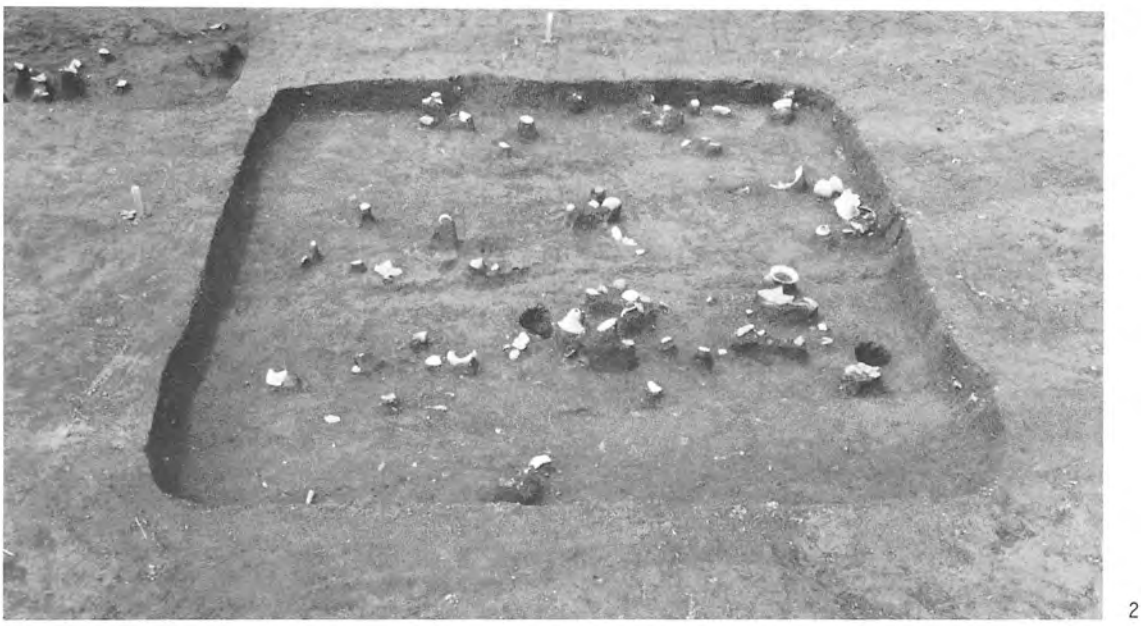
3.

1. 21・29号住居址(南西より)　2. 21・29号住居址(南西より)　3. 22号住居址(北西より)

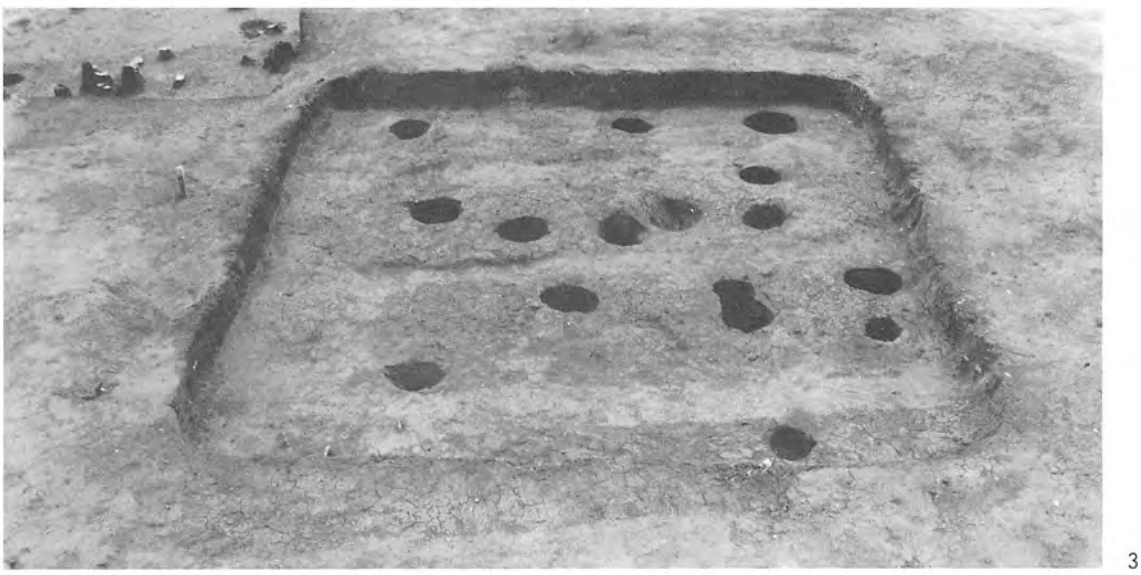
図版11 住居址



1.



2.



3.

1. 23号住居址(南東より)　2. 25号住居址(北東より)　3. 25号住居址(北東より)

図版16 住居址

1.

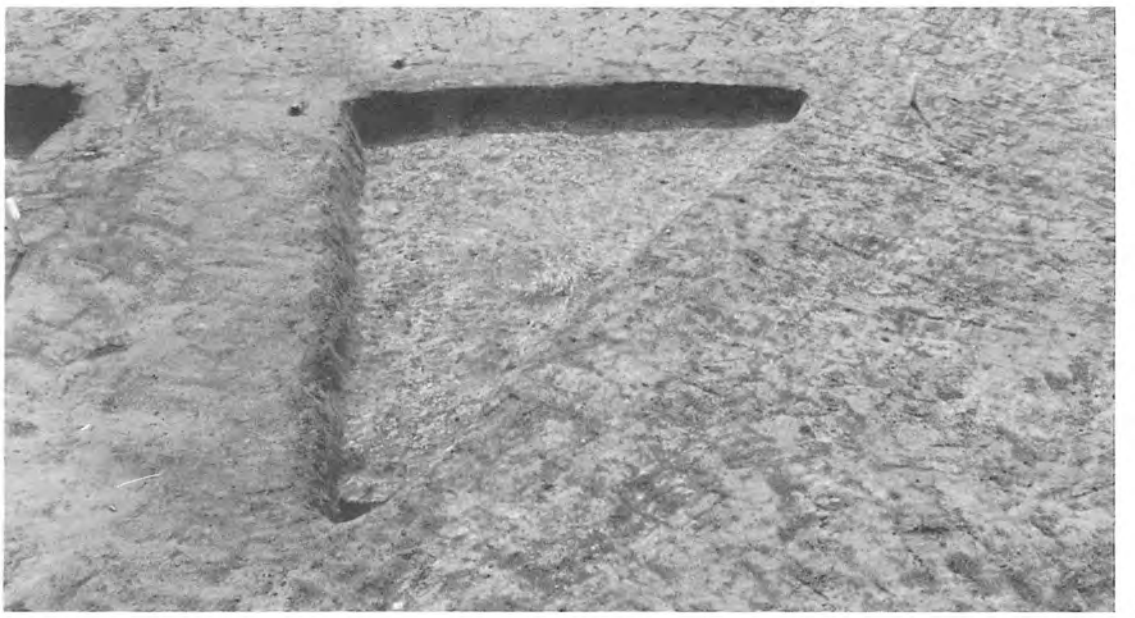
（手前より37・38・39号）

2.

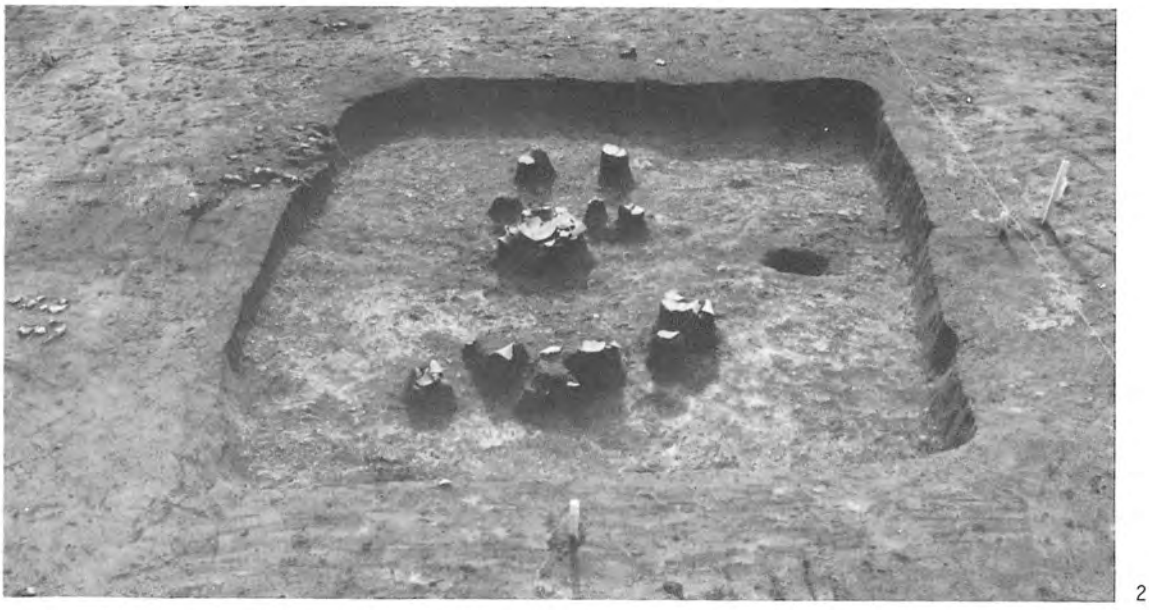
3.

1．37・38・39号住居址（北より）　2．38号住居址（東より）　3．38号住居址（東より）

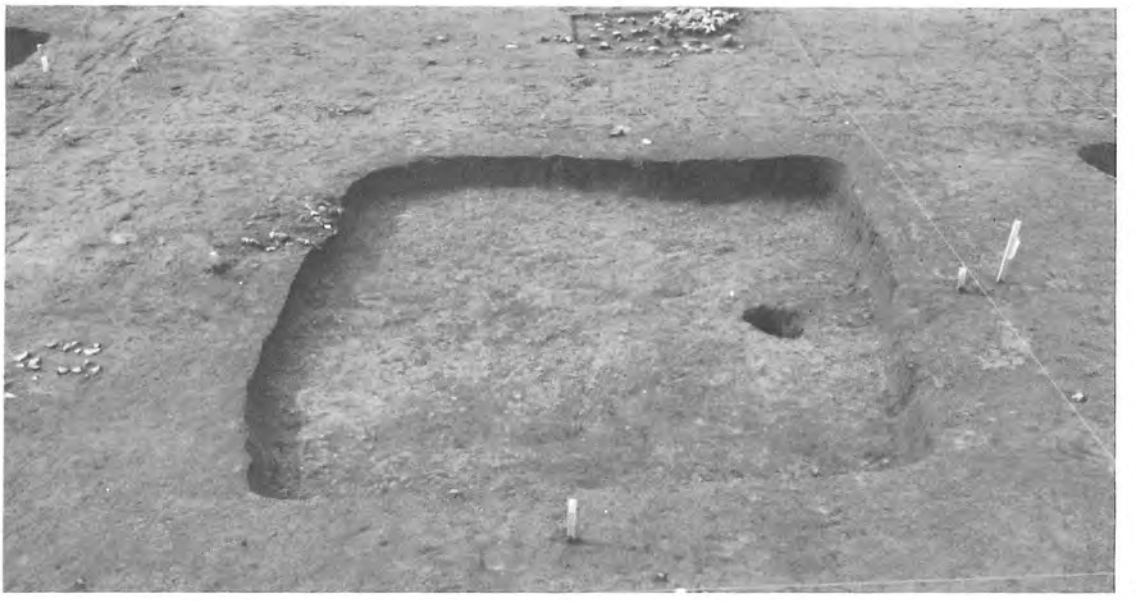
図版17 住居址



1.



2.



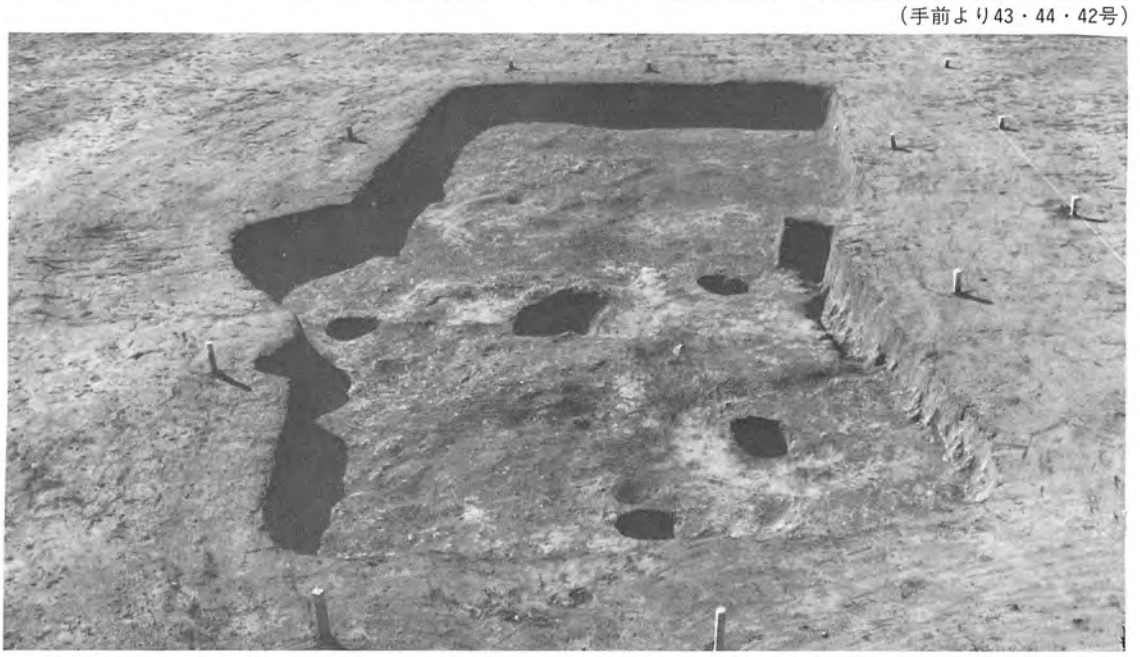
3.

1. 40号住居址(北東より)　2. 41号住居址(東より)　3. 41号住居址(東より)

図版18 住居址

1.

(手前より43・44・42号)



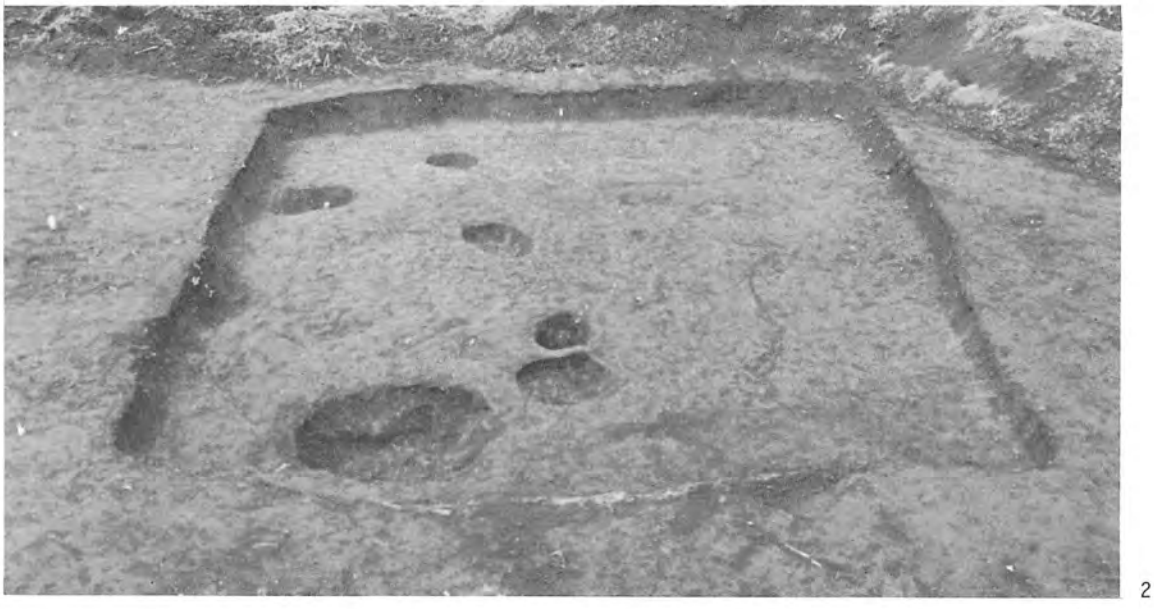
2.

3.

1. 42・43・44号住居址(東より)　2. 42・43・44号住居址(東より)　3. 45号住居址(北東より)

図版19 住居址

1.



2.

3.

1. 46号住居址(北より)　2. 46号住居址(北より)　3. 48号住居址(北東より)

図版20 住居址

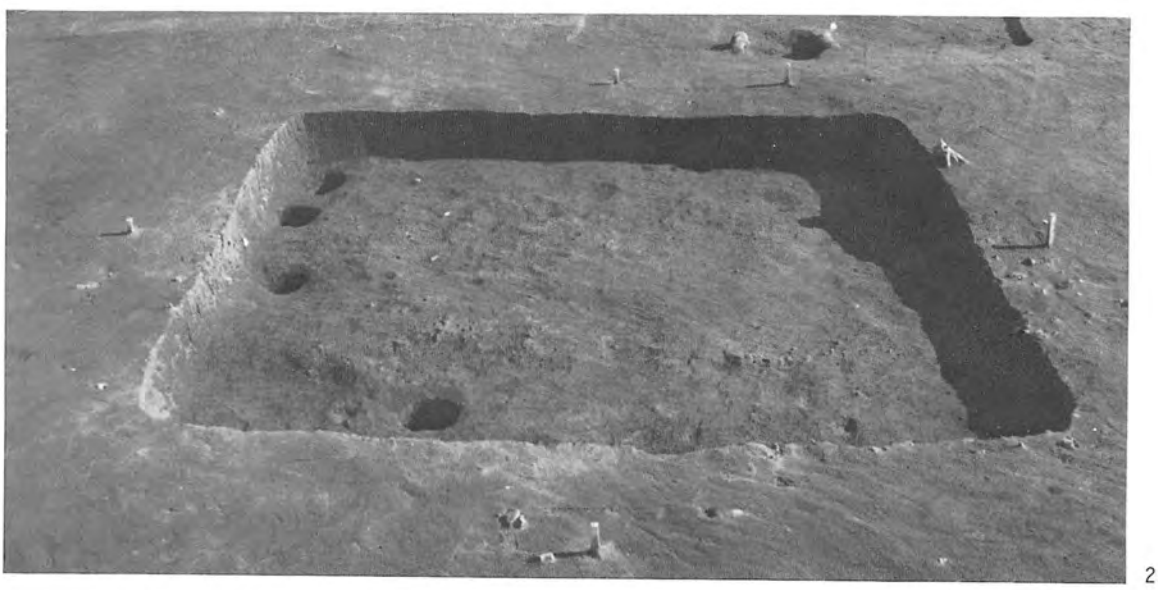
1.

2.

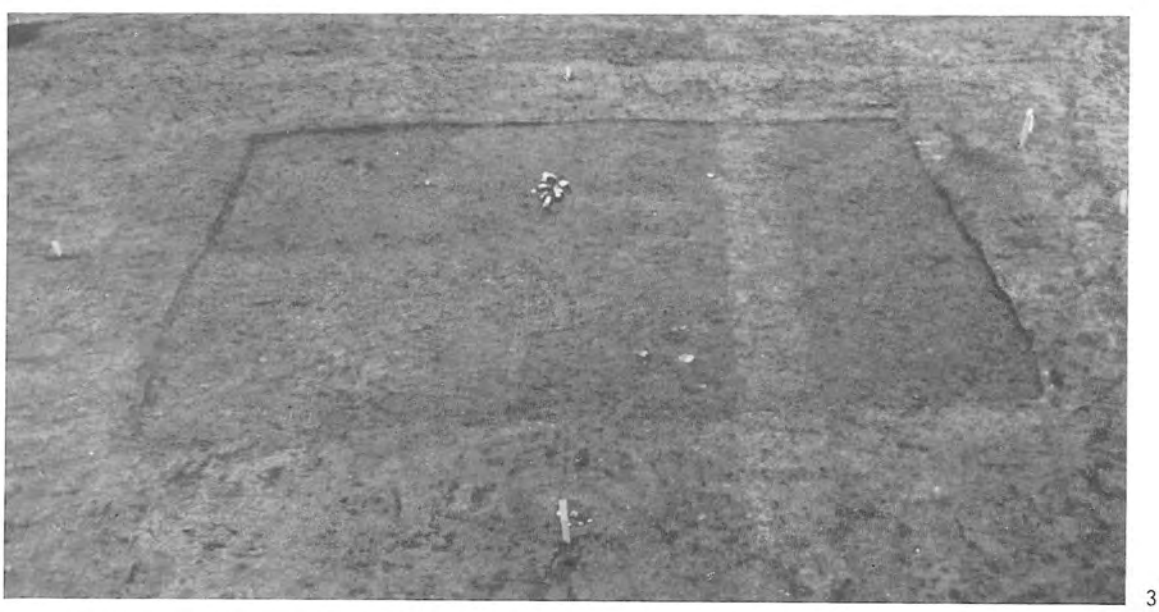
1. 49号住居址(北より)　2. 49号住居址(西より)

図版21 住居址

1.



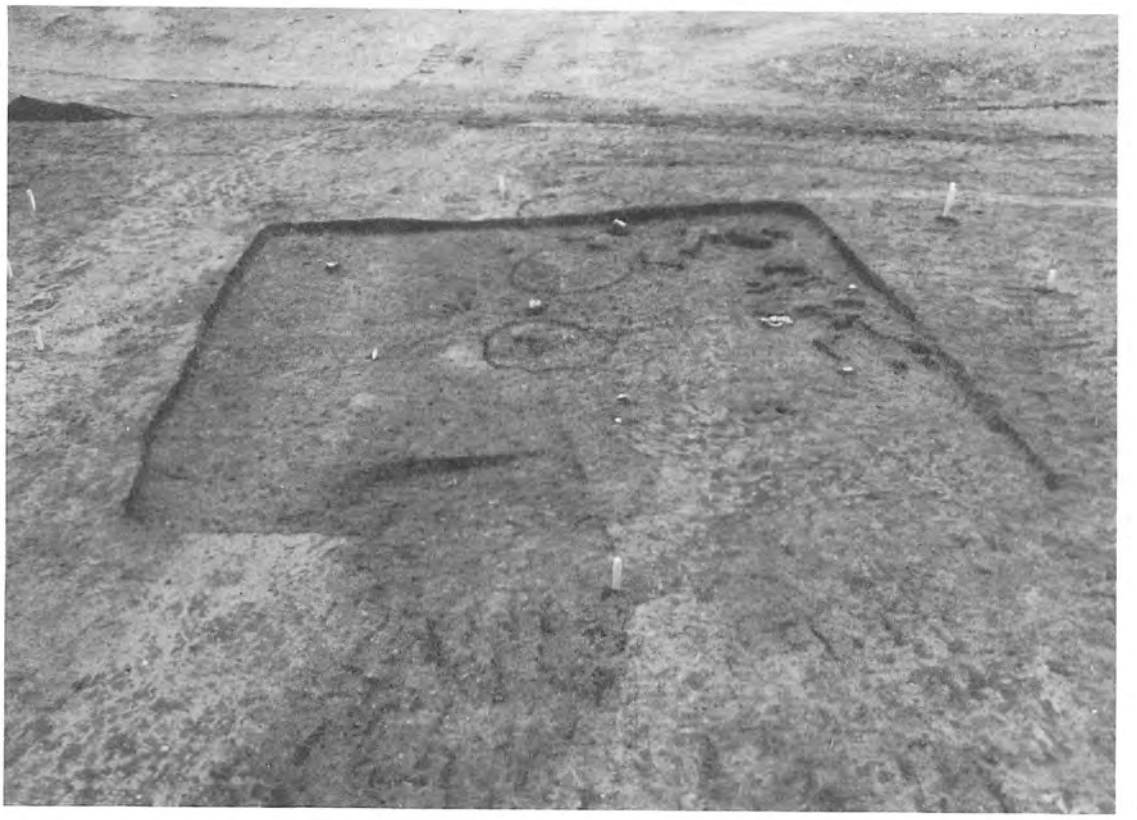
2.



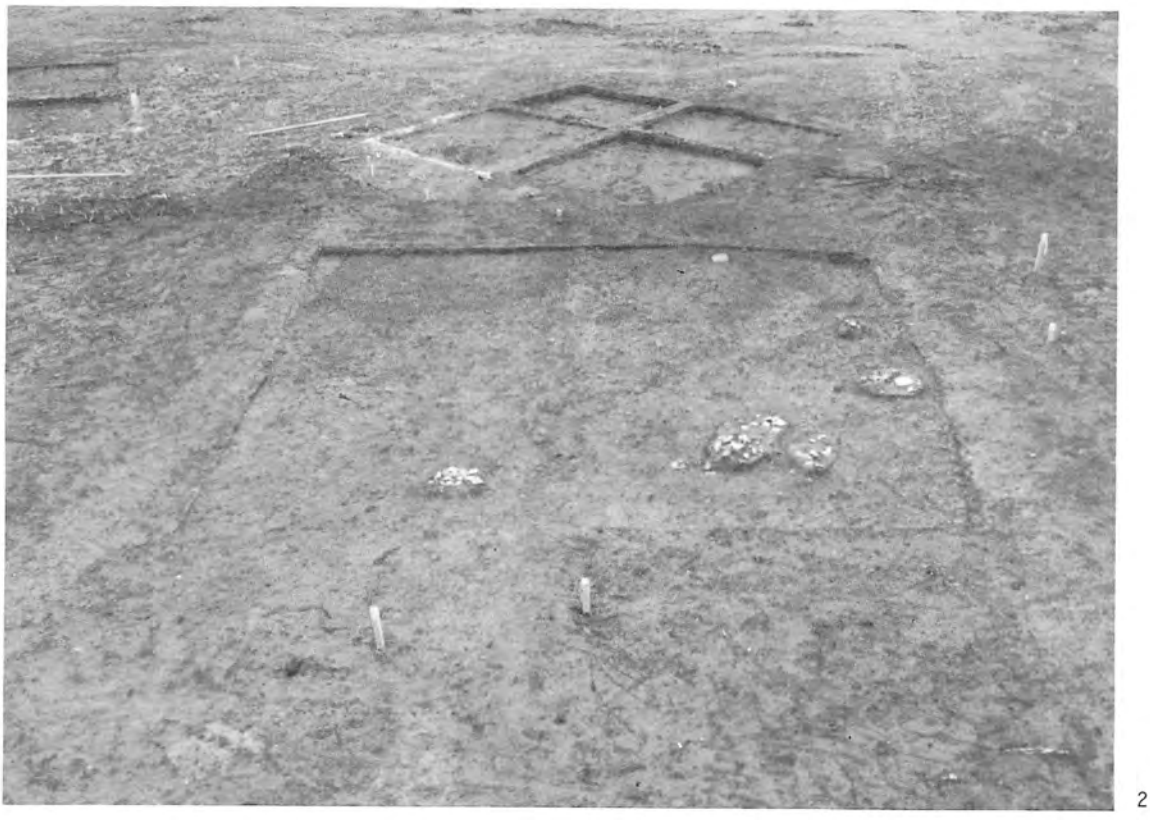
3.

1. 51号住居址(北より)　2. 51号住居址(北より)　3. 58号住居址(東より)

図版22 住居址



1.



2.

1. 59号住居址(東より)　2. 62号住居址(東より)

図版23 住居址

1.

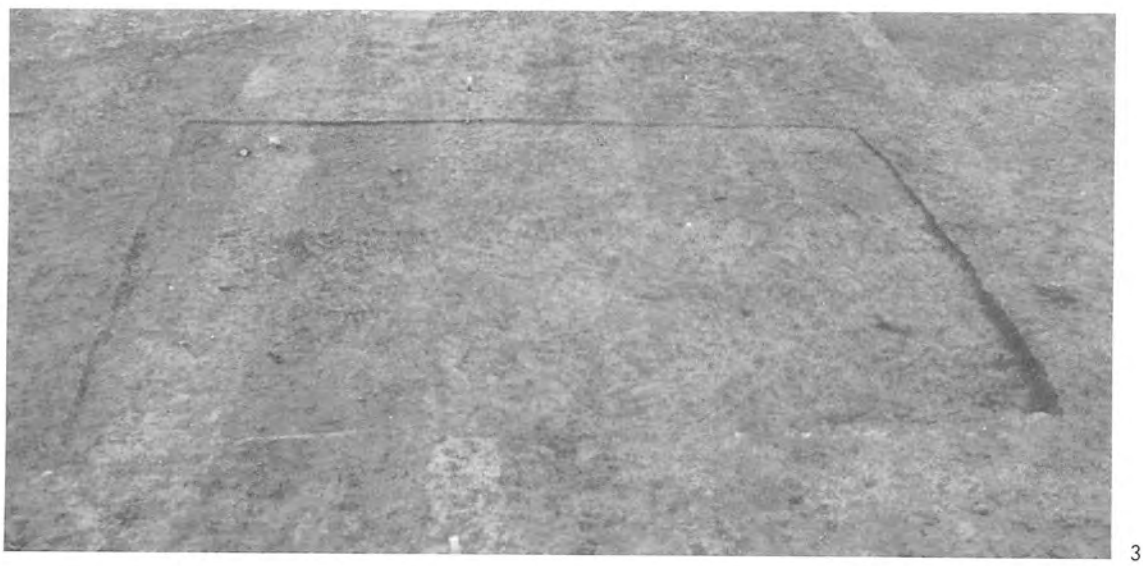
2.

1. 65号住居址(北より)　2. 65号住居址(北より)

図版24 住居址

1.

2.



3.

1. 67号住居址(南東より)　2. 67号住居址(南東より)　3. 69号住居址(東より)

図版25 住居址

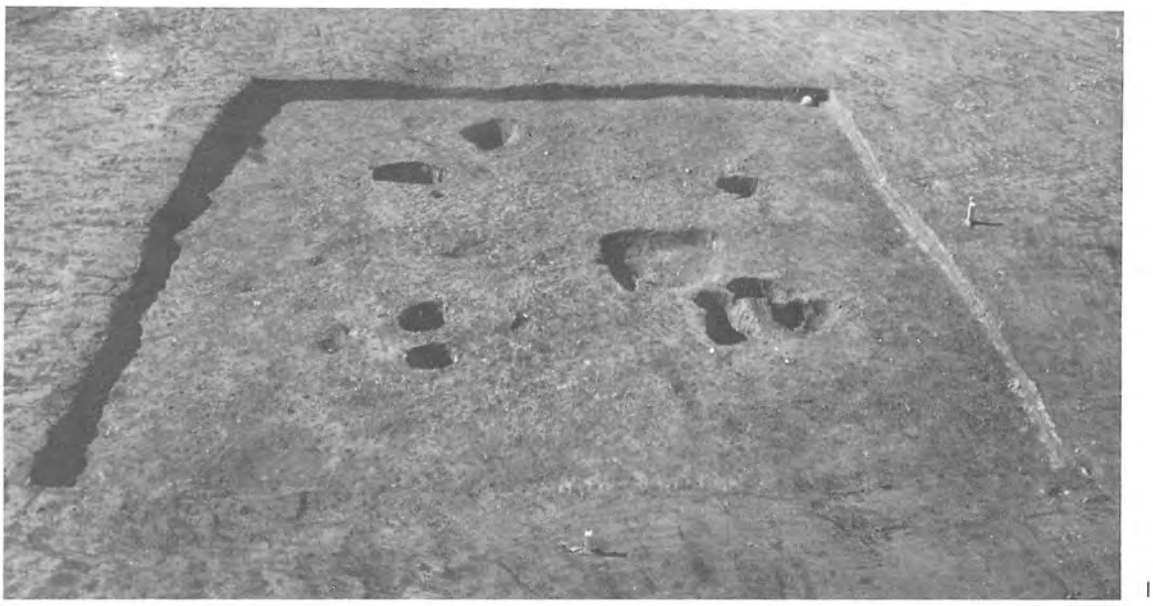
1.

2.

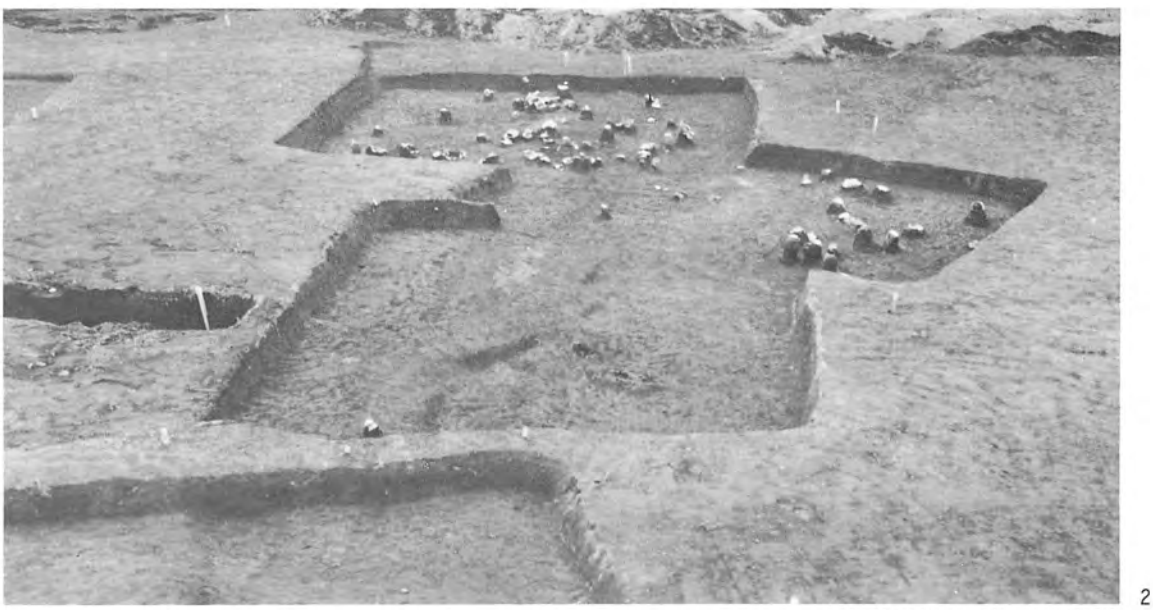
3.

1. 70号住居址(東より)　2. 70号住居址(北より)　3. 71号住居址(東より)

図版26 住居址

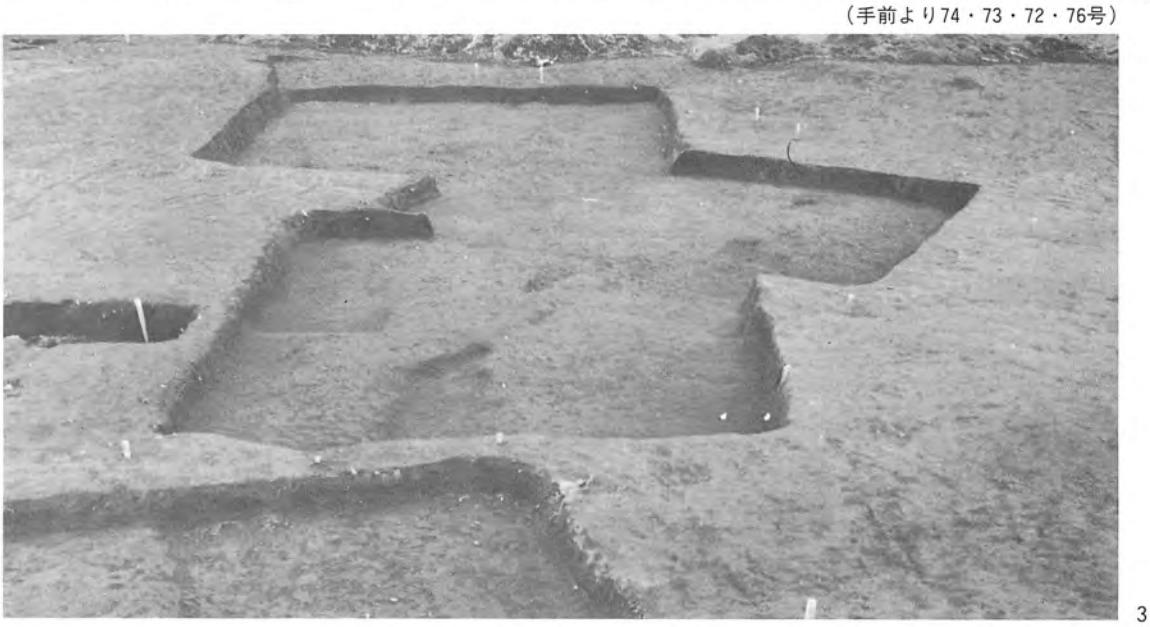


1.



2.

（手前より74・73・72・76号）



3.

1．71号住居址（東より）　2．72・73・74・76号住居址（東より）　3．72・73・74・76号住居址（東より）

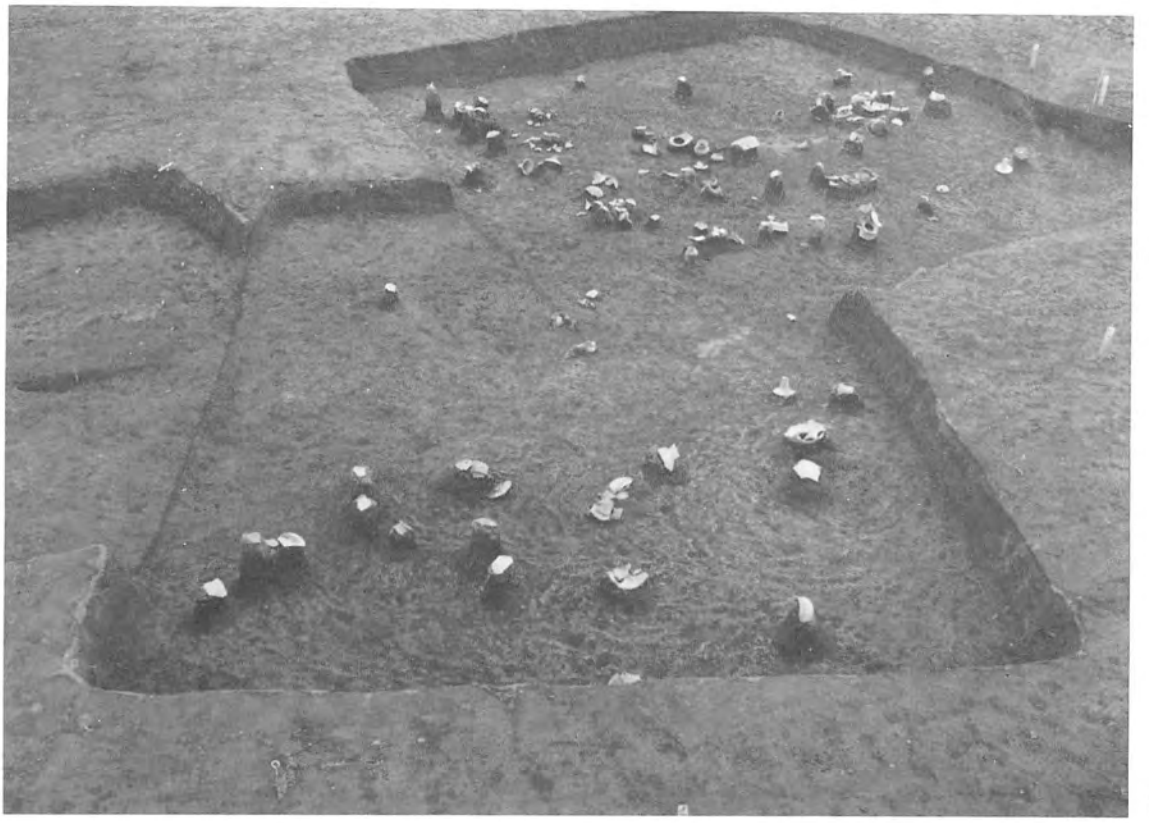
図版27 住居址

1.

2.

1. 72・73・74・76号住居址(南より)　2. 72・73・74・76号住居址(西より)

図版28 住居址



1.

2.

1．73号住居址(北東より)　2．73号住居址(北東より)

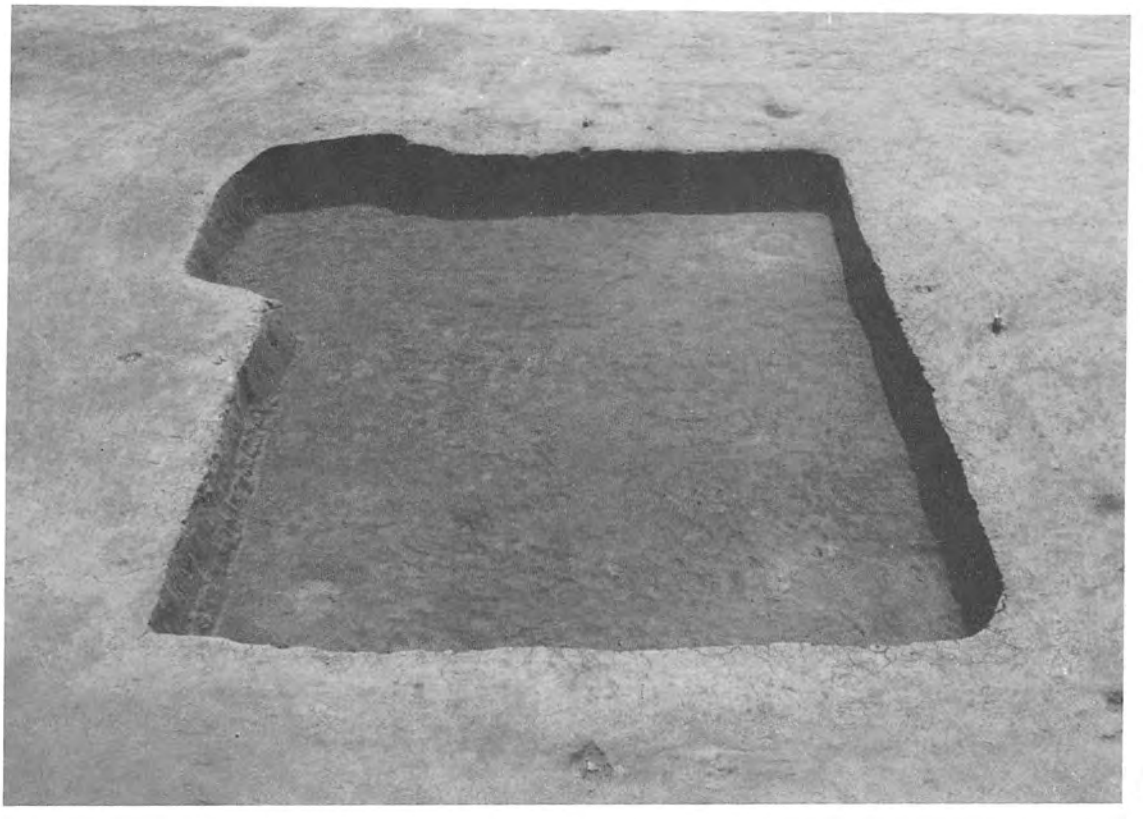
図版29 住居址

1.

2.

1．75号住居址(北東より)　2．75号住居址(北東より)

図版30 住居址



1.

2.

1．77号住居址(北より)　2．77号住居址(北より)

図版31 住居址

1.

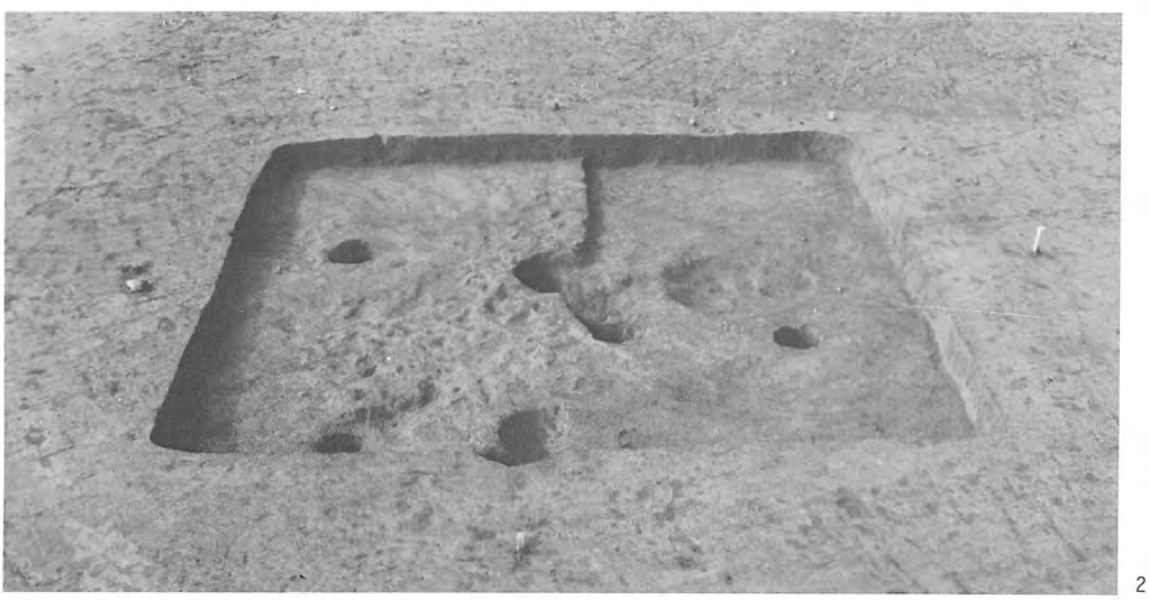
（手前79号）

2.

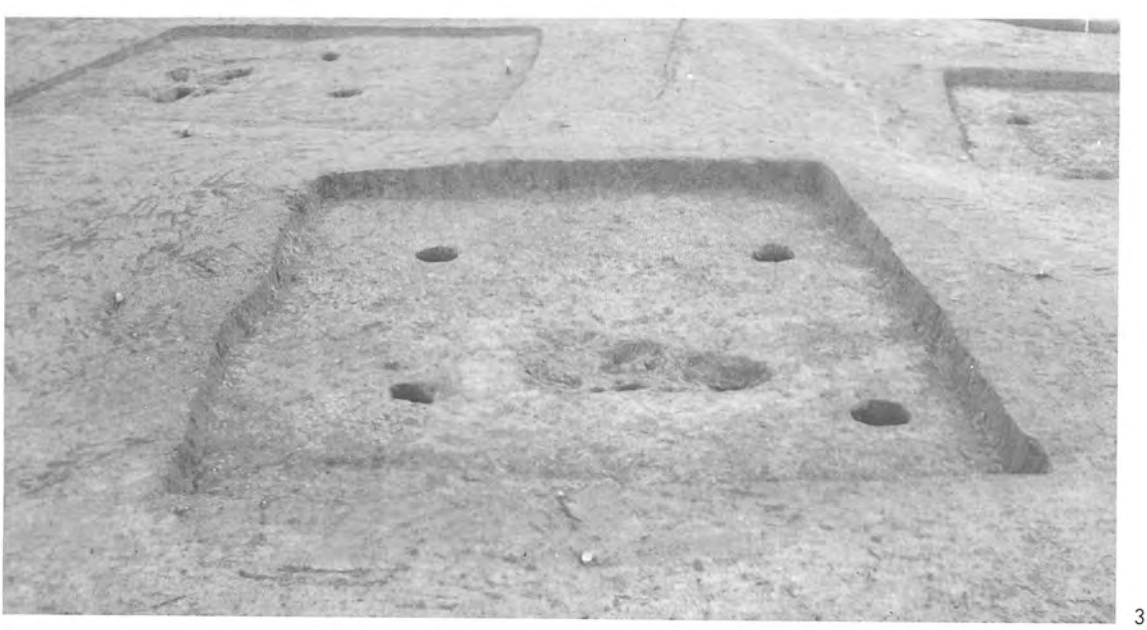
1．78・79号住居址（東より）　2．78・79号住居址（東より）

図版32 住居址

1.



2.

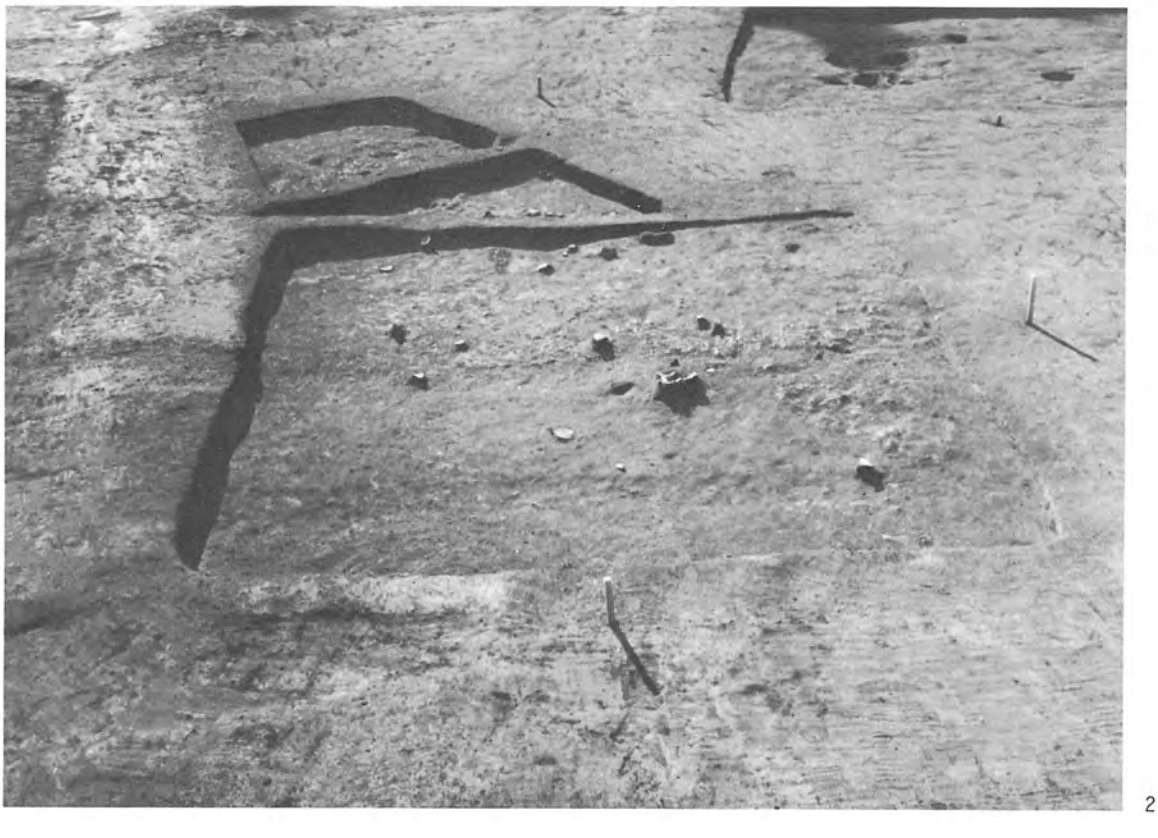


3.

1. 80号住居址(南より)　2. 80号住居址(東より)　3.81号住居址(北東より)

図版33 住居址

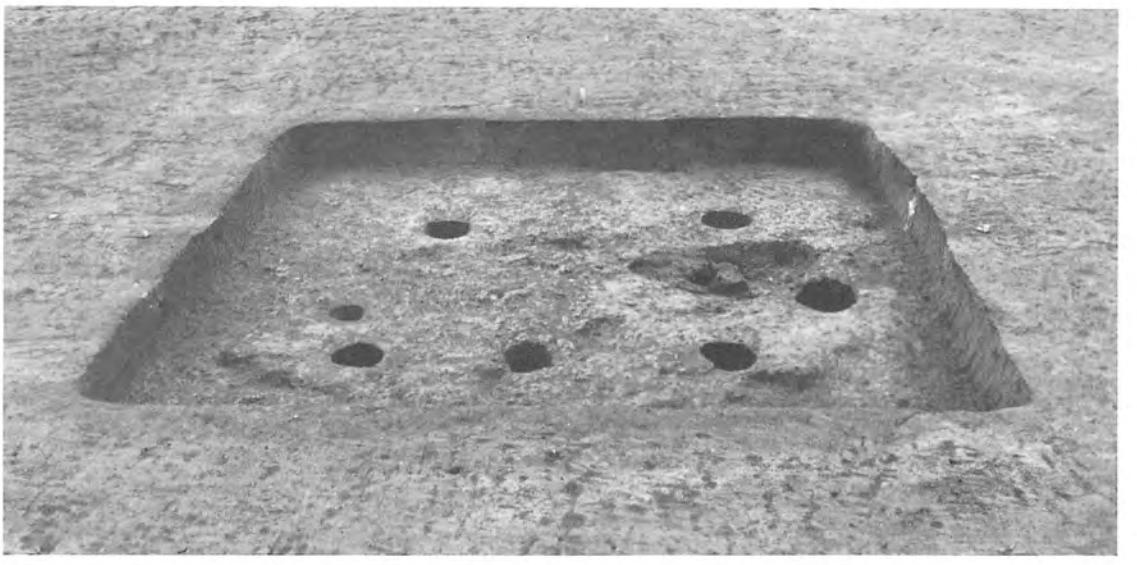
1.



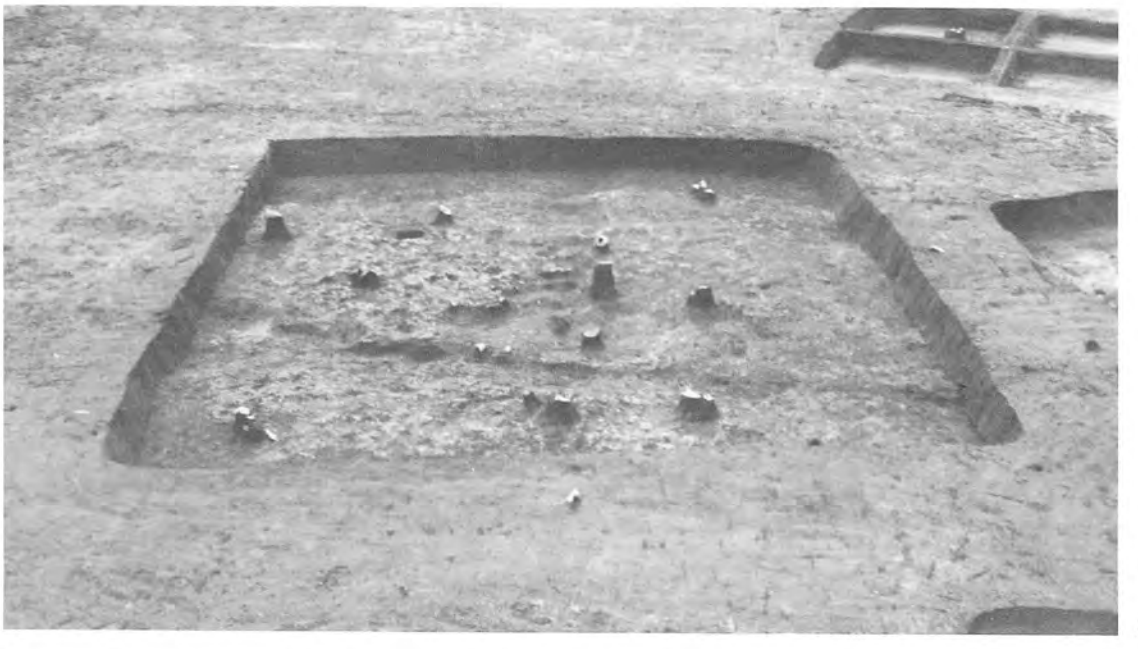
2.

1. 82号住居址(北東より)　2. 84号住居址(北西より)

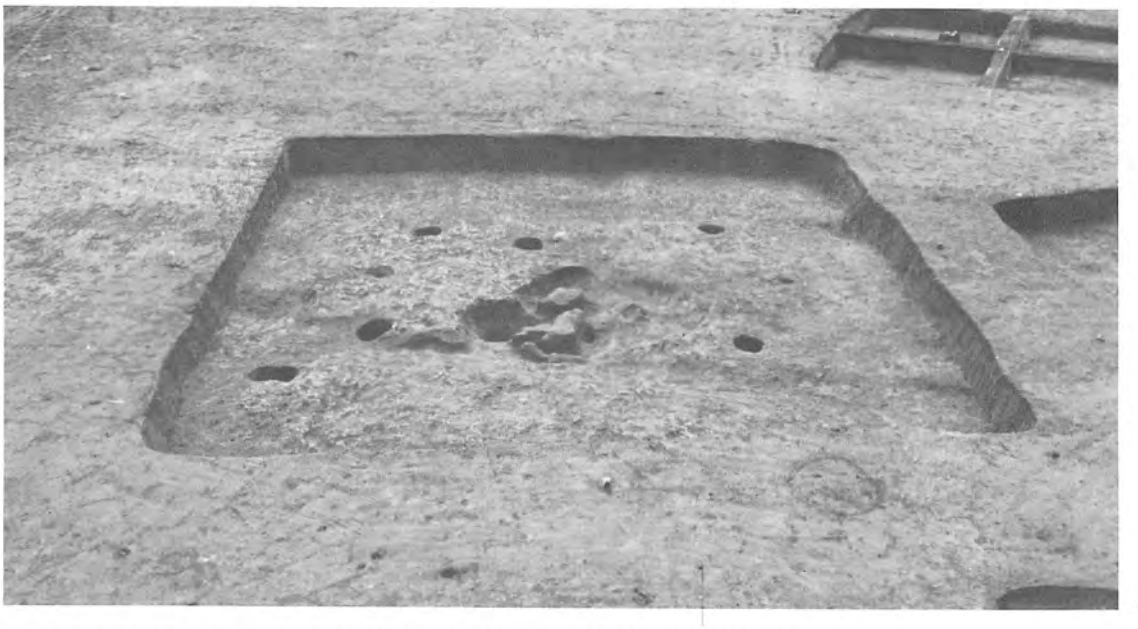
図版34 住居址



1.



2.

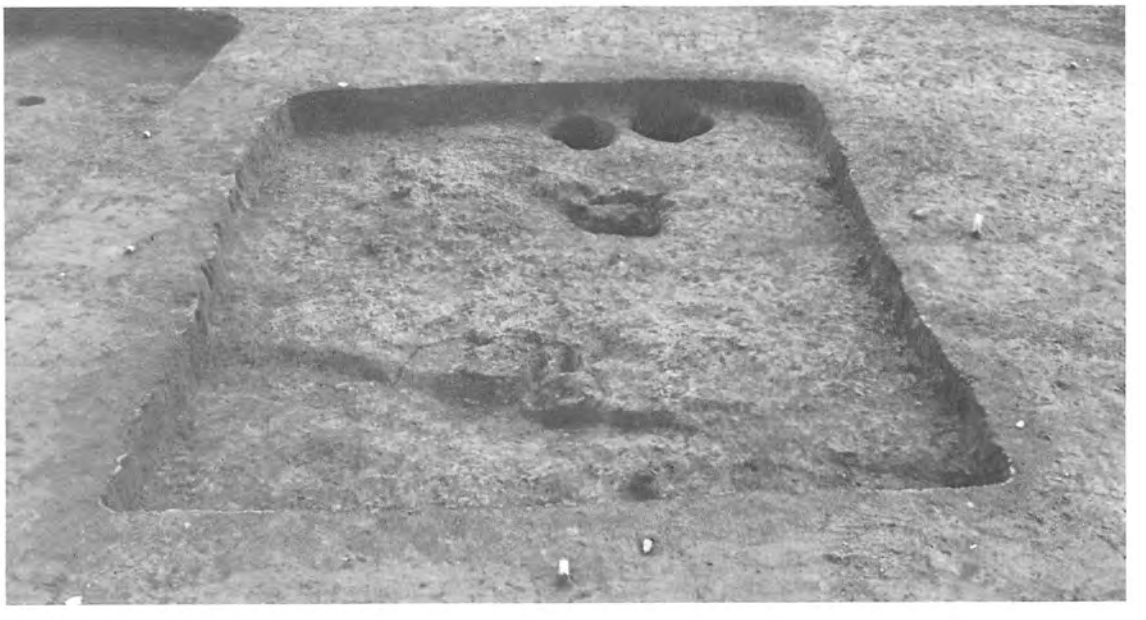


3.

1. 85号住居址(東より)　2. 86号住居址(北東より)　3. 86号住居址(北東より)

図版35 住居址

1.



2.

3.

1. 87号住居址(北東より)　2. 87号住居址(北東より)　3. 87号住居址(北東より)

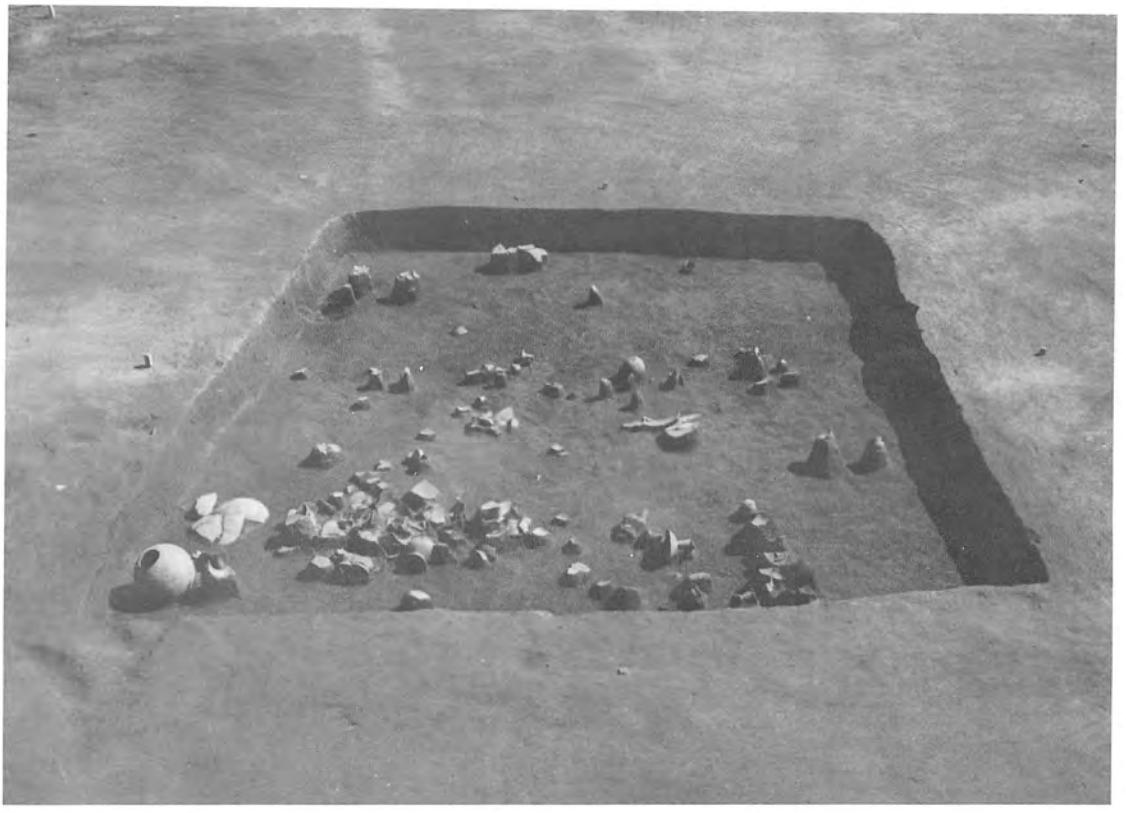
図版36 住居址

1.

2.

1. 88号住居址(南より)　2. 90号住居址(南西より)

図版37 住居址

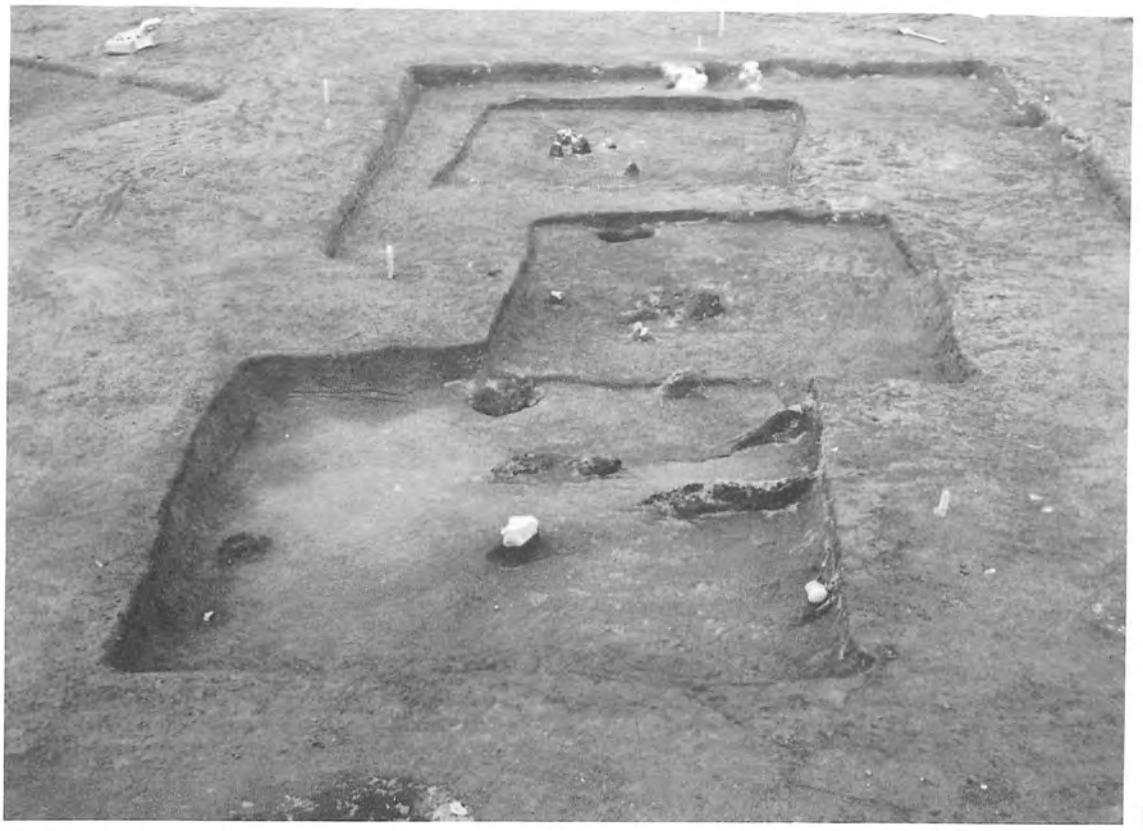


1.

2.

1. 92号住居址(北より)　2. 92号住居址(東より)

図版38 住居址



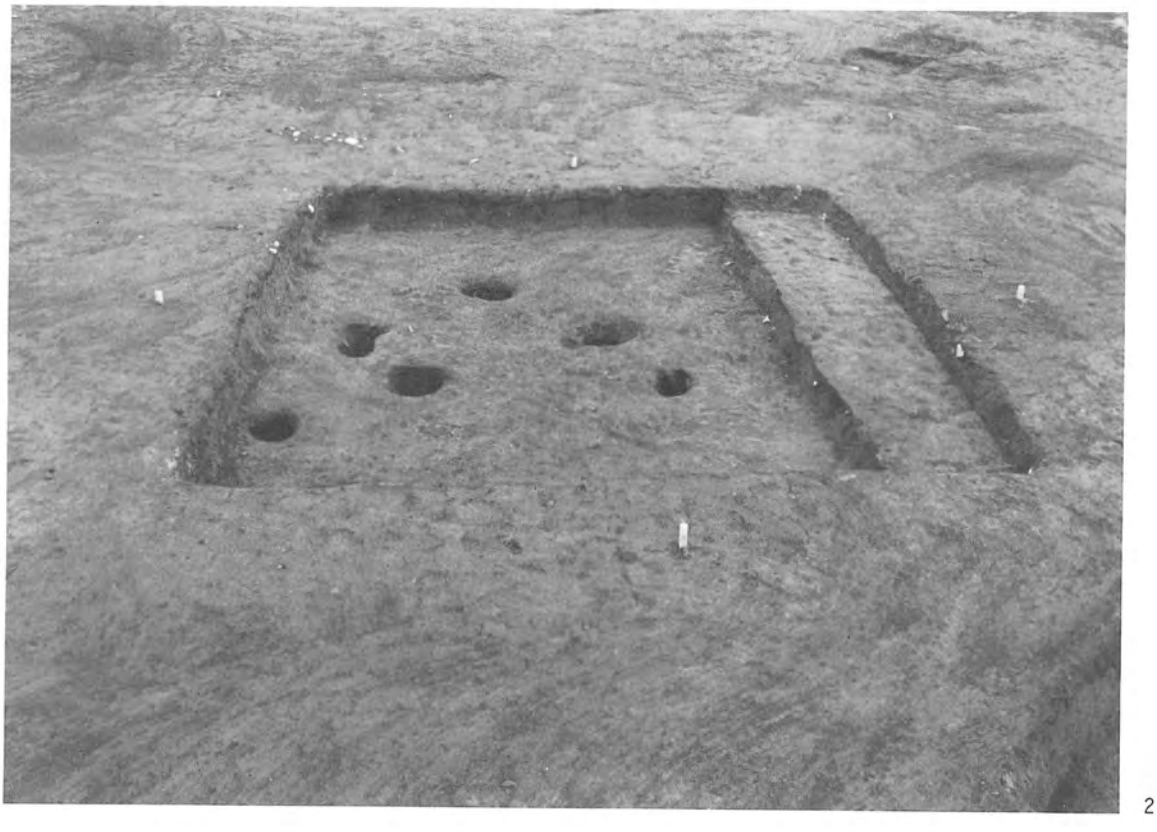
1.
（手前から95・94・65号）

2.
（手前から94・95号）

1. 65・94・95号住居址（南東より） 2. 94・95号住居址（北西より）

図版39 住居址

1.



2.

1. 96号住居址(北より)　2. 96号住居址(北より)

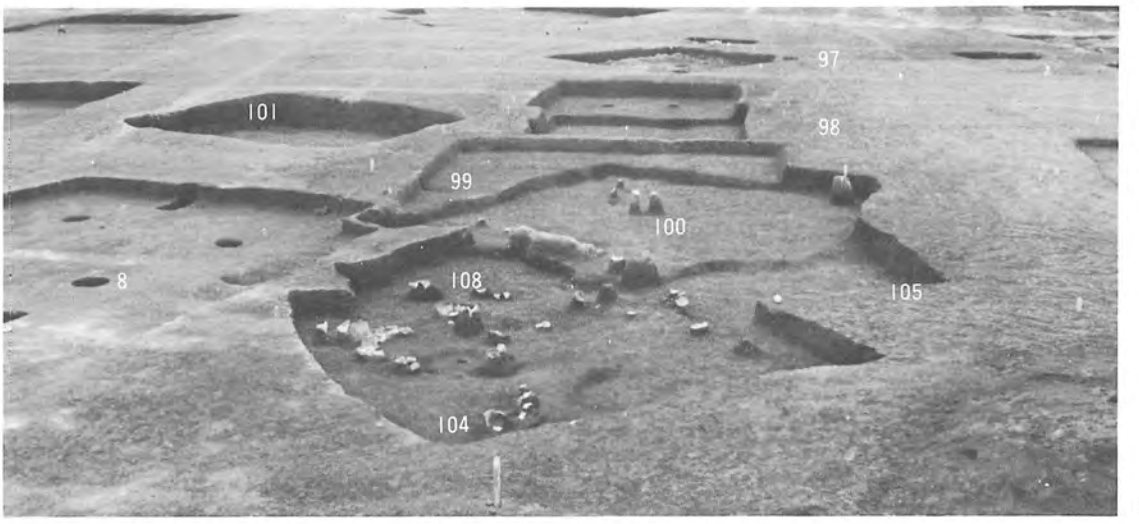
図版40 住居址

1.
（手前から98号）

2.

1．97・98号住居址（南東より）　2．97・98号住居址（南東より）

図版41 住居址



1.

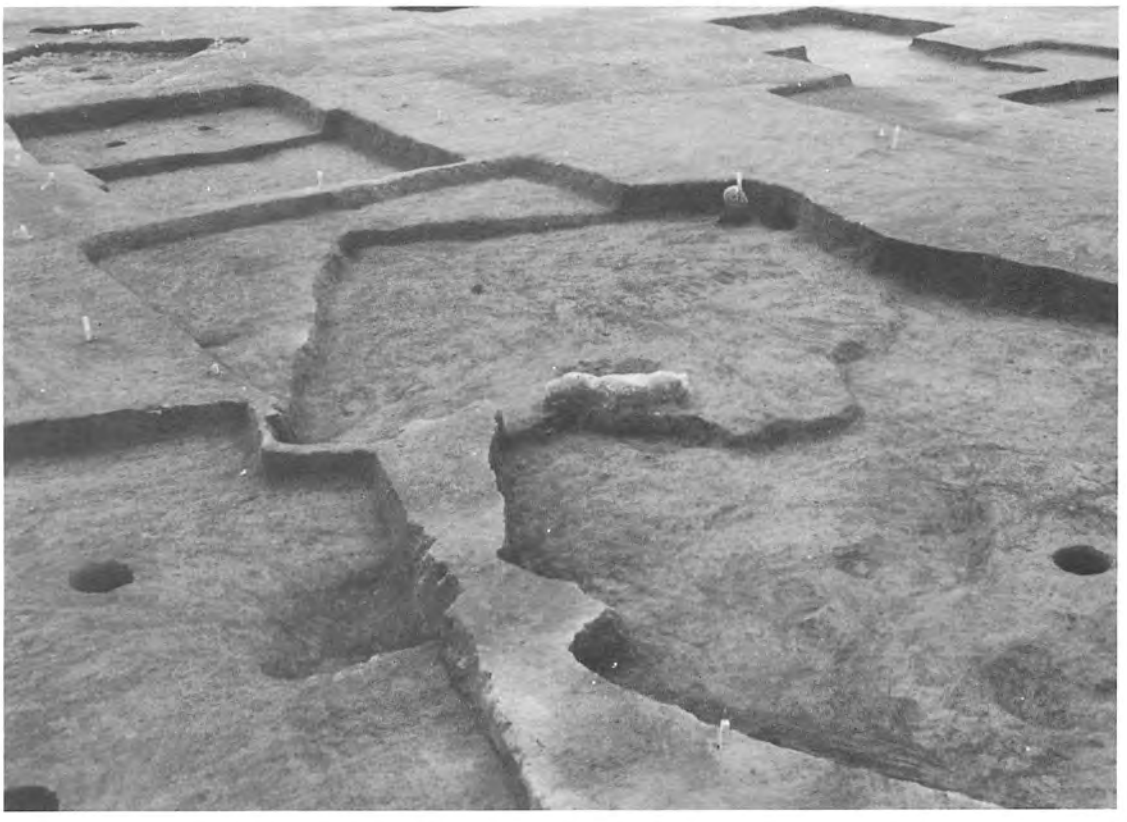
2.

3.

1. 99・100・104・105・108号住居址(北東より)　2. 100・104・105・108号住居址(北より)
3. 100・104・105・108号住居址(北より)

図版42 住居址

1.



2.

1. 99・100・104・105・108号住居址(北より)　2. 99・100・104・105・108号住居址(北より)

図版43 住居址

1.

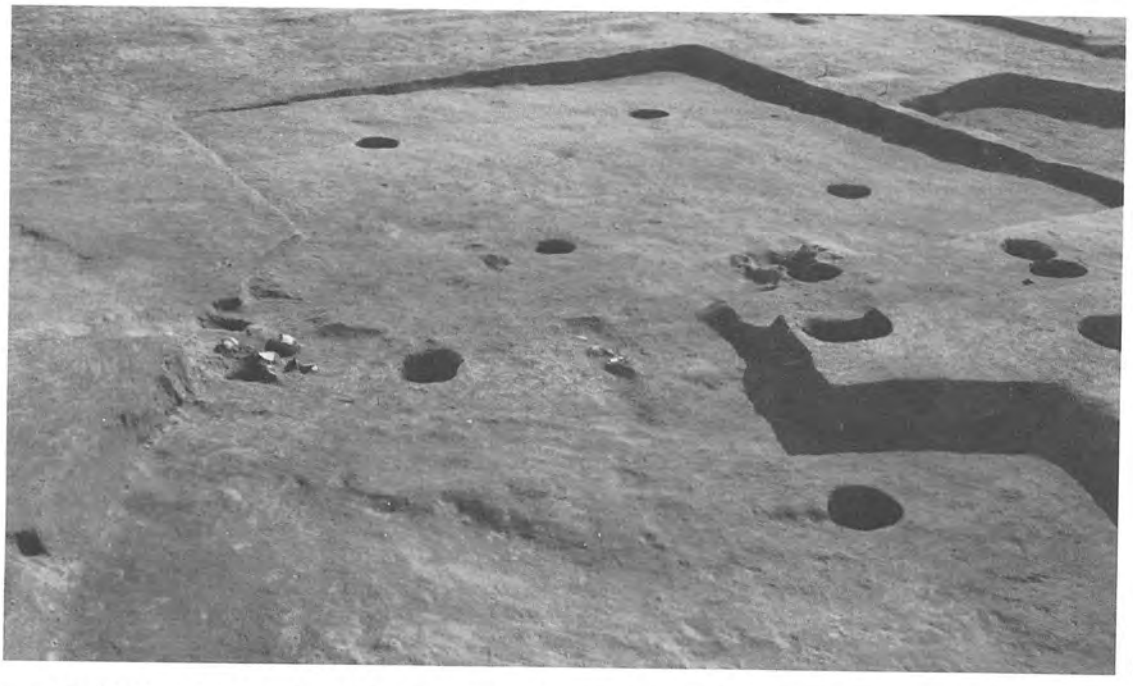
2.

1. 101号住居址(東より)　2. 101号住居址(東より)

図版44 住居址

1.

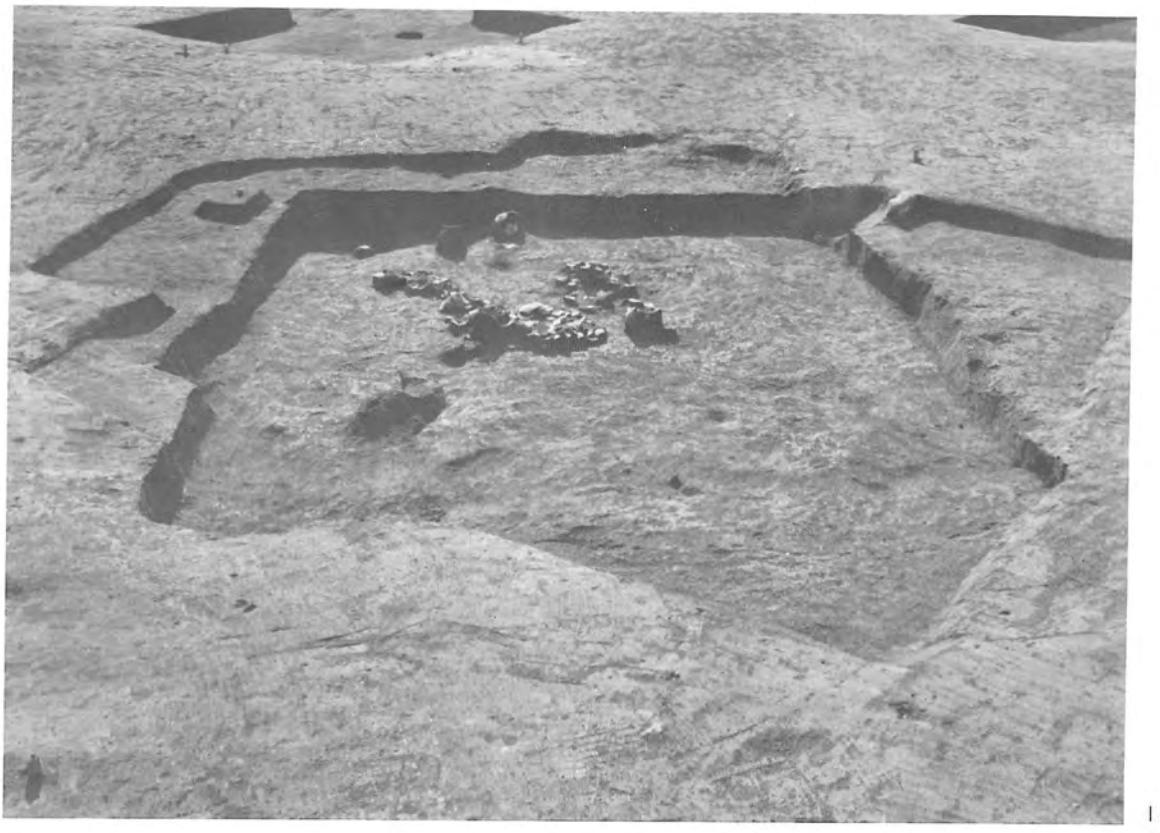
2.



3.

1. 103号住居址(東より)　2. 103号住居址(東より)　3. 109号住居址(北より)

図版45 住居址

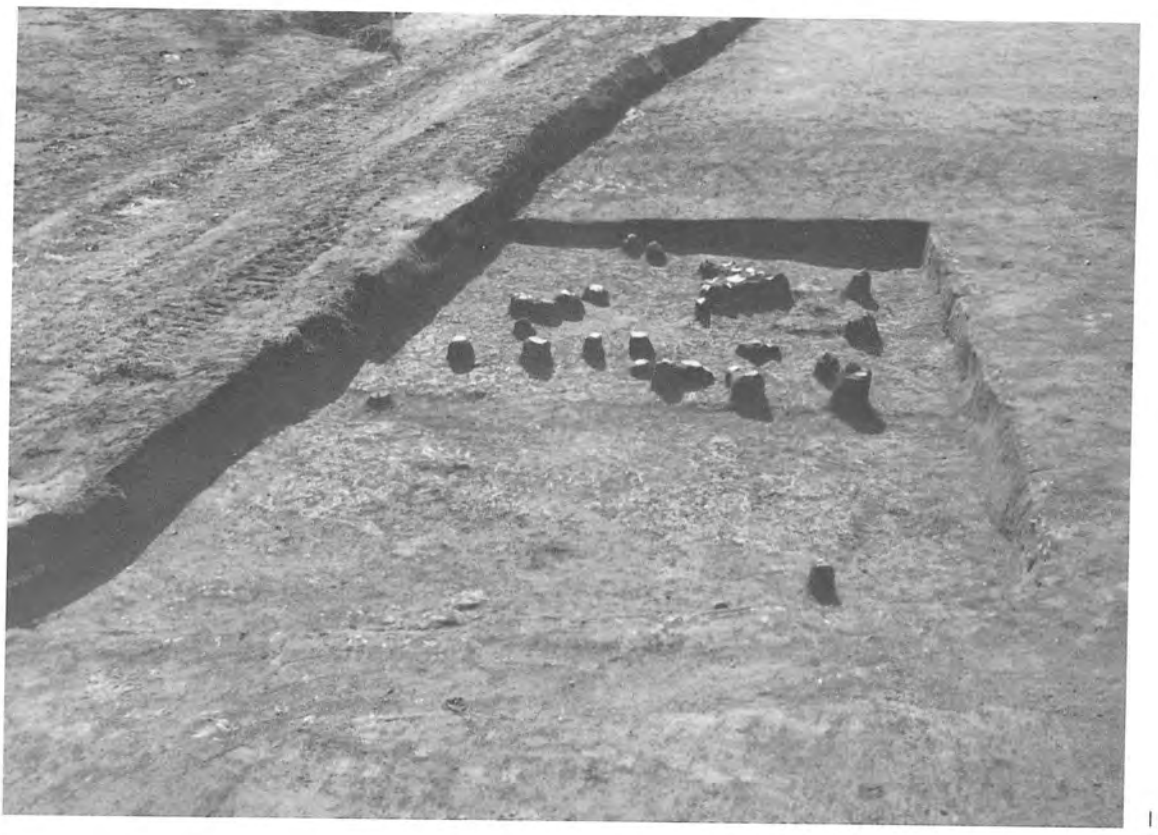


1.

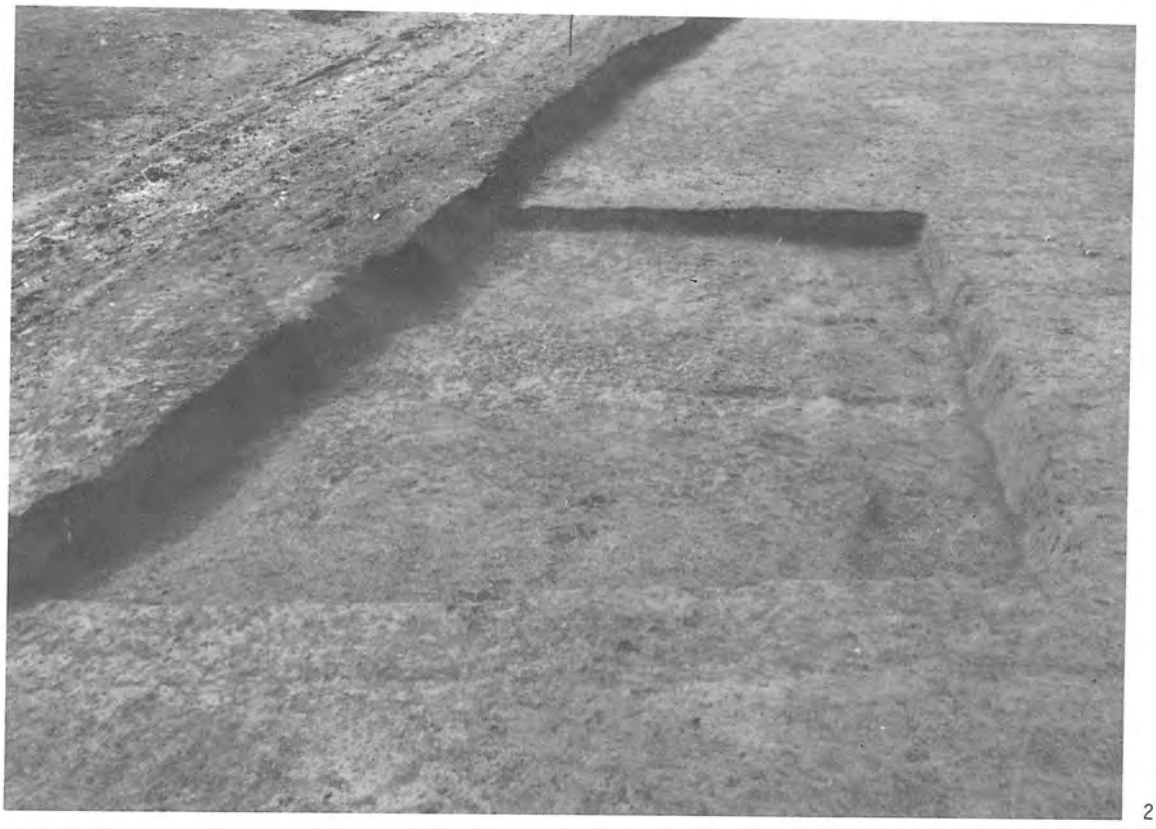
2.

1. III号住居址(東より)　2. III号住居址(東より)

図版46 住居址



1.



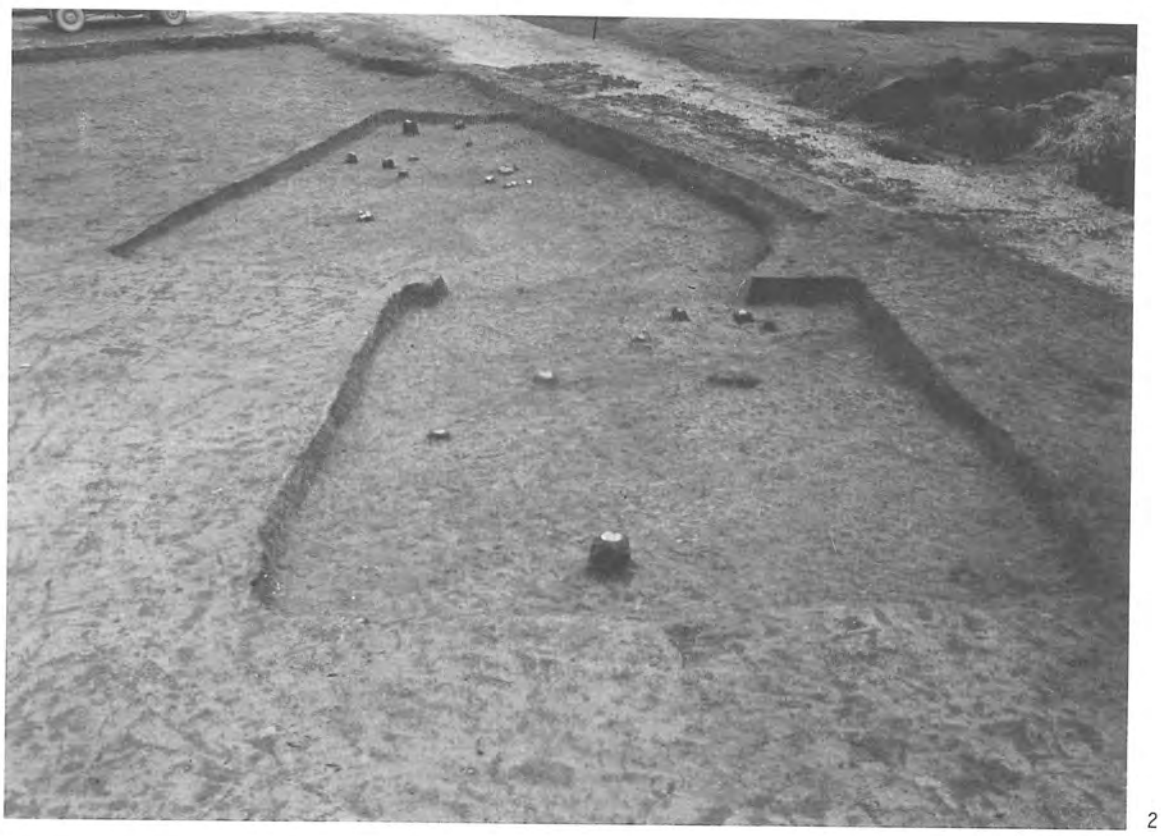
2.

1. 112号住居址(北東より)　2. 112号住居址(北東より)

図版47 住居址

1.

（手前113号）

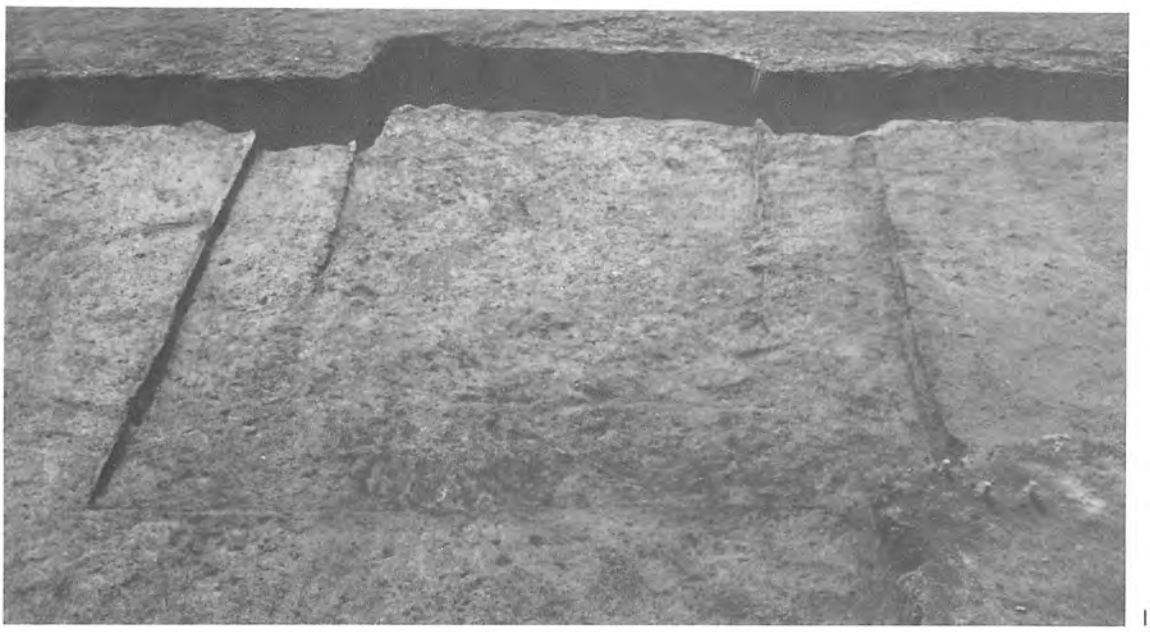


2.

（手前114号）

1. 113・114号住居址（東より）　2. 113・114号住居址（西より）

図版48 住居址



1.

2.

3.

1. 115・116号住居址(北西より)　2. 117号住居址(北より)　3. 118号住居址(北より)

図版49 土器

1．3号住居址出土土器

2．4号住居址出土土器

3．5号住居址出土土器

図版50 土器

1．11号住居址出土土器

2．14号住居址出土土器

3．16号住居址出土土器

図版51 土器

1. 18号住居址出土土器(1)

2. 18号住居址出土土器(2)

3. 19号住居址出土土器(1)

図版52 土器

1．19号住居址出土土器(2)

2．19号住居址出土土器(3)

3．20号住居址出土土器

図版53 土器

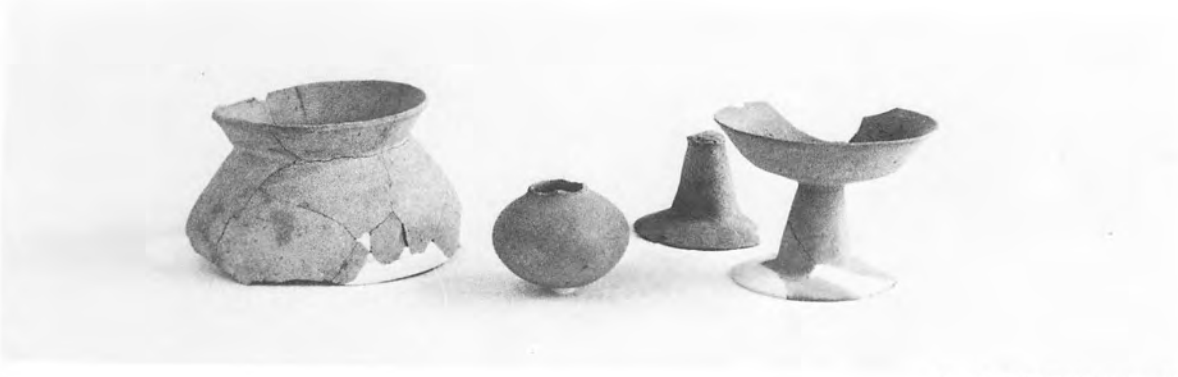
1．21号住居址出土土器

2．25号住居址出土土器

3．27号住居址出土土器

図版54 土器

1．29号住居址出土土器



2．31号住居址出土土器

3．37号住居址出土土器

図版55 土器

1．39号住居址出土土器

2．43号住居址出土土器

3．46号住居址出土土器

図版56 土器

1．49号住居址出土土器(1)

2．49号住居址出土土器(2)

3．67号住居址出土土器

1．70号住居址出土土器(1)

2．70号住居址出土土器(2)

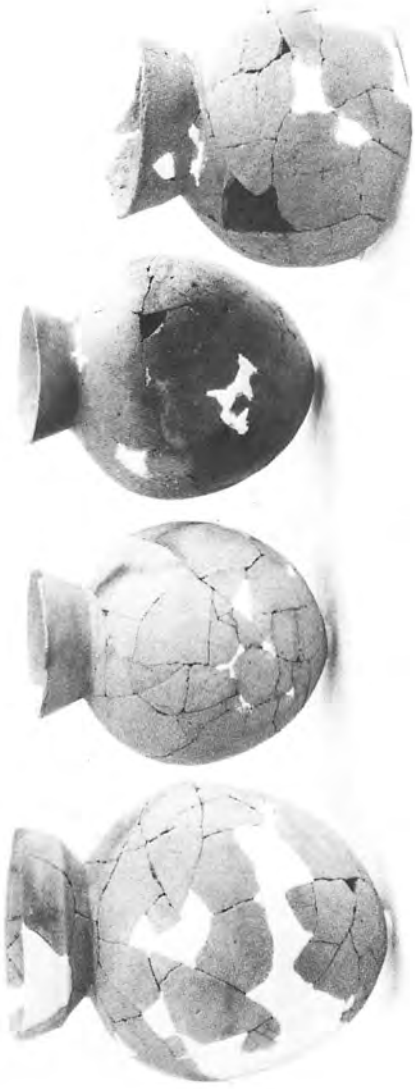
3．72号住居址出土土器(1)

図版58 土器

1．72号住居址出土土器(2)

2．73号住居址出土土器

3．77号住居址出土土器



1．78号住居址出土土器(1)

2．78号住居址出土土器(2)

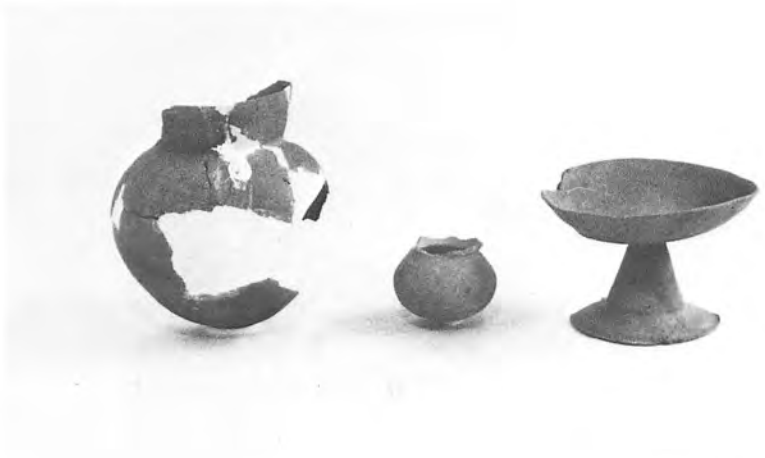
図版60 土器

1．78号住居址出土土器(3)

2．78号住居址出土土器(4)

3．78号住居址出土土器(5)

図版61 土器



1．84号住居址出土土器

2．85号住居址出土土器

3．87号住居址出土土器

図版62 土器

1．92号住居址出土土器(1)

2．92号住居址出土土器(2)

3．92号住居址出土土器(3)

4．92号住居址出土土器(4)

図版63 土器

1．95号住居址出土土器

2．96号住居址出土土器

3．98号住居址出土土器

4．101号住居址出土土器(1)

図版64 土器

1．101号住居址出土土器(2)

2．104号住居址出土土器

3．111号住居址出土土器

図版65 土器

1．112号住居址出土土器

2．116号住居址出土土器

3．118号住居址出土土器

熊本県文化財調査報告　第73集

上の原遺跡 III

昭和60年3月31日

編集・発行　熊本県教育委員会
〒862　熊本市水前寺6丁目18番1号

印　　刷　凸版印刷株式会社
〒810　福岡市中央区渡辺通2－1－82
電気ビル別館5階
☎ (092) 771－2161

文化課
No. 3621

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 73 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：上の原遺跡 3
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日